

国立国語研究所学術情報リポジトリ

国立国語研究所年報 2022年度

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2024-04-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000256

国立国語研究所

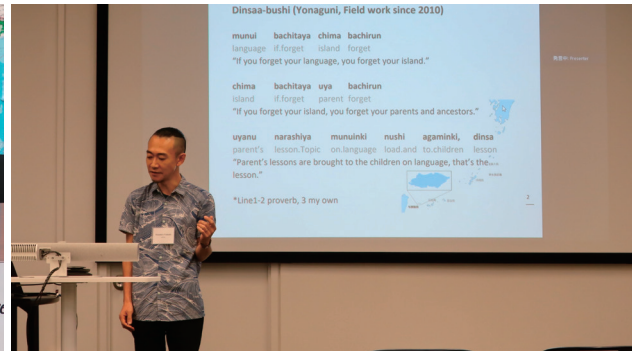
年報

2022 *NINJAL YEARBOOK*

国立国語研究所の活動 (2022 年度)



ハワイ大学マノア校との学術交流協定
(2023年2月13日)



ハワイ大学マノア校でのワークショップ
(2023年2月16日)



茅野市教育委員会との学術交流協定
(2023年2月29日)

文字とココロ ニホンゴ探検 2022
まとめ

文字の形をよく観察(かんさつ)してみると・・・

八八 北北

- ・いろいろな形があることを発見(はっけん)できます
- ・形がちがっていても、同じ字だとすぐにわかりますよね
- ・これを「パターン認識(にんしき)」といいます

横山 認一

ニホンゴ探検 2022
(2022年8月1日, WEB 公開)

読点(、)について考えてみよう ニホンゴ探検 2022
ポイント

どうてん う
読点を打つときに気をつけること

1. まずは声に出して読んでみて、読点を打とう。
2. 書いた文の文字を見て、読点を打とう。
3. 文の意味をを考えてみて、読点を打とう。
4. 最後にもう一度読んでみて、読点の量を確認しよう。

目 次

2022 年度年報の発刊にあたって	1
I. 概要	3
1. 沿革とミッション	4
2. 2022 年度の活動の概略	4
3. 組織	7
(1) 組織構成図	7
(2) 運営組織	8
• 運営会議	8
• 外部評価委員会	8
• 所内委員会組織	8
(3) 構成員	9
• 所長・研究教育職員・特任研究員	9
• 客員教員	10
• 名誉教授	10
• 外来研究員	10
4. 2022 年度の予算および決算	12
II. 共同研究と共同利用	13
1. 共同研究プロジェクト	14
2. 人間文化研究機構基幹研究プロジェクト	33
3. 外部資金による研究	36
4. 2022 年度公開中のコーパス・データベース	38
5. 学術刊行物	51
(1) 所員による著書・編書	51
(2) 国立国語研究所論集	52
6. 研究成果の発信と普及	53
(1) 国際シンポジウム	53
(2) 合同シンポジウム・研究発表会	72
(3) プロジェクトのシンポジウム・ワークショップ・研究発表会	73
(4) NINJAL コロキウム	84
(5) NINJAL サロン	85
(6) 講習会・チュートリアル・セミナー	86
7. センター・研究図書室の活動	89
(1) 共同利用推進センター	89
(2) 言語資源開発センター	90
(3) 研究図書室	91
III. 国際的研究協力	93
1. 世界の大学・研究機関との提携	94
2. 国際シンポジウム・国際会議の開催	94
3. 日本語研究英文ハンドブック	94
4. 海外の研究者の招聘・受入	95
IV. 社会連携と広報	97
1. 地方自治体との連携	98
2. 見学・研修・視察等	98
3. 学会等の後援・共催	98

4. 広報	99
(1) 刊行物	99
(2) Web 発信等	99
(3) 一般向けイベント	100
(4) 児童・生徒向けイベント	101
V. 大学院教育と若手研究者育成	103
1. 総合研究大学院大学	104
2. 連携大学院	104
3. 特別共同利用研究員制度	104
4. NINJAL チュートリアル	104
5. 優れたポストドクターの登用	105
VI. 教員の研究活動と成果	107
学位, 学歴, 職歴, 所属学会, 学会等の役員・委員, 受賞歴, 参画共同研究, 科研費・外部資金による研究課題, 研究業績 (著書・編書, 論文・ブックチャプター, コーパス・データベース類, 展示など, その他の出版物・記事), 講演・口頭発表, 研究調査, 研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営, 一般向けの講演・セミナーなど, その他の学術的・社会的活動, 大学院教育・若手研究者育成	
VII. 資料	183
1. 運営会議	184
運営会議規程	184
2022 年度の開催状況	184
運営会議の下に置かれる専門委員会	185
2. 評価体制	186
(1) 自己点検・評価委員会	186
(2) 外部評価委員会	186
(3) 基幹研究プロジェクトの評価	187
3. 所長賞	187
4. 研究教育職員の異動	189
VIII. 外部評価報告書	191
令和 4 年度業務の実績に関する外部評価報告書	193
はじめに	194
評価結果報告書	197
令和 4 年度機関拠点型基幹研究プロジェクト実績報告	199
令和 4 年度機関拠点型基幹研究プロジェクト評価結果	209
令和 4 年度基幹型プロジェクトの評価	212
令和 4 年度センターに関する評価	334
令和 4 年度管理業務に関する評価	348
資料	353

2022 年度年報の発刊にあたって

2022 年度の年報をお届けします。2022 年度は、国立大学や大学共同利用機関にとっては第 4 期中期計画期間の初年度にあたります。国立国語研究所(国語研)では「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」を総合テーマとして、多様な言語資源の研究開発、理論・対照言語学、消滅危機言語の保存、多言語・多文化社会における言語問題、日本語非母語話者の言語運用など7つの研究プロジェクトを開始しました。これらの研究による成果は最終的にオープンデータとして広く社会に公開することを予定しています。

本年報に記録されている活動は、その活動の最初の1年を切り取ったものであり、本格的な評価は後年度にまつ必要がありますが、幸い、初年度の活動についても外部評価委員会からおおむね高い評価をいただくことができました(外部評価報告書は本年報の「VIII」に収録されています)。

さて、以上は国語研の研究活動の中核をなす機関拠点型基幹研究についてでしたが、それ以外にも多くの研究が始まりました。親法人である人間文化研究機構との関係では、広領域連携型基幹研究(2件)、共創先導プロジェクト共創促進研究(3件)を実施して、人間文化研究機構が推進する Digital Humanities の実現に協力しています。また公募による共同研究の枠組みを設けて、異分野融合型共同研究、共同利用型共同研究(A)(B)(C)を募集し、2022 年度には合計 17 件を採択しました。これにくわえて日本学術振興会の科学研究費による研究 58 件、企業との共同研究 5 件も実施しました。

最後になりましたが、2022 年度末には第 9 代所長である田窪行則が勇退し、私があとを引き継ぐこととなりました。前任者の築いた成果に安住することなく、あらたな発展をめざしたいと思います。2023 年度には総合研究大学院大学に参加して「日本語言語科学コース」(博士後期課程)を発足させ、学生 4 名を受け入れるとともに、あらたな研究領域の開拓をめざした研究センターの設置準備を進めました。これらの活動については次の年報で報告させていただきます。

引き続き国立国語研究所をよろしく願いいたします。

2024 年 3 月
国立国語研究所長
前川喜久雄



概 要

1 沿革とミッション

沿革

国立国語研究所は、国語に関する総合的研究機関として1948（昭和23）年に誕生した。幕末・明治以来、国語国字問題は国にとって重要な課題であり、様々な立場からの議論がおこなわれてきた。第二次世界大戦の敗戦とその後の占領期は大きな転機となり、戦後、我が国が新しい国家として再生するに当たって、国語に関する科学的、総合的な研究をおこなう機関の設置が強く望まれるようになった。各方面の要望を受けて「国立国語研究所設置法」が昭和23年12月20日に公布施行され、国家的な国語研究機関である国立国語研究所の設置が実現したのである。その後、明治時代から大正、昭和初期にかけての日本語の混乱（漢字の激増や、文語と口語の違いなど）を收拾し日本語の安定化に資するという当初の設置目的が薄れるとともに旧国立国語研究所は廃止され、2009（平成21）年10月1日に大学共同利用機関法人人間文化研究機構の下に設置された。現在、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館に次ぐ6番目の研究機関として再発足し、日本語および関連する領域の学術研究機関として活発な活動を展開している。

ミッション

国立国語研究所は、日本語学・言語学・日本語教育の国際的研究拠点として、国内外の大学・研究機関と連携することによって大規模な共同研究を全国的・国際的に推進し、共同研究から得られた各種の成果や学術情報を研究者コミュニティと一般社会に提供することで、日本語と人間文化の新しい研究領域を開拓することを実質的なミッションとしている。そのため、大学共同利用機関への移行にあたっては、研究所の英語名称“linguistics”（言語学）という言葉を加え、National Institute for Japanese Language and Linguistics（「日本語と日本語言語学の国立研究所」、略称NINJAL（ニンジャル））とした。言語学・日本語学とは、日本語を人間言語のひとつとして捉え、ことばの研究をとおして人間文化に関する理解と洞察を深めることを意図した学問であり、そこには、当然のことながら、「国語及び国民の言語生活、並びに外国人に対する日本語教育」（設置目的）に関する研究が含まれる。

日本語の研究を深めることは、究極的には日本という国を発展させることにつながる。私たちの財産である日本語を将来に引き継ぎ、発展させていくことが国立国語研究所の役割である。

2 2022年度の活動の概略

国立国語研究所では、国内外の諸大学・研究機関と連携して、個々の大学ではできないような研究プロジェクトを全国的・国際的規模で展開しているが、第4期中期計画の6年間においてそれらの土台となるのは「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」という第4期機関拠点型プロジェクトの研究目標である。この目標の達成に向け、2022年度より7件の基幹共同研究プロジェクトを中心に活動を開始した。詳細は次のとおりである。

(1) 共同利用・共同研究

- 各プロジェクトは計22件の共同研究発表会を開催してプロジェクトの活動を推進するとともに、16件の国内シンポジウム・ワークショップ等（参加者延べ2,749名）、10件の国際シンポジウム・ワークショップ等（参加者延べ563名）を開催して研究成果を広く発信したほか、5冊の書籍を国際出版、6冊の書籍を国内出版、2冊の報告書をホームページで公開した。このうち令和4年12月に開催したNINJALシンポジウムは、第4期の計画と初年度実績を紹介するために全プロジェクトが合同で開催したものである。
- 異分野融合研究を推進するために第4期に新たに開始した外部研究者をリーダーとする公募型の異分野融合型共同研究を新規に3件採択したほか、研究所が保有する研究資料や蔵書、実験機器等を活用する

公募型プロジェクト「共同利用型」について新規に14件（継続を含めて計25件）採択するなど、開かれた大学共同利用機関として外部公募型共同研究を積極的に推進した。

- コーパスの一部は言語資源開発センターが管理するオンライン検索システム「中納言」で公開されており、ユーザ総数44,941人、うち令和4年度の新規登録ユーザ数は7,945人、利用登録コーパス数は24.7万件以上、年間検索数は220万件以上と、広く研究に活用された。
- 外部機関と連携して言語資源・検索ツール等の整備をおこない、①コーパス3件、データベース6件、アノテーション1件、辞書2件、映像画像データ25件、ツール等1件の新規公開、②コーパス8件の追加公開、③コーパス2件、辞書2件、ツール等2件の更新、④データベース1件の機能拡張をおこなった。新規公開のコーパス3件は、日本語を学習している中国語母語話者の発話および作文データを4年間にわたり収集した『北京日本語学習者縦断コーパス』、1933～2013年の期間8年おきに300万語の雑誌・書籍を収めた『昭和・平成書き言葉コーパス』、日本経済新聞社が研究用途に無償公開した記事に形態論情報・係り受け情報を付与した『日本経済新聞記事オープンコーパス』である。

(2) 若手研究者の人材育成

- 若手研究者のキャリアパスとして特任助教1名とプロジェクト非常勤研究員72名を雇用したほか、日本学術振興会の特別研究員PDを1名受け入れ、プロジェクトへの参画などを通して実践的に日本語研究を推進できる人材の育成につとめた。その成果を含む著書が2022年度田島毓堂賞（学術賞）を受賞、また論文が2022年度日本言語学会論文賞を受賞した。またテニユアトラック助教が情報処理学会2022年度山下記念研究賞を受賞した。
- 若手研究者を育成するために、各プロジェクトの研究テーマに即した若手研究者向けのチュートリアル・講習会を14回開催し、合計で704名が参加した。このうち8回はコーパス利用のための講習会とした。こうした取り組みにより、大学の授業でコーパスを利用できるオンライン検索アプリケーション「中納言」の講義用アカウントを126件、計4,216人の学生等に発行するなど、コーパスが授業で広く活用された。
- 大学生・大学院生向けに「言語学レクチャーシリーズ」パイロット版を新たに5本作成してYouTube国語研チャンネルにて公開し、既公開分とあわせ年間63,200回再生された。

(3) 社会連携・社会貢献

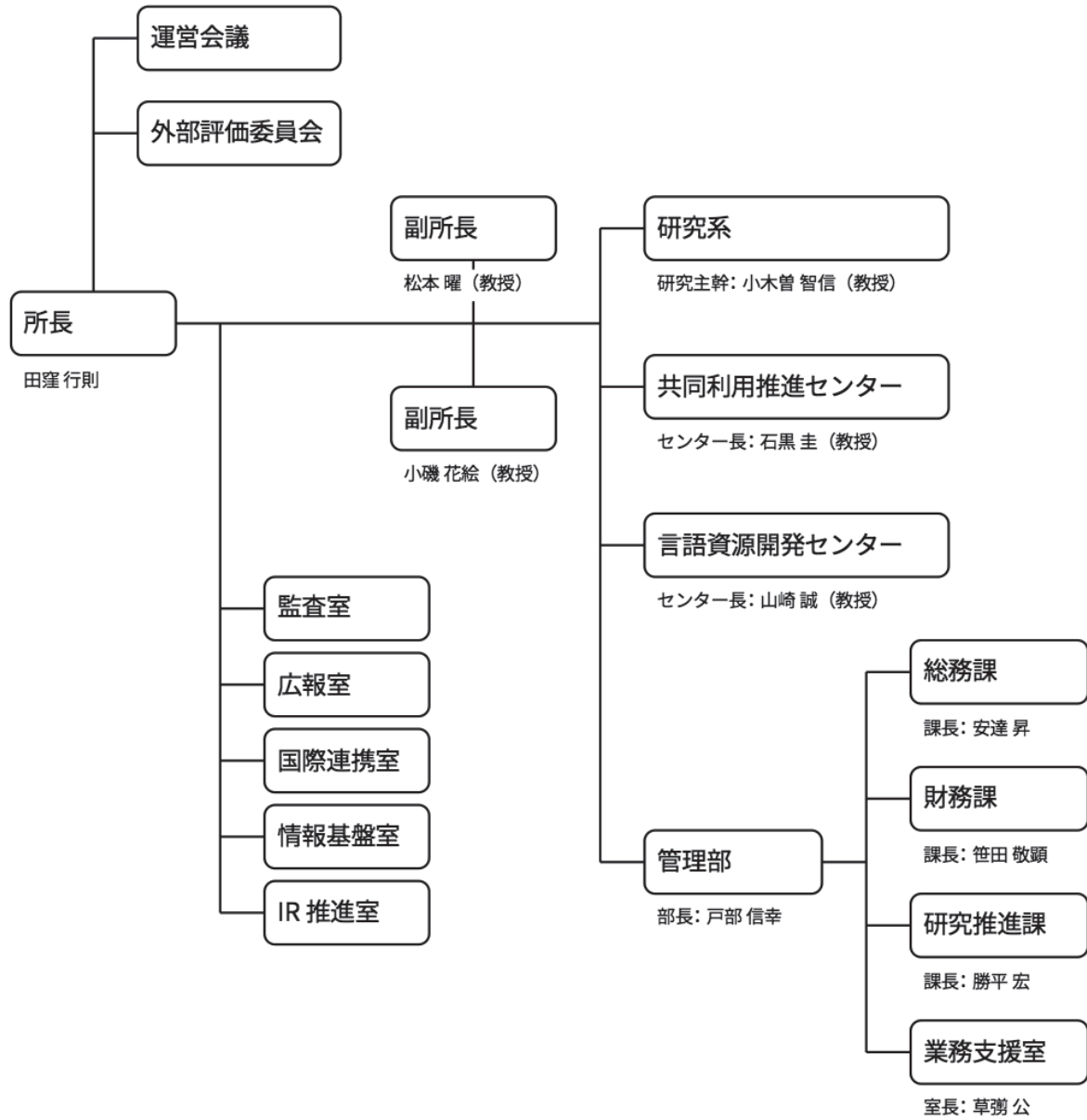
- 研究成果を学生や一般に分かりやすく発信するため、オープンハウスやニホンゴ探検などのフォーラム・イベント等をオンラインで開催し、13件の動画コンテンツを公開したところ、9,648件の参加（アクセス）があった。
- 研究成果を一般に向けて伝えるために2021年11月に刊行した書籍『日本語の大疑問—眠れなくなるほど面白いことばの世界』（幻冬舎新書）が重版（8刷、9刷、計8,000部。累計発行部数71,000部）された。これは国語研に関わる所内外の研究者が執筆し、ポータルサイト「ことば研究館」に掲載した記事を再編集したもので、電子書籍、オーディオブックでも継続して配信されている。
- 国語研ポータルサイト「ことば研究館」において、ことばに関する一問一答式の記事「ことばの疑問」26本および各種催し物、メディア掲載情報など、ことばに関する一般向けコンテンツを発信した。また研究所の研究活動や研究者などを紹介する一般向け広報誌『ことばの波止場』をリニューアルし、Vol.12を3月に刊行した。
- 消滅危機言語の記録保存・継承保存を研究者が地域言語コミュニティのメンバーと協働して進める「言語復興の港」活動を継続しておこなった結果、「島独自の言葉で語られる昔話を絵本の形で残したり、島民の協力を得ながら、親子で楽しむ本の読み聞かせ活動を行ったりするなど、次世代にその地域言語が継承されるよう持続可能な言語復興をスローガンに掲げ活発に取り組んでいる」として、ダイキン工業株式会社・琉球放送株式会社から、沖縄県の芸術・文化・スポーツ・教育・環境等の振興支援を目的としたオーキッドバウンティ賞を2023年2月に受賞した。
- コーパスを活用した産学連携研究として、民間企業5社と共同研究をおこなった。リクルート社やLegalOn社との共同研究に基づき、同社から係り受け解析の新しいモデルと形態素解析モデルをそれぞれ公開した。
- 言語資源の幅広い活用のためにコーパスの拡充を進め、令和4年度には『現代日本語書き言葉均衡コーパス』4件、『日本語話し言葉コーパス』9件、『日本語日常会話コーパス』6件の商業利用契約があり、音声認識のソフトウェア開発などに活用された。

(4) 国際連携・国際発信

- 研究成果を国際発信するために、De Gruyter Mouton 社と Oxford University Press 社から 5 冊の書籍を出版した。このうち 2 冊は De Gruyter Mouton 社との協定に基づく Handbooks of Japanese Language and Linguistics シリーズの 8 巻と 12 巻であり、これにより全 12 巻のうち 10 巻の刊行が終了した。同社とは第 3 期に、国際シンポジウム等の成果を英語で発信するためのシリーズ Mouton-NINJAL Library of Linguistics の出版協定を結び、令和 4 年度にはじめて、所員が編集に携る 1 冊を含む 2 冊が刊行された。また、オランダの Brill 社と出版協定を締結した危機言語に関するオンライン叢書シリーズ Endangered and Lesser-Studied Languages and Dialects について、令和 4 年度にはじめて第 3 期の危機言語プロジェクトの成果を含む 1 冊がオープンアクセスで刊行された。
- 学術交流協定を締結しているハワイ大学マノア校、デカン・カレッジ・ポスト・グラデュエイト・アンド・リサーチ・インスティテュートおよびインド工科大学マドラス校と共催するなど、10 件の国際シンポジウム・ワークショップ等 (参加者延べ 563 名) を開催して研究成果を広く発信した。

(1) 組織構成図

2022 年度



(2) 運営組織

運営会議

(外部委員)

伊東祐郎	国際教養大学専門職大学院教授
上野善道	東京大学名誉教授
金水敏	放送大学大阪学習センター所長/特任教授
呉人恵	富山大学名誉教授/北海道立北方民族博物館館長
近藤泰弘	青山学院大学文学部教授
樋口知之	中央大学 AI・データサイエンスセンター所長/理工学部ビジネスデータサイエンス学科教授
福井直樹	上智大学大学院言語科学研究科教授
益岡隆志	関西外国語大学外国語学部教授
馬塚れい子	理化学研究所脳科学総合研究センターシニア・チームリーダー

(内部委員)

小磯花絵	副所長/教授
松本曜	副所長/教授 (2022年4月-)
小木曾智信	研究主幹/教授
石黒圭	共同利用推進センター長/研究系/教授
山崎誠	言語資源開発センター長/研究系/教授
横山詔一	広報室長/教授

任期：2021年10月1日-2023年3月31日(1年6か月間)

外部評価委員会

上山あゆみ	九州大学教授
沖裕子	信州大学名誉教授
小野正弘	明治大学教授
片桐恭弘	公立はこだて未来大学学長
坂原茂	東京大学名誉教授
砂川裕一	群馬大学名誉教授
橋田浩一	東京大学教授
森山卓郎	早稲田大学教授

任期：2022年10月1日-2023年3月31日(6か月間)

所内委員会組織

- ・連絡調整会議(所長, 専任研究教育職員, 管理部長)

連絡調整会議のもとに, 各種委員会を設置

▶ 管理・運営関係

- 自己点検・評価委員会
- 情報セキュリティ委員会
- 情報基盤運用委員会
- 知的財産委員会
- 情報公開・個人情報保護委員会
- ハラスメント防止委員会
- 研究倫理委員会
- 施設・防災委員会
- 将来計画委員会

▶ 学術・発信関係

- 言語資源開発センター運営委員会

- 共同利用推進センター運営委員会
- 広報委員会
- 論集編集委員会
- 共同研究プロジェクト推進会議
- 安全衛生管理委員会

(3) 構成員

所 長

田窪行則 理論言語学, 韓国語, 琉球諸語, 言語ドキュメンテーション, 危機言語

教育研究職員・特任研究員

- 研究系
 - ▶ 副所長 / 教授
 - 松本曜 意味論, 認知言語学
 - 小磯花絵 コーパス言語学, 談話分析, 認知科学
 - ▶ 研究主幹 / 教授
 - 小木曾智信 日本語学, 自然言語処理
 - ▶ 教授
 - 浅原正幸 自然言語処理
 - 五十嵐陽介 言語学, 音声学
 - 石黒圭 日本語学, 日本語教育学
 - 宇佐美まゆみ 言語社会心理学, 談話研究, 語用論, 日本語教育学
 - 大西拓一郎 方言学, 言語地理学, 日本語学
 - 高田智和 日本語学, 国語学, 文献学, 文字・表記, 漢字情報処理
 - Prashant Vijay Pardeshi 言語学, 言語類型論, 対照言語学
 - 松下達彦 応用言語学, 日本語教育 (特に語彙の学習と教育)
 - 山崎誠 日本語学, 計量日本語学, 計量語彙論, コーパス, シソーラス
 - 横山詔一 認知科学, 心理統計, 日本語学
 - ▶ 准教授
 - 朝日祥之 社会言語学, 言語学, 日本語学
 - 井上文子 方言学, 社会言語学
 - 柏野和佳子 日本語学
 - 窪田悠介 理論言語学 (統語論, 意味論), 計算言語学
 - 中川奈津子 コーパス言語学, 方言学
 - 新野直哉 言語学, 日本語学
 - 野山広 応用言語学, 日本語教育学, 基礎教育保障学, 社会言語学, 多文化・異文化間教育, 言語政策・計画研究
 - 福永由佳 日本語教育学, 社会言語学, 多言語使用, 識字, 移民に対する言語教育政策
 - 山口昌也 情報学, 知能情報学, 科学教育・教育工学, 言語学, 日本語学
 - 山田真寛 言語学, 形式意味論, 言語復興
 - ▶ 助教 (テニュアトラック)
 - 宮川創 デジタル・ヒューマニティーズ, 自然言語処理, 歴史言語学, アフリカ言語学 (コプト語・古代エジプト語・ヌビア語など), 言語類型論, コーパス構築
 - ▶ 特任助教
 - 岩崎拓也 句読法, 表記論, 日本語教育

・言語資源開発センター

▶ 特任助教

川端良子 コーパス言語学, 談話分析, 認知科学

客員教員 (2022 年度在籍者)

・客員教授

窪蘭晴夫 国立国語研究所名誉教授

前川喜久雄 国立国語研究所名誉教授

名誉教授

角田太作 2012.4.1 称号授与

John WHITMAN 2015.10.1 称号授与

迫田久美子 2016.4.1 称号授与

Timothy VANCE 2017.4.1 称号授与

影山太郎 2017.10.1 称号授与

相澤正夫 2019.4.1 称号授与

木部暢子 2021.4.1 称号授与

野田尚史 2021.4.1 称号授与

窪蘭晴夫 2022.4.1 称号授与

前川喜久雄 2022.4.1 称号授与

外来研究員

石原俊一 (オーストラリア国立大学准教授, 受入教員: 浅原正幸)

「日本語の書き言葉に見られる個人性の言語学的研究: テキストメッセージを中心に」 (2021.8.1–2023.6.30)

大野剛 (アルバータ大学教授, 受入教員: 小磯花絵)

「非流暢発話の文法と使用」 (2021.8.25–2022.8.24)

函雅 (内モンゴル大学教授, 受入教員: 五十嵐陽介)

「モンゴル語を母語とする日本語学習者の音声データベースの構築—学習者音声変異に関する音響音声学的研究のために—」 (2021.9.1–2022.8.31)

大原由美子 (ハワイ大学ヒロ校准教授, 受入教員: 木部暢子)

「消滅危機言語・方言におけるアイデンティティと言語イデオロギーの考察—日本とハワイの比較—」 (2022.3.1–2022.8.31)

甲賀真広 (日本学術振興会特別研究員 (PD), 受入教員: 朝日祥之)

「日本在住の外国人高齢者の日本語問題を究明する社会言語学的研究及び言語対応の提言」 (2022.4.1–2023.3.31)

高松亮 (埼玉大学准教授, 受入教員: 小磯花絵)

「発話の逐次的繰り返しによる情報伝達過程が発話スタイルに与える変化」 (2022.4.1–2023.3.31)

安部さやか (ミドルベリー大学助教授, 受入教員: 松本曜)

「意味変化、使役、主観化: 認知意味論と通時変化から見た使役移動動詞とその文法化の分析」 (2022.6.28–2022.7.30)

CELIK Kenan Thibault (日本学術振興会外国人特別研究員, 受入教員: 五十嵐陽介)

「日琉祖語で再建される語の語形成の解明」 (2022.9.1–2023.3.31)

張盛開 (静岡大学教授, 受入教員: 大西拓一郎)

「「漢語」方言の地理的展開研究」 (2022.10.1–2023.9.30)

劉澤軍 (天津外国語大学教授, 受入教員: 石黒圭)

「中間言語からみた中国人日本語学習者の結束性に関する通時的研究」 (2022.10.1–2023.3.31)

BAUDEL Étienne (日本学術振興会外国人特別研究員, 受入教員: 五十嵐陽介)

「八丈語の共時的・通時的研究」(2023.1.3–2023.7.2)

Aldridge Edith (中央研究院研究員, 受入教員: 田窪行則)

「オーストロネシア諸語、中国語、日本語の歴史・比較言語学」(2023.1.16–2023.2.2)

Vincent Wilhelmus Johannes van Gerven Oei (日本学術振興会外国人特別研究員, 受入教員: 宮川創)

「古ヌビア語インターリニアアグロス付きオンラインテキストコーパスの開発と分析」(2023.3.20–2023.6.19)

プロジェクト非常勤研究員・共同研究員

主な共同研究プロジェクトにおけるプロジェクト非常勤研究員(2022年5月1日現在)および共同研究員(2022年度の延べ数)の人数を以下に示す。

	非常勤研究員	共同研究員
多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創	5名	138名
実証的な理論・対照言語学の推進	3名	170名
消滅危機言語の保存研究	4名	75名
多言語・多文化社会における言語問題に関する研究	1名	36名
多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究	5名	120名
多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究	10名	114名
開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張	2名	36名
その他の共同研究プロジェクト(人間文化研究機構のプロジェクトを含む。)	2名	99名
その他(共同研究プロジェクト以外の経費による雇用を含む。)	24名	0名
合計	56名	788名

4

2022年度の予算および決算

国立国語研究所の2022年度の予算および決算を下表に示す。

(単位：千円)

	予算額(当初)	決算額
収 入	1,103,512	1,263,656
運営費交付金	1,055,728	1,148,600
著作権料	0	28,752
科学研究費補助金等間接経費収入	16,788	54,241
その他雑収入	1,367	1,928
寄附金収入	18,026	16,616
受託研究等収入	8,532	10,670
受託事業等収入	3,071	2,699
施設費収入	0	0
目的積立金繰入収入	0	0
総合研究大学院大学収入	0	150
支 出	1,103,512	1,137,224
研究経費	5,940	4,406
共同利用経費	468,330	410,221
教育研究支援経費	23,924	23,550
人件費	489,501	552,380
一般管理費	104,214	141,111
受託研究経費	8,532	3,051
受託事業経費	3,071	2,355
施設整備費	0	0
総合研究大学院大学経費	0	150

II

共同研究と共同利用

本章では、共同研究活動として、(1) 各種の共同研究プロジェクト、(2) 人間文化研究機構基幹研究プロジェクト等、および(3) 外部資金による研究をまとめるとともに、共同利用のための成果として、(4) 2022年度公開中の各種コーパス・データベース、(5) 学術刊行物、(6) 研究成果の発信・普及のための国際シンポジウム、研究系の合同発表会、プロジェクトの発表会、コロキウム、サロンなどの催し、および(7) センター・研究図書室の活動状況を掲げる。

1 共同研究プロジェクト

第4期中期計画における国立国語研究所全体の研究課題は「日本語・日本語教育分野における基幹研究の推進」である。これを達成するため、「語彙・辞書」「理論・実験」「フィールド・社会調査」「教育・発達」という四つの研究領域を設定し、領域ごとに次に示す六つのプロジェクトを構成して機関拠点型プロジェクト「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」を実施するとともに、言語資源開発センターのプロジェクトとの連携によりコーパス・アーカイブ化を推進することで、オープンサイエンス・オープンデータの体制を強化している。共同研究プロジェクトは、プロジェクトリーダーを中心とし、国内外の共同研究員の参画によって成り立っており、研究系・センター間、プロジェクト間で連携しながら研究を進めている。また、この研究課題は、国立国語研究所が所属する人間文化研究機構における機関拠点型基幹研究プロジェクトの一つとして位置付けられている。

2022年度は、「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」のプロジェクトとして、機関拠点型(7件)、異分野融合型共同研究(3件)、および共同利用型共同研究(25件)を実施した。

なお、機関拠点型プロジェクトの概要については、『大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所令和4年度機関拠点型基幹研究プロジェクト評価報告書』の各プロジェクト・センターの評価から抜粋した。

詳細は、第VIII章を参照。

(1) 【機関拠点型】7件

機関拠点型基幹研究プロジェクトは、国語研における研究活動の根幹となる大規模なプロジェクトで、日本語・日本語教育分野における基幹研究の推進という学術的目標に向けて研究所が総力を結集して取り組むものである。研究系専任教員のリーダーシップのもと、国内外の研究者・研究機関との協業により全国的、国際的レベルで展開している。

- ・多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創
- ・プロジェクトリーダー：小木曾智信(研究系・教授)
- ・研究期間：2022.4–2028.3.

《研究目的および特色》

日本語の語彙データを扱う下記のサブプロジェクト群を統括し、その全体を結びつけるキーとなる語彙資源の整備を行うとともに、合同でシンポジウムやチュートリアルを開催し、共同研究を行う。

- ・学習者の辞書資源使用の実態調査
- ・言語資源の空間接続
- ・学習者用辞書資源の構築
- ・語彙資源ポータル拡張
- ・学習者用「日本語機能語バンク」の構築

各サブプロジェクトではさまざまな日本語語彙に関わるデータを構築する予定であるが、これらがばらばらで互換性のないものにならないように、相互接続性を持つ統一的な枠組みの中で扱えるようにするため、これまで国語研のコーパス構築に利用されてきた UniDic の見出し語データベースを軸に、分類語彙表などの国語研作成のリソースや、日本語最大の国語辞典である『日本国語大辞典』の見出し語

を統合し、語彙資源統合キーとなるデータを開発する。その上で、共同研究を通して、各サブプロジェクトが整備する語彙資源統合 ID を共通に用いて相互に連携・統合できるようにする。このキーを介して既存のコーパスの用例・統計情報とリンクすることで、全体の利用価値と相互運用性を高める。

プロジェクト全体で、年 1 回以上、語彙資源の活用に関するシンポジウムを開催（サブプロジェクト持ち回り）、また年 1 回以上、サブプロジェクトとともに語彙資源活用チュートリアルを開催する。

最終年度までに「言語資源学シリーズ」の 1 冊として語彙資源を活用した研究論文集をサブプロジェクトと合同で 1 冊以上刊行する。

《2022 年度の主要な成果》

- ・プロジェクト全体で計画していた語彙資源に関するシンポジウムは、一般向けイベント第 17 回 NINJAL フォーラム「語彙資源の構築と活用」として言語資源開発センターと共催で開催し、プロジェクトで構築する語彙資源について発信した。【地域・社会との連携】
- ・プロジェクト全体で 1 回以上行うこととしていた講習会は、第 44 回 NINJAL チュートリアル『分類語彙表』による日本語研究』として開催し、語彙資源に関するチュートリアルを実施した。【大学院教育・若手研究者育成】
- ・サブプロジェクトでは、計画にそって語彙資源の整備を順調に進め、その成果をプロジェクト全体として、書籍 1 冊、論文 12 本、発表・講演 56 件、言語資源 16 件として公表した（「研究成果一覧：参照」）。各サブプロジェクトの成果の概要は次の通り（※詳細は各サブプロジェクトの報告書を参照）。

語彙資源統括

- ・UniDic による形態素解析用ツール「Web 茶まめ」を更新し新しい現代語用 UniDic に対応して一般公開した。「Web 茶まめ」の 2022 年度のページビューは 138,199、ユーザー数は 22,828、セッション数 54,288 となった（Google Analytics）。【共同利用・共同研究】
- ・ウェブ版 UniDicExplorer（試験版）を限定公開した。【共同利用・共同研究】

学習者の辞書資源使用の実態調査

- ・韓国・中国・台湾・ベトナム・イギリス・ドイツの大学に通う日本語学習者の辞書ツール使用の実態調査を、各国の大学と連携して行った。計 97 名を対象に 1 週間の辞書検索行動を記録した。【共同利用・共同研究】【グローバル化】
- ・3 つの国際シンポジウムでプロジェクトに関する発表を 3 件行った。【グローバル化】

言語資源の空間接続

- ・国内言語地図 14 冊のスキャン画像データを作成し、うち 10 冊を公開した。【共同利用・共同研究】
- ・国内言語地図 10 冊のジオタグ付き画像データを作成し公開した。【共同利用・共同研究】

学習者用辞書資源の構築

- ・可読性を高め活用しやすい形に『計算機用日本語基本辞書 IPAL』を変換した『IPAL PowerBI レポート』と『IPAL html 版』を一般公開した。【共同利用・共同研究】
- ・プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」と共催でアノテーション・述語の意味文法・学習者辞書 3 プロジェクト合同研究会を開催した。【共同利用・共同研究】
- ・共同研究発表会「学習者辞書用語彙資源の構築」を開催した。【共同利用・共同研究】

語彙資源ポータル拡張

- ・研究集会「古辞書・漢字音研究とデータベース 2022」を開催した。【共同利用・共同研究】
- ・サーバリプレイスを行い、語誌情報ポータル（語彙資源ポータル）のインターネット公開を継続するための情報基盤強化を行った。【共同利用・共同研究】

学習者用「日本語機能語バンク」の構築

- ・国外 3 大学（UFLS-UD, Manipur University, Tashkent State University of Oriental Studies）で、4 回にわたり日本語教師向けに研究成果の一部を報告した。【地域・社会との連携】
- ・第 29 回ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウム（トリア大学、オンライン開催）で日本語教師向けに研究成果の一部を基調講演として報告した（2023 年 3 月 4 日）。【地域・社会との連携】

・共同研究員数：138 名

・共同研究員所属機関：

筑波大学, 東京大学, 東京農工大学, 信州大学, 京都大学, 大阪大学, 鹿児島大学, 東京外国語大学, 岡山大学, 埼玉大学, 静岡大学, 神戸大学, 奈良先端科学技術大学院大学, 徳島大学, 北海道教育大学, 群馬大学, 一橋大学, 金沢大学, 京都大学, 東京海洋大学, 名古屋大学, 東京都立大学, 愛知県立大学, 鳴門教育大学, 高崎経済大学, 国際教養大学, 青山学院大学, 昭和女子大学, 明治大学, 静岡英和学院大学, 南山大学, 立命館大学, 関西学院大学, 日本大学, 早稲田大学, 神奈川大学, 同志社大学, 同志社女子大学, 奈良大学, 四国大学, 目白大学, 桜美林大学, 阪南大学, 東京女子大学, 福岡女子大学, 跡見学園女子大学, 神田外語大学, 拓殖大学, 澳門大学, ベトナム国家大学ハノイ校, 高麗大学校, ソウル大学校, 国立政治大学, 天津外国語大学, トリーア大学, コートダジュール大学, 釜慶大学校, 国立中央大学, ユライ・ドブリラ大学プーラ, 寧波大学, ジョージタウン大学, 中山大学, 北京外国語大学, ゲント大学, 清華大学, 独立行政法人国際交流基金, 国立情報学研究所, 特定非営利活動法人トルシーダ, 株式会社ピコラボ, 株式会社ネットアドバンス, 小学館

・実証的な理論・対照言語学の推進

・プロジェクトリーダー：浅原正幸 (研究系・教授)

・研究期間：2022.4–2028.3.

《研究目的および特色》

認知言語学や生成文法などの理論的研究や類型論的研究においては、伝統的に話者の内省や直観に基づく個別研究が方法論的に主流だったが、近年その方法論の見直しが各理論、各分野で急速に進んでいる。具体的には、理論的考察にコーパス資料、実験データ、フィールド調査などを多角的に組み合わせて言語研究の中心的課題に取り組む、新たな実証的方法論を模索する動きが世界的に加速化している。本プロジェクトでは、音韻、意味、形態・統語という言語研究の中心的三分野における理論的・類型論的な研究の核心的課題に取り組み、このような世界的潮流における最先端の研究を参照しつつ、それを先導する研究を進める。具体的には、言語学と隣接分野、あるいは言語学の複数の下位分野の知見を融合する形で研究を進めるサブプロジェクト4件と、自然言語処理の知見を活かしてそのような研究に資する言語資源を開発するプロジェクト1件を、それぞれの独自性を保ちつつも相互に連携させて展開することで、国内外の言語研究の最前線に貢献することを目指す。

個別の課題に取り組む4つのプロジェクトは、イントネーションの構造の言語間・方言間変異 (イントネーション P)、体言化・名詞修飾構造の形態・統語・意味的類型 (体言化 P)、状態変化述語の意味構造 (述語の意味論 P)、統語変換操作の理論言語学における位置づけ (計算言語学 P) という、音韻、意味、形態・統語のそれぞれの分野における鍵となる概念の定義そのものを再考察することを目的としている。この目的のために、個々のプロジェクトは、解明の対象である概念に迫るために最適な分野横断的手法を複数組み合わせた多角的なアプローチを採用することで研究を進める。具体的には、イントネーション P では、コーパス構築とフィールド調査、体言化 P ではフィールド調査と文献資料調査、述語の意味文法 P ではビデオ実験とコーパス調査、計算言語学 P ではコーパス構築と計算論的モデリングを中心的な手法として採用する。これらの具体的な課題に取り組むサブプロジェクトと連動し、それを後方支援するアノテーション P では、既存のコーパスで手薄だが、言語資源に基づく言語の科学的研究をより一層進めるために必要となるタイプの言語資源の構築に注力する。プロジェクト全体で開催する合同の研究会やサブプロジェクト間での共同研究や言語資源活用のノウハウの共有を通して、サブプロジェクト間の連携を強めて研究推進の相乗効果を得ることを模索する。

《2022年度の主要な成果》

理論対照統括

- ・5つのサブプロジェクト共同で、Evidence-based Linguistics Workshop 2022 を9月5・6日に開催し、各プロジェクトの成果を報告するとともに、発表の公募も行い、関連分野の研究者との交流の場を提供した (神戸大学と共催)。【共同利用・共同研究】
- ・下記に記載する5つのサブプロジェクトと連携して研究を進めた成果を、書籍2冊、ブックチャプター2本、論文20本、発表・講演93件として公表した (「研究成果一覧」参照)。【共同利用・共同研究】

アノテーション

- 以下のアノテーション・データベース整備・公開を行った。【共同利用・共同研究】
 - ・『日本語日常会話コーパス』係り受けアノテーションを完成させて、公開した。
 - ・分類語彙表に基づく形容詞結合価データベース（西尾データの電子化）を公開した。
 - ・分類語彙表に基づく動詞結合価データベース（宮島データの電子化）を公開した。
 - ・『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に基づく直喩データベースを公開した。
- 企業との共同研究を5件（LegalForce社・ホンダリサーチインスティテュート社・LINE社・ワークスアプリケーションズ社・リクルート社）進めた。【地域・社会との連携】

イントネーション

- 琉球語方言のオンラインイントネーション調査を4回行い、そこで得た知見を踏まえて、方言共通の調査票を作成した。【共同利用・共同研究】
- 『広島大学日本語電話会話コーパス』構築作業（分節音ラベリング）を約5時間20分完了した。【共同利用・共同研究】
- 「消滅危機言語の保存研究」（リーダー：山田）と共同で大学院生向けのフィールドワークチュートリアル「方言語彙データ作成講習会」を、「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」（リーダー：小磯）と連携して若手研究者・大学院生を主対象とする韻律ラベリング講習会を開催した。【大学院教育・若手研究者育成】
- 「消滅危機言語の保存研究」（リーダー：山田）と連携して、文化庁および地方自治体と共同で一般向けの「危機言語サミット」を開催した。【地域・社会との連携】

計算言語学

- データのアノテーションを進めた。パイロット的なモデリングの結果をまとめ、言語処理学会に投稿した。【共同利用・共同研究】
- 「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」プロジェクト（リーダー：小木曾）と共催で、言語処理学会年次大会2023において「深層学習時代の計算言語学」というテーマでワークショップを3月17日に開催した。【共同利用・共同研究】
- 名古屋大と共催で国際学会 HPSG 2022 を開催した（7月29日、オンライン）。【共同利用・共同研究】【グローバル化】
- プロジェクトの理論的基盤に関連する研究の成果をとりまとめ、英語での共著論文を海外のジャーナルに出版した（国際共著論文）。【グローバル化】
- プロジェクトの進捗状況を国際学会の招待公演（JK30, 3月13日）で発表した。【グローバル化】
- 非常勤研究員1名を雇用してプロジェクトの理論的・記述的基盤に関する分野融合的な共同研究を主体的に進める方法について指導した結果、2022年度日本言語学会論文賞の受賞につながった（https://www.ls-japan.org/modules/documents/index.php?cat_id=167）。【大学院教育・若手研究者育成】

体言化

- 海外（インド、ベトナム）で国際ワークショップを7件開催した。そのうち、2件は交流協定を締結しているデカン・カレッジ・ポスト・グラデュエイト・アンド・リサーチ・インスティテュート（Deccan College Post Graduate and Research Institute）およびインド工科大学マドラス校（Indian Institute of Technology Madras）と共同で開催した。【共同利用・共同研究】【グローバル化】
- 大学院生（2名）をプロジェクト研究員として参画させ、プロジェクト主催の研究会で発表の機会を提供した。【大学院教育・若手研究者育成】
- 英語による研究発信の一貫として、海外の著名な出版社（Mouton, Springer Nature）から刊行される論文集に研究成果を2件投稿した。【共同利用・共同研究】【グローバル化】
- フィールドワークを日本国内2回（1回目：愛知県、2022年9月6日～8日；2回目：福岡県・山口県・広島県、2022年9月11日～16日）、国外3回（1回目：台湾・台北市、2023年1月15日～22日；2回目：インド・アッサム州、2023年2月8日～22日；3回目：ウズベキスタン、2023年3月8日～

25日)を実施した。【共同利用・共同研究】

述語の意味と文法

- 日本語, 英語, その他の言語における動詞類についてデータ収集を行い, 日本語については分類リストを作成した。また, リヨン大学, INALCO, ニューヨーク州立大学の指導的研究者と対面で研究打合せを行い, 連携を深めた。【共同利用・共同研究】【グローバル化】
- 成果発表については, 英文論文集の編集を進めた。また, 国際学会 NAMED 2022 を京都大学と共同で開催し (2022年11月3日~4日), 共同研究者が5件の研究発表を行った。また, 代表者は John Benjamins 社から出版された書籍に1編の論文を掲載し, 国際学会において5回の研究発表と2回の招待講演を行った。国内学会のシンポジウムにおいても研究の成果を発表した。【共同利用・共同研究】【グローバル化】
- 学生支援については, 大学院生6名を共同研究者とした。また, 国際学会で研究発表を行う2名の国内学生及び5名の海外学生に旅費の支援を行った。【大学院教育・若手研究者育成】

▶ 共同研究員数: 170名

▶ 共同研究員所属機関:

東京大学, お茶の水女子大学, 上越教育大学, 京都大学, 大阪大学, 神戸大学, 北海道教育大学, 東北大学, 茨城大学, 東京農工大学, 九州大学, 弘前大学, 東京外国語大学, 一橋大学, 金沢大学, 信州大学, 広島大学, 福岡教育大学, 長崎大学, 熊本大学, 琉球大学, 千葉大学, 岐阜大学, 名古屋大学, 愛知県立大学, 横浜市立大学, 熊本県立大学, 神戸市外国語大学, 名桜大学, 藤女子大学, 慶應義塾大学, 武蔵野大学, 関西外国語大学, 上智大学, 目白大学, 立命館大学, 関西学院大学, 北星学園大学, 弘前学院大学, 國學院大學, 駒澤大学, 実践女子大学, 東京理科大学, 日本女子大学, 静岡英和学院大学, 南山大学, 関西大学, 広島経済大学, 安田女子大学, 別府大学, 沖縄国際大学, 東海大学, 早稲田大学, 近畿大学, 関西国際大学, 美作大学, 麗澤大学, 神田外語大学, 工学院大学, 神奈川大学, 名古屋学院大学, 追手門学院大学, カリフォルニア大学ロサンゼルス校, オークランド大学, フランス国立社会科学高等研究院, ロンドン大学, メキシコ国立自治大学, クリスマン・アルブレヒト大学キール, Tripura University, Deccan College, Federal University of Pará, 雲南省民族学会, Gauhati University, IIT Madras, Central Institute of Indian Languages Manasagangotri, ワルシャワ大学, 内モンゴ大学, ネットワーク言語文化研究所, 国立障害者リハビリテーションセンター (研究所), 情報・システム研究機構, 株式会社リクルート, Resemble AI

• 消滅危機言語の保存研究

▶ プロジェクトリーダー: 山田真寛 (研究系・准教授)

▶ 研究期間: 2022.4-2028.3.

《研究目的および特色》

1. いま話されている日琉語諸方言データの収集: 担当地域でフィールド調査

国内40地点で調査を行っている3期から継続して, 共同研究員が各担当地点で {語彙, 文法記述, 談話資料の蓄積} を進める。第3期プロジェクトを以下3つの観点で発展させる。

増やす: 3点セットを拡充し, 「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性の解明」プロジェクト (代表 | 五十嵐) や日琉祖語再建・系統関係解明, 対照言語学的研究に資するデータなど, 特定トピックに関するデータを増やす。

深める: 3期までに個別文法現象の記述がある地点は文法スケッチを, 文法スケッチがある地点は参照文法を執筆する。

広げる: 琉球諸語に比べて不足している本土諸方言に調査対象を広げる。また消滅危機言語の再活性化など, 言語の継承保存に資する基礎資料としてのデータ収集も行う。

2. 過去の諸方言データの電子化: 諸方言談話資料の文字化・電子化と公開準備

1977年度から1985年度にかけて行われた「各地方言収集緊急調査」(文化庁)のうち「全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成」(2001~2008, 全20巻)で未公開部分の文字化・電子化し公開準備を進める。

3. オープンサイエンスの促進：アーカイブ

上記1, 2で蓄積されるデータを「危機言語データベース」(<https://kikigengo.ninjal.ac.jp/>)などで随時公開し、利用可能な段階から研究情報共同利用センター(仮)も利用する。またコーパス共同開発センター(仮)と協働して、それぞれのデータ保持者自身がフィールドデータを平易かつ適切にアーカイブするしくみをつくり、データのアーカイブと共同利用の準備を進める。

4. 消滅危機言語・方言の認知向上や記録保存・継承保存の推進：イベント

- ・危機言語サミット(危機言語コミュニティや社会一般向け;文化庁, 地方自治体と共催)
- ・フィールドワークチュートリアル(大学院学生向け)
- ・データデポジットワークショップ(共同研究員向け)
- ・共同研究員のフィールド調査成果発表会(国内発表会, ハワイ大学と共同開催するワークショップ)
- ・その他, 言語コミュニティや社会一般に向けて, 危機言語の認知向上や公開データへのアクセス・利用促進を目的としたイベントや発信を行う。

《2022年度の主要な成果》

1. 調査研究活動・研究成果の公開

- ・11名が13地点で計23回のフィールド調査を行い, 各地点の地域言語データを収集した。
- ・日本の消滅危機言語・方言の音声データを紹介・公開するサイト「危機言語データベース」について, データのデポジットと公開の効率化をはかるため, 語彙データベースに出典情報と同源語IDを追加するなどのリニューアルを実施した。
- ・文化庁資料(各地方言緊急収集調査)の電子化を進め, 岡山県新見市の自然談話データ・場面設定データ・語りデータを公開した。
- ・イントネーションプロジェクト(代表:五十嵐)と共催で, 研究発表会2回と「令和4年度 危機的な状況にある言語・方言サミット(奄美大会)・沖永良部」(文化庁ほかとの共催)を開催した。
- ・言語の継承保存を促進するため, マルチリンガリズムや言語の継承保存を専門とする共同研究員を新たに5名加えて連携体制を強化した。このうち3名がプロジェクト研究発表会で発表し, うち2名が研究会プロシーディングス原稿を共著で執筆した。
- ・以上の成果を, 書籍1冊, 論文11本, 学会発表64件として発表した。

2. 教育・人材育成

- ・フィールドワークチュートリアルは希望者がいなかったため実施せず, 代わりに共同利用研究員を対象としてデータデポジットワークショップ「方言語彙データ作成講習会」を実施し, 語彙データやアクセント資料の調査方法から危機言語データベース登録の際の手続きまでのチュートリアルを行った。また「文化庁「各地方言緊急収集調査」方言談話整備 共同プロジェクト 説明会 & 講習会(「みんなで談話整備プロジェクト」説明会 & 講習会)」を開催し, 文化庁データの電子化作業協力者を募集・育成した。
- ・大学院生7名を含む若手研究者(35歳以下24名, 40歳未満4名)を共同研究員として参画させ, 調査旅費の支援, 研究会・プロシーディングスでの発表, チュートリアルなどにより, 消滅危機言語研究を推進する人材を育成した。
- ・若手研究者を含むプロジェクトメンバーの情報交換と議論を深めるために, プロジェクト主催の研究発表会を開催し, 若手研究者9名に発表の機会を提供した。

3. 社会連携・社会貢献

- ・鹿児島県大島郡和泊町・知名町(沖永良部島)との協定を更新し, 中央公民館講座, 町職員研修会, 町広報誌での連載などをとおして地域言語の記録と継承に関して連携した。
- ・文化庁, 知名町と共同で一般向けの「令和4年度 危機的な状況にある言語・方言サミット(奄美大会)・沖永良部」を開催した。今回のサミットでは新たに「ブース発表」を設け, 各地で継承保存を行っている9組が取り組みを発表し, 研究成果を地域に還元するだけでなく, 来場者と合わせて情報交換を行う機会をつくった。
- ・和泊町職員方言研修会1回, 沖永良部高校出前授業1回, 知名町中央公民館講座(毎月1回)を実施

し、地域言語コミュニティ内で地域言語の記録と継承を行うことができる市民科学者の育成を行った。講座受講生が実践演習として収集した語彙データを危機言語データベースで公開したほか、研修会・講座受講生のうち4名が小学校の特別講師として方言指導を行い受講内容を実践した。

- ・ 知名町広報誌(4月から毎月)と和泊町広報誌(1月から隔月)での連載コラムを執筆した。
- ・ 知名町生涯学習フェスティバルで中央公民館講座の発表を行った(11月3日)。
- ・ 地域言語絵本(『ディラブディ』(与那国語)と『塩一升の運』(沖永良部語))を出版した。ジュンク堂書店那覇店で「4つの島のことばの絵本展」(7月11日~8月10日)を開催し、会期中(7月30日~8月4日)に読み聞かせ会、トークショー、民謡ライブ、ワークショップを実施した。

4. 国際連携・国際発信

- ・ アイヌ語と沖縄語の継承保存を研究テーマとする博報財団招聘研究者を1名受け入れた。
- ・ 海外機関に所属する共同研究員を1名増やし5名とし、今後の継承保存研究の展開について協議した。
- ・ プロジェクトリーダーと共同研究員2名が米国ハワイ大学マノア校を訪問して協定調印式に出席し、協定の更新を行った。同校の教員との研究打ち合わせ3件、学生指導4件、琉球語を専門とする図書館司書との打ち合わせ1件を実施した。
- ・ 上記訪問中にハワイ大学マノア校においてNINJAL-UHM Linguistics Workshopを同校と共催し、琉球諸方言を含む国内外の記述の少ない言語についての研究交流を行った。
- ・ プロジェクト成果を広く世界に発信するため、「危機言語データベース」の英語サイトを拡充した。13地点計23回のフィールド調査を行い各地点の地域言語データを収集するとともに、消滅危機言語・方言のデータを紹介・公開する「危機言語データベース」のリニューアル(語彙データベースに出典情報と同源語IDを追加するなど機能拡張)をするなど、計画通り調査等を進めた。また危機言語サミット(奄美大会)や、地域言語の記録と継承を行うことができる市民科学者の育成を目的とする研修会・出前授業・講座を開催した。

・ 共同研究員数: 75名

・ 共同研究員所属機関:

東北大学, 東京大学, 東京外国語大学, 一橋大学, 金沢大学, 信州大学, 神戸大学, 島根大学, 岡山大学, 広島大学, 福岡教育大学, 九州大学, 長崎大学, 鹿児島大学, 琉球大学, 横浜市立大学, 愛知県立大学, 熊本県立大学, 名城大学, 北星学園大学, 弘前学院大学, 國學院大學, 駒澤大学, 実践女子大学, 東京理科大学, 立正大学, 静岡英和学院大学, 中京大学, 南山大学, 立命館大学, 関西大学, 広島経済大学, 安田女子大学, 別府大学, 沖縄国際大学, 近畿大学工業高等専門学校, ロンドン大学, カリフォルニア大学ロサンゼルス校, オークランド大学, フランス国立社会科学高等研究院, ハワイ大学, 北海道博物館, 国立障害者リハビリテーションセンター(研究所), 情報・システム研究機構

・ 多言語・多文化社会における言語問題に関する研究

・ プロジェクトリーダー: 朝日祥之(研究系・教授)

・ 研究期間: 2022.4-2028.3.

《研究目的および特色》

本プロジェクトは、多言語化が進んだ日本社会で発生している言語問題の中でも、日々の言語生活に欠かせない分野である行政、医療福祉分野を中心としたにおける言語問題の所在を明らかにするための社会調査、ならびにそれを支える基礎調査を実施する。その上で言語問題の解決を目指すことを目的とする。

多言語化・多文化による社会変容により、特に行政・医療福祉分野における言語問題が生じている。国立国語研究所においても、「外来語言い換え提案」「病院の言葉」に関するプロジェクト、大規模自然災害をきっかけとして提唱された「やさしい日本語」など、その成果は少なくない。ただし、これらはそれぞれ「国語問題・国語施策」、「日本語問題・日本語施策」のための研究であり、多言語化・多文化した日本社会の言語問題を包括的に捉えることにはならない。本プロジェクトでは、国立国語研究所で実施された「国語・国字・日本人の視点」による言語生活研究の再定義を行い、行政・医療福祉分野における言語問題を把握する。本研究の最終的な目的は、言語生活の現在を的確に捉えた上で行政、医療福祉を

中心とした分野に内在するにおける言語問題をリアルタイムに捉える、その解決に向けた提言を行うことにある。

本プロジェクトでは、多言語化・多文化による社会変容によって生じた日本社会において、行政と医療福祉の専門家・非専門家のそれぞれに生じている言語問題の所在を把握する社会調査をについて、専門家、非専門家双方を対象にした社会調査を実施する。社会調査のデータを公開するとともに、言語問題を的確に把握するための基礎調査の実施、そこで得られたデータを活用した分析を実施する。

なお、実施にあたっては、人間文化研究機構共創先導プロジェクト「コミュニケーション共生科学の創成」、並びに同機構共創先導プロジェクト「ハワイにおける日系社会資料に関する資料調査と社会調査の融合的研究」と連携する。

【研究組織】

本プロジェクトは次のような研究班を組織する。

- ・【総括班】研究全体の運営、研究組織化、研究班間の連携、共同研究発表会・シンポジウム等を企画・運営する。
- ・【自治体研究班】自治体を対象とした社会調査を企画・実施する。
- ・【外来語研究班】外来語に関する社会調査を企画・実施する。
- ・【言語変異研究班】言語変異（音韻・アクセント・形態等）に関する調査研究を企画・実施する。
- ・【言語景観研究班】言語景観に関する調査研究を企画・実施する。
- ・【手話研究班】手話（日本手話・日本語対応手話・外国手話等）に関する調査研究を企画・実施する。
- ・【言語使用研究班】日本に居住する外国人の言語生活、ならびに日本人リタラシーに関する調査研究を企画・実施する。
- ・専門家調査班では、専門家を対象とした社会調査を企画・実施する。
- ・言語生活調査班では、非専門家を対象とした社会調査を企画・実施する。

【研究成果】

- ・各調査班専門家調査班では、実施した社会調査を集計をしたデータ集を刊行し、調査結果をリアルタイムに発信していくとともに、調査データの公開を行う。
- ・各調査班言語生活調査班では、専門家調査班による社会調査の動向を踏まえた調査研究を実施し、その成果を学会、国際会議での口頭発表、シンポジウムの開催、研究論文集の刊行などを通じて発信する。

《2022年度の主要な成果》

1. 調査研究活動・研究成果の公開

- ・プロジェクト活動を本格化すべく研究組織を7つの研究班（「総括班」「自治体研究班」「外来語研究班」「言語変異研究班」「言語景観研究班」「手話研究班」「言語使用研究班」）に再編成した。
- ・各研究班による検討を踏まえ、全国規模の社会調査を2件（『行政情報をわかりやすく伝える工夫に関する意識調査（自治体調査）Ⅱ』、『現代日本語における外来語の使用実態調査』）、特定地域・地点を対象とした調査を16件（略字・俗字に関するweb調査1件、音韻調査2件、アクセント調査2件、言語景観調査11件）を実施した。
- ・「手話研究班」ではろう者と聴者とがそれぞれに生み出す日常生活空間における相互のやり取りに関するクロストークを企画し、映像収録をろう者3名に対して行った。
- ・本プロジェクトの準備研究（2021年度実施）において日本人・外国人を対象に実施したweb調査で得られた調査データの整備を進めた。同時に、今年度実施した調査データについても整備に着手した。
- ・研究発表会を3月11日、12日にオンラインで開催した。また、プロジェクトに関係する研究者（3名）をNINJALコロキウムに招待し、日本における社会言語学的研究を行う重要性を示した。
- ・研究の成果を、書籍1冊、論文1本、発表・講演15件、辞書項目2件として公表した。

2. 教育・人材育成

- ・若手研究者（大学院学生）4名（大学院学生、日本学術振興会特別研究員1名）に研究プロジェクトに参加してもらい、研究発表会で研究成果を発表してもらった。

3. 社会連携・社会貢献

- 本プロジェクトにろう者(研究者を含む4名)に参加してもらった。また、日本に居住する外国人住民(日系ブラジル人2名)と連携をとりながら調査設計を行った。
- 国語研を見学のために来訪した高校生に対して講義を行ったほか、「国語研レクチャーシリーズ」によるオンライン講義により、社会言語学的研究の普及を行った。

4. 国際連携・国際発信

- 海外の研究者(8名)をプロジェクト共同研究者として受け入れ、NINJAL コロキウム・研究発表会での講演を行うとともに調査設計を行った。
 - Handbook of Japanese Sociolinguistics (De Gruyter Mouton) を2022年4月に刊行した。また、Sociolinguistics symposium 24 (SS24)での発表を通してプロジェクトの研究成果を海外に発信した。
- 共同研究員数: 36名
- 共同研究員所属機関:

大阪大学, 筑波大学, 鹿児島大学, 国際教養大学, 北星学園大学, 日本大学, 明治大学, 立命館大学, 学習院大学, 國學院大學, 大東文化大学, 上智大学, モナシュ大学, ウィーン大学, デュースブルク=エッセン大学, ハワイ大学, ラ・トロブ大学, オーストラリア国立大学, 人間文化研究機構本部, 統計数理研究所

• 多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究

- プロジェクトリーダー: 小磯花絵(研究系・教授)
- 研究期間: 2022.4-2028.3.

《研究目的および特色》

本プロジェクトは、子どもを中心とする多様な場面・相手との会話を含む映像付きコーパスを新たに開発し、成人中心の既存のコーパスと接続させることで、コミュニケーションを含む言語の発達・変化の過程を、子どもから高齢者まで多世代に渡り実証的に研究できる基盤を構築することにより、日本における言語発達研究を幅広い分野の研究者との連携体制のもとで展開させることを目的とする。また、各種会話コーパスを活用した技術開発を見据えた基礎研究を推進する。

これまで乳幼児を含む子どもの言語発達に関する研究が数多く行われてきたが、発達研究は乳幼児に限られるものではなく、学童期、青年期、成人初期、壮年期、老年期など、多世代に渡り見ていく視点も不可欠である。特に、高齢者や子育て世代の孤立など家族の問題が複数世代化し、多世代交流が国の重要施策の一つとして掲げられるなか、乳幼児から高齢者までの多世代を対象に、日常生活の中で交わされるリアルな会話を映像まで含めて記録したコーパスを構築・公開し、各世代の言語使用・コミュニケーション行動の実態やその発達・変化を実証的・多角的に研究することは、学術のみならず社会的にも重要な課題である。

そこで本プロジェクトでは、『子ども日常会話コーパス』『幼稚園話し合いコーパス』『小学校話し合いコーパス』『昭和子ども会話コーパス』(いずれも仮称)を整備した上で、第3期までに構築してきたコーパスと合わせて活用することにより、話し言葉の特性を、①言語発達、②言語教育、③時代による言語の変化、④話し言葉のレジスターの多様性の観点から明らかにすると同時に、⑤各種話し言葉コーパスを活用した情報工学的応用可能性について探る。

《2022年度の主要な成果》

1. 調査研究活動・研究成果の公開

- 『子ども版日常会話コーパス』『昭和子どもコーパス』『小学校会話コーパス』は計画通りに収録・文字化を進めた。『子ども版日常会話コーパス』のうち17時間はプロジェクト共同研究員に限定公開した。『幼稚園会話コーパス』はコロナの影響による活動制限の影響で今年度は収録できなかったが、2021年度までに収録した分の文字化を進めた。
- 2022年に一般公開した『日本語日常会話コーパス』について、各種アノテーション(短単位・長単位・係り受け・談話行為・韻律)を統合したりレシヨナルデータベース(CEJC-RDB)を作成し一般公開した。
- 『名大会話コーパス』(100時間)について、2016年度に「中納言」で一般公開した短単位データは解

析精度が悪かったため、人手修正を加えて精度を高めた上で再公開した。

- ・言語資源開発センター・「語彙資源」プロジェクトと合同で現代話し言葉用 UniDic Ver3.1.1 を作成して公開した。
- ・次の4つのシンポジウムを開催した：①プロジェクト全体の研究成果を発信するために、シンポジウムを3月3日オンラインで開催、②情報工学的応用可能性について検討する「応用研究班」を設け、人工知能学会 SLUD 研究会と「対話システムシンポジウム」を共催、③会話コミュニケーションについての議論を深めるため、関連する科研費プロジェクトと連携してシンポジウム「ことば・認知インタラクション」を共催、④シンポジウム「プロソディを通して見る社会とコミュニケーション」を社会言語学会および「イントネーション」プロジェクトと共催。
- ・以上、研究の成果を、書籍2冊、ブックチャプター7本、論文18本、発表・講演98件、コーパス・データベース等4件(新規1, 再公開2, 内部公開1)として公表した。

2. 教育・人材育成

- ・コーパス言語学分野の人材を育成するために、若手研究者や大学院学生を主対象とする「中納言」講習会を11月5日に、また「韻律ラベリング講習会」を9月16日に開催した。また日本語学・言語学の諸分野における最新の研究成果や研究方法を若手研究者等に教授することにより、次代の研究者育成を支援することを目的としたNINJAL チュートリアル『『日本語日常会話コーパス』活用入門』を3月29日に開催した。
- ・若手研究者を含むプロジェクトメンバー間で情報交換を密に行うために、非公開のショートトークの会を6回開催した(話題提供: 14名)。

3. 社会連携・社会貢献

- ・情報工学的応用可能性について検討する「応用研究班」を設け、民間企業の研究者も共同研究員等に加えて研究を推進した。人工知能学会 SLUD 研究会と共催で「対話システムシンポジウム」を国語研で開催し連携を深めた。
- ・プロジェクトで継続して整備・公開を続ける『日本語日常会話コーパス』『名大会話コーパス』『職場談話コーパス』を、インターネットを通して一般に発信した。今年度、それぞれ6789件、5256件、5380件の新規利用申請があった。

4. 国際連携・国際発信

- ・『日本語日常会話コーパス』『名大会話コーパス』『職場談話コーパス』を、インターネットを通し海外も含めて発信した。また『日本語日常会話コーパス』の成果については、国際会議 LREC2022 での発表を通して発信した。

・共同研究員数: 120名

・共同研究員所属機関:

お茶の水女子大学, 神戸大学, 東京大学, 筑波大学, 新潟大学, 北陸先端科学技術大学院大学, 京都大学, 奈良教育大学, 東京学芸大学, 愛知教育大学, 名古屋大学, 埼玉大学, 金沢大学, 千葉大学, 東北大学, 大阪大学, 東京外国語大学, 横浜国立大学, 京都工芸繊維大学, 富山大学, 熊本大学, 宇都宮大学, 岡山大学, 東京都立大学, 公立はこだて未来大学, 滋賀県立大学, 早稲田大学, 東京家政大学, 千葉工業大学, ものつくり大学, 岐阜女子大学, 専修大学, ノートルダム清心女子大学, 崇実大学校, 京都産業大学, 山梨学院大学, 関西学院大学, 日本大学, 愛知大学, 国際基督教大学, 玉川大学, 立教大学, 明海大学, 同志社大学, 慶應義塾大学, 青山学院大学, 神田外語大学, 中部大学, 常磐大学, 東京福祉大学, 日本女子大学, 十文字学園女子大学, 神戸松蔭女子学院大学, 中京大学, 駒沢女子大学, 福井工業高等専門学校, 長岡市立表町小学校, アルバータ大学, 東京女子大学, University of Basel, モナシュ大学, 国立研究開発法人理化学研究所, 独立行政法人国際交流基金, 国立障害者リハビリテーションセンター(研究所), フェアリーデバイセズ株式会社, NHK 放送文化研究所, ミイダス株式会社(HRサイエンス研究所), NHK 財団放送研修センター, 日本電信電話株式会社 NTT コミュニケーション科学基礎研究所, 株式会社リクルート, フェアリーデバイセズ株式会社, 國學院大學

・多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究

・プロジェクトリーダー：石黒圭（研究系・教授）

・研究期間：2022.4–2028.3.

《研究目的および特色》

本プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」は、日本語非母語話者（日本語学習者および定住外国人）の言語運用の縦断的調査によって多様な言語資源を構築して研究し、その研究成果を教育支援に生かすことを目的とする。その目的を達成するため、以下の六つのサブプロジェクトを設置する。

(1) 多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究統括（担当：石黒）

下記の(2)～(6)の五つのサブプロジェクトの研究成果を収集・整理し、インターネット上においてその公開・発信を支援する。

(2) 日本語学習者の作文の縦断コーパス研究（担当：石黒）

中国、台湾、韓国、ベトナムの複数の大学と日本語学習者の作文の縦断コーパス調査のネットワークを形成し、学習者 600 名（開始時）を対象に、1 年間に 3 回、4 年間にわたる計 12 回の作文調査を行うプロジェクトです。収集したデータに基づき、学習者の作文執筆能力の縦断的な発達過程を明らかにすることを目指す。

(3) 日本語学習者の談話の縦断コーパス研究（担当：石黒）

中国の 2 大学の日本語学習者を対象に、大学入学から卒業までの 4 年、1 年間に 2 回、計 8 回の I-JAS 準拠のインタビュー調査と、それに関連する作文調査を行い、縦断談話データベースを構築する。収集したデータを用いて、談話能力の縦断的な発達過程を作文能力との関係で総合的に明らかにすることを目指す。

(4) 日本語学習者の作文教育支援研究（担当：山口）

協同型の作文教育向けの作文・添削支援システムを開発し、授業への導入手法を検討する。また、システムを用いた授業実践の結果から作文・添削データベースを構築し、作文技能の習得過程とシステムの教授効果を明らかにすることを目指す。

(5) 定住外国人の談話の縦断研究（担当：野山）

2007 年から継続してきた東北地方における外国人定住者の縦断インタビュー調査について、第 4 期も調査を継続する。それとともに、過去の収集データの整備を行い、それらのデータを公開、分析することで、長期間にわたる生活者の言語習得の実態を明らかにすることを目指す。

(6) 定住外国人のよみかき研究（担当：福永）

生活者としての日本語学習者を対象に、日常生活における文字を介したコミュニケーション（よみかき実践）の種類、方略の使用、新しいメディアの活用等についてデータ収集を行い、よみかき実践研究の発展とよみかきに関わる外国人支援の充実を目指す。

《2022 年度の主要な成果》

(1) 非母語話者日本語運用統括

- ① 下記に記載する五つのサブプロジェクトと連携して研究を進めた成果を、編著書 1 冊、学術誌論文 3 本、発表・講演 15 件、講習会・チュートリアル開催 2 件、シンポジウム開催 1 件として公表した（「研究成果一覧」参照）。【共同利用・共同研究】
- ② プロジェクトのサイトの運用を開始した。【共同利用・共同研究】
 - 本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) の運用を 2022 年 4 月 1 日より開始した。
- ③ プロジェクトの情報を発信した。【共同利用・共同研究】
 - 五つのサブプロジェクトの研究紹介とイベント情報等を、本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>)、および Twitter (https://twitter.com/jsl_ninjal) より発信した。
- ④ プロジェクトのサイトで第 3 期の成果公開を継続した。【共同利用・共同研究】

- 本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/jll/>) において、第3期のプロジェクトの研究成果の公開・更新を継続した。

(2) 日本語学習者の作文の縦断コーパス研究

①海外の18大学と共同調査を実施した。【共同利用・共同研究】

- 中国7大学(北京語言大学, 天津外国語大学, 東華大学, 重慶三峡学院, 福建師範大学, 華中科技大学, 長春師範大学), 台湾2大学(国立政治大学, 東呉大学), 韓国2大学(韓国外国語大学校, 仁川大学校), ベトナム3大学(フエ大学外国語大学, ドンア大学, ハノイ工業大学), タイ1大学(タマサート大学), フランス1大学(フランス東洋言語文化学院), スロヴェニア1大学(リュブリャナ大学), イギリス1大学(オックスフォード大学) の計18大学との共同調査体制を構築し, 学習者936名(開始時)を対象に, 本年度に3回(今年度に調査を開始した3大学は1回のみ), 計1,754本の作文データを収集した。なお, 途中で調査を辞退した学生もいるため, 開始時よりも人数はやや減少したが, 調査は全体として順調に進行している。

②作文データのデータベースの設計の検討に着手した。【共同利用・共同研究】

- 収集した作文データのデータベース構築の方法を検討し, <https://www2.ninjal.ac.jp/jll/>に, 作文データを公開するためのページを作成した。

③国内外の共同研究体制を整備し, 次のような会議を開催した。【共同利用・共同研究】

- 共同研究国内および海外の大学の共同研究員との一層の連携を図るため, 全体会議を本年度3回(8月, 10月, 3月)開催した。
- 計算機によるテキスト処理の効率化のため, 工学系研究者である共同研究員の会議を本年度2回(5月, 6月)開催し, 今後のデータ処理について検討を行った。

④研究成果として, 次のような発信を行った。【共同利用・共同研究】

- 講演・発表: 所内イベントにおける発表を2件(オープンハウス2022, NINJALシンポジウム), 国内学会における発表を1件(日本語教育学会秋季大会), 国際学会における招待講演・招待発表を2件(第四回東アジア日本学研究国際シンポジウム, 台湾日本語文学会国際学術シンポジウム), 海外の講演会における招待講演を1回(北京外国語大学日本語学院・北京日本学研究センター主催「日本語学・日本語教育シリーズ講座」日本語教育部門第1回講演会), それぞれ行った。
- 論文: 学術雑誌に2件, 論文を掲載した(『国際学報』, 『東アジア日本学研究』)。

⑤若手支援として, 次のような活動を行った。【大学院教育・若手研究者育成】

- 一橋大学との連携大学院の演習において, 本サブプロジェクトで取集中のデータを活用した授業を行った。
- 4名のプロジェクト非常勤研究員を雇用した。
- 9名(一橋大学4名, お茶の水女子大学2名, 明治大学1名, 筑波大学1名, 東京工業大学1名)の大学院学生が共同研究に参画した。

⑥産業界との連携として, 次のような活用を行った。【地域・社会との連携】

- (株)富士通の富士通研究所と協力し, AIによる作文の自動評価システム開発のための会議の場を設け(10月に1回, 11月に1回, 12月に1回, 1月に2回, 2月に1回, 3月に1回, 計7回), 検討を行った。

⑦グローバル化のため, 次のような活用を行った。【グローバル化】

- 共同研究を行っている海外の大学に所属する研究者, 中国16名, 台湾4名, 韓国6名, ベトナム4名, タイ2名, スロヴェニア1名, フランス1名, 計34名を共同研究員に加え, 現地調査を推進した。
- 連携して調査を進める海外の大学の教員2名(天津外国語大学, 福建師範大学)を外来研究員として招聘した。

(3) 日本語学習者の談話の縦断コーパス研究

①海外の15大学と共同調査を実施した。【共同利用・共同研究】

- 西安外国語大学(中国)の学習者28名, ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学(ベトナム)の学

習者 22 名, チュラーロンコーン大学 (タイ) の学習者 20 名, 合計 70 名を対象に, 年に 2 回の I-JAS 準拠の談話・作文調査を行い, 約 105 時間分の談話データ, および 140 本の作文データを収集した。

②談話データベースを公開した。【共同利用・共同研究】

◦収集がすでに終わっている中国の北京師範大学の学習者 17 名分, 約 136 時間の談話データベースの構築を行い, <https://www2.ninjal.ac.jp/jl1/>に公開した。

③他のサブプロジェクトとの連携を強化した。【共同利用・共同研究】

◦「日本語学習者の談話の縦断コーパス研究」と連携し, 共同で開発した文字入力ツール (EssayLoggerTS) およびシステム (Moodle) を用いて作文のデータ収集を進めた。

④研究成果として, 次のような発信を行った。【共同利用・共同研究】

◦講演・発表: 所内イベントにおける発表を 2 件 (オープンハウス 2022, NINJAL シンポジウム) 学会における招待講演・招待発表を 2 件 (第四回東アジア日本学研究国際シンポジウム, 台湾日本語文学会国際学術シンポジウム), それぞれ行った。

◦講習会: NINJAL チュートリアルを主催し, 大学院学生等を対象にした学習者コーパスの講習会を行った (2023 年 3 月 14 日, オンライン, 参加者 31 名)。

◦論文: 学術雑誌に 1 件, 論文を掲載した (『東アジア日本学研究』)。

⑤若手支援として, 次のような活動を行った。【大学院教育・若手研究者育成】

◦一橋大学との連携大学院の演習において, 本サブプロジェクトで収集中のデータを活用した授業を行った。

◦4 名のプロジェクト非常勤研究員を雇用した。

◦2 名 (一橋大学 1 名, 東京外国語大学 1 名) の大学院学生が共同研究に参画した。

⑥グローバル化のため, 次のような活用を行った。【グローバル化】

◦現地調査を行う西安外国語大学 (中国) 2 名, ハノイ国家大学外国語大学 (ベトナム) 2 名, チュラーロンコーン大学 (タイ) 2 名, および現地調査を共同で行った北京師範大学 2 名 (中国), 北京外国語大学 4 名 (中国) の教員, 計 12 名を共同研究員に加え, 共同研究を推進した。

(4) 日本語学習者の作文教育支援研究

①プロジェクト関連の情報収集を行った。【共同利用・共同研究】

◦システム開発, システムを用いた実践論文, 既存の作文コーパスについて文献調査を行った。

◦グループ活動を取り入れた教育実践を中心に文献調査を行った。また, 大学などで関連する実践を行っている 9 名の共同研究員にインタビューを行った。

②システムの設計・構築・共有を行った。【共同利用・共同研究】

◦システム全体, 作文・添削 (アノテーション) 支援部分, 利用者管理部分 (アカウント, グループ管理など) の設計を行った。

◦作文・添削部分, 利用者管理部分を含むプロトタイプシステムを Web アプリケーションとして実装した。また, Web アプリケーション配布・作文データベース用のサーバを用意した。

③他のサブプロジェクトとの連携を強化した。【共同利用・共同研究】

◦「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」との連携において, 文献調査に関連して収集した作文コーパス (2 種類) を教育・研究利用するための試行として, 全文検索システム『ひまわり』に取り込み, 講習会の教材として配布した。また, 取り込む方法は Web 上に公開した。

④研究成果として, 次のような発信を行った。【共同利用・共同研究】

◦発表: オープンハウス 2022, および NINJAL シンポジウムで本プロジェクトの紹介を行った。また, 支援システムの設計について, 口頭発表を 1 件 (日本教育工学会) 行った。

◦講習会: 既存の作文データ (2 種類) を利用するための講習会を 1 回開催した (2023 年 2 月 27 日, 国語研で開催, 参加者 11 名)。

⑤若手支援として, 次のような活動を行った。【大学院教育・若手研究者育成】

◦1 名のプロジェクト非常勤研究員を雇用した。

- ⑥研究成果の社会への還元に向けて、次のようなシステム公開に着手した。
 - 共同研究員向けにプロトタイプシステムを Web 上に限定公開した。
- ⑦グローバル化のため、次のような活用を行った。【グローバル化】
 - プロトタイプของผู้ใช้界面を、多言語表示できるよう実装した。
- (5) 定住外国人の談話の縦断研究
 - ①縦断調査を実施した。【共同利用・共同研究】
 - 生活者として地域に定住した外国人の日本語会話に関して、OPI を活用した縦断調査を実施した。
 - フォローアップ調査を行うと共に、次年度の研究協力者との交渉・確認を行った。
 - 生活者としての地域に定住した学習者に対して、リテラシーに関するパイロット調査を、1948 年の識字調査を活用して岡山県岡山市と香川県三豊市で実施した。
 - ②公開に向けたデータの更新、整備を行った。【共同利用・共同研究】
 - ③国内外の共同研究体制を整備した。【共同利用・共同研究】
 - 共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」との連携・協力を実施・展開した。
 - 社会言語学、会話分析、教育人類学等を専門とする研究者との共同研究を進めた。
 - ④研究成果として、次のような発信を行った。【共同利用・共同研究】
 - 発表：オープンハウス 2022, および NINJAL シンポジウムで本プロジェクトの紹介を行った。
 - 論文：学術雑誌に 1 件、論文を掲載した（『基礎教育保障学研究』）。
 - 共編著：野山広・福島育子・帆足哲也・山田泉・横山文夫編(2022)『地域での日本語活動を考える—多文化社会 葛飾からの発信』ココ出版を刊行した。
 - ⑤若手支援として、次のような活動を行った。【大学院教育・若手研究者育成】
 - 1 名のプロジェクト非常勤研究員を雇用した。
 - ⑥地域・社会との連携として、次のような活用を行った。【地域・社会との連携】
 - 縦断調査やリテラシーに関するパイロット調査を通して、地域・社会との連携強化に貢献した。
 - 自主夜間中学全国大会にて、リテラシーに関するパイロット調査結果の暫定版報告・発表を行った。
- (6) 定住外国人のよみかき研究
 - ①本調査の準備を行った。【共同利用・共同研究】
 - 8 名の方を対象に、生活者としての定住外国人による字をよみかきする社会的実践についての予備的な調査を実施した。
 - 国際交流協会 3 団体、自治体 1 地域、研究協力者 3 名に対し、次年度の本調査を実施するフィールドおよび研究協力者と交渉を行った。
 - ②国内外の共同研究体制を整備し、本調査の検討に着手した。【共同利用・共同研究】
 - 公開するデータの様式と規模等について研究会議を 9 回（オンライン 7 回、対面 2 回）開き、検討した。調査協力者の個人情報の取り扱いや配布文書の言語（英語版、ローマ字版、ひらがな版）について検討を進めた。
 - 他プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」と連携し、地域に在住する外国人の言語問題の最先端にいる自治体の外国人相談員との懇談会を実施した。
 - 社会学や移民研究を専門とする研究者との協業を進め、本プロジェクトを多角的に推進するために共同研究員 2 名が参加した。
 - ③研究成果として、次のような発信を行った。【共同利用・共同研究】
 - 共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」の共催で、生活者としての定住外国人による字をよみかきする社会的実践をめぐるシンポジウムを早稲田大学で開催した。
 - オープンハウス 2022, NINJAL サロンおよび NINJAL シンポジウムで本プロジェクトに関連する発表を行った。
 - ④若手支援として、次のような活動を行った。【大学院教育・若手研究者育成】

- 一橋大学連携大学院の講義において、本プロジェクトの問題意識や方法論等について話題にした。
- 1名のプロジェクト非常勤研究員を雇用した。
- 若手研究者3名(博士課程後期在籍者)および1名(修士号取得者)がプロジェクトに参加した。
- 本プロジェクトのサイト <https://www2.ninjal.ac.jp/jll/>において、若手研究者による英語論文の文献レビュー論文3本を公開した。
- 若手研究者(博士課程後期在籍者)2名の研究費・旅費を支援した。

⑤地域・社会との連携として、次のような活用を行った。【大学院教育・若手研究者育成】

- 1地域の国際交流協会を訪問し、連携の依頼を行った。そのうち、1地域の国際交流協会の職員1名は共同研究員としてプロジェクトに参加した。

・共同研究員数：114名

・共同研究員所属機関：

筑波大学, 埼玉大学, 東京外国語大学, お茶の水女子大学, 一橋大学, 大阪大学, 東京工業大学, 豊橋技術科学大学, 富山大学, 岡山大学, 北海道大学, 茨城大学, 千葉大学, 東京都立大学, 静岡県立大学, 東京福祉大学, 城西大学, 中央学院大学, 日本大学, 日本女子大学, 明治大学, 明星大学, 甲南大学, 名古屋女子大学, 南山大学, 関西学院大学, 京都外国語大学, 法政大学, 駿河台大学, 早稲田大学, ハルビン師範大学, ドンア大学, 深圳大学, タマサート大学, フェ大学, 韓国外語大学校, 仁川大学校, 国立政治大学, 東呉大学, 長春師範大学, 天津外国語大学, 東北師範大学, 華南農業大学, 福建師範大学, 北京語言大学, 華中科技大学, 重慶三峡学院, 中山大学, 東華大学, フランス国立東洋言語文化学院 (INALCO), 上海対外経貿大学, ベトナム国家大学ハノイ校, チュラーロンコン大学, 北京外国語大学, 北京師範大学, 西安外国語大学, 山野日本語学校, ウズベキスタン日本センター, 独立行政法人国際交流基金, 公益財団法人茨城県国際交流協会, 富士通株式会社(富士通研究所), アクラス日本語教育研究所

・開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張

・プロジェクトリーダー：小木曾智信(研究系・教授)

・研究期間：2022.4–2028.3.

《研究目的および特色》

第3期までの構築分では不足する日本語史研究資料の増補を、本プロジェクト主体による整備だけでなく、開かれた共同構築環境のもとで全国の(世界中の)研究者と連携して行う。そのために、国語研の『日本語歴史コーパス』と親和性の高い標準データ形式を共同で策定し、この形式でデータを作成するための補助ツールを開発、チュートリアルを開催して普及を図る。そのうえで、標準データ形式のデータを国語研で受け入れてコーパス検索アプリケーション「中納言」を通して公開、共同利用に供する。さらに、「昭和・平成書き言葉コーパス」科研(代表者：小木曾)と連携することで上代語から現代語まで接続した真の通時コーパスとして成立させる。

なお、『日本語歴史コーパス』の増補に際しては、フィージビリティスタディを継続して機械翻訳による現代語訳付与を模索する。

《2022年度の主要な成果》

1. 調査研究活動・研究成果の公開

第3期の「通時コーパス」プロジェクトを引き継ぎ、新たに開かれた共同構築環境を整備して通時コーパスを活用しようとする本プロジェクトの共同利用・共同研究に関する成果は大きく3つに分けられる。

一つ目は『日本語歴史コーパス』の増補である。第3期までに構築された『日本語歴史コーパス』では不足する資料について、引き続き整備を行い、今年度は下記のサブコーパスを追加公開・更新した。

- ・『日本語歴史コーパス』平安時代編I 仮名文学 ver.1.2 (10月31日)
- ・『日本語歴史コーパス』和歌集編 ver.1.1 (10月31日)
- ・『日本語歴史コーパス』明治・大正編VI 落語 SP 盤 ver.1.0 (10月31日)
- ・『日本語歴史コーパス』平安時代編I 仮名文学 ver.1.3 (3月29日)
- ・『日本語歴史コーパス』江戸時代編IV 随筆・紀行 ver.0.8 (3月29日)
- ・『日本語歴史コーパス』明治・大正編II 教科書 ver.1.1 (3月29日)

- ・『日本語歴史コーパス』明治・大正編 V 新聞 ver.0.8 (3月29日)

『日本語歴史コーパス』「中納言」の1年間の検索クエリ数は504878件となり、前年度を10%以上上回った。

このほか、関連する科研費研究課題(19H00531)と共同で構築してきた『昭和・平成書き言葉コーパス』の試験公開版(1933~2013年, 8年おき各年約300万語の雑誌・ベストセラー書籍)を「中納言」上で公開した。

- ・『昭和・平成書き言葉コーパス』(試験公開版)(3月24日)

二つ目は通時コーパスを活用した日本語史研究の推進である。今年度の大きな成果として、第3期の成果を引き継いで書籍『コーパスによる日本語史研究』「中古・中世編」を同「近代編」につづいて刊行したことが挙げられる。

- ・青木博史・岡崎友子・小木曾智信編『コーパスによる日本語史研究 中古・中世編』ひつじ書房(3月24日)

また、共同研究員による研究成果として、論文10本、ブックチャプター16本、解説論文2本、学会等における19本の口頭発表を公刊した。なかでも、自然言語処理の研究者と共同で、自然言語処理技術を活用した言語変化研究、古文の現代語訳研究を行って異分野融合研究で成果を上げた(論文5, 解説論文1)。うち1件は自然言語処理のトップカンファレンスの一つであるEMNLPでの研究発表である。プロジェクト主催の研究成果発表のイベントとしては「通時コーパス」シンポジウム2023を開催し、11件の研究発表を行った(3月10日)。

なお、共同研究員以外によるものも含め2022年度の『日本語歴史コーパス』を活用した研究論文(全国学会予稿集を含む)の数は70件が確認できた(2023年3月時点での調査)。

三つ目は開かれた共同構築環境の整備であるが、今年度は科研費(20K20411)で開発したコーパスの形態論情報修正システム「みんなごん」を活用してコーパスユーザーから修正情報を集めることによって『日本語歴史コーパス』の修正を実施することができた(日本語学会ワークショップ「みんなで直す『日本語歴史コーパス』—中納言+みんなごん—」10月29日で紹介)。上述した「平安時代編I 仮名文学 ver.1.3」の更新はこれにもとづくものである。

このほか、OpenCHJのXML形式について検討し、「Web茶まめ」の機能拡張について設計を行った(試作は2023年度予定)。

2. 教育・人材育成

- ・『日本語歴史コーパス』「中納言」オンライン講習会を「初級編」(8月23日)、「Excel中級編」(8月26日)の2回行った。
- ・プロジェクトに共同研究員として大学院学生2名、学術振興会特別研究員(PD)1名を参加させ『日本語歴史コーパス』を活用した研究の指導を行った。

3. 社会連携・社会貢献

- ・小学館との協定の下で『日本語歴史コーパス』の更新を行い、JapanKnowledge本文へのリンクを継続した。
- ・言語学レクチャーシリーズ「Vol.19 コーパスを使って日本語の歴史を探る」をYouTubeで一般公開した。
- ・日本語の歴史に関する解説・監修をNHKのテレビ番組3件で行った。

4. 国際連携・国際発信

- ・オックスフォード大学と連携して「オックスフォードNINJAL上代日本語コーパス」のアップデートを行った。
- ・『日本語歴史コーパス』の増補分について英語版ページを作成・更新した。

・共同研究員数: 36名

・共同研究員所属機関:

東北大学, 茨城大学, 筑波大学, 群馬大学, 東京大学, 東京農工大学, 信州大学, 大阪大学, 高知大学, 九州大学, 東京都立大学, 京都府立大学, 和洋女子大学, 青山学院大学, 日本女子大学, 明治大学, 名古屋女子大学, 関西学院大学, 青山学院大学, 啓明大学校, オックスフォード大学, 大葉大学, 国立研究開発法人産業技術総合研究所

(2) 【異分野融合型共同研究】 3件

異分野融合研究を推進するために第4期に新たに開始した外部研究者をリーダーとする公募型の異分野融合型共同研究3件を採択し、国立国語研究所教員3名がコーディネーターとなり連携して研究を進めた。

・歴史的音源アーカイブに向けたオープンコーパスの整備とAI音声復元技術の開発

・プロジェクトリーダー：高道慎之介（東京大学大学院情報理工学系研究科・助教）

・研究期間：2022.10-2023.3.

《研究目的および特色》

本研究の目的は、歴史的音源を現代音質に蘇らせ解析するための、オープン音声コーパスと、深層学習に基づく音声自動復元技術の開発・公開である。音声言語に関する歴史的音源（当時の日本語話し言葉の音声など）の多くは、デジタル化されないまま経年劣化が進み、仮にデジタル化したとしても音響的な歪みや欠落を多く含む。本研究課題では、オープンリール等に保存された東北地方（宮城県、岩手県の一部。以下同じ）方言を最初の例として、日本語解析に資する音声コーパスと、音声復元のための深層学習技術を開発する。前者は、歴史的音源を多数貯蔵する仙台文学館と連携し、後者は、少データからの音声復元を可能にする自己教師あり転移学習を提案する。期間終了後には、コーパスと復元技術を研究目的に限り誰でも無償で利用できる形式で公開し、歴史的音源の高品質アーカイブと解析の促進を狙う。

上記の目的の下、本年度は(1)オープンコーパスプロトタイプ of 整備および公開、(2)自動音声復元プロトタイプ of 整備及び公開、(3)自動音声認識・音声合成プロトタイプ of 整備を行った。

(1)については、オープンリールテープに保存されていた東北地方民話（昔話）をデジタル化し、アノテーションを付与した。本年度終了時点で約150時間のデジタル化を完了した。そのうち数時間については、書き起こしとメタ情報付与（話者の性別、物語タイトル、話者の出身地）の付与を実施して、オープンコーパスとした（https://sites.google.com/site/shinnosuketakamichi/research-topics/tohoku-dialect_corpus?authuser=0）。

(2)については、https://github.com/Takaaki-Saeki/ssl_speech_restorationにて整備した自動復元を(1)で構築したオープンコーパスに適用した。その結果、音質に関する5段階平均評価値が2.779（復元前）から2.934に上昇し、有意な改善が見られた。

(3)については、<https://github.com/sarulab-speech/whisper-asr-finetune>に自動音声認識の学習・推論プログラムを整備した。その結果、ひらがなの文字誤り率で31.7%を達成した。

・共同研究員数：4名

・共同研究員所属機関：

東京大学、公益財団法人仙台市市民文化事業団

・テキスト読み上げのための読みの曖昧性の分類と読み推定タスクのデータセットの構築

・プロジェクトリーダー：新納浩幸（茨城大学大学院理工学研究科情報科学領域・教授）

・研究期間：2022.10-2023.3.

《研究目的および特色》

本研究はテキスト読み上げのための読みの曖昧性の分類と読み推定タスクのデータセットの構築を目的としている。本年度は初年度（2022年10月から2023年2月の約半年）であり、メンバー間でプロジェクト内容や目的を共有することを目的に2回の会合を行った。1回目の会合（10月7日）はオンラインで行い、やるべきことを大きく3つに分け各分担を決めた。概略、読みの曖昧性の分類（古宮が主担当）、データセット構築（白井が主担当）、システム開発（新納が主担当）の3つのサブテーマを設定し、各主担当を中心に並列に進めることとなった。2回目の会合（12月5日、金沢）は対面で行い、各担当者からの現状の報告と問題点などを議論した。

「読みの曖昧性の分類」については利用する辞書について意見交換した。UnidicやNeologdの辞書を利用する方向にすることにした。「データセット構築」についてはBCCWJから読みが曖昧な単語を取り出し、その統計情報の調査結果が示された。読み推定タスクとしてどのような単語を対象単語に設定

するか問題である。「読みの曖昧性の分類」の結果を見ながら設定することになった。「システム開発」としてはベースとなるシステム（以下の論文で構築したシステム）が既に存在する。ただしこのシステムは学習がバッチ処理でない点と読みが曖昧でない単語に対しては読みを付与しない点が問題点としてある。この2点を改良したシステムが報告された。

- ・小林汰一郎, 古宮嘉那子, 新納浩幸「疑似訓練データを用いたBERTによる同形異音語の読み推定」, 第253回NL研, NL-253-3 (2022.9).

これまでの研究成果として, 本プロジェクトの内容・目的及び進め方をNLP-2023の併設ワークショップであるJLR-2023にて研究発表した。

- ・共同研究員数: 5名
- ・共同研究員所属機関:
茨城大学, 東京農工大学, 北陸先端科学技術大学院大学

・国内の観光エフェメラ資料の包括的アーカイブに向けた基盤構築および実証研究

- ・プロジェクトリーダー: 香月歩 (東京工業大学環境・社会理工学院・助教)
- ・研究期間: 2022.10–2023.3.

《研究目的および特色》

本研究は, 国内で発行される観光に関するパンフレット, チラシ, ポスターなどの印刷物 (以下, 観光エフェメラ資料) の包括的なアーカイブ化を目的とするものである。本年度は, 観光エフェメラ資料のデータベース化のためのメタデータモデルの検討および観光エフェメラ資料を収集する機関への調査を行い, 次年度でのデータベース作成において必要な作業の把握および準備を行った。

①観光エフェメラ資料データベース化のためのメタデータモデルの検討

観光エフェメラ資料のデータベース化のためのメタデータモデルの検討に際しては, 標準的な書誌データのためのメタデータモデルとして, IFLA (国際図書館連盟) が刊行するFRBR (書誌レコードの機能要件) と, これに対応した「日本目録規則2018年版」, 更にFRBRとその補遺であるFRAD (典拠データの機能要件) とFRSAD (主題典拠データの機能要件) を統合したIFLA LRM (IFLA 図書館参照モデル) を主な参考資料として調査した。さらに, 特定資料のメタデータモデルとして「ミュージアム資料情報構造化モデル」(東京国立博物館, 2005) と「メディア芸術データベースメタデータスキーマ」(文化庁, 2021) を調査し, その内容を整理した。特に, IFLA LRM はメタデータを設計する際に基礎となる概念モデルとして定義されたものであり, 「著作, 表現形, 体現形, 個別資料」の4実体を中核に据えると同時に, 「発見, 識別, 選択, 入手, 探索」の5つのユーザタスクを定義していることから, 理論的・実用的に観光エフェメラ資料のメタデータモデルの基礎となりうるものと考えられる。

②観光エフェメラ資料収集の事例調査

国内で観光パンフレットを収集している佐賀市立図書館および田原市図書館に対し, 収集および運用に関するヒアリングを行った。いずれの図書館も観光パンフレットは閲覧用資料として運用しメタデータの作成やアーカイブ化は行っておらず, また田原市図書館では主に来館者の持ち込みによって収集がなされているということであった。一方で佐賀市立図書館では全国の市町村自治体からの観光パンフレットの悉皆的収集を行っており, 現地にて見学および担当者へのヒアリングを行い, 全国の自治体からの定期的な収集方法, 閲覧用資料の管理方法などを確認した。佐賀市立図書館での運用方法は今回のデータベース作成においても参考になるものと考えられる。

- ・共同研究員数: 5名
- ・共同研究員所属機関:
東京工業大学, 椋山女学園大学

(3) 【共同利用型共同研究(A)】8件, 【共同利用型共同研究(B)】8件, 【共同利用型共同研究(C)】9件

【共同利用型共同研究(A)】

共同利用型共同研究(A)は, 大学等に所属する研究者が, 国立国語研究所が保有する研究資料・言語資源・分析装置等を利用して研究を行い, 日本語学, 言語学及び日本語教育研究のさらなる発展を図ることを目的

とするもの。(資料等を利用するための旅費を支弁。)

- 国立国語研究所創設期の研究者のノートから辿る日本語研究の歴史
プロジェクトリーダー：斎藤達哉(専修大学国際コミュニケーション学部・教授)
- 方言音声と共通語音声の使い分けの変化に関する研究
プロジェクトリーダー：尾崎喜光(ノートルダム清心女子大学・教授)
- 単語分散表現と文脈依存単語埋め込み表現を利用した語義の埋め込み表現の構築
プロジェクトリーダー：新納浩幸(茨城大学工学部情報工学科・教授)
- 訓点資料構造化データの検証研究
プロジェクトリーダー：田島孝治(岐阜工業高等専門学校電気情報工学科・准教授)
- 言語をめぐる社会調査史料の活用法に関する研究
プロジェクトリーダー：前田忠彦(情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設社会データ構造化センターセンター長・准教授)
- 見かけ時間と実時間を統合的に活用する言語変異・変化の研究
プロジェクトリーダー：久屋愛実(立命館大学・准教授)
- 話速の変化にともなう調音運動と音響特性の変化の観測
プロジェクトリーダー：竹本浩典(千葉工業大学先進工学部知能メディア工学科・教授)
- 北海道調査データを再活用した個人語の生涯変化の研究
プロジェクトリーダー：高野照司(北星学園大学文学部・教授)

【共同利用型共同研究(B)】

共同利用型共同研究(B)は、大学等に所属する研究者が、国立国語研究所が保有する研究資料・言語資源・分析装置等を利用して研究を行い、日本語学、言語学及び日本語教育研究のさらなる発展を図ることを目的とするもの。(研究経費の配分はなし。)

- 日本語の有声性の対立への複数の音響指標の影響
プロジェクトリーダー：李勝勳(国際基督教大学・上級准教授)
- 和歌・今様を対象とする UniDic の開発と研究
プロジェクトリーダー：相田愛子(金沢大学・特別研究員 RPD)
- 欧文脈の現代語文脈への定着過程—無生物主語を伴う「見る」の用法を例に—
プロジェクトリーダー：杉山暦(札幌大学地域共創学群日本語・日本文化専攻・講師)
- EPA 候補者による介護福祉士国家試験の読解過程の解明—なぜ読み誤るのか—
プロジェクトリーダー：神村初美(東京都立大学人文科学研究科・客員研究員)
- 動詞形成の歴史的变化に関する文献資料研究
プロジェクトリーダー：黒田享(武蔵大学人文学部・教授)
- 磁気センサ(EMA)による音声—調音逆マッピングを構築する
プロジェクトリーダー：Tianfang YAN(大阪大学医学系研究科脳機能診断再建学共同研究講座・特任研究員)
- 小学校で学ぶ日本語学習者の学習に有効な教材の試作：紙教材とタブレット端末の比較
プロジェクトリーダー：市川章子(一橋大学大学院言語社会研究科・博士研究員)
- 東北・東京方言における有声性の対立への音響指標の影響
プロジェクトリーダー：鈴木成典(国際基督教大学大学院アーツ・サイエンス学科・博士後期課程)

【共同利用型共同研究(C)】

共同利用型共同研究(C)は、大学等に所属する研究者が、国立国語研究所が保有する言語資源を利用して研究を行い、日本語学、言語学及び日本語教育研究のさらなる発展を図ることを目的とするもの。(研究経費の配分はなし。)

- 指標性に着目した日本語記述
プロジェクトリーダー：野村和之(千葉大学・助教)
- 係り受け情報を用いた日本語母語話者の情報処理過程解明のための基礎的研究
プロジェクトリーダー：庵功雄(一橋大学・教授)

- BCCWJ を用いた日本語統語情報・名詞コロケーション辞書作成のための基礎的研究
プロジェクトリーダー：庵功雄（一橋大学・教授）
- BCCWJ/CSJ への生理指標アノテーション付加
プロジェクトリーダー：小泉政利（東北大学・教授）
- LF-based Collocation Translation 語彙関数を用いたコロケーションの機械翻訳
プロジェクトリーダー：西尾広介（ポンペウ・ファブラ大学）
- 統計的指標を用いた日本語テキストの数理的解明
プロジェクトリーダー：田窪洋介（高エネルギー加速器研究機構素粒子原子核研究所・研究機関講師）
- Corpus Research on Clausal Center-Embedding
プロジェクトリーダー：Emily DAVIS (Linguistics department, University of California San Diego・Graduate student)
- 介護施設で働くベトナム人実習生の「書く」「話す」能力の縦断的研究
プロジェクトリーダー：古田朋子（大阪大学日本語日本文化教育センター・非常勤講師）
- 『日本語日常会話コーパス』に対する代名詞代用・呼びかけ表現アノテーション
プロジェクトリーダー：野元裕樹（東京外国語大学・准教授）

2 人間文化研究機構基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構では、国内外の大学等研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を推進し、人間文化の新たな価値体系の創出を目指している。国立国語研究所もそれらのプロジェクト等に参画している。

(1) 広領域連携型基幹研究

人間文化研究機構を構成する6機関が協業して、国内外の大学等研究機関や地域社会と連携し、新たな人間文化研究システムを構築するとともに、異分野融合による新領域創出を目指すもの。

- 横断的・融合的な地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して
《研究目的および特色》

現代の地域社会の多くは、多発する災害や共同体内外の変貌により、危機的な状況にある。既存の伝統文化を継承しつつも、新たな担い手とそこで更新される文化を通じた社会の創発が必要とされている。本研究では、地域の知恵や歴史が凝縮された伝統文化を取り入れ、持続可能で多様性にみちた社会のあり方を、保存科学、人類学、民俗学、歴史学、生態学、言語学等の横断的な領域から検証し、社会／文化の創発に積極的に参与することを目指す。

〈国語研ユニット〉地域における市民科学文化の再発見と現在

- ・ 研究代表者：大西拓一郎（研究系・教授）
- ・ 研究期間：2022.4–2028.3.
- ・ 共同研究員数：13名
- ・ 共同研究員所属機関：

東京大学、名古屋大学、奈良大学、長野工業高等専門学校、獨協大学、神奈川大学、同志社女子大学、国立天文台、長野市立博物館、茅野市八ヶ岳総合博物館

- ・ 「地域における市民科学文化の再発見と現在」と題して、方言研究（言語地図の作成など）も含む市民による研究活動＝市民科学文化に光を当てる研究を新しく立ち上げる。市民科学は、学術コミュニティの学界と一般社会のリエゾンであるとともに、アカデミックには実現できない継続的観察・観測、広範な対象設定により、その活動実績が学術世界から注目されることが少なくない。近代以後、100年以上の歴史を持ち、学術への貢献や長期的継続・実践にもかかわらず、やや見過ごされがちな市民科学の歴史と今に光を当て、それを基盤とした地域文化の継承と創発を実現する。

・異分野融合による総合書物学の拡張的研究

《研究目的および特色》

主として江戸時代以前の書物群を対象とし、《語彙レベルや文字組成といった単位に基づく情報の断片化》→《付加価値を有するデータとしての再構築》という共通のフローを各ユニットに設定し、研究成果を現代社会や大学院授業等へ還元すると同時に、適宜 AI の技術と融合しながら、研究方法や領域そのものの拡張というメタレベルでの刷新をも狙いとしている。失敗例もプロセスをオープン化することにより、将来のブレイクスルーを呼び込む、いわば人文学の知の実験場である。

〈国語研ユニット〉古辞書類に基づく語彙資源の拡張と語彙・表記の史の変遷

・研究代表者：高田智和（研究系・教授）

・研究期間：2022.4–2028.3.

・共同研究員数：15 名

・共同研究員所属機関：

北海道大学，東京大学，筑波大学，京都大学，三重大学，岐阜工業高等専門学校，北海学園大学，関西大学，和洋女子大学，壇国大学校

・古辞書類ならびに他二つのユニットにおいて扱う書籍群を中心に，表記情報や形態論情報を加えながら，語彙資源の拡張を行う。これまでに開発された語彙資源には，現代日本語の語彙調査に基づく分類語彙表や，各種コーパスに基づく形態素解析辞書 *Unidic* が知られているが，語彙調査やコーパスに出現しない語彙は収録対象とならず，特に，日本語語彙において重要な位置を占める歴史的な「漢語」の収集が手薄となることが問題であった。そこで，中世や近世の古辞書・語彙集，訓点資料，漢字音資料などの漢字資料に基づく漢語収集によって，従来の語彙調査やコーパスを補完し，語彙・表記・文字の史的研究を展開する。

(2) 共創先導プロジェクト共創促進研究

・コミュニケーション共生科学の創成

《研究目的および特色》

あらゆる特性をもつ人が同等に参加できる「コミュニケーション共生」のための新しい研究分野を確立することを目標とする。「コミュニケーション弱者」「障害者」と呼ばれる人たちが，他の人々と同等に社会活動に参加できるようになるためには，現状のメカニズムを解明し，それぞれのニーズの違いとバランスをとるための基礎研究を進める必要がある。このような研究を進め，それをインフラ整備というハード面と一般社会の認識というソフト面の変化につなげていく。

・実施機関：国立国語研究所，国立民族学博物館

・国語研代表者：小磯花絵（研究系・教授）

・研究期間：2022.4–2028.3.

・共同研究員数：11 名

・共同研究員所属機関：

慶應義塾大学，人間文化研究機構本部，国立民族学博物館

・障害者や高齢者，外国人を取り巻くコミュニケーション問題を主として取り上げ，これまで蓄積してきたコーパスや調査データなどの言語資源を，脳科学など関連他分野の研究者や地域社会などとの連携体制のもとで拡充して研究を推進する。

・学術知デジタルライブラリの構築

《研究目的および特色》

日本国内の研究者・研究機関が現地調査を通して蓄積してきた写真・動画・音声資料等の資料を保存し有効に利用するため，人文機構の国立民族学博物館・国立国語研究所と国立情報学研究所が共同して，デジタル技術を活用しながら資料のアクセス性を高めていく。さまざまな分野における過去の現地調査成果を現代において見直す作業を通して，学術の進展を加速させる。

- ・実施機関：国立国語研究所，国立民族学博物館
- ・国語研代表者：高田智和（研究系・教授）
- ・研究期間：2022.4–2028.3.
- ・共同研究員数：12名
- ・共同研究員所属機関：
 - 東京大学，公立はこだて未来大学，情報・システム研究機構（機構本部施設等），国立情報学研究所
- ・国立民族学博物館・国立情報学研究所と連携して音声・映像による言語の記録を言語資料として蓄積するシステムの開発に取り組むとともに，関連分野の研究者との協同により，音声・映像による言語の記録に対するドキュメンテーション手法の精緻化，デジタル化手法の高度化をはかり，音声・動画資料の整備・公開を促進する。

・日本関連在外資料調査研究「ハワイにおける日系社会資料に関する資料調査と社会調査の融合的研究」
《研究目的および特色》

海外に点在する日本関連資料の中でも，19世紀以降のハワイで生み出された資料はその数も種類も多いが，現地のスタッフに日本語を理解できる者が減少しているために，資料廃棄の危険が高くなっている。本プロジェクトでは，現地の言語史，社会史，生活史を基点とした研究を推進するとともに，資料の所蔵調査と関係者への聞き取り，および現地社会の人達との協働により，資料管理の現状と将来の見通しを得ることを目指す。

- ・実施機関：国立国語研究所
- ・国語研代表者：朝日祥之（研究系・教授）
- ・研究期間：2022.4–2028.3.
- ・共同研究員数：20名
- ・共同研究員所属機関：
 - 京都大学，大阪大学，東京都立大学，日本大学，名古屋外国語大学，関西学院大学，大阪工業大学，早稲田大学，オーストリア科学アカデミー，ハワイ大学，国立国会図書館，海外移住資料館
- ・本プロジェクトは，次の四つの班を設ける。
 1. 資料班：資料調査を担い，その成果をとりまとめる。
 2. 地域研究班：資料を支える地域社会の状況を調査し，資料状況とともにまとめる。
 3. 言語研究班：言語学に即した資料の分析を行い，研究成果をまとめる。
 4. 歴史研究班：ハワイへの移民史の再検討・調査を行い，研究成果をまとめる。

以上の4班のうち，プロジェクトの核になるのは「1. 資料班」と「2. 地域研究班」である。そして，「3. 言語研究班」「4. 歴史研究班」は，資料調査のなかで発掘した資料の評価に資する研究を行う。

(3) 共創先導プロジェクト（共創促進事業「知の循環促進事業」）

・開かれた人間文化研究を目指した社会共創コミュニケーションの構築「市民科学文化の共創と発信」
《研究目的および特色》

人文機構の各機関が所有する資料・データ等を，デジタル技術を用いて整備し，博物館や様々な展示を活用して可視化するとともに，研究のプロセスや成果を多様な方法や多様な場で共有・公開することにより，本機構と大学等研究機関と社会との間に「知の循環」を生み出し，国内外の様々な人々との共創による開かれた人間文化研究推進モデルの構築を目指す。また，視覚的あるいは聴覚的困難等のコミュニケーション課題を解決するための共同研究を実施し，その成果に基づき，多様性を踏まえた展示手法を開発する。

- ・国語研代表者：大西拓一郎（研究系・教授），中川奈津子（研究系・准教授）
- ・研究期間：2022.4–2028.3.
- ・共同研究員数：14名
- ・共同研究員所属機関：
 - 東京大学，名古屋大学，奈良大学，長野工業高等専門学校，獨協大学，神奈川大学，同志社女子大学，国立

天文台, 長野市立博物館, 茅野市八ヶ岳総合博物館

- ・広領域連携型基幹研究プロジェクト(「横断的・融合的地域文化研究の領域展開: 新たな社会の創発を目指して」)において展示を行うとともに, 地域の言語文化の再発見と振興のために危機言語・方言等のデジタルコンテンツのオンライン展示を実施し, 市民科学の社会との共創を推進する。2022年度は茅野市八ヶ岳総合博物館・長野市立博物館における展示を開催した。

3 外部資金による研究

科学研究費助成事業(科研費)

研究種目	研究代表者	研究課題名	直接経費 交付額 (千円)
国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化(B))	迫田久美子	日本語学習者コーパスによる教育と研究のグローバルネットワークの構築	3,200
新学術領域研究 (研究領域提案型)	中川奈津子	日琉語族の語順の変異とその相関変数の解明	900
新学術領域研究 (研究領域提案型)	Celik Kenan	南琉球諸語を対象とした言語変化モデルの構築と系統樹への応用	1,800
基盤研究(A)	窪菌晴夫	消滅危機方言のプロソディーに関する実証的・理論的研究と音声データベースの構築	7,400
基盤研究(A)	小木曾智信	昭和・平成書き言葉コーパスによる近現代日本語の実証的研究	7,300
基盤研究(A)	木部暢子	日本語諸方言コーパスによる方言音調の比較類型論的研究	8,300
基盤研究(A)	石黒圭	海外縦断作文コーパスの構築に基づく文章産出能力の発達過程の実証的研究	5,600
基盤研究(B)	松本曜	空間移動と状態変化の表現の並行性に関する統一的通言語的研究	2,600
基盤研究(B)	小磯花絵	多様な場面の日常会話データに基づく子どものコミュニケーション行動の解明	4,000
基盤研究(B)	前川喜久雄	リアルタイムMRI動画による日本語調音運動データベースの構築と公開	3,500
基盤研究(B)	山田真寛	琉球沖永良部語を中心とした地域言語コミュニティ参加型の消滅危機言語復興研究	3,200
基盤研究(B)	田窪行則	時空間マッピングの認知的基盤に関する理論的・実験的研究	4,000
基盤研究(B)	浅原正幸	日本語コーパスに対する単語心象性情報付与とその利用	3,600
基盤研究(B)	Prashant Pardeshi	学習者のニーズを反映した大規模な動詞用法データベースとオンライン教材の開発と公開	1,400
基盤研究(B) (特設分野研究)	小磯花絵	地域社会の共在的記録に基づくコミュニケーションと記憶の活性化(延長)	2,830
基盤研究(C)	田中弥生	修辞機能と脱文脈化の観点からの日常談話テキスト分析(延長)	1,550
基盤研究(C)	山崎誠	シソーラスの整備・拡張のための分類基準の作成と活用(延長)	2,250
基盤研究(C)	朝日祥之	北海道北見市常呂町岐阜方言の方言敬語に関する調査研究	759
基盤研究(C)	樋水兼貴	首都圏における言語資料の高密度収集と言語動態分析(延長)	532
基盤研究(C)	大島一	複数性の本質を求めて: 統一的な枠組みで捉えた日本語諸方言における「ら」の意味用法	900
基盤研究(C)	籠宮隆之	韻律ラベルを付与した補聴システム装用者の発話データベースの構築	700

基盤研究 (C)	福永由佳	言語レパートリーの構造と形成に関する研究	400
基盤研究 (C)	松崎安子	中古・中世のコロケーションに関する研究—生活語を中心として—	700
基盤研究 (C)	柏野和佳子	コーパス分析による書き言葉的「硬・軟」度と話し言葉的「硬・軟」度の語への付与	800
基盤研究 (C)	山口昌也	多段階の振り返りに対応した協同型教育活動支援システムに関する研究	1,100
基盤研究 (C)	五十嵐陽介	日琉祖語の再建を目的とした同源性タグ・意味タグ付き語彙データベースの構築	900
基盤研究 (C)	窪田悠介	ハイブリッド CG パーザの開発	1,000
基盤研究 (C)	横山詔一	難解な感染症関連用語の言い換えや説明の案出と理解促進効果の検証	1,400
基盤研究 (C)	飛田良文	明治・大正・昭和の文学作品における外来語の分析	1,000
基盤研究 (C)	宮川創	エジプト 語歴史音韻論におけるコプト語の母音組織の研究	1,000
基盤研究 (C)	烏日哲	アカデミック・スキル育成を目指したオンライン縦断ゼミ談話の多角的分析	1,200
挑戦的研究 (開拓)	小木曾智信	日本語コーパスに対する情報付与を核としたオープンサイエンス推進環境の構築 (延長)	1,600
挑戦的研究 (開拓)	大西拓一郎	古辞書・古典籍データへの地理情報付与による人文学の横断的展開	4,000
挑戦的研究 (萌芽)	高田智和	時代差・地域差・分野差を集積した漢字字形情報通覧基盤の構築研究	1,600
挑戦的研究 (萌芽)	石黒圭	スマホ画面録画機能を用いた日本語学習者の語彙検索行動の解明	2,500
挑戦的研究 (萌芽)	中川奈津子	フィールドデータのアーカイブに向けた問題点の整理と解決策	1,500
挑戦的研究 (萌芽)	浅原正幸	文脈化単語埋め込みによる 1 億語規模の比喩表現実態調査	1,000
若手研究	鈴木彩香	属性叙述を含めた包括的なテンス・アスペクト体系の解明	500
若手研究	Celik Kenan	南琉球宮古語の語彙体系の多様性を探る：通方言的な音声付の語彙データベースの構築	800
若手研究	宮崎早季	ハワイ日系人の戦時抑留体験をめぐる記憶のポリティクス (延長)	1,786
若手研究	片山久留美	コーパスを用いた近世読本のルビと漢字表記の研究	500
若手研究	八木下孝雄	明治期英語教科書の翻訳本データベース化による欧文の直訳的な表現の研究	400
若手研究	大村舞	日常対話コーパスにおける述語項構造アノテーションの作成と分析	600
若手研究	井戸美里	日本語とりたて詞の複合における否定呼応現象の統語と意味	0
若手研究	佐藤久美子	日本語諸方言におけるイントネーションの対照研究	0
若手研究	白田泰如	日常会話コーパスを用いた「課題」に基づく会話の分析：定量・定性の両面から	400
若手研究	岩崎拓也	定住外国人を対象にした見やすくわかりやすい表記方法の解明	800
若手研究	松平けあき	日本滞在経験を持つ日系二世の「アメリカ従軍」の意味—ライフストーリーを中心に (延長)	2,064
若手研究	居關友里子	幼児のコミュニケーションにおける相互交渉の多様性に関する実証的研究	1,800
若手研究	川端良子	多様な談話状況における照応規則の解明	800
若手研究	黄海萍	消滅危機言語としてのチワン語諸方言の記述的研究	700
研究活動スタート支援	越智綾子	感情と態度を表す日本語語彙文法の研究：言語使用域の多様性を通じて (再延長)	0
研究活動スタート支援	宮川創	古ヌビア語の母音組織と母音字重複の音価の研究 (延長)	0
研究成果公開促進費 (学術図書)	岩崎拓也	現代日本語における句読点の研究：研究概観と使用傾向の定量的分析	700
研究成果公開促進費 (学術図書)	井戸美里	現代日本語における否定的評価を表すとりたて詞の研究	700

研究成果公開促進費 (データベース)	井上文子	日本の危機言語・方言データベース	2,700
特別研究員奨励費	甲賀真広	日本在住の外国人高齢者の日本語問題を究明する社会言語学的研究及び言語的対応の提言	1,200
特別研究員奨励費 (外国人)	五十嵐陽介 (Celik Kenan)	日琉祖語で再建される語の語形成の解明	1,200

上記の表は、2022年度に交付のあった研究課題および2021年度が最終年度であり、補助事業期間を2022年度まで延長した研究課題を掲載している。

寄附金 (2022年度受入金額)
(該当なし)

4 2022年度公開中のコーパス・データベース

ウェブサイトにおいて、共同研究の成果としてのコーパス、データベース、データセット、研究成果物、ウェブアプリケーション等を公開しているが、2022年度は、下記の資料の公開(過年度から継続して公開しているものを含む。)をおこなった。

コーパス

国立国語研究所で構築したコーパス(言語を分析するための基礎資料として、書き言葉や話し言葉の資料を体系的に収集し、研究用の情報を付与した言語資源)およびコーパスを利用するためのウェブアプリケーションを記す。

- 現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ) (<https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/>)

現代日本語の書き言葉の全体像を把握するために構築したコーパスであり、現在、日本語について入手可能な唯一の均衡コーパスであり、オンライン(無償版:登録不要で文字列検索(全文検索)をおこなうことができるシステム『少納言』(<https://shonagon.ninjal.ac.jp/>)および登録が必要であるが形態論情報を利用したコーパス検索アプリケーション『中納言』(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>))およびDVD(有償版)で公開している。書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律などのジャンルにまたがって1億430万語のデータを格納しており、各ジャンルについて無作為にサンプルを抽出している。収録対象の刊行年代は、最大30年間(1976–2005年)であり、メインとなる書籍の場合は、20年間(1986–2005年)である。すべてのサンプルは、長単位および短単位の二つの言語単位を用いて形態素解析(テキストを語に区切って品詞に分類すること)されており、文書構造に関するタグや精密な書誌情報とともに、XML文書に整形してある。なお、著作権処理も施されている。

- 国語研日本語ウェブコーパス(NWJC) (<https://masayu-a.github.io/NWJC/>)

ウェブを母集団として100億語規模を目標として構築した日本語コーパスである。ウェブ上の日本語テキストを利用して100億語を超える規模の現代日本語コーパスを構築することによって、稀言語現象の言語学的、心理学的および情報处理的視点からの究明の可能性を開くことを目的としている。具体的な応用として、言語研究のための用例収集、日本語使用実態の定量的な把握などを想定している。一部(86,277,772語)をコーパス検索アプリケーション『中納言』で公開している(収集時期と比べて、リンク切れのデータが増えてきたため、2024年2月29日で廃止。以降は、共同利用型共同研究(C)にて国立国語研究所の所内サーバで利用可能。)ほか、2014年10–12月収集データ(収集URL数:83,992,556; 延べ文数:3,885,889,575; 異なり文数:1,463,142,939; 国語研短単位数:25,836,947,421)から構築したn-gramデータ、単語埋め込みデータ、事前学習モデルなどを言語資源協会より有償で公開している。

- 日本語話し言葉コーパス(CSJ) (<https://clrd.ninjal.ac.jp/csj/>)

日本語の自発音声を大量に集めて、多くの研究用情報を付加した話し言葉研究用のデータベースであり、国立国語研究所、情報通信研究機構(旧通信総合研究所)、東京工業大学が共同開発した、質・量ともに世

界最高水準の話し言葉データベースである。オンライン(無償版:コーパス検索アプリケーション『中納言』(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>))で利用)およびUSBメモリーに格納したデータ(有償版)にて公開しており、音声言語情報処理,自然言語処理,日本語学,言語学,音声学,心理学,社会学,日本語教育,辞書編纂など幅広い領域で利用されている。

- 日本語日常会話コーパス (CEJC) (<https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc.html>)
日常場面の中で当事者たち自身の動機や目的によって自然に生じる会話を対象としたコーパスで,多様な場面の会話(200時間の日常会話)をバランスよく集め,音声だけでなく映像まで含めて収録し,転記テキスト,数種類のアノテーションも含まれる。形態論情報(短単位・長単位)での検索と文字列検索は,コーパス検索アプリケーション『中納言』で無償で利用できる(要申請)。また,利用契約を結んだ上で,音声・映像・転記・各種アノテーション・ツール・メタ情報等を有償で利用することができる。
- 昭和話し言葉コーパス (SSC) (<https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/showaCorpus/>)
国立国語研究所は,1950年代の初頭から,「オープンリール型録音器」を使って,日常のさまざまな場面における会話や,講演・講義・挨拶などの独話を録音している。当時の録音資料を再編したコーパスである。本コーパスには,1950年代から1970年代に録音された約44時間分の音声データ(17時間分の独話,27時間分の会話)と,その関連データ(転記テキスト,約53万語分の形態論情報データ,メタデータなど)である。コーパス検索アプリケーション『中納言』および関連データ配布の二通りの方法で利用することができる。
- 名大会話コーパス (NUCC) (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/nucc/>)
科学研究費基盤研究(B)(2)「日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコロケーション研究」(平成13-15年度,研究代表者:大曾美恵子)の一環として作成された,129会話,合計約100時間の日本語母語話者同士の雑談を文字化したコーパスで,文字化テキストなどを公開している。
- 現日研・職場談話コーパス (CWPC) (<https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/shokuba.html>)
1993年9月から10月にかけて,現代日本語研究会が首都圏の有職女性19名(20-50代)を調査協力者として,それぞれの職場での自然談話を録音し,文字起こしデータを収録した『女性のことば・職場編』および1999年10月から2000年12月にかけて,現代日本語研究会が首都圏の有職男性21名(20-50代)を調査協力者として,それぞれの職場での自然談話を録音し,文字起こしデータを収録した『男性のことば・職場編』の二つの調査研究を元に作成されたコーパスである。これら二つの調査研究は,1990年代にいち早く行われた先駆的な試みで,職場での会話を調査協力者自身に録音してもらい,自然な談話を収録するという方法で得られた,たいへん画期的なものであると評価されている。国立国語研究所では,現代日本語研究会およびひつじ書房松本功氏のご理解,ご協力によりご提供いただいたこれらの文字化テキストに形態論情報(短単位情報)を付与した上で,オンラインコーパス検索アプリケーション『中納言』で公開している。
- 日本語歴史コーパス (CHJ) (<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/>)
日本語の歴史を研究するための資料を集めたコーパスであり,将来的に上代から近代までをカバーする通時コーパスとすることを目標に開発が進められている。全てのテキストに読み・品詞などの形態論情報が付与されているため,従来の紙の総索引の代わりになるだけでなく,より高度な検索や集計がおこなえる。構築済みで,公開中のものは以下のとおりである。
 - ▶ 奈良時代編
 - I 万葉集, II 宣命, III 祝詞
 - ▶ 平安時代編
 - I 仮名文字
収録作品:古今和歌集,土佐日記,竹取物語,伊勢物語,落窪物語,大和物語,枕草子,源氏物語,紫式部日記,和泉式部日記,平中物語,堤中納言物語,更級日記,讃岐典侍日記,蜻蛉日記,大鏡
 - II 訓点資料
収録資料:西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点 卷一
 - ▶ 鎌倉時代編

I 説話・随筆

収録作品：今昔物語集（本朝部），宇治拾遺物語，十訓抄，方丈記，徒然草

II 日記・紀行

収録作品：海道記，建礼門院右京大夫集，東関紀行，十六夜日記，とはずがたり

III 軍記

収録作品：保元物語，平治物語，平家物語

▶ 室町時代編

I 狂言

収録作品：虎明本狂言集（底本：大塚光信編（2006）『大蔵虎明能狂言集翻刻注解』（清文堂出版））

II キリシタン資料

収録作品：天草版平家物語，天草版伊曾保物語

▶ 江戸時代編

I 洒落本

収録作品：大坂：聖遊廓，月花余情，新月花余情，陽台遺編・姍閣秘言，異本郭中奇譚，短華蘂葉，北華通情，南遊記，当世粋の曙，色深狹睡夢；京都：原柳巷花語，無論里問答，風流裸人形，青楼阿蘭陀鏡，昇平楽，当世嘘之川，竊潜妻，誰か面影，河東方言箱まくら，興斗月；江戸：郭中奇譚，俠者方言，南閨雑話，甲駄新話，当世左様候，深川新話，総籬，仕懸文庫，花街鑑，花街寿々女

II 人情本

収録作品：比翼連理花洒志満台，春色梅児与美，おくみ惣次郎春色江戸紫，梅曆余興春色辰巳園，小三金五郎仮名文章娘節用，浮世新形恋の花染，春色連理の梅，浦里時次郎明烏後の正夢

III 近松浄瑠璃

収録作品：曾根崎心中，薩摩歌，心中二枚絵草紙，卯月紅葉，五十年忌歌念仏，丹波与作待夜のこむろぶし，卯月の潤色，心中重井筒，堀川波鼓，淀鯉出世滝徳，心中刃は氷の朔日，心中万年草，冥途の飛脚，今宮の心中，夕霧阿波鳴渡，長町女腹切，生玉心中，大経師昔曆，鎧の権三重帷子，博多小女郎波枕，山崎与次兵衛寿の門松，心中天の網島，女殺油地獄，心中宵庚申

IV 随筆・紀行

収録作品：紀行文：鹿島詣，野ざらし紀行，更科紀行，笈の小文，嵯峨日記，おくのほそ道；
随筆：養生訓，西洋紀聞，折りたく柴の記，駿台雑話，うひ山ぶみ，蘭学事始

▶ 明治・大正編

I 雑誌

収録雑誌：明六雑誌，東洋学芸雑誌，国民之友，太陽，女学雑誌，女学世界，婦人倶楽部

II 教科書

収録した期（使用開始年）と教科書名（小学校）：

第1期（1904年）：尋常小学読本 一～八

第2期（1910年）：尋常小学読本 卷一～十二

第3期（1918年）：尋常小学国語読本 卷一～十二

第4期（1933年）：小学国語読本尋常科用 卷一～十二

第5期（1941年）：ヨミカタ 一～二／よみかた 三～四／初等科国語 一～八

第6期（1947年）：こくご 一～四／国語 第三学年～第六学年

収録した期（使用開始年）と教科書名（高等小学校）：

第1期（1904年）：高等小学読本 一～八

III 明治初期口語資料

収録作品：『交易問答』，『安愚楽鍋』 初編／二編／三編，『開化のはなし』，『文明開化』 初編／二編，『よりあひばなし』 初編，『百一新論』，『開化問答』 初編／二編，『明治の光』，『文明田舎問答』 初編，『民権自由論』，『春秋雑誌会話篇』（『会話篇』 第3部）

IV 近代小説

収録作品:

二葉亭四迷『浮雲』(1887年), 森鷗外『舞姫』(1890年), 幸田露伴『五重塔』(1891年), 樋口一葉『たけくらべ』(1895年), 広津柳浪『今戸心中』(1896年), 国木田独步『武蔵野』(1898年), 徳富蘆花『思出の記』(1900年), 泉鏡花『高野聖』(1900年), 夏目漱石『吾輩は猫である』(1905年), 田山花袋『蒲団』(1907年), 正宗白鳥『何処へ』(1909年), 有島武郎『或る女』(1911年), 徳田秋声『あらくれ』(1915年), 永井荷風『腕くらべ』(1916年), 佐藤春夫『田園の憂鬱』(1918年), 宇野浩二『蔵の中』(1919年), 志賀直哉『暗夜行路』(1921年), 瀧井孝作『無限抱擁』(1921年), 宮本百合子『伸子』(1924年), 梶井基次郎『檸檬』(1925年), 川端康成『伊豆の踊子』(1926年)

V 新聞

資料:『読売新聞』

1875年5月2, 3, 4, 5, 7, 8, 9日, 11月2, 4, 5, 7, 8, 9, 10日

1881年5月2, 4, 5, 6日, 11月2, 4, 5, 6日

1887年5月3, 4, 5, 6日, 11月2, 4, 5, 6日

1895年5月2日, 11月2, 3日

1901年5月2, 3日, 11月2日

1909年5月2日, 11月2日

1917年5月2日, 11月2日

1925年5月2日, 11月2日

VI 落語 SP 盤

資料: 金澤裕之・矢島正浩編(2019)『SP 盤落語レコードがひらく近代日本語研究』(笠間書院)

・和歌集編

収録作品: 古今和歌集, 後撰和歌集, 拾遺和歌集, 後拾遺和歌集, 金葉和歌集, 詞花和歌集, 千載和歌集, 新古今和歌集

・日本語諸方言コーパス (COJADS) (<https://www2.ninjal.ac.jp/cojads/index.html>)

日本各地の方言の談話音声を大量に集めた, 日本で初めての諸方言コーパスで, 元のデータは, 日本全国47都道府県の200地点あまりにおける, 約2500時間の方言談話の録音テープからなり, 一部は『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』(2002-2008, 国書刊行会)として刊行されている。本コーパスは, コーパス検索アプリケーション『中納言』で利用可能であり, 標準語と方言の両方で検索することができる。標準語検索は, 短単位検索と文字列検索を利用することができる。方言検索は, 現在のところ文字列検索のみ可能である。また, 検索結果はダウンロードできる。

・中国語・韓国語母語の日本語学習者横断コーパス (C-JAS)

(<https://www2.ninjal.ac.jp/jll/lsaj/cjas-search-info.html>)

日本語学習者6人(中国語母語話者3人, 韓国語母語話者3人)の3年間の縦断的発話データをコーパス検索アプリケーション『中納言』上で公開している。収録データ量は, 約46.5時間分で, 総語数は約57万語であり, 形態素単位や文字列で用例を検索することができる。

・多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)

(<https://www2.ninjal.ac.jp/jll/lsaj/ijas-search-info.html>)

日本を含む20の国と地域で, 異なった12言語を母語とする日本語学習者1000人および日本語母語話者50人の話し言葉および書き言葉の収集を完了し, コーパス検索アプリケーション『中納言』上で公開している。発話データ(ストーリーテリング, ロールプレイ, 対話, 絵描写), 作文データ(ストーリーライティング, エッセイとメール文(任意)), 発話の音声データを所収している。

・アイヌ語口承文芸コーパス一音声・グロスつき一 (<https://ainu.ninjal.ac.jp/folklore/>)

非常に優れたアイヌ語話者で語り部でもあった木村きみさん(1900-1988, 沙流川上流域のペナコリ出身)がアイヌ語で語った物語30編(ウエペケレ(散文説話)23編, カムユカラ(神謡)7編)約8時間分の音声およびアイヌ語千歳方言話者の小田イトさん(1908-2000)がアイヌ語で語った物語15編(ウエペケ

レ9編,カムイユカラ6編)156分間の音声に,日本語と英語による訳とグロスや注解を付けた,初めてのアイヌ口承文芸デジタル集成である。本コーパスに含まれるアイヌ語の延べ語数は59,002語である。

- オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス (https://oncoj.ninjal.ac.jp/front_page_Japanese.html)
オックスフォード大学と国立国語研究所との長期の共同研究プロジェクトで開発している上代日本語のテキストを対象とした,包括的な形態・統語解析アノテーションを付与したコーパスである。現在では,萬葉集を始め,上代日本語の歌謡テキストのすべてを収録している。収録作品は以下のとおりである。
 - ▶ 古事記歌謡: 112 歌; 2,527 語; 712 年成立
 - ▶ 日本書紀歌謡: 133 歌; 2,444 語; 720 年成立
 - ▶ 風土記歌謡: 20 歌; 271 語; 730 年代成立
 - ▶ 仏足石歌: 21 歌; 337 語; 753 年以降成立
 - ▶ 萬葉集: 4,685 歌; 83,706 語; 759 年以降成立
 - ▶ 続日本紀歌謡: 8 歌; 134 語; 797 年成立
 - ▶ 上宮聖徳法王帝説: 4 歌; 60 語; 成立年不明
- 統語・意味解析情報付き現代日本語コーパス (NPCMJ) (<https://npcmj.ninjal.ac.jp>)
現代日本語の書き言葉と話し言葉のテキストに対し,文の統語・意味解析情報を付与し,多様な日本語の機能語や句構造,節の諸類型および複雑な構文を大量の言語データから検索・抽出して研究に活用できることを目的として構築したコーパスである。合計 90,069 ツリー (文), 1,304,508 語を公開している。出典並びにツリー数および語数は以下のとおりである。
 - ▶ 青空文庫: 12,810 ツリー; 246,568 語
 - ▶ ブログ: 219 ツリー; 3,218 語
 - ▶ 辞書: 25,279 ツリー; 141,297 語
 - ▶ エッセイ: 3,264 ツリー; 70,167 語
 - ▶ 法律文: 337 ツリー; 6,943 語
 - ▶ ノンフィクション: 234 ツリー; 4,118 語
 - ▶ 会話: 2,382 ツリー; 12,720 語
 - ▶ 教科書: 6,950 ツリー; 63,952 語
 - ▶ ウィキペディア: 2,745 ツリー; 59,833 語
 - ▶ 聖書: 1,664 ツリー; 26,089 語
 - ▶ 書籍: 553 ツリー; 10,992 語
 - ▶ 国会会議録: 1,698 ツリー; 32,715 語
 - ▶ フィクション: 7,597 ツリー; 84,169 語
 - ▶ ニュース: 5,979 ツリー; 90,570 語
 - ▶ 特許: 261 ツリー; 8,636 語
 - ▶ テッドトーク: 1,453 ツリー; 21,420 語
 - ▶ 白書: 13,433 ツリー; 398,347 語
 - ▶ その他: 2,211 ツリー; 22,754 語
- 近代語のコーパス (<https://clrd.ninjal.ac.jp/cmj/>)
明治・大正時代の日本語を研究するために構築されたコーパスであり,現代日本語の書き言葉が整備されていく過程をとらえることができる。これらのコーパスのデータを更新したものを,『日本語歴史コーパス』の「明治・大正編 I 雑誌」の一部としてコーパス検索アプリケーション『中納言』でも公開している。
- コーパス検索アプリケーション『中納言』 (<https://chunagon.ninjal.ac.jp/auth/login>)
国立国語研究所で開発されたウェブアプリケーションで,短単位・長単位・文字列の三つの方法によってコーパスに付与された形態論情報を組み合わせた高度な検索を行うことができる。無償で利用することができるが,著作権保護の観点から登録が必要である。
- 現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) 全文検索サイト『少納言』 (<https://shonagon.ninjal.ac.jp/>)
国立国語研究所で開発されたウェブアプリケーションで,初心者でも簡単に BCCWJ 内の文字列を検索することができる。
- NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB) (<https://nlb.ninjal.ac.jp/>)
現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) を検索するために, Lago 言語研究所と共同開発したオンライン検索システムである。レキシカルプロファイリングという手法を用いたコーパス検索ツールであり,名詞や動詞などの内容語の共起関係や文法的振る舞いを網羅的に表示できるのが最大の特長である。
- NPCMJ Child Language Development Timeline (NPCMJ-CLDT) (<https://npcmj.ninjal.ac.jp/cldt/>)
そよごツリーバンク (子供の日本語の統語解析情報付きコーパス) を時系列に沿って対話的に表示するインターフェースである。このインターフェースの大きな特徴は,子供の言語の形態・統語的分析を年齢・月齢フィルターを通じて,検索したり精査したりすることを可能にしている点である。このインター

フェースを利用することで、特定の語彙や構文に関して、個人の習得過程に容易に焦点をあてることができ、日本語を習得しつつある子供の形態・統語的発達のパターンを発見するチャンスにつながる。そよごツリーバンクと NPCMJ-CLDT は、NPCMJ プロジェクトの一環として開発された。

オンライン辞書

オンラインで検索できる辞書・用例集である。

- **基本動詞ハンドブック** (<https://verbhandbook.ninjal.ac.jp/>)
日本語学習者・日本語教師が基本動詞の理解を深めることができるように、基本動詞の多義的な意味の広がりや図解なども用いて分かりやすく解説したオンラインツールである。例文、コロケーションなどの執筆には、国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」(約 1 億語) や筑波大学の「筑波ウェブコーパス」(約 11 億語) などの大規模日本語コーパスを積極的に活用し、他のレファレンスには見られない生きた情報を提供している。
- **複合動詞レキシコン** (<https://vlexicon.ninjal.ac.jp/>)
「光り輝く、投げ入れる、書き上げる」のように日常よく使われる動詞 + 動詞型の日本語複合動詞 (2,700 語以上) に意味や用法の情報を付与した、言語研究および日本語学習用のオンライン辞書である。日本語研究の専門家だけでなく、外国人日本語学習者を含む一般の利用者にも使っていただくことを意図しており、様々な検索方法が可能である。個々の複合動詞の見出しから、コーパス検索システム (NLB: NINJAL-LWP for BCCWJ) にリンクを張り、現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) の例文と関連づけることを可能とした。また、外国人学習者や、言語対照の研究者にも使っていただけるように、新たに、意味定義と用例に英語・中国語・韓国語の翻訳を付け、利便性を向上させた。本データベースは、国立国語研究所が基礎データを作成し、Lago NLP (旧 Lago 言語研究所、赤瀬川史朗) がオンライン検索システムとして構築したものである。
- **トピック別 アイヌ語会話辞典** (<https://ainu.ninjal.ac.jp/topic/>)
1898 年に刊行された『アイヌ語會話字典』を底本とし、底本の表記のほか、口語訳、アイヌ語のローマ字およびカナ表記、語釈 (グロス)、英訳など、アイヌ語学習の助けとなる項目を付け加えたコンテンツであり、アイヌ語沙流方言 (貫気別) の音声も収録した上で、2010 年にブエガワ (他) がロンドン大学のウェブサイトで公開した『音声付きアイヌ語辞典—新編 金澤版アイヌ語会話辞典』のコンテンツにトピック検索 (日本語・英語) と見出し語 (アイヌ語・日本語・英語) 検索機能を追加し、さらに未公開のビデオ資料 (約 130 見出し) と動植物や道具の写真 (72 見出し, 86 枚) も加え、見出し語数 3,510 項目とした新たなバージョンとして公開するものである。本データベースは、国立国語研究所が基礎データを作成し、Lago 言語研究所 (赤瀬川史朗) がオンラインシステムとして構築したものである。
- **Web データに基づく形容詞用例データベース (開発版)** (<https://csd.ninjal.ac.jp/adj/>)
形容詞の用例のデータベースである。用例は、語ごとに構築した専用の Web コーパスからおこなっている。構築に際しては、(1) 語ごとに一定量以上の用例を収集できること、(2) 収集用例の偏りの軽減に配慮している。
- **Web データに基づく複合動詞用例データベース (開発版)** (<https://csd.ninjal.ac.jp/comp/>)
複合動詞研究用の基礎データの提供を目的とした用例のデータベースである。用例は、語ごとに構築した専用の Web コーパスからおこなっている。構築に際しては、(1) 語ごとに一定量以上の用例を収集できること、(2) 収集用例の偏りの軽減に配慮している。
- **Web データに基づくサ変動詞用例データベース (開発版)** (<https://csd.ninjal.ac.jp/sahen/>)
サ変動詞の用例のデータベースである。用例は、語ごとに構築した専用の Web コーパスからおこなっている。構築に際しては、(1) 語ごとに一定量以上の用例を収集できること、(2) 収集用例の偏りの軽減に配慮している。
- **語誌情報ポータル** (<https://goshidb.ninjal.ac.jp/goshidb/>)
『日本語歴史コーパス』と併用することにより、日本語史の理解をより深めることができるデータを検索できるサイトとして公開している。コーパスからの統計情報、古辞書、言語地図、言語記事 (言葉について)

て書かれた新聞・雑誌の記事)が収録されている。検索結果の多くはグラフや画像(外部サイトを含む。)で確認できる。

- ・基礎日本語活用辞典(インドネシア語版)(<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/kamus/>)

日本語の基礎語彙約4,000語を収録している。日本語の初級を終了した、インドネシア語を母語とする日本語学習者のための辞書である。

言語地図

言語の多様性・分布を地図に表現した資料である。

- ・使役交替言語地図(WATP)(<https://watp.ninjal.ac.jp>)

世界の言語の形態的関連のある有対動詞を収集した地理類型論的なデータベースであり、約80名の研究者から提供された、日本語を含む諸言語(約95言語)の有対自他動詞の類型論的な情報を、世界地図およびチャート(表)上で可視化し、有対自他動詞を個々の動詞対の派生型の選好(意味と形式の類像性の可視化)および各言語の派生型の選好(各言語の「類型論的な特徴づけ: typological characterization」の可視化)の2つの観点から分析できる。データは、研究目的でダウンロードし、利用することができる。なお、使役交替動詞対データのデータベースの構築およびシステムの設計・開発は、Lago NLP(赤瀬川史朗, 旧Lago言語研究所)が担当した。

- ・『日本言語地図』地図画像(https://mmsrv.ninjal.ac.jp/laj_map/)

各地の方言で、どのような語形や発音がどこに現れるかを表示した言語地図(方言地図)で、全国の方言の地理的分布を一望できる基礎資料である『日本言語地図』所載の地図の画像(全300図)を公開している。また、『日本言語地図』各集の別冊・付録は国立国語研究所学術情報リポジトリで閲覧することおよびダウンロードすることができる。

- ・『方言文法全国地図』地図画像(https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/gaj-pdf/gaj-pdf_index.html)

文法事象の全国的な分布を展望できる言語地図(方言地図)で、方言研究における基本的な資料である『方言文法全国地図』所載の地図の画像(全350図)を公開している。

- ・言語地図データベース(https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/ladb_index.html)

日本語方言の言語地図集とそこに収録された言語地図のデータベースである。言語地図目録データベースと言語地図画像データベースの2種類のデータベースで構成されている。

言語地図目録データベース: 日本の方言学・言語地理学において1905年から2006年の間に作成された言語地図集とそこに収録された言語地図および全国方言分布調査(FPJD: 2010-2015年度実施)とその準備調査(全国方言準備調査)の調査項目に関する情報も含まれている。

言語地図画像データベース: 言語地図目録データベースで対象とした言語地図の画像データベースである。各言語地図を閲覧するとともに、論文等での引用、GISソフトでの利用が可能になっている。著者・编者等の許諾手続きを経た上で、順次追加する予定である。

- ・全国方言分布調査(FPJD)・新日本言語地図(NLJ)

(https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/fpjd/fpjd_index.html)

国立国語研究所の共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言分布調査」で実施した全国方言分布調査(2010-2015年度実施, 全国554地点)のデータおよび関連情報(調査項目, 準備調査結果, 調査マニュアルなど)に加え, 調査結果を地図化した『新日本言語地図』関係のデータを公開している。学術・教育での利用においては, 自由に利用可能である。

- ・首都圏大学生の言語使用と言語意識の地域差に関する調査(https://mmsrv.ninjal.ac.jp/shutoken_atlas/)

首都圏の大学生における言語使用・言語意識の調査結果を言語地図で示したものである。

画像・PDF

方言地図や貴重書の画像ファイル, 論文のPDFファイルなどである。

- ・日本語史研究資料(国立国語研究所蔵)(<https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldl/>)

国立国語研究所研究図書室蔵書および研究資料室収蔵資料のうち, 日本語史資料として著名なものや, 歴

史コーパスの原材料として利用できるものを選定し、デジタル画像を順次公開している。なお、デジタル画像の IIIF マニフェストも公開している。

- 米国議会図書館蔵『源氏物語』画像 (https://cid.ninjal.ac.jp/lcgenji_image/)
米国議会図書館アジア部日本課が所蔵する『源氏物語』(LC Control No.: 2008427768)のうち、桐壺・須磨・柏木の原本画像を閲覧できる。米国議会図書館から提供された原本画像を用いている。また、原本画像と翻字本文を対照表示させることも可能である。現在は、試験公開中である。
- 大英図書館蔵天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』画像 (https://dglb01.ninjal.ac.jp/BL_amakusa/)
大英図書館提供の天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』「言葉の和らげ」「難語句解」(Shelfmark: Or.59.aa.1)のカラー画像(JPEG形式)をパブリックドメインにて公開している。表紙から裏表紙まで、順番に1ページずつ並べることにより、「三部合綴」と言われてきた大英図書館本の姿を実感できるようにした。
- 東京語アクセント資料 (https://mmsrv.ninjal.ac.jp/tokyo_accent/)
現代東京語でアクセントのゆれが予想された12,803語について、年齢、地域(山の手と下町)、性別に偏りのないように考慮して選ばれた19名の話者のアクセント型を個人別に記載した資料である。加えて、準備段階でアクセントをチェックした2名の話者と4種のアクセント辞典記載のアクセント型が併記されている。原著は『文部省科学研究費特定研究「言語の標準化」資料集』であり、そのpdf版のほか、データ版(Excel形式)、調査票も公開している。
- 国語研変体仮名字形データベース (<https://cid.ninjal.ac.jp/hentaiganaDB/>)
変体仮名の字形画像を、読み・字母・Unicodeで層別したデータベースであり、「学術情報交換用変体仮名」サイトの該当文字(または検索結果)へのリンク、出典元資料画像との相互リンク機能、資料画像と翻字本文との対照表示機能などがある。以下の作品の字形データを収録している。
 - ・ 春色梅児与美: 巻一, 巻二, 巻三
 - ・ 比翼連理花廻志満台: 初編上, 初編中, 初編下
 - ・ 諸国方言物類称呼: 卷之一, 卷之二, 卷之三, 卷之四, 卷之五
- 雑誌『国語学』全文データベース (<https://bibdb.ninjal.ac.jp/SJL/>)
日本語学会の(旧)機関誌『国語学』全巻(第1輯:昭和23年-終刊第219号:平成16年)の全文テキストデータベースである。誌面のPDFファイルも公開している。

ツール

言語資料を扱うためのプログラムやWeb上で利用するツールである。

- UniDic (<https://clrd.ninjal.ac.jp/unidic/>)
国立国語研究所の規定した斉一な言語単位(短単位)と、階層の見出し構造に基づく電子化辞書の(1)設計方針およびその実装としてのリレーショナルデータベース、(2)UniDicデータベースとそのデータベースからエクスポートされた短単位をエンリ(見出し語)とする形態素解析器 MeCab 用の解析用辞書、(3)解析用 UniDic, の総称である。現代書き言葉 UniDic, 現代話し言葉 UniDic, 古文用 UniDicS (近代口語小説 UniDic, 旧仮名口語 UniDic, 近代文語 UniDic, 近世江戸口語 UniDic, 近世上方口語 UniDic, 近世文語 UniDic, 中世口語 UniDic, 中世文語 UniDic, 和歌 UniDic, 中古和文 UniDic, 上代語 UniDic) の三つの解析用 UniDic を公開・配布している。
- 形態素解析ツール Web 茶まめ (<https://chamame.ninjal.ac.jp>)
各種の UniDic を使って形態素解析を行うためのツールであり、形態素解析に必要な一連の作業を、Web上でわかりやすいインターフェイスによっておこなうことができる。
- 方言研究の部屋 データとプログラムの公開 (https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/dp_index.html)
全国方言分布調査(FPJD)・新日本言語地図(NLJ), 『方言文法全国地図』全データ(1-6集), PDF版『方言文法全国地図』(1-6集), 『方言文法全国地図』作成の機械化(イラストレータ用プラグイン・白地図・記号), 『方言文法全国地図』準備調査(調査票と地図・データ), 言語地図データベースを公開している。
- 全文検索システム『ひまわり』 (<https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?himawari>)
言語研究用に設計された全文検索システムであり、XML文書(Unicodeに対応)から特定の文字列を高

速に全文検索し、検索結果の KWIC (KeyWord In Context) を表示し、資料に適した形で閲覧することができる。『太陽コーパス』、『日本語話し言葉コーパス』、『分類語彙表』などの既存の言語資料に加え、自分で作成した XML 文書も検索することができる。

- 教育活動観察支援ツール FishWatchr (<https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?fw>)
ディスカッションやプレゼンテーション練習などの観察と振り返りを支援するためのツールである。本システムでは、ディスカッションを観察対象としているが、進行中の活動に注釈づけする (FishWatchr で録音、あるいは、別機器で録画し同期)、録音・録画ファイルを再生しつつ、注釈づけするなどの状況で利用することを想定しており、協調学習の観察、日本語教育、議事録作成支援などでの活用も考えている。
- 教育活動観察支援ツール FishWatchr Mini (<https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?fwm>)
モバイルデバイス向けの観察支援ツールである。ボタン操作で、二つの属性 (例: 話者, 評価) をリアルタイムに記録することができる。また、複数の観察者が一斉に観察することができるほか、FishWatchr に読み込んで、同時に撮影したビデオと同期する、観察者全員の結果をまとめてグラフに表示する、タブ区切りのテキストとして保存することなどができる。ウェブアプリケーションであるため、インストールは不要である。
- まとめて検索「KOTONOHA」(<https://clrd.ninjal.ac.jp/kotonoha.html>)
複数のコーパスを同時に検索し、その集計結果をグラフ化して視覚的に観察できるサービスである。言語資源開発センターがこれまで提供してきた従来のコーパス検索システム『中納言』は、現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) や日本語話し言葉コーパス (CSJ) などのコーパスをそれぞれ“個別”の画面で検索し、結果を閲覧する (個別検索) のに対し、KOTONOHA は、「まとめて検索」の名前の通り、中納言の中のコーパスを一度にまとめて検索し、その集計結果を表示する (これを専門的な用語で「包括的検索」「串刺し検索」「横断検索」という)。
- 一貫処理プログラム、日本語情報処理プログラム集 (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/mcl/>)
国立国語研究所で開発された、日本語研究のための一貫処理プログラムおよび日本語研究用プログラム集 MCL である。1996 年時点のプログラムおよびその説明を、計量国語学、特にパソコンによる日本語研究の歴史の一つとして公開するものである。

データベース・データセット類

国立国語研究所が調査・研究で収集したデータを中心とする資料である。

- 北海道調査データベース (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/hokkaido/>)
国立国語研究所は、1958-1960 年に「方言の共通語化」に注目した言語調査の一つとして、北海道に移住した 1 世から 3 世を対象に調査を実施した。調査結果から、北海道に移住した 1 世の出身地の方言の影響は、2 世では残っているが、3 世ではほとんどなくなり、「北海道共通語」が形成されることが分かった。一方で、「全国表通語」に近づく傾向もあったため、1959 年に富良野町 (現: 富良野市) で調査を実施した。さらに、同じ内容で、1986 年に富良野市で、1987 年に札幌市で 2 回目の調査をおこない、地域社会のことばの使い方が、社会構造の特性の違いによってどのように変化するかを明らかにした。これらの北海道調査のうち、富良野市・札幌市における経年調査の結果を「北海道調査データベース」として公開している。調査地点のインフォーマントはランダムサンプリングによって選んでいる。富良野市の調査では、1959 年に調査を受けた人に対しても再度調査をしており、同一個人の回答の変化を見ることができる。本調査は、国立国語研究所の定点経年調査 (鶴岡調査・岡崎敬語調査・北海道調査) の一つである。
- 鶴岡調査データベース (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/tsuruoka/>)
国立国語研究所が中心となって、1950、1971、1991、2011 年の 4 回にわたって山形県鶴岡市でおこなった共通語化調査の回答データである。2011 年調査 (第 4 回) は、国立国語研究所と統計数理研究所との共同研究である。なお、第 3 回調査の音声データは、国立情報学研究所を通じて利用することが可能である。本調査は、国立国語研究所の定点経年調査 (鶴岡調査・岡崎敬語調査・北海道調査) の一つである。
- 岡崎敬語調査データベース (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/okazaki/>)
国立国語研究所が中心となって、愛知県岡崎市でおこなった敬語調査のデータベースである。岡崎敬語

- 調査(OSH)は、1953(昭和28)年、1972(昭和47)年、2008(平成20)年におこなわれ、戦後の55年という長いタイムスパンの実時間の変化が分かる。報告書は、国立国語研究所学術情報リポジトリで公開している。本調査は、国立国語研究所の定点経年調査(鶴岡調査・岡崎敬語調査・北海道調査)の一つである。
- 甕島方言アクセントデータベース (<https://www2.ninjal.ac.jp/koshikijima/>)
甕島(鹿児島県薩摩川内市)の方言音声を教育研究に資する目的で公開している。甕島の各集落について2名ずつの話者のアクセントを、各話者の許諾を得て公開している。データベースのもととなったアクセント資料は、10年間にわたる甕島アクセント合同調査で得られたものである。
 - 危機言語データベース (<https://kikigengo.ninjal.ac.jp>)
日本の消滅危機言語・方言の音声データを紹介しており、様々な方言の基礎語彙、生の方言で語られているたくさんのお話(談話資料)、文化庁が1977-1985年度におこなった「各地方言収集緊急調査音声資料」を公開している。
 - 「国民の言語使用と言語意識に関する全国調査」データ (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/zenkoku/>)
研究プロジェクト「国民の言語行動・言語意識・言語能力に関する調査研究(日本語の地理的多様性に関する多角的調査研究)」(2006-2009年度前期:国立国語研究所研究開発部門言語生活グループ)における、研究課題「国民の言語使用と言語意識に関する全国調査」(企画・実施:尾崎喜光)の調査結果データである。
 - 「国語力観」に関する全国調査 (https://mmsrv.ninjal.ac.jp/krk_survey/)
何を「国語力」と見なすかは、人により立場によりいろいろな考えがあるため、国民が「国語力」というものをどのようにとらえているか(国民の「国語力観」)を探る目的で、2006年2月に国立国語研究所が実施した意識調査および2006年8月に実施した補充調査の回答データである。
 - 「学校の中の敬語」アンケート調査データ (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/gakkoukeigo/>)
国立国語研究所が「現代敬語行動の研究—学校生活における敬語の研究—」(1988-1990年度)および「現代敬語行動の研究—小集団内の敬語行動—」(1991-1992年度)の研究課題で、東京・大阪・山形の中学生・高校生を対象に実施した敬語使用と敬語意識に関する調査のうち、無記名自記式によるアンケート調査で得られたデータである。中学生は、東京:2,456名;山形:339名,高校生は、東京:2,222名;大阪:1,004名が回答している。回答データ,調査票,設問対照表を公開している。
 - 「病院の言葉」にかかわる調査 (<https://www2.ninjal.ac.jp/byoin/tyosa/>)
「病院の言葉」を分かりやすくする提案に取り上げる語彙の選定と、問題点の把握と改善の方法を検討するためにおこなった調査(医師に対する問題語記述調査,医療者に対する用語意識調査,非医療者に対する理解度等の調査)の集計データを公開している。
 - 『幼児・児童の連想語彙表』データ (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/rensougoi/>)
国立国語研究所報告69『幼児・児童の連想語彙表』(1981)の「全連想語彙調査表」および「頭音連想語彙調査表」を電子化(Excel形式)したものである。
 - 『方言談話資料』データ (https://mmsrv.ninjal.ac.jp/hogendanwa_siryu/)
『方言談話資料』(国立国語研究所資料集10)全10巻(1978-1987年刊)の本文テキストデータをPDFファイルおよびテキストファイルで、音声ファイルをデジタル化(wav形式)して公開している。
 - 『方言録音資料シリーズ』データ (https://mmsrv.ninjal.ac.jp/hogenrokuon_siryu/)
『方言録音資料シリーズ』全15巻(1965-1973年刊)の本文テキストデータと音声ファイルを公開している。本文はPDFファイルおよびテキストファイルで、音声ファイルはwav形式で公開している。
 - 『日本語教育のための基本語彙調査』データ (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/bvjsl84/>)
国立国語研究所報告78『日本語教育のための基本語彙調査』(1984)の「基本語彙五十音順表」,「意味分類体語彙表」および「分類項目一覧表」を電子化したものである。「留学生等外国人の日本語学習者が、専門領域の研究または職業訓練に入る基礎として、はじめに学習すべき日本語の一般的・基本的な語彙」選定のために妥当な標準を得ることを目的としている。
 - ことばに関する新聞記事見出しデータベース(DL版) (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/sinbunmidasi/>)
国立国語研究所が作成した1949年から2009年9月までのことばに関する新聞記事を集めた「切抜集」

に所収の新聞記事の発行日・新聞名・見出し等を収録した「見出し(目録)データベース」である。なお、本データベースは、人間文化研究機構統合検索システム(nihuINT)にも登録されているため、nihuINTを通じた検索も可能である。

- 作文対訳データベース (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/essay/>)
日本語学習者による日本語作文, 作文執筆者本人による母語訳, 日本語教師等による添削, 作文執筆者・添削者の言語的履歴に関する情報を大量に収集し, 相互に参照することが可能な形で電子化したものである。作文データ数は1,754件である。
- 外来語に関する意識調査(全国調査) (https://mmsrv.ninjal.ac.jp/gairaigo_zenkoku/)
社会的な情報の伝達に使用されている外来語・略語およびそれらを使う場面のコミュニケーションについて, 国民の意識と言語生活の実態を明らかにすることに加え, 分かりにくい外来語・略語を分かりやすく伝えるための, 受け手に配慮した言葉遣いの工夫など, 問題解決策の検討に資する科学的データを蓄積・提供することを目的としている。調査は2回(2003年10月9日-11月11日, 2004年10月6日-11月4日)おこなわれ, それぞれのデータをExcel形式で公開している。また, それぞれの報告書は, 国立国語研究所学術情報リポジトリから公開している。
- 尚書(古活字版第三種本) 訓点情報データベース (<https://cid.ninjal.ac.jp/kunten-syousyo3/>)
国立国語研究所蔵尚書(古活字版第三種本の巻1-9)の加點情報(訓点情報: ヲコト点, 音合符/訓合符, 声点, 語順点など)のデータベースを公開している。
- 日本語ブックレット (https://mmsrv.ninjal.ac.jp/nihongo_bt/)
各年の日本語関連の話題についての動向を, 図書, 雑誌記事, 新聞記事等の資料からまとめたものであり, 文献目録をあわせて掲載している。2007年版, 2006年版, 2005年版, 2004年版, 2002年改訂版を公開している。
- 日本語史研究用テキストデータ集 (https://www2.ninjal.ac.jp/textdb_dataset/)
国立国語研究所共同研究プロジェクト等で作成した訓点資料, キリシタン資料, 辞書類, 洒落本・人情本, 日本語読本などのテキストデータ(TXT, XMLなど)を公開している。公開資料は以下のとおりである。
 - ▶ 訓点資料: 西大寺本金光明最勝王経平安初期点(巻一)
 - ▶ キリシタン資料: 大英図書館所蔵 天草版平家物語, 大英図書館所蔵 天草版伊曾保物語, コンテムツス・ムンヂ(ヘルツォーク・アウグスト図書館所蔵本)
 - ▶ 辞書類: 二十巻本和名類聚抄[古活字版], 諸国方言物類称呼, 哲学字彙
 - ▶ 洒落本・人情本: 吉原楊枝, 浦里時次郎明烏後の正夢, 小三金五郎仮名文章娘節用, 春色梅児与美, 梅曆余興春色辰巳園, 浮世新形恋の花染, 比翼連理花廻志満台, 春色連理の梅, おくみ惣次郎春色江戸紫
 - ▶ 源氏物語: 米国議会図書館蔵 源氏物語
 - ▶ 日本語読本: 日本語読本 尋常科用[布哇教育会第1期], 日本語読本[布哇教育会第2期], 日本語読本[布哇教育会第3期], 日本語初歩[布哇教育局]
- 日本語学習者会話ストラテジーデータ (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/strategy/>)
1981-1984年度にかけて国立国語研究所日本語教育センターでおこなわれた研究プロジェクト「日本語教育における基本文型に関する研究」の一環としておこなわれた日本語学習者の会話の録音を基にして作成した。英語を母語とするか英語能力の高い外国語母語話者である日本語学習者で日本語能力がある程度ある者を対象として, 外国語母語話者である対象者の日本語使用の実態を把握することを目的としたもので, 外国語母語話者と日本語母語話者との日本語による会話の文字化データを公開している。
- 日本語学習者会話データベース (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/kaiwa/>)
日本語の学習を必要とする住民(言語生活者)の需要に応じた言語教育の充実へ向けた基礎資料として活用されるべく, (1) 多文化共生社会に対応した日本語教育方法・内容の構築に向けた基礎資料を提供すること, (2) 多角的な観点からのデータベース作りを試み, 成果を報告することによって, 複合領域としての日本語会話研究や日本語教員養成の新たな展開に貢献すること, (3) 口頭能力テストの重要性や多義性について喚起するとともに, その評価の過程やフィードバック等を通じて得られる情報の有意義性に関する認識の深化を促すこと, の3点を目標として構築されるものであり, 全米外国語教育協会認定の

面接式口頭能力テスト (ACTFL-OPI) を活用して収集されたものである。

- 文章理解研究「日本語学習者の文章理解過程データベース」
(<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/l2com/文章理解研究/>)
日本語学習者がどのように文章理解をおこなっているか、その読解過程を調査・収集したデータベースである。「語彙の理解」、「文脈の理解」、「全体の理解」、「アイ・トラッキング」の4種類のデータを公開している。
- 文章表現研究 (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/l2com/文章表現研究/>)
作文や論文など、日本語学習者が長い文章を書く機会はたくさんある。「文章表現研究」では、日本語学習者がひとまとまりの長い文章をどのような過程をたどって書いているのかを調査した。「プロダクトとしての作文」および「プロセスとしての作文」の2種類の作文コーパスを、準備ができたものがから順次公開している。
- 教室談話研究「大学授業の教室談話データベース」 (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/l2com/教室談話研究/>)
日本語を使用する場面はさまざま考えられますが、「教室における日本語でのコミュニケーションはどのようになされているのか」を明らかにするために、教室場面でのコミュニケーションを対象に調査・収集したデータや研究を次の4種類公開している。
 - ▶ ピア・リーディング：読んだ文章の内容をグループで話し合う読解の授業であるピア・リーディング活動の談話をとおして、日本語学習者の文章理解過程を可視化する教室談話データ
 - ▶ 留学生ピア・レスポンス：アカデミック・ライティング技術の習得を目的とした留学生のピア・レスポンスの授業において、他の学習者のアドバイスや教師の添削・コメントが、学習者の作文の推敲にどのような影響を与えているか、日本語学習者の文章執筆過程を可視化する教室談話データ
 - ▶ 学部生ピア・レスポンス：アカデミック・ライティング技術の習得を目的とした日本人法学部生の初年次教育のピア・レスポンスの授業において、他の学習者のアドバイスや教師の添削・コメントが、学習者の作文の推敲にどのような影響を与えているか、日本語母語話者の文章執筆過程を可視化する教室談話データ
 - ▶ 講義理解：日本語学習者(一部、日本語母語話者を含む。)が日本語の講義を聞くときに、講義の内容をどのようなまとまりで理解しているのか、語句の意味をどのように理解しているのかを可視化する講義ノートのデータ
- 専門日本語研究 (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/l2com/専門日本語研究/>)
ビジネス場面やアカデミック場面で必要になる専門的な日本語について、「ビジネス日本語」および「アカデミック日本語」の二つのプロジェクトで調査したデータを公開している。
 - ▶ ビジネス日本語：「クラウドソーシング」の日本語の調査・分析を通じて、これまで守秘義務の壁に阻まれてきたビジネス日本語の実態を明らかにする産学共同のプロジェクトである。わかりやすいビジネス文書の条件を言語学的に探り、その成果を作文力の養成につなげたいと考えている。加えて、「クラウドソーシング」が海外で日本語を学んだ経験のある元学習者への国境を越えた仕事の提供という面でも魅力あるシステムであることから、日本語母語話者・非母語話者を問わず、労使双方に貢献するために、日本語ビジネス文書に用いられる語彙リストや文型リストの公開も目指している。
 - ▶ アカデミック日本語：商学、経済学、法学、社会学、国際政治学という社会科学の5分野から、学部生が学ぶべき文献を5-8冊、それぞれの分野の専門教員がバランスよく選んで作成した社会科学全体および各分野のコーパスデータである。
- フコト点図データベース (<https://cid.ninjal.ac.jp/wokototendb>)
漢文訓読の記号であるフコト点図のデータベースであり、フコト点図の種類、付与位置、記号形状、読みなどをキーに、フコト点を検索することができる。現在は、築島裕(編)『訓点語彙集成第1巻』(汲古書院, 2007年) 所載の主要フコト点図26種をデータベース化している。今後、他のフコト点図の情報を増補収録していく予定である。
- 全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成 (https://mmsrv.ninjal.ac.jp/hogendanwa_db/)
方言談話のテキストファイル(文字化テキストと共通語訳)と音声ファイルを収録したデータベース(国立国語研究所(編), 国書刊行会, 全20巻, CD-ROM付き書籍, 2002-2008年)である。方言音声を試聴することも可能である。

- ・分類語彙表一増補改訂版データベース (<https://clrd.ninjal.ac.jp/goihyo.html>)
 分類語彙表とは、「語を意味によって分類・整理したシソーラス(類義語集)」である。書籍版(pdf)の『分類語彙表一増補改訂版』の元となったデータを、データベースソフトに取り込めるよう、CSV形式に加工したものである。レコード総数は101,070件である。なお、書籍版(有償)では、五十音順索引や逆引き検索などの検索環境が整えられている。
- ・国立国語研究所言語処理データ集 (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/lanpro/>)
 『国立国語研究所言語処理データ集』(国立国語研究所(編),全8巻,1985-2001年)を公開している。
- ・国語研変体仮名字形データベース (<https://cid.ninjal.ac.jp/hentaiganaDB/>)
 変体仮名の字形画像を、音価・字母・Unicodeで層別したデータベースであり、各階層見出しラベルから「学術情報交換用変体仮名」サイトの該当文字(または検索結果)にリンクしている。また、個々の字形画像から原資料の該当箇所にもリンクしている。2022年3月現在、春色梅児与美(巻一,巻二,巻三),比翼連理花廻志満台(初編上,初編中,初編下),諸国方言物類称呼(巻之一,巻之二,巻之三,巻之四,巻之五)の字形データを収録している。
- ・うちなーぐち活用辞典テキストデータベース (<https://doi.org/10.15084/00003211>)
 「宮良信詳(編著)『うちなーぐち活用辞典』,東京:国立国語研究所言語変異研究領域,2021」を原本とするデータベース(txtファイル)である。国立国語研究所学術情報リポジトリを通じて公開している。
- ・鳩間方言音声語彙データベース (<https://www2.ninjal.ac.jp/hatoma/>)
 『鳩間方言音声語彙データベース』(txtファイルを国立国語研究所学術情報リポジトリを通じて公開,DOI:10.15084/00003209)をhtml化して音声ファイルとリンクさせたものである。なお,当該データベースは,『鳩間方言辞典』(pdf版を国立国語研究所学術情報リポジトリを通じて公開,DOI:10.15084/00002991)をもとに作成している(すべて同じデータから作成している)ため,原本は一つである。
- ・ビデオ刺激による言語行動意識調査 (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/video-shigeki/>)
 国立国語研究所が1996-1998年にかけておこなった母国と現住国における自分の言語行動,現住国の人々の言語行動についての観察や予測について調べる意識調査(ブラジル,フランス,韓国,アメリカ,ベトナムの在外日本人,同5箇国出身の在日外国人を主な対象とした。)のうち「場面6:頼みごとへの返事(頼んだ側の用件のきりだし,頼まれた側の曖昧な返答)」のデータ(在外日本人211人,在日外国人159人,国内日本人60人)を公開している。本調査の成果報告書として,『「言語事象を中心とした我が国をとりまく文化摩擦の研究」ビデオ刺激による言語行動意識調査報告書 資料編』(DOI:10.15084/00002319)および『「言語事象を中心とした我が国をとりまく文化摩擦の研究」ビデオ刺激による言語行動意識調査報告書 分析編』(DOI:10.15084/00002328)の2冊が作成されており,国立国語研究所学術情報リポジトリを通じて公開されている。
- ・リアルタイム日本語調音運動データベース(The real-time MRI articulatory movement database: rtMRIDB) (<https://rtmridb.ninjal.ac.jp>)
 医療用MRI装置を特殊な設定で稼働させることによって,日本語分節音生成時の声道正中矢状断面の形状変化を毎秒約14ないし27フレームの速度で記録した動画のデータベースである。調音運動の可視化という調音音声学の夢を実現したデータであり,調音音声学理論の批判的検討や日本語音声の研究,日本語音声の教育,声道形状からの音声合成などに広く活用できる可能性がある。話者22名のデータ26,000発話以上のデータを改良された検索系と共に公開している。検索したデータを1本のmp4形式の動画に編集することが可能で,この動画は,再生することに加え,ダウンロードすることも可能である。
- ・国立国語研究所が行った世界の言語研究機関調査 (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/world/>)
 国立国語研究所が2001年にCD-ROMで公開した世界の言語研究機関調査の結果をウェブ上で閲覧可能にしたものである。(英文)
- ・外来語定着度調査 (https://mmsrv.ninjal.ac.jp/gairaigo_yoron/)
 国立国語研究所が2002-2004年にかけておこなった外来語定着度調査の集計データである。外来語405語について,うち120語については750人を,295語については2111-2118人を対象に,認知率,理解率,使用率を調査した。

- 日本語観国際センサス (https://mmsrv.ninjal.ac.jp/n_census/)
国立国語研究所が1997年1月-1998年8月にかけておこなった日本語観、母語観、英語観についての国際比較調査「日本語観国際センサス」(International Census on Attitudes toward Japanese: ICATJ)の回答データである。調査は、日本を含む28の国と地域(アメリカ、ブラジル、アルゼンチン、韓国、オーストラリア、シンガポール、タイ、イギリス、フランス、ドイツ、オランダ、ハンガリー、イタリア、スペイン、ポルトガル、ロシア、イスラエル、インド、インドネシア、フィリピン、ベトナム、モンゴル、トルコ、ナイジェリア、エジプト、台湾、中国、日本)で32,471名を対象に実施した。
- 沖縄語辞典データ集 (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/okinawago/>)
国立国語研究所資料集5『沖縄語辞典』(第9刷, 1963年刊行, 2001年改訂, DOI: 10.15084/00002266)の本文篇, 索引篇, 地名一覧表のデータ(Excel形式)である。
- 発話対照データベース (<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/speech/>)
日本語学習者(中国語, 韓国語, タイ語母語話者)による日本語の発話と, それとほぼ同内容の母語発話とを収集・整理するとともに, 比較のため, 同じ課題に基づく日本語母語話者の日本語発話データも収集したものである。発話課題は, スピーチとロールプレイ(あらすじあり/あらすじなし)の二つのカテゴリに分かれている。それぞれの文字化データを公開している。
- 行政情報を分かりやすく伝える言葉遣いの工夫に関する意識調査(自治体調査)
(<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/zititai/>)
自治体の首長・職員を対象とした, 住民に分かりやすい言葉で伝える工夫や, 住民との円滑なコミュニケーションを図る工夫についての意識調査(2003年実施)の回答データ(Excel形式)である。

5

学術刊行物

(1) 所員による著書・編書

- Yoshiyuki Asahi, Mayumi Usami, and Fumio Inoue (eds.)
Handbook of Japanese Sociolinguistics, De Gruyter Mouton, 2022.4.18, ISBN: 9781501507472.
- 石田友梨, 大向一輝, 小風綾乃, 永崎研宣, 宮川創, 渡邊要一郎(編), 石田友梨, 大向一輝, 小風綾乃, 永崎研宣, 宮川創, 渡邊要一郎(著)
『人文学のためのテキストデータ構築入門: TEIガイドラインに準拠した取り組みにむけて』, 文学通信, 2022.8.4.
- 大西拓一郎(著)
『方言間一致率の分布と距離図集』, 私家版(調査報告書), 2022.8.18.
- 鎌田修, 由井紀久子, 池田隆介(編), 野山広(著), 鎌田修(監修)
『日本語プロフィシエンシー研究の広がり』, ひつじ書房, 2022.10.3, ISBN: 9784823411373.
- 野山広, 福島育子, 帆足哲也, 山田泉, 横山文夫(編), 野山広(著)
『地域での日本語活動を考える—多文化社会葛飾からの発信』, ココ出版, 2022.10.25, ISBN: 9784866760599.
- Makoto Yamazaki, Haruko Sanada, Reinhard Köhler, Sheila Embleton, Relja Vulcanović, Eric S. Wheeler (eds.), Radek Čech, Barbora Benešová, Ján Mačutek, Xinying Chen, Kim Gerdes, Sylvain Kahane, Marine Courtin, Michele A. Cortelazzo, Franco M. T. Gatti, George K. Mikros, Arjuna Tuzzi, Sheila Embleton, Dorin Uritescu, Eric S. Wheeler, Antoni Hernández-Fernández, Juan María Garrido, Bartolo Luque, Iván González Torre, Yoshifumi Kawasaki, Tatiana A. Litvinova, Olga A. Litvinovam, Emmerich Kelih, Jíří Milička, Václav Cvrček, David Lukeš, Tereza Motalova, Adam Pawłowski, Tomasz Walkowiak, Kateřina Pelegrinová, Haruko Sanada, Gen Tsuchiyama, Yawen Wang, Haitao Liu, and Makoto Yamazaki
Quantitative Approaches to Universality and Individuality in Language, De Gruyter Mouton, 2022.10.26, ISBN: 9783110628081.

- 青木博史, 岡崎友子, 小木曾智信 (編)
『コーパスによる日本語史研究 中古・中世編』, ひつじ書房, 2022.10.27, ISBN: 9784823411335.
- Hajime Hoji, Yukinori Takubo, and Daniel Plesniak (eds.)
The Theory and Practice of Language Faculty Science, De Gruyter Mouton, 2022.11.7, ISBN: 9783110724677.
- 大西拓一郎 (編)
『「市民科学」プロジェクト 2022 年度シンポジウム集録「長野県は宇宙県」の天文史 100 年と市民科学』, 私家版, 2023.1.31.
- 石黒圭 (編), 石黒圭, 井伊菜穂子, 市江愛, 井上雄太, 本多由美子 (著)
『日本語研究者がやさしく教える「きちんと伝わる」文章の授業』, 日本実業出版社, 2023.2.25, ISBN: 9784534059864.
- 岩崎拓也 (著)
『現代日本語における句読点の研究: 研究概観と使用傾向の定量的分析』, ココ出版, 2023.2.28, ISBN: 9784866760629.
- 山田真寛, 森澤ケン (著)
『与那国の人とことば 2021 年』, 言語復興の港, 2023.3.31.

(2) 『国立国語研究所論集』 (NINJAL Research Papers)

国立国語研究所における研究活動の活性化と成果の発表および所内若手研究者の育成を目的として、各年度に 2 回 (原則として 7 月と 1 月), オンラインの形態で発刊している (ISSN: 2186-1358)。なお、2020 年度までは、冊子体でも発行をおこなっていた。

第 23 号 (2022 年 7 月)

- 上野善道
「岩手県田野畑村方言の用言アクセント資料 (4): 形容詞 (2)」, 1–28 頁, DOI: 10.15084/00003564.
- 宇佐美まゆみ, 張未未
「雑談における日本語学習者による不自然な終助詞「ね」「よ」「よね」: 『BTSJ 日本語自然会話コーパス (2020 年版)』を用いて」, 29–57 頁, DOI: 10.15084/00003565.
- KOMIYA Kanako, TANABE Aya, and SHINNOU Hiroyuki
“Diachronic Domain Adaptation of Word Sense Disambiguation in Corpus of Historical Japanese Using Word Embeddings”, pp. 59–73, DOI: 10.15084/00003566.
- 麻生玲子, セリック ケナン, 中澤光平
「日琉諸語の記述言語学を対象としたメタ研究の試み: 南琉球諸語の過去 40 年間の語彙研究の評価と課題」, 75–98 頁, DOI: 10.15084/00003567.
- 麻生玲子, セリック ケナン, 中澤光平
「[関連データ] 南琉球諸語を対象にした過去 40 年間 (1980 年～2020 年) の語彙研究文献リスト」, DOI: 10.15084/00003568.
- 星野祐子, 田嶋明日香, 高崎みどり
『日本語日常会話コーパス』を利用した指示語 (コソアド) の用法の識別について」, 99–117 頁, DOI: 10.15084/00003569.

第 24 号 (2023 年 1 月)

- Clemens POPPE
“Pitch Accent and Morphology in Japanese and Korean Dialects: Toward a Typology”, pp. 1–44, DOI: 10.15084/00003686.

- 小松原哲太
『現代語の助詞・助動詞』の電子化とその応用：直喩へのアノテーションの事例』, 45–58 頁, DOI: 10.15084/00003687.
- 佐藤智照
「第二言語としての日本語の文章読解における語用論的推論過程」, 59–87 頁, DOI: 10.15084/00003688.
- 中井陽子, 夏雨佳
「ナラティブの協働構築によるラポール形成：母語話者による留学中の苦労話の語りを通して」, 89–112 頁, DOI: 10.15084/00003689.
- 井伊菜穂子
「接続詞の出現位置からみた接続領域の広さの特徴：人文科学論文の接続詞を対象に」, 113–131 頁, DOI: 10.15084/00003690.
- 西内沙恵
「多義性を認める言語学的テストの有効性：現代日本語の名詞・形容詞・動詞を対象に」, 133–152 頁, DOI: 10.15084/00003691.
- 小磯花絵, 天谷晴香, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴, 西川賢哉, 渡邊友香
『日本語日常会話コーパス』設計と構築」, 153–168 頁, DOI: 10.15084/00003692.
- 中澤光平
「南琉球与那国方言における動詞のアクセント交替の通時的考察」, 169–194 頁, DOI: 10.15084/00003693.

6 研究成果の発信と普及

国立国語研究所では、研究成果を社会に発信・還元するために、各種のシンポジウムや研究会を開催している。ここでは、専門家向けのものをあげる。

(1) 国際シンポジウム

国立国語研究所が主体となって実施する研究や、他機関との連携研究による優れた研究成果のうち、時宜を得た課題を取り上げ、海外からの専門家も交えて、論旨を深めながら学術界に公表するため、国際シンポジウムの開催や国際学会の共催をおこなっている。

NINJAL 国際シンポジウム

NAMED 2022 (Neglected aspects of motion-event description 2022)

[2022.11.3–4, 京都大学・オンライン (ハイブリッド)]

2022年11月3日

- Opening
- Morning (Moderator: Yo Matsumoto (on site))
 - Kiyoko Eguchi (on-site) (Osaka University)
“Tendencies in the use of deictic verbs and deictic preverbs in Hungarian”
 - Gladys Camacho Rios (online) (The University of Texas at Austin)
“Complex associated motion morphemes in South Bolivian Quechua”
 - Daniel Ross, Joseph Lovstrand, and Bastian Persohn (online)
“Deictic location in verb morphology: between deictic directionals and associated motion”
- Poster Session
 - Yunfan Lai
“Where is there: a quantitative study of locational arguments of motion verbs in Khroskyabs”
 - Takahiro Morita (Kyoto University)
“*Elle vient vers elle*: Functional meanings of French deictic verb *venir*”

- ▶ Amanda Brown and Christopher Hromalik
“Predicting Gesture Viewpoint in Motion Descriptions in Japanese and English”
- ▶ Marina Zhukova
“Expression of Spatial Deixis via Co-Speech Gestures: Discourse Analysis of Motion Events in Russian”
- ▶ Kazuhiro Kawachi (Keio University) and Ikuko Matsuse (Center for Newar Studies)
“High frequency of deixis mention due to different types of obligatory requirements to specify deictic directions in Kupsapiiny and Kathmandu Newar”
- ▶ Kiyoko Toratani (York University)
“The function of a Japanese deictic verb *kuru* ‘come’ in food tasting descriptions”
- ▶ Karl Seifen (Université Lumière–Lyon 2 / CNRS-DDL)
“A typological study of Deixis encoding in motion description”
- Early Afternoon (Moderator: Alice Vittrant (on site))
 - ▶ Yu Li (online)
“Motion serial verb constructions in Zauzou”
 - ▶ Sérgio N. Menete and Guiying Jiang (online) (Xiamen University)
“Multiple Semantic Components in Changana Motion Verbs: The case of *-famba*”
 - ▶ Shuya Zhang (on-site)
“Functional overlap between indefinite direction and associated motion: a diachronic analysis of the prefixes *j-* and *c-* in Situ Rgyalrong (Sino-Tibetan)”
 - ▶ Benjamin Fagard, Christine Lamarre, Wei Bian, Nathaniel Sims, and Anetta Kopecka (online)
“Back to reverbives: looking for grammaticalization paths”
- Late Afternoon (Moderator: Laure Sarda (on site))
 - ▶ Philippe Bourdin (online) (York University)
“When French *venir* gets prefixed: reflections on four distinct lexicalization trajectories”
 - ▶ Laura Peiró-Márquez and Iraide Ibarretxe-Antuñano (online)
“Rotating in speech and gesture: Multimodal descriptions of a fine-grained distinction in Spanish”
 - ▶ Joel Olofsson and Shiro Shibata (online)
“Constructional strategies in the translation of motion events from Swedish to Japanese in Henning Mankell’s crime novels”
- Plenary Talk 1 (Moderator: Yo Matsumoto)
 - ▶ Bernhard Wälchli (online) (Stockholm University)
“Towards a typology of the imperative ‘come!’-domain”

2022年11月4日

- Morning (Moderator: Naonori Nagaya (on site))
 - ▶ Aicha Belkadi (online)
“What associated motion tells us about Deictic Directionality”
 - ▶ Kazuhiro Kawachi (online) (Keio University)
“Diachronic development of associated motion constructions in Kupsapiiny”
 - ▶ John Shuey and Jürgen Bohnemeyer (on-site)
“Examination of Double-Marking in Path Lexicalization”
- Plenary Talk 2 (Moderator: Anetta Kopecka)
 - ▶ Christine Lamarre (on-site)
“The odd one out: Revertive Motion markers and their relation with dynamic deixis-related grams”

- Early afternoon (Moderator: Takahiro Morita (on site))
 - Naonori Nagaya, Mai Hayashi, Yuko Morokuma, Yui Suzuki, Shun Takahashi, and Mizuki Tanigawa (on-site)
 - “Towards an experiment-based semantic map of paths”
 - Ludovica Lena, Eric Corre, Lise Fontaine, and Laure Sarda (on-site)
 - “Exploring directional deixis through parallel corpora: On the French verb *arriver* and its counterparts in Chinese, English, German, Italian, Hungarian and Russian”
 - Chiara Minoccheri (on-site) (Laboratoire CLLE, CNRS & UT2J)
 - “Dancing here and there: Deictic expressions in contemporary dance motion instructions”
- Late afternoon (Moderator: Kazuhiro Kawachi (online))
 - Adeline Tan (online)
 - “The hortative use of *lai*³⁵*k^hu*²¹³ and *lai*³⁵ ‘go’ in Chaozhou (Southern Min, Sinitic)”
 - Nathaniel Sims (online) (INALCO-CRLAO)
 - “A corpus study of orientational prefixes in Rma (Qiang)”
 - Maja Robbers (online) (Uppsala University)
 - “The event-structuring power of deictic motion verbs: On inference and context-driven distinctions between Goal and Source of motion”
 - David Gyorfı and Jeremy Pasquereau (online)
 - “The Kazakh progressive construction and the odd behavior of motion verbs”
- Plenary Talk 3 (Moderator: Takahiro Morita)
 - Holger Diessel (online)
 - “Deixis in spatial language and social interaction”

国際シンポジウム・ワークショップ

29th International Conference on Head-Driven Phrase Structure Grammar (HPSG 2022)

[2022.7.29–31, オンライン]

2022年7月29日

- Welcome remarks
- Regular Session 1 (Chair: Yusuke Kubota)
 - Nurit Melnik (The Open University of Israel)
 - “Copy raising reconsidered”
 - Petter Haugereid (Western Norway University of Applied Sciences)
 - “An HPSG account of ground promotion in Norwegian”
 - Stefan Müller (Humboldt-Universität zu Berlin), Antonio Machicao Y Priemer (Humboldt-Universität zu Berlin), Roland Schäfer (Humboldt-Universität zu Berlin), and Felix Bildhauer (Leibniz-Institut für Deutsche Sprache)
 - “Towards a treatment of register phenomena in HPSG”
 - Hiwa Asadpour (JSPS International Fellow, University of Tokyo), Shene Hassan (Rackow Schule Frankfurt), and Manfred Sailer (Goethe-University Frankfurt a.M.)
 - “Non-“wh” relatives in English and Kurdish: Constraints on grammar and use”
- Regular Session 2 (Chair: Elodie Winckel)
 - Chenyuan Deng (Humboldt-Universität zu Berlin)
 - “An HPSG approach for classifiers and measure words in Mandarin Chinese”
 - Antonio Machicao Y Priemer (Humboldt-Universität zu Berlin) and Chenyuan Deng (Humboldt-

Universität zu Berlin)

“The V+T+de+N construction in Chinese: A case of bracketing paradox”

▸ Berthold Crysmann (CNRS & Université Paris Cité)

“A phrase-structure based approach to German asymmetric coordinations”

▸ Robert Borsley (University of Essex & Bangor University)

“On the structure of Welsh noun phrases”

▸ Jakob Maché (Universidade de Lisboa)

“Accounting for variation in Western Benue resultative verb constructions”

• Invited Talk 1 (Chair: David Y. Oshima)

▸ Seiko Fujii (The University of Tokyo)

“Idiomaticity and regularity in grammatical constructions: What can we learn from the clause-linking construct-i-con?”

2022年7月30日

• Regular Session 3 (Chair: Elodie Winckel)

▸ Jingcheng Niu (University of Toronto) and Gerald Penn (University of Toronto)

“Chinese quantifier scope, concord, and lexical resource semantics”

▸ Yusuke Kubota (National Institute for Japanese Language and Linguistics) and Robert Levine (Ohio State University)

“Lexical idiosyncrasies—constructions or inferences?: A case study on English auxiliaries”

▸ Shuichi Yatabe (The University of Tokyo)

“Respectively interpretation and binding conditions A and B”

▸ David Y. Oshima (Nagoya University)

“How to be a ham sandwich or an eel: The English deferred equative and the Japanese eel sentence”

• Invited Talk 2 (Chair: Yusuke Kubota)

▸ Francis Bond (Palacký University Olomouc)

“Documenting computational grammars with the Linguistic Type Database”

2022年7月31日: Workshop on Computational Linguistics on East Asian Languages

• Workshop Session 1 (Chair: David Y. Oshima)

▸ James Cooper Roberts (Boston University), Michael Fang (Boston University), Noah Trudel (Boston University), and Patrick Juola (Duquesne University)

“Who writes of Kaguya-hime? Investigating the authorship of The Tale of the Bamboo Cutter using stylometric software”

▸ Luis Morgado Da Costa (Palacký University Olomouc) and Francis Bond (Palacký University Olomouc)

“Grammatical error detection using HPSG grammars: Diagnosing common Mandarin Chinese grammatical errors”

• Workshop Invited Talk (Chair: Yusuke Kubota)

▸ Koji Mineshima (Keio University)

“Evaluating compositionality in Japanese textual entailment”

• Workshop Session 2 (Chair: Elodie Winckel)

▸ Giuseppe Samo (Beijing Language and Culture University) and Xu Chen (Beijing Language and Culture University)

“Syntactic locality in Chinese in-situ and ex-situ wh-questions in transformer-based deep neural network language models”

▸ Chihiro Taguchi (The University of Edinburgh)

“Consistent grammatical annotation of Turkic languages for more universal Universal Dependencies”

- Closing remarks

International Workshop on Nominalization, Gender and Classifiers

[2022.8.1, Indian Institute of Technology Madras (Chennai, India)]

- Welcome address : Professor Jyotirmaya Tripathy (Head of Humanities and Social Sciences)
- Introduction : Professor Prashant Pardeshi (NINJAL)
- Talk 1
 - Masayoshi Shibatani (Rice University/Kobe University/University of Tokyo)

“Toward “Dynamic Functional Typology”—Nominalization, gender, and classifiers—”
- Talk 2
 - Prashant Pardeshi (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

“Classifier, Gender marking and Relativization in Marathi : A nominalization perspective”
- Talk 3
 - Gitanjali Bez (Department of Linguistics, Gauhati University)

“Assamese and Bengali classifiers : A comparative study in nominalization perspective”
- Discussions and Closing Remarks : Professor Rajesh Kumar

International Workshop on Nominalization, Gender and Classifiers

[2022.8.4, Deccan College Post-Graduate and Research Institute (Pune, India)]

- Welcome address : Prof. Pramod Pandey (Vice Chancellor, Deccan College)
- Introduction : Prof. Prashant Pardeshi
- Talk 1
 - Masayoshi Shibatani (Rice University/Kobe University/University of Tokyo)

“Toward “Dynamic Functional Typology”—Nominalization, gender, and classifiers—”
- Talk 2
 - Prashant Pardeshi (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

“Classifier, Gender marking and Relativization in Marathi : A nominalization perspective”
- Talk 3
 - Gitanjali Bez (Department of Linguistics, Gauhati University)

“Assamese and Bengali classifiers : A comparative study in nominalization perspective”
- Discussions and Closing Remarks : Prof. Sonal Kulkarni

International Workshop on Nominalization, Gender and Classifiers

[2022.8.6, The Central Institute for Indian Languages (Mysore, India)]

- Welcome address : Prof. Shailendra Mohan (Director, CIIL)
- Introduction : Prof. Prashant Pardeshi (NINJAL)
- Talk 1
 - Masayoshi Shibatani (Rice University/Kobe University/University of Tokyo)

“Toward “Dynamic Functional Typology”—Nominalization, gender, and classifiers—”
- Talk 2
 - Prashant Pardeshi (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

“Classifier, Gender marking and Relativization in Marathi : A nominalization perspective”
- Talk 3
 - Gitanjali Bez (Department of Linguistics, Gauhati University)

“Assamese and Bengali classifiers : A comparative study in nominalization perspective”

- Discussions and Closing Remarks: Prof. Umarani Pappuswamy (CIIL)

言語資源ワークショップ 2022 [2022.8.30–31, オンライン]

2022年8月30日

- オープニング (Zoom)
- 口頭発表セッション 1 (Zoom)
 - ▶ 小原みと希 (中央大学文学研究科国文学専攻)
 - 「源氏物語における評価の形容詞」
 - ▶ 廉沢奇 (神戸大学国際文化研究科)
 - 「日本語日常会話コーパス」に見る ABAB 型基本オノマトペの音韻パターン: 日本語教育の視点から」
 - ▶ 伊藤紀子 (同志社大学), 岩下志乃 (東京工科大学), 杉本徹 (芝浦工業大学), 林篤司 (東京工科大学), 卜秋予 (同志社大学大学院文化情報学研究科)
 - 「ユーザの特性情報付きチャットボットとの雑談対話コーパスの概要」
 - ▶ 波多野博頭 (筑波大学), 王可心 (神戸大学大学院), 陳凱僑 (神戸大学大学院), 林良子 (神戸大学)
 - 「疑問・非疑問発話の韻律典型性を捉える試み—日本語母語話者と学習者の比較—」
- 招待講演 1 (Zoom)
 - ▶ 高道慎之介 (東京大学)
 - 「開かれた音声情報処理のためのコーパス」
- ポスターセッション 1 (Zoom/ブレイクアウトルーム)
 - ▶ 上出大河 (國學院大學大学院文学研究科)
 - 「日本語学習者による用例を通時的観点で分析可能とするコーパス開発の意義とその可能性」
 - ▶ 相良かおる (西南女学院大学), 西嶋佑太郎 (医師), 東条佳奈 (大阪大学), 高崎智子 (西南女学院大学), 山崎誠 (国立国語研究所)
 - 「「急性」を含む病名の語構成」
 - ▶ 劉冠偉 (東京大学史料編纂所), 中村覚 (東京大学史料編纂所), 山田太造 (東京大学史料編纂所)
 - 「史的文字連携システム API の利用: 東京大学史料編纂所が公開する仮名漢字字形を検索するツールの開発」
 - ▶ 中俣尚己 (大阪大学), 麻子軒 (関西大学)
 - 「『日本語話題別会話コーパス: J-TOCC 語彙表』の公開と日本語教育むけ情報サイトにむけた指標の検討」
 - ▶ 加藤祥 (目白大学), 浅原正幸 (国立国語研究所)
 - 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』書籍サブコーパスの小説サンプルに対するジャンル情報付与」
 - ▶ 平林照雄 (東京農工大学生物システム応用科学府), 古宮嘉那子 (東京農工大学), 浅原正幸 (国立国語研究所)
 - 「科学技術論文における「問題」の周辺文の問題内容の抽出」
 - ▶ 沖本与子 (東京外国語大学)
 - 「対のある自他動詞と文法を組み合わせた項目を用いたオンライン学習の解答傾向—5 週間のオンライン学習で用いた項目の分析を中心に—」
 - ▶ 鈴木成典 (国際基督教大学大学院アーツ・サイエンス研究科), 五十嵐陽介 (国立国語研究所), 李勝勳 (国際基督教大学, ヴェンダ大学)
 - 「NINJAL データベースを活用した言語研究の実施について」
 - ▶ 柏野和佳子 (国立国語研究所), 西川賢哉 (国立国語研究所), 渡邊友香, 小磯花絵 (国立国語研究所)
 - 「『名大会話コーパス』中納言版・ひまわり版公開データの形態論情報の修正」
 - ▶ 浅野恵子 (順天堂大学医学部), 陳森 (東京福祉大学社会福祉学部)
 - 「文化的・言語的相違による「ハミング・鼻歌」の初発語彙使用一日・中・英・米語のコーパスによる分析—」
 - ▶ 胡佳芮 (一橋大学大学院言語社会研究科)
 - 「「女(ひと)」のような二重表記が検索できる歌詞コーパスの設計と構築」
 - ▶ 安芝恩
 - 「作文評価における日本語教師の評価ポリシーの多様性—ホリスティック評価の観点から—」

- ▶ 小磯花絵 (国立国語研究所), 天谷晴香 (国立国語研究所), 居關友里子 (国立国語研究所), 白田泰如 (国立国語研究所), 柏野和佳子 (国立国語研究所), 川端良子 (国立国語研究所), 田中弥生 (国立国語研究所), 藤越 (国立国語研究所), 西川賢哉 (国立国語研究所)
 - 「『子ども版日本語日常会話コーパス』の構築」
- ▶ 山口昌也 (国立国語研究所), 森篤嗣 (京都外国語大学外国語学部)
 - 「日本語教師養成のための音読観察実習における多段階の振り返りを考慮したビデオアノテーション共有手法」
- ▶ 東条佳奈 (大阪大学), 黒田航 (杏林大学), 相良かおる (西南女学院大学), 高崎智子 (西南女学院大学), 西嶋佑太郎 (医師), 麻子軒 (関西大学), 山崎誠 (国立国語研究所)
 - 「実践医療用語_語構成要素語彙試案表 Ver.2.0 の構築」
- ▶ 野口咲帆 (お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科), 田中リベカ (お茶の水女子大学), 戸次大介 (お茶の水女子大学)
 - 「テ形従属節の用法分類に向けたアノテーションガイドラインの構築」
- ▶ 西川賢哉 (国立国語研究所)
 - 「TextGrid 不要の Praat アノテーション管理」
- ▶ 麻子軒 (関西大学)
 - 「テレビゲームコーパスの構築とその利活用」
- 口頭発表セッション 2 (Zoom)
 - ▶ 青山文啓 (桜美林大学大学院)
 - 「日本語の動詞とその結合価」
 - ▶ 福田航平 (東京外国語大学大学院総合国際学国際研究科世界言語社会専攻), 投野由紀夫 (東京外国語大学)
 - 「英語学習用活用語彙リストの提案—CEFR-J Wordlist のコロケーション・データセットの試み」
 - ▶ パウロヴィチ・ミハ (リュブリエーナ大学文学部アジア研究学科)
 - 「スロベニア人初級・中級・上級日本語学習者コーパスの構築と文法的誤用分析」

2022年8月31日

- 口頭発表セッション 3 (Zoom)
 - ▶ 泉大輔 (東京外国語大学)
 - 「現代日本語の名づけにおける「文の包摂」」
 - ▶ 石原佳弥子
 - 「「のだ」の〈言い換え〉用法に接続詞が前置する条件の一考察—新書テキストを素材として—」
 - ▶ 星野靖子 (放送大学文化科学研究科)
 - 「Twitter にみられる特徴的な慣用表現「名前をつけたい」に関する考察」
- 口頭発表セッション 4 (Zoom)
 - ▶ 陳迪 (神戸大学)
 - 「書き言葉・話し言葉コーパスデータに基づく高頻度漢語動名詞の品詞性の再考：日本語教育の視点から」
 - ▶ 小西円 (東京学芸大学)
 - 「上級日本語学習者の文体把握に関するケーススタディ—「BCCWJ 図書館サブコーパス文体情報」を用いた読解調査—」
- 招待講演 2 (Zoom)
 - ▶ 菅野倫匡 (筑波大学)
 - 「芥川賞作品コーパスの構築のために」
- ポスターセッション 2 (Zoom/ブレイクアウトルーム)
 - ▶ 夏目和子 (名古屋大学), 佐藤理史 (名古屋大学)
 - 「エンタメ小説における会話文の発話意図分析」

- ▶ 北村達也 (甲南大学知能情報学部), 川村よし子 (東京国際大学)
「E テレの児童向け教育番組における単語出現頻度」
- ▶ 峯尾海成 (静岡理工科大学大学院), LI XIAORAN (静岡理工科大学大学院理工学研究科), 谷口ジョイ (静岡理工科大学), 高野敏明 (静岡理工科大学)
「wav2vec モデルによる方言音声資料のテキスト化」
- ▶ 居關友里子 (国立国語研究所), 小磯花絵 (国立国語研究所)
「幼児と保護者によるごっこ遊びの相互行為: 日常場面に関する知識の利用に着目して」
- ▶ 朴秀娟 (神戸大学), 于一楽 (滋賀大学)
「「一周回って」の意味・用法をめぐって—Twitter の投稿データを言語資源として—」
- ▶ 山崎誠 (国立国語研究所), 黒田航 (杏林大学), 東条佳奈 (大阪大学), 西嶋佑太郎 (医師), 麻子軒 (関西大学), 相良かおる (西南女学院大学)
「医療記録における縮約表現の量的構造—医療用語との比較—」
- ▶ 有本泰子 (千葉工業大学), 真弓花 (千葉工業大学)
「様々な対話場面における speech-laugh の発生タイミングの分析」
- ▶ 東泉裕子 (東洋大学), 高橋圭子 (東洋大学)
「近現代語における「もちろん」の用法」
- ▶ 本多由美子 (一橋大学・国立国語研究所), 三枝令子 (元一橋大学)
「医学書テキストのたとえる表現 (2) —接尾辞「一状」の特徴」
- ▶ 川端良子 (国立国語研究所)
「日本語日常会話における他称表現の使用傾向について」
- ▶ 田中弥生 (国立国語研究所)
「打ち合わせにおける談話構造の修辞機能からの分析」
- ▶ 白田泰如 (国立国語研究所)
「日常会話における「状況づけられた語り」」
- ▶ ニハル・チャクマク ビルギル (アンカラ大学/麗澤大学), 千葉庄寿 (麗澤大学)
「コーパスからの複合動詞の自動抽出の試み—近現代作家の文学作品からの用例抽出を例に—」
- ▶ 寺嶋弘道 (立命館アジア太平洋大学), 板井芳江 (立命館アジア太平洋大学)
「日本語学習者のコーパスツールの使用実態—作文での産出に着目して—」
- ▶ 東条佳奈 (大阪大学), 黒田航 (杏林大学), 相良かおる (西南女学院大学), 西嶋佑太郎 (医師), 麻子軒 (関西大学), 山崎誠 (国立国語研究所)
「医療記録における縮約表現の分析」
- ▶ 加藤恵梨 (愛知教育大学)
「児童作文における書き出しと結びの分析」
- ▶ 櫻井芽衣子 (日本工業大学)
「「つまり」による換言が促す理解の範囲について」
- ▶ 白鳥恵大 (千葉工業大学情報工学部), 大久保港 (千葉工業大学), 松田匠翔 (千葉工業大学), 有本泰子 (千葉工業大学)
「自発対話音声に対する叫び声アノテーション」
- ▶ 向坂卓也 (外交学院 (中国))
「学術論文と論説文における「だから」の使用の比較」
- ▶ 佐藤久美子 (国立国語研究所)
「関東・東北方言における動詞ラ行音節の撥音化と促音化—COJADS データより—」
- ▶ 中渡瀬秀一 (国立情報学研究所)
「リサーチデザインにおける言語資源の役割—QA サイトコーパス (知恵袋データ) の場合—」
- 口頭発表セッション 5 (Zoom)
 - ▶ 李勝勳 (国際基督教大学), 倉部慶太 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所), 品川大輔 (東京

外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

「少数言語のデジタルアーカイブ: PhoPhoNO と BantuDArc」

- ▶ 石川慎一郎 (神戸大学), 友永達也 (神戸大学附属小学校), 大西遼平, 岡本利昭, 勝部尚樹, 川嶋久予, 岸本達也, 村中礼子 (神戸大学附属中等教育学校)

「小中高大生による日本語絵描写ストーリーライティングコーパス」(JASWRIC)の構築: L1/L2 日本語研究の新しい資料として」

- クロージング (Zoom)

Evidence-based Linguistics Workshop 2022 [2022.9.5-6, 国立国語研究所・オンライン (ハイブリッド)]

2022年9月5日

- 開催形態の事前説明・オープニング

- セッション 1: 国立国語研究所プロジェクト紹介 (国立国語研究所講堂/Zoom)

- ▶ 浅原正幸 (国立国語研究所)

「プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進 (統括)」」

- ▶ 浅原正幸 (国立国語研究所)

「サブプロジェクト「アノテーションデータを用いた実証的計算心理言語学」」

- セッション 2: 口頭発表 (国立国語研究所講堂/Zoom)

- ▶ 吉田樹生 (東京大学)

「口語シンハラ語の効率的焦点標示」

- ▶ 佐近優太 (東京外国語大学・日本学術振興会)

「インドネシア語の受身文における動作主の標示形式について」

- セッション 3: 口頭発表 (国立国語研究所講堂/Zoom)

- ▶ 菊地礼 (国立国語研究所)

「例外的な直喩表現のはたらきについての検討」

- ▶ 施葉飛 (東京慈恵会医科大学・中央大学)

「ヴォイスに関わる助動詞・補助動詞の相互承接について」

- ▶ 井原駿 (神戸大学), 伊藤克将 (日本学術振興会特別研究員 PD・上智大学・Universität zu Köln)

“Exploring the discourse move of exclamatives”

- セッション 4: ポスター発表 (国立国語研究所講堂・多目的室・セミナー室 1-3/Zoom)

- ▶ 黒田航 (杏林大学), 阿部慶賀 (和光大学), 横野光 (明星大学), 土屋智行 (九州大学), 小林雄一郎 (日本大学), 金丸敏幸 (京都大学), 浅尾仁彦 (情報通信研究機構 (NICT)), 田川拓海 (筑波大学)

「容認度評定に影響する要因の定量的評価: 日本語容認度評定データ (ARDJ) から得られた知見」

- オンライン発表

- Zoom A 会場 (ブレイクアウトルーム)

- オンサイト聴講: 講堂

- ▶ Vincent W.J. van Gerven Oei (カリフォルニア大学サンタバーバラ校), 宮川創 (国立国語研究所)

「ナイル・ヌビア諸語における属格主語の言語類型論的位置付け」

- オンライン発表

- Zoom B 会場 (ブレイクアウトルーム)

- オンサイト聴講: 多目的室

- ▶ 岡田理恵子 (国際医療福祉大学)

「日本語数量節の値指定と名詞的・副詞的用法」

- オンサイト発表 (セミナー室 1)

- Zoom C 会場 (ブレイクアウトルーム)

- Zoom コアタイム (14:35-15:00) にセミナー室 1 から配信

- ▶ 松岡葵 (九州大学・日本学術振興会)
 - 「福岡県柳川市方言と宮崎県椎葉村尾前方言における 1 モーラ名詞の母音延長: エリシテーション調査データを基に」
 - オンサイト発表 (セミナー室 2)
 - Zoom D 会場 (ブレイクアウトルーム)
 - Zoom コアタイム (15:00–15:25) にセミナー室 2 から配信
- ▶ 松浦年男 (北星学園大学)
 - 「連濁の容認度判定に見られる連続性: 日本語音韻論の確率的側面の記述を目指して」
 - オンサイト発表 (セミナー室 3)
 - Zoom E 会場 (ブレイクアウトルーム)
 - Zoom コアタイム (15:25–15:50) にセミナー室 3 から配信
- セッション 5: 口頭発表 (国立国語研究所講堂/Zoom)
 - ▶ 伊藤薫 (九州大学), 森田敏生 (総和技研)
 - 「ChaKi.NET lite の開発: Universal Dependencies コーパスの利用を見据えた ChaKi.NET ユーザーインターフェイスの改良」
 - ▶ 水谷謙太 (愛知県立大学)
 - 「「は」の後接と否定極性に関する形式意味論的分析の試み」

2022 年 9 月 6 日

- セッション 6: 国立国語研究所プロジェクト紹介 (国立国語研究所講堂/Zoom)
 - ▶ 五十嵐陽介 (国立国語研究所)
 - 「サブプロジェクト「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」
 - ▶ 窪田悠介 (国立国語研究所)
 - 「サブプロジェクト「計算言語学的手法による理論言語学の実証的な方法論の開拓」
- セッション 7: 口頭発表 (国立国語研究所講堂/Zoom)
 - ▶ Hiwa Asadpour (JSPS International Fellow University of Tokyo/Goethe University Frankfurt)
 - “A corpus-based analysis of word order variation in the low-resource languages of Northwest Iran”
 - ▶ 落合いずみ (帯広畜産大学)
 - 「アタヤル語群における「言う」の再建」
- セッション 8: 口頭発表 (国立国語研究所講堂/Zoom)
 - ▶ 澤田治 (神戸大学)
 - 「モーラに基づく最小詞「XY... の X の字」の曖昧性について: コーパスデータを用いての考察」
 - ▶ Jan Wiślicki (University of Walsaw), 松本飛鳥 (University of Walsaw), Adam Gapczyński (上智大学)
 - “On the relation between event numerals and quotative embedded clauses”
 - ▶ 平山裕人 (関西外国語大学)
 - “Some constraints on the challenging speech act”
- セッション 9: 国立国語研究所プロジェクト紹介 (国立国語研究所講堂/Zoom)
 - ▶ プラシャント・パルデシ (国立国語研究所)
 - 「サブプロジェクト「体言化の実証的な言語類型論—理論、フィールドワーク、歴史、方言の観点から—」
 - ▶ 松本曜 (国立国語研究所)
 - 「サブプロジェクト「述語の意味と文法に関する実証的類型論」
- 招待講演 (Zoom (国立国語研究所講堂/多目的室で聴講可))
 - ▶ 小川ゆい (科学技術振興機構 情報基盤事業部)
 - 「JST のプレプリントサーバ「Jxiv (ジェイカイブ)」～日本で初めての本格的なプレプリントサーバ～」
- クロージング・優秀発表賞表彰

International Workshop on Nominalization, Gender and Classifiers

[2022.12.29, University of Languages and International Studies—Vietnam National University (ULIS) (Hanoi, Vietnam)]

- Welcome address: Prof. Lam Quang Dong (ULIS Vice President)
- Introduction: Prof. Prashant Pardeshi (NINJAL)
- Talk 1
 - Masayoshi Shibatani (Rice University/Kobe University)
“Toward “Dynamic Functional Typology”: Nominalization, gender, and classifiers”
- Talk 2
 - Prashant Pardeshi (National Institute for Japanese Language and Linguistics, Tokyo)
“Classifier and Gender Marking in South Asian (Indic and Dravidian) Languages: A Nominalization Perspective”
- Talk 3
 - Masaaki Shimizu (Osaka University)
“Classifiers in Vietnamese: their Role in Nominalization”
- Discussions and Closing Remarks: Dr. Trang Phan, ULIS

International Workshop on Nominalization, Gender and Classifiers

[2023.1.2, University of Foreign Language Studies—The University of Da Nang (UFLS-UD) (Da Nang, Vietnam)]

- Welcome address: Dr. Huynh Ngoc Mai Kha (Vice President, UFLS-UD)
- Introduction: Prof. Prashant Pardeshi (NINJAL)
- Talk 1
 - Masayoshi Shibatani (Rice University/Kobe University)
“Toward “Dynamic Functional Typology”—Nominalization, gender, and classifiers—”
- Talk 2
 - Prashant Pardeshi (National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL), Tokyo)
“Classifier and Gender Marking in South Asian (Indic and Dravidian) Languages: A Nominalization Perspective”
- Talk 3
 - Masaaki Shimizu (Osaka University)
“Classifiers in Vietnamese: their Role in Nominalization”
- Discussions and Closing Remarks: Dr. Huynh Ngoc Mai Kha (Vice president, UFLS-UD)

International Workshop on Nominalization, Gender and Classifiers / 国際ワークショップ: 日本語と世界の言語における体言化と連体修飾 [2023.1.3, ダナン大学日本語学部]

- 開催の挨拶: Dr. Huynh Ngoc Mai Kha (Vice President, UFLS-UD)
- 国際ワークショップの趣旨: Prashant Pardeshi (国立国語研究所教授)
- 講演 1
 - 柴谷方良 (神戸大学名誉教授・(米国) ライス大学名誉教授)
「準体法とは何か? 一体言化と連体修飾」
- 講演 2
 - 清水政明 (大阪大学)
「ベトナム語の類別詞—一体言化における役割」

- 講演 3
 - ▶ Prashant Pardeshi (国立国語研究所教授)

「南アジア諸語 (インド・アーリヤ諸語・ドラヴィダ諸語) における類別詞および性表示: 体言化理論の観点からの再吟味」
- ディスカッションおよび開催の挨拶: Dr. Huynh Ngoc Mai Kha (Vice president, UFLS-UD)

International Workshop on Nominalization, Gender and Classifiers

[2023.1.9, University of Social Sciences and Humanities—Vietnam National University (USSH) (Ho Chi Minh City, Vietnam)]

- Welcome address: Dr. Le Hoang Dung (Vice President, USSH)
- Introduction to the workshop: Prof. Prashant Pardeshi (NINJAL)
- Talk 1
 - ▶ Masayoshi Shibatani (Rice University/Kobe University)

“Toward “Dynamic Functional Typology”—Nominalization, gender, and classifiers—”
- Talk 2
 - ▶ Prashant Pardeshi (National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL), Tokyo)

“Classifier and Gender Marking in South Asian (Indic and Dravidian) Languages: A Nominalization Perspective”
- Talk 3
 - ▶ Masaaki Shimizu (Osaka University)

“Classifiers in Vietnamese: their Role in Nominalization”
- Discussions and Closing Remarks: Dr. Huynh Thi Hong Hanh (Dean of Faculty of Linguistics, USSH)

NINJAL-UHM Linguistics Workshop 2023 [2023.2.16–17, University of Hawai‘i at Mānoa]

2023年2月16日

- Opening remarks: Andrea Berez-Kroeker (Chair, Department of Linguistics, UHM)
- Talk 1
 - ▶ Masahiro Yamada (NINJAL)

“Endangered Language Project at NINJAL”
- Talk 2
 - ▶ Sebastian Ohara-Saft (UHM)

“An Investigation of Osaka Jejueo Speakers’ Vocabulary Knowledge”
- Information Session: Academic Book Publishing and the ELSL series
Uri Tadmor (Brill) with Yukinori Takubo (NINJAL), Haruo Kubozono (NINJAL), Kamil Ud Deen (UHM), and Shin Fukuda (UHM)
- Talk 3
 - ▶ Bradley McDonnell (UHM)

“Describing What’s Left Unsaid”
- Talk 4
 - ▶ Kunihiko Kuroki (Kobe Shoin Woman’s University & UHM)

“Essentials of Creating a Database of the Satsuma Dialect of Japanese: Focusing on its Phonology and Morphology”

2023年2月17日

- Announcements

- Talk 5
 - Yukinori Takubo (NINJAL)
 - “Double Foci Analysis of Japanese Demonstratives”
- Talk 6
 - Haruo Kubozono (NINJAL)
 - “Diversity of Lexical Pitch Accent Systems in Japanese”
- A Special Joint Session with Austronesian Circle
 - Gregory Vondiziano (UHM)
 - “The Syntax of Hawaiian Actor-Emphatic Constructions: A Preliminary Analysis”
- Closing remarks:
 - Peter Arnade (Dean, the College of Arts, Languages, and Letters, UHM) and Yukinori Takubo (Director-General, NINJAL)

国際研究発表会・国際研究交流会

令和4年度第1回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会 [2022.5.28, オンライン]

- プロジェクト「日琉諸語のプロソディー」について: 五十嵐陽介 (国立国語研究所)
- 研究発表
 - 松森晶子 (日本女子大学)
 - 「宮古諸島における「韻律領域の拡張」と多良間島のプロソディー」
 - クリストファー・デイビス (琉球大学)
 - 「八重山語小浜方言の中舌母音の摩擦音化について」
- プロジェクト「危機言語の保存」について: 山田真寛 (国立国語研究所)
- 報告
 - セリック・ケナン (国立国語研究所)
 - 「新しい危機言語 DB について」
- 研究発表
 - 宮川創 (国立国語研究所)
 - 「Omeka S を用いた日本の危機方言のためのデジタルアーカイブの構築: デジタルヒューマニティーズにおける世界標準 (TEI・IIIF・ダブリンコア) の適用」
 - 下地理則 (九州大学)
 - 「琉球諸語における除括性 (clusivity) の類型的特徴と通時変化」
 - 久保博雅 (広島経済大学)
 - 「命令表現における文末音調の記述—愛媛県松山市方言を事例に—」
 - ズラズリ美穂 (ロンドン大学東洋アフリカ研究学院博士課程), 半嶺まどか (名桜大学)
 - 「新しい話者のための言語継承アプローチ: 第二言語習得理論から琉球諸語の継承を考える」

「体言化の実証的な言語類型論」プロジェクト 2022 年度第 1 回研究会

[2022.9.23, 東京大学・オンライン (ハイブリッド)]

- Ishikawa Sakura (Tokyo University of Foreign Studies) and Yoshida Shigeki (The University of Tokyo)
 - “The NP- and modification-use of verbal-based argument nominalizations in Bengali and Nepali”
- Niranjana Upoor (Tripura University (A Central University), India)
 - “Gender Marking in Kannada and Other Dravidian Languages: A Nominalization Perspective”
- Discussion

第一回プロトジャポニック研究発表会 [2022.11.24, オンライン]

- 趣旨説明：五十嵐陽介 (国立国語研究所)
- 研究発表
 - ▶ ペラルール・トマ (フランス国立科学研究センター)
“北琉球諸語における長母音と琉球祖語のアクセント体系の再建”
- 質疑応答・全体討論

令和4年度第2回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会 [2022.12.4, オンライン]

- あいさつ
- 研究発表
 - ▶ 金田章宏 (千葉大学)
「宮古語大神方言の強調辞 tu の位置づけ」
 - ▶ 五十嵐陽介 (国立国語研究所)
「南琉球宮古語池間方言の疑問文イントネーション」
 - ▶ 宮川創 (国立国語研究所)
「北琉球奄美語と論島方言の対格標識 =NcjaN と他動詞目的語名詞 (句) の性格」
 - ▶ 藤田ラウンド幸世 (横浜市立大学)
「学校での宮古語継承の課題に取り組む：「一日一語みゃーくふつ」の言語実践報告」
- 藤田ラウンド先生が宮古島で作成したドキュメンタリー映像 (47分) の上映
- 研究発表
 - ▶ 山田高明 (一橋大学大学院博士後期課程)
「熊本県の二型アクセントの音響分析：中南部3方言の比較から」
 - ▶ 松岡葵 (九州大学大学院博士後期課程)
「日本語諸方言における最小語制約の類型化に向けて：九州方言を中心とした初期報告」
 - ▶ セリック・ケナン (日本学術振興会特別研究員), 籠宮隆之 (国立国語研究所), 宮川創 (国立国語研究所), 木部暢子 (人間文化研究機構),
「日本の危機言語語彙データベース」

第二回プロトジャポニック研究発表会 [2022.12.17, オンライン]

- 研究発表
 - ▶ セリック・ケナン (国立国語研究所)
「琉球祖語の *weke- の語源とその周辺について」
- 質疑応答・全体討論

第三回プロトジャポニック研究発表会 [2023.1.21, オンライン]

- 研究発表
 - ▶ 中澤光平 (信州大学)
「琉球諸語間での借用について」
- 質疑応答・全体討論

言語学フェス 2023 [2023.1.28, オンライン]

- 挨拶
- ポスター発表 (コアタイム A)
 - ▶ 戸次大介 (お茶の水女子大学)
「組合せ範疇文法 (CCG) 入門」【プロジェクト・研究室紹介】

- ▶ 田川拓海 (筑波大学)
「ドラゴンクエストの語彙における借用・外来語」【プロジェクト・研究室紹介】
- ▶ 山下里香 (関東学院大学), 佐藤勇人 (関東学院大学)
「スポーツ実況のマルチモーダル分析—世界陸上はどのように盛り上げられるのか」【プロジェクト・研究室紹介】
- ▶ 石原実樹 (甲南大学)
「日本人英語学習者における英語多義語判断の際の文脈による影響について」【研究発表】
- ▶ 黒木邦彦 (神戸松蔭女子学院大学)
「張り合ってはるが、対立はしてみない：薩摩方言の音節末に設定しうる音素的範疇」【研究発表】
- ▶ 吉村義誠 (国際医療福祉大学), 爲数哲司 (国際医療福祉大学), 岡田理恵子 (国際医療福祉大学)
「日本語話者の発話時におけるうなずきについて」【研究発表】
- ▶ 宮川創 (国立国語研究所)
「沖縄語の表記法について」【研究発表】
- ▶ 渡邊玖華 (東京大学), 広瀬友紀 (東京大学)
“Acquisition of ga&wa in relation to Theory of Mind” 【研究発表】
- ▶ 廣澤尚之 (九州大学)
「無アクセント方言における韻律句認定」【研究発表】
- ▶ 林潮瑜 (京都外国語大学)
「動詞「思う」の格とテンスの関係」【研究発表】
- ▶ 梁為棟 (立教大学)
「与那国方言の焦点に関する調査報告」【研究発表】
- ▶ 渡邊幸佑
「「どういうことか」とはどういうことか」【研究発表】
- ▶ 岸山健 (東京大学), 伊藤愛音 (シンガポール国立大学), 山下陽一郎 (東京大学), 広瀬友紀 (東京大学)
「予測できるか関西人? : 低起式アクセント語予測処理の視線計測実験プロジェクト紹介とお悩み相談」【プロジェクト・研究室紹介】
- ▶ 堀田光 (東京大学)
「言語の生涯習得モデルにおける「通時的世代効果」: 仮想データによる検証」【研究発表】
- ▶ 小田健二 (シラキュース大学), Tej Bhatia (シラキュース大学), Amanda Brown (シラキュース大学), Christopher Green (シラキュース大学), Rania Habib (シラキュース大学), Jaklin Kornfilt (シラキュース大学), Corrine Occhino (シラキュース大学), Adam Singerman (シラキュース大学), Emma Ticio (シラキュース大学), Syracuse University (シラキュース大学)
“So here’s what we do at Syracuse University” 【プロジェクト・研究室紹介】
- ▶ 有賀照道 (東京大学)
「IPA の覚え方: 語呂合わせ作成の試み」【プロジェクト・研究室紹介】
- ▶ 福田純也 (中央大学), 黒島規史 (熊本学園大学), 水野太貴 (ゆる言語学ラジオスピーカー), 嶋村貢志 (金沢学院大学・神戸市外国語大学), 高田祥司 (秀明大学)
「ゆるアウトリーチ学ポスター発表」【プロジェクト・研究室紹介】
- ▶ 山泉実 (大阪大学)
「「ないものはない」の解釈: 指示参照ファイル理論の紹介と共に」【研究発表】
- ▶ 横山詔一 (国立国語研究所), 相澤正夫 (国立国語研究所), 久野雅樹 (電気通信大学), 前田忠彦 (統計数理研究所)
『日本人の読み書き能力』(1951) の非識字率に関する 4 つのナゾ」【研究発表】
- ▶ 磯野真之介 (東京大学)
「心理言語学的に妥当な文法の検討: 局所性効果を手がかりに」【研究発表】

- ▶ 於保淳 (小樽商科大学)
 - 「「ジョン1人」の「1人」について：強意表現としての数量詞」【研究発表】
- ▶ 小西いずみ (東京大学)
 - 「富山市方言における疑問文の文末イントネーション」【研究発表】
- ▶ 山下大希 (熊本県立大学)
 - 「連濁と語構成についてのかかわりについて」【研究発表】
- ▶ ザヒドメイムーナ (Victoria University of Wellington)
 - 「マオリ語 (te reo Māori) における基本色名の変遷」【研究発表】
- ▶ 伊藤一輝 (東京外国語大学)
 - 「絵画名詞と感情名詞の特異性から見た逆行照応現象」【研究発表】
- ▶ 今西一太 (株式会社エス・アイ)
 - 「アミ語にも語彙的接頭辞はある？」【研究発表】
- ▶ 下條紗季 (アリゾナ州立大学)
 - “A Phonetic Vowel Study of Piipaash Language”【研究発表】
- ポスター発表 (コアタイム B)
 - ▶ 宗像孝 (横浜国立大学)
 - 「Minimalist Program から芽生えたもの一置き去りにされたもの」【プロジェクト・研究室紹介】
 - ▶ Michinori Shimoji (九州大学)
 - 「方言学？言語学？その区別，意味ないです：九大言語下地ゼミ」【プロジェクト・研究室紹介】
 - ▶ 中谷健太郎 (甲南大学)
 - 「Konan PsychLing 心理言語学実験おしゃべり相談室」【プロジェクト・研究室紹介】
 - ▶ 宮下敦行 (神奈川県立横浜翠嵐高等学校)
 - 「「マーカーペン」はペンでも「マーカー」はペンでないのか～語形が左右する認知」【研究発表】
 - ▶ 阪上健夫 (東京大学)
 - 「現代共通語および熊本方言その他における「モノ」の文法化」【研究発表】
 - ▶ 青山忠申 (東京大学)
 - 「文献上に見られるアクセント表記法の言語間対照」【研究発表】
 - ▶ 上出大河 (國學院大学大学院)
 - 「〈非母語話者の日本語〉史研究の可能性について」【研究発表】
 - ▶ 山藤颯 (東京外国語大学), 劉冠偉 (東京大学)
 - 「動画サイトにおける中訳漢字表記を調べる：日本 VTuber の名前に注目して」【研究発表】
 - ▶ 成田智也 (大阪大学)
 - 「敬語の分析に必要なのはウチ・ソトの概念ではなく、談話管理理論である」【研究発表】
 - ▶ 作本大祐 (京都大学大学院)
 - 「ゲームキャラクターおよび武器の呼称にみる外来語を含む複合語からの短縮語形成におけるバリエーションとメカニズム」【研究発表】
 - ▶ 坂本瑞生 (東北大学大学院)
 - 「「主題」の規定を整理する：日本語文法論と情報構造研究のすれ違い」【研究発表】
 - ▶ 吉村有彩 (関西大学)
 - 「音位転換を引き起こす要因—聴解実験による容認性判断に基づいて—」【研究発表】
 - ▶ 難波華子 (京都大学), 岡崎桃子 (京都大学)
 - 「どうして「どうして」は攻撃的に受け取られるのか—言外の意味を踏まえて—」【研究発表】
 - ▶ 保本祐希 (東京外国語大学)
 - 「ヒンディー語だけど、ほぼ英語！？ヒンディー語の話し言葉、書き言葉の違い」【研究発表】
 - ▶ 落合いずみ (帯広畜産大学)
 - 「台湾オーストロネシア諸語の「汝ノ名ハ誰カ」」【研究発表】

- ▶ 野村涼 (スタンフォード大学)
 - 「「ツッコミ表現」を言語学的に考える」【研究発表】
- ▶ 谷口悠 (同志社大学大学院)
 - 「身体語彙成句「心臓が強い」「強心臓」の分析—流行語・意味拡大の観点から」【研究発表】
- ▶ 中俣尚己 (大阪大学)
 - 「話題が変わると言葉はどう変わるのか？話題別会話コーパスの構築とその分析」【プロジェクト・研究室紹介】
- ▶ 長屋尚典 (東京大学)
 - 「東京大学言語学研究室の紹介と進学相談」【プロジェクト・研究室紹介】
- ▶ 日高晋介 (日本学術振興会・新潟大学)
 - 「中央アジアのチュルク語におけるモダリティ対照の試み」【プロジェクト・研究室紹介】
- ▶ 深津聡世 (東京大学), 広瀬友紀 (東京大学)
 - 「動詞屈折における語彙アスペクトの影響—英語をL2とする子どもの分析—」【研究発表】
- ▶ 浅川勝之 (三修社)
 - 「リトアニア語名詞のアクセント移動について」【研究発表】
- ▶ 濱西祐之介 (東京大学)
 - “Similarity-Based Interference Effect on Filler-Gap Dependency Formation by Japanese Learners of English”【研究発表】
- ▶ 黒島規史 (熊本学園大学)
 - 「望ましい「望ましき」研究に関するお悩み相談」【研究発表】
- ▶ 久留須健一郎 (フィリピン大学ディリマン校)
 - 「フィリピン語？フィリピノ語？—フィリピンの国語は日本語でなんと呼ばれているのか—」【研究発表】
- ▶ 宮崎哲雄 (東京外国語大学大学院)
 - 「日本語の音韻性錯語の新たな分類」【研究発表】
- ▶ 小幡幸輝 (東京大学)
 - 「促音の結合標示機能と複合語アクセントの関係に就ての検討」【研究発表】
- ▶ 蔦原亮 (九州大学), 野村明衣 (九州大学)
 - 「初修スペイン語科目における語彙学習カリキュラム作成に向けた語・定型表現研究」【研究発表】
- ▶ 山田洋平 (東京外国語大学)
 - 「モンゴル語の動詞の出現頻度が知りたいけれど統計学もプログラミングも分からない」【研究発表】
- ▶ 江原遥 (東京学芸大学)
 - 「L2 英語における語/テキスト個人化難度判定と学習者シミュレーション」【研究発表】
- ポスター発表 (コアタイム C)
 - ▶ 清水泰生 (同志社大学)
 - 「スポーツ言語の特殊性—陸上競技の言語を例に—」【プロジェクト・研究室紹介】
 - ▶ 茂木俊伸 (熊本大学)
 - 「中高生日本語研究コンテストサンプル動画「空から漢字を調査する—「車のない軽」(空)の研究—」の舞台裏」【プロジェクト・研究室紹介】
 - ▶ 松岡葵 (九州大学)
 - 「あなたが作った調査票、ぜひ公開しませんか？：日琉諸語調査票ポータルサイトの紹介」【プロジェクト・研究室紹介】
 - ▶ 尹熙洙
 - 「琉球祖語に見られる謎の日本語方言からの借用語」【研究発表】
 - ▶ 田中広宣 (東京大学), 広瀬友紀 (東京大学)
 - 「L2 英語における名詞句構造産出能力の発達過程：子どもの縦断的発話データによるケーススタディ」【研究発表】

- ▶ 清水泰行 (関西学院大学 (非常勤))
「この××が!!: 助詞ガの位置付けについて」【研究発表】
- ▶ 永次健人 (長崎総合科学大学)
「英語ってキモチ悪い! —Self 形というバケモノ」【研究発表】
- ▶ 岸山健 (東京大学), 黄竹友 (名古屋学院大学), 広瀬友紀 (東京大学)
「音素知覚モデルにおける異音の役割—東京方言話者と近畿方言話者の母音の錯覚による検証—」【研究発表】
- ▶ 岩崎加奈絵 (日本学術振興会・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)
「ハワイ語の「方向」を考える」【研究発表】
- ▶ 土屋奈々 (津田塾大学大学院), 小野創 (津田塾大学大学院)
「日本語の動詞は分解されるのか: プライミング実験による検証」【研究発表】
- ▶ 西端省吾 (金沢大学)
「複合助詞「をもって」の変容」【研究発表】
- ▶ 丸小野壮太 (常磐大学高等学校), 佐藤育子 (日本女子大学), 岩田和樹 (常磐大学高等学校)
「高校生・高校教員・大学教員の共同研究—「ワークショップ・フェニキア文字」実践—」【研究発表】
- ▶ 溝口礼奈 (神戸松蔭女子学院大学大学院)
「方言・言語を「研究」し、「残す」活動の意義」【研究発表】
- ▶ 林真衣 (東京大学)
「イロカノ語パンガシナン方言の複雑述語」【研究発表】
- ▶ 松原理佐 (東京大学)
「言語学は外国語教育にどのように貢献できるだろうか—大学英語授業を通しての発見—」【プロジェクト・研究室紹介】
- ▶ 安田葵 (株式会社三修社)
「『ねっこ日日学習辞書』開発プロジェクト」【プロジェクト・研究室紹介】
- ▶ 熊谷学而 (関西大学)
「「かわいい」音声学」【プロジェクト・研究室紹介】
- ▶ 岩村入吹 (慶應義塾大学), 吉川正人 (慶應義塾大学)
「進化言語学の環境問題を考える」【研究発表】
- ▶ 安芝恩 (鎮西学院大学)
「聞き手への配慮の観点から見る日本語学習者の言い換えストラテジー」【研究発表】
- ▶ Vrbovsky Matej (大阪大学)
「「おい、行くぞ!」をどう捉えるか」【研究発表】
- ▶ 松延比呂伎
「奥深い「真ん中」の世界—古代ギリシャ語を例に」【研究発表】
- ▶ 小坂健太 (関西外国語大学)
「競技クイズの言語学的可能性について」【研究発表】
- ▶ 齋藤諒弥 (三重大学)
「壁塗り構文の項構造と統語構造」【研究発表】
- ▶ 多田朱里 (東京大学)
「日本語の接尾辞「ぶり/っぶり」の使い分けについての分析」【研究発表】
- ▶ 研裕太 (広島大学大学院)
「生活語彙論と漬物類語彙体系—漬物の名付けに環境差・生業差はあるか?」【研究発表】
- ▶ 阿久澤弘陽 (京都大学)
「私は文末名詞文「気だ」を観察する気です。」【研究発表】
- ▶ 越智綾子 (国立国語研究所)
「日本語の時制について選択体系機能理論の観点から」【研究発表】

- ▶ 大谷青渚 (京都大学)
「パイワン語の様態副詞のふるまい」【研究発表】
- ブース
 - ▶ くろしお出版
 - ▶ 三省堂
 - ▶ 竹輪大学出版会
 - ▶ ひつじ書房
 - ▶ 中谷裕子 (イラスト作成)

第四回プロトジャポニック研究発表会 [2023.2.23, オンライン]

- 研究発表
 - ▶ 五十嵐陽介 (国立国語研究所)
「日琉祖語四声仮説：最少の声調と最少の音変化でアクセント体系の多様性を説明するために」
- 質疑応答・全体討論

「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」共同研究発表会 [2023.3.11-12, オンライン]

2023年3月11日

- 開会の辞
- プロジェクト紹介
 - ▶ 朝日祥之 (国立国語研究所)
「言語問題プロジェクトの取り組み」
- 講演 1
 - ▶ Paul Kerswill (University of York)
“The Emergence of a Multiethnolect: Language Shift, Dialect Formation and Black Culture in London”
- 研究発表 1
 - ▶ 今井てるみ (国立国語研究所)
「東京話者の母音の無声化プロジェクト—変異理論に基づいた分析」
- 研究発表 2
 - ▶ 甲賀真広 (国立国語研究所/日本学術振興会)
「『満洲』をめぐる日本語教育学および社会言語学的研究の経過報告」

2023年3月12日

- 開会の辞
- 講演 2
 - ▶ James Walker (La Trobe University)
“Challenges and Methods in the Study of Grammatical Variation”
- 研究発表 3
 - ▶ 松浦幸祐 (大阪大学), 田村幸誠 (大阪大学)
「方言習得に関する一考察：非関西圏出身大学生の京阪式アクセント習得をめぐる調査結果を基に」
- 研究発表 4
 - ▶ 朝日祥之 (国立国語研究所), 黄叢叢 (国立国語研究所), 星川睦 (国立国語研究所)
「自治体ウェブサイトによる多言語情報サービスの実態と課題」
- 閉会の辞

第五回プロトジャポニック研究発表会 [2023.3.13, オンライン]

- ・研究発表
 - ・松森晶子 (日本女子大学)
「汎宮古文法 (韻律部門) の青写真を描く—宮古諸島のプロソディーの多様性解明にむけて—」
- ・質疑応答・全体討論

(2) 合同シンポジウム・研究発表会

複数のプロジェクトが共同でおこなうシンポジウムや研究発表会。

アノテーション・述語の意味文法・学習者辞書 3 プロジェクト合同研究会 [2022.5.28, オンライン]

- ・加藤祥 (目白大学)
「動詞の意味・用法の記述的研究」と「比喩表現の理論と分類」—国立国語研究所報告書の電子化—

第4回社会言語科学会シンポジウム [2022.9.3, オンライン]

- ・テーマ: 「プロソディを通して見る社会とコミュニケーション」
 - ・太田一郎 (鹿児島大学)
「社会言語学の立場から」
 - ・五十嵐陽介 (国立国語研究所)
「方言学の立場から」
 - ・小磯花絵 (国立国語研究所)
「談話分析・コーパス言語学の立場から」
 - ・横森大輔 (京都大学)
「相互行為言語学の立場から」
 - ・峯松信明 (東京大学)
「外国語教育支援の立場から」

国立国語研究所共同研究プロジェクト「定住外国人のよみかき研究」シンポジウム「「識字」から「社会的実践としてのよみかき」へ—中国・サハリン帰国者の事例から—」 [2023.3.12, 早稲田大学早稲田キャンパス]

- ・開会の辞・趣旨説明: 福永由佳 (国立国語研究所)
- ・第1部: 講演
 - ・角知行 (天理大学)
「移民のよみかき戦略: 英語圏における新識字研究の展開から」
- ・第2部: パネルディスカッション「生活者としての中国・サハリン帰国者の事例からよみかき実践を考える」
 - ・趣旨説明: 福永由佳 (国立国語研究所)
 - ・池上摩希子 (早稲田大学)
「文字を媒介としたコミュニケーションの意義—中国帰国者のよみかき実践を事例として—」
 - ・高民定 (千葉大学)
「団地とよみかき実践: 中国帰国者3世代の語りから」
 - ・パイチャゼ・スヴェトラナ (北海道大学)
「サハリン帰国者—世代によって異なる母語と「帰国」後の日本語学習」
 - ・ディスカッサント: 村岡英裕 (千葉大学)

言語処理学会第29回年次大会ワークショップ『深層学習時代の計算言語学』

[2023.3.17, 沖縄コンベンションセンター, オンライン (ハイブリッド)]

- ・オーガナイザー:
持橋大地 (統計数理研究所), 窪田悠介 (国立国語研究所), 小木曾智信 (国立国語研究所), 大谷直輝 (東京外国語大学), 永田亮 (甲南大学), 川崎義史 (東京大学), 小町守 (東京都立大学), 高村大也 (産業技術総合研究

所), 内田諭 (九州大学), 大関洋平 (東京大学)

- 全体挨拶, インTRODクシヨン
 - 持橋大地 (統計数理研究所)
「本ワークショップの主旨について」
 - 永田亮 (甲南大学)
「言語処理と言語学の橋渡しの面白さと難しさ」
- AM セッション: 深層学習と言語学
 - 大谷直輝 (東京外国語大学)
「言語知識の近似値として言語モデルは利用できるか」
 - 大関洋平 (東京大学)
「深層学習時代の計算心理言語学」
 - 宮川創 (国立国語研究所)
「消滅の危機にある言語・方言のために深層学習を応用する」
 - 北崎勇帆 (高知大学)
「自然言語処理のタスクを日本語史研究に落とし込む」
 - 上田亮 (東京大学)
「言語創発を計算言語学として位置付ける試み」
 - 大羽未悠 (奈良先端科学技術大学院大学)
「言語モデルの第二言語獲得—研究のきっかけとこれから—」
- AM パネルセッション (司会: 高村大也)
 - 参加パネリスト: 永田亮, 高村大也, 大谷直輝, 大関洋平, 窪田悠介
- 招待講演
 - 鈴木久美 (マイクロソフト)
「マイクロソフトにおける言語処理の (個人的な) 27 年—手書きの文法開発から深層学習モデルの製品化まで」
- PM セッション: 深層学習と言語学, 公募枠講演
 - 内田諭 (九州大学)
「単語分散表現から類義語を考える」
 - 黒澤友哉 (東京大学)
「DRS 意味解析における出現位置を利用した語彙数削減」
 - 山崎敏正 (九州工業大学)
“Decoding single-trial EEGs during silent Japanese words by the Transformer-like model”
 - 森下裕三 (桃山学院大学)
「計量的な語の意味分析から視点と主観は捉えられるのか」
 - 野口大斗 (東京医科歯科大学)
「深層学習と日本語アクセント研究の可能性」
 - 江原遥 (東京学芸大学)
「自動リーダビリティ推定の研究動向と展望」
- PM パネルセッション (司会: 持橋大地)
 - 参加パネリスト: 内田諭, 小木曾智信, 川崎義史, 持橋大地
- クロージング: 窪田悠介 (国立国語研究所)
- フリーディスカッション: 現地および Gather.town (Gather.town 担当: 小町守 (東京都立大学))

(3) プロジェクトのシンポジウム・ワークショップ・研究発表会

プロジェクト等の主催で, 日本各地を会場として公開研究発表会や学術シンポジウム等を開催している。

2022年度は、現地開催のほか、オンラインあるいは現地開催とオンライン併用のハイブリッド形式で開催した。

「述語の意味文法」共同研究発表会 [2022.4.23, オンライン]

- ▶ 陳奕廷 (東京農工大学)
「複雑述語から見た事象統合の条件と類像性対頻度の論争：動詞関連事象に基づく実証研究」

日本言語学会第164回大会 ワークショップ「日琉祖語再建に向けての新たな展望：琉球諸語の視点から」
[2022.6.19, オンライン]

- 企画：セリック・ケナン (国立国語研究所), 司会：青井隼人 (ILOLi), コメンテーター：平子達也 (南山大学)
- 趣旨説明：セリック・ケナン (国立国語研究所)
- 研究発表
 - ▶ 松森晶子 (日本女子大学文学部)
「日琉祖語の韻律体系再建に向けて—今後の課題—」
 - ▶ 中澤光平 (信州大学)
「琉球祖語における非狭母音 *e、*o の再建の再検討」
 - ▶ 五十嵐陽介 (国立国語研究所)
「2音節名詞第4/5類に対応する琉球祖語B類は改新であるとする仮説」
 - ▶ セリック・ケナン (国立国語研究所)
「(先)日琉祖語の語形成に関する試論」
- コメンテーターによる評価：平子達也 (南山大学)
- 全体討論

「述語の意味文法」共同研究発表会 [2022.7.2, オンライン]

- ▶ 松本曜, 氏家啓吾
「状態変化表現の類型論と日本語：コーパス頻度からの考察」

「ハワイにおける日系社会資料に関する資料調査と社会調査の融合的研究」共同研究発表会

[2022.7.16, オンライン]

- ▶ 朝日祥之 (国立国語研究所)
「プロジェクトの紹介」
- ▶ 小嶋茂 (海外移住資料館)
「日系博物館・資料館の実情と課題」

「日本語における評価用データセットの構築と利用性の向上」分科会

[2022.9.7, 国立国語研究所, オンライン (ハイブリッド)]

- ▶ 開催形態の事前説明
- ▶ オープニング：浅原正幸 (国立国語研究所)
- ▶ 染谷大河 (東京大学), 大関洋平 (東京大学) (講演者：染谷大河)
「JBLiMP：言語モデルの統語的評価のための日本語データセット」
- ▶ 瀧田健介 (同志社大学), 窪田悠介 (国立国語研究所), 成田広樹 (東海大学) (講演者：瀧田健介)
「GrammarXiv：言語理論・事実のインタラクティブ・データベースの開発」
- ▶ 赤間怜奈 (東北大学・理化学研究所), 磯部順子 (理化学研究所), 鈴木潤 (東北大学), 乾健太郎 (東北大学・理化学研究所) (講演者：赤間怜奈)
「日本語日常対話コーパスの構築と自然言語処理への活用」
- ▶ 小松原哲太 (神戸大学)
「言語技巧のアーカイブ化と『日本語レトリックコーパス』の構築」

2022 年度共同利用セミナー [2022.9.12, オンライン]

- 開会挨拶: 石黒圭 (国立国語研究所共同利用推進センター長)
- 研究紹介
 - ▶ 沢木幹栄 (信州大学名誉教授)
「国研の蔵書から見た海外言語地理学・言語地図の歴史と現状の研究」
 - ▶ 小助川貞次 (富山大学名誉教授)
「訓点資料の精密解読によるデジタルアーカイブの検証」
- リソース紹介
 - ▶ 福永由佳 (国立国語研究所)
「日本語教育映像教材シリーズ」
 - ▶ 鎌水兼貴 (国立国語研究所)
「社会調査回答データ」
 - ▶ 高田智和 (国立国語研究所)
「1948 年読み書き能力調査資料」
- 国立国語研究所共同利用型共同研究案内
- 研究紹介
 - ▶ 前田忠彦 (情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設社会データ構造化センター), 田中康裕 (情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設社会データ構造化センター)
「社会調査資料のアーカイブ化をめぐる: 社会データ構造化センターの取組紹介」
- 閉会挨拶: 前田忠彦 (情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設社会データ構造化センター長)

第七回学習者コーパス・ワークショップ & シンポジウム [2022.9.17, オンライン]

- ワークショップ初心者コース (担当: 細井陽子, 須賀和香子)
- ワークショップ既習者コース (担当: 佐々木藍子)
- シンポジウム
 - ▶ 講演 1: 佐竹由帆 (青山学院大学)
「英語教育におけるデータ駆動型学習 (DDL) の効果」
 - ▶ 講演 2: 田邊和子 (日本女子大学)
「新聞コーパスを基盤とした日本語 DDL 語彙教材の作成と指導」
 - ▶ 講演 3: 堀恵子 (筑波大学・東洋大学ほか)
「機能語用例文データベース『はごろも』を利用したオンライン授業における実践の試み」
 - ▶ 総括討議「コーパスは日本語指導に役立つかーデータ駆動型学習 DDL の活用を考えるー」
ファシリテーター: 迫田久美子 (国立国語研究所・広島大学)

「長野県は宇宙県」の天文史 100 年と市民科学 [2022.11.18, 諏訪市駅前交流テラスすわっチャオ]

- プロジェクトの紹介
 - ▶ 大西拓一郎 (国立国語研究所)
「シンポジウムの主旨説明」
 - ▶ 大西浩次 (長野工業高等専門学校)
「長野県は宇宙県」
 - ▶ 陶山徹 (長野市立博物館)
「天文文化研究会活動紹介」
- 長野県の天文史と市民科学
 - ▶ 茅野勝彦 (諏訪天文同好会)
「諏訪天文同好会の活動の変遷」

- ▶ 渡辺真由子 (茅野市八ヶ岳総合博物館)
 - 「茅野市八ヶ岳総合博物館アマチュア天文史資料の紹介」
- ▶ 野澤聡 (獨協大学)
 - 「市民科学 (シチズンサイエンス) という新たな意義付け—諏訪清陵高校天文気象部を例として—」
- ▶ 嘉数次人 (大阪市立科学館)
 - 「会誌から見たアマチュア天文同好会の活動—大阪市立科学館の所蔵資料から—」
- ▶ 議論
- 変光星観測
 - ▶ 大西拓一郎 (国立国語研究所)
 - 「諏訪天文同好会の変光星観測」
 - ▶ 渡辺誠 (射水市新湊博物館)
 - 「日本のアマチュアによる変光星観測」
 - ▶ 野上大作 (京都大学)
 - 「日本における変光星についてのプロとアマチュアの共同研究」
 - ▶ 議論
- 太陽観測
 - ▶ 早川尚志 (名古屋大学)
 - 「黒点数再校正と信州黒点観測記録群」
 - ▶ 日江井榮二郎 (国立天文台)
 - 「長野県における近代太陽観測の歴史」
 - ▶ 桜井隆 (国立天文台)
 - 「太陽の長期変動と地球環境」
 - ▶ 議論
- 議論と総括

人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会 (SLUD) 第 96 回研究会「第 13 回対話システムシンポジウム」
 [2022.12.13–14, 国立国語研究所およびオンライン (ハイブリッド)]

2022 年 12 月 13 日

- 開会挨拶
- 一般口頭発表 1
 - ▶ 黒田佑哉 (京都工芸繊維大学), 荒木雅弘 (京都工芸繊維大学)
 - 「医療面接シミュレータにおける医者役の質問内容の識別」 (オンラ in 発表)
 - ▶ 森大河 (千葉大学/産業技術総合研究所), 伝康晴 (千葉大学), Kristiina Jokinen (産業技術総合研究所)
 - 「多人数会話におけるマルチモーダル聞き手反応予測」
 - ▶ 武田海人 (東京工科大学), 松吉俊 (東京工科大学), 兼松祥央 (東京工科大学), 三上浩司 (東京工科大学)
 - 「シナリオに沿って TRPG の進行を担うゲームマスター AI の試作」
 - ▶ 萬處修平 (京都工芸繊維大学), 岡夏樹 (宮崎産業経営大学), 松島茜 (京都工芸繊維大学), 深田智 (京都工芸繊維大学), 吉村優子 (金沢大学), 川原功司 (名古屋外国語大学), 田中一品 (京都工芸繊維大学)
 - 「Subjective-BERT により獲得された言語と各種感覚・心的状態に関する内部表現分析」
- ポスターセッション 1
 - ▶ 高橋正樹 (電気通信大学), 朝原隆太郎 (電気通信大学), 稲葉通将 (電気通信大学)
 - 「事前学習済み言語モデルを用いた雑談対話に基づく観光地推薦」
 - ▶ 奥田一世 (電気通信大学), 稲葉通将 (電気通信大学)
 - 「MultiWOZ データセットの更新差分を用いたアノテーションエラーの自動検出」
 - ▶ 小野関宏己 (電気通信大学), 稲葉通将 (電気通信大学)
 - 「雑談対話生成のためのトリビアスコアに基づく知識選択」

- ▶ 山崎康之介 (奈良先端科学技術大学院大学), 田中翔平 (奈良先端科学技術大学院大学), 河野誠也 (理化学研究所), 湯口彰重 (理化学研究所), 吉野幸一郎 (理化学研究所)
 - 「常識推論に基づく気の利いた家庭内ロボットの行動選択に向けて」
- ▶ 田中義規 (電気通信大学), 稲葉通将 (電気通信大学)
 - 「ユーザレビュー作成支援のためのインタビュー対話システムの構築」
- ▶ 岩橋千穂 (電気通信大学), 稲葉通将 (電気通信大学)
 - 「マルチソース学習を用いた対話形式コンテンツの自動生成」
- ▶ 薛強 (神戸大学), 滝口哲也 (神戸大学), 有木康雄 (神戸大学)
 - 「対話穴埋めと対話生成による知識ベース応答生成手法」
- ▶ 谷口琉聖 (大阪大学), 武田龍 (大阪大学), 駒谷和範 (大阪大学), 翠輝久 (ホンダ・リサーチ・インスティテュート・USA), 細見直希 (株式会社本田技術研究所), 山田健太郎 (株式会社本田技術研究所)
 - 「物体検出器により得た確信度が対話システム性能に与える影響」
- ▶ 稲積駿 (奈良先端科学技術大学院大学), 河野誠也 (理化学研究所), 湯口彰重 (理化学研究所), 川西康友 (理化学研究所), 吉野幸一郎 (理化学研究所)
 - 「視線情報付き視覚的質問応答データセットの構築」
- ▶ 川島瑠奈 (同志社大学), 飯尾尊優 (同志社大学), 東中竜一郎 (名古屋大学)
 - 「プロフィールテーブルに基づくキャラクタの概要生成手法の提案」
- ▶ 倉田楓真 (早稲田大学), 佐伯真於 (早稲田大学), 藤江真也 (千葉工業大学), 松山洋一 (早稲田大学)
 - 「視線・口・頭部の動作特徴量に着目したマルチモーダル発話終了予測」
- ▶ 高崎環 (東京大学), 吉永直樹 (東京大学), 豊田正史 (東京大学)
 - 「長期間の過去文脈を効果的に活用した雑談対話システム」
- ▶ 天谷武琉 (静岡大学), 由井達也 (静岡大学), 森田純哉 (静岡大学), 光田航 (NTT), 東中竜一郎 (NTT), 竹内勇剛 (静岡大学)
 - 「対話での共通基盤の形成過程における認知状態の推定」
- 招待講演
 - ▶ 佐藤敏紀 (LINE 株式会社)
 - 「日本語の基盤モデルを用いた対話システムの実装とその課題」
- 対話システムライブコンペティション 5 (ライブイベント)

オーガナイザ:

 - 東中竜一郎 (名古屋大学), 船越孝太郎 (東京工業大学), 稲葉通将 (電気通信大学), 高橋哲朗 (富士通研究所), 宇佐美まゆみ (国立国語研究所), 西川寛之 (明海大学), 小室允人 (千葉大学), 佐藤志貴 (東北大学), 堀内颯太 (名古屋大学), 港隆史 (ATR/理科学研究所), 境くりま (ATR), 船山智 (ATR)
 - ▶ 東中竜一郎 (名古屋大学), 高橋哲朗 (富士通研究所), 堀内颯太 (名古屋大学), 稲葉通将 (電気通信大学), 佐藤志貴 (東北大学), 船越孝太郎 (東京工業大学), 小室允人 (千葉大学), 西川寛之 (明海大学), 宇佐美まゆみ (国立国語研究所), 港隆史 (ATR/理科学研究所), 境くりま (ATR), 船山智 (ATR)
 - 「対話システムライブコンペティション 5」
 - ▶ 金崎翔大 (同志社大学/理化学研究所), 渡邊寛大 (奈良先端科学技術大学院大学/理化学研究所), 河野誠也 (理化学研究所), 湯口彰重 (理化学研究所/奈良先端科学技術大学院大学), 桂井麻里衣 (同志社大学), 吉野幸一郎 (理化学研究所/奈良先端科学技術大学院大学)
 - 「対話行為予測とエンタテインメント予測に基づいたマルチモーダル対話システム」
 - ▶ 守屋彰二 (東北大学), 塩野大輝 (東北大学), 岸波洋介 (東北大学), 藤原吏生 (東北大学), 木村昂 (東北大学), 松本悠太 (東北大学), 曾根周作 (東北大学), 赤間怜奈 (東北大学/理化学研究所), 鈴木潤 (東北大学/理化学研究所), 乾健太郎 (東北大学/理化学研究所)
 - 「aoba_v3 bot: 多様な応答生成モデルとルールベースを統合したマルチモーダル雑談対話システム」
 - ▶ 山崎天 (LINE 株式会社), 川本稔己 (LINE 株式会社), 大萩雅也 (LINE 株式会社), 水本智也 (LINE 株

式会社), 小林滉河 (LINE 株式会社), 吉川克正 (LINE 株式会社), 佐藤敏紀 (LINE 株式会社)

「HyperCLOVA を用いた音声雑談対話システム」

- ・大野瞬 (東京電機大学), 石井均 (東京電機大学), 木原諒子 (東京工芸大学), 片上大輔 (東京工芸大学), 酒造正樹 (東京電機大学), 前田英作 (東京電機大学)

「即効性のある代替案の提供で友人に謝罪を行うマルチモーダル対話エージェント」

- ・吉川克正 (LINE 株式会社), 川本稔己 (LINE 株式会社/東京工業大学), 山崎天 (LINE 株式会社), 水本智也 (LINE 株式会社), 小林滉河 (LINE 株式会社), 大萩雅也 (LINE 株式会社), 佐藤敏紀 (LINE 株式会社)

「シチュエーションに合わせたシナリオ誘導と HyperCLOVA を利用した応答生成によるハイブリッド対話システム」

- ・白井宏美 (Future Communication Laboratory)

「謝罪場面に適した人らしいマルチモーダル対話システムの実現に向けて」

2022 年 12 月 14 日

・一般口頭発表 2

- ・大塚淳史 (NTT デジタルツインコンピューティング研究センタ), 石井亮 (NTT デジタルツインコンピューティング研究センタ), 野本済央 (NTT デジタルツインコンピューティング研究センタ), 杉山弘晃 (NTT コミュニケーション科学基礎研究所), 深山篤 (NTT デジタルツインコンピューティング研究センタ), 中村高雄 (NTT デジタルツインコンピューティング研究センタ)

「個人性の再現を目指したユーザ属性付き雑談対話事前学習モデルに関する一検討」

- ・李晃伸 (名古屋工業大学), 石黒浩 (大阪大学)

「自律・遠隔融合対話システムのための高生命感・高存在感 CG エージェントの開発」

- ・徳永清輝 (理化学研究所), 田村和弘 (理化学研究所), 大武美保子 (理化学研究所)

「高齢者のための対話システムのトレーニング・アンケート機能拡張および予備的評価: 在宅認知機能訓練に向けて」

- ・山本賢太 (京都大学), 井上昂治 (京都大学), 河原達也 (京都大学)

「音声対話システムによる雑談対話におけるキャラクタ表現に基づくユーザ適応の検討」

・インダストリーセッション

- ・安田晴彦 (株式会社シルバコンパス)

「まるでそこにいる人と話をしているような, 新しい感動対話体験 AI 映像対話システム「Talk With」」

- ・小磯花絵 (国立国語研究所), 白田泰如 (国立国語研究所), 川端良子 (国立国語研究所)

「『日本語日常会話コーパス』(Corpus of Everyday Japanese Conversation, CEJC)」

- ・沢田慶 (rinna 株式会社), シーン誠 (rinna 株式会社), 趙天雨 (rinna 株式会社)

「日本語における AI の民主化を目指した事前学習モデルの公開」

- ・大須賀晋 (株式会社アイシン), 田中五大 (株式会社アイシン), 鍋倉彩那 (株式会社アイシン), 中野涼太 (アイシン・ソフトウェア株式会社), 渡邊凌太 (アイシン・ソフトウェア株式会社), 石川友香 (GarateaCircus), 石川晃之 (GarateaCircus), 中村晃一 (Idein 株式会社), 藤井裕也 (Idein 株式会社), 堀内颯太 (名古屋大学), 東中竜一郎 (名古屋大学), 西村良太 (徳島大学), 太田健吾 (阿南工業高等専門学校), 北岡教英 (豊橋技術科学大学)

「EMotive A.I. “Say”」

- ・宮澤幸希 (フェアリーデバイセズ株式会社), 佐藤可直 (フェアリーデバイセズ株式会社)

「フェアリーデバイセズにおける音声対話システムのための技術開発」

- ・金盛克俊 (ソニーグループ株式会社), 村松直矢 (ソニーグループ株式会社), 森田拓磨 (ソニーグループ株式会社)

「バディを目指す対話ロボット poiq」

- ・立石修平 (NTT レゾナント), 小瀬木悠佳 (NTT レゾナント), 大杉康仁 (NTT レゾナント), 狩野悌久 (NTT レゾナント), 中辻真 (NTT レゾナント)

「「人格」を与えられた AI による, 「感情」と「文脈」に根差した多面的応答の実現」

- ▶ 伊島翔大 (ユーザーローカル), 田中昂志 (ユーザーローカル)
「ソーシャルデータを活用した「サポートチャットボット」の紹介とアバター型音声対話システムの開発」 (オンラ in 発表)
 - ▶ 稲田徹 (SCSK), 山内大輔 (SCSKサービスウェア), 道岡直也 (SCSKサービスウェア), 重岡良昭 (SCSK), 土居誉生 (SCSK)
「音声認識を使ってセールストークを“見える化” 成約率を高めるアセスメントサービスの実践」 (オンラ in 発表)
 - ポスターセッション 2
 - ▶ 中野幹生 (株式会社 C4A 研究所/大阪大学), 駒谷和範 (大阪大学)
「DialBB: 情報技術の教材を指向した対話システム構築フレームワーク」
 - ▶ 駒谷和範 (大阪大学), 武田龍 (大阪大学), 岡田将吾 (北陸先端科学技術大学院大学)
「マルチモーダル対話コーパスに対する主観的アノテーション結果に関する分析」
 - ▶ 二宮大空 (株式会社 AISHift), 邊土名朝飛 (株式会社 AISHift), 杉山雅和 (株式会社 AISHift), 戸田隆道 (株式会社 AISHift), 友松裕太 (株式会社 AISHift)
「チャットボット事業における Dense Retriever を用いた Zero-shot FAQ 検索」
 - ▶ 森一 (日立製作所), 佐藤明智 (電気通信大学), 藤田敦也 (名古屋工業大学), 本間健 (日立製作所), 十河泰弘 (日立製作所)
「タスク指向型対話における API スキーマに基づくユーザ発話からのタスク推定」
 - ▶ 瀧和男 (神戸大学), 古和久朋 (神戸大学)
「音声対話 AI エージェントを用いた認知機能検査システム—実運用向け改良と評価」
 - ▶ 斎藤里美 (東京外国語大学)
「I-JAS 依頼タスクにおける予備調査からの試み—謝罪シチュエーションチャットボット会話に対して—」
 - ▶ 藤後英哲 (早稲田大学), 大浦杏奈 (早稲田大学), 菊池浩史 (早稲田大学)
「システム発話の感情分類による制御を行ったマルチモーダル対話システム」
 - ▶ 久松拓夢 (電気通信大学), 武井大地 (電気通信大学), 中井紫音 (電気通信大学), 宮本友樹 (電気通信大学), 内海彰 (電気通信大学)
「テキスト情報に基づく雰囲気推定を行う雑談対話システムの提案」
 - ▶ 佐藤明智 (電気通信大学), 南泰浩 (電気通信大学), 金子俊太 (電気通信大学), 谷口伊織 (電気通信大学), 郭恩孚 (電気通信大学)
「話題継続とペルソナを考慮した雑談対話システムの構築」
 - ▶ 楊潔 (早稲田大学), 菊池浩史 (早稲田大学), 中下咲帆 (早稲田大学), 藤後英哲 (早稲田大学), 菊池英明 (早稲田大学)
「語用論的対話方策を使用するルールベースの対話システム」
 - ▶ 内田昂 (本田技研工業株式会社), 本田為彬 (本田技研工業株式会社), 吉開一輝 (本田技研工業株式会社), 本田裕 (本田技研工業株式会社)
「バーチャル環境下で円滑な対話を行うマルチモーダル対話システム」
 - 国際会議報告
 - ▶ SIGDIAL/YRRSDS: 大橋厚元 (名古屋大学)
 - ▶ ICMI: 岡田将吾 (北陸先端科学技術大学院大学)
 - ▶ INTERSPEECH: 河野誠也 (理化学研究所)
 - ▶ COLING: 岸波洋介 (東北大学)
 - 表彰・閉会
- 「学習者辞書用語彙資源の構築」共同研究発表会 [2023.1.8, オンライン]
- ▶ はじめに: 柏野和佳子 (国立国語研究所)

- ▶ 星野和子 (元駒沢女子大学)
 - 「日本語教育の教科書における「考える」と「思う」の分析」
- ▶ 丸山直子 (東京女子大学)
 - 「複合格助詞の位相」
- ▶ 馬場俊臣 (北海道教育大学)
 - 「『語の文体値データ』について」
- ▶ 阿辺川武 (国立情報学研究所)
 - 「日本語接続表現の計量的分析」
- ▶ 三好優花 (一橋大学大学院学生)
 - 「形容詞「やわらかい」の多義性に関する一考察」
- ▶ 武中清香 (一橋大学大学院学生)
 - 「「口」と「口」を含む慣用表現の BCCWJ 使用頻度調査」
- ▶ Nora Abuellil (早稲田大学大学院学生), 松下達彦 (国立国語研究所)
 - 「日本語の日常会話の「形式×場所」「性別×年齢」別の語彙的特徴—日本語日常会話コーパス (CEJC) の多次元尺度法と特徴語抽出による分析—」
- ▶ 柏野 和佳子 (国立国語研究所)
 - 「語への位相情報の付与の検討」

研究集会 「古辞書データ共有と拡張」 [2023.1.21, オンライン]

- 第1部: 研究集会「古辞書データ共有と拡張」
 - ▶ 発表
 - 守岡知彦 (京都大学)
 - 「CHISE における HDIC サポートの現状と課題」
 - 劉冠偉 (東京大学)
 - 「HDIC Viewer 2023: 古辞書総合情報ポータルサイトの構築に向かって」
 - 岡田一祐 (北海学園大学)
 - 「TEI ガイドラインにもとづく古辞書の電子テキスト化とその意義」
 - 永崎研宣 (人文情報学研究所), 王一凡 (東京大学/人文情報学研究所)
 - 「仏典文字の標準化における SAT の取組み」
 - 李媛 (関西大学)
 - 「古辞書文字の標準化へ向けて: 観智院本類聚名義抄を中心に」
 - ▶ 特別講演
 - 池田証寿 (北海道大学名誉教授)
 - 「日本古辞書データセット」
- 第2部: HNG データセット保存会総会

シンポジウム 「日常会話コーパス」 VIII [2023.3.3, オンライン]

- 開会挨拶
- 口頭発表 1
 - ▶ 小磯花絵 (国立国語研究所)
 - 「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究に向けて」
- 口頭発表 2
 - ▶ 丸山岳彦 (専修大学)
 - 「話し言葉コーパスの多角化の可能性—横断的視点と縦断的視点—」

- ポスターセッション A
 - ▶ 加藤隆聖 (早稲田大学), 大浦杏奈 (早稲田大学), 浅井拓也 (早稲田大学), 菊池英明 (早稲田大学)
「日常会話における speaking style 尺度の妥当性検証と自動推定」
 - ▶ 滝島雅子 (NHK 放送研修センター)
「日常会話における「美化語」の使用傾向」
 - ▶ 石川慎一郎 (神戸大学)
「語彙頻度に基づく学年推定モデリング—小中高大生作文コーパス JASWRIC を用いた検討—」
 - ▶ 山本真理 (関西学院大学)
「「かぬ」を用いた質問発話—インタビュー会話を例に—」
 - ▶ 中馬隼人 (中部大学)
「「じゃなくて」を用いた他者訂正: 協働的な言葉探しの営み」
 - ▶ 居關友里子 (国立国語研究所)
「親子の協働作業場面における相互行為」
- ポスターセッション B
 - ▶ 大根田拓也 (宇都宮大学), 森大毅 (宇都宮大学)
「日常会話に現れる感動詞の音響的特徴と知覚される態度の関係」
 - ▶ 福原龍志 (千葉大学), 伝康晴 (千葉大学)
「ホストの間合い」
 - ▶ 鈴木あすみ (国立障害者リハビリテーションセンター研究所/東北大学大学院)
「公開自閉スペクトラム症者会話コーパスの構築に向けて」
 - ▶ 加藤恵梨 (愛知教育大学)
「日常会話における不満を表す表現」
 - ▶ 白田泰如 (国立国語研究所), 大野剛 (アルバータ大学)
「日常会話における「動詞で終わる発話」の特徴—「違う」を例に」
 - ▶ 田中弥生 (国立国語研究所)
「親子の協働作業場面における会話の脱文脈度」
- ポスターセッション C
 - ▶ 石川創 (駒沢女子大学)
「理解のあいづち「そうなんですね」の定着について」
 - ▶ 岸本健太 (関西学院大学)
「行為の知覚と感謝の発話のタイミングに関する考察—「他者の好意を期待する」ことの忌避」
 - ▶ 石本祐一 (ものづくり大学/国立国語研究所)
「談話行為と日常会話音声の基本周波数の関係」
 - ▶ 上出大河 (國學院大學)
「旧領有地における児童の作文資料とコーパス」
 - ▶ 松下達彦 (国立国語研究所), Nora Abuellil (早稲田大学), 大村舞 (国立国語研究所)
「語彙から見た日本語日常会話の全体像」
 - ▶ 川端良子 (国立国語研究所)
「会話参加者と指示対象との関係と固有名の使用について—著名人を指示する表現に注目して—」
- ポスターセッション D
 - ▶ 西阪亮 (関西学院大学)
「参与者間の優劣関係を利用した発話の危険性と遊戯性」
 - ▶ 横森大輔 (京都大学)
「文節末延伸の韻律的バリエーションとその相互行為上の帰結」
 - ▶ 有本泰子 (千葉工業大学), 福田樹人 (千葉工業大学), 松田匠翔 (千葉工業大学), 白鳥恵大 (千葉工業大学), 飯田真広 (千葉工業大学), 市野澤太陽 (千葉工業大学), 瀬戸口遼 (千葉工業大学), 森山将朝 (千葉工

業大学), 八木田怜 (千葉工業大学)

「Multimodal corpus of spontaneous affective interaction during gameplay (MSAI) の構築に向けた Affect Burst アノテーション」

・遠藤智子 (東京大学)

「認識性の日中対照会話分析: declarative question の頻度と機能」

・大村舞 (国立国語研究所)

「UD Japanese-CEJC の構築」

・口頭発表 3

・宮城信 (富山大学)

「授業における児童の話し合い活動の目的」

・口頭発表 4

・柏野和佳子 (国立国語研究所)

「書き言葉的「硬・軟」度と話し言葉的「硬・軟」度の検討」

・口頭発表 5

・菊池英明 (早稲田大学)

「話し言葉コーパスの応用研究の状況」

・閉会挨拶

公開シンポジウム「ことば・認知・インタラクション 11」 [2023.3.4, 国立情報学研究所]

・開会挨拶

・講演

・門田圭祐 (日本学術振興会/早稲田大学)

「アドレス手段とアドレス先の複層的アノテーション: 発話のアドレスの体系的記述に向けて」

・高木智世 (筑波大学)

「吃音「症状」と相互行為実践」

・岡本雅史 (立命館大学), Marina B. Asad (立命館大学)

「非難の〈ターゲット〉と語りの〈宛て先〉: 否定的評価をめぐる相互行為のアドレス性」

・パネル討論: 「会話コーパスが拓く言語・相互行為研究の新たな地平」

・プロジェクト紹介 1: 伝康晴 (千葉大学)

・プロジェクト紹介 2: 小磯花絵 (国立国語研究所)

・指定討論者: 岩田夏穂 (武蔵野大学), 馬塚れい子 (理化学研究所), 辻井潤一 (産業技術総合研究所)

研究集会「古辞書・漢字音研究とデータベース 2022」 [2023.3.4, オンライン]

・開会挨拶: 加藤大鶴 (跡見学園女子大学)

・セッション 1 (司会: 小林雄一 (京都先端科学大学))

・藤本灯 (清華大学)

「辞書語彙データベース構築の見通し」

・久保柁子 (京都府立大学大学院学生)

「『落葉集本編』『和訓栞』本文のデータベース化」

・大島英之 (東京大学大学院学生)

「『文明本節用集』データベース化の方法と課題」

・中野直樹 (常葉大学短期大学部), 劉冠偉 (東京大学史料編纂所)

「『増続大広益会玉篇大全』データベース化の試み—巻一の公開にあたって—」

・劉冠偉 (東京大学史料編纂所)

「辞書語彙データベースの実装についての進捗」

- 講演 1
 - ▶ 萩原義雄 (駒澤大学名誉教授)
 - 「『和名類聚抄』から『倭名類聚鈔箋注』へー語解析データベース構築をめざしてー」
- セッション 2 (司会: 加藤大鶴 (跡見学園女子大学))
 - ▶ 加藤大鶴 (跡見学園女子大学)
 - 「資料横断的な漢字音・漢語音データベースの概要と課題」
 - ▶ 石山裕慈 (神戸大学)
 - 「データベースの拡充と字音仮名遣い研究の進展について」
 - ▶ 坂水貴司 (広島経済大学)
 - 「個別事例を対象としたデータベース活用ー呉音資料における「等」の声調を事例としてー」
 - ▶ 高田智和 (国立国語研究所)
 - 「漢字音・漢語音データベースの語彙資源化」
- 講演 2
 - ▶ 佐々木勇 (広島大学)
 - 「文献資料から見たデータベース構築と活用の注意点ー古辞書・音義を例にー」
- 閉会挨拶: 高田智和 (国立国語研究所)

「ハワイにおける日系社会資料に関する資料調査と社会調査の融合的研究」共同研究発表会
[2023.3.5, オンライン]

- ▶ 原裕昭 (沖縄県立図書館), 早瀬千明 (沖縄県立図書館)
 - 「沖縄県立図書館の移民プロジェクトと県系移民音声資料整理と活用」
- ▶ 樋口日菜 (和歌山市民図書館)
 - 「和歌山市民図書館における移民資料室の役割」

「学術知デジタルライブラリの構築 (国語研拠点)」研究集会 [2023.3.7, オンライン]

- ▶ 高田智和 (国立国語研究所)
 - 「プロジェクト概要」
- ▶ 寺沢憲吾 (公立はこだて未来大学), 武内邦男 (公立はこだて未来大学)
 - 「波照間方言語彙に対する機械学習を用いた文字認識に関する予備的実験結果の報告」
- ▶ 宮川創 (国立国語研究所)
 - 「Omeka S による LOD と IIIF を駆使した言語資源デジタルアーカイブの開発」
- ▶ 中川奈津子 (国立国語研究所), 小川潤 (人文学オープンデータ共同利用センター, 東京大学), 大向一輝 (東京大学), 亀田堯宙 (国立歴史民俗博物館)
 - 「RDF によるフィールド言語調査のメタデータ表示」

「通時コーパス」シンポジウム 2023 [2023.3.10, オンライン]

- 口頭発表 I
 - ▶ 小木曾智信 (国立国語研究所)
 - 「『日本語歴史コーパス』 ver.2023.3 通時コーパス拡張進捗報告」
 - ▶ 竹内綾乃 (国立国語研究所), 松崎安子 (国立国語研究所)
 - 「『CHJ 日本語歴史コーパス』からみる江戸随筆作品の特性」
 - ▶ 井上誠一 (東京都立大学)
 - 「トピックモデルを用いた単語の通時的な意味変化のモデル化とその応用」
- テーマセッション: 「『日本語歴史コーパス』を補完するデータを作る」
 - ▶ 小木曾智信 (国立国語研究所)
 - 「『昭和・平成書き言葉コーパス』と権利処理」

- ▶ 片山久留美 (国立国語研究所)
「近世読本コーパス構築の課題—『忠臣水滸伝』を例に」
- ▶ 近藤明日子 (東京大学)
「明治前期口語体実用文データセットの作成」
- ▶ 高橋雄太 (明治大学), 田中牧郎 (明治大学)
「明治理科教科書コーパスの公開—OpenCHJ のモデルケースとして—」
- ▶ 古田龍啓 (九州大学)
「抄物コーパスの構築へ向けて」
- ▶ 松崎安子 (国立国語研究所), 竹内綾乃 (国立国語研究所)
「『日本語コーパス 江戸時代編 IV』 ver.0.8 随筆作品の構築と公開」
- ▶ ディスカッション
- 口頭発表 II
 - ▶ 凌志棟 (東京都立大学), 岡照晃 (東京都立大学), 小町守 (東京都立大学)
「日本語意味変化検出の評価データセットの構築」
 - ▶ 間淵洋子 (和洋女子大学)
「CHJ を使った中高生向け単語帳作成の試み」

研究集会「言語をめぐる社会調査史料の活用」 [2023.3.14, オンライン]

- ▶ 前田忠彦 (統計数理研究所)
「社会調査資料のアーカイブ化とその活用について」
- ▶ 高田智和 (国立国語研究所)
「鶴岡調査データベース 5.0 公開に向けて」
- ▶ 賀茂道子 (名古屋大学)
「占領期国語改革の背景と意義：民主化との関連性からの検討」

(4) NINJAL コロキウム

日本語学・言語学・日本語教育の様々な分野における最先端の研究をテーマとした国内外の優れた研究者による講演会を NINJAL コロキウムとしておこなっている。原則として月 1 回、国立国語研究所にて開催し、研究者・大学院学生のみならず、一般にも公開している。2022 年度は、オンラインまたはオンライン併用 (ハイブリッド) 形式で 11 回開催した。

- 第 122 回 (2022 年 6 月 14 日)
 - ▶ 東照二 (米国・ユタ大学 教授)
「政治と言語：首相、愛子内親王、瀬戸内寂聴」
(オンライン開催)
- 第 123 回 (2022 年 9 月 13 日)
 - ▶ Susan Fischer (米国・ロチェスター工科大学 名誉教授/ニューヨーク市立大学大学院センター Adjunct Professor)
“Sign Language Methodology”
(ハイブリッド開催, 使用言語：英語)
- 第 124 回 (2022 年 9 月 20 日)
 - ▶ Henrik Gottlieb (デンマーク・コペンハーゲン大学 名誉教授)
“Charting the English Influence on European Languages: Anglified Danish as a Case Study”
(ハイブリッド開催, 使用言語：英語)
- 第 125 回 (2022 年 9 月 27 日)
 - ▶ Wilbert Heeringa (オランダ・Fryske Akademy, programmer and data scientist)
“Introduction to Dutch Dialect Geography”
(オンライン開催, 使用言語：英語)

- 第126回 (2022年10月4日)
 - Marc L. Greenberg (米国・カンザス大学 教授)
 - “The Reduction of Word-Prosody Systems in Slavic Languages and Dialects (with Some Furtive Comparison to Japanese)”
 - (ハイブリッド開催, 使用言語: 英語)
- 第127回 (2022年12月20日)
 - Florian Coulmas (ドイツ・デュースブルク=エッセン大学 教授)
 - “The Best Writing System of the World”
 - (オンライン開催, 使用言語: 英語)
- 第128回 (2023年1月10日)
 - 中村桃子 (関東学院大学 教授)
 - 「日本語の男女別自称詞—規範・アイデンティティ・セクシュアリティ」
 - (オンライン開催)
- 第129回 (2023年1月31日)
 - Edith Aldridge (台湾・中央研究院語言学研究所 研究員)
 - 「変体漢文における語順による格標示」
 - (ハイブリッド開催, 使用言語: 日本語)
- 第130回 (2023年2月14日)
 - 尾辻恵美 (オーストラリア・シドニー工科大学 准教授)
 - 「アイデンティティを再考する: 人、場所、モノ、ことばに分散化されたアイデンティティ」
 - (オンライン開催)
- 第131回 (2023年2月28日)
 - Christopher D. Kennedy (米国・シカゴ大学言語学科 教授)
 - “Points of Comparison”
 - (ハイブリッド開催, 使用言語: 英語)
- 第132回 (2023年3月14日)
 - Mark Turin (カナダ・ブリティッシュコロンビア大学 准教授)
 - “Heritage Languages and Language as Heritage: The Language of Heritage in Canada and Beyond”
 - (ハイブリッド開催, 使用言語: 英語)

(5) NINJAL サロン

国立国語研究所の研究者（共同研究員を含む）を中心として、おのおのの研究内容を紹介することによって情報交換をおこなう場である。外部からの聴講も歓迎している。2022年度は、第237回から第246回まで、オンライン（録画限定公開あり）またはオンライン併用（ハイブリッド）形式で10回開催した。

- 第237回 (2022年5月10日)
 - 菊地 礼 (国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員)
 - 「構文と直喩の運用の関係: 「あたかも」と「さながら」の比較から」
 - (オンライン開催, 限定公開の録画あり)
- 第238回 (2022年5月24日)
 - 小磯花絵 (国立国語研究所 教授), 山崎誠 (国立国語研究所 教授), 小木曾智信 (国立国語研究所 教授), 野山広 (国立国語研究所 准教授), 須賀和香子 (国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員), 小原雄次郎 (国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員)
 - 「言語資源開発センターのコーパスの紹介」
 - (オンライン開催, 限定公開の録画あり)

- 第 239 回 (2022 年 5 月 31 日)
 - ▶ 浅原正幸 (国立国語研究所 教授), 朝日祥之 (国立国語研究所 准教授), 石黒圭 (国立国語研究所 教授), 大西拓一郎 (国立国語研究所 教授), 小木曾智信 (国立国語研究所 教授), 小磯花絵 (国立国語研究所 教授), 高田智和 (国立国語研究所 教授), 山田真寛 (国立国語研究所 准教授)
 - 「今年度からの国語研共同研究プロジェクトの紹介」
 - (オンライン開催, 限定公開の録画あり)
- 第 240 回 (2022 年 6 月 7 日)
 - ▶ セリック・ケナン (国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員), 麻生玲子 (名桜大学 准教授), 中澤光平 (信州大学 講師)
 - 「八重山語のもう 1 つの 3 型アクセント体系の発見: 小浜方言の韻律体系に関する調査報告」
 - (オンライン開催, 限定公開の録画あり)
- 第 241 回 (2022 年 6 月 21 日)
 - ▶ 横山詔一 (国立国語研究所 教授)
 - 「昨今の学術研究環境と Jxiv プレプリントの動向」
 - (オンライン開催, 限定公開の録画あり)
- 第 242 回 (2022 年 7 月 26 日)
 - ▶ 安部さやか (外来研究員/ミドルベリー大学 准教授)
 - 「移動から情意的意味への変化と因果性の関わり: 除去の表現「(て)のける」と「(て)しまう」の通時的分析」
 - (ハイブリッド開催, 限定公開の録画あり)
- 第 243 回 (2022 年 10 月 11 日)
 - ▶ 福永由佳 (国立国語研究所 准教授), 鎌水兼貴 (国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員), 高木千恵 (大阪大学 准教授), 高橋朋子 (近畿大学 准教授), 三井はるみ (國學院大學 教授), 吉田さち (跡見学園女子大学 准教授), 朝日祥之 (国立国語研究所 准教授)
 - 「日本の多言語多文化状況における言語問題に関するウェブ調査」報告」
 - (オンライン開催, 限定公開の録画あり)
- 第 244 回 (2022 年 11 月 15 日)
 - ▶ 小川雅貴 (東京大学 大学院博士後期課程)
 - 「受動文としてのテモラウ構文は、能動文としてのテアゲル構文よりも理解が難しい」
 - (オンライン開催, 限定公開の録画あり)
- 第 245 回 (2022 年 11 月 29 日)
 - ▶ 福村真紀子 (茨城大学 助教)
 - 「よみかきに内在するイデオロギー—日本語学習支援を再考するための文献研究」
 - (オンライン開催, 限定公開の録画あり)
- 第 246 回 (2023 年 3 月 7 日)
 - ▶ 呉梅 (明治大学 大学院博士課程)
 - 「日本語学習者の作文における外来語の使用実態の考察—中国語母語話者の縦断コーパスの分析を通して—」
 - (オンライン開催, 限定公開の録画あり)

(6) 講習会・チュートリアル・セミナー

文化庁「各地方言収集緊急調査」方言談話整備共同プロジェクト説明会&講習会 [2022.7.16, オンライン]

- 第 1 部
 - ▶ 井上文子
 - 「データの全貌—総時間数およそ 2,500 時間 (うち公開データ 80 時間) の方言談話データのゆくえ—」

- ・ 木部暢子・COJADS 班
「データ整備の流れ—COJADS 公開データができるまで—」
- ・ 山田真寛, 日高水穂
「データ共有のしくみ—100年後の方言研究のために—」
- ・ 第2部: データ整備・データ利用講習会

言語資源チュートリアル (第1回) [2022.8.4, オンライン]

- ・ テーマ: 書き言葉の言語資源構築
 - ・ 午前: 重要な概念の説明 (サンプリング, 電子化, 前処理, ライセンス等)
 - ・ 午後: 言語資源構築の実際 (現代日本語書き言葉均衡コーパス, 日本語歴史コーパス)

第44回 NINJAL チュートリアル 『分類語彙表』による日本語研究 [2022.8.6, オンライン]

- ・ 講師: 山崎誠 (国立国語研究所 教授), 浅原正幸 (国立国語研究所 教授)
- ・ 内容: 『分類語彙表』とそれを利用した研究および関連データベースについて
 - ・ 10:00–11:00 『分類語彙表』の構造と特徴
 - ・ 11:00–12:00 『分類語彙表』を利用した研究
 - ・ 13:00–15:00 『分類語彙表』関連データベース

『日本語歴史コーパス』「中納言」オンライン講習会【初級編】 [2022.8.23, オンライン]

- ・ 講師:
 - ・ 小木曾智信 (国立国語研究所 研究系 教授)
 - ・ 松崎安子 (国立国語研究所 言語資源開発センター プロジェクト非常勤研究員)
 - ・ 竹内綾乃 (国立国語研究所 言語資源開発センター プロジェクト非常勤研究員)
 - ・ 片山久留美 (国立国語研究所 研究系 プロジェクト非常勤研究員)
- ・ プログラム:
 - ・ 13:30–14:20 『日本語歴史コーパス』の概要
 - ・ 14:30–15:20 「中納言」による検索方法
 - ・ 15:30–17:00 検索結果の集計と活用

『日本語歴史コーパス』「中納言」オンライン講習会【Excel 中級編】 [2022.8.26, オンライン]

- ・ 講師:
 - ・ 小木曾智信 (国立国語研究所 研究系 教授)
 - ・ 松崎安子 (国立国語研究所 言語資源開発センター プロジェクト非常勤研究員)
 - ・ 竹内綾乃 (国立国語研究所 言語資源開発センター プロジェクト非常勤研究員)
- ・ プログラム:
 - ・ 13:30–14:20 語数表と調整頻度
 - ・ 14:30–15:20 語彙表とルックアップ関数
 - ・ 15:30–17:00 コロケーション強度の計算

韻律ラベリング講習会 [2022.9.16, 国立国語研究所多目的室]

- ・ 講師: 五十嵐陽介 (国立国語研究所)
- ・ 補助: 小磯花絵 (国立国語研究所), 山田高明 (国立国語研究所)
 - ・ 午前: Praat の使い方 (Praat 初心者向け)
 - ・ 午後: X-JToBI に基づく韻律ラベリング講習会

『日本語諸方言コーパス』「中納言」オンライン講習会 [2022.10.15, オンライン]

- ・ 13:30–13:40
木部暢子 (国立国語研究所): 『日本語諸方言コーパス』構築の経緯

- 13:40–16:20
小原雄次郎 (国立国語研究所): 『日本語諸方言コーパス』【解説編】
 - ▶ 『日本語諸方言コーパス』の概要
 - ▶ 「中納言」の検索方法
 - ▶ 『日本語諸方言コーパス』の特徴
- 16:20–17:00
上村健太郎 (国立国語研究所): 『日本語諸方言コーパス』【実習編】

「中納言」講習会【初中級編】 [2022.11.5, オンライン]

- 講師: 柏野和佳子
- 補助: 小磯花絵, 居關友里子, 田中弥生
- 内容: 中納言の操作方法とその検索結果を使って, 表やグラフの作成などを学ぶ。初中級者対象。

全文検索システム『ひまわり』講習会「作文コーパスの活用」 [2023.2.27, 国立国語研究所 3階セミナー室 1-3]

- 講師: 森篤嗣 (京都外国語大学), 山口昌也 (国立国語研究所)
- 概要: 全文検索システム『ひまわり』は, 言語研究用に開発された全文検索システムです。本講習会では, 『ひまわり』を使った作文コーパスの活用方法を二部構成で紹介します。
 - ▶ 第一部 既存の作文コーパスを『ひまわり』で活用する (担当: 山口昌也 (国立国語研究所))
 - 全文検索システム『ひまわり』の基本的な使い方
 - 『小中高大生による日本語絵描写ストーリーライティングコーパス』(JASWRIC)の『ひまわり』へのインポート
 - JASWRICを使った簡単な分析
 - ▶ 第二部 『日本語学習者作文コーパス』を『ひまわり』で検索する (担当: 森篤嗣 (京都外国語大学))
 - 『日本語学習者作文コーパス』を『ひまわり』で検索する意義
 - 誤用の集計
 - 本来使用されるべき正用に基づく誤用の集計

2022年度 NINJAL 日本語教師セミナー (海外) 『BTSJ 1000 人日本語自然会話コーパス』と NCRB (Natural Conversation Resource Bank) の開発の趣旨と日本語教育における活用法 [2023.3.4, 中国文化大学 (台北・台湾)]

- 講師: 宇佐美まゆみ (国立国語研究所 教授)
- 13:00–13:05 開会のご挨拶: 国立国語研究所, 台湾日本語文学会
- 13:05–13:10 趣旨説明: 宇佐美まゆみ (国立国語研究所)
- 13:10–14:40 講義 1:
『BTSJ 1000 人日本語自然会話コーパス』開発の趣旨と活用法
- 14:50–16:20 講義 2:
「NCRB (Natural Conversation Resource Bank) 開発の趣旨と活用法—自然会話を素材とする教材の意義—」
- 16:30–16:50 質疑応答, 各自の PC で NCRB の教材を体験
- 16:50–16:55 まとめ
- 16:55–17:00 閉会のご挨拶

令和 4 年度 NINJAL 日本語教師セミナー (国内) 「スマホを使った日本語学習者の辞書検索を支援する—世界の日本語学習者の辞書ツールの使用実態から—」 [2023.3.9, オンライン]

- 講演者: 石黒圭 (国立国語研究所 教授), 吉甜 (国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員), 佐野彩子 (国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員)
- 13:30–13:40 趣旨説明

- 13:40–14:45 講演：
「学習者のスマホによる辞書引きの特徴を知る」
- 15:00–16:20 ワークショップ：
「学習者の辞書引き行動を探る」(ブレイクアウトルーム使用)
- 16:20–16:30 まとめ

第45回 NINJAL チュートリアル「日本語学習者の話し言葉の分析—北京日本語学習者縦断コーパス(B-JAS)を用いて—」[2023.3.14, オンライン]

- 講師：石黒圭(国立国語研究所 研究系 教授)
アシスタント：布施悠子(国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員), 須賀和香子(国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員), 鈴木靖代(国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員)
- 13:30–14:30 B-JAS の概要
- 14:30–15:00 データのダウンロードの仕方
- 15:00–16:00 B-JAS を使ったデータ分析の方法
- 16:00–16:30 質疑応答

第46回 NINJAL チュートリアル『日本語日常会話コーパス』活用入門」[2023.3.29, オンライン]

- 講師：小磯花絵(国立国語研究所 教授), 山口昌也(国立国語研究所 准教授), 川端良子(国立国語研究所 特任助教)
アシスタント：西川賢哉(国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員)
- 10:00–10:15 日本語日常会話コーパスの設計と特徴
- 10:15–11:15 検索システム「中納言」で日常会話コーパスを使う 1
- 11:20–12:20 検索システム「中納言」で日常会話コーパスを使う 2
- 13:30–14:40 ELAN・Praat で日常会話コーパスを使う
- 14:45–15:15 全文検索システム「ひまわり」で日常会話コーパスを使う
- 15:30–16:30 コースに分かれて質問・実習(実習は一部コースのみ)

7 センター・研究図書室の活動

(1) 共同利用推進センター

日本語をはじめとする諸言語，日本語教育等を専門とする研究者が共同研究を推進する環境を提供する。研究文献(研究図書室)および研究資料(研究資料室)の収集・整理・保存をおこなうと同時に，来館閲覧利用やウェブページを通して，また，構築済み言語資源の受入・提供等により，共同利用環境の整備を推進している。

- 共同利用・共同研究については，以下の活動をおこなった。
 - ①オープンアクセス方針に沿って「国立国語研究所学術情報リポジトリ」での研究成果の登録・公開を推進した(追加219件，総数3,020件，ダウンロード回数26.3万)。
 - ②日本語研究・日本語教育研究分野の図書・雑誌論文等の書誌情報を整備し，「日本語研究・日本語教育文献データベース」を増補拡充した(追加5,742件，総データ件数280,504件，セッション数19万)。
 - ③研究図書室収蔵図書資料の整備を進め，「国立国語研究所蔵書目録データベース」を増補拡充した(図書の受入数は冊子のみで1,542件，電子ブックを含めると1,641件)。
 - ④貴重図書等のデジタル化を進め，「日本語史研究資料[国立国語研究所蔵]」に13件追加公開した。
 - ⑤研究資料室収蔵資料目録の整備を進め，「国立国語研究所研究資料室収蔵資料」データベースを増補拡充した(資料群の新規公開18件，収蔵資料目録試行版の追加登録1,809件)。

- ⑥研究資料室収蔵資料の保全と再利用のため、調査票等の紙媒体資料のデジタル撮影(67,382枚)と音声・映像資料の媒体変換(724点)をおこなった。また、所内専用試視聴システム「所蔵音声・映像データベース」を増補拡充し(音声173点、映像46点)、共同利用環境を整備した。
- ⑦国文学研究資料館の「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」に協力し、国立国語研究所が所蔵する歴史的典籍の画像データ化の準備をおこなった。
- ⑧併任教員4名を配置し、言語資源開発センターとの連携のもと、構築済みのコーパスの管理・公開体制を整えた。
- ⑨日本語教育映像教材シリーズの映像データ(mp4形式)の申込制による配布を開始した(2022年5月)。
- ⑩国立国語研究所が実施した社会調査の回答データ「外来語に関する意識調査(全国調査)データベース ver.1.0」、および「『日独仏西基本語彙対照表』データ」を公開した(いずれも2023年3月)。
- ⑪第3期中期目標期間中に実施した研究課題を中心に研究資料12件を受け入れ、研究資料室に入室利用ができるよう資料整備を進めた。
- ⑫情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設社会データ構造化センターとの共催で、2022年9月12日に2022年度共同利用セミナーをWeb開催でおこない、研究資料室の資料3点の紹介をおこなった(参加者108名、うち海外4名、学生10名)。
- ⑬所外で研究資料室の資料の紹介を3件おこなった(日本語教育学会春季大会、世論調査協会研究大会、図書館総合展)。
- ・地域・社会連携については、『国立国語研究所論集』(オンラインジャーナル)を2回発行し、論文の関連データがあるものについては、クリエイティブ・コモンズのライセンスを明示して公開をおこなった。
- ・グローバル化に関しては、以下を実施した。
 - ①韓国日語教育学会、韓国日本語學會と連携し、韓国国内で刊行されている日本語学関連文献の情報の収集を継続した。
 - ②日本語学的・言語学的にパイオニア的価値を持ち、その評価がほぼ確立した日本語論文を英訳し、Pioneering Linguistic Works in Japanとして3点追加公開した。
- ・その他、研究資料(研究データを含む)および研究情報の共同利用体制を整備し、2022年度共同利用型共同研究の採択課題11件に対して、研究資料及び研究情報を提供した。また、言語系学会連合との覚書に基づき、言語系学会連合関連の二つの学術誌に対して研究文献データの先行提供をおこなった。

(2) 言語資源開発センター

言語資源開発センターは、研究系や研究者コミュニティと連携してコーパス、アーカイブ等の言語資源の整備・開発およびその研究・教育への活用を通して言語資源学の創成に寄与する。

具体的には、コーパス化に必要な情報の整理や標準化、関連する技術の開発や提供を通じて、研究者コミュニティと共にデータを構築するための環境を整備している。

2022年度は主に第4期の目標であるオープンデータ、オープンサイエンスを推進するための活動をおこなった。具体的には、以下のとおりである。

- ・共同利用・共同研究については、(1)形態素解析用辞書 UniDic の更新(複数のプロジェクトとの共同)をおこなった。(2)コーパス検索ツール「中納言」を安定的に運用し、年度末には、データの修正(名大会話コーパス)、追加(日本語歴史コーパス、日本語諸方言コーパス)、および機能拡張をおこなった。利用者数は4万人ほど増加した。(3)共同利用型共同研究(C)(言語資源型)を8件実施し、所外研究者との交流を図った。(4)言語資源に関する知識・技術の普及を図るため、言語資源チュートリアル、「中納言」講習会をプロジェクトと連携して開催した。(5)言語資源開発センター専任職員・研究員による研究発表11件、データ公開1件をおこなった。目標をやや下回った。
- ・大学院教育・若手育成では、連携大学院で言語資源に関する知見・技術の普及を図った。また、若手研究者への発表の機会の確保や研究交流の場として「言語資源ワークショップ2022」を開催した。発表の実績を残すために、論文とポスターの両方を国立国語研究所の学術情報リポジトリに登録することにした。
- ・地域・社会連携では、大学等における授業用アカウントを発行した(115件、対象者(受講者)は3848名)。
- ・グローバル化の計画としては、英文HPの充実を図ったが利用成果のページを作成するにとどまった。

- ・その他、中納言に関する問い合わせ対応を効率的におこなうためにメーリングリストを作成し、その運用を開始した。

(3) 研究図書室

全国で唯一の日本語に関する専門図書館で、日本語研究および日本語に関する研究文献・言語資料を中心に、日本語教育、言語学など、関連分野の文献・資料を収集・所蔵している。

閲覧室には、新着コーナーを設け、新着雑誌・図書を利用しやすい環境を整えている。

カードキーによる入退室の管理および照明の人のセンサーを整備し、所内教職員は夜間・休日にも利用可能である。

電子ジャーナルの契約や電子ブックの拡充も進めており、所内教職員はこれら電子資料の大半を所外からも利用可能である。

- ・開室日時：月曜日～金曜日 9時30分～17時（土曜日・日曜日・祝日・夏季休業・年末年始・毎月最終金曜日は休室）
- ・主なコレクション：
 - 東条操文庫（方言）
 - 大田栄太郎文庫（方言）
 - 保科孝一文庫（言語問題）
 - 見坊豪紀文庫（辞書）
 - カナモジカイ文庫（文字・表記）
 - 藤村靖文庫（音声科学）
 - 林大文庫（国語学）
 - 輿水実文庫（国語教育）
 - 中村通夫文庫（国語学）
- ・「国立国語研究所蔵書目録データベース」をウェブ検索できる。
- ・図書館間相互協力サービス（NACSIS-ILL）により、所属機関の図書館を通して複写物の取り寄せや図書の貸出を受けることができる。
- ・所蔵資料数（2023年4月1日現在）

	図 書	雑 誌	電 子 ブ ッ ク	電 子 ジャ ー ナ ル
日 本 語	128,482 冊	5,434 種	3 件	3 種
外 国 語	33,157 冊	534 種	1,415 件	83 種
計	161,639 冊	5,968 種	1,418 件	86 種

※ 視聴覚資料など 7,724 点を含む。



國際的研究協力

国立国語研究所全体の研究テーマである「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」をグローバルな観点から推進するため、国際的な研究連携体制の多様化を図っている。

1 世界の大学・研究機関との提携

世界各地の大学や研究機関等と、共同研究の促進や研究者の交流等を目的とした学術交流協定を締結している。協定先は、海外で日本語や日本語教育を研究している機関に加え、言語学や情報科学の研究機関にも及び、これらの協定により、日本語研究から世界の言語研究へ、世界の言語研究から日本語研究へ、という両方向の交流を強化し、世界規模で研究を促進することをめざしている。

協定締結先 (2023年3月31日時点)

- ・中央研究院 (台湾) : 2014.3-
- ・北京外国語大学北京日本学研究中心 (中国) : 2014.6-
- ・オックスフォード大学人文科学部 (イギリス) : 2015.7-
- ・東呉大学日本語文学系 (台湾) : 2018.1-
- ・ハワイ大学マノア校 (アメリカ) : 2018.2-
- ・ティラク・マハラシュトラ大学日本語学科 (インド) : 2018.5-
- ・インド工科大学マドラス校人文社会科学部 (インド) : 2018.6-
- ・韓国日語教育学会 (韓国) : 2018.7-
- ・韓国日本語學會 (韓国) : 2018.7-
- ・ダッカ大学現代語研究所 (バングラデシュ) : 2018.9-
- ・ソウル大学人文学部 (韓国) : 2018.10-
- ・オーストラリア科学アカデミー・デジタル人文学センター (オーストラリア) : 2020.3-
- ・ヨーク大学言語学科 (イギリス) : 2020.6-
- ・天津外国語大学 (中国) : 2021.4-
- ・韓国外国語大学校 (韓国) : 2021.11-
- ・デカン・カレッジ (インド) : 2022.7-

2 国際シンポジウム・国際会議の開催

世界における日本語・日本語教育研究の発展のため、国際シンポジウムを毎年数回開催すると同時に、海外に拠点を持つ国際学会を国語研に招致している (2022年度開催のものは53ページに掲載)。

3 日本語研究英文ハンドブック

言語学関係の出版社として傑出した出版活動で世界をリードする De Gruyter Mouton (ドゥ・グロイター・ムートン社: ベルリン/ボストン) からの申し出により、国立国語研究所の優れた研究成果を英文で出版する包括的な協定を2012年7月に締結した。この協定に基づき、2014年から、日本語および日本語言語学の研究に関する包括的な日本語研究英文ハンドブック、Handbooks of Japanese Language and Linguistics シリーズ (全12巻) を順次刊行している。

このシリーズは、それぞれの領域におけるこれまでの重要な研究成果を俯瞰し、現在における最先端の研究状況をまとめるとともに、今後の研究方向にも示唆を与えるもので、国語研関係者 (専任教員および客員教員、諸大学の共同研究員) だけでなく、各領域における国内外の第一線の研究者が執筆を担当し、国語研が中心となって編集をおこなう大規模な国際的プロジェクトである。これにより大学共同利用機関としての

国語研の知名度を世界的に高めるだけでなく、日本語研究の成果ならびに動向を世界に広く問うことによって言語学の発展に資するとともに、日本語研究自体の進展にも寄与することとなる。

編集主幹

柴谷方良 (ライス大学名誉教授) Masayoshi Shibatani (Professor Emeritus, Rice University)

影山太郎 (国立国語研究所元所長・名誉教授) Taro Kageyama (Former Director-General and Professor Emeritus, NINJAL)

シリーズの構成 (全巻英文, 各巻 600–700 ページ)

Vol. 1: *Handbook of Japanese Historical Linguistics*

Edited by Bjarke Frellesvig, Satoshi Kinsui, and John Whitman

Vol. 2: *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*

Edited by Haruo Kubozono

(既刊, Print ISBN: 9781614511984, eISBN: 9781614511984)

Vol. 3: *Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation*

Edited by Taro Kageyama and Hideki Kishimoto

(既刊, Print ISBN: 9781614512097, eISBN: 9781614512097)

Vol. 4: *Handbook of Japanese Syntax*

Edited by Masayoshi Shibatani, Shigeru Miyagawa, and Hisashi Noda

(既刊, Print ISBN: 9781614516613, eISBN: 9781614516613)

Vol. 5: *Handbook of Japanese Semantics and Pragmatics*

Edited by Wesley Jacobsen and Yukinori Takubo

(既刊, Print ISBN: 9781614512073, eISBN: 9781614512073)

Vol. 6: *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*

Edited by Prashant Pardeshi and Taro Kageyama

(既刊, Print ISBN: 9781614514077, eISBN: 9781614514077)

Vol. 7: *Handbook of Japanese Dialects*

Edited by Nobuko Kibe and Tetsuo Nitta

Vol. 8: *Handbook of Japanese Sociolinguistics*

Edited by Fumio Inoue, Mayumi Usami, and Yoshiyuki Asahi

(既刊, Print ISBN: 9781501501470, eISBN: 9781501501470)

Vol. 9: *Handbook of Japanese Psycholinguistics*

Edited by Mineharu Nakayama

(既刊, Print ISBN: 9781614511212, eISBN: 9781614511212)

Vol. 10: *Handbook of Japanese Applied Linguistics*

Edited by Masahiko Minami

(既刊, Print ISBN: 9781614511830, eISBN: 9781614511830)

Vol. 11: *Handbook of the Ryukyuan Languages*

Edited by Patrick Heinrich, Shinsho Miyara, and Michinori Shimoji

(既刊, Print ISBN: 9781614511151, eISBN: 9781614511151)

Vol. 12: *Handbook of the Ainu Languages*

Edited by Anna Bugaeva

(既刊, Print ISBN: 9781501502859, eISBN: 9781501502859)

4 海外の研究者の招聘・受入

海外の研究者を専任や客員教員として招聘すると同時に、研究プロジェクトに共同研究員として多数の参画を得ている。また、海外の研究者や大学院生が国語研に滞在して研究をおこなう、外来研究員 (2022 年度海外機関からの受入 9 名) や特別共同利用研究員 (2022 年度海外機関からの受入 1 名) として受け入れている。

IV

社会連携と広報

1 地方自治体との連携

- 地方自治体と締結している交流協定
 - ▶ 宮崎県東臼杵郡椎葉村：2017.5-
 - ▶ 鹿児島県大島郡和泊町：2019.1-
 - ▶ 鹿児島県大島郡知名町：2019.1-
 - ▶ 鹿児島県薩摩川内市：2019.5-
- 地方自治体と共催・連携した催し物
 - ▶ 和泊町職員方言研修会「をうがみどうーさ！」
 - 2022.6.8 (和泊町役場)
 - 講師：山田真寛 (研究系准教授)
 - ▶ 知名町中央公民館講座「しまむにサロン」
 - 2022.5.15-2023.3.11, 毎月1回全11回 (知名町中央公民館)
 - 講師：横山晶子 (日本学術振興会 (JSPS)/東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所特別研究員 (RPD)), 山田真寛 (研究系准教授)

2 見学・研修・視察等

(2022年度は受入なし)

3 学会等の後援・共催

- 第19回全養協公開講座 (2022.6.4)

主催者：全国日本語教師養成協議会
 後援者：国際協力機構, 国際交流基金, 国立国語研究所, 大学日本語教員養成課程研究協議会, 日本語教育学会
 協賛者：アスク出版, アルク, イカロス出版, スリーエーネットワーク, 凡人社
 開催地：大田区産業プラザ PiO コンベンションホール
- 中高生日本語研究コンテスト (2022.9.1-30)

主催者：日本語学会
 後援者：人間文化研究機構, 言語系学会連合
 開催地：オンライン
- 特別展「Homō loquēns 「しゃべるヒト」 ～ことばの不思議を科学する～」 (2022.9.1-11.23)

主催者：国立民族学博物館
 後援者：朝日新聞社, NHK 大阪放送局, 京都新聞, 国立国語研究所, 産経新聞社, 日本経済新聞社, 毎日新聞社, 読売新聞社
 開催地：国立民族学博物館
- 日本語教育能力検定試験 (2022.10.23)

主催者：日本国際教育支援協会
 後援者：文化庁, 日本語教育学会, 国立国語研究所, 国際交流基金, 日本語教育振興協会, 国際日本語普及協会
 開催地：各試験会場
- 令和4年度危機的な状況にある言語・方言サミット (奄美大会) (2023.1.28, 29)

主催者：文化庁, 鹿児島県, 知名町, 知名町教育委員会, 国立国語研究所, 琉球大学

開催地：おきのえらぶ文化ホール あしびの郷・ちな

・第20回全養協公開講座(2023.2.4)

主催者：全国日本語教師養成協議会

後援者：国際協力機構，国際交流基金，国立国語研究所，大学日本語教員養成課程研究協議会，日本語教育学会

協賛者：アルク，スリーエーネットワーク，凡人社

開催地：IKE・Biz としま産業振興プラザ

・第14回産業日本語研究会・シンポジウム(2023.2.9)

主催者：高度言語情報融合フォーラム(ALAGIN)，一般財団法人日本特許情報機構(Japio)

後援者：総務省，文部科学省，経済産業省，特許庁，国立国語研究所，情報通信研究機構，工業所有権情報・研修館，情報処理学会，人工知能学会，言語処理学会，日本知的財産協会，アジア太平洋機械翻訳協会，大学技術移転協議会，株式会社産業経済新聞社

開催地：オンライン

4

広報

(1) 刊行物

『ことばの波止場』

ことばを研究することの面白さ・大切さや，国立国語研究所の活動に関する情報を，専門家でない方も読んで楽しめる広報誌。2022年度にリニューアルし，ウェブ上で年2回公開，その内容をまとめた冊子版を年1回発行する形式とした。

・Vol.12(冊子版発行：2023.3，ウェブ版公開：Vol.12-1：2022.10，Vol.12-2：2023.4)

- ▶特集：国立国語研究所
- ▶特集：ことばを集める
- ▶エッセイ：そのことばどこで知ったか覚えてます？(飯間浩明)
- ▶エッセイ：日本語の追っかけのすすめ「いかつい」に注目して(ながさわ)
- ▶インタビュー：「ことば」を意識してみませんか？(田窪行則)
- ▶インタビュー：コーパスに魅せられて(小磯花絵)
- ▶書籍紹介
- ▶研究室訪問：撮影は今です！(浅原正幸)

『国立国語研究所要覧 2022/2023』

発行：2022年6月

(2) Web 発信等

国立国語研究所ウェブサイト (<https://www.ninjal.ac.jp/>)

各種催し物，データベース等，国立国語研究所の最新情報からこれまでに蓄積された研究成果まで，幅広いコンテンツを紹介。2022年4月に全面リニューアル公開。

国語研ポータルサイト『ことば研究館』 (<https://kotobaken.jp/>)

ことばに関する一問一答式の記事『ことばの疑問』や，各種催し物，メディア掲載情報など，一般の方を対象に，ことば・日本語に関する様々なコンテンツをわかりやすく紹介。

国語研からの御案内(メールマガジン)

シンポジウム，コロキウム等のイベント，データベース紹介，職員公募など国語研からお知らせしたい事項について登録者に発信。月1～2回発行。

国語研公式 Twitter (<https://twitter.com/kokugoken>)

各種催し物，各種データベース，公式サイトでの更新情報など，最新の情報を紹介。

国語研公式 YouTube チャンネル (<https://www.youtube.com/c/NINJAL-kokugoken>)

国語研の活動紹介や催し物、教材などの動画を配信。2022年度は以下の動画を新規公開した。

- 言語学レクチャーシリーズ (試験版)
 - ▶ Vol.17 「日本語の表記—指針と実態—」 (柏野和佳子)
 - ▶ Vol.18 「コーパス言語学—話し言葉コーパスの世界—」 (小磯花絵)
 - ▶ Vol.19 「コーパスを使って日本語の歴史を探る」 (小木曾智信)
 - ▶ Vol.20 「社会言語学入門—ことばのバリエーションを見つめる—」 (朝日祥之)
 - ▶ Vol.21 「消滅危機言語の記録保存と継承保存」 (山田真寛)
- 第16回 NINJAL フォーラム 「ここまで進んだ！ここまで分かった！多様な言語資源に基づく日本語研究」 (オンライン開催) 講演：全7本
- ニホンゴ探検 2022 (オンライン開催) ことばのミニ講義・ワークショップ：全5本
- オープンハウス 2022 (オンライン開催) 研究紹介：全8本
- 総合研究大学院大学 日本語言語科学コース案内
- ぷらっと国語研 第1回 「中川奈津子先生の研究室を覗いてきました！」
- 国立国語研究所研究資料室 「談話語の実態」 (1952-53) の昔と今」 (図書館総合展 2022 出展動画)

(3) 一般向けイベント

NINJAL フォーラム

国語研が主体となって実施する研究や、他機関との連携研究による優れた成果を学術界だけでなく、広く一般の方々に知っていただくとともに、社会との連携を積極的に推進して社会貢献に資するという観点から開催。

第17回「語彙資源の構築と活用」[2023.2.18, オンライン開催]

- 講演
 - ▶ Francis Bond (Palacký University Olomouc)
「日本語 WordNet と多言語意味表現」
 - ▶ 藤田早苗 (NTT コミュニケーション科学基礎研究所)
「日本語・英語の単語親密度データベース構築と教育支援への活用」
 - ▶ 山崎誠 (国立国語研究所)
「『分類語彙表』のこれまでとこれから」
 - ▶ 小木曾智信 (国立国語研究所)
「UniDic を基盤とした語彙資源の連携—コーパス・分類語彙表・日本国語大辞典—」
 - ▶ 大西拓一郎 (国立国語研究所)
「狭域言語地図の詳細分布データを探索する」
 - ▶ 松下達彦 (国立国語研究所)
「日本語教育での語彙資源の活用—現状と展望—」
 - ▶ 田中牧郎 (明治大学)
「国語教育に語彙資源を役立てるには」
- 全体討論

国立国語研究所オープンハウス 2022 [2022.9.9, オンライン公開]

所員がどのような研究をしているのかを専門外の方や学部・大学院の学生にわかりやすく伝えることを目的として開催。2022年度は事前に用意した研究紹介コンテンツをオンライン公開する方式で実施した。

大学共同利用機関シンポジウム 2022 (出展) [2022.10.16, 名古屋市科学館およびオンライン開催]

- 講演
 - ▶ 横山詔一 (国立国語研究所)
「日本人の読み書き能力 1948 年調査のナゾに迫る」
- 機関紹介

(4) 児童・生徒向けイベント

NINJAL 職業発見プログラム

中学生や高校生向けに、言語学や日本語あるいは日本語教育を研究することを通じて、学問のたのしさや素晴らしさを知ってもらうためのプログラム。

- 研究所訪問
 - ▶ 新潟県立国際情報高等学校 (2022.7.29)
 - ▶ 立川市立立川第五中学校 (2022.9.30)
 - ▶ 開智中学・高等学校 (2022.2.16)
 - ▶ 開智日本橋学園中学・高等学校 (2022.8.18)
 - ▶ 新潟県立長岡高等学校 (2022.10.7)

NINJAL ジュニアプログラム

主に小学生を対象に、子どもたちの身近にある題材を取り上げ、楽しみながら普段使っている日本語について考えられるような、ワークショップや出前授業などを実施している。

- 出前授業
 - ▶ 国分寺市立第三小学校 (2023.2.9)

ニホンゴ探検 2022 [2022.8.1, オンライン公開]

児童・生徒・一般を対象に研究所を公開し、「日本語」「ことば」の魅力と不思議に触れられるイベント。2022年度は事前に用意したコンテンツをオンライン公開する方式で実施した。

プログラム

- ことばのミニ講義「もじとココロ」(横山詔一)
- ことばのミニ講義「読点の打ち方—読みやすい読点について考える—」(岩崎拓也)
- ワークショップ「意見文の書き方」(石黒圭・黒川美那子)
- ワークショップ「国語辞典学習—問題をといてみよう!—」(柏野和佳子)



大学院教育と若手研究者育成

1 総合研究大学院大学

総合研究大学院大学「日本語言語科学コース」の2023年4月開設に向けて設置準備を進めるとともに、2022年9月10日および13日に所内で大学院説明会を開催したほか、言語処理学会など八つの学会でブースを出展し、広報をおこなった。

2 連携大学院

一橋大学大学院言語社会研究科・東京外国語大学大学院総合国際学研究科

2005年度から、一橋大学との連携大学院プログラムを実施している。この連携大学院（日本語教育学位取得プログラム）は、日本語教育学、日本語学、日本文化に関する専門的な知識を備えた研究者や日本語教育者を育成することを目指している。また、2016年度から東京外国語大学大学院総合国際学研究科との連携大学院を開始した。これらの連携大学院において、国立国語研究所は日本語学やコーパス言語学等の分野を担当している。

3 特別共同利用研究員制度

国立国語研究所では、国内外の大学の要請に応じて、日本語研究・日本語教育研究などの分野を専攻する大学院生を特別共同利用研究員として受け入れている。国立国語研究所の設備、文献等の利用や、国立国語研究所の研究者から研究指導を受けることができる制度である。

- ・2022年度受入：1名
 - ↳ 北京外国語大学（1名）

4 NINJAL チュートリアル

日本語学・言語学・日本語教育研究の諸分野における最新の研究成果や研究方法を、第一線の教授陣によって、大学院生を中心とした若手研究者等に教授する講習会で、若手研究者の育成・サポートを目的としている。大学共同利用機関である国立国語研究所の特色を活かしたテーマを積極的に取り上げ、年数回、各地で実施している。2022年度はオンラインで3回開催した。

受講対象：原則として、大学院学生レベル

- ・大学院学生（修士課程または博士課程に在籍する者）
- ・修士課程または博士課程を修了後、原則として6年未満の者
- ・当該諸分野を専門とした職務に従事している者
- ・大学院進学を目指す学部学生等
- ・第44回 [2022.8.6 (共催：韓国日本語学会，韓国日語教育学会)]
 - 『分類語彙表』による日本語研究
 - 講師：山崎誠（研究系・教授），浅原正幸（研究系・教授）
- ・第45回 [2023.3.14]
 - 「日本語学習者の話し言葉の分析—北京日本語学習者縦断コーパス（B-JAS）を用いて—」
 - 講師：石黒圭（研究系・教授）
 - アシスタント：布施悠子（プロジェクト非常勤研究員），須賀和佳子（プロジェクト非常勤研究員）

・第46回 [2023.3.29]

『『日本語日常会話コース』活用入門』

講師：小磯花絵 (研究系・教授), 山口昌也 (研究系・准教授), 川端良子 (言語資源開発センター・特任助教)

アシスタント：西川賢哉 (プロジェクト非常勤研究員)

5 優れたポストドクターの登用

若手のポストドクターが、各種共同研究プロジェクトの運営を補助するとともにプロジェクトに関連する研究を自らおこなうことで、研究者としての自立性を向上させ、若手研究者のキャリアパスになる制度としてプロジェクト研究員 (プロジェクト PD フェロー) 制度を設け、公募により積極的に採用している。

VI

教員の研究活動と成果

田窪 行則 (たくぼ ゆきのり) 所長

【学位】 博士 (文学) (京都大学, 2006)

【学歴】 京都大学文学部言語学専攻卒業 (1975), 同修士課程修了 (1977)

【職歴】 大韓民国東国大学校慶州分校日語日文科 招聘専任講師 (国際交流基金教員拡充プログラムによる) (1980), 神戸大学教養部専任講師 (日本語日本事情担当) (1982), 同 助教授 (1984), 九州大学文学部助教授 (言語学講座) (1991), 同 教授 (1996), 九州大学大学院人文科学研究院 教授 (大学院重点化に伴う措置) (2000), 京都大学大学院文学研究科 教授 (2000), 京都大学 名誉教授 (2016), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所 所長 (2017)

【専門領域】 理論言語学, 韓国語, 琉球諸語, 言語ドキュメンテーション, 危機言語

【所属学会】 日本語学会, 日本語学会, 日本語文法学会, 日本音声学会, 東アジア日本学会 (韓国)

【学会等の役員・委員】 言語学会 顧問・評議員, 日本国際教育支援協会 理事, 東アジア日本学会 編集委員, 日本語学会 評議員, 言語資源協会 理事, Associate Editor of Asian Languages and Linguistics, Series Editor of Endangered and Lesser-Studied Languages and Dialects, Series Editor of the Mouton-NINJAL Library of Linguistics [MNLL]

【受賞歴】

1991: 認知科学会論文賞 (談話管理理論からみた日本語の指示詞)

【2022 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」: メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」: メンバー
- ・共創先導プロジェクト共創促進研究「学術知デジタルライブラリの構築」: メンバー

【2022 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (C) 「可能世界を用いない様相表現の意味論的枠組みの構築—日本語様相表現を中心に—」, 20K00586: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「終助詞に関する類型論的研究—日本語と韓国語を中心に—」, 19K00618: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「時空間マッピングの認知的基盤に関する理論的・実験的研究」, 21H00528: 研究代表者
- ・挑戦的研究 (萌芽) 「フィールドデータのアーカイブに向けた問題点の整理と解決策」, 21K18376: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

Hajime Hoji, Daniel Plesniak, and Yukinori Takubo (eds.)

The Theory and Practice of Language Faculty Science, De Gruyter Mouton, 2022.11.7, ISBN: 9783110724677.

《論文・ブックチャプター》

田窪行則

「危機言語としての地域のことば」, 『ユリイカ』, 54 巻 10 号, 69–76 頁, 2022.8.1.

【講演・口頭発表】

田窪行則

「終助詞と共有知識管理」, シンポジウムパネル (招待), 自閉スペクトラム症 (ASD) における言語と共感機能, 東北大学・オンライン (ハイブリッド), 2022.8.11.

Takubo Yukinori

“Two foci analysis of the deictic demonstratives in Japanese”, 招待講演, NINJAL-UHM Linguistics Workshop 2023, ハワイ大学 (ホノルル, 米国), 2023.2.17.

田窪行則

「危機言語の記録・維持・再生の諸問題：琉球諸語を中心に」, 基調講演, 言語処理学会 29 回年次大会, 沖縄コンベンションセンター, 2023.3.16.

【その他の学術的・社会的活動】

- NHK 放送研修センター理事

松本 曜 (まつもと よう) 副所長, 研究系教授

【学位】 Ph D (言語学) (米国スタンフォード大学, 1992)

【学歴】 上智大学外国語学部英語学科卒業 (1983), 上智大学外国語学研究科博士課程前期課程修了 (1985), スタンフォード大学言語学科博士課程修了 (1992)

【職歴】 東京基督教大学神学部 専任講師 (1992–1994), 明治学院大学文学部 専任講師 (1995), 明治学院大学文学部 助教授 (1996–2001), 明治学院大学文学部 教授 (2002–2003), 神戸大学文学部 教授 (2004–2006), 神戸大学人文学研究科 教授 (2007–2017), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・対照研究領域 教授 (2017–2021), 同 副所長・研究系教授 (2022–)

【専門領域】 意味論, 認知言語学

【所属学会】 日本言語学会, 日本英語学会, 日本認知言語学会, 関西言語学会, アメリカ言語学会, 国際認知言語学会

【学会等の役員・委員】 日本言語学会 評議員, 国際認知言語学会 理事

【受賞歴】

2021: 令和3年度前期所長特別賞 (Yo Matsumoto “The semantic differentiation of verb-te verb complexes and verb-verb compounds in Japanese.” Taro Kageyama, Peter E. Hook, and Prashant Pardeshi (eds.) *Verb-Verb Complexes in Asian Languages*. pp. 139–164, Oxford University Press)

2020: 令和2年度後期所長特別賞 (Yo Matsumoto and Kazuhiro Kawachi (eds.) *Broader Perspectives on Motion Event Descriptions*, John Benjamins)

【2022年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」: サブプロジェクトリーダー (述語の意味と文法に関する実証的類型論)

【2022年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (B) 「空間移動と状態変化の表現の並行性に関する統一的通言語的研究」, 19H01264: 研究代表者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Yo Matsumoto, Kimi Akita, Anna Bordilovskaya, Kiyoko Eguchi, Hiroaki Koga, Miho Mano, Ikuko Matsuse, Takahiro Morita, Naonori Nagaya, Kiyoko Takahashi, Ryosuke Takahashi, and Yuko Yoshinari “Linguistic representations of visual motion: A crosslinguistic experimental study,” Laure Sarda and Benjamin Fagard (eds.) *Neglected Aspects of Motion-Event Description: Deixis, asymmetries, constructions*, pp. 43–67, John Benjamins, 2022.7.7, ISBN: 9789027211033.

【講演・口頭発表】

松本曜

「日本語の空間移動の表現」, 基調講演, 日本語の誤用及び第二言語習得研究国際シンポジウム, オンライン/西安外国語大学 (西安・中国), 2022.8.1.

Yo Matsumoto

“Externality of emotions: A corpus-based study of 6 emotions in Japanese,” LACUS 2022, Molloy University, Rockville Centre (ニューヨーク・米国), 2022.8.2.

Yo Matsumoto

“A crosslinguistic study of caused motion descriptions,” 基調講演, Linguistic Colloquium, University at Buffalo, University at Buffalo (ニューヨーク・米国), 2022.8.8.

松本曜

「フレームに基づく反義語の分析」, シンポジウムパネル (招待), 日本認知言語学会第23回全国大会シンポジウム「フレーム意味論の新展開」, オンライン, 2022.9.4.

松本曜

「述語の意味と文法に関する実証的類型論」, Evidence-based Linguistics Workshop 2022, 神戸大学, 2022.9.6.

Anna Bordilovskaya and Yo Matsumoto

“The use of path verbs in Russian: Experimental findings,” 17th Annual Meeting of the Slavic Linguistics Society, オンライン/北海道大学, 2022.9.19.

松本曜

「日本語意味論研究の動向：フレームと実験を中心に」, 招待講演, 台湾日本語文学会国際学術シンポジウム, 東呉大学 (台北・台湾), 2022.12.10.

Yo Matsumoto, Masayuki Ishizuka, and Monica Kahumburu

“Manner and deixis contingency of path coding: Evidence from French Basque and Mombasa Swahili,” The 14th International Conference of the Association for Linguistic Typology, University of Texas at Austin (テキサス・米国)/オンライン, 2022.12.15.

Yo Matsumoto, Badema, Anna Bordilovskaya, Kiyoko Eguchi, Miho Mano, Naonori Nagaya, and Kyosuke Yamamoto

“Types of caused motion events and the patterns of their linguistic representations,” The 14th International Conference of the Association for Linguistic Typology, University of Texas at Austin (テキサス・米国)/オンライン, 2022.12.15.

Yo Matsumoto and Keigo Ujiie

“Change of state and Japanese resultative constructions: A corpus-based study,” Resultatives: New approaches and renewed perspectives, National University of Singapore (シンガポール), 2023.3.20.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・日本認知言語学会第23回全国大会シンポジウム「フレーム意味論の新展開」(主催: 日本認知言語学会), オンライン, 2022.9.4.
- ・Neglected Aspects of Motion-Event Description 2022 (主催: 国立国語研究所, 共催: 京都大学), 京都大学, 2022.11.3-4.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・外来研究員の受入: ミドルベリー大学 (1名)
- ・東京言語研究所: 理論言語学講座講師
- ・新日本聖書刊行会: 日本語主任

【大学院教育・若手研究者育成】

《大学院非常勤講師》

- ・学習院大学大学院

《博士論文審査委員》

- ・リヨン第2大学: 副査, 2022.10.
- ・東京大学: 副査, 2023.2.

小磯花絵 (こいそ はなえ) 副所長, 研究系教授

【学位】 博士 (理学) (奈良先端科学技術大学院大学, 1998)

【学歴】 千葉大学文学部卒業 (1994), 千葉大学大学院文学研究科修士課程修了 (1996), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程修了 (1998)

【職歴】 ATR 知能映像通信研究所 研修研究員 (1996), 国立国語研究所言語行動研究部 研究員 (1998), 同主任研究員 (2009), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 准教授 (2009), 一橋大学言語社会研究科連携教授 (2015), 国立国語研究所研究系 (音声言語研究領域) 准教授, 領域代表 (2016), 同研究系 教授 (2018), 同 副所長 (2021)

【専門領域】 コーパス言語学, 談話分析, 認知科学

【所属学会】 社会言語科学会, 日本認知科学会, 人工知能学会, 言語処理学会, 日本言語学会, 日本音声学会, 日本語学会, 日本語教育学会

【学会等の役員・委員】 言語処理学会 大会プログラム委員, 音声学会 評議員

【受賞歴】

2022: 言語処理学会・言語資源協会 言語資源賞 (小磯花絵, 天谷晴香, 石本祐一, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴, 西川賢哉, 渡邊友香 『『日本語日常会話コーパス』の設計と特徴』)

2002: 情報処理学会山下記念研究賞

1996: 人工知能学会大会論文賞

1996: 人工知能学会研究奨励賞

【2022 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」: リーダー
- ・共創先導プロジェクト共創促進研究「コミュニケーション共生科学の創成」: 分担者

【2022 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (B) 「多様な場面の日常会話データに基づく子どものコミュニケーション行動の解明」, 20H01264: 研究代表者
- ・基盤研究 (B) 「地域社会の共在的記録に基づくコミュニケーションと記憶の活性化」, 18KT0035: 研究代表者
- ・基盤研究 (A) 「高齢者のマルチモーダル日常会話コーパスの開発」, 22H00544: 研究分担者
- ・挑戦的研究 (萌芽) 「精神障害患者の会話コーパス構築と発話特徴に基づいた診断支援 AI の開発」, 22K18480: 研究分担者
- ・挑戦的研究 (萌芽) 「幼児の話合い活動の過程と交渉技術の発達についての包括的研究」, 20K20695: 研究分担者
- ・特別推進研究 「アジアと欧米: コミュニケーションの文化差から言語の獲得過程を探る」, 20H05617: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Hanae Koiso, Haruka Amatani, Yasuharu Den, Yuriko Iseki, Yuichi Ishimoto, Wakako Kashino, Yoshiko Kawabata, Ken'ya Nishikawa, Yayoi Tanaka, Yuka Watanabe, and Yasuyuki Usuda

“Design and Evaluation of the Corpus of Everyday Japanese Conversation”, *Proceedings of 13th Language Resources and Evaluation Conference*, 2022.6.

小磯花絵, 天谷晴香, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴, 西川賢哉, 渡邊友香 『『日本語日常会話コーパス』設計と特徴』, 『国立国語研究所論集』, 24 巻, 153–168 頁, 2023.1, DOI: 10.15084/00003692.

《コーパス・データベース類》

小磯花絵, 川端良子

『『日本語日常会話コーパス』Ver202303』(更新), <https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc/bug-report.html>, 2023.3.24.

小磯花絵, 西川賢哉

『『日本語日常会話コーパス』中納言版 Ver202303』(更新), <https://chunagon.ninjal.ac.jp/cejc/search>, 2023.3.24.

小磯花絵, 川端良子

『『日本語日常会話コーパス』リレーショナルデータベース』, <https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc/rdb.html>, 2023.3.31.

小磯花絵

「子ども版日本語日常会話コーパス」, 関係者限定公開, 2023.3.31.

【講演・口頭発表】

小磯花絵

「CEJC 話者間関係性情報の活用：スピーチレベルの分析を例に」, 多世代会話コーパスプロジェクト 第1回ショートトーク, オンライン, 2022.7.28.

小磯花絵, 天谷晴香, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 藤越, 西川賢哉

『『子ども版日本語日常会話コーパス』の構築』, ポスター発表, 言語資源ワークショップ 2022, オンライン, 2022.8.30.

居關友里子, 小磯花絵

「幼児と保護者によるごっこ遊びの相互行為：日常場面に関する知識の利用に着目して」, ポスター発表, 言語資源ワークショップ 2022, オンライン, 2022.8.31, DOI: 10.15084/00003741.

小磯花絵

「コーパスに対する日本語韻律ラベリングを活用した話し言葉研究の可能性」, 第4回社会言語科学会シンポジウム：プロソディを通して見る社会とコミュニケーション, オンライン, 2022.9.3.

小磯花絵

「『日本語日常会話コーパス』の構築と利用可能性」, 招待講演, 日本音響学会音声研究会, オンライン, 2022.9.13.

小磯花絵

「コーパスを通して見ることばの特徴」, 招待講演, 中京大学文学会秋季大会公開講演会, 中京大学, 2022.11.12.

小磯花絵

「日常会話コーパスがもたらす語用論研究の可能性」, 招待講演, 語用論学会 25周年記念シンポジウム「人と AI とメディアを繋ぐ語用論の新展開」, 京都大学, 2022.11.27.

小磯花絵

「話し言葉コーパスを活用した多世代に渡る言語発達研究に向けて」, NINJAL シンポジウム「言語資源学の創成：開かれた言語資源による日本語研究」, オンライン, 2022.12.10.

小磯花絵

「コーパスを活用した言語コミュニケーション研究」, 招待講演, 第14回産業日本語研究会・シンポジウム, オンライン, 2023.2.9.

小磯花絵

『『日本語日常会話コーパス』構築・公開の経験から』, シンポジウムパネル(指名), コーパスの構築・利用と個人情報保護, オンライン, 2023.2.17.

小磯花絵

「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究に向けて」, シンポジウム「日常会話コーパス」

VIII, オンライン, 2023.3.3.

小磯花絵

「パネル討論「会話コーパスが拓く言語・相互行為研究の新たな地平」プロジェクト紹介, シンポジウムパネル(指名), 公開シンポジウム「ことば・認知・インタラクション 11」, 国立情報学研究所, 2023.3.4.

田中弥生, 小磯花絵, 大武美保子

「共想法による話し言葉・書き言葉における修辞機能の特徴—テーマとの関係に着目して—」, 言語処理学会第 29 回年次大会 (NLP2023), 沖縄コンベンションセンター (オンライン参加), 2023.3.13-17.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・第 4 回社会言語科学会シンポジウム: プロソディを通して見る社会とコミュニケーション (主催: 社会言語科学会, 共催: 多世代会話コーパスプロジェクト, イントネーションプロジェクト, 言語系学会連合), オンライン, 2022.9.3.
- ・韻律ラベリング講習会 (主催: イントネーションプロジェクト・多世代会話コーパスプロジェクト), 国立国語研究所, 2022.9.16.
- ・「中納言」講習会【初中級編】 (主催: 多世代コーパスプロジェクト・学習者辞書プロジェクト), オンライン, 2022.11.5.
- ・人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会 (SLUD) 第 96 回研究会「第 13 回対話システムシンポジウム」 (主催: 人工知能学会 SLUD 研究会, 共催: 多世代会話コーパスプロジェクト), 国立国語研究所, 2022.12.13-14.
- ・シンポジウム「日常会話コーパス」VIII (主催: 多世代会話コーパスプロジェクト), オンライン, 2023.3.3.
- ・公開シンポジウム「ことば・認知・インタラクション 11 (主催: 科研費グループ 22H00654・多世代会話コーパスプロジェクト), 国立情報学研究所, 2023.3.4.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

小磯花絵

「日本語日常会話コーパスの設計と特徴」, 第 46 回 NINJAL チュートリアル「『日本語日常会話コーパス』活用入門」, オンライン, 2023.3.29.

小磯花絵

「検索システム「中納言」で日常会話コーパスを使う」, 第 46 回 NINJAL チュートリアル「『日本語日常会話コーパス』活用入門」, オンライン, 2023.3.29.

川端良子, 小磯花絵

「ELAN・Praat で日常会話コーパスを使う」, 第 46 回 NINJAL チュートリアル「『日本語日常会話コーパス』活用入門」, オンライン, 2023.3.29.

《連携大学院》

- ・一橋大学大学院言語社会研究科 連携教授

小木曾 智信 (おぎそ としのぶ) 研究主幹, 研究系教授

【学位】 博士 (工学) (奈良先端科学技術大学院大学, 2014)

【学歴】 東京大学文学部第3類 (語学文学) 卒業 (1995), 東京大学大学院人文社会系研究科修士課程日本文学専攻修了 (1997), 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学 (2001), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程修了 (2014)

【職歴】 明海大学外国語学部 講師 (2001), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 研究員 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (言語変化研究領域) 准教授, 領域代表 (2016), 同 教授, 領域代表 (2017), 東京外国語大学大学院国際日本学研究院 准教授 (クロスアポイントメント) (2016), 同 教授 (2017)

【専門領域】 日本語学, 自然言語処理

【所属学会】 日本語学会, 言語処理学会, 情報処理学会, 日本語文法学会, 近代語学会, 東京大学国語国文学会

【学会等の役員・委員】 日本語学会 評議員・大会企画運営委員 (副委員長)

【受賞歴】

2021: じんもんこん 2021 ベストポスター賞 (小木曾智信, 八木豊 「『日本語歴史コーパス』の誤り修正プラットフォームの開発」)

2011: 国立国語研究所第2回所長賞

2011: 情報処理学会山下記念研究賞

【2022 年度に参画した共同研究】

- ・ 基幹型共同研究プロジェクト 「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」: リーダー
- ・ 基幹型共同研究プロジェクト 「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」: リーダー
- ・ 共同利用型共同研究 (B) 「和歌・今様を対象とする UniDic の開発と研究」: メンバー・コーディネーター
- ・ 共同利用型共同研究 (B) 「欧文脈の現代語文脈への定着過程—無生物主語を伴う「見る」の用法を例に—」: コーディネーター

【2022 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・ 基盤研究 (A) 「昭和・平成書き言葉コーパスによる近現代日本語の実証的研究」, 19H00531: 研究代表者
- ・ 挑戦的研究 (開拓) 「日本語コーパスに対する情報付与を核としたオープンサイエンス推進環境の構築」, 19H05477: 研究代表者
- ・ 基盤研究 (A) 「抄物コーパス」の構築とコーパスを応用した日本語史研究」, 21H04349: 研究分担者
- ・ 挑戦的研究 (開拓) 「古辞書・古典籍データへの地理情報付与による人文学の横断的展開」, 20K20501: 研究分担者
- ・ Oxford Corpus of Old Japanese Project: Editorial Board Member

【研究業績】

《著書・編書》

青木博史, 岡崎友子, 小木曾智信 (編)

『コーパスによる日本語史研究 中古・中世編』, ひつじ書房, 2022.10.27, ISBN: 9784823411335.

《論文・ブックチャプター》

竹内綾乃, 中村壮範, 小木曾智信

「中古仮名文学作品のコーパスに対する話者情報の付与とその活用例」, 『じんもんこん 2022 論文集』, 21–26 頁, 2022.12.2, <http://id.nii.ac.jp/1001/00223154/>.

小木曾智信, 八木豊

「意味分類検索に対応したコーパス簡易検索アプリケーション「ことねり」」, 『じんもんこん 2022 論文集』, 307–312 頁, 2022.12.2, <http://id.nii.ac.jp/1001/00223200/>.

Seiichi Inoue, Mamoru Komachi, Toshinobu Ogiso, Hiroya Takamura, and Daichi Mochihashi

“Infinite SCAN: An Infinite Model of Diachronic Semantic Change.”, *EMNLP 2022*, pp. 1605–1616,

2022.12, <https://aclanthology.org/2022.emnlp-main.104/>.

堤智昭, 小木曾智信

「歴史的資料を対象とした複数の UniDic 辞書による形態素解析支援ツール『Web 茶まめ』, 『情報処理学会論文誌』, 64 巻 3 号, 749–757 頁, 2023.3, DOI: 10.20729/00225271.

《総説・解説など》

持橋大地, 小木曾智信, 高村大也, 小町守

「言語統計力学」= 言語学・自然言語処理・物理学, 『自然言語処理』, 29 巻 3 号, 1030–1036 頁, 2022.9, DOI: 10.5715/jnlp.29.1030.

《コーパス・データベース類》

竹内綾乃, 中村壮範, 小木曾智信

『『日本語歴史コーパス』「平安時代編 I」拡張話者情報データ ver.1.0』, DOI: 10.15084/00003661, 2022.10.12.

小木曾智信

「みんなごん」(オープンサイエンス推進環境 [外記] 形態論情報の修正機能), <https://chunagon.ninjal.ac.jp/osr/def/1/annotation>, 2022.10.29.

富士池優美, 須永哲矢, 池上尚, 竹内綾乃ほか (プロジェクトリーダーとしての業績)

『『日本語歴史コーパス』平安時代編 I 仮名文学 ver.1.2』, <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/heian.html#kanabungaku>, 2022.10.31.

松崎安子ほか (プロジェクトリーダーとしての業績)

『『日本語歴史コーパス』和歌集編 ver.1.1』, <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/wakashu.html>, 2022.10.31.

服部紀子, 松崎安子ほか (プロジェクトリーダーとしての業績)

『『日本語歴史コーパス』明治・大正編 VI 落語 SP 盤 ver.1.0』, https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/meiji_taisho.html#rakugo, 2022.10.31.

小木曾智信

「現代書き言葉 UniDic」, https://clrd.ninjal.ac.jp/unidic/download.html#unidic_bccwj, 2023.3.24.

小木曾智信

「現代話し言葉 UniDic」, https://clrd.ninjal.ac.jp/unidic/download.html#unidic_csj, 2023.3.24.

小木曾智信, 近藤明日子, 高橋雄太, 間淵洋子

「昭和・平成書き言葉コーパス (試験公開版)」, <https://clrd.ninjal.ac.jp/shc/>, 2023.3.24.

小木曾智信

「ウェブ版 UniDicExplorer (試験公開版)」, (関係者限定公開), 2023.3.24.

小木曾智信, 堤智昭

「Web 茶まめ」(更新), <https://chamame.ninjal.ac.jp/>, 2023.3.29.

富士池優美, 須永哲矢, 池上尚, 竹内綾乃ほか (プロジェクトリーダーとしての業績)

『『日本語歴史コーパス』平安時代編 I 仮名文学 ver.1.3』, <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/heian.html#kanabungaku>, 2023.3.29.

松崎安子, 服部紀子, 竹内綾乃ほか (プロジェクトリーダーとしての業績)

『『日本語歴史コーパス』江戸時代編 IV 随筆・紀行 ver.0.8』, <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/edo.html#zuihitsu>, 2023.3.29.

服部紀子, 間淵洋子, 近藤明日子, 高橋雄太, 田中牧郎ほか (プロジェクトリーダーとしての業績)

『『日本語歴史コーパス』明治・大正編 II 教科書 ver.1.1』, https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/meiji_taisho.html#kyokasho, 2023.3.29.

仲村怜, 高橋雄太, 間淵洋子ほか (プロジェクトリーダーとしての業績)

『『日本語歴史コーパス』明治・大正編 V 新聞 ver.0.8』, https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/meiji_taisho.html#shinbun, 2023.3.29.

isho.html#shinbun, 2023.3.29.

小木曾智信, 八木豊

『日本語歴史コーパス』簡易検索ツール「ことねり」, <https://cotoneri.ninjal.ac.jp/>.

《その他の出版物・記事》

小木曾智信

「書籍紹介:『コーパスによる日本語史研究 中古・中世編』, 『ことばの波止場』, 12巻2号, 2023.3.

【講演・口頭発表】

小木曾智信, 竹内綾乃

『日本語歴史コーパス』の活用—語彙表を用いた集計と分析—, シンポジウムパネル, 日本語学会, オンライン, 2022.5.14–15.

高橋雄太, 仲村伶, 間淵洋子, 小木曾智信

『日本語歴史コーパス 明治・大正編 V 新聞』の公開, ポスター発表, 日本語学会, オンライン, 2022.5.14–15.

小木曾智信, 竹内綾乃, 松崎安子

「みんなで直す『日本語歴史コーパス』—中納言+みんなごん—, シンポジウムパネル, 日本語学会, オンライン, 2022.10.29–30.

竹内綾乃, 中村壮範, 小木曾智信

『日本語コーパス 平安時代編 I 仮名文学』の新しい話者情報の公開, ポスター発表, 日本語学会, オンライン, 2022.10.29–30.

竹内綾乃, 中村壮範, 小木曾智信

「中古仮名文学作品のコーパスに対する話者情報の付与とその活用例」, じんもんこん 2022, オンライン, 2022.12.9–11.

小木曾智信

「開かれた言語資源の共同構築と活用に向けて—新しい「通時コーパス」プロジェクトと「語彙資源」プロジェクト—, NINJAL シンポジウム「言語資源学の創成: 開かれた言語資源による日本語研究」, オンライン, 2022.12.10.

小木曾智信

「UniDic を基盤とした語彙資源の連携—コーパス・分類語彙表・日本国語大辞典—, NINJAL フォーラム「語彙資源の構築と活用」, オンライン, 2023.2.18.

小木曾智信

『日本語歴史コーパス』ver.2023.3 通時コーパス拡張進捗報告, シンポジウムパネル, 「通時コーパス」シンポジウム 2023, オンライン, 2023.3.10.

小木曾智信

『昭和・平成書き言葉コーパス』と権利処理, シンポジウムパネル, 「通時コーパス」シンポジウム 2023, オンライン, 2023.3.10.

Natsuko Nakagawa and Toshinobu Ogiso

“The network of lexical resources in Japanese”, 基調講演, Tools of the Trade Conference, Harvard University (ボストン・米国), 2023.3.14–16.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- NINJAL シンポジウム「言語資源学の創成: 開かれた言語資源による日本語研究」(主催: 国立国語研究所), オンライン, 2022.12.10.
- 「通時コーパス」シンポジウム 2023 (主催「通時コーパス」プロジェクト, 共催: SHC 科研, 抄物コーパス科研), オンライン, 2023.3.10.
- テーマセッション: 地理空間情報と自然言語処理 (主催: 言語処理学会), 沖縄コンベンションセンター・オンライン (ハイブリッド), 2023.3.16.
- ワークショップ: 深層学習時代の計算言語学 (主催: 言語処理学会), 沖縄コンベンションセンター・オ

ンライン (ハイブリッド), 2023.3.17.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 情報処理学会 人文科学とコンピューターシンポジウムじんもんこん 2022 査読
- ・ Digital Humanities Conference 2023 (Graz, Austria) Reviewer
- ・ 取材を受けた番組: 「“様”の謎」, NHK 総合 「チョコちゃんに叱られる」, 2022.4.28.
- ・ 取材を受けた番組: 「貴様のおかげです!」, NHK E テレ 「漢字ふむふむ」, 2022.9.6.
- ・ 取材を受けた番組: 「『私は』は「は」と書くのに、なぜ「わ」と言う?」, NHK 総合 「チョコちゃんに叱られる」, 2022.11.4.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

小木曾智信, 松崎安子, 竹内綾乃, 片山久留実

『日本語歴史コーパス』「中納言」オンライン講習会【初級編】、講師、オンライン、2022.8.23.

小木曾智信, 松崎安子, 竹内綾乃

『日本語歴史コーパス』「中納言」オンライン講習会【Excel 中級編】、講師、オンライン、2022.8.26.

小木曾智信

「コーパスを使って日本語の歴史を探る」, 言語学レクチャーシリーズ (Vol. 19), オンライン (動画), 2022.12.

浅原 正幸 (あさはら まさゆき) 研究系教授

【学位】 博士 (工学) (奈良先端科学技術大学院大学, 2003)

【学歴】 京都大学総合人間学部基礎科学科卒業 (1998), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士前期課程修了 (2001), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程短期修了 (2003)

【職歴】 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科 助手・助教 (2004), 国立国語研究所コーパス開発センター 特任准教授 (2012), 同 言語資源研究系 准教授 (2014), 同 コーパス開発センター 准教授 (2016), 同 コーパス開発センター 教授 (2019)

【専門領域】 自然言語処理

【所属学会】 言語処理学会, 言語学会, 日本語学会, 日本認知科学会

【学会等の役員・委員】 言語処理学会 論文誌副編集長, 日本言語学会 大会運営委員

【受賞歴】

- 2021: 言語処理学会第 27 回年次大会委員特別賞 (栗林樹生, 大関洋平, 伊藤拓海, 吉田遼, 浅原正幸, 乾健太郎「予測の正確な言語モデルがヒトらしいとは限らない」, 言語処理学会)
- 2021: 電気情報通信学会言語理解とコミュニケーション研究会 2020 年優秀発表賞 (久本空海, 山村崇, 勝田哲弘, 竹林佑斗, 高岡一馬, 内田佳孝, 岡照晃, 浅原正幸「chiVe: 製品利用可能な日本語単語ベクトル資源の実現へ向けて～形態素解析器 Sudachi と超大規模ウェブコーパス NWJC による分散表現の獲得と改良～」, 電気情報通信学会)
- 2020: 言語処理学会第 26 回年次大会言語資源賞 (浅原正幸, 加藤祥「BERTed-BCCWJ: 多層文脈化単語埋め込み情報を付与した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』データ」, 言語資源協会・言語処理学会)
- 2019: 言語処理学会論文誌『自然言語処理』2018 年度論文賞 (浅原正幸「名詞句の情報の状態と読み時間について」)
- 2019: 言語処理学会第 25 回年次大会言語資源賞 (浅原正幸「クラウドソーシングによる単語親密度の推定」, 言語資源協会・言語処理学会)
- 2014: 言語処理学会論文誌『自然言語処理』2013 年度論文賞 (吉川克正, 浅原正幸, 松本裕治「Markov Logic による日本語述語項構造解析」)
- 2011: Best paper award of the 7th International Conference on Natural Language Processing and Knowledge Engineering (Yanyan Luo, Masayuki Asahara, and Yuji Matsumoto “Dual Decomposition for Predicate-Argument Structure Analysis”)
- 2010: The Best Paper Award of the SMBM2010 (the Fourth International Symposium on Semantic Mining in Biomedicine) (Katsumasa Yoshikawa, Tsutomu Hirao, Sebastian Riedel, Masayuki Asahara, Yuji Matsumoto “Coreference Based Event-Argument Relation Extraction on Biomedical Text”)
- 2008: 言語処理学会第 14 回年次大会優秀発表賞 (岩立将和, 浅原正幸, 松本裕治「トーナメントモデルを用いた日本語係り受け解析」)
- 2003: 平成 15 年度情報処理学会山下記念研究賞 (浅原正幸「日本語固有表現抽出における冗長的な形態素解析の利用」)

【2022 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」: プロジェクトリーダー (サブプロジェクト「アノテーションデータを用いた実証的計算心理言語学」: プロジェクトリーダー, サブプロジェクト「述語の意味と文法に関する実証的類型論」: メンバー)
- ・基幹型共同研究プロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」: メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」: メンバー (サブプロジェクト「学習者用辞書資源の構築」: メンバー)
- ・共同利用型共同研究 (A)「単語分散表現と文脈依存単語埋め込み表現を利用した語義の埋め込み表現

の構築」：コーディネーター

- ・共同利用型共同研究 (A) 「話速の変化にともなう調音運動と音響特性の変化の観測」：コーディネーター
- ・共同利用型共同研究 (C) 「BCCWJ/CSJ への生理指標アノテーション付加」：コーディネーター
- ・共同利用型共同研究 (C) 「LF-based Collocation Translation 語彙関数を用いたコロケーションの機械翻訳」：コーディネーター
- ・共同利用型共同研究 (C) 「統計的指標を用いた日本語テキストの数理的解明」：メンバー
- ・共同利用型共同研究 (C) 「Corpus Research on Clausal Center-embedding」：コーディネーター

【2022 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (B) 「日本語コーパスに対する単語心象性情報付与とその利用」, 22H00663: 研究代表者
- ・挑戦的研究 (萌芽) 「文脈化単語埋め込みによる 1 億語規模の比喩表現実態調査」, 22K18483: 研究代表者
- ・基盤研究 (A) 「日本語歴史コーパスに対する統語・意味情報アノテーション」, 17H00917: 研究代表者
- ・新学術領域研究 (研究領域提案型) 「言語による時間生成」, 18H05521: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「修辭機能と脱文脈化の観点からの日常談話テキスト分析」, 19K00588: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「多義語に対するプロトタイプ義の量的分析—クラウドソーシングによる大規模調査—」, 19K00591: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「シソーラスの整備・拡張のための分類基準の作成と活用」, 19K00655: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「文体分析を目的としたコーパスの文書情報拡張及びその利用」, 18K00634: 研究分担者
- ・機構間連携・異分野連携研究プロジェクト 「知性と認識の情報神経物理学」: 共同研究員
- ・生理学研究所生体機能イメージング共同利用 「機械学習と fMRI を用いた抒情の生じるメカニズムの解明」
- ・共同研究 (株式会社ワークスアプリケーションズ) 「日本語事前学習モデル chiTra の研究開発」
- ・共同研究 (株式会社 LegalOn Technologies) 「日本語形態素解析器の研究開発」
- ・共同研究 (株式会社リクルート) 「日本語版 Universal Dependencies 解析器に関する共同研究」
- ・共同研究 (LINE 株式会社) 「汎用大規模言語モデルを用いた知的データの構築・活用に関連する研究」
- ・共同研究 (ホンダリサーチインスティテュートジャパン) 「行き先目標物の参照表現に関する日本語話し言葉の分析」

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Masayuki Asahara

“Reading Time and Vocabulary Rating in the Japanese Language: Large-Scale Reading Time Data Collection Using Crowdsourcing”, *Proceedings of the Thirteenth Language Resources and Evaluation Conference*, pp. 5178–5187, 2022.6, <https://aclanthology.org/2022.lrec-1.555>.

Lis Kanashiro Pereira, Kevin Duh, Fei Cheng, Masayuki Asahara, and Ichiro Kobayashi

“Attention-Focused Adversarial Training for Robust Temporal Reasoning”, *Proceedings of the Thirteenth Language Resources and Evaluation Conference*, pp. 7352–7359, 2022.6, <https://aclanthology.org/2022.lrec-1.800>.

Masayuki Asahara, Nao Ikegami, Tai Suzuki, Taro Ichimura, Asuko Kondo, Sachi Kato, and Makoto Yamazaki

“CHJ-WLSP: Annotation of ‘Word List by Semantic Principles’ Labels for the Corpus of Historical Japanese”, *Proceedings of 2nd Workshop on Language Technologies for Historical and Ancient Languages*, pp. 142–150, 2022.6, <https://aclanthology.org/2022.lt4hala-1.5>.

Kanako Komiya, Nagi Oki, and Masayuki Asahara

“Word Sense Disambiguation of Corpus of Historical Japanese Using Japanese BERT Trained with Contemporary Texts”, *36th PACIFIC ASIA CONFERENCE ON LANGUAGE, INFORMATION AND COMPUTATION*, 2022.10.20.

大村舞, 若狭絢, 浅原正幸

「国語研長単位に基づく日本語 Universal Dependencies」『自然言語処理』30 巻 1 号, 4–29 頁, 2023.3.15,

DOI: 10.5715/jnlp.30.4.

《総説・解説など》

松田寛, 柴田知秀, 河原大輔, 久本空海, 久保隆宏, 浅原正幸

「日本語における評価用データセットの構築と利用性の向上—JED2022 ワークショップの成果と展望」, 『自然言語処理』, 29 卷 3 号, 1023–1029 頁, 2022.6.15, DOI: 10.5715/jnlp.29.1023.

浅原正幸, 吉田光男, 宮尾祐介, 内山将夫

「許容される二次投稿」, 『自然言語処理』, 29 卷 3 号, 1037–1042 頁, 2022.6.15, DOI: 10.5715/jnlp.29.1037.

浅原正幸, 川崎采香, 上原泉, 酒井裕, 須藤百香, 谷口巴, 小林一郎, 越智綾子, 鈴木彩香

(プレプリント) 「過去」「未来」を主題とする作文の分析」, 『Jxiv』, 2022.9.30, DOI: 10.51094/jxiv.173.

《コーパス・データベース類》

加藤祥, 菊地礼, 浅原正幸

「BCCWJ-simile」, 関係者限定公開, 2022.6.

国立国語研究所

「『形容詞の意味・用法の記述的研究』データベース版」, 2022.10.25, DOI: 10.15084/00003665.

国立国語研究所

「『国語研日本語ウェブコーパス』中納言搭載データ語彙表」, 2022.10.25, DOI: 10.15084/00003666.

国立国語研究所

「『現代語の助詞・助動詞』分類語彙表番号付与版」, 2022.10.25, DOI: 10.15084/00003667.

国立国語研究所

「『動詞の意味・用法の記述的研究』データベース版」, 2022.10.25, DOI: 10.15084/00003668.

国立国語研究所

「『比喩表現の理論と分類』データベース版」, 2022.10.25, DOI: 10.15084/00003669.

浅原正幸, 若狭絢, 大村舞

「UD Japanese CEJCSUW」, 関係者限定公開, 2023.1.1.

浅原正幸, 若狭絢, 大村舞

「UD Japanese CEJCLUW」, 関係者限定公開, 2023.1.1.

浅原正幸, 若狭絢, 大村舞

「日本語日常会話コーパス係り受けアノテーション CEJC-DEP」, 関係者限定公開, 2023.1.1.

浅原正幸, 高松純子, 若狭絢, 大村舞

「日本経済新聞記事オープンコーパス」, <https://nkbb.nikkei.co.jp/alternative/corpus/>, 2023.3.13.

【講演・口頭発表】

浅原正幸, 池上尚, 鈴木泰, 市村太郎, 近藤明日子, 加藤祥, 山崎誠

「分類語彙表番号を付与した『日本語歴史コーパス』データ」, ポスター発表, 日本語学会 2022 年度春季大会, オンライン, 2022.5.14–15.

須藤百香, 小出(間島)真子, 浅原正幸, 山口裕人, 久保理恵子, 西本伸志, 小林一郎

「DVD 鑑賞刺激下の脳活動における時間認識状態の推定」, ポスター発表, 2022 年度人工知能学会全国大会 (第 36 回), 国立京都国際会館, 2022.6.14–17.

木村麻友子, KANASHIRO Pereira Lis, 浅原正幸, CHENG Fei, 越智綾子, 小林一郎

「時間的常識理解へ向けた言語モデル構築への取り組み」, ポスター発表, 2022 年度人工知能学会全国大会 (第 36 回), 国立京都国際会館, 2022.6.14–17.

加藤祥, 浅原正幸

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』書籍サブコーパスの小説サンプルに対するジャンル情報付与」, ポスター発表, 言語資源ワークショップ 2022, オンライン (国立国語研究所), 2022.8.30–31.

平林照雄, 古宮嘉那子, 浅原正幸

「科学技術論文における「問題」の周辺文の問題内容の抽出」, ポスター発表, 言語資源ワークショップ

ブ 2022, オンライン (国立国語研究所), 2022.8.30-31.

Sachi Kato, Rei Kikuchi, and Masayuki Asahara

“Figurative Expression Information Database on ‘Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese’”, 15th Researching and Applying Metaphor Conference, オンライン (Bialystok・ポーランド), 2022.9.21-24.

大村舞, 若狭絢, 松田寛, 浅原正幸

「UD Japanese-CEJC とその評価」, ポスター発表, 言語処理学会第 29 回年次大会, 沖縄コンベンションセンター, 2023.3.13-17.

川端良子, 大村舞, 浅原正幸, 竹内誉羽

「Double cross model による位置情報フレームアノテーション」, 言語処理学会第 29 回年次大会, 沖縄コンベンションセンター, 2023.3.13-17.

佐藤杏奈, 近添淳一, 船井正太郎, 持橋大地, 鹿野豊, 浅原正幸, 磯暁, 小林一郎

「短歌を読む際の情動に関する脳活動の解析」, 言語処理学会第 29 回年次大会, 沖縄コンベンションセンター, 2023.3.13-17.

船曳日佳里, Lis Kanashiro Pereira, 木村麻友子, 浅原正幸, Fei Cheng, 越智綾子, 小林一郎

「日本語の時間的常識を理解する言語モデルの構築を目的としたマルチタスク学習における検証」, 言語処理学会第 29 回年次大会, 沖縄コンベンションセンター, 2023.3.13-17.

中町礼文, 西内沙恵, 浅原正幸, 佐藤敏紀

「語彙と品質を考慮したデータ増しの言語教育支援への適用」, 言語処理学会第 29 回年次大会, 沖縄コンベンションセンター, 2023.3.13-17.

船井正太郎, 近添淳一, 持橋大地, 浅原正幸, 松井鉄平, 鹿野豊, 川島寛乃, 磯暁

「人間の脳と人工知能における短歌の鑑賞に関する神経活動の比較」, 言語処理学会第 29 回年次大会, 沖縄コンベンションセンター, 2023.3.13-17.

木村麻友子, Lis Kanashiro Pereira, 浅原正幸, Fei Cheng, 越智綾子, 小林一郎

「時間関係タスクを対象にしたマルチタスク学習におけるデータの親和性の解析」, 言語処理学会第 29 回年次大会, 沖縄コンベンションセンター, 2023.3.13-17.

小林滉河, 山崎天, 吉川克正, 牧田光晴, 中町礼文, 佐藤京也, 浅原正幸, 佐藤敏紀

「日本語有害表現スキーマの提案と評価」, 言語処理学会第 29 回年次大会, 沖縄コンベンションセンター, 2023.3.13-17.

須藤百香, 小出(間島) 真子, 浅原正幸, 山口裕人, 久保理恵子, 西本伸志, 小林一郎

「ヒト脳における時間認識時の脳内状態の推定」, ポスター発表, 言語処理学会第 29 回年次大会, 沖縄コンベンションセンター, 2023.3.13-17.

浅原正幸, 高松純子, 若狭絢, 大村舞

「日本経済新聞記事オープンコーパス: 新聞記事コーパスと形態・統語情報アノテーション」, 言語処理学会第 29 回年次大会併設ワークショップ 日本語言語資源の構築と利用性の向上, 沖縄コンベンションセンター, 2023.3.17.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- Evidence-based Linguistics Workshop 2022 (主催: 国立国語研究所基幹型プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」, 神戸大学人文学研究科), 国立国語研究所, オンライン (ハイブリッド), 2022.9.5-6.
- 「日本語における評価用データセットの構築と利用性の向上」分科会 (主催: 国立国語研究所基幹型プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」, 「日本語における評価用データセットの構築と利用性の向上」JED2022 提案者), 国立国語研究所, オンライン (ハイブリッド), 2022.9.7.
- 言語学フェス 2023 (主催: 言語学フェス 2023 実行委員会, 共催: 国立国語研究所共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」, 科研費基盤研究 (B) 21H00524「脳波・視線同時計測による

文読解時の周辺視野の役割の解明」, 北星学園大学 松浦年男研究室), オンライン, 2023.1.28.

- 言語処理学会併設ワークショップ「日本語言語資源の構築と利用性の向上」(主催: 言語処理学会, 共催: 株式会社 Studio Ousia, 国立国語研究所共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」, 科研費基盤研究(A)「計算知と人知の融合による汎用言語理解基盤の構築」), 沖縄コンベンションセンター, オンライン(ハイブリッド), 2023.3.17.

【その他の学術的・社会的活動】

- 国際会議: The 13th Edition of its Language Resources and Evaluation Conference (LREC 2022): Area Chair “Corpora and Annotation”
- 国際会議: The 2nd Conference of the Asia-Pacific Chapter of the Association for Computational Linguistics and the 12th International Joint Conference on Natural Language Processing (ACL 2022): Senior Area Chair “Resources and Evaluation”
- 国際会議: 1st Workshop on Ancient Language Processing: Program Committee

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

山崎誠, 浅原正幸

第44回 NINJAL チュートリアル(講師), 共催: 韓国日本語学会, 韓国日語教育学会, 韓国(オンライン), 2022.8.6.

《連携大学院》

- 東京外国語大学 教授(クロスアポイントメント)

五十嵐 陽介 (いがらし ようすけ) 研究系教授

【学位】 博士 (言語学) (東京外国語大学, 2005)

【学歴】 東京外国語大学外国語学部ロシア東欧課程ロシア科卒業 (2001), 東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程修了 (2002), 東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程修了 (2005)

【職歴】 国立国語研究所研究開発部門言語資源グループ 非常勤研究員 (2005–2006), 理化学研究所脳科学総合研究センター テクニカルスタッフ (2005–2006), 日本学術振興会特別研究員 PD (2006–2009), 広島大学大学院文学研究科 准教授 (2009–2015), 一橋大学大学院社会学研究科 准教授 (2015–2019), 一橋大学大学院社会学研究科 教授 (2019–2020), 一橋大学大学院社会学研究科 特任教授 (2020–2021), 国立国語研究所研究系 (言語変異研究領域) 教授 (2020–2023), 国立国語研究所研究系教授 (2023–)

【専門領域】 言語学, 音声学

【所属学会】 日本言語学会, 日本音声学会, 西日本言語学会

【学会等の役員・委員】 日本言語学会 評議員・学会賞選考委員, 日本音声学会 編集委員会, 西日本言語学会 運営委員

【受賞歴】

- 2017: 日本音声学会優秀発表賞 (日本音声学会第 30 回全国大会, 受賞発表: 「肩・種・汗・雨」と「息・舟・桶・鍋」がアクセント型で区別される日本語本土方言—佐賀県杵島方言と琉球語の比較—)
- 2017: 日本音声学会優秀論文賞 (日本音声学会, 受賞論文: 「名詞の意味が関わるアクセントの合流—南琉球宮古語池間方言の事例—」)
- 2013: 日本音声学会優秀論文賞 (日本音声学会, 受賞論文: 「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」)
- 2005: 日本ロシア文学会賞 (日本ロシア文学会: Фонетика и фонология интонации в волпросительных предложениях в русском языке)
- 2001: 日本ロシア文学会学会報告奨励賞 (日本ロシア文学会第 51 回研究発表会, 受賞発表: 「ロシア語イントネーションの中和」)

【2022 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」: メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」: サブプロジェクトリーダー (「日本・琉球諸語方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」)
- ・基幹型共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」: メンバー
- ・異分野融合型共同利用型共同研究プロジェクト「歴史的音源アーカイブに向けたオープンコーパスの整備と AI 音声復元技術の開発」: コーディネーター
- ・共同利用型共同研究 (B) 「日本語の有声性の対立への複数の音響指標の影響」: コーディネーター

【2022 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (A) 「日本語諸方言コーパスによる方言音調の比較類型論的研究」, 21H04351: 研究分担者
- ・基盤研究 (A) 「消滅危機方言のプロソディーに関する実証的・理論的研究と音声データベースの構築」, 19H00530: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「日琉祖語の再建を目的とした同源性タグ・意味タグ付き語彙データベースの構築」, 21K00517: 研究代表者
- ・基盤研究 (A) 「文法記述と比較研究による琉球諸語と九州方言の歴史言語学的研究」, 22H00007: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Yosuke Igarashi

“Reconstruction of Ryukyuan tone classes of Middle Japanese Class 2.4 and 2.5 nouns”, *Open*

Linguistics, 8 (1), pp. 232–257, 2022.5.26, DOI: 10.1515/opli-2022-0193.

五十嵐陽介

「現代九州諸方言における旧上二段動詞の「下二段化」は九州・琉球祖語仮説を支持するか?」, 『言語研究』, 163 巻, 1–31 頁, 2023.1.11, DOI: 10.11435/gengo.163.0_1.

【講演・口頭発表】

五十嵐陽介

「2 音節名詞第 4/5 類に対応する琉球祖語 B 類は改新であるとする仮説」, シンポジウムパネル, 日本言語学会第 164 回全国大会, オンライン, 2022.6.19.

鈴木成典, 五十嵐陽介, 李勝勲

「NINJAL データベースを活用した言語研究の実施について」, ポスター発表, 言語資源ワークショップ 2022, 国立国語研究所, 2022.8.30.

五十嵐陽介

「日本語韻律ラベリング体系「簡易版 X-JToBI」の有用性と諸方言への応用」, シンポジウムパネル, 社会言語科学会第 4 回シンポジウム, オンライン, 2022.9.3.

五十嵐陽介

「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」, Evidence-based Linguistics Workshop, 国立国語研究所, 2022.9.6.

五十嵐陽介

「南琉球宮古語池間方言の疑問文イントネーション」, 2022 年度第 2 回合同研究発表会「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」, 国立国語研究所, 2022.12.5.

五十嵐陽介

「日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」, ポスター発表, NINJAL シンポジウム「言語資源学の創成: 開かれた言語資源による日本語研究」, 国立国語研究所, 2022.12.10.

五十嵐陽介

「琉球語・八丈語以外の非中央語系ジャポニック諸語の系統」, 言語系統樹ワークショップ, 沖縄県立博物館・美術館, 2022.12.25.

五十嵐陽介

「日琉祖語四声仮説: 最少の声調と最少の音変化でアクセント体系の多様性を説明するために」, 第 4 回プロトジャポニック研究会, 国立国語研究所, 2023.2.23.

Yosuke Igarashi

“Controversy about the phylogenetic position of Kyushu and Ryukyuan languages: Current situation and future prospects”, 招待講演, The Origin and Spread of the Japonic Languages: Putting Together Linguistics, Genetics, and Archaeology, 大阪大学, 2023.3.25.

【研究調査】

- ・南琉球宮古語池間方言のアクセント・イントネーション調査.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

五十嵐陽介

「X-JToBI 入門」, X-JToBI 講習会, 国立国語研究所, 2022.9.16.

《連携大学院》

- ・東京外国語大学大学院教授 (クロスアポイントメント, 2022.4–2024.3)

《若手研究者の受入》

- ・日本学術振興会外国人特別研究員 (一般): 1 名 (2022.9–2023.3)
- ・日本学術振興会外国人特別研究員 (欧米短期): 1 名 (2023.1–2023.7)

石黒 圭 (いしぐろ けい) 研究系教授, 共同利用推進センター長

【学位】 博士 (文学) (早稲田大学, 2008)

【学歴】 一橋大学社会学部卒業 (1993), 早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了 (1995), 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導修了 (1999)

【職歴】 一橋大学留学生センター 講師 (1999), 同 助教授 (2004), 一橋大学国際教育センター 准教授 (2010), 同 教授 (2013), 人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 准教授 (2015), 同 教授 (2015), 同 研究系 (日本語教育研究領域) 教授, 領域代表 (2016), 同 研究情報発信センター長 (2018), 同 共同利用推進センター長 (2022)

【専門領域】 日本語学, 日本語教育学

【所属学会】 社会言語科学会, 専門日本語教育学会, 日本語学会, 日本語教育学会, 日本語文法学会, 表現学会, 早稲田日本語学会

【学会等の役員・委員】 専門日本語教育学会 学会誌編集委員長, 日本語学会 評議員・大会企画運営委員会委員長, 日本語文法学会 評議員, 表現学会 理事

【受賞歴】

- 2020: 第 20 回国立国語研究所所長賞
- 2019: 2018 年度秋学期早稲田大学ティーチングアワード
- 2018: 第 15 回日本語教育学会学会活動貢献賞
- 2018: 第 16 回国立国語研究所所長賞
- 2009: 第 7 回日本語教育学会奨励賞

【2022 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」: サブプロジェクトリーダー (「学習者の辞書資源使用の実態調査」)
- ・基幹型共同研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」: リーダー・サブプロジェクトリーダー (「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」・「日本語学習者の談話の縦断コーパス研究」)

【2022 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (C) 「アカデミック・スキル育成を目指したオンライン縦断ゼミ談話の多角的分析」, 22K00655: 研究分担者
- ・基盤研究 (A) 「海外縦断作文コーパスの構築に基づく文章産出能力の発達過程の実証的研究」, 21H04417: 研究代表者
- ・挑戦的研究 (萌芽) 「スマホ画面録画機能を用いた日本語学習者の語彙検索行動の解明」, 21K18375: 研究代表者
- ・基盤研究 (B) 「人と物語が会う次元の開拓—短編物語データベース構築を通じた分野横断的研究—」, 20H01764: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「文章の執筆過程の分析に基づく大学初年次生の文章産出能力の実証的研究」, 20K02974: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「日本語読解・ライティングの方法に影響する母語・母文化の教育的背景要因に関する研究」, 19H01269: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

石黒圭, 井伊菜穂子, 市江愛, 井上雄太, 本多由美子

『日本語研究者がやさしく教える「きちんと伝わる」文章の授業』, 日本実業出版社, 2023.2.25, ISBN: 9784534059864.

《論文・ブックチャプター》

石黒圭

「コロナ禍におけるオンライン・ゼミナールの可能性—オンラインのゼミ談話に見るコミュニケーション活動の豊かさ—」、『社会言語科学』, 25 巻 1 号, 39–54 頁, 2022.9, DOI: 10.19024/jajls.25.1_39.

石黒圭

「4. ビジネスにおけることばの問題」, 庵功雄 (編) 『「日本人の日本語」を考える—プレイン・ランゲージをめぐる—』, 丸善出版, 55–67 頁, 2022.11, ISBN: 9784621307649.

井関龍太, 菊池理紗, 望月正哉, 福田由紀, 石黒圭

「品詞構成に基づく文体指標は読者の印象とどのように関わるか—MVR と品詞構成率の心理学的検討—」, 『計量国語学』, 33 巻 7 号, 493–509 頁, 2022.12.20.

石黒圭

「学習者はどのように日本語を学ぶのか—ポストコロナ時代における日本語運用データの収集法—」, 招待論文, 『東アジア日本学研究』, 9 号, 5–20 頁, 2023.3.20.

市江愛, 吉田暁, 石黒圭

「日本語教育研究のための「かんたん日本語テスト」の開発—テスト開発経緯と項目分析結果を中心に—」, 『国際学報』(東京都立大学国際センター), 1 号, 19–27 頁, 2023.3.

《コーパス・データベース類》

石黒圭, 野山広, 迫田久美子, 布施悠子, 鈴木靖代, 須賀和香子

「北京日本語学習者絶断コーパス」(「B-JAS」), <https://www2.ninjal.ac.jp/jll/bjas/bjasindex.html>, 2023.3.

【講演・口頭発表】

石黒圭

「心ときめくオノマトペ—日本語でキュン活—」, 招待講演, マカオ大学日本研究センター ゲストレクチャーシリーズ, オンライン (マカオ), 2022.4.20.

石黒圭

「日本語のアカデミック・ライティング」, 招待講演, 深圳大学日本語学科言語学講座, オンライン (中国), 2022.5.27.

石黒圭

「中国人日本語学習者に見られる作文執筆の産出過程」, 招待講演, 北京外国語大学日本語学院・北京日本学研究所主催「日本語学・日本語教育シリーズ講座」日本語教育部門第 1 回講演会, オンライン (中国), 2022.5.27.

石黒圭

「文章を書く力の育て方」, 招待講演, 神奈川県高等学校教科研究会国語部会, 横浜市技能文化会館, 2022.6.3.

石黒圭

「日本語学習者の未知語の意味推測の方法」, 招待講演, 福建師範大学日本語学科主催 日本語・日本文学シリーズ講演会, オンライン (中国), 2022.6.5.

石黒圭

「日本における「国語施策」の変遷と課題」, 招待講演, 大連外国語大学主催 学術講演会, オンライン (中国), 2022.6.16.

石黒圭

「日本の言語政策—標準化から多様化へ—」, 招待講演, 北東アジア言語・文化フォーラム (2022), オンライン (中国), 2022.8.25.

石黒圭

「日本語学習者はどのように日本語を学ぶのか—ポストコロナ時代における日本語運用データの収集・

分析法一」, 招待講演, 第四回東アジア日本学国際シンポジウム, オンライン, 2022.9.11.

石黒圭

「日本語研究者養成のための大学院教育」, 招待講演, 東呉大学主催 東アジア研究のための学際的人材育成講演, オンライン (台湾), 2022.9.22.

石黒圭

「オンライン時代における日本研究のためのデータ収集法」, 招待講演, 国立政治大学日本語文学系講演会, オンライン (台湾), 2022.10.31.

石黒圭

「作文の必要な語彙力・漢字力・論理力」, 招待講演, 第33回島根県国語教育研究大会・第9回島根県書写教育研究大会 (安来大会), 安来第一中学校, 2022.11.18.

吉田暁, 市江愛, 石黒圭

「日本語教育研究のための「かんたん日本語テスト」の開発—信頼性と妥当性の検証—」, ポスター発表, 2022年度日本語教育学会秋季大会, オンライン, 2022.11.27.

岩崎拓也, 呉丹, 石黒圭

「台湾における日本語学習者の習得過程—日本語学習者縦断コーパス「CoLeJa」の設計と特徴—」, 招待講演, 2022年台湾日本語文学会国際シンポジウム, オンライン (東呉大学 (台北市・台湾)), 2022.12.10.

石黒圭

「学習者の習得過程を可視化する—日本語学習者縦断コーパス「CoLeJa」—」, NINJAL シンポジウム「言語資源学の創成: 開かれた言語資源による日本語研究」, オンライン, 2022.12.10.

石黒圭, 吉甜, 佐野彩子

「アジアにおける日本語学習者の辞書使用の実態—スマホによる辞書引き行動の動画調査の紹介—」, ポスター発表, NINJAL シンポジウム「言語資源学の創成: 開かれた言語資源による日本語研究」, オンライン, 2022.12.10.

石黒圭

「接続詞の選択に表れるジャンルの論理的特徴」, 招待講演, 日本語文法学会第23回大会シンポジウム「ジャンルと文法—文法を揺るがす・形づくる・とどめる—」, オンライン, 2022.12.18.

石黒圭

「スマホはどこまで日本語学習の役に立つのか—イギリス国内における日本語学習者の辞書ツールの使用実態—」, 招待講演, 英国日本語教育学会・国際交流基金ロンドン日本文化センター共催 日本語教育セミナー, オンライン (英国), 2023.2.11.

石黒圭

「大学院生のための日本語教育と研究」, 招待講演, 筑波大学日本語教育研究拠点シンポジウム, 筑波大学, 2023.2.13.

石黒圭, 王慧雋

「中国国内の大学の日本語専攻におけるアカデミック・ライティング教育の現状と課題—現地教師へのインタビューをもとに—」, 第25回専門日本語教育学会研究討論会, 長崎市建設総合会館, 2023.3.4.

石黒圭

「文化によってここまで違う! 世界の日本語学習者の辞書ツール使用事情—スマホによる語彙検索行動の適切な支援のために—」, 特別講演 (招待), 第47回社会言語科学会研究大会, 東京国際大学, 2023.3.17.

【研究調査】

- ・海外作文調査 (中国7大学, 台湾2大学, 韓国2大学, ベトナム3大学, タイ1大学, フランス1大学, スロヴェニア1大学, イギリス1大学 (計18大学, 936名)), 3回, 計1754本.
- ・海外談話調査 (中国1大学, ベトナム1大学, タイ1大学, 延べ223名), 3回 (オンライン縦断調査), 談話データ: 168時間分, 作文データ: 446本分.

- ・海外辞書調査 (韓国 2 大学 (22 名), 中国 2 大学 (50 名), 台湾 1 大学 (9 名), ベトナム 1 大学 (10 名), イギリス 2 大学 (3 名), ドイツ 1 大学 (3 名), 計 97 名), 1 週間 (辞書検索行動の記録).

【一般向けの講演・セミナーなど】

石黒圭, 黒川美那子

「意見 (いけん) 文の書き方」, ニホンゴ探検 2022 ワークショップ, オンライン, 2022.8.1 (公開).

石黒圭

「ビジネス文書の基礎スキル」, 2022 夏季ビジネス日本語ポイント講座, オンライン, 2022.8.28.

石黒圭, 井伊菜穂子, 本多由美子

「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」, 国立国語研究所オープンハウス 2022, オンライン, 2022.9.9.

石黒圭, 須賀和香子, 鈴木靖代

「北京日本語学習者横断コーパス (B-JAS) の公開」, 国立国語研究所オープンハウス 2022, オンライン, 2022.9.9.

石黒圭, 吉甜, 佐野彩子

「日本語学習者の辞書使用の実態調査」, 国立国語研究所オープンハウス 2022, オンライン, 2022.9.9.

石黒圭

「日本語学習者の作文添削の方法」, フランス日本語教師会 12 月勉強会, オンライン (フランス), 2022.12.3.

石黒圭

「ドイツ国内における日本語学習者の辞書ツールの使用実態—スマホによる語彙検索行動の適切な支援のために—」, 第 29 回ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウム「日本語教育における語彙学習と指導について」, オンライン (ドイツ), 2023.3.4.

石黒圭, 吉甜, 佐野彩子

「スマホを使った日本語学習者の辞書検索を支援する—世界の日本語学習者の辞書ツールの使用実態から—」, 令和 4 年度 NINJAL 日本語教師セミナー, オンライン, 2023.3.9.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・取材を受けた記事: 「「物語る」「説明する」「説得する」3 種類の文章を書く力、身につけるには大事なのは読み手に伝える力」, 朝日新聞 EduA, 2022.4.6.
- ・取材を受けた記事: 「広まる“チャット文化”短い文章が招く誤解」『週刊朝日』, 127 巻 56 号, 102–104 頁, 2022.11.25.
- ・取材を受けた記事: 「「書き言葉」をコントロールする—テキスト・コミュニケーションの時代を生き抜く—」, 『AERA』, 35 巻 52 号, 17–19 頁, 2022.12.12.
- ・文化庁文化審議会国語分科会国語課題小委員会委員
- ・東京都教育庁「学びの基盤」プロジェクトチーム委員
- ・光村図書出版『小学校国語』教科書編集委員
- ・明治書院『精選 現代の国語』教科書編集委員

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

石黒圭, 布施悠子, 須賀和香子, 鈴木靖代

「日本語学習者の話し言葉の分析—北京日本語学習者縦断コーパス (B-JAS) を用いて—」, 第 45 回 NINJAL チュートリアル, オンライン, 2023.3.14.

《連携大学院》

- ・一橋大学大学院言語社会研究科連携教授 (主指導担当: 博士課程 5 名, 修士課程 5 名)

宇佐美 まゆみ (うさみ まゆみ) 研究系教授

【学位】 博士 (教育学 (Ed.D)) (ハーバード大学, 1999)

【学歴】 千葉大学教育学部教育心理学科 (1, 2 年次在籍), 立教大学文学部心理学科に 3 年次編入後卒業 (1981), 慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程修了 (1984), ハーバード大学教育学部大学院人間発達・心理学科修士課程修了 (1991), ハーバード大学教育学部大学院人間発達・心理学科博士課程単位取得修了 (1992)

【職歴】 財団法人交流協会台北事務所 日本語教育専門家 (1984), コルビー大学現代外国語学部 客員講師 (1987), シカゴ大学東アジア言語・文化学部 専任講師 (1988), 昭和女子大学文学部 専任講師 (1993), 東京外国語大学外国語学部 助教授 (1997), 同 教授 (2002), 東京外国語大学大学院地域文化研究科言語教育学講座 教授 (大学院改組に伴う配置換え) (2005), 東京外国語大学総合国際学研究院 教授 (大学院改組に伴う配置換え) (2009), 人間文化研究機構国立国語研究所研究系 (日本語教育研究領域) 教授 (2016–2023)

【専門領域】 言語社会心理学, 談話研究, 語用論, 日本語教育学

【所属学会】 社会言語科学会, 日本語用論学会, 日本語教育学会, 日本語学会, 日本語ジェンダー学会, ヨーロッパ日本語教師会, 言語処理学会, 人工知能学会, 日本語プロフィシエンシー研究学会, 大学日本語教員養成課程研究協議会, International Association of Applied Linguistics (IAAL/AILA), International Pragmatics Association (IPrA)

【学会等の役員・委員】 社会言語科学会 理事・広報委員, 日本語用論学会 評議員, 日本語ジェンダー学会 評議員, 『日本語プロフィシエンシー研究学会』 査読委員, 言語社会心理学研究会 (SPLaD) 代表, 人工知能学会 「言語・音声理解と対話処理研究会 (SLUD)」 ライブコンペティション専任委員

【受賞歴】

2022: 第 24 回国立国語研究所所長賞 (“Ch.12 Intersection of discourse politeness theory and interpersonal communication”, *Handbook of Japanese Sociolinguistics*, Yoshiyuki Asahi, Mayumi Usami, and Fumio Inoue (eds.), De Gruyter Mouton, pp.355–386, 2022.4.)

2021: CASTEL/J (日本語教育支援システム研究会) 優秀発表 (“「自然会話リソースバンク (NCRB: Natural Conversation Resource Bank)」 —新しい形の共同構築型多機能データベースの開発と活用—”)

2021: 第 22 回国立国語研究所所長賞 (『日本語の自然会話分析—BTSJ コーパスから見たコミュニケーションの解明—』, くろしお出版)

2021: HAI シンポジウム 2021 Impressive Short-paper Award (優秀論文賞 (ショート): 「対話型擬人化エージェントの言語的配慮に対する受容性の異文化比較に関する研究—クラウドソーシングによる大規模印象調査—」)

2020: 第 20 回国立国語研究所所長賞 (『自然会話分析への語用論的アプローチ—BTSJ コーパスを利用して—』, ひつじ書房)

2019: IEEE Computational Intelligence Society Young Researcher Award (“Design of linguistic behaviors according to driver attributes support agent based on politeness theory”)

2018: ファジィシステムシンポジウム 2018 ポスター・デモセッション最優秀発表賞 (“ポライトネス理論に基づく運転支援エージェントの運転者属性と運転状況に応じた言語的振る舞いの設計”)

【2022 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (A) 「語用論的分析のための日本語 1000 人自然会話コーパスの構築とその多角的研究」, 18H03581: 研究代表者
- ・新学術領域研究 (研究領域提案型) 「人間機械共生社会を目指した対話知能システム学」 公募研究 「DP 理論に基づくスピーチレベルシフトによる親和性の高い対話システムの開発」, 22H04869: 研究協力者

【研究業績】

《著書・編書》

Yoshiyuki Asahi, Mayumi Usami, and Fumio Inoue (eds.)

Handbook of Japanese Sociolinguistics, De Gruyter Mouton, 2022.4.18, ISBN: 9781501507472.

《論文・ブックチャプター》

Yoshiyuki Asahi, Mayumi Usami, and Fumio Inoue

“Introduction”, Yoshiyuki Asahi, Mayumi Usami, and Fumio Inoue (eds.) *Handbook of Japanese Sociolinguistics*, pp. 1–16, De Gruyter Mouton, 2022.4.18, DOI: 10.1515/9781501501470-001.

Mayumi Usami

“Intersection of discourse politeness theory and interpersonal Communication”, Yoshiyuki Asahi, Mayumi Usami, and Fumio Inoue (eds.) *Handbook of Japanese Sociolinguistics*, pp. 355–386, De Gruyter Mouton, 2022.4.18, DOI: 10.1515/9781501501470-013.

宇佐美まゆみ

「自然会話を素材とする共同構築型 Web 教材 NCRB—自然会話データの分析を踏まえて」, 鎌田修, 由井紀久子, 池田隆介 (編) 『日本語プロフィシエンシー研究の広がり』, ひつじ書房, 209–221 頁, 2022.10.

《コーパス・データベース類》

宇佐美まゆみ

「BTSJ1000 人日本語自然会話コーパス (2023 年 3 月 NCRB 連動完成版)」, https://isplad.jp/btsj_corpus_2023/, 2023.3.31.

《その他の出版物・記事》

宇佐美まゆみ

「AI と共生するためのコミュニケーション学」, 『日本語学』, 41 巻 2 号, 78–79 頁, 2022.6.

宇佐美まゆみ

「敬語の呪縛から自由になろう—親しさの表現は、言葉の民主化への第一歩—」, 『AJALT』, 45 巻, 24–27 頁, 2022.6.

【講演・口頭発表】

宇佐美まゆみ

「BTSJ 自然会話コーパスと自然会話リソースバンク (NCRB) をコミュニケーション教育のリソースとして活用する方法」, ポスター発表, 第 25 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム, ライデン大学 (オランダ), オンライン, 2022.8.26.

Mayumi Usami

“The Functions of Natural Conversation Resource Bank (NCRB), a Collaboratively Constructed Multi-functional Database, and Its Application in Language Education”, The IAFOR International Conference on Education in Hawaii (IICE23), Hawaii Convention Center (ハワイ・米国), 2023.1.5–8.

宇佐美まゆみ

「『自然会話リソースバンク (NCRB)』の構築と『BTSJ1000 人日本語自然会話コーパス』との連携の趣旨と特徴—他のオンライン日本語教材とどこが違うのか?」, シンポジウムパネル, 科研成果発表会『BTSJ1000 人日本語自然会話コーパス』と『自然会話リソースバンク (NCRB)』の新展開 (—その多様な活用方法—), オンライン, 2023.3.25.

宇佐美まゆみ

「『BTSJ という文字化の法則』と『BTSJ システムセット』を使うためのコーディングの方法について」, シンポジウムパネル, 科研成果発表会『BTSJ1000 人日本語自然会話コーパス』と『自然会話リソースバンク (NCRB)』の新展開 (—その多様な活用方法—), オンライン, 2023.3.25.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・大会テーマ「ことばとジェンダーの問題」—解決への持続可能な取り組みに向けて— (主催: 日本語

ジェンダー学会第22回年次大会), オンライン, 2022.12.10.

- ・パネルディスカッション「ことばとジェンダー研究とその社会的実践—なぜ過去の議論や実践が継承されないのか—」(主催: 日本語ジェンダー学会第22回年次大会), オンライン, 2022.12.10.
- ・対話システムライブコンペティション5(主催: 人工知能学会 SIG 第96回言語・音声理解と対話処理研究会), 国語研究所, オンライン, 2022.12.13.
- ・科研成果発表会『BTSJ1000人日本語自然会話コーパス』と『自然会話リソースバンク(NCRB)』の新展開(—その多様な活用方法—)(主催: 科研18H03581, 共催: 国立国語研究所), オンライン, 2023.3.25.

【一般向けの講演・セミナーなど】

宇佐美まゆみ

「BTSJ 日本語 1000 人自然会話コーパス」と『自然会話リソースバンク(NCRB)』, 国立国語研究所オープンハウス2022, オンライン, 2022.9.9.

宇佐美まゆみ

『BTSJ1000人日本語自然会話コーパス』とNCRB(Natural Conversation Resource Bank)の開発の趣旨と日本語教育における活用法, 2022年度NINJAL日本語教師セミナー(海外), 中国文化大学(台北・台湾), 2023.3.4.

宇佐美まゆみ

『BTSJ1000人日本語自然会話コーパス』とNCRB(Natural Conversation Resource Bank)の開発の趣旨と日本語教育における活用法, 2022年度NINJAL日本語教師セミナー(海外), 国立高雄科技大学(高雄・台湾), 2023.3.5.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・『日本語プロフィシエンシー研究』(日本語プロフィシエンシー研究学会): 査読協力
- ・日本語用論学会: 大会発表審査
- ・社会言語科学会: 論文査読協力, 広報活動
- ・AJE(ヨーロッパ日本語教師会): 論文査読, 論文編集協力

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

宇佐美まゆみ

「BTSJ 活用方法講習会」, オンライン, 2023.3.1.

宇佐美まゆみ

『BTSJ1000人日本語自然会話コーパス』とNCRB(Natural Conversation Resource Bank)の開発の趣旨と日本語教育における活用法, サンフランシスコ州立大学(サンフランシスコ・米国), 2023.3.13.

宇佐美まゆみ

『BTSJ1000人日本語自然会話コーパス』とNCRB(Natural Conversation Resource Bank)の開発の趣旨と日本語教育における活用法, ニューヨーク大学(ニューヨーク・米国), 2023.3.20.

《大学院非常勤講師》

- ・國學院大學大学院
- ・城西国際大学大学院

《若手研究者の受入》

- ・国立国語研究所: 非常勤研究員, 技術補佐員, 共同研究員の受け入れ

大西 拓一郎 (おおにし たくいちろう) 研究系教授

【学位】 修士 (文学) (東北大学, 1987)

【学歴】 東北大学文学部卒業 (1985), 東北大学大学院文学研究科博士課程前期 2 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻修了 (1987), 東北大学大学院文学研究科博士課程後期 3 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻単位取得退学 (1989)

【職歴】 東北大学文学部 助手 (1991), 国立国語研究所言語変化研究部第一研究室 研究員 (1993), 同 主任研究官 (1996), 同 室長 (1999), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 教授 (2009), 同研究系 (言語変化研究領域) 教授 (2016)

【専門領域】 方言学, 言語地理学, 日本語学

【所属学会】 日本方言研究会, 日本語学会, International Society for Dialectology and Geolinguistics (SIDG), 日本地理言語学会, 変異理論研究会, 日本言語学会, 日本音声学会, 日本語文法学会, 中日理論言語学研究会, 九州方言研究会, 日本文芸研究会

【学会等の役員・委員】 日本語学会 評議員, SIDG committee of accountants

【受賞歴】

2016: 国立国語研究所第 13 回所長賞

【2022 年度に参画した共同研究】

- ・ 基幹型共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」: サブプロジェクトリーダー (「言語資源の空間接続」)
- ・ 広領域連携型基幹研究「横断的・融合的地域文化研究の領域展開: 新たな社会の創発を目指して」国語研ユニット「地域における市民科学文化の再発見と現在」: ユニット代表
- ・ 共創先導プロジェクト共創促進事業 (知の循環促進事業)「開かれた人間文化研究を目指した社会共創コミュニケーションの構築」: 研究分担者

【2022 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・ 挑戦的研究 (開拓)「古辞書・古典籍データへの地理情報付与による人文学の横断的展開」, 20K20501: 研究代表者
- ・ 基盤研究 (A)「『方言文法辞典』データベース拡充による日本語時空間変異対照研究の多角的展開」, 20H00015: 研究分担者
- ・ 基盤研究 (B)「日本語敬語形成モデルの構築—生成・運用・伝播に注目して—」, 19H01266: 研究分担者
- ・ 基盤研究 (B)「『瀬戸内海言語図巻』の追跡調査による音声言語地図の作成と言語変容の研究」, 21H00530a: 研究分担者
- ・ 基盤研究 (C)「市民科学で読み解く「長野県は宇宙県」」, 22K02956: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

大西拓一郎

『方言間一致率の分布と距離図集』, 私家版 (調査報告書), 2022.8.18.

大西拓一郎 (編)

『「市民科学」プロジェクト 2022 年度シンポジウム集録「長野県は宇宙県」の天文史 100 年と市民科学』, 私家版, 2023.1.31.

《論文・ブックチャプター》

大西拓一郎

「可能の表現—可能形式の分布と地域差—」, 岸江信介, 中井精一 (編)『地図で読み解く関西のことば』, 昭和堂, 217–235 頁, 2022.4.25.

大西拓一郎

「言語の地理学」, 日本地理学会 (編)『地理学事典』, 丸善出版, 356–357 頁, 2023.1.30.

大西拓一郎

「諏訪天文同好会の変光星観測」, 大西拓一郎(編)『「市民科学」プロジェクト 2022 年度シンポジウム集録「長野県は宇宙県」の天文学史 100 年と市民科学』, 私家版, 81-86 頁, 2023.1.31.

《コーパス・データベース類》

大西拓一郎, 外山善朗

「言語地図データベース」, https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/ladb_index.html, 2022.4.

【講演・口頭発表】

大西拓一郎

「長野県諏訪地方における初期の変光星観測について」, 変光星観測者会議 2022, オンライン, 2022.7.3.

大西拓一郎

「同音衝突の多様性と再定義」, 空間接続プロジェクト月例研究会, オンライン, 2022.7.18.

大西拓一郎

「日本語における渡来作物の方言」, ワークショップパネル, 東京外国語大学国際日本研究センター対照日本語部門第 36 回 外国語と日本語との対照言語学的研究 国立国語研究所空間接続プロジェクト 共同開催ワークショップ, オンライン, 2022.9.17.

大西拓一郎

「諏訪天文同好会の変光星観測」, シンポジウムパネル, シンポジウム「長野県は宇宙県」の天文学史 100 年と市民科学, 諏訪市駅前交流テラスすわっチャオ, オンライン(ハイブリッド), 2022.11.18.

大西拓一郎

「空間接続プロジェクトについて」, ポスター発表, NINJAL シンポジウム 2022, オンライン, 2022.12.10.

大西拓一郎

「QGIS による言語地図の作成」, 空間接続プロジェクト月例研究会, オンライン, 2022.12.19.

大西拓一郎

「狭域言語地図の詳細分布データを探索する」, フォーラムパネル, 第 17 回 NINJAL フォーラム, オンライン, 2023.2.18.

【研究調査】

- ・長野県諏訪地方を中心とした地域における市民科学文化資料の調査・研究(長野県諏訪地方).

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・東京外国語大学国際日本研究センター対照日本語部門第 36 回 外国語と日本語との対照言語学的研究 国立国語研究所空間接続プロジェクト 共同開催ワークショップ(主催: 国立国語研究所空間接続プロジェクト, 共催: 東京外国語大学国際日本研究センター対照日本語部門), オンライン, 2022.9.17.
- ・シンポジウム「長野県は宇宙県」の天文学史 100 年と市民科学(主催: 人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト国立国語研究所ユニット「地域における市民科学文化の再発見と現在」, 「長野県は宇宙県」連絡協議会, 共催: 研費基盤研究(C)(一般)「市民科学として読み解く「長野県は宇宙県」の天文文化」, 名古屋大学宇宙地球環境研究所(所長リーダーシップ経費「過去の太陽地球環境のアナログ観測記録のデータレスキュー」)), 諏訪市駅前交流テラスすわっチャオ, オンライン(ハイブリッド), 2022.11.18.
- ・空間接続プロジェクト公開研究発表会(主催: 国立国語研究所空間接続プロジェクト), 国立国語研究所, オンライン(ハイブリッド), 2023.2.24.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・取材を受けた記事: 「100 年の歩み振り返る: 諏訪天文同好会 諏訪で記念シンポ「市民科学」の進め方も紹介」, 長野日報, 2022.11.19.
- ・早稲田大学オープンカレッジ(講師): 「方言学入門—にほんごの地理と歴史—」, 早稲田大学, 2023.1.
- ・取材を受けた記事: 「国立国語研と協定: 茅野市教委: 市民科学発展へ連携」, 長野日報, 2023.3.30.
- ・日本語文法学会: 学会誌委員

【大学院教育・若手研究者育成】

《博士論文審査委員》

- ・同志社大学大学院文化情報学研究科学位論文審査委員

高田 智和 (たかだ ともかず) 研究系教授

【学位】 博士 (文学) (北海道大学, 2004)

【学歴】 北海道大学文学部卒業 (1999), 北海道大学大学院文学研究科国文学専攻修士課程修了 (2001), 北海道大学大学院文学研究科言語文学専攻博士後期課程修了 (2004)

【職歴】 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員 (2005), 同 言語資源グループ 研究員 (2006), 同 言語生活グループ 研究員 (2007), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (言語変化研究領域) 准教授 (2016), 同 研究系 (言語変化研究領域) 教授 (2021)

【専門領域】 日本語学, 国語学, 文献学, 文字・表記, 漢字情報処理

【所属学会】 日本語学会, 訓点語学会, 計量国語学会, 情報処理学会, 日本漢字学会

【学会等の役員・委員】 計量国語学会 理事, 訓点語学会 運営委員, 日本語学会 評議員, 日本漢字学会 評議員, 情報処理学会情報規格調査会 SC2 専門委員会 委員

【受賞歴】

- 2022: 情報処理学会論文誌ジャーナル特選論文
- 2019: 2019 年度山下記念研究賞
- 2016: 2016 年度日本語学会春季大会発表賞
- 2013: 北海道大学文学部同窓会楡文賞
- 2010: 情報処理学会情報規格調査会標準化貢献賞
- 2010: 国立国語研究所第 1 回所長賞
- 2007: 日本規格協会標準化貢献賞

【2022 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」: サブプロジェクトリーダー (「語彙資源ポータル拡張」)
- ・基幹型共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」: メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」: メンバー
- ・異分野融合型共同利用型共同研究プロジェクト「国内の観光エフェメラ資料の包括的アーカイブに向けた基盤構築および実証研究」: メンバー
- ・広領域連携型基幹研究「横断的・融合的な地域文化研究の領域展開: 新たな社会の創発を目指して」国語研ユニット「地域における市民科学文化の再発見と現在」: メンバー
- ・広領域連携型基幹研究「異分野融合による総合書物学の拡張的研究」国語研ユニット「古辞書類に基づく語彙資源の拡張と語彙・表記の史的変遷」: ユニット代表
- ・共創先導プロジェクト共創促進研究「学術知デジタルライブラリの構築 (国語研拠点)」: 代表者
- ・共創先導プロジェクト共創促進研究「ハワイにおける日系社会資料に関する資料調査と社会調査の融合的研究」: 共同研究員

【2022 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・挑戦的研究 (萌芽)「時代差・地域差・分野差を集積した漢字字形情報通覧基盤の開発研究」, 20K20711: 研究代表者
- ・基盤研究 (S)「木簡等の研究資源オープンデータ化を通じた参加誘発型研究スキーム確立による知の展開」, 18H05221: 研究分担者
- ・基盤研究 (A)「統合史資料画像データの生成と駆動方式の確立による人文科学研究基盤の創出」, 18H03576: 研究分担者
- ・基盤研究 (A)「断片的史料情報の集積と歴史知識情報の相互参照体制の確立による新たな史料学構築研究」, 21H04356: 研究分担者
- ・基盤研究 (B)「資料横断的な漢字音・漢語音データベースの拡充と運用に向けた基礎的研究」, 22H00665: 研究分担者
- ・基盤研究 (C)「資料横断的な漢字音・漢語音データベース構築・公開に向けた基礎的研究」, 19K00650:

研究分担者

- ・基盤研究 (C) 「書き下し文生成を目的とする訓点資料の高精度電子化」, 20K00654: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

横山詔一, 相澤正夫, 久野雅樹, 高田智和, 前田忠彦

『日本人の読み書き能力』(1951)における非識字率の再検討—テストとしての問題点を中心に—, 『基礎教育保障学研究』, 6号, 11–28頁, 2022.9.1, DOI: 10.32281/jasbel.6.0_11.

横山詔一, 前田忠彦, 高田智和, 相澤正夫, 野山広, 福永由佳, 朝日祥之, 久野雅樹

「日本人の読み書き能力 1948年調査における非識字率と生年の関係」, 『計量国語学』, 33巻8号, 602–611頁, 2023.3.20.

《コーパス・データベース類》

高田智和

「日本語読本 [布哇教育会第1期]」, https://www2.ninjal.ac.jp/textdb_dataset/hn17/, 2022.8.30.

高田智和

『日独仏西基本語彙対照表』データ, <https://mmsrv.ninjal.ac.jp/fvjgfs/>, 2023.2.14.

【講演・口頭発表】

柳原恵津子, 近藤明日子, 高田智和, 月本雅幸, 小木曾智信

『日本語歴史コーパス 平安時代編 II 訓点資料』の公開, ポスター発表, 日本語学会 2022年度春季大会, オンライン, 2022.5.15.

高田智和

「社会調査型言語調査資料の保存と活用」日本世論調査協会 2022年度研究大会, オンライン, 2022.11.11.

高田智和, 山崎誠

「語誌情報ポータル」拡張計画, ポスター発表, NINJAL シンポジウム「言語資源学の創成: 開かれた言語資源による日本語研究」, オンライン, 2022.12.10.

中村海翔, 田島孝治, 堤智昭, 高田智和, 小助川貞次

「書き下し文での訓点情報検索を可能とする訓点資料データベースの試作」, ポスター発表, 人文科学とコンピュータシンポジウム 2022, オンライン, 2022.12.11.

高田智和

「漢字音・漢語音データベースの語彙資源化」, 研究集会「古辞書・漢字音研究とデータベース 2022」, オンライン, 2023.3.4.

高田智和

「鶴岡調査データベース 5.0 公開に向けて」, 研究集会「言語をめぐる社会調査史料の活用」, オンライン, 2023.3.14.

【研究調査】

- ・文庫調査 (東京都立中央図書館), 2023.2.9.
- ・近世版本調査 (富山県立図書館), 2023.2.18.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・2022年度共同利用セミナー (主催: 国立国語研究所共同利用推進センター, 共催: 情報・システム機構 データサイエンス共同基盤施設社会データ構造化センター), オンライン, 2022.9.12.
- ・研究集会「古辞書データ共有と拡張」 (主催: 異分野融合による総合書物学の拡張的研究, 共催: 一般社団法人人文情報学研究所, JSPS 科研費 JP20K20711, JSPS 科研費 JP19H00526), オンライン, 2023.1.21.
- ・研究集会「古辞書・漢字音研究とデータベース 2022」 (主催: 語彙資源ポータル拡張, 共催: JSPS 科研費 JP22H00665, JSPS 科研費 JP21H00529, JSPS 科研費 JP21K18364), オンライン, 2023.3.4.
- ・「学術知デジタルライブラリの構築 (国語研拠点)」研究集会 (主催: 学術知デジタルライブラリの構築

(国語研拠点)), オンライン, 2023.3.7.

- 研究集会「言語をめぐる社会調査史料の活用」(主催: 共同利用型共同研究(A)「言語をめぐる社会調査史料の活用法に関する研究」, 共催: 情報・システム研究機構 データサイエンス共同利用基盤施設 公募型共同研究 024RP2022 「戦後初期の社会言語学的調査の多角的な検討」), オンライン, 2023.3.14.

【一般向けの講演・セミナーなど】

高田智和

「布哇教育会『日本語読本』全文データの公開」, 国立国語研究所オープンハウス 2022, オンライン, 2022.9.9.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

国立国語研究所(福永由佳, 高田智和)

「国立国語研究所日本語教育映像教材シリーズの公開についての説明会」, 2022年度日本語教育学会春季大会, オンライン, 2022.5.22.

高田智和

「1948年読み書き能力調査資料」, 2022年度共同利用セミナー, オンライン, 2022.9.12.

寺島宏貴, 中島彩花, 高田智和

「国立国語研究所研究資料室」, 図書館総合展 2022, オンライン, 2022.11.1.

《大学院非常勤講師》

- 総合研究大学院大学

Prashant Vijay Pardeshi (プラシャント ウィジャイ パルデシ)

研究系教授

【学位】 博士 (学術) (神戸大学, 2000)

【学歴】 ジャワハルラル・ネル大学文学日本語専攻修士課程修了 (1993), 神戸大学大学院文化科学研究科修了 (2000)

【職歴】 神戸大学文学部 講師 (2005), 同 人文学研究科 講師 (2007), 人間文化研究機構国立国語研究所言語対照研究系 准教授 (2009), 同 教授 (2011), 同 研究系長 (2014–2016), 同 研究系 (理論・対照研究領域) 教授, 研究情報発信センター長 (2016.4–2018.3)

【専門領域】 言語学, 言語類型論, 対照言語学

【所属学会】 日本言語学会, 日本語文法学会, 関西言語学会

【受賞歴】

2021: 国立国語研究所第22回所長賞

2020: 国立国語研究所第21回所長賞

2020: 国立国語研究所第20回所長賞

2019: 国立国語研究所第19回所長賞

2018: 国立国語研究所第16回特別所長賞

2016: 国立国語研究所第12回特別所長賞

2010: 国立国語研究所第1回所長賞

2007: 第1回『博報「ことばと文化・教育」研究助成』優秀賞 (パルデシ・プラシャント, 桐生和幸, 石田英明, 小磯千尋 (編) 『日本語—マラーティー語基本動詞用法事典』, 2007. 財団法人博報児童教育振興会 2005年度第1回『博報「ことばと文化・教育」研究助成』の研究助成支援による「日・マラーティー語の対照研究・日本語教育用基本動詞用法事典の作成」プロジェクト報告書)

2000: The Chatterjee-Ramanujan Prize for outstanding student contribution to “*The Yearbook of South Asian Languages and Linguistics 2000*”, Sage Publications, New Delhi, Thousand Oaks, and London. (Paper title: “The Passive and Related Constructions in Marathi.”)

【2022年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」: サブプロジェクトリーダー (「体言化の実証的な言語類型論—理論・フィールドワーク・歴史・方言の観点から—」)
- ・基幹型共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」: サブプロジェクトリーダー (「学習者用「日本語機能語バンク」の構築」)

【2022年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (C) 「マルチメディアを利用したイメージ・スキーマ形成の活性化と外国語教育への応用」, 21K02776: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「学習者のニーズを反映した大規模な動詞用法データベースとオンライン教材の開発と公開」, 22H00672: 研究代表者
- ・基盤研究 (B) 「類別詞と文法的性を中心にした文法的体言化に関する類型的研究」, 22H00659: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

吉本啓, プラシャント・パルデシ, 長崎郁, アラステア・バトラー

「NINJAL Parsed Corpus of Modern Japanese の構築と公開」, 『自然言語処理』, 29 巻 3 号, 1015–1022 頁, 2022.9.15, DOI: 10.5715/jnlp.29.1015.

【講演・口頭発表】

Prashant Pardeshi

“Research on Japanese language: A step-by-step guide”, Tilak Maharashtra Vidyapeeth (Pune・インド), 2022.7.30.

Prashant Pardeshi

“Classifier, Gender marking and Relativization in Marathi: A nominalization perspective”, the international workshop on “Nominalization, Gender and Classifiers”, Indian Institute of Technology Madras (Chennai・インド), 2022.8.1.

Prashant Pardeshi

“Classifier, Gender marking and Relativization in Marathi: A nominalization perspective”, the international workshop on “Nominalization, Gender and Classifiers”, Deccan College Post-Graduate and Research Institute (Pune・インド), 2022.8.4.

Prashant Pardeshi

“Classifier, Gender marking and Relativization in Marathi: A nominalization perspective”, the international workshop on “Nominalization, Gender and Classifiers”, Central Institute of Indian Languages (CIIL) (Mysuru・インド), 2022.8.6.

Prashant Pardeshi

“Research on Japanese language: A step-by-step guide”, Tilak Maharashtra Vidyapeeth (Pune・インド), 2022.8.10.

プラシャント・パルデシ

「体言化の実証的な言語類型論—理論、フィールドワーク、歴史、方言の観点から—」, Evidence-based Linguistics Workshop 2022, オンライン, 2022.9.6.

Prashant Pardeshi

“Classifier and Gender Marking in South Asian (Indic and Dravidian) Languages: A Nominalization Perspective”, the international workshop on “Nominalization, Gender and Classifiers”, Vietnam National University (Hanoi・ベトナム), 2022.12.29.

Prashant Pardeshi

“Classifier and Gender Marking in South Asian (Indic and Dravidian) Languages: A Nominalization Perspective”, the international workshop on “Nominalization, Gender and Classifiers”, University of Foreign Language Studies–The University of DA Nang (UFLS–UD) (Da Nang・ベトナム), 2023.1.2.

プラシャント・パルデシ

「日本語教育・学習・研究用のオンライン言語資源」, the international workshop on “Nominalization, Gender and Classifiers”, University of Foreign Language Studies–The University of DA Nang (UFLS–UD) (Da Nang・ベトナム), 2023.1.3.

Prashant Pardeshi

“Classifier and Gender Marking in South Asian (Indic and Dravidian) Languages: A Nominalization Perspective”, the international workshop on “Nominalization, Gender and Classifiers”, University of Social Sciences and Humanities–Vietnam National University (Ho Chi Minh City・ベトナム), 2023.1.9.

Prashant Pardeshi

“Comparative study of classifiers in Japanese and some Indian languages”, Manipur University (Imphal・インド), 2023.2.13.

プラシャント・パルデシ

「日本語の多義語の教育と学習：多義的な基本動詞を通じて」, Tashkent State University of Oriental Studies (Tashkent・ウズベキスタン), 2023.3.2.

プラシャント・パルデシ

「日本語教育・学習・研究用のオンライン言語資源」, Tashkent State University of Oriental Studies (Tashkent・ウズベキスタン), 2023.3.3.

プラシャント・パルデシ

「基本動詞ハンドブック」, 招待基調講演, 第29回ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウム, オンライン(トリア大学)(トリア市・ドイツ), 2023.3.4.

プラシャント・パルデシ

「基本動詞ハンドブック: 日本語教室における活用の一試案」, 招待基調講演, 第29回ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウム, オンライン(トリア大学)(トリア市・ドイツ), 2023.3.4.

竹内孔一, アラステア・バトラー, 長崎郁, プラシャント・パルデシ

「述語の概念フレームと PropBank 形式の意味役割を付与した NPCMJ-PT の構築」, 言語処理学会第28回年次大会, オンライン, 2023.3.15.

竹内孔一, 岩本潤季, アラステア・バトラー, 長崎郁, プラシャント・パルデシ

「意味役割と概念フレームを付与した NPCMJ-PT によるタグの推定」, 情報処理学会第146回情報基礎とアクセス技術/第124回ドキュメントコミュニケーション研究会合同研究発表会, オンライン(東洋大学), 2023.3.25.

【研究調査】

- ・台北市・台湾, 2023.1.15–22.
- ・アッサム州・インド, 2023.2.8–22.
- ・ウズベキスタン, 2023.3.8–25.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・International workshop on Nominalization, Gender and Classifiers (主催:「体言化の実証的な言語類型論—理論・フィールドワーク・歴史・方言の観点から—」, 共催: The Department of Humanities and Social Sciences, Indian Institute of Technology Madras), Indian Institute of Technology Madras (Chennai・インド), 2022.8.1.
- ・International workshop on Nominalization, Gender and Classifiers (主催:「体言化の実証的な言語類型論—理論・フィールドワーク・歴史・方言の観点から—」, 共催: The Department of Linguistics, Deccan College Post-Graduate and Research Institute), Deccan College Post-Graduate and Research Institute (Pune・インド), 2022.8.4.
- ・International workshop on Nominalization, Gender and Classifiers (主催:「体言化の実証的な言語類型論—理論・フィールドワーク・歴史・方言の観点から—」, 共催: Central Institute of Indian Languages (CIIL)), Central Institute of Indian Languages (CIIL) (Mysuru・インド), 2022.8.6.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

Prashant Pardeshi

“Comparative study of classifiers in Japanese and some Indian languages”, 若手研究者向けの講演, Manipur University (Imphal・インド), 2023.2.13.

プラシャント・パルデシ

「日本語の多義語の教育と学習: 多義的な基本動詞を通じて」, 若手研究者向けの講演, Tashkent State University of Oriental Studies (Tashkent・ウズベキスタン), 2023.3.2.

プラシャント・パルデシ

「日本語教育・学習・研究用のオンライン言語資源」, 若手研究者向けの講演, Tashkent State University of Oriental Studies (Tashkent・ウズベキスタン), 2023.3.3.

《国際交流基金日本研究基盤整備プログラム(客員教授経費助成)》

- ・タシュケント国立東洋学大学客員教授: 2023.3.1–31.

松下 達彦 (まつした たつひこ) 研究系教授

【学位】 博士 (言語学, 応用言語学) (ウェリントン・ビクトリア大学, 2013)

【学歴】 早稲田大学教育学国語国文学科卒業 (1990), 名古屋大学大学院文学研究科日本語文化専攻博士前期課程修了 (1992), 名古屋大学大学院文学研究科日本語文化専攻博士後期課程中退 (1993), ウェリントン・ビクトリア大学人文社会学部言語学・応用言語研究科博士課程修了 (2012)

【職歴】 桜美林大学国際学部 専任講師 (1993–2000), 桜美林大学国際教育センター 助教授 (2000–2007), 桜美林大学人文学系 (基盤教育院担当) 准教授 (2007), 東京大学教養学部 特任准教授 (2012–2013), 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部グローバルコミュニケーション研究センター 特任准教授 (2013–2015), 同 准教授 (2015–2019), 同 教授 (2019–2022), 国立国語研究所研究系 教授 (2022–)

【専門領域】 応用言語学, 日本語教育, 特に語彙の学習と教育

【所属学会】 日本語教育学会, 計量国語学会, 日本語テスト学会, 専門日本語教育学会, 日本リメディアル教育学会, 母語・継承語・バイリンガル教育学会, 小出記念日本語教育学会, 日本語学会, 大学国語教育学会

【学会等の役員・委員】 日本語教育学会 学会誌委員会副委員長, 大学日本語教育研究協議会 副代表

【受賞歴】

- 2022: 2021 年度論文賞 (日本語教育学会: 松下達彦, 佐藤尚子, 笹尾洋介, 田島ますみ, 橋本美香「日本語の語彙量と漢字力—第一言語と学習期間の影響—」, 『日本語教育』, 178, 139–153 頁)
- 2019: 第 13 回奨励賞 (日本語教育方法研究会: ボイクマン総子, 根本愛子, 松下達彦「プレースメントのための日本語スピーキングテスト STAR の開発」, 第 52 回日本語教育方法研究会, 2019.3.23)
- 2017: 大会発表優秀賞 (日本リメディアル教育学会: 田島ますみ, 佐藤尚子, 松下達彦, 笹尾洋介, 橋本美香「日本語学術共通語彙知識の発達 (義務教育課程と高等教育課程での習得状況の比較)」, 日本リメディアル教育学会第 13 回全国大会, 2017.8.23)

【2022 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」: メンバー (サブプロジェクト「学習者辞書用語彙資源の構築」)
- ・基幹型共同研究プロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」: メンバー

【2022 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化 (B)) 「高等教育機関における外国語プレースメントのためのスピーキングテスト」, 20KK0005: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「アカデミック日本語アセスメントの運用と評価」, 19H01270: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「やさしい日本語を鍵概念とする言語教育、言語研究、言語政策に関する総合的研究」, 21H00536: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「文字・音声の両モードによる日本語語彙知識測定オンラインテストの開発と検証」, 18K00679: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「プレースメントのための日本語スピーキングテスト (STAR) の開発と検証」, 20K00697: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「複モード・テキストの学習を教科横断的に支援する学習者用ガイドブックの開発」, 20K02776: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「大学生の日本語論説文読解における学術共通語彙知識の影響と読解困難点の解明」, 21K00630: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

田島ますみ, 松下達彦, 佐藤尚子, 橋本美香, 笹尾洋介

「日本語学術共通語彙の理解度の評価—大学生と小中学生の学年別比較—」, 『リメディアル教育研究』, 16 巻 25 号, 145–159 頁, 2022.7, DOI: 10.18950/jade.2022.07.01.10.

松下達彦

「コミュニケーションの緩衝地帯「たまり場」の重要性 コロナ下での日本語科目、留学プログラム、コミュニケーションの場の変容から考える」, 村田和代(編)『レジリエンスから考えるこれからのコミュニケーション教育』, ひつじ書房, 3-20頁, 2022.10.3.

ボイクマン総子, 根本愛子, 松下達彦

「スピーキングのレベル判定のための弁別性焦点化ルーブリック—非日本語教師による判定結果の分析—」, 『ことばの科学』, 36巻, 41-56頁, 2022.12, DOI: 10.18999/stu1.36.41.

松下達彦

「漢字学習と語彙学習はどうあるべきか—テスト、コーパス、データベースの分析から考える—」, 『第二言語としての日本語の習得研究』, 25巻, 117-122頁, 2022.12. (第32回第二言語習得研究会(全国大会)シンポジウム報告「『漢字を活用する力』とは?」の一部)

《その他の出版物・記事》

松下達彦

「日本語・教育・語彙 第21回 ことばの時事問題(8): テスト改革の功罪は波及効果も含めた冷静な議論を(その1)」, 『DICTIONARIES & BEYOND WORD-WISE WEB 三省堂辞書ウェブ編集部によることばの壺』, 三省堂, <https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/column/goi21>, 2023.2.3.

【講演・口頭発表】

松下達彦, 藤永清乃, 江頭由美, 柿山礼美, 片山智子, 行田悦子, 須田永遠, 武富有香

「問いの循環による複数テキストの批判的統合: 言語クラスにおける授業方法と教材の開発」, 未来を創ることばの教育をめざして: 内容重視の批判的言語教育(Critical Content-Based Instruction: CCBI)のその後 第2回シンポジウム, オンライン, 2022.8.11.

松下達彦, 藤永清乃, 須田永遠, 武富有香, 江頭由美, 柿山礼美, 片山智子, 行田悦子

「複数テキストの利用による問いの広がりと深まり(批判的思考・創造的思考の育成を目指して)」, ワークショップパネル, 日本リメディアル教育学会第17回全国大会, 愛知大学名古屋キャンパス, 2022.8.25.

松下達彦

「コミュニケーションの緩衝地帯「たまり場」の重要性—コロナ禍での(日本語科目、留学プログラム、)コミュニケーションの場の変容から考える—」, ラウンドテーブルパネル(招待), 公開ラウンドテーブル「レジリエンスから考えるこれからのコミュニケーション教育」, 龍谷大学深草キャンパス, オンライン(ハイブリッド), 2022.9.4.

Nora ABUELLIL, 松下達彦

「日本語の日常会話の「形式×場所」「性別×年齢」別の語彙的特徴—日本語日常会話コーパス(CEJC)の多次元尺度法と特徴語抽出による分析—」, シンポジウムパネル, 国立国語研究所共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」サブプロジェクト「学習者辞書用語彙資源の構築」および科研費基盤研究(C)20K00655「コーパス分析による書き言葉的「硬・軟」度と話し言葉的「硬・軟」度の語への付与」共同研究発表会, オンライン, 2023.1.8.

松下達彦

「日本語教育での語彙資源の活用—現状と展望—」, 第17回NINJALフォーラム「語彙資源の構築と活用」, オンライン, 2023.2.18.

松下達彦, Nora ABUELLIL, 大村舞

「語彙から見た日本語日常会話の全体像—日本語日常会話コーパス(CEJC)の多次元尺度法による分析を中心に—」, ポスター発表, 国立国語研究所共同研究プロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」シンポジウム「日常会話コーパス」VIII, オンライン, 2023.3.3.

【その他の学術的・社会的活動】

- 第二言語習得研究会ジャーナル: 編集委員
- The RELC Journal (Regional Language Centre, Singapore): 査読委員

山崎 誠 (やまざき まこと) 研究系教授

【学位】 博士 (学術) (東京学芸大学, 2015)

【学歴】 埼玉大学教養学部教養学科卒業 (1980), 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科言語学専攻第 5 学年中退 (1984), 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科修了 (2015)

【職歴】 国立国語研究所言語計量研究部 研究員 (1984), 同 言語体系研究部第一研究室 研究員 (1988), 同 主任研究官 (1993), 同 室長 (1995), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 第一領域 主任研究員 (2001), 同 第一領域長 (2003), 同 グループ長 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授 (2009), 同 教授 (2015), 同 研究系 (言語変化研究領域) 教授 (2016)

【専門領域】 日本語学, 計量日本語学, 計量語彙論, コーパス, シソーラス

【所属学会】 日本語学会, 計量国語学会, 言語処理学会, 語彙研究会, 日本語教育学会, 社会言語科学会, 情報知識学会, 日本語文法学会, 日本行動計量学会, 情報処理学会, 表現学会

【学会等の役員・委員】 計量国語学会 理事・副会長,

【受賞歴】

- 2022: 言語処理学会第 29 回年次大会委員特別賞 (黒田航, 相良かおる, 東条佳奈, 麻子軒, 西嶋佑太郎, 山崎誠「要素の重複と不連続性を扱える抽出型の語構成要素解析: 並列分散型形態素解析の提案」)
- 2007: 言語処理学会第 12 回年次大会優秀発表賞 (山崎誠, 前川喜久雄, 田中牧郎, 小椋秀樹, 柏野和佳子, 小磯花絵, 間淵洋子, 丸山岳彦, 山口昌也, 秋元祐哉, 稲益佐知子, 吉田谷幸宏「代表性を有する現代日本語書き言葉コーパスの設計」)

【2022 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」: メンバー (サブプロジェクト「学習者用辞書資源の構築」, 「語彙資源ポータル拡張」)
- ・共創先導プロジェクト共創促進研究「学術知デジタルライブラリの構築 (国語研拠点)」: メンバー
- ・共同利用型共同研究 (C) 「係り受け情報を用いた日本語母語話者の情報処理過程解明のための基礎的研究」: コーディネーター
- ・共同利用型共同研究 (C) 「BCCWJ を用いた日本語統語情報・名詞コロケーション辞書作成のための基礎的研究」: コーディネーター
- ・共同利用型共同研究 (C) 「統計的指標を用いた日本語テキストの数理的解明」: コーディネーター

【2022 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (C) 「シソーラスの整備・拡張のための分類基準の作成と活用」, 19K00655: 研究代表者
- ・基盤研究 (A) 「語用論的分析のための日本語 1000 人自然会話コーパスの構築とその多角的研究」, 18H03581: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「医療記録文に含まれる合成語の語構成解析—リアルワールドデータの利活用に向け—」, 21H03777: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「形容詞の語義・用法データベースの作成とそれに基づく歴史的変遷の研究」, 21K00279: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

Makoto Yamazaki, Haruko Sanada, Reinhard Köhler, Sheila Embleton, Relja Vulanović, and Eric S. Wheeler (eds.)

Quantitative Approaches to Universality and Individuality in Language, De Gruyter Mouton, 2022.10.26, ISBN: 9783110628081.

《論文・ブックチャプター》

Makoto Yamazaki

“A time-series analysis of vocabulary in Japanese texts: Non-characteristic words and topic words”,

Makoto Yamazaki, Haruko Sanada, Reinhard Köhler, Sheila Embleton, Relja Vulanović, and Eric S. Wheeler(eds.) *Quantitative Approaches to Universality and Individuality in Language*, pp. 203–216, De Gruyter Mouton, 2022.10.26.

山崎誠

「計量的語彙研究の課題—法則と理論からの解放—」, 『一橋日本語教育研究』, 11号, 1–8頁, 2023.3.31.

【講演・口頭発表】

相良かおる, 西嶋佑太郎, 東条佳奈, 高崎智子, 山崎誠

「「急性」を含む病名の語構成」, ポスター発表, 言語資源ワークショップ2022, オンライン, 2022.8.30.

東条佳奈, 黒田航, 相良かおる, 高崎智子, 西嶋佑太郎, 麻子軒, 山崎誠

「実践医療用語_語構成要素語彙試案表 Ver.2.0の構築」, ポスター発表, 言語資源ワークショップ2022, オンライン, 2022.8.30.

山崎誠, 黒田航, 東条佳奈, 西嶋佑太郎, 麻子軒, 相良かおる

「医療記録における縮約表現の量的構造—医療用語との比較—」, ポスター発表, 言語資源ワークショップ2022, オンライン, 2022.8.31.

山崎誠

「計量的語彙研究の課題—法則と理論からの解放—」, 招待講演, 2022年秋季一橋日本語教育研究会, オンライン, 2022.9.4.

相良かおる, 黒田航, 東条佳奈, 西嶋佑太郎, 麻子軒, 山崎誠

「医療縮約表現—医療記録に含まれる句や節に相当する合成語—」, 言語処理学会第29回年次大会, オンライン, 2023.3.14.

山崎誠, 村田菜穂子, 前川武, 村山実和子

「『日本語歴史コーパス』への形容詞の語義・用法情報の追加」, 言語処理学会第29回年次大会, オンライン, 2023.3.14.

黒田航, 相良かおる, 東条佳奈, 麻子軒, 西嶋佑太郎, 山崎誠

「要素の重複と不連続性を扱える抽出型の語構成要素解析: 並列分散型形態素解析の提案」, 言語処理学会第29回年次大会, オンライン, 2023.3.14.

山崎誠

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に見る語表記の量的分布—品詞, レジスター, 頻度との関係—」, 言語処理学会第29回年次大会, オンライン, 2023.3.15.

山崎誠

「『BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2022年3月 NCRB 連動版』の形態素解析について」, 『BTSJ1000 人日本語自然会話コーパス』と『自然会話リソースバンク (NCRB)』の新展開 (—その多様な活用方法—), オンライン, 2023.3.25.

【一般向けの講演・セミナーなど】

山崎誠

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の漢字と表記」, 国立国語研究所オープンハウス2022, オンライン, 2022.9.9.

【その他の学術的・社会的活動】

- 日本語教育学会: 学会誌委員会委員
- 日本語学会: 会計監査
- 言語資源協会: 運営委員
- 語彙・辞書研究会: 運営委員
- 『三省堂国語辞典』: 編集委員
- 『日本語学論説資料』: 編集協力

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

山崎誠

『『分類語彙表』の構造と特徴』, 第44回 NINJAL チュートリアル, オンライン, 2022.8.6.

山崎誠

『『分類語彙表』を利用した研究』, 第44回 NINJAL チュートリアル, オンライン, 2022.8.6.

《連携大学院》

- 一橋大学大学院言語社会研究科 連携教授

横山 詔一 (よこやま しょういち) 研究系教授

【学位】 博士 (心理学) (筑波大学, 1991)

【学歴】 横浜国立大学教育学部卒業 (1981), 筑波大学大学院博士課程心理学研究科修士号取得 (1983), 筑波大学大学院博士課程心理学研究科退学 (1985)

【職歴】 上越教育大学学校教育学部 助手 (1985), 国立国語研究所情報資料研究部・電子計算機システム開発研究室 研究員 (1991), 同 情報資料研究部 主任研究官 (1995), 独立行政法人国立国語研究所情報資料部門 領域長 (2001), 同 研究開発部門 グループ長 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 教授 (2009), 同 研究情報資料センター長 (2009–2013), 同 研究系 (言語変化研究領域) 教授 (2016)

【専門領域】 認知科学, 心理統計, 日本語学

【所属学会】 日本心理学会, 社会言語科学会, 計量国語学会, 日本語学会, 日本教育工学会, 行動計量学会

【学会等の役員・委員】 計量国語学会 理事, 日本語学会 編集委員

【受賞歴】

2019: 国立国語研究所第 18 回所長賞

2010: 社会言語科学会第 9 回徳川宗賢賞 (優秀賞)

2010: 国立国語研究所第 1 回所長賞

1997: 日本教育工学会第 11 回日本教育工学会論文賞

【2022 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」: メンバー
- ・共同利用型研究 (公募型) プロジェクト「方言音声と共通語音声の使い分けの変化に関する研究」: コーディネーター
- ・共同利用型研究 (公募型) プロジェクト「言語をめぐる社会調査史料の活用法に関する研究」: メンバー

【2022 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (C) 「難解な感染症関連用語の言い換えや説明の案出と理解促進効果の検証」, 21K00551: 研究代表者
- ・基盤研究 (B) 「AI 翻訳を用いた多言語運用能力の習得と言語学習環境の構築・言語教育の在り方の解明」, 21H00903: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

横山詔一, 相澤正夫, 久野雅樹, 高田智和, 前田忠彦

『日本人の読み書き能力』(1951)における非識字率の再検討—テストとしての問題点を中心に—, 『基礎教育保障学』, 6 巻, 11–28 頁, 2022.8.30, DOI: 10.32281/jasbel.6.0_11.

横山詔一, 石川慎一郎

「オープンサイエンス時代の言語系研究と教育: プレプリントの公開をめぐって」, 『東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻紀要』, 29 巻, 67–80 頁, 2022.12.20, DOI: 10.15083/0002005966.

横山詔一, 前田忠彦, 高田智和, 相澤正夫, 野山広, 福永由佳, 朝日祥之, 久野雅樹

「日本人の読み書き能力 1948 年調査における非識字率と生年の関係」, 『計量国語学』, 33 巻 8 号, 602–611 頁, 2023.3.20.

【講演・口頭発表】

横山詔一

「昨今の学術研究環境と Jxiv プレプリントの動向」, 第 241 回 NINJAL サロン, オンライン, 2022.6.21.

横山詔一, 相澤正夫, 久野雅樹, 前田忠彦

『日本人の読み書き能力』(1951)の非識字率に関する 4 つのナゾ」, 言語学フェス 2023, オンライン, 2023.1.30.

【一般向けの講演・セミナーなど】

横山詔一

「日本人の読み書き能力 1948 年調査のナゾに迫る」, 大学共同利用機関シンポジウム 2022, 名古屋市科学館, 2022.10.16.

【その他の学術的・社会的活動】

- 大学共同利用機関法人情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設: 運営会議委員
- 筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語・日本事情遠隔教育拠点事業: 運営委員
- 博報堂教育財団「児童教育実践についての研究助成」: 審査委員
- ニホンゴ探検: ことばのミニ講義「もじとココロ」, 講師, 国立国語研究所, 2022.8.1.

【大学院教育・若手研究者育成】

《大学院客員教授》

- 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻

朝日 祥之 (あさひ よしゆき) 研究系准教授

【学位】 博士 (文学) (大阪大学, 2004)

【学歴】 関西外国語大学外国語学部英米語学科卒業 (1997), エセックス大学大学院言語・言語学研究科社会言語学専攻修士課程修了 (1998), 大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻博士課程後期課程修了 (2004)

【職歴】 独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第二領域 研究員 (2004), 同 研究開発部門言語生活グループ 研究員 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (言語変異研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】 社会言語学, 言語学, 日本語学

【所属学会】 International Congress for Dialectologists and Geolinguists, METHODS, Foundation for Endangered Languages, 関西言語学会, 日本言語政策学会, 日本方言研究会, 日本語学会, 社会言語科学会, マイグレーション研究会

【学会等の役員・委員】 変異理論研究会 世話人, NWAV-AP Steering committee member, International Association of Urban Studies Scientific committee member, 北海道方言研究会 副会長, 社会言語科学会 理事・編集委員会委員長・徳川宗賢賞選考委員会委員

【受賞歴】

2022: 国立国語研究所第 25 回特別所長賞

2013: 国立国語研究所第 6 回所長賞

2010: 第 9 回徳川宗賢優秀賞 (社会言語科学会)

2010: 国立国語研究所第 1 回所長賞

【2022 年度に参画した共同研究】

- ・ 基幹型共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」: メンバー
- ・ 共創先導プロジェクト共創促進研究「コミュニケーション共生科学の創成」: メンバー
- ・ 共創先導プロジェクト共創促進研究「日本関連在外資料調査研究「ハワイにおける日系社会資料に関する資料調査と社会調査の融合的研究」」: 代表者

【2022 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・ 基盤研究 (C)「北海道北見市常呂町岐阜方言の尊敬語に見られる言語変容の研究」, 19K00639: 研究代表者
- ・ 基盤研究 (C)「地方議会会議録の発展的研究」, 22K00582: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

Yoshiyuki Asahi, Mayumi Usami, and Fumio Inoue (eds.)

Handbook of Japanese Sociolinguistics, De Gruyter Mouton, 2022.4.18, ISBN: 9781501507472.

《論文・ブックチャプター》

朝日祥之

「家庭の敬語」, 荻野綱男 (編)『敬語の事典』, 朝倉書院, 373-378 頁, 2022.9.1.

朝日祥之

「実験調査」, 荻野綱男 (編)『敬語の事典』, 朝倉書院, 507-518 頁, 2022.9.1.

朝日祥之

「ハワイ・アメリカ西海岸における日本人街の言語景観史の試み」, 『現代中国における言語政策と言語継承』, 7 卷, 103-123 頁, 2023.1.10.

朝日祥之

「50 年前の北見市常呂町岐阜方言に見られる特徴」, 『北海道方言研究会会報』99 卷, 8-15 頁, 2023.2.20.

横山詔一, 前田忠彦, 高田智和, 相澤正夫, 野山広, 福永由佳, 朝日祥之, 久野雅樹

「日本人の読み書き能力 1948 年調査における非識字率と生年の関係」, 『計量国語学』, 33 卷 8 号,

602-611 頁, 2023.3.20.

【講演・口頭発表】

朝日祥之

「頭発海外の日本人街の変容と言語景観」, ワークショップパネル(招待), 第11回日中国際ワークショップ「現代中国における言語政策と言語継承: 言語継承における言語景観の役割」, 大分大学, 2022.5.28.

Yoshiyuki Asahi

“Transnational movement, social network and language service: a Japanese perspectives”, 招待講演, JDZB symposium “Attractive for Immigrants? Migrants’ life satisfaction in host countries in comparison”, Japanese-German Center (Berlin・ドイツ), 2022.6.23-24.

Yoshiyuki Asahi, Cong Cong Huang, Mei Wu, Mutsumi Hoshikawa

“Multilingual service and local multilingualism in the linguistic landscape of Tokyo”, Sociolinguistics Symposium 24, オンライン (ベルギー), 2022.7.13-16.

Yoshiyuki Asahi

“Dialect contact, change and maintenance of Gifu dialect in Hokkaido”, Methods XVII, University of Mainz (ドイツ), 2022.8.4.

朝日祥之

「COVID-19によって社会言語学研究はどのように変わったのか COVID-19 Session」, シンポジウムセッションパネル(招待), IAULS19, オンライン (中国), 2022.8.26-29.

福永由佳, 鎌水兼貴, 高木千恵, 高橋朋子, 三井はるみ, 吉田さち, 朝日祥之

「日本の多言語多文化状況における言語問題に関するウェブ調査」報告」, 第243回 NINJAL サロン, オンライン, 2022.10.11.

Yoshiyuki Asahi

“Emergence of Multicultural Tokyo Japanese?: Possibilities and prospects”, 招待講演, CRLD Seminar, La Trobe University, La Trobe University (オーストラリア), 2022.11.25.

Yoshiyuki Asahi

“Creating new Japanese-related language varieties in and out of Japan”, 基調講演, Australia Linguistic Society 2022 Annual Conference, University of Melbourne (オーストラリア), 2022.11.30-12.2.

朝日祥之

「言語生活を見つめる調査研究」, シンポジウムパネル, NINJAL シンポジウム, オンライン, 2022.12.10.

Yoshiyuki Asahi

“Dialect contact and change of a transplanted Gifu dialect in Hokkaido”, NWAV-AP7, チュラロンコン大学 (タイ), 2022.12.15.

朝日祥之

「北見市常呂町岐阜方言に見られる世代差」, 北海道方言研究会第236回例会, 札幌市北区民センター, 2023.1.22.

朝日祥之

「言語問題プロジェクトの取り組み」, 国立国語研究所共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」共同研究発表会, オンライン, 2023.3.11-12.

朝日祥之, 黄叢叢, 星川睦

「自治体ウェブサイトによる多言語情報サービスの実態と課題」, 国立国語研究所共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」共同研究発表会, オンライン, 2023.3.11-12.

朝日祥之

「埋もれた声」を蘇生し、研究する: ニッケイ社会で形成・変容した日本語変種の場合」, シンポジウムパネル(招待), 第6回 HiSoPra*研究会, オンライン, 2023.3.21.

【研究調査】

- ・和歌山県串本町.
- ・アメリカ合衆国ハワイ州 (オアフ島・ハワイ島).

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・「「識字」から「社会的実践としてのよみかき」へ—中国・サハリン帰国者の事例から—」(主催: 福永由佳, 共催: 朝日祥之), 早稲田大学, 2023.3.12.

【一般向けの講演・セミナーなど】

朝日祥之

「日本語を知る・日本語を使う人を知る」, 新潟県立国際情報高等学校見学対応, 国立国語研究所, 2022.7.29.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

朝日祥之

「社会言語学入門—ことばのバリエーションを見つめる—」, 言語学レクチャーシリーズ, オンライン, 2023.1.31.

井上文子 (いのうえ ふみこ) 研究系准教授

【学位】 修士 (文学) (大阪大学, 1992)

【学歴】 高知女子大学文学部国文学科卒業 (1984), 大阪大学大学院文学研究科博士前期課程日本学専攻修了 (1992), 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程日本学専攻中退 (1994)

【職歴】 大阪大学文学部 助手 (1994), 国立国語研究所情報資料研究部第二研究室 研究員 (1995), 同 主任研究官 (1997), 独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第一領域 主任研究員 (2001), 同 情報資料部門資料整備グループ グループ長 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (言語変異研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】 方言学, 社会言語学

【所属学会】 日本方言研究会, 日本語学会, 社会言語科学会, 日本語文法学会

【受賞歴】

1993: 第11回新村出記念財団 研究助成

【2022年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」: メンバー

【2022年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・研究成果公開促進費 (データベース) 「日本の危機言語・方言データベース」, 22HP8004: 代表者
- ・基盤研究 (A) 「『全国方言文法辞典』データベースの拡充による日本語時空間変異対照研究の多角的展開」, 20H00015: 研究分担者

【研究業績】

《総説・解説など》

井上文子

『文化庁「各地方言収集緊急調査」方言談話資料について』, 国立国語研究所, 2023.3.27, <http://id.nii.ac.jp/1328/00003715/>.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

井上文子, 木部暢子, 山田真寛, 日高水穂, 佐藤久美子, 小原雄次郎, 上村健太郎

「データの全貌～総時間数およそ2,500時間(うち公開データ80時間)の方言談話データのゆくえ～」, 「データ整備の流れ～COJADS公開データができるまで～」, 「データ共有のしくみ～100年後の方言研究のために～」, 「データ整備・データ利用講習会」, 「みんなで談話整備プロジェクト」説明会 & 講習会, オンライン, 2022.7.16.

柏野 和佳子 (かしの わかこ) 研究系准教授

【学位】 博士 (学術) (東京工業大学, 2016)

【学歴】 東京女子大学文理学部日本文学科卒業 (1991), 東京工業大学大学院総合理工学研究科博士後期課程単位取得満期退学 (2015)

【職歴】 富士通株式会社システムエンジニア (1991-1998), 情報処理振興事業協会 (IPA) 技術センター 研究員 (1991-1997), 国立国語研究所言語体系研究部第二研究室 研究員 (1998), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員 (2001), 同 言語資源グループ 主任研究員 (2009), 人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (音声言語研究領域) 准教授 (2017)

【専門領域】 日本語学

【所属学会】 計量国語学会, 言語処理学会, 情報処理学会, 人工知能学会, 日本語学会, 日本言語学会

【学会等の役員・委員】 情報処理学会情報規格調査会 学会試行標準 WG3 小委員会主査・学会試行標準専門委員会委員長・学会試行標準 WG9 小委員会委員, 日本特許情報機構 産業日本語研究世話人, 語彙・辞書研究会 運営委員, 言語処理学会 編集委員, 計量国語学会 理事, 公益社団法人日本看護協会 看護に関わる用語の検討委員会委員

【受賞歴】

2022: Best Paper Award and Best Student Award Runner-up For ICADL 2022 (共著)

2022: NLP2022 言語資源賞 (共著) (言語処理学会・言語資源協会 (GSK))

2007: 2006 年度研究会優秀賞 (人工知能学会)

2006: 第 12 回年次大会優秀発表賞 (共著) (言語処理学会)

1996: 第 51 回全国大会奨励賞 (情報処理学会)

【2022 年度に参画した共同研究】

- ・ 基幹型共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」: サブプロジェクトリーダー (「学習者辞書用語彙資源の構築」), メンバー (サブプロジェクト「学習者の辞書資源使用の実態調査」)
- ・ 基幹型共同研究プロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」: メンバー
- ・ 異分野融合型共同利用型研究プロジェクト「テキスト読み上げのための読みの曖昧性の分類と読み推定タスクのデータセットの構築」: コーディネーター

【2022 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・ 基盤研究 (C)「コーパス分析による書き言葉的「硬・軟」度と話し言葉的「硬・軟」度の語への付与」, 20K00655: 研究代表者
- ・ 基盤研究 (B)「ソーシャルメディアにおける市民意見を活用した都市サービスの評価の自動生成」, 19H04420: 研究分担者
- ・ 挑戦的研究 (萌芽)「スマホ画面録画機能を用いた日本語学習者の語彙検索行動の解明」, 21K18375: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

柏野和佳子

「言語研究の成果を発信するさまざまな国語辞典」, 『文学・語学』, 234 巻, 153-161 頁, 2022.4, DOI: 10.34492/bungakugogaku.234.0_153.

《コーパス・データベース類》

柏野和佳子, 大村舞

「CEJC 短単位語彙表と語数表_ver202209」, <https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc/cejc/cejc-wc.html>, 2022.9.

柏野和佳子

「IPAL PowerBI レポート」, <https://www2.ninjal.ac.jp/dictionaries/publication.html>, 2023.3.23.

柏野和佳子

「IPAL html 版」, <https://www2.ninjal.ac.jp/dictionaries/publication.html>, 2023.3.23.

《その他の出版物・記事》

柏野和佳子

「言葉の使い方が気になった時には「コーパス」」, 『人文知 NEWS LETTR』, 2022.11.

柏野和佳子

「コーヒー豆が「集まる」……辞書では?」, 『毎日ことばプラス』, 2023.2.

【講演・口頭発表】

Senoo Ko, Seki Yohei, Kashino Wakako, Kando Noriko

“Visualization of the Gap Between the Stances of Citizens and City Councilors on Political Issues”, Best Paper Award and Best Student Award Runner-up For ICADL 2022, 24th International Conference on Asia-Pacific Digital Libraries (ICADL 2022), オンライン (ハノイ・ベトナム), 2022.11.30–12.2.

柏野和佳子

「語への位相情報の付与の検討」, 「学習者辞書用語彙資源の構築」共同研究発表会, オンライン, 2023.1.8.

柏野和佳子

「CEJC 語彙表と中納言横断検索方法の紹介」, 多世代会話コーパスプロジェクト第7回ショートトーク, オンライン, 2023.1.17.

柏野和佳子

「書き言葉的「硬・軟」度と話し言葉的「硬・軟」度の検討」, シンポジウム「日常会話コーパス」VIII, オンライン, 2023.3.3.

新納浩幸, 白井清昭, 古宮嘉那子, 柏野和佳子

「テキスト読み上げのための読みの曖昧性の分類と読み推定タスクのデータセットの構築」, 言語処理学会第29回年次大会併設ワークショップ JLR2023, 沖縄コンベンションセンター, 2023.3.17.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・「中納言」講習会【初中級編】(主催: 多世代コーパスプロジェクト・学習者辞書プロジェクト), オンライン, 2022.11.5.
- ・「学習者辞書用語彙資源の構築」共同研究発表会(主催: 学習者辞書プロジェクト), オンライン, 2023.1.8.

【一般向けの講演・セミナーなど】

柏野和佳子

「日本語はこんなに面白い!」, 幻冬舎大学, 3×3 Lab Future, 2022.11.8.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・国立国語研究所研究情報誌『ことばの波止場』vol.12: 編集部会長, 2023.3.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

山崎誠, 柏野和佳子

「「中納言」講習(BCCWJ編)」, 「中納言」講習会【初中級編】」, オンライン, 2022.7.28.

柏野和佳子, 小磯花絵

「「中納言」講習(CEJC編)」, 「中納言」講習会【初中級編】」, オンライン, 2022.11.5.

窪田 悠介 (くぼた ゆうすけ) 研究系准教授

【学位】 Ph.D. (Linguistics) (オハイオ州立大学, 2010)

【学歴】 東京大学教養学部超域文化科学科言語情報科学分科卒業 (2002), 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻修士課程修了 (2004)

【職歴】 日本学術振興会特別研究員(PD)(2010–2013), 日本学術振興会特別研究員(海外特別研究員)(2013–15), 筑波大学人文社会系 助教 (2014–19), 人間文化研究機構国立国語研究所(理論・対照領域)准教授 (2019)

【専門領域】 理論言語学(統語論, 意味論), 計算言語学

【所属学会】 日本言語学会, 日本英語学会, 日本語文法学会, 言語処理学会, Linguistic Society of America

【学会等の役員・委員】 日本言語学会 評議員, 『自然言語処理』編集委員, 言語処理学会 代議員, Associate Editor (*Journal of Logic, Language and Information*), 日本語文法学会 大会委員

【受賞歴】

2016: 日本言語学会第 151 回大会発表賞

【2022 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・ 基盤研究 (C) 「ハイブリッド CG パーザの開発」, 21K00541: 研究代表者
- ・ 基盤研究 (B) 「日英語の省略構造の統合的解明に基づく理論横断的オープンアクセスデータベースの創生」, 21H00532: 研究分担者
- ・ 挑戦的研究 (萌芽) 「再現性を担保した容認性判断のアーカイブの開発」, 21K18367: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

窪田悠介

「新著紹介: 三好伸芳『述語と名詞句の相互関係から見た日本語連体修飾構造』(ひつじ書房, 2021 年 3 月刊)、『実践国文学』, 102 号, 58–61 頁, 2022.10.

Yusuke Kubota and Robert Levine

“Embedded-complement and discontinuous pseudogapping in Hybrid Type-Logical Grammar: A rejoinder to Kim and Runner (2022)”, *The Linguistic Review*, 39 (4), pp. 743–753, 2022.11.11, DOI: 10.1515/tlr-2022-2103.

窪田悠介, 林則序, 天本貴之, 峯島宏次

「比較文の意味解析のための「深い」係り受け関係の解析」, 『言語処理学会第 29 回年次大会予稿集』, 2962–2967 頁, 2023.3.

【講演・口頭発表】

三好伸芳, 窪田悠介

「直喩表現の解釈に見られる前提性」, 日本言語学会第 164 回大会, オンライン, 2022.6.18.

Yusuke Kubota and Robert Levine

“Lexical idiosyncrasies: constructions or inferences?: A case study on English auxiliaries”, HPSG 2022, オンライン, 2022.7.30.

Yusuke Kubota and Robert Levine

“Extraction pathway marking as proof structure marking”, LENLS 2022, 東京, 2022.11.20.

Naho Orita, Koyo Akuzawa, and Yusuke Kubota

“Inferring attitude verbs using sentence-final expressions”, ポスター発表, Human Sentence Processing 2023, ハイブリッド (米国), 2023.3.10.

Yusuke Kubota

“Toward ‘parasitic scope’ parsing: A case study on comparatives in Japanese”, 基調講演, Japanese/Korean Linguistics 30, バンクーバー (カナダ), 2023.3.13.

窪田悠介, 林則序, 天本貴之, 峯島宏次

「比較文の意味解析のための「深い」係り受け関係の解析」, 言語処理学会第 29 回年次大会, 沖縄・宜野湾市, 2023.3.16.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- 29th International Conference on Head-Driven Phrase Structure Grammar (主催: Nagoya University, NINJAL), オンライン, 2022.7.29–31.
- 深層学習時代の計算言語学 (主催: 言語処理学会, 共催: 国立国語研究所), 沖縄・宜野湾市, 2023.3.17.

中川 奈津子 (なかがわ なつこ) 研究系准教授

【学位】 博士 (人間・環境学)

【学歴】 同志社大学文学部文化学科国文学専攻学部卒業 (2005), 京都大学大学院人間・環境学研究科共生人間学専攻言語情報科学講座修士課程修了 (2007), 京都大学大学院人間・環境学研究科共生人間学専攻言語情報科学講座博士課程単位認定退学 (2013), ニューヨーク州立大学バッファロー校言語学科博士課程修了 (2013)

【職歴】 State University of New York at Buffalo Part-time lecturer (2010–2012), 京都大学大学院人間・環境学研究科共生人間学専攻言語情報科学講座研修員 (2013–2015), 同志社大学文学部英文学科 嘱託講師 (2014–2015), 同志社大学全学共通教養教育センター 嘱託講師 (2014–2015), 同志社大学グローバル・コミュニケーション学部 嘱託講師 (2014–2015), 京都大学国際高等教育院 非常勤講師 (2014–2015), 日本学術振興会・千葉大学融合科学研究科特別研究員 (PD) (2015–2017), 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 共同研究員 (2015–2017), 国立国語研究所 共同研究員 (2016–2019), 青森公立大学 非常勤講師 (2017–2019), 千葉大学人文科学研究院 特任研究員 (2018–2019), 国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員 (2019), 国立国語研究所 特任助教 (2019), 同 研究系准教授 (2022)

【専門領域】 コーパス言語学, 方言学

【所属学会】 日本言語学会, 日本語学会, 琉球諸語記述研究会

【学会等の役員・委員】 日本言語学会 広報委員, 日本語学会 大会企画運営委員, TEI Consortium, East Asian/Japanese SIG, Steering committee member (TEI 協会東アジア/日本語分科会 運営委員)

【受賞歴】

2019: 日本語学会春季大会発表賞 (発表題目: 「琉球八重山白保方言のアクセント体系は三型であって, 二型ではない」)

【2022 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト 「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」: メンバー
- ・共創先導プロジェクト共創促進研究 「学術知デジタルライブラリの構築 (国語研拠点)」: メンバー
- ・国立国語研究所共同研究プロジェクト 「言語資源の高度化・発信力強化による言語資源学の創成」: メンバー

【2022 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・新学術領域研究 (研究領域提案型) 公募研究 「日琉語族の語順の変異とその相関変数の解明」, 21H00352: 研究代表者
- ・挑戦的研究 (萌芽) 「フィールドデータのアーカイブに向けた問題点の整理と解決策」, 21K18376: 研究代表者
- ・基盤研究 (A) 「日本語諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓」, 21H04351: 研究分担者
- ・東京外国語大学共同利用・共同研究課題 「ナラティブをめぐる形態統語論」, jrp000276: 共同研究員

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Natsuko Nakagawa

“Nambu (Aomori, Eastern Japanese)”, Michinori Shimoji (ed.) *Grammatical Sketches of Japanese Dialects and Ryukyuan Languages*, pp. 39–188, Brill, 2022.10, DOI: 10.1163/9789004519107_008.

《コーパス・データベース類》

加治工真市, 中川奈津子, 加藤幹治

「鳩間方言 音声例文データベース」, DOI: 10.15084/00003659, 2022.10.

《展示など》

- ・「みる・よむ・きく・えがく 4つの島のことばの絵本展」, ジュンク堂書店那覇店, 2022.7.11–8.10.

- ・「方言版異言語脱出ゲーム「紡がれるもの～おじいとおばあとの物語～」」, 国立民族博物館, 2022.9.10.

【講演・口頭発表】

中川奈津子, 林由華

「日本語における対比のハは焦点ではなく主題である」, 日本言語学会第164回大会, オンライン, 2022.6.18–19.

中川奈津子

「琉球諸語の言語調査データのアーカイビング」, セッションパネル, 第7回デジタルアーカイブ学会研究大会サテライトセッション琉球文化のテキストアーカイビング, オンライン, 2022.11.23.

Natsuko Nakagawa and Masataka Ogawa

“Nominal marking and word order in varieties of the Japonic family”, ポスター発表, The 14th International Conference of the Association for Linguistic Typology, Online & the University of Texas at Austin (米国), 2022.12.15–17.

Natsuko Nakagawa, Jun Ogawa, Ikki Ohmukai, and Akihiro Kameda

“Metadata of linguistics field research in RDF”, International Conference on Language Documentation and Conservation 2023, オンライン, 2023.3.2–5.

Natsuko Nakagawa and Toshinobu Ogiso

“The network of lexical resources in Japanese”, 基調講演, Tools of the Trade Conference, Harvard University (米国), 2023.3.14–16.

Natsuko Nakagawa

“Digital dictionaries in Ryukyuan”, シンポジウムパネル, Tools of the Trade Conference, Harvard University (米国), 2023.3.14–16.

新野 直哉 (にいの なおや) 研究系准教授

【学位】 博士 (文学) (東北大学, 2010)

【学歴】 東北大学文学部文学科卒業 (1984), 東北大学大学院文学研究科博士課程前期 2 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻修了 (1986), 東北大学大学院文学研究科博士課程後期 3 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻中退 (1988)

【職歴】 宮崎大学教育学部 助手 (1988), 同 講師 (1989), 同 助教授 (1992), 国立国語研究所情報資料研究部 主任研究官 (1996), 独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第一領域 主任研究員 (2001), 同 文献情報グループ 主任研究員 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 助教 (2009), 同 准教授 (2011), 同 研究系 (言語変化研究領域) 准教授 (2016), 同 研究系准教授 (2022)

【専門領域】 言語学, 日本語学

【所属学会】 日本近代語研究会, 表現学会, 日本語学会

【学会等の役員・委員】 日本近代語研究会 運営委員

【受賞歴】

2020: 国立国語研究所第 20 回所長賞

2011: 国立国語研究所第 2 回所長賞

【2022 年度に参画した共同研究】

- ・ 基幹型共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」: メンバー

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

新野直哉

「大正 14 年『読売新聞』記事に見る方言関連の言語意識」, 『近代語研究』, 23 号, 167-184 頁, 2022.9.5.

新野直哉

「気づかない意味変化」の一例“すでにして”について」, 『言語文化研究』, 22 号, 27-41 頁, 2023.3.14.

新野直哉

「大正 14 年『読売新聞』記事に見る言語意識—待遇表現・「カタカナ語」・子どもの命名・「間違い言葉」—」, 『国語語彙史の研究』, 42 号, 117-134 頁, 2023.3.31.

《その他の出版物・記事》

新野直哉

「3 密を守ろう」とは?」, 『日本語学』, 41 巻 3 号, 132-133 頁, 2022.9.10.

【講演・口頭発表】

新野直哉

「現代の新語について」, 特別講演 (招待), 2022 年度福島大学国語教育文化学会後期学会, 福島大学, 2022.12.3.

新野直哉

「気づかない意味変化」の一例“すでにして”について—「すでにして研究発表が始まった」とは?—」, 第 398 回日本近代語研究会, オンライン, 2022.12.10.

【一般向けの講演・セミナーなど】

新野直哉

「昭和 20 年代前半期の言語生活・言語意識—『文藝春秋』言語記事から—」, 国立国語研究所オープンハウス 2022, オンライン, 2022.9.9.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 取材協力: 「グッド! モーニング」, テレビ朝日, 2018.4.-

【大学院教育・若手研究者育成】

《大学院非常勤講師》

・ 目白大学大学院

野山 広 (のやま ひろし) 研究系准教授

【学位】 修士（文学）（早稲田大学，1988），修士（日本語応用言語学）（モナシュ大学，1995），修士（教育学）（早稲田大学，1996）

【学歴】 早稲田大学卒業（1985），早稲田大学大学院文学研究科教育学専攻修士課程修了（1988），豪州モナシュ大学大学院日本研究科日本語応用言語学専攻修了（1995），早稲田大学大学院教育学研究科国語教育専攻修士課程修了（1996），早稲田大学大学院文学研究科日本語・日本文化専攻博士後期課程単位取得退学（2001）

【職歴】 文化庁文化教育部国語課 専門職員（日本語教育調査官）（1997），独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第二領域 主任研究員（2004），同 領域長（2005），同 整備普及グループ長（2006），人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 上級研究員（2009），同 准教授（2010），同 研究系（日本語教育研究領域）准教授（2016）

【専門領域】 応用言語学，日本語教育学，基礎教育保障学，社会言語学，多文化・異文化間教育，言語政策・計画研究

【所属学会】 日本語教育学会，基礎教育保障学会，異文化間教育学会，移民政策学会，社会言語科学会，ヨーロッパ日本語教師会

【学会等の役員・委員】 基礎教育保障学会 理事（常任理事・副会長・研究委員会委員長（-2022.8）），異文化間教育学会 理事，多文化社会専門職機構 理事（代表理事（-2022.6）），日本語プロフィシエンシー研究学会 監事，港区国際化推進アドバイザー会議 委員長（座長）

【2022 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」：サブプロジェクトリーダー（「定住外国人の談話の縦断研究（生活者談話）」）
- ・基幹型共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」：メンバー

【研究業績】

《著書・編書》

野山広（分担執筆）

『日本語プロフィシエンシー研究の広がり』，鎌田修（監修），鎌田修，由井紀久子，池田隆介（編），ひつじ書房，2022.10.3，ISBN：9784823411373.

野山広，福島育子，帆足哲也，山田泉，横山文夫（編著）

『地域での日本語活動を考える—多文化社会 葛飾からの発信』，ココ出版，2022.10.25，ISBN：9784866760599.

《論文・ブックチャプター》

野山広

「基礎教育を保障する社会の基盤となる日本語リテラシー調査の意義と留意点—「特定課題研究」シンポジウムより—」（【特集】「リテラシー調査の意義と課題」について），『基礎教育保障学研究』，6号，3-10頁，2022.9.1.

野山広

「移民定住者とプロフィシエンシー—日本語の習得、摩滅、喪失の過程とライフを視野に入れつつ」，鎌田修（監修），鎌田修，由井紀久子，池田隆介（編）『日本語プロフィシエンシー研究の広がり』，ひつじ書房，47-60頁，2022.10.3.

野山広

「基礎教育の保障と第一言語／第二言語としての日本語教育の重要性」，野山広，福島育子，帆足哲也，山田泉，横山文夫（編）『地域での日本語活動を考える—多文化社会 葛飾からの発信』，ココ出版，211-229頁，2022.10.25.

横山詔一, 前田忠彦, 高田智和, 相澤正夫, 野山広, 福永由佳, 朝日祥之, 久野雅樹

「日本人の読み書き能力 1948 年調査における非識字率と生年の関係」, 『計量国語学』, 33 巻 8 号, 602-611 頁, 2023.3.20.

【講演・口頭発表】

野山広

「日本語リテラシーに関するパイロット調査の結果報告(暫定版)～岡山自主夜間中学の場合～」, 特別講演(招待), 自主夜間中学全国研究会, 岡山自主夜間中学, 2022.8.27.

太田裕子, 大谷杏, 今井貴代子, 野山広

『『日本語教育推進法』(2019 年施行)における言語学習支援の評価と課題—オーストラリア、フィンランド、日本の取り組みをふまえて—」, 研究大会・課題研究(パネル)・コメンテーター, 日本国際教育学会, オンライン, 2022.10.29.

野山広

「生活者の談話等に関する縦断的研究～定住外国人の高齢化、言語摩滅の過程に注目しながら～」, ポスター発表, NINJAL シンポジウム 2022, オンライン, 2022.12.10.

野山広

「日本語リテラシーに関するパイロット調査の結果報告～香川県三豊市高瀬中学夜間学級の場合～」, 特別講演(招待), 三豊市市立高瀬中学夜間学級報告会, 三豊市立高瀬中学夜間学級, 2022.12.21.

【研究調査】

- OPI (Oral Proficiency Interview) の枠組みを活用した, 日本語学習者の会話力, 言語生活等に関する縦断調査のフォローアップ調査(主に現在の状況確認)等(秋田県能代市), 2022.3-.
- 日本語リテラシーに関するパイロット調査(自主夜間中学), 2022.7.
- 日本語リテラシーに関するパイロット調査(公立夜間中学), 2022.12.

【一般向けの講演・セミナーなど】

野山広

「外国につながる子どもの状況～多文化共生の視点から」, 日本語ボランティア入門講座(西東京市), オンライン, 2022.6.23.

野山広

「定住外国人の日本語使用と談話に関する縦断的研究～学習者の高齢化、言語摩滅の過程に注目しつつ～」, NINJAL オープンハウス 2022, オンライン, 2022.8.17.

野山広

「リテラシー(識字)調査の実施に向けて～1948 年の調査結果概要を踏まえつつ～」, 野山広・福島育子・帆足哲也・山田泉・横山文夫編(2022)『地域での日本語活動を考える—多文化社会 葛飾からの発信』(ココ出版)出版記念フォーラム, 葛飾区施設「にこわ」活動室, 2022.11.19.

福永 由佳 (ふくなが ゆか) 研究系准教授

【学位】 博士 (日本語教育) (早稲田大学, 2019)

【学歴】 金沢女子大学文学部英米文学科卒業 (1991), ウィスコンシン大学東アジア語学文学学科修士課程修了 (1993), 早稲田大学大学院日本語教育研究科博士後期課程研究指導終了により退学 (2018)

【職歴】 国立国語研究所日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室 研究員 (1998), 独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第一領域 研究員 (2001), 同 日本語教育基盤情報センター学習項目グループ 研究員 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 研究員 (2009), 研究系 (日本語教育研究領域) 研究員 (2016), 研究系 (日本語教育研究領域) 准教授 (2021)

【専門領域】 日本語教育学, 社会言語学, 多言語使用, 識字, 移民に対する言語教育政策

【所属学会】 日本語教育学会, 社会言語科学会, 日本言語政策学会, 言語管理研究会

【学会等の役員・委員】 日本語教育学会 学会誌委員・第6回代議員選挙関東ブロック運営委員, 日本言語政策学会 理事

【受賞歴】

2021: 第22回国立国語研究所所長賞

【2022年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」: サブプロジェクトリーダー (「定住外国人のよみかき研究 (生活者識字)」)
- ・基幹型共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」: サブリーダー
- ・共同利用型研究 (A)「言語をめぐる社会調査史料の活用法に関する研究」: コーディネーター・メンバー
- ・共創先導プロジェクト共創促進研究「コミュニケーション共生科学の創成」: メンバー

【2022年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (C)「言語レパートリーの構造と形成に関する研究」, 20K00623: 研究代表者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

横山詔一, 前田忠彦, 高田智和, 相澤正夫, 野山広, 福永由佳, 朝日祥之, 久野雅樹

「日本人の読み書き能力 1948 年調査における非識字率と生年の関係」, 『計量国語学』, 33 巻 8 号, 602-611 頁, 2023.3.20.

《総説・解説など》

横山詔一, 前田忠彦, 高田智和, 相澤正夫, 野山広, 福永由佳, 朝日祥之, 久野雅樹

(プレプリント)「日本人の読み書き能力 1948 年調査における非識字率と生年の関係」, 『Jxiv』, 2022.5.18, DOI: 10.51094/jxiv.73.

福永由佳

「書評論文 吹原豊著『移住労働者の日本語習得は進むのか—茨城県大洗町のインドネシア人コミュニティにおける調査から—』」, 『第二言語としての日本語習得研究』, 25 号, 20-37 頁, 2022.12.1.

【講演・口頭発表】

福永由佳, 樋水兼貴, 高木千恵, 高橋朋子, 三井はるみ, 吉田さち, 朝日祥之

「日本の多言語多文化状況における言語問題に関するウェブ調査」報告, 第 243 回 NINJAL サロン, オンライン, 2022.10.11.

高木千恵, 福永由佳, 高橋朋子, 三井はるみ, 樋水兼貴, 吉田さち

「大学生の受動的な言語接触—「見せる調査」「聞かせる調査」の結果から—」, 多言語化現象研究会 第 81 回研究会, オンライン, 2023.1.8.

高木千恵, 福永由佳, 三井はるみ, 吉田さち, 樋水兼貴, 高橋朋子

「場面別にみる大学生の多言語環境: ウェブアンケート調査から」, 多言語社会と言語問題シンポジウム 2022-2023, 千葉大学, 2023.3.26.

【研究調査】

- ・外国人動向・日本語学習支援についての情報収集 (茨城県国際交流協会), 2022.8.
- ・外国人動向・日本語学習支援についての情報収集 (京都府国際センター), 2022.9.
- ・外国人動向・日本語学習支援についての情報収集 (国際プラザ (札幌市)), 2022.12.
- ・外国人動向・日本語学習支援についての情報収集および予備調査実施 (北海道倶知安町・ニセコ町), 2023.2.
- ・「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」との連携による地域に在住する外国人の言語問題に関して, 自治体の外国人相談員に聞き取り, 2023.2.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・国立国語研究所共同研究プロジェクト「定住外国人のよみかき研究」シンポジウム「「識字」から「社会的実践としてのよみかき」へー中国・サハリン帰国者の事例からー」(主催: 福永由佳, 共催: 朝日祥之), 早稲田大学, 2023.3.12.
- ・研究集会「言語をめぐる社会調査史料の活用」(主催: 共同利用型共同研究 (A)「言語をめぐる社会調査史料の活用法に関する研究」, 共催: 情報・システム研究機構 データサイエンス共同利用基盤施設 公募型共同研究 024RP2022「戦後初期の社会言語学的調査の多角的な検討」), オンライン, 2023.3.14.

【一般向けの講演・セミナーなど】

福永由佳

「文字社会日本の「よみかき」再考」, 国立国語研究所オープンハウス 2022, オンライン, 2022.9.9.

福永由佳

「定住外国人のよみかき研究: 識字から字をよみかきする社会的実践へ」, NINJAL シンポジウム「言語資源学の創成: 開かれた言語資源による日本語研究」, オンライン, 2022.12.10.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・査読協力: 『日本語教育』, 『社会言語科学』, 『国立国語研究所論集』
- ・招待講演: 「Project-based Learning の歴史と日本語教育における実践」, ジャカルタ国立大学言語芸術学部日本語教育学科主催会話授業研修会, オンライン, 2022.5.26.

【大学院教育・若手研究者育成】

《連携大学院》

- ・一橋大学大学院言語社会研究科「日本語学講義 A」(2022 年度秋冬学期)

《若手研究者の受入》

- ・生活者識字班のプロジェクト非常勤研究員: 1 名 (博士後期課程在籍者)
- ・生活者識字班の予備調査に参画: 2 名 (博士後期課程在籍者)

山口 昌也 (やまぐち まさや) 研究系准教授

【学位】 博士 (工学) (東京農工大学, 1998)

【学歴】 東京農工大学工学部数理情報工学科卒業 (1992), 東京農工大学大学院工学研究科博士前期課程電子情報工学専攻修了 (1994), 東京農工大学大学院工学研究科博士後期課程電子情報工学専攻修了 (1998)

【職歴】 東京農工大学工学部 助手 (1998), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員 (2001), 同 言語資源グループ 研究員 (2006), 同 主任研究員 (2008), 人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 助教 (2009), 同 准教授 (2011), 同 研究系 (音声言語研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】 情報学, 知能情報学, 科学教育・教育工学, 言語学, 日本語学

【所属学会】 日本教育工学会, 日本語学会, 言語処理学会, 情報処理学会

【受賞歴】

2007: 財団法人博報児童教育振興会第1回博報「ことばと教育」研究助成「優秀賞」

【2022年度に参画した共同研究】

- ・ 基幹型共同研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」: サブプロジェクトリーダー (「日本語学習者の作文教育支援研究」), メンバー (サブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」)
- ・ 基幹型共同研究プロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」: メンバー

【2022年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・ 基盤研究 (C) 「多段階の振り返りに対応した協同型教育活動支援システムに関する研究」, 20K03116: 研究代表者
- ・ 基盤研究 (A) 「海外縦断作文コーパスの構築に基づく文章産出能力の発達過程の実証的研究」, 21H04417: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

山口昌也

「多様な形式の言語資料のテキストデータベース化の試行—全文検索システム『ひまわり』用XMLデータの構築—」, 『東京外国語大学国際日本学研究』, 3巻, 1-14頁, 2023.3.31, DOI: 10.15026/124934.

《コーパス・データベース類》

山口昌也

「全文検索システム『ひまわり』用『青空文庫』パッケージ」(2回更新), <https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?aozora>, 2022.10.01.

山口昌也

「観察支援ツール FishWatchr (ver.1.0, ver.1.1a20220527-1.1a20220624)」, <https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?fw>, 2022.10.08.

山口昌也

「観察支援ツール FishWatchr Mini (ver.2.1)」, <https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?fwm>, 2023.1.7.

山口昌也

「全文検索システム『ひまわり』 ver.1.7.2, 1.7.3」, <https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?himawari>, 2023.1.22.

山口昌也

『日本語学習者作文コーパス』⇒『ひまわり』用データへの変換ツール」, <https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?JLCC>, 2023.1.31.

山口昌也

「小中高大生による日本語絵描写ストーリーライティングコーパス (JASWRIC) ⇒『ひまわり』用デー

タへの変換ツール」, <https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?JASWRIC>, 2023.3.15.

山口昌也

「全文検索システム『ひまわり』用『名大会話コーパス』パッケージ」(更新, パッケージの作成担当), <https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?meidai>, 2023.3.24.

胡芸群, 山口昌也

「全文検索システム『ひまわり』用チュートリアルビデオ」(改訂2本, 新規3本の合計5本をYouTubeで公開), https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?vt_himawari, 2023.3.29.

山口昌也

「全文検索システム『ひまわり』用 CEJC パッケージ」(更新, 関係者限定公開), 2023.3.31.

【講演・口頭発表】

山口昌也, 北村雅則, 森篤嗣, 柳田直美

「協同型作文教育支援システムの設計」, 日本教育工学会 2023 年春季全国大会, 東京学芸大学, 2023.3.25.

北村雅則, 山口昌也

「プレゼンテーションの相互評価に見られるアノテーション集中箇所に関する分析」, 日本教育工学会 2023 年春季全国大会, 東京学芸大学, 2023.3.26.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

山口昌也

「既存の作文コーパスを『ひまわり』で活用する」, 「全文検索システム『ひまわり』講習会—作文コーパスの活用」, 国立国語研究所, 2023.2.27.

山口昌也

「全文検索システム「ひまわり」で日常会話コーパスを使う」, 第46回 NINJAL チュートリアル「『日本語日常会話コーパス』活用入門」, オンライン, 2023.3.29.

山田 真寛 (やまだ まさひろ) 研究系准教授

【学位】 Ph.D. (言語学) (デラウェア大学, 2010)

【学歴】 国際基督教大学教養学部語学科卒業 (2005), 米国デラウェア大学大学院言語学・認知科学研究科博士課程修了 (2010)

【職歴】 日本学術振興会特別研究員 (PD)/ 京都大学 (2010), 広島大学教育学研究科言語と認知の脳科学プロジェクトセンター ポスドク研究員 (2013), 京都大学学際融合教育研究推進センターアジア研究教育ユニット 特定助教 (2014), 立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員 (2016), 人間文化研究機構国立国語研究所 IR 推進室 特任助教 (2016), 同 研究系 (言語変異研究領域) 准教授 (2018)

【専門領域】 言語学, 形式意味論, 言語復興

【受賞歴】

2023: ダイキンオーキッドバウンティ (言語復興の港)

2019: 日本音声学会学術研究奨励賞 (小川晋史, 山田真寛, 林由華)

2014: 京都大学学際研究着想コンテスト奨励賞

【2022 年度に参画した共同研究】

- ・ 基幹型共同研究プロジェクト 「消滅危機言語の保存研究」: リーダー

【2022 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・ 基盤研究 (B) 「琉球沖永良部語を中心とした地域言語コミュニティ参加型の消滅危機言語復興研究」, 20H01266: 研究代表者

【研究業績】

《著書・編書》

山田真寛, 森澤ケン

『与那国の人とことば 2021 年』, 言語復興の港, 2023.3.31.

《展示など》

- ・ 「みる・よむ・きく・えがく 4 つの島のことばの絵本展」, ジュンク堂書店那覇店, 2022.7.11–8.10.
- ・ 「言語復興の港 4 つの島のことばの絵本展」, 危機言語サミット, 2023.1.28–29.

《その他の出版物・記事》

山田真寛

「しまむにのしづく 第 4 回: 中央公民館講座「しまむにサロン」」, 『広報ちな』, 621 巻 2022 年 4 月号, 11 頁, 2022.4.10, <http://www.town.china.lg.jp/kikakushinkou/kurasu/chosejoho/koho-kocho/kohochina/2021/kouhou2022.html>.

山田真寛

「しまむにのしづく 第 5 回: えらぶわ しじゃ でいろ」, 『広報ちな』, 622 巻 2022 年 5 月号, 11 頁, 2022.5.10, <http://www.town.china.lg.jp/kikakushinkou/kurasu/chosejoho/koho-kocho/kohochina/2021/kouhou2022.html>.

山田真寛

「しまむにのしづく 第 6 回: あーみちやぬ じゃがいも」, 『広報ちな』, 623 巻 2022 年 6 月号, 7 頁, 2022.6.10, <http://www.town.china.lg.jp/kikakushinkou/kurasu/chosejoho/koho-kocho/kohochina/2021/kouhou2022.html>.

山田真寛

「しまむにのしづく 第 7 回: をうがみどうーさ」, 『広報ちな』, 624 巻 2022 年 7 月号, 8 頁, 2022.7.10, <http://www.town.china.lg.jp/kikakushinkou/kurasu/chosejoho/koho-kocho/kohochina/2021/kouhou2022.html>.

山田真寛

「しまむにのしづく 第 8 回: 絵本展覧会」, 『広報ちな』, 625 巻 2022 年 8 月号, 7 頁, 2022.8.10,

<http://www.town.china.lg.jp/kikakushinkou/kurasu/chosejoho/koho-kocho/kohochina/2021/kouhou2022.html>.

山田真寛

「しまむにのしずく第10回: 添削 しーくりてい みへでいろどー」, 『広報ちな』, 627巻 2022年10月号, 7頁, 2022.10.10, <http://www.town.china.lg.jp/kikakushinkou/kurasu/chosejoho/koho-kocho/kohochina/2021/kouhou2022.html>.

山田真寛

「しまむにのしずく第11回: くわー そーていしまち いじゃんどー」 『広報ちな』628巻 2022年11月号, 6頁, 2022.11.10, <http://www.town.china.lg.jp/kikakushinkou/kurasu/chosejoho/koho-kocho/kohochina/2021/kouhou2022.html>.

山田真寛

「しまむにのしずく第12回: 危機言語サミットぬ準備しんぎやまたえらぶち」, 『広報ちな』, 629巻 2022年12月号, 12頁, 2022.12.10, <http://www.town.china.lg.jp/kikakushinkou/kurasu/chosejoho/koho-kocho/kohochina/2021/kouhou2022.html>.

山田真寛

「しまむにのしずく第13回: 危機言語サミット」, 『広報ちな』, 630巻 2023年1月号, 7頁, 2023.1.10, <http://www.town.china.lg.jp/kikakushinkou/kurasu/chosejoho/koho-kocho/kohochina/2021/kouhou2023.html>.

山田真寛

「方言をうがみやぶら: 群島の「ありがとう」こんなに違うのなんで?」, 『わどまり』, 385巻, 17頁, 2023.1, <https://www.town.wadomari.lg.jp/kikaku/wadomaricho/koho/wadomari.html>.

山田真寛

「方言をうがみやぶら第2回: 島内での方言の違いがあるのはなぜか?」, 『わどまり』, 386巻, 17頁, 2023.3, <https://www.town.wadomari.lg.jp/kikaku/wadomaricho/koho/wadomari.html>.

【講演・口頭発表】

山田真寛

「与那国島と沖永良部島の事例報告」, シンポジウムパネル(招待), 日本言語学会第165回大会公開シンポジウム「琉球における言語継承活動の現状と課題」, オンライン, 2022.11.22.

山田真寛

「琉球の言語復興活動を通して「研究」とは何かを再考する」, 招待発表, 第38回ひと・ことばフォーラム, 文京学院大学, オンライン(ハイブリッド), 2023.2.4.

YAMADA Masahiro

“Endangered Language Project at NINJAL”, NINJAL-UHM Linguistics Workshop, University of Hawai‘i at Mānoa (Honolulu・米国), オンライン(ハイブリッド), 2023.2.16.

【研究調査】

- ・沖永良部語フィールドワーク(鹿児島県大島郡和泊町・知名町), 2022.6.3-12, 8.1-7, 10.5-12, 12.9-25, 2023.1.18-25, 3.10-24.
- ・与那国語フィールドワーク(沖縄県八重山郡与那国町), 2022.11.14-19.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・令和4年度「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会(第1回, 第2回)(主催: 国立国語研究所共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」, 「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」, 共催: 科研費基盤研究(B)「南琉球宮古諸方言のアクセントに関する調査研究」(課題番号: 20H01259)), 国立国語研究所, 2022.5.28, 2022.12.4.

【一般向けの講演・セミナーなど】

横山晶子, 山田真寛

「しまむにサロン」, 知名町中央公民館講座, 知名町中央公民館, 2022.5.15–2023.3.11 (毎月1回, 全11回).

山田真寛

「をうがみどうーさ!」, 和泊町職員方言研修会, 和泊町役場, 2022.6.8.

山田真寛

「子どもたちが大人になったときにもしまのことばが聞こえる世界を残すために」, みる・よむ・きく・えがく4つの島のことばの絵本展「言語復興の港メンバーによる島ことばと絵本制作トーク」, ジュンク堂書店那覇店, 2022.7.30.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・異言語脱出ゲーム「紡がれるもの」: 運営補助, 出演, 国立民族学博物館, 2022.9.11.
- ・取材を受けた記事: 「しまむに教室開講 知名町 今年度も伝承・記録者育成」, 南海日日新聞, 2022.6.5.
- ・取材を受けた記事: 「島むにの多様性伝える 絵本「塩一升の運」出版 沖永良部の方言」, 南海日日新聞, 2022.6.20.
- ・取材を受けた記事: 「「シマムニ」を次世代へ 沖永良部島」, 南海日日新聞, 2023.1.1.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

山田真寛

「子どもたちが大人になったときにもしまのことばが聞こえる世界を残すために」, 中央大学, 2022.10.03.

山田真寛

「ことばの多様性: 消滅危機言語、日本の中のいろんな言語」, 調布市立若葉小学校, 2022.10.14.

山田真寛

「言語の多様性、言語の記録保存と継承保存、当事者コミュニティとの協働」, 多文化共修科目 B, 東京学芸大学, 2022.11.30.

山田真寛

「消滅危機言語の継承保存は可能: 当事者コミュニティとの協働」, 共通教育科目「方言学入門」, 鹿児島大学, 2023.1.26.

山田真寛

「研究者のしごと」, キャリア教育, 国分寺市立第三小学校, 2023.2.9.

山田真寛

「しまむに(琉球沖永良部語)どれくらい理解できる?」, 総合的な探求の時間, 鹿児島県立沖永良部高等学校, 2023.3.23.

宮川 創 (みやがわ そう) 研究系助教 (テニュアトラック)

【学位】 Dr.phil. (Koptologie) (Georg-August-Universität Göttingen, 2022)

【学歴】 北海道大学文学部言語・文学コース卒業 (2013), 京都大学大学院文学研究科言語学専修博士前期課程修了 (2015), ゲッティンゲン大学 (Georg-August-Universität Göttingen) 大学院文学研究科 (Philosophische Fakultät/Faculty of Humanities) エジプト学・コプト学専攻 (Seminar für Ägyptologie und Koptologie/Seminar for Egyptology and Coptic Studies) 博士後期課程修了 (2022)

【職歴】 日本学術振興会 特別研究員 (DC1) (2015–2015), 全米人文科学基金・ドイツ研究振興協会「KELLIA: 電子技術を駆使したコプト語学・文学の国際的共同研究」研究員 (Research Fellow) (2015–2017), ドイツ研究振興協会 特別研究領域/共同研究センター 1136「古代から中世及び古典イスラム期にかけての地中海圏とその周辺の文化における教育と宗教」研究員 (Research Fellow) (2015–2020), エルサレム・ヘブライ大学 (Hebrew University of Jerusalem) 人文学部 (Faculty of Humanities) 客員研究員 (Visiting Researcher) (2017–2018), 関西大学アジア・オープン・リサーチセンター「KU-ORCAS」(東西学術研究所) ポスト・ドクトラル・フェロー (2020–2021), 京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知研究センター 助教 (2021–2022), 人間文化研究機構国立国語研究所研究系 助教 (2022–)

【専門領域】 デジタル・ヒューマニティーズ, 消滅の危機にある言語と文化のデジタル技術を用いた保存・アーカイブ化, 深層学習を用いた自然言語処理, コーパス構築, 人工知能, 機械学習, Text Encoding Initiative (TEI), International Image Interoperability Framework (IIIF), Linked Open Data (LOD), Resource Description Framework (RDF), Dublin Core, データベース, メタデータ, WordNet, Universal Dependencies, ベッテルハイム琉球語訳聖書, ギュツラフ日本語訳聖書, バチェラー・アイヌ語訳聖書, 新約聖書学, 江戸・明治期の聖書翻訳, キリシタン資料, 近代語, 北琉球と論方言, 沖縄語, 京都方言, 重複 (reduplication), 音韻形態論, 意味論, 統語論, コイナー・ギリシア語, コプト語, コプト学, 古代末期エジプト, 初期キリスト教, 古代エジプト語, エジプト学, エジプト語歴史音韻論, 母音音素の変化, エジプト語歴史意味論, 補文標識の文法化, 体言化 (nominalization), 文法化, 語彙化, 脱文法化, キリスト教文献学, 修道院長シェヌーテ, ベーサ, 白修道院, 赤修道院, 『第6カノン』, マニ教, コプト語マニ教文献, 『ケファライア』, マニ教詩篇, 七十人訳ギリシア語聖書, 詩篇, 間テキスト性, 引用, 引喩, コプト語医学パピルス文献, 古ヌビア語, 東洋史, 丁寧語の歴史語用論

【所属学会】 人工知能学会, 日本方言研究会, 日本近代語研究会, アート・ドキュメンテーション学会, 研究データ活用協議会 (RDUF), 日本語学会, 沖縄言語研究センター, 日本アフリカ学会, 言語処理学会, デジタルアーカイブ学会, TEI (Text Encoding Initiative) Consortium, 情報処理学会, Humanistica, Australasian Association for Digital Humanities, Canadian Society for Digital Humanities, Japanese Association for Digital Humanities, Societas Linguistica Europaea, 日本オリエント学会, European Association for Digital Humanities Society of Biblical Literature, International Association of Manichaean Studies, International Association for Coptic Studies, International Association of Egyptologists, 日本歴史言語学会, 日本言語学会, 古代・東方キリスト教研究会, 東方キリスト教圏研究会, 日本ビザンツ学会, 日本認知言語学会

【学会等の役員・委員】 日本歴史言語学会 監事, アート・ドキュメンテーション学会 役員, 情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会 運営委員, デジタルアーカイブ学会 DA フォーラム運営委員, 日本語学会学会国際化推進小委員会 委員, 古代・東方キリスト教研究会 世話人

【受賞歴】

2023: 言語処理学会委員特別賞 (受賞論文: 「形態論情報付き日本語 Universal Dependencies」)

2022: デジタルアーカイブ学会第4回学術賞 (著書) (受賞著書: 『人文学のためのテキストデータ構築入門: TEI ガイドラインに準拠した取り組みにむけて』)

2022: 国立国語研究所第25回所長賞 (受賞論文: 「デジタルコーパスを用いたデータ駆動型の間テキスト性研究: 古代末期エジプトの二人の修道院長のコプト語書簡におけるコプト語訳聖書からの引用の探知と分析」)

2022: 2022 年度 (令和 4 年度) 情報処理学会山下記念研究賞 (受賞論文: 「デジタルコーパスを用いたデータ駆動型の間テキスト性研究: 古代末期エジプトの二人の修道院長のコプト語書簡におけるコプト語訳聖書からの引用の探知と分析」)

2013: 2012 年度 (平成 24 年度) 北海道大学クラーク賞

2010: 2010 年度 (平成 22 年度) 北海道大学新渡戸賞

【2022 年度に参画した共同研究】

- 基幹型共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」: メンバー (統括班)
- 基幹型共同研究プロジェクト「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」: メンバー
- 基幹型共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」: メンバー
- 基幹型共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」: メンバー (サブプロジェクト「体言化の実証的な言語類型論—理論・フィールドワーク・歴史・方言の観点から—」)
- 広領域連携型基幹研究「異分野融合による総合書物学の拡張的研究」国語研ユニット「古辞書類に基づく語彙資源の拡張と語彙・表記の史の変遷」: メンバー
- 共創先導プロジェクト共創促進研究「学術知デジタルライブラリの構築 (国語研拠点)」: メンバー

【2022 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- 国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化 (B)) 「ヴェエダ文献における言語層の考察とそれを利用した文献年代推定プログラムの開発」, 21KK0004: 研究分担者
- 基盤研究 (B) 「メイドゥム遺跡を軸とするエジプトの古王国時代における王墓地変遷問題の研究」, 22H00721: 研究分担者
- 基盤研究 (C) 「エジプト語歴史音韻論におけるコプト語の母音組織の研究」, 21K00537: 研究代表者
- 挑戦的研究 (萌芽) 「フィールドデータのアーカイブに向けた問題点の整理と解決策」, 21K18376: 研究分担者
- 研究活動スタート支援 「古ヌビア語の母音組織と母音字重複の音価の研究」, 20K21975: 研究代表者
- 基盤研究 (B) 「多言語による日本語学用語辞典および日琉諸語の用例に対するグロス規範の作成」, 19H01265: 研究分担者
- 大学共同利用機関情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設 2022 年度公募型共同研究 (ROIS-DS-JOINT) 「日琉諸語の言語類型アトラス LAJaR の開発と分析」: 研究代表者
- 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題 「理論言語学と言語類型論と計量言語学の対話にもとづく言語変化・変異メカニズムの探求」: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

石田友梨, 大向一輝, 小風綾乃, 永崎研宣, 宮川創, 渡邊要一郎 (編・著)

『人文学のためのテキストデータ構築入門: TEI ガイドラインに準拠した取り組みにむけて』, 文学通信, 2022.8.4.

《論文・ブックチャプター》

So Miyagawa

“Digital History of Egypt in the Roman and Byzantine Periods: A Case Study of Shenoute the Archimandrite”, *Historical Studies of the Western World*, 1, pp. 26–33, 2022.4, DOI: 10.57271/hsw.1.0_25.

So Miyagawa and Heike Behlmer

“Quotative Index Phrases in Shenoute’s Canon 6: A Case Study of Quotations from the Psalms”, Chiara Mecariello and Jennifer Singletary (ed.) *Uses and Misuses of Ancient Mediterranean Sources: Erudition, Authority, Manipulation.*, pp. 101–116, Tübingen: Mohr Siebeck, 2022.6, DOI: 10.1628/978-3-16-160012-8.

宮川創

「Transkribus による手書きテキスト資料の自動翻刻」, 石田友梨, 大向一輝, 小風綾乃, 永崎研宣, 宮川創, 渡邊要一郎 (編・著) 『人文学のためのテキストデータ構築入門: TEI ガイドラインに準拠した取

り組みにむけて』, 文学通信, 56–109 頁, 2022.8.4.

ノイツラ・ゾフィー, 宮川 創

「HTR プログラム Transkribus による日本語キリシタン版『コンテムツス・ムンヂ』のデジタルアーカイブ化」, 『デジタルアーカイブ学会誌』, 6 巻 s3 号, 123–126 頁, 2022.11, DOI: 10.24506/jsda.6.s3_s123.

宮川創, 加藤幹治, 町田星羅, カルリノ・サルバトーレ, ズラズリ美穂

「沖縄語のデジタル語彙資源の構築」, 『デジタルアーカイブ学会誌』, 6 巻 s3 号, 206–209 頁, 2022.11, DOI: 10.24506/jsda.6.s3_s206.

宮川創

「エジプト語史におけるコプト語の名詞化接頭辞 pet-」, 小川芳樹, 中川俊秀 (編) 『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論 3』, 開拓社, 404–412 頁, 2022.12.9.

田口智大, 宮川創

「形態論情報付き日本語 Universal Dependencies」, 『言語処理学会第 29 回年次大会発表論文集』, 732–737 頁, 2023.3.

宮川創, 金山博, 田口智大, 當山奈那

「沖縄語の Universal Dependencies ツリーバンクコーパスの構築」, 『言語処理学会第 29 回年次大会発表論文集』, 743–748 頁, 2023.3.

宮川創

「危機にある言語・方言のための開かれたデジタルアーカイブの構築に向けて」, 『日本音響学会 2022 年秋季研究発表会講演論文集』, 1651–1654 頁, 2023.3.

《その他の出版物・記事》

So Miyagawa and Hatim Eujayl

“Making a Unicode Font for the Nubian Language Revitalization Movement”, *The Digital Orientalist*, 2022.4.8.

宮川創

「危機言語の音声・テキストのデジタル・アーカイブ: Endangered Language Archive と Pangloss Collection」, 『人文情報学月報』, 129 巻 (前編), 2022.4.30.

佐々木紫帆, 山下ユミ, 西川開, 宮川創

「第 1 回 DA フォーラム 座長が推すベスト発表」, 『デジタルアーカイブ学会誌』, 6 巻 2 号, 97 頁, 2022.5.6.

宮川創

「オープンデータとしての学術論文<報告>」, 『カレントアウェアネス-E』, 434 巻, 2022.5.12.

宮川創

「消滅危機言語のデジタル・アーカイブの諸動向: PARADISEC と DELAMAN」, 『人文情報学月報』, 130 巻 (前編), 2022.5.31.

So Miyagawa and Mina D. Makar

“Read and Write Coptic on Your Smartphone: Interview with Mina Makar on Coptic Bible, Dictionary, Keyboard, and Agpeya Apps”, *The Digital Orientalist*, 2022.5.31.

宮川創

「手書きテキスト認識 (HTR)・自動翻刻ツール eScriptorium と対訳アライメント・ツール Ugarit: DH2022 東京ワークショップ・チュートリアル解説」, 『人文情報学月報』, 131 巻 (前編), 2022.6.30.

宮川創

「ギリシア文字を用いたアフリカの 2 つの言語」, 『月刊みんぱく』, 2022 年 7 月号, 20 頁, 2022.7.1.

宮川創

「第 12 回国際コプト学会 (於: ブリュッセル自由大学) における DH 関連チュートリアル・研究発表に参加して」, 『人文情報学月報』, 132 巻 (前編), 2022.7.31.

宮川創

「TEI Lex-0 および CLLD/CLDF による辞書・語彙資源のデジタル化」, 『人文情報学月報』, 133 巻 (前編), 2022.8.31.

宮川創

「静的サイトジェネレータ Jekyll・Hugo・Gatsby、および、Gatsby と CETEIcean を用いた TEI デジタル学術編集版のウェブサイト化」, 『人文情報学月報』, 134 巻 (前編), 2022.9.30.

宮川創

「Hugging Face AutoTrain における最新鋭 AI モデルによるノーコード機械学習」, 『人文情報学月報』, 135 巻 (前編), 2022.10.31.

宮川創

「世界最大の古代エジプト語コーパス Thesaurus Linguae Aegyptiae の大刷新: TLA v2.0」, 『人文情報学月報』, 136 巻 (前編), 2022.11.30.

宮川創

「古典語の Digital Reading Environment (デジタル読書環境) の開発: 西洋古典の Scaife Viewer とユダヤ古典の Sefaria」, 『人文情報学月報』, 137 巻 (前編), 2022.12.31.

宮川創

「「キリシタン・バンク」と「みんなで翻刻」: キリシタン版翻刻のクラウドプラットフォーム」, 『人文情報学月報』, 138 巻 (前編), 2023.1.31.

宮川創

「Surface Syntactic Universal Dependencies (SUD) による依存・係り受け統語構造記述」, 『人文情報学月報』, 139 巻 (前編), 2023.2.28.

宮川創

「GPT-4 の登場と人文学テキスト資料の整理への応用」, 『人文情報学月報』, 140 巻 (前編), 2023.3.31.

【講演・口頭発表】

宮川創

「京都府南部若年層方言の語幹重複形容詞における促音・撥音音素の挿入」, 日本語学会 2022 年度春季大会, オンライン, 2022.5.14.

宮川創

「Omeka S を用いた日本の危機方言のためのデジタルアーカイブの構築: デジタルヒューマニティーズにおける世界標準 (TEI・IIIF・ダブリンコア) の適用」, 2022 年度第 1 回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会, オンライン, 2022.5.28.

宮川創

「シェヌーテのコプト語書簡・説教文にみる異教反駁: マニ教、ヘレニズム的エジプト多神教、オリゲネス主義」, 招待講演, 第 61 回古代・東方キリスト教研究会, 東京大学, 2022.6.5.

So Miyagawa

“Digital Curation of Resources Related to Endangered Languages and Dialects in Japan”, The Digital Orientalist’s 2022 Online Conference “Infrastructures”, オンライン, 2022.6.25.

So Miyagawa

“Handwritten Text Recognition for Coptic Manuscripts”, International Association for Coptic Studies (IACS) 12th International Congress of Coptic Studies, ブリュッセル自由大学 (ブリュッセル・ベルギー), 2022.7.14.

Laura Slaughter, So Miyagawa, Luis Morgado da Costa, Heike Behlmer, and Hugo Lundhaug

“Evaluation of Coptic Wordnet”, International Association for Coptic Studies (IACS) 12th International Congress of Coptic Studies, ブリュッセル自由大学 (ブリュッセル・ベルギー), 2022.7.15.

So Miyagawa, Marco Büchler, Laura Slaughter, Luis Morgado da Costa, and Heike Behlmer
“Application of Coptic WordNet to Intertextuality Studies in Coptic Literature: Shenoute, Besa, and the Bible”, International Association for Coptic Studies (IACS) 12th International Congress of Coptic Studies, ブリュッセル自由大学 (ブリュッセル・ベルギー), 2022.7.15.

宮川創

「エジプト語史における「言う」動詞から多義的な接続詞への文法化」, 特別講演 (招待), 「理論言語学と言語類型論と計量言語学の対話にもとづく言語変化・変異メカニズムの探求」2022年度第2回 (通算第7回) 研究会, オンライン, 2022.7.24.

Takashi Okada, So Miyagawa, Kosei Kawazu, Tatsuya Ishii, Toshio Oka, Satoshi Fujimaki, Tomejiro Osawa, Yoko Shiki, Noriko Maehara, Keiichi Ishibashi, Kyosuke Sunada, and Yasuhito Nakanishi

“Handwritten Text Recognition and Palimpsest Analysis for Medieval Greek Manuscripts”, ポスター発表, Digital Humanities 2022 Tokyo, オンライン, 2022.7.28.

So Miyagawa, Vincent W.J. van, and Gerven Oei

“Developing an Interlinear Old Nubian Text Database”, 15th International Congress for Nubian Studies, ワルシャワ大学 (ワルシャワ・ポーランド), 2022.9.1.

宮川創

「日本・琉球の諸言語による歴史的聖書翻訳のデジタル・パラレル・コーパス化の試み」, Code4Lib JAPAN カンファレンス, オンライン, 2022.9.4.

Vincent W.J. van, Gerven Oei, 宮川創

「ナイル・ヌビア諸語における属格主語の言語類型論的位置付け」, ポスター発表, ELW Evidence-based Linguistics Workshop, 国立国語研究所, 2022.9.5.

So Miyagawa, Kanji Kato, Miho Zlazli, Seira Machida, and Salvatore Carlino

“Okinawan Lexicography in TEI: Challenges for Multiple Writing Systems”, ポスター発表, TEI Conference and Members' Meeting 2022, ニューカッスル大学 (ニューカッスル・英国), 2022.9.14.

宮川創

「危機にある言語・方言のための開かれたデジタルアーカイブの構築に向けて」, 招待講演, 日本音響学会 2022 年秋季研究発表会, 北海道科学大学, 2022.9.14.

宮川創

「エジプト語史におけるギリシア語との言語接触と語彙・文法借用」, 特別講演 (招待), 東北大学大学院情報科学研究科「言語変化・変異研究ユニット」主催第9回ワークショップ, オンライン, 2022.9.18.

So Miyagawa

“Introduction to Cross-linguistic Syntactic Study through Universal Dependencies Treebanks and Syntax Parsing through BERT”, 特別講演 (招待), Workshop “Corpus Annotation and Data Analysis (CAnDA)”, ゲッティンゲン大学 (ゲッティンゲン・ドイツ), 2022.9.23.

So Miyagawa

“Champollion and Ancient Egyptian and Coptic Knowledge Before Him”, 招待講演, Ancient Egypt: discoveries, materials, techniques, scripts, linguistics and genres of writing throughout three millennia of pharaonic history THE HYPERION-IMOC PAS SCHOOL OF EGYPTOLOGY. BUCHAREST-WARSAW FIRST EDITION, サンシャインシティ文化会館, 2022.9.26.

So Miyagawa

“Transkribus for Historical Handwritten Texts Written in Okinawan (Ryukyuan)”, ポスター発表, Transkribus User Conference 22, インスブルック (インスブルック・オーストリア), 2022.9.29.

So Miyagawa

“Tagged Corpora, Universal Dependencies Treebanking, and NLP with Deep Learning”, 招待講演, Corpus Annotation and Data Analysis (CAnDA) An Equinox School @ Gauss's Observatory, ゲッ

ティンゲン大学 (ゲッティンゲン・ドイツ), 2022.9.30.

So Miyagawa

“Using AI for Classical and Endangered Language Studies”, 招待講演, Among Digitized Manuscripts: Working with Oriental Manuscripts in the Digital Age, 早稲田大学, 2022.10.17.

宮川創

「デジタル化された人文資料をどのように活用するか—人文学におけるオープンサイエンス—」, 東洋大学人間科学総合研究所公開シンポジウム「西洋古代史研究における史資料の安定的利用をめざして」, オンライン, 2022.10.22.

宮川創, Mona Sawy

「コプト語医学パピルス文献におけるアラビア語・ギリシア語からの借用語の音韻論」, 日本オリエント学会第 64 回年次大会, 東京大学, 2022.10.30.

ノイツラ・ゾフィー, 宮川創

「HTR プログラム Transkribus による日本語キリシタン版『コンテムツス・ムンヂ』のデジタルアーカイブ化」, デジタルアーカイブ学会第 7 回研究大会一般研究発表, オンライン, 2022.11.12.

宮川創

「北琉球奄美語と論島方言における対格標識と示差的目的語標示」, 日本言語学会第 165 回大会, オンライン, 2022.11.12.

So Miyagawa

“Digitization of a Japanese Christian Text from the Sixteenth Century”, DH_Budapest_2022 & DARIAH DAYS Conference, エトヴェシュ・ロラード大学 (ブダペスト・ハンガリー), 2022.11.24.

宮川創, 加藤幹治, カルリノ・サルバトーレ, 町田星羅, ズラズリ美穂

「沖縄語のデジタル語彙資源の構築」, デジタルアーカイブ学会第 7 回研究大会一般研究発表 (沖縄現地会場), 琉球大学, 2022.11.25.

So Miyagawa

“The Digitization of Resources for Endangered Indigenous Languages of Japan to Promote the Use and Study of these Languages”, 招待講演, Conference “The Digital Turn in Early Modern Japanese Studies”, 早稲田大学, 2022.12.2.

セリック・ケナン, 籠宮隆之, 宮川創, 木部暢子

「日本の危機言語語彙データベース」, 令和 4 年度第 2 回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会, オンライン, 国立国語研究所 (ハイブリッド), 2022.12.4.

北岡タマ子, 後藤真, 関野樹, 鈴木卓治, 宮川創, 菊池信彦

「DH プラットフォーム nihuBridge の研究活用の可能性～API 機能を一例として」, シンポジウムパネル (招待), 情報処理学会人文科学とコンピュータシンポジウムじんもんこん 2022 日本の「デジタル・ヒューマニティーズ」を見つめなおす, オンライン, 国立歴史民俗博物館 (ハイブリッド), 2022.12.9.

宮川創, 加藤幹治

「沖縄語の言語資源学の確立に向けて: 語彙資源と談話コーパス」, ポスター発表, NINJAL シンポジウム「言語資源学の創成: 開かれた言語資源による日本語研究」, オンライン, 国立国語研究所 (ハイブリッド), 2022.12.10.

So Miyagawa

“Grammaticalization from relative constructions to nominalizer affixes: A case study of Egyptian-Coptic”, ALT 2022: 14th Conference of the Association for Linguistic Typology, テキサス大学オースティン校 (オースティン, テキサス州・米国), 2022.12.15.

加藤幹治, 宮川創

「日琉諸語のマイクロ類型論デジタルアーカイブ構築に向けて」, 基調講演, 第 18 回 CODH セミナー「マイクロ類型論とデジタルアーカイブ構築: バントゥ諸語と日琉諸語の事例から」, ROIS-DS 人文学

オープンデータ共同利用センター, 2023.1.23.

宮川創

「沖縄語の表記法について」, ポスター発表, 言語学フェス 2023, オンライン, 2023.1.28.

宮川創

「江戸時代後期ギュツラフ訳日本語新約聖書の翻訳元について」, 特別講演 (招待), Linguistics Terminology, Glossing and Phonemicization (LiTGaP) Winter Workshop 2023, 東北大学, 2023.2.14.

宮川創

『言語資源学』に関する書籍の企画と展望」, ポスター発表, DH フェス 2023, オンライン, 2023.2.23.

小川潤, 北本朝展, 中村雄祐, 大向一輝, 宮川創, 山田俊幸, 関慎太郎

「人文学 3D 研究プラットフォーム構築に向けて: 江戸城和田倉門石垣 3D スキャンの報告と今後の展開に関する議論」, ポスター発表, DH フェス 2023, オンライン, 2023.2.23.

So Miyagawa and Salvatore Carlino

“A Database of Okinawan Writing Systems for Digital Lexicography and Language Revitalization”, ポスター発表, 8th International Conference on Language Documentation & Conservation (ICLDC 8), オンライン (米国), 2023.3.2.

宮川創

「Omeka S による LOD と IIIF を駆使した言語資源デジタルアーカイブの開発」, 特別講演 (招待), 「学術知デジタルライブラリの構築 (国語研拠点)」研究集会, オンライン, 2023.3.7.

宮川創, 金山博, 田口智大, 當山奈那

「沖縄語の Universal Dependencies ツリーバンクコーパスの構築」, ポスター発表, 言語処理学会第 29 回年次大会, 沖縄コンベンションセンター, 2023.3.14.

田口智大, 宮川創

「形態論情報付き日本語 Universal Dependencies」, ポスター発表, 言語処理学会第 29 回年次大会, 沖縄コンベンションセンター, 2023.3.14.

宮川創

「消滅の危機にある言語・方言のために深層学習を応用する」, 特別講演 (招待), 言語処理学会第 29 回年次大会ワークショップ『深層学習時代の計算言語学』, 沖縄コンベンションセンター, 2023.3.18.

宮川創

「デジタル・ヒューマニティーズの手法と実践: 言語データ (テキストコーパス・音声・動画) を中心に」, 特別講演 (招待), フィールド言語学ワークショップ: 第 22 回文法研究ワークショップ「文法研究とデジタル・ヒューマニティーズ (1)」, 東京外国語大学, 2023.3.20.

宮川創

「幕末・明治期の新約聖書の日本語諸訳とベッテルハイム沖縄語訳における敬語と待遇表現」, 招待講演, HiSoPra*研究会 (第 6 回), オンライン, 2023.3.21.

宮川創

「ヘブライ語とコプト語ぬ言語復興運動ぬ歴史: 中近東ぬ事例から」, 特別講演 (招待), 第 14 回琉球継承言語研究会シンポジウム, ゆんたんざミュージアム, 2023.3.25.

So Miyagawa

“Developing Digital Corpora and Lexica of Japonic Languages”, 招待講演, 2023 Digital Japanese Studies Symposium: Digital Humanities as New Paradigm on Japanese Studies in Indonesia, オンライン (インドネシア), 2023.3.30.

宮川創

「人工知能時代における多様性の保全」, 招待講演, Grammar Writing 2023, オンライン, 2023.4.2.

【研究調査】

- ・アシュート周辺のコプト語碑文・グラフィート・文献調査 (エジプト・アシュート (ドロンカ修道院など))

- およびソハーグ(白修道院・赤修道院), 2022.8.15–21.
- ・エジプト・メイドウム・ピラミッド複合体の測量調査, 発掘準備, 2022.8.23–27.
- ・与論方言の方言調査(鹿児島県与論町), 2022.10.1–4, 2023.2.28–3.1.
- ・読谷村が所有する方言音声資料に関する方言調査(沖縄県読谷村), 2023.3.1–3.
- ・南城市が所有する方言音声資料に関する方言調査(沖縄県南城市), 2023.3.23–24.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・Tokyo Egyptology International Symposium (TEIC) “200 Years after Champollion—Text and Context in Ancient Egypt—”(主催: 日本学術振興会科研費基盤研究(C)「エジプト語歴史音韻論におけるコプト語の母音組織の研究」: 21K00537), 共催: 国立国語研究所, サンシャインシティ文化会館, 2022.10.5.
- ・DH フェス 2023 (主催: 石田友梨, 大月希望, 大向一輝, 小川潤, 亀田堯宙, 関慎太郎, 塚越柚季, 中川奈津子, 永崎研宣, 原翔子, 宮川創, 山田慎太郎), オンライン, 2023.2.23.

【一般向けの講演・セミナーなど】

宮川創

「古代エジプト語とコプト語—200年前、シャンポリオンは如何にしてヒエログリフを解読したか—」,
古代オリエント博物館講演会: ヒエログリフ解読 200 周年記念, 2022.7.31.

宮川創

「ブリュッセル王立美術・歴史博物館収蔵品のヒエログリフを読む」, 古代エジプトの文化遺産から読み解くヒエログリフ入門, 朝日カルチャーセンター名古屋教室, 2022.12.24.

宮川創

「国際コプト学会、国際マニ教学会、国際ヌビア学会、言語類型論学会参加報告、及び、各地の博物館での調査報告など」, 第 138 回(通算 164 回) デジタルアーカイブサロン: 2022 年国際会議参加報告および海外ミュージアム見学報告, 2023.1.13.

宮川創

「ツタンカーメン関連のヒエログリフを読む」, 古代エジプトの文化遺産から読み解くヒエログリフ入門, 朝日カルチャーセンター名古屋教室, 2023.1.14.

宮川創

「ギリシャ語は、かつて一千年間、エジプトの公用語であった」, 世界ギリシャ語デー講演会, 2023.2.9.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・取材を受けた記事: “Assiut University’s Vice President discusses joint collaboration with Japan’s Kyoto University”; Al-Ahram (エジプトの全国紙, 原文はアラビア語), 2022.8.21.
- ・取材を受けた記事: 「言語学オリンピックへの誘い: ルール・遊び方・勉強法・助言・指導, 情報提供: 永月杏」, 『空論上の砂、楼閣上の机。』, 2022.8.30, <https://all-for-nothing.com/entry/2022/08/30/110116>.
- ・取材を受けた記事: 「【文化】ヒエログリフ解読 200 年」, 読売新聞(朝刊, 29 頁), 2022.12.1.
- ・取材を受けた記事: 「デジタル人文学最前線の一翼を担って; 宮川 創(みやがわ・そう)」, 日本学術振興会人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業 JDCat サロン データインフラの最前線, 2022.12.26, <https://www.jsps.go.jp/j-di/jdcatsalon.html>.
- ・Digital Humanities 2022 Tokyo: パネル司会・セッションチェア・査読, 2022.7.25–29.
- ・ALT 2022: 14th Conference of the Association for Linguistic Typology: パネル司会・セッションチェア, 2022.12.15–17.
- ・DH2023 Graz: 査読, 2022.11–2023.1.
- ・*Digital Life*: Editorial board member
- ・*The Digital Orientalist*: Editorial board member
- ・情報処理学会論文誌人文科学とコンピュータ特集号: 編集委員

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

So Miyagawa

“Tagged Corpora, Universal Dependencies Treebanking, and NLP with Deep Learning”, Corpus Annotation and Data Analysis (CAnDA) An Equinox School @ Gauss’s Observatory, ゲッティンゲン大学 (ゲッティンゲン・ドイツ), 2022.9.30.

宮川創

「自然言語処理のための深層学習: BERT 等によるコーパスの自動タグ付け」, 自然言語処理講習会, オンライン, 2022.10.14.

宮川創

「世界の消滅危機言語・文化を研究する: エジプトと日本の諸言語を中心に」, 2022 年度 2 月 [ことばの扉] 講演会, 尾道市立大学, 2023.2.20.

《大学・大学院非常勤講師》

- 東京外国語大学オープンアカデミー
- 大東文化大学
- 大阪樟蔭女子大学
- 東北大学大学院

《若手研究者の受入》

- 日本学術振興会外国人特別研究員 (欧米短期): 1 名

岩崎 拓也 (いわさき たくや) 研究系特任助教

【学位】 博士 (学術) (一橋大学, 2020)

【学歴】 京都外国語大学外国語学部日本語学科卒業 (2010), 一橋大学大学院言語社会研究科言語社会専攻修士課程修了 (2017), 一橋大学大学院言語社会研究科言語社会専攻博士後期課程修了 (2020)

【職歴】 吉林華僑外国語学院 外籍講師 (2011), 東北師範大学 中国赴日本国留学生予備学校 外籍講師 (2014–2015), 国立国語研究所日本語教育研究領域 プロジェクト非常勤研究員 (2017), 同 理論・対照研究領域 プロジェクト非常勤研究員 (2017–2020), 同 研究系 (日本語教育研究領域) 特任助教 (2020), 一橋大学大学院言語社会研究科 非常勤講師 (2021–2022), 東京学芸大学留学生センター 非常勤講師 (2018–2023), 筑波大学大学院人文社会ビジネス科学学術院人文社会科学研究群 非常勤講師 (2022–2023)

【専門領域】 句読法, 表記論, 日本語教育

【所属学会】 日本語教育学会, 計量国語学会, 社会言語科学会, 専門日本語教育学会

【2022 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」: メンバー (サブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究 (学習者作文)」)
- ・基幹型共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」: メンバー (サブプロジェクト「学習者の辞書資源使用の実態調査 (辞書使用調査)」)

【2022 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・若手研究「定住外国人を対象にした見やすくわかりやすい表記方法の解明」, 21K13047: 研究代表者
- ・挑戦的研究 (萌芽)「スマホ画面録画機能を用いた日本語学習者の語彙検索行動の解明」, 21K18375: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

岩崎拓也

『現代日本語における句読点の研究: 研究概観と使用傾向の定量的分析』, ココ出版, 2023.2.28, ISBN: 9784866760629.

《論文・ブックチャプター》

岩崎拓也

「定住外国人の語りからみた日本語表記にかんする意識」, 『一橋大学国際教育交流センター紀要』, 4号, 61–69 頁, 2022.7.31, DOI: 10.15057/74251.

《その他の出版物・記事》

岩崎拓也

「句読法、テンマルルール わかりやすさのきほん | 第7回 句読点をめぐる研究 (後編)」, 『未草: ひつじ書房ウェブマガジン』, 2022.4.6, <https://www.hituzi.co.jp/hituzigusa/2022/04/06/punc07/>.

岩崎拓也

「句読法、テンマルルール わかりやすさのきほん | 第8回 国語教育における句読点」, 『未草: ひつじ書房ウェブマガジン』, 2022.5.17, <https://www.hituzi.co.jp/hituzigusa/2022/05/17/punc08/>.

岩崎拓也

「第16回 NINJAL フォーラム「ここまで進んだ!ここまで分かった!多様な言語資源に基づく日本語研究」」, 『自然言語処理』, 29 巻 2 号, 731–734 頁, 2022.6.15, DOI: 10.5715/jnlp.29.731.

岩崎拓也

「句読法、テンマルルール わかりやすさのきほん | 第9回 日本語教育における句読点」, 『未草: ひつじ書房ウェブマガジン』, 2022.7.6, <https://www.hituzi.co.jp/hituzigusa/2022/07/06/punc09/>.

岩崎拓也

「句読法、テンマルルール わかりやすさのきほん | 第10回 公用文における句読点」, 『未草: ひつじ書

房ウェブマガジン』, 2022.11.10, <https://www.hituzi.co.jp/hituzigusa/2022/11/10/punc10/>.
岩崎拓也
「句読法、テンマルルール わかりやすさのきほん | 第11回身の回りにある句読点」, 『未草: ひつじ
書房ウェブマガジン』, 2023.1.12, <https://www.hituzi.co.jp/hituzigusa/2023/01/12/punc11/>.

【講演・口頭発表】

岩崎拓也, 呉丹, 石黒圭

「台湾における日本語学習者の習得過程—日本語学習者縦断コーパス「CoLeJa」の設計と特徴—」, 招待講演, 2022年台湾日本語文学会国際シンポジウム, オンライン(東呉大学(台北市・台湾)), 2022.12.10.

【研究調査】

- ・日本語学校における日本語の表記方法に関する調査(東京都), 2022.10.1–2023.3.31.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・立川市立立川第五中学校「地域訪問」インタビュー, 2022.9.30.
- ・NINJAL 職業発見プログラム(埼玉県開智中学高等学校): 講師, 国立国語研究所, 2023.2.16.

【大学院教育・若手研究者育成】

《大学院非常勤講師》

- ・筑波大学大学院

川端 良子 (かわばた よしこ) 言語資源開発センター特任助教

【学位】 博士 (学術) (千葉大学, 2019)

【学歴】 千葉大学文学部行動科学学科認知情報科学専攻 卒業 (2000), 千葉大学大学院文学研究科人文科学専攻 修士課程修了 (2002), 千葉大学大学院自然科学研究科情報科学専攻 単位取得満期退学 (2013), 千葉大学大学院融合科学研究科情報科学専攻 博士後期課程修了 (2019)

【職歴】 東芝ソリューション株式会社 (2002–2007), 株式会社リバネス (2007–2009), 人間文化研究機構国立国語研究所 (音声言語研究領域) プロジェクト非常勤研究員 (2016–2021), 同 言語資源開発センター 特任助教 (2022–)

【専門領域】 コーパス言語学, 談話分析, 認知科学

【所属学会】 日本認知科学会, 人工知能学会

【学会等の役員・委員】 人工知能学会言語・音声理解と対話処理研究会 SIG-SLUD 対話システムシンポジウム運営委員

【受賞歴】

2023: NLP2022 言語資源賞: 言語処理学会・言語資源協会 (小磯花絵, 天谷晴香, 石本祐一, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴, 西川賢哉, 渡邊友香 「『日本語日常会話コーパス』の設計と特徴」)

2017: 第15回国立国語研究所所長賞若手研究者奨励賞

【2022年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」: メンバー

【2022年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・若手研究「多様な談話状況における照応規則の解明」, 22K13108: 研究代表者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

小磯花絵, 天谷晴香, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴, 西川賢哉, 渡邊友香 「『日本語日常会話コーパス』設計と特徴」, 『国立国語研究所論集』, 24巻, 153–168頁, 2023.1, DOI: 10.15084/00003692.

《その他の出版物・記事》

山崎誠, 大村舞, 籠宮隆之, 川端良子

「言語資源ワークショップ2022(LRW2022)」, 『自然言語処理』, 29巻4号, 1316–1321頁, 2022.12.15, DOI: 10.5715/jnlp.29.1316.

【講演・口頭発表】

小磯花絵, 天谷晴香, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 藤越, 西川賢哉

「『子ども版日本語日常会話コーパス』の構築」, ポスター発表, 言語資源ワークショップ2022, オンライン, 2022.8.30–31.

川端良子

「日本語日常会話における他称表現の使用傾向について」, ポスター発表, 言語資源ワークショップ2022, オンライン, 2022.8.30–31.

川端良子

「会話参加者と指示対象との関係と固有名の使用について—著名人を指示する表現に注目して—」, ポスター発表, シンポジウム「日常会話コーパス」VIII, オンライン, 2023.3.3.

谷村緑, 川端良子, 吉田悦子, 竹内和広

「ビデオ課題達成対話の均一的なトランスクリプト作成に向けて～発話の重なりを中心に～」, 思考と言語研究会 (TL), オンライン, 2023.3.10–11.

川端良子, 大村舞, 浅原正幸, 竹内誉羽

「Double cross model による位置情報フレームアノテーション」, 言語処理学会第 29 回年次大会, 沖縄コンベンションセンター, 2023.3.13-17.

【その他の学術的・社会的活動】

- NINJAL 職業発見プログラム (新潟県立長岡高等学校): 講師, 国立国語研究所, 2022.10.7.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

小磯花絵, 山口昌也, 川端良子, 西川賢哉

『『日本語日常会話コース』活用入門』, 第 46 回 NINJAL チュートリアル, 国立国語研究所, 2023.3.29.

《大学院非常勤講師》

- 千葉大学国際教養学部 (2020-)
- 埼玉大学経済学部 (2022)
- 埼玉大学大学院人文社会科学研究科 (2022)



資 料

1 運営会議

運営会議規程

- ・委員は20名以内、内過半数は所外の学識経験者。
- ・所内委員は、副所長、研究主幹、センター長、他所長の指名する教授又は客員教授若干名。
- ・会議は所長の求めに応じ、議長がこれを招集する。
- ・委員の過半数の出席がなければ議事を開き、議決することができない。
- ・会議の議事は出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
- ・専門的事項について審議を行うための専門委員会(所長候補者選考委員会、人事委員会、審査委員会)を置くことができる。
- ・議長は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

2022年度の開催状況

- ・第1回 [2022年6月27日 13:30-15:30 (Web会議)]
 - ▶ 前回議事概要確認
 1. 前回議事概要(案)について
 - ▶ 審議事項
 1. 人事委員会委員の選出について
 2. 国立国語研究所長候補者選考委員会の設置について
 3. 特任助教(研究系)の公募について
 4. 教授(研究系)の内部選考(昇任)について
 5. 異分野融合型共同研究の公募について
 6. その他
 - ▶ 報告事項
 1. 国立国語研究所長候補者の推薦について
 2. テニュアトラック助教の採用について
 3. 客員教授について
 4. 第3期中期目標期間に係る業務の実績に関する報告書(案)について
 5. 宮地裕日本語研究基金準備委員会の設置について
 6. 共同利用型共同研究の採択報告について
 7. 国立国語研究所の活動について
 8. その他
- ・第2回 [2022年10月24日 13:30-17:00 (Web会議)]
 - ▶ 議事概要確認
 1. 前回議事概要(案)について
 - ▶ 審議事項
 1. 所長候補者の選考について
 2. 教授(研究系)の内部選考(昇任)について
 3. 特任助教(研究系)の選考について
 4. その他
 - ▶ 報告事項
 1. 第3期中期目標期間に係る業務の実績に関する報告書について
 2. 令和3年度及び第3期中期目標期間外部評価報告書について
 3. 国立国語研究所宮地裕日本語研究基金規程及び基金運営委員会設置要項等について
 4. 国立国語研究所宮地裕日本語研究基金各賞実施要項(案)等について

- 5. 異分野融合型共同研究の採択報告について
- 6. 共同利用型共同研究の採択報告について
- 7. 国立国語研究所の活動について
- 8. その他
- 第3回 [2023年2月20日 13:30–15:30 (ハイブリッド会議 (TKP 東京駅日本橋カンファレンスセンター))]
- ▶ 議事概要確認
 - 1. 前回議事概要 (案) について
- ▶ 審議事項
 - 1. 教員 (研究系) の公募について
 - 2. 人事委員会の設置について
 - 3. 名誉教授称号授与者の選考について
 - 4. 令和5年度客員教授について
 - 5. その他
- ▶ 報告事項
 - 1. 国立国語研究所における令和4年度基幹研究等の活動状況について
 - 2. 特任助教の採用手続き進捗状況について
 - 3. 令和5年度運営費交付金等について
 - 4. 共同利用型共同研究の審査について
 - 5. 共同利用型共同研究 (B)・(C) の公募要項改正について
 - 6. 国立国語研究所の活動について
 - 7. その他

運営会議の下に置かれる専門委員会

(1) 所長候補者選考委員会

- 所長候補者選考委員会規程
 - ▶ 委員会の任務は、被推薦者名簿の作成、適任者名簿の作成、その他所長選考に必要な予備的事項に関するを行う。
 - ▶ 委員会は運営会議委員のうち運営会議議長が指名する研究所内の者及び研究所外の者若干名で組織する (研究所内の委員を過半数とする)。
 - ▶ 委員の任期は1年とし再任を妨げない。欠員の後任者の任期は前任者の残任期間とする。
 - ▶ 委員の過半数の出席がなければ議事を開き、議決することができない。
 - ▶ 委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
 - ▶ 委員長は必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。
- 所長候補者選考委員会審議状況
 - ▶ 2022年6月27日：所長候補者選考委員会設置、所長候補者選考委員会 (第1回) 開催
 - ▶ 2022年7月12日：所長候補者選考委員会 (第2回) 開催
 - ▶ 2022年8月5日：所長候補者選考委員会 (第3回) 開催 (メール審議)
 - ▶ 2022年8月17日：適任者名簿を提出
 - ▶ (2022年10月24日：運営会議 (第2回) にて前川喜久雄氏を所長候補者に決定)
 - ▶ (2022年10月24日：人間文化研究機構長に推薦)

(2) 人事委員会

- 人事委員会規程
 - ▶ 委員会は研究所の研究教育職員の採用及び昇任人事に係る候補者の選考に関する事項の審議を行う。
 - ▶ 委員会は運営会議委員のうち運営会議議長が指名する、研究所外の者及び研究所内の者若干名で組織する。
 - ▶ 委員の任期は1年とし、再任を妨げない。欠員の後任者の任期は前任者の残任期間とする。
 - ▶ 委員会は委員の過半数の出席で議事を開催する。
 - ▶ 委員会の議事は出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは委員長の決するところによる。

- ・委員長は必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。
- ・人事委員会審議状況
 - ・2022年6月27日(第1回):
 - 人事委員会委員長として石黒圭委員を選任
 - ・2022年10月4日(第2回):
 - 研究系教授として朝日祥之准教授を運営会議に推薦
 - 研究系特任助教として本多由美子氏、井戸美里氏及び Celik Kenan Thibault 氏を運営会議に推薦
- ・(2022年10月24日:運営会議(第2回)にて昇任・採用決定)

2 評価体制

国立国語研究所では、効率的かつ効果的な自己点検・評価を実施し、その評価結果を適切に業務運営に反映させるため、自己点検・評価委員会を設置している。この自己点検・評価を第三者評価に適切に関連づけるため、外部評価委員会を設置している。外部評価委員会では、令和3年度及び第3期中期目標期間(平成28年度～令和3年度)の「機関拠点型基幹研究プロジェクト・センターの研究活動」、令和3年度の「管理業務」について研究所がまとめた自己点検・評価に対し、外部評価委員がその専門的立場から検証をおこなった。

(1) 自己点検・評価委員会

この委員会では、自己点検・評価の基本的な考え方の作成、自己点検・評価の実施、評価結果の公表及び活用に関すること、外部評価委員会の評価結果に関することを担当する。2022年度は3回開催した。

(2) 外部評価委員会

外部評価委員会規程

- ・委員会は、自己点検・評価の結果に基づく評価に関すること、研究所の中期計画及び年度計画の評価に関すること、共同研究プロジェクト等の評価に関すること、その他評価に関することについて審議する。
- ・委員会は10名以内の委員をもって組織する。委員は研究所の設置目的について理解のある学外の学識経験者等の中から所長が委嘱する。
- ・委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は前任者の任期とする。
- ・委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
- ・委員会は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。
- ・外部評価の実施は、研究所の中期計画及び年度計画の実施に関する評価の時に行うものとする。委員会は、評価の結果を所長に報告するものとする。

令和3年度及び第3期中期目標期間業務の実績に関する評価の実施について

1. 評価の実施の趣旨

文部科学省に提出した「大学共同利用機関法人人間文化研究機構令和3年度計画」および「大学共同利用機関法人人間文化研究機構中期計画(平成28年4月1日～平成34年3月31日)」に記載した計画の実施状況について自己点検評価をおこない、その妥当性を検証するため外部評価委員会による評価を実施。

2. 評価の実施方法

評価は書面審査でおこなう。研究所が作成した、令和3年度の活動概要が記入された「令和3年度業務の実績に関する外部評価報告書」、第3期中期目標期間の活動概要が記入された「第3期中期目標期間(平成28年度～令和3年度)業務の実績に関する外部評価報告書」の内容を検証。

外部評価委員会【令和3年度及び第3期中期目標期間実績評価】

- ・2022年7月15日14:00-17:00(オンライン)
 - ・議事
 1. 前回議事概要(案)確認

2. 令和3年度及び第3期中期目標期間機関拠点型基幹研究プロジェクト評価について
3. 令和3年度及び第3期中期目標期間共同研究プロジェクト評価について
4. 令和3年度及び第3期中期目標期間「コーパス開発センター」及び「研究情報発信センター」の評価について
5. 令和3年度「管理業務」の評価について
6. その他
 - 第3期中期目標期間終了時評価について
 - 次期外部評価委員会の任期について

(3) 基幹研究プロジェクトの評価

各プロジェクトリーダーが作成した「自己点検報告書」に基づいて、外部評価委員会委員による書面審査をおこなった。

3 所長賞

功績顕著な職員に対し、所長からその功績をたたえ表彰をおこない、研究所の活性化に資することを目的とするもので、学術上の功績および研究支援業務等で優れた功績があったと認められる者を対象とし、原則として年2回おこなう。

第24回所長賞：2022年度前期（2021年10月1日–2022年3月31日）

- ・所長賞
 - 松本曜（研究系教授）
 - 業績：松本曜・小原京子（編）『フレーム意味論の貢献：動詞とその周辺』，開拓社，2022.3.23.
 - 理由：全国的に定評のある学術出版社による著書・編書の国内出版
 - 守本真帆（上智大学日本学術振興会特別研究員（PD）（元研究系（理論・対照研究領域）プロジェクトPDフェロー））
 - 業績：窪菌晴夫・守本真帆（編）『プロソディー研究の新展開』，開拓社，2022.2.7.
 - 理由：その他，上記と同等と所長が判断する学術的又は社会的な業績（全国的に定評のある学術出版社による著書・編書の国内出版（単独・共同を問わないが，所員を筆頭とする著作に限る。））
- ・若手研究者奨励賞
 - 井戸美里（研究系プロジェクト非常勤研究員）
 - 業績：Misato Ido and Yusuke Kubota “The Hidden Side of Exclusive Focus Particles: An Analysis of dake and sika in Japanese”, 『言語研究』, 160号, 183–213頁.
 - 理由：日本を代表するピアレビュー誌に掲載された学術論文
 - 鈴木彩香（研究系プロジェクト非常勤研究員）
 - 業績：鈴木彩香（著）『属性叙述と総称性』，花鳥社，2022.2.
 - 理由：博士論文（ないしその改訂版）等，単著の出版，またはそれに準ずるもの

第25回所長賞：2022年度後期（2022年4月1日–2022年9月30日）

- ・特別所長賞
 - 朝日祥之（研究系准教授）
 - 業績：Yoshiyuki Asahi, Mayumi Usami, and Fumio Inoue (eds.) *Handbook of Japanese Sociolinguistics*, De Gruyter Mouton, 2022.4.4.
 - 理由：世界的に定評のある学術出版社による著書・編書の国際出版
- ・所長賞
 - 宇佐美まゆみ（研究系教授）
 - 業績：Usami Mayumi “Intersection of discourse politeness theory and interpersonal communica-

tion” in Yoshiyuki Asahi, Mayumi Usami, and Fumio Inoue (eds.) *Handbook of Japanese Sociolinguistics*, De Gruyter Mouton, 2022.4.4, pp.355–386.

- 理由：世界的に定評のある学術出版社による著書・編書の国際出版
- ▶ 松下達彦 (研究系教授)
 - 業績：2021 年度『日本語教育』論文賞(松下達彦・佐藤尚子・笹尾洋介・田島ますみ・橋本美香(2021)「日本語の語彙量と漢字力—第一言語と学習期間の影響—」, 『日本語教育』, 178 号, 139–153 頁).
 - 理由：学会レベルでの受賞
- ▶ 窪田悠介 (研究系准教授)
 - 業績：Yusuke Kubota and Robert Levine “Embedded-complement and discontinuous pseudogapping in Hybrid Type-Logical Grammar: a rejoinder to Kim and Runner”, *The Linguistic Review* (2022), De Gruyter.
 - 理由：世界を代表すると認められる専門誌に掲載された学術論文
- ▶ 宮川創 (研究系助教)
 - 業績：情報処理学会 2022 年度山下記念研究賞(「デジタルコーパスを用いたデータ駆動型の間テキスト性研究：古代末期エジプトの二人の修道院長のコプト語書簡におけるコプト語訳聖書からの引用の探知と分析」(2021)).
 - 理由：学会レベルでの受賞
- ▶ 市江愛 (東京都立大学国際センター特任助教 (元研究系プロジェクト非常勤研究員))
 - 業績：2021 年度『日本語教育』論文賞(「モシは日本語条件文の理解を促進するのか—自己ペース読文実験を用いた文処理過程から—」(『日本語教育』, 178 号, 94–108 頁, 2021.4)).
 - 理由：学会レベルでの受賞
- ▶ 本多由美子 (研究系プロジェクト非常勤研究員))
 - 業績：2022 年度「公益信託田島毓堂語彙研究基金」学術賞(『二字漢語の透明性と日本語教育への応用』, くろしお出版, 2022).
 - 理由：学会レベルでの受賞
- 若手研究者奨励賞
 - ▶ 膝越 (研究系プロジェクト非常勤研究員)
 - 業績：社会言語科学会第 46 回大会研究大会発表賞(「幼少期に中国と日本を往還した若者のアイデンティティの共通点と多様性—アイデンティティ葛藤とその解決方略に焦点を当てて—」).
 - 理由：学会レベルでの受賞
 - ▶ 氏家啓吾 (研究系プロジェクト非常勤研究員)
 - 業績：「「素人相手」「ダイエット目的」などの表現について—役割の値を指定する「名詞+名詞」複合語—」, 『日本語文法』, 22 卷 1 号, 138–153 頁.
 - 理由：日本を代表するピアレビュー誌に掲載された学術論文
 - ▶ 王慧雋 (上海対外経貿大学国際商務外語学院専任講師 (元研究系プロジェクト非常勤研究員))
 - 業績：「使役表現における「-(s)asu」形態の使用実態：『日本語日常会話コーパス』の調査」, 『日本語文法』, 22 卷 2 号, 37–53 頁.
 - 理由：日本を代表するピアレビュー誌に掲載された学術論文

4

研究教育職員の異動（2022年度の異動者）

2022. 4. 1	教授	松下達彦	採用	研究系
2022. 4. 1	准教授	中川奈津子	採用	研究系
2022. 4. 1	助教(テニュアドラッグ)	宮川創	採用	研究系
2022. 4. 1	特任助教	川端良子	採用	言語資源開発センター
2023. 3.31	所長	田窪行則	任期満了	
2023. 3.31	教授	山崎誠	定年退職	研究系
2023. 3.31	教授	宇佐美まゆみ	定年退職	研究系
2023. 3.31	特任助教	岩崎拓也	任期満了	研究系



外部評価報告書

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

令和4年度業務の実績に関する外部評価報告書

国立国語研究所 外部評価委員会

令和5年10月26日

はじめに

令和4年度（2022年度）の国立国語研究所の業務実績に関する外部評価報告書をお届けします。令和4年度は、ふたつの点で特徴的な年度になりました。ひとつは、令和4年度末をもって前所長の田窪行則が勇退したことです。所長交代にともなって、外部評価委員会のメンバーにも入れ替わりがありました。新委員会の人選にあたっては、機関拠点型研究を構成する各プロジェクトの専門性の観点に照らして、高い見識をそなえた方々をお迎えすることは当然として、同時に、これまでに蓄積された評価のノウハウも継承できるよう、一部の委員には留任していただきました。

令和4年度のもうひとつの特徴は、第4期中期目標期間（2022-2027年度）の初年度にあたることです。これは言うまでもないことですが、研究プロジェクトの運営にとって、初年度は格別に大切です。うまくスタートダッシュをきめて、そのままゴールを目指せばよいのですが、最初に大きな問題に遭遇して、その解決に時間をとられるプロジェクトもあります。しかし、おそらく一番怖れなければならないのは、どこかに問題を抱えているプロジェクトでありながら、実施担当者やその周囲の人間がそれに気づくことができずにいる場合でしょう。プロジェクトの終盤になって問題に気づくというような事態は何としても避けたいところです。外部評価委員会の先生方だけでなく、研究所員もまた少くない時間を割いて、自己点検評価や外部評価を実施する最大の意義は、実にこのような危険を予知して回避するところに認められるのだらうと思います。もちろん、順調に進んでいるプロジェクトにあっては、そのことを外部の人間の眼であらためて確認してもらうことによる精神衛生上の利点があることは言うまでもありません。今回の評価結果をみると、このような外部評価の機能は十分に発揮されているのではないかと思います。

第3期中期目標期間（2016-2021年度）の終盤2年間は、新型コロナウイルスの影響で、フィールドワークや対人実験がほとんど実施できず、インターネットを介したオンライン調査やアンケート等の工夫に頼る必要がありました。幸い第4期に入ってから感染症は下火となり、フィールドワークなども順次復活させることができています。さらに令和5年度からは総合研究大学院大学日本語言語科学コースによる大学院教育（博士後期課程）が始まり、国立国語研究所も、大学共同利用機関法人への移管後14年を経て、大学共同利用機関にもとめられる機能をフルに発揮することになります。私ども所員一同、今後とも、国立国語研究所のより一層の発展のために努力を重ねていく所存ですので、ますますのご指導ご鞭撻をお願いいたします。

令和5年10月

国立国語研究所長 前川 喜久雄

目 次

評価結果報告書	1
令和4年度機関拠点型基幹研究プロジェクト実績報告	3
令和4年度機関拠点型基幹研究プロジェクト評価結果	13
令和4年度基幹型プロジェクトの評価	16
機関拠点型基幹研究プロジェクトを構成する基幹型プロジェクトの一覧	16
「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」自己点検評価報告	17
「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」評価報告	45
「実証的な理論・対照言語学の推進」自己点検評価報告	47
「実証的な理論・対照言語学の推進」評価報告	72
「消滅危機言語の保存研究」自己点検評価報告	74
「消滅危機言語の保存研究」評価報告	80
「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」自己点検評価報告	82
「多文化社会における言語問題に関する研究」評価報告	88
「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」自己点検評価報告	90
「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」評価報告	97
「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」自己点検評価報告	98
「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」評価報告	128
「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」自己点検評価報告	130
「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」評価報告	135
令和4年度 センターに関する評価	137
「言語資源開発センター」自己点検評価報告	138
「言語資源開発センター」評価結果	142
「共同利用推進センター」自己点検評価報告	144
「共同利用推進センター」評価結果	149
「令和4年度管理業務」に関する評価	151

資料	156
1. 国立国語研究所外部評価委員名簿	157
2. 国立国語研究所令和4年度業務の実績に関する評価の実施について	158
3. 国立国語研究所外部評価委員会規程	160
4. 国立国語研究所外部評価委員会【令和4年度実績評価】（第1回）議事次第	162

評価結果報告書

令和4年度の国立国語研究所の外部評価を次のように実施しました。

令和5年10月26日 国立国語研究所外部評価委員会【令和4年度実績評価】(第1回)

その結果を以下の通り報告します。

外部評価委員会
委員長 片桐 恭弘

国立国語研究所令和4年度外部評価にあたって

本報告書は、機関拠点型基幹研究プロジェクト「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」の令和4年度分実績についての外部評価委員会の評価のまとめである。評価対象は、(1) プロジェクト全体、(2) 7つの共同研究プロジェクト（「語彙資源」、「理論対照」、「危機言語」、「言語問題」、「多世代会話コーパス」、「言語運用」、「通時コーパス」）、(3) 2つのセンター（言語資源開発センター、共同利用推進センター）、(4) 「管理業務」である。

令和4年度のプロジェクト全体に対する評価は「計画通り達成した」であり、(1) 研究体制、(2) 共同利用・共同研究、(3) 教育・人材育成、(4) 社会連携・社会貢献、(5) 国際連携・国際発信のいずれにおいても高い評価に値する。7つの共同研究プロジェクトの総合評価は、A（計画を上回って実施した）が4、B（計画どおりに実施した）が3であり、全体的に充実した研究が行われている。2つのセンターの評価はいずれもB（計画どおりに実施した）で、センターの多方面の活動とデータベース構築の成果が見られた。管理業務については、A（計画を上回って実施）が3、B（計画通り実施）が1で、全体的にきわめて良好な業務運営が行われている。

以上のように、外部評価委員会は、令和4年度の本プロジェクトの進捗状況は全体的に計画をやや上回り、順調に伸展していると評価した。令和4年度も、前年度に続き工夫を凝らして研究活動を進め、日本言語学会論文賞を始めとする複数の受賞、De Gruyter Mouton社を始めとする学術書籍出版など、高い水準の研究活動を行ったことは賞賛に値する。

本プロジェクトは、オープンデータ・オープンサイエンスに根差し、先進的なケース・スタディ、多様なコーパス開発、人材育成、国内外の研究共同体制構築を含む、日本語研究を大きく発展させる可能性を有する、国際的にも最重要な日本語研究プロジェクトと位置づけられる。外部評価委員会としては、プロジェクトに携わる各人がそのことを意識し、最終年度まで高い研究水準を維持し、プロジェクトの完遂に励むことを強く希望する。

令和5年10月

外部評価委員会
委員長 片桐 恭弘

令和4年度機関拠点型基幹研究プロジェクト実績報告

機関拠点型基幹研究プロジェクト「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」
代表者：前川 喜久雄

1. 第4期中期計画

国立国語研究所は、機関拠点型基幹研究プロジェクトに関する第4期中期計画及び評価指標として以下を掲げている。

日本語・日本語教育分野における基幹研究の推進：学術的・社会的要請に対応した大規模な言語資源開発や言語調査を実施し、その実証的データに基づく理論的・応用的日本語研究を国内外の研究者や大学等研究機関と連携して推進するとともに、研究所が有する研究資料・言語資源等を活用した公募型共同研究及び異分野融合による公募型共同研究を実施する。これにより、新たな研究領域を創出し、日本語研究及び日本語教育研究を先導する国際的学術研究拠点としての機能を強化する。

- 評価指標
- ・国語研究所が提供する言語のデータベース（言語資源）の利用登録者数、検索クエリ数、言語資源を活用した論文数を、第4期中に、5万人以上、1,200万件以上、3,000本以上とする。
 - ・新領域「言語資源学」の創出に関わる研究シリーズを立ち上げ第4期中に4冊以上刊行する。

2. 機関拠点型プロジェクトの構成

上記の計画を達成するために、「語彙・辞書」「理論・実験」「フィールド・社会調査」「教育・発達」という4つの研究領域を設定し、領域ごとに次に示す6つの研究班を構成して機関拠点型プロジェクト「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」を実施するとともに、言語資源開発センターのプロジェクトとの連携によりコーパス・アーカイブ化を推進することで、オープンサイエンス・オープンデータの体制を強化する。

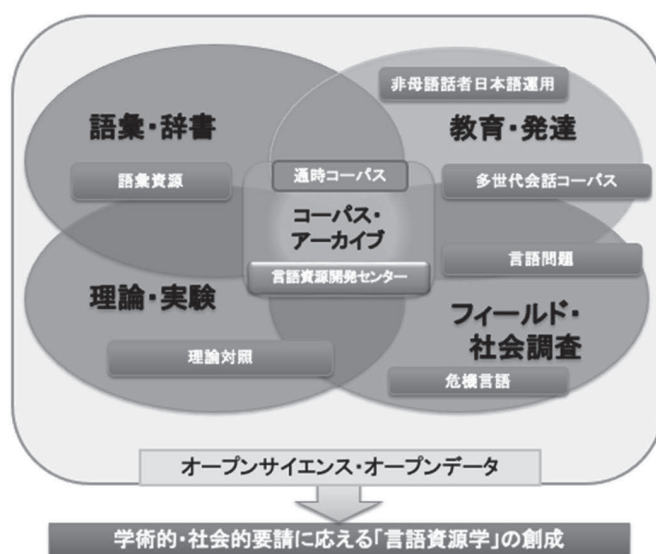


図1 機関拠点型プロジェクトと領域

機関拠点型プロジェクト「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」

- ・「語彙資源班」多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創（小木曾智信）
- ・「理論対照班」実証的な理論・対照言語学の推進（浅原正幸）
- ・「危機言語班」消滅危機言語の保存研究（山田真寛）
- ・「言語問題班」多言語・多文化社会における言語問題に関する研究（朝日祥之）
- ・「多世代会話コーパス班」多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究（小磯花絵）
- ・「非母語話者日本語運用班」多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究（石黒圭）

言語資源開発センター 基幹研究プロジェクト

- ・「通時コーパス班」開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張（小木曾智信）

3. 令和4年度の研究体制

（1）研究班の体制

令和4年度は6年計画の初年度にあたる。上記計画を達成するために、7つの研究班では次の計画で令和4年度の研究を進めた。

- ・語彙資源班：サブグループ「辞書使用調査」「空間接続」「学習者辞書」「語彙資源ポータル」「基本語機能語バンク」を組織し、各種語彙資源のデータ整備を進めるとともに、形態素解析用辞書のデータベース検索ツールの公開、形態素解析用辞書の更新・公開などを行う。
- ・理論対照班：サブグループ「アノテーション」「イントネーション」「計算言語学」「体言化」「述語の意味文法」を組織し、各種アノテーションの整備、諸言語の動詞や日本語・琉球諸語のイントネーションに関する調査などを進める。また国際シンポジウムを開催する。
- ・危機言語班：危機言語のフィールド調査を進めるとともに、危機言語データベースをリニューアルする。危機言語サミットや市民科学者育成のための研修会などを開催する。
- ・言語問題班：社会調査データの実施とデータの整備などを進めるとともに、研究発表会を開催し、研究成果をまとめた書籍・論文を刊行する。
- ・多世代会話コーパス班：子どもの日常会話や小学校での話し合い活動を対象とするコーパスなどの整備を進めるとともに、コーパス活用のための講習会を開催する。
- ・非母語話者日本語運用班：サブグループ「学習者作文」「学習者談話」「作文教育支援」「生活者談話」「生活者識字」を組織し、海外の大学と連携し作文・談話データを収集するとともに、作文教育支援システムの設計や定住外国人の談話縦断調査、よみかき実践調査を実施する。
- ・通時コーパス班：『昭和・平成書き言葉コーパス』や『日本語歴史コーパス』増補データを整備して公開する。またコーパスを活用した日本語史研究に関する書籍を刊行する。

これらの研究班は、(1)異分野融合研究を推進するために第4期に新たに開始した外部研究者をリーダーとする公募型の異分野融合型共同研究3件や、(2)研究所の共同利用性を高めるために2020年度から開始した、研究所が保有する研究資料や蔵書、実験機器等を活用する3種類の共同利用型共同研究25件、(3)人間文化研究機構・共創先導プロジェクト4件、(4)人間文化研究機構・広領域連携型2件と連携して調査・研究を推進した。各班は、研究者ネットワークを構築するために、表1の通り国内外の研究者を共同研究員として組織して研究を進めた。

表1 共同研究員数

(人)

研究班	共同研究員数	所外共同研究員 (内数)	PD, 大学院生数 (内数)	海外 (内数)
語彙資源班	138	119	6	18
理論対照班	170	147	20	16
危機言語班	75	60	8	5
言語問題班	36	27	2	7
会話コーパス班	120	109	13	4
日本語運用班	114	100	14	44
通時コーパス班	36	30	2	3
計(延べ数)	689	592	65	97

(2) 進捗状況の管理や評価の体制

各班の進捗状況を管理するために「共同研究プロジェクト推進会議」を毎月開催し、各班の活動報告、データベース構築計画・公開状況、合同シンポジウムの企画などを行い、相互に連携して研究活動を進めるとともに、自己点検・評価委員会を設置し、プロジェクト全体の自己点検・評価を行った。また言語資源開発センターを中核とする体制のもと、コーパス構築を担当する各班のメンバーが参加する「プロジェクト横断コーパス会議」を毎月開催し、コーパス構築法の共有化や問題の検討、コーパス講習会の企画など、計画的・体系的に言語資源開発を進めた。

(3) 共同利用・共同研究拠点の強化の取り組み

言語資源等の共同利用を更に促進するために「研究情報発信センター」を「共同利用推進センター」に改組、またコーパスに留まらない言語資源の開発・研究を加速し新領域「言語資源学」を創成するために「コーパス開発センター」を「言語資源開発センター」に改組した。

研究所が保有する研究資料や蔵書、実験機器等を活用する公募型プロジェクト「共同利用型」について、今年度は新規に14件（継続を含めて計25件）採択し、共同利用・共同研究拠点の強化につとめた。また共同利用型プロジェクトや利用可能な研究資料等の周知を目的に「2022年度共同利用セミナー」を令和4年9月12日にオンラインで開催し、共同利用型プロジェクトの成果発表と研究所の収蔵資料群の紹介を行った。

(4) プロジェクト間の連携体制

機関拠点型プロジェクトの6年間の計画と初年度実績を紹介するために、全ての班が参加するNINJALシンポジウム「言語資源学の創成：開かれた言語資源による日本語研究」を令和4年12月10日にオンラインで開催した。

(5) 大学・研究機関との連携体制

既存の協定30件（国外15件、国内15件）に加えて、謡曲データベース構築に関する共同研究を進めるために野上記念法政大学能楽研究所と令和4年9月に学術交流協定を、またマラティー語の方言における体言化に関する共同研究を進めるためにデカン・カレッジ・ポスト・グラデュエイト・アンド・リサーチ・インスティテュートと令和4年7月に学術交流協定を新規に締結し、連携体制を強化した。

4. 令和4年度の活動内容

4. 1. 調査研究活動・研究成果の公開

(1) 各班の活動の概要

各班は、3(1)に示した令和4年度計画に従い次の通り活動した（詳細は各班の自己点検評価報告書参照）。

- ・語彙資源班：海外6カ国の日本語学習者の辞書ツール使用の実態調査や、「日本語格助詞データベース」の見出し語の執筆などを進めるとともに、形態素解析用辞書 UniDic や形態素解析用辞書の検索ツール UniDic Explorer（試験版）、言語地図画像データ、IPAL PowerBI レポート・html 版などを作成して公開した。いずれも計画通り語彙資源の整備・公開を進めたが、学習者の辞書ツール使用調査は特に海外での調査で予定を大きく上回って実施した。
- ・理論対照班：日常会話コーパス係り受けアノテーションや分類語彙表に基づく形容詞・動詞結合価データベースを作成・公開するとともに、電話会話コーパスのアノテーション、琉球語方言のイントネーション調査、体言化に関するフィールドワーク、動詞類についてのデータ収集を進めるなど、計画通りデータ整備・調査を進めた。また国際学会 HPSG 2022（名古屋大学と共催）および NAMED 2022（京都大学と共催）や国際ワークショップ7件を開催した。
- ・危機言語班：13地点計23回のフィールド調査を行い各地点の地域言語データを収集するとともに、消滅危機言語・方言のデータを紹介・公開する「危機言語データベース」のリニューアル（語彙データベースに出典情報と同源語 ID を追加するなど機能拡張）をするなど、計画通り調査等を進めた。また危機言語サミット（奄美大会）や、地域言語の記録と継承を行うことができる市民科学者の育成を目的とする研修会・出前授業・講座を開催した。
- ・言語問題班：全国規模の社会調査（行政情報を分かりやすく伝える工夫に関する意識調査、外来語使用実態調査）を2件、特定地域・地点を対象とした調査（略字・俗字に関する web 調査、音韻調査、アクセント調査、言語景観調査）を16件実施するとともに、調査データの整備を進めるなど、計画通り研究を進めた。また研究発表会を3月11日、12日にオンラインで開催するとともに Handbook of Japanese Sociolinguistics (De Gruyter Mouton 社) を刊行した。
- ・多世代会話コーパス班：子どもの日常会話や小学校・幼稚園での話し合い活動の収録およびコーパス整備を進め、子どもの日常会話17時間について共同研究員に限定して公開するとともに、『日常会話コーパス』リレーショナルデータベースを新規に構築・公開、『名大会話コーパス』の形態論情報を人手修正して再公開するなど、計画通りコーパス整備・公開を進めた。また若手研究者や大学院生を主対象とする講習会・チュートリアルを3回開催した。
- ・非母語話者日本語運用班：海外の18大学と連携して学習者の作文談話データを、海外の15大学と連携して学習者の談話データを収集するとともに、定住外国人の日本語会話の縦断調査や作文添削支援システムの設計を行った。いずれも計画通り調査等を進めたが、令和5年度公開予定だった談話データベース（中国の学習者約136時間）を年度内に公開したほか、当初計画になかったベトナム・タイの学生にまで広げて調査を実施した。
- ・通時コーパス班：『昭和・平成書き言葉コーパス(SHC)』や『日本語歴史コーパス(CHJ)』増補データの整備を進め、SHC 試験版と CHJ 増補データ9件を公開するとともに、オックスフォード大学と連携してオックスフォード・NINJAL 上代語コーパスの検索インターフェイスに辞書機能を追加するなど、計画通りコーパス整備・公開を進めた。また『コーパスによる日本語史研究 中古・中世編』（ひつじ書房）の刊行や若手を対象とするコーパス講習会を2回行った。

(2) 研究成果の発信

- ・各班は計 22 件の共同研究発表会を開催してプロジェクトの活動を推進するとともに、16 件の国内シンポジウム・ワークショップ等（参加者延べ 2749 人）、10 件の国際シンポジウム・ワークショップ等（参加者延べ 563 人）を開催して研究成果を広く発信した。このうち Evidence-based Linguistics Workshop(9月5・6日)は神戸大学人文科学研究科との学术交流協定に基づき共同開催されたものであり、発表の公募も行うなど大学と連携して運営した。また 3 件の国際シンポジウム・ワークショップ等は、国際学术交流協定を締結している海外の大学 3 校とそれぞれ共催で開催したものである（詳細は 4.4「国際連携・国際発信」参照）。
- ・研究成果をとりまとめ、5 冊の書籍を国際出版、6 冊の書籍を国内出版、2 冊の報告書をホームページで公開した。国際出版 5 冊のうち 3 冊は、De Gruyter Mouton 社との出版協定に基づくシリーズでて刊行されたものである（詳細は 4.4「国際連携・国際発信」参照）。
- ・共同研究員を含む国語研の研究者を中心として、研究活動・成果を報告し情報交換を行う場である NINJAL サロンを 10 回（参加者延べ 400 人）、国内外の優れた研究者による講演会である NINJAL コロキウムを 11 回（参加者延べ 484 人）開催した。
- ・プロジェクトを中心とする研究所の研究活動の活性化と成果の発表および所内若手研究者の育成を目的として『国立国語研究所論集』第 23 号（7 月）・24 号（1 月）を刊行した。

(3) 言語資源・ツール等

- ・外部機関と連携して言語資源・検索ツール等の整備を行い、①コーパス 3 件、データベース 6 件、アノテーション 1 件、辞書 2 件、映像画像データ 25 件、ツール等 1 件の新規公開、②コーパス 8 件の追加公開、③コーパス 2 件、辞書 2 件、ツール等 2 件の更新、④データベース 1 件の機能拡張を行った。新規公開のコーパス 3 件とツール 1 件は、日本語を学習している中国語母語話者の発話及び作文データを 4 年間に渡って収集した『北京日本語学習者縦断コーパス』、1933～2013 年の期間 8 年おきに各年約 300 万語の雑誌・ベストセラー書籍を納めた『昭和・平成書き言葉コーパス』、日本経済新聞社が研究用途に無償公開した 96 記事に形態論情報・係り受け情報を人手で行い CC BY-NC-SA で公開した『日本経済新聞記事オープンコーパス』、及び、中納言で公開している歴史コーパスの形態論情報の誤りを利用者が報告できるコーパス形態論情報修正システム「みんなごん」である。
- ・コーパスの一部は言語資源開発センターが管理するオンライン検索システム「中納言」で公開されており、ユーザ総数 44,941 人、うち令和 4 年度の新規登録ユーザ数は 7,945 人、利用登録コーパス数は 24.7 万件以上、年間検索数は 220 万件以上と、広く研究に活用された（図 2）。

なお、機関拠点型基幹研究プロジェクトに関する第 4 期中期計画の評価指標を「言語資源の利用登録者数・検索クエリ数を第 4 期中中に 5 万人以上、1,200 万件以上」としているが、この数値は、第 3 期 2020 年度までの 5 年間の実績（利用登録者数 2.5 万人、検索クエリ数 500 万件（100 万件/年））を踏ま

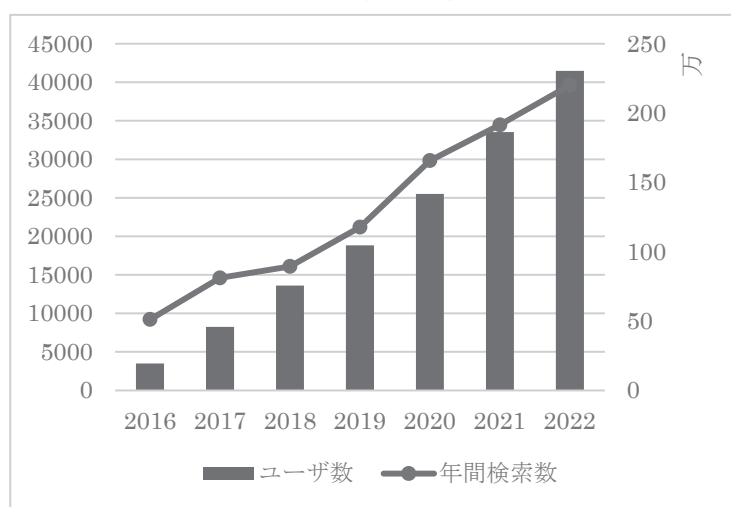


図 2 「中納言」登録ユーザ数(左軸)・年間検索数(右軸)

え、第4期の6年間で2倍以上にすることを目標に設定したものである。令和4年度もコーパス関連の講習会や授業、コーパス関連書籍等を通じてユーザ層を広げたことから、今後も同様に活動を続ければこの目標を達成することができる見通しである。また言語資源を活用した論文数について、第3期の1.4倍に相当する3,000本（年500本）を指標に掲げている。論文数については現在集計中であるが、現時点で439件であり、令和4年度については年500本を下回る可能性が高い。今後、講習会等を通じて言語資源を活用した研究の活性化を図る。

（4）共同利用性向上の取り組み

共同利用推進センターが中心となり各班と連携しながら以下の取り組みを実施した。

- ・国語研の研究成果のオープンアクセス化を加速させるため、オープンアクセス方針に沿って言語資源等を含む研究成果の公開を推奨し、「国立国語研究所学術情報リポジトリ」での登録・公開を進めた。今年度追加219件、総数3,020件となった。ダウンロード回数26.3万である。
- ・日本語研究・日本語教育研究の共同利用に供するため、当該分野の図書・雑誌論文等の書誌情報を整備し、「日本語研究・日本語教育文献データベース」に5,742件を追加登録しセッション数は19万となった。
- ・研究資料室収蔵資料の利活用のため、収蔵資料目録の整備を進め、「国立国語研究所研究資料室収蔵資料」データベースを増補拡充した。資料群の新規公開は18件、収蔵資料目録試行版の追加登録は1,809件、セッション数は5,700となった。
- ・国立国語研究所が所蔵する音声・映像資料の媒体変換（デジタル化）を進め、所内専用試視聴システム「所蔵音声・映像データベース」を増補拡充した。音声資料173件、映像資料46件を追加した。

（5）異分野融合研究

- ・I-URIC 機構間連携プロジェクト（高エネルギー加速器研究機構・情報・システム研究機構など複数の大学共同利用機関が関わるプロジェクト）に参画し、短歌を読む際の情動に関する脳活動の解析などの研究に協力した。またIU-REAL 異分野融合・新分野創出プログラム2023年度スタートアップ「素粒子実験のデータ解析技術を応用した日本語テキストの数理的解明」が採択された。
- ・異分野融合研究を推進するために第4期に新たに開始した外部研究者をリーダーとする公募型の異分野融合型共同研究3件を採択し、国語研教員3名がコーディネーターとなり連携して研究を進めた。

4. 2. 教育・人材育成

（1）大学との連携による教育

- ・一橋大学大学院言語社会研究科との協定に基づき教員3人が授業を行ない、博士学位論文審査の副査1件を担当した。また東京外国語大学大学院国際日本学研究院とのクロスアポイントメント制度により教員2人が授業を担当したほか、NINJAL ユニット講演会2件を開催した。
- ・総合研究大学院大学「日本語言語科学コース」の2023年4月開設に向けて設置準備を進めるとともに、令和4年9月10・13日に所内で大学院説明会を開催したほか、言語処理学会など8つの学会でブースを出展し、広報を行った。

(2) 若手人材の育成

- ・若手研究者のキャリアパスとして特任助教1人とプロジェクト非常勤研究員72人を雇用したほか、日本学術振興会の特別研究員PDを1名受け入れ、プロジェクトへの参画などを通して実践的に日本語研究を推進できる人材の育成につとめた。その成果を含む著書が2022年度田島毓堂賞（学術賞）を受賞、また論文が令和4年度日本言語学会論文賞を受賞した。またテニュアトラック助教が情報処理学会2022年度山下記念研究賞を受賞した。
- ・故宮地裕氏（大阪大学名誉教授）の遺志に基づいた寄附金により、日本語研究の振興及び優秀な若手研究者の奨励・育成のために、令和4年6月に宮地裕日本語研究基金を創設し、基金の事業として「宮地裕日本語研究基金学術賞」「宮地裕日本語研究基金学術奨励賞」「総研大日本語言語科学コース特別奨学金」「総研大日本語言語科学コース学生会発表支援金」を設けた。「宮地裕日本語研究基金学術賞」「宮地裕日本語研究基金学術奨励賞」について、11月1日から1月10日かけて公募し、予備審査・一次審査を行った。なお令和5年5月に若手研究者2人の学術奨励賞の受賞が決定した。
- ・若手研究者を育成するために、各班の研究テーマに即した若手研究者向けのチュートリアル・講習会を14回開催し、合計で704人が参加した（「機関拠点型R4_別添資料.xlsx」シート「講習会」参照）。このうち1回は、韓国日語教育学会及び韓国日本語学会との学術交流協定に基づいて開催されたものである。また8回はコーパス利用のための講習会とした。こうした取り組みにより、大学の授業でコーパスを利用できるオンライン検索アプリケーション「中納言」の講義用アカウントを126件、計4,216人の学生等に発行するなど、コーパスが授業で広く活用された（「機関拠点型R4_別添資料.xlsx」シート「中納言授業用アカウント」参照）。
- ・新領域「言語資源学」に関する研究シリーズを立ち上げるために、各巻の構成、担当者、執筆者を概ね確定させた。また、紙媒体での出版に加えてオープンアクセスでの電子出版の可能性をいくつかの出版社に打診し、最終的に1社から出版の承認を得た。
- ・大学生・大学院生向けに「言語学レクチャーシリーズ」パイロット版を新たに5本作成してYouTube国語研チャンネルにて公開し、既公開分とあわせ年間63,200回再生された。
- ・若手研究者のモチベーションを高めるために、「言語資源ワークショップ2022」において若手研究者向けの賞を設置し、優秀発表賞を1人に授与した。

(3) 社会人の学び直しへの貢献

- ・日本語教師等を対象とする「NINJAL日本語教師セミナー」を国内外で1回ずつ開催し、延べ195人のスキルアップに貢献した（表2）。

表2 日本語教師セミナー等一覧

イベント名	開催場所	開催日	参加者数
NINJAL日本語教師セミナー(海外)『『BTSJ 1000人日本語自然会話コーパス』と NCRB(Natural Conversation Resource Bank)の開発の趣旨と日本語教育における活用法』	中国文化大学 国立高雄科技大学	R5/3/4-5	78
NINJAL日本語教師セミナー(国内)「スマホを使った日本語学習者の辞書検索を支援するー世界の日本語学習者の辞書ツールの使用実態からー」	オンライン	R5/3/9	117

4. 3. 社会連携・社会貢献

(1) 研究成果の社会への普及

- ・研究成果を分かりやすく一般に向けて発信するフォーラム・イベント等を開催した（表3）。令和4年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、昨年度に引き続き学生や一般向けのイベントであるオープンハウスやニホンゴ探検をオンライン開催し、13件の動画コンテンツを公開したところ、9,648件の参加（アクセス）があった。

表3 一般向けフォーラム・イベント等一覧

公開日	イベント名	開催場所
R4/8/1	ニホンゴ探検 2022	オンライン
R4/9/1	国立国語研究所 オープンハウス 2022	オンライン
R5/2/18	第17回 NINJAL フォーラム「語彙資源の構築と活用」	オンライン

- ・研究成果を一般に向けて伝えるために2021年11月に刊行した書籍『日本語の大疑問-眠れなくなるほど面白いことばの世界』（幻冬舎新書）が重版（8刷，9刷，計8,000部。累計発行部数71,000部）された。これは国語研に関わる所内外の研究者が執筆し、ポータルサイト「ことば研究館」に掲載した記事を再編集したもので、電子書籍，オーディオブックでも継続して配信されている。
- ・国語研ポータルサイト「ことば研究館」において，ことばに関する一問一答式の記事「ことばの疑問」26本および各種催し物，メディア掲載情報など，ことばに関する一般向けコンテンツを発信した。また研究所の研究活動や研究者などを紹介する一般向け広報誌『ことばの波止場』をリニューアルし，Vol.12を3月に刊行した。
- ・ことばの研究を通じて学問の楽しさを知ってもらおう中学生・高校生対象のNINJAL 職業発見プログラムとして，新潟県立国際情報高等学校の生徒19人(7月29日)，新潟県立長岡高等学校の生徒23人(10月7日)など5件70人を受け入れ，ことばに関する講義や研究所見学を実施した。また，小学生向けのNINJAL ジュニアプログラムとして，2月9日に国分寺市立第三小学校6年生145名を対象に，キャリア教育の一環として研究者という職業についての出前授業を実施した。

(2) 地方自治体との連携

- ・消滅危機言語の記録保存・継承保存を研究者が地域言語コミュニティのメンバーと協働して進める「言語復興の港」活動を継続して行った結果，「島独自の言葉で語られる昔話を絵本の形で残したり，島民の協力を得ながら，親子で楽しむ本の読み聞かせ活動を行ったりするなど，次世代にその地域言語が継承されるよう持続可能な言語復興をスローガンに掲げ活発に取り組んでいる」として，ダイキン工業株式会社・琉球放送株式会社から，沖縄県の芸術・文化・スポーツ・教育・環境等の振興支援を目的としたオーキッドバウンティ賞を2023年2月に受賞した。
- ・危機言語・方言の保存・継承活動のネットワーク的機能をもつ「危機的な状況にある言語・方言サミット（奄美大会）沖永良部」を文化庁や地方自治体等と共催で2023年1月28-29日に開催した。今回のサミットでは新たに「ブース発表」を設け，各地で継承保存を行っている9組が取り組みを発表し，研究成果を地域に還元するだけでなく，来場者と合わせて情報交換を行う機会を設けた。国語研からも2人がブース発表に参加した。
- ・鹿児島県大島郡和泊町・知名町（沖永良部島）や鹿児島県大島郡和泊町との協定に基づき，知名町中央公民館講座町職員研修会（毎月1回開催）や和泊町職員方言研修会，町広報誌での連載な

どを通して、地域言語コミュニティ内で地域言語の記録と継承を行うことができる市民科学者の育成を行った。

(3) 産学連携

- ・コーパスを活用した産学連携研究として、民間企業5社と共同研究を行った。リクルート社やLegalOn社との共同研究に基づき、同社から係り受け解析の新しいモデルと形態素解析モデルをそれぞれ公開した。
- ・小学館出版局との連携協定の下で「新編日本古典文学全集」を活用して『日本語歴史コーパス』の更新を行い、JapanKnowledge本文へのリンクを継続した。
- ・作文の自動評価システム開発のため、富士通の富士通研究所を中心としたAIの専門家と連携して研究を進めた。

4. 4. 国際連携・国際発信

(1) 国際的協業

- ・海外機関に所属する研究者延べ97人を共同研究員に加え、海外の研究と連携を図りながら共同研究を推進した。また、海外の研究者3人を外来研究員として受け入れ、共同研究を推進した。
- ・次の通り海外の機関・研究者と連携して調査を進めた。
 - ・作文データ調査：中国7大学、台湾2大学、韓国2大学、ベトナム3大学、タイ1大学、フランス1大学、スロヴェニア1大学、イギリス1大学の計18大学との共同調査体制を構築し、学習者936人（開始時）を対象に作文データの調査を行い、計1754本の作文データを収集した。国際的な研究拠点を形成して調査の連携を高めるために、中国の天津外国語大学、台湾の東呉大学、韓国の韓国外国語大学校とは学術交流協定を締結しているが、連携をより強化するためにベトナムのドンア大学とも協定締結に向けて準備を進めた。
 - ・談話・作文のオンライン縦断調査：中国の西安外国語大学、ベトナムのベトナム国家大学ハノイ校外国語大学、タイのチュラーロンコーン大学と連携し、大学の学生を対象に談話・作文のオンライン縦断調査を実施した。更に連携を強化するために西安外国語大学と学術交流協定提携の準備を進めた。
 - ・辞書ツール使用実態調査：韓国・中国・台湾・ベトナム・ドイツといった海外の大学と連携し、各国の大学に通う日本語学習者（計97人）の辞書ツール使用の実態調査を行った。
 - ・オックスフォード・NINJAL上代語コーパス：オックスフォード大学との学術交流協定にもとづき『オックスフォード・NINJAL上代語コーパス』の開発を継続して行い、令和4年度は検索インターフェイスに辞書機能を追加してウェブページの更新を行なった。

(2) 研究成果の国際的発信

- ・研究成果を国際発信するために、De Gruyter Mouton社とOxford University Press社から5冊の書籍を出版した（表5）。このうち2冊はDe Gruyter Mouton社との協定に基づくHandbooks of Japanese Language and Linguisticsシリーズ（HJLL）の8巻と12巻であり、これにより全12巻のうち10巻の刊行が終了した。同社とは第3期に、国際シンポジウム等の成果を英語で発信するためのシリーズMouton-NINJAL Library of Linguistics（MNLL）の出版協定を結び、令和4年度にはじめて、所員が編集に携る1冊を含む2冊が刊行された。また2021年には危機言語に関するオンライン叢書シリーズEndangered and Lesser-Studied Languages and Dialects（ELSL）の出版協定をオランダのBrill社と締結し、令和4年度にはじめて第3期の危機言語プロジェクトの

成果を含む1冊がオープンアクセスで刊行された（編者が国語研外の共同研究員であるため表5には含めていない）。

表5 国際出版の書籍一覧

著者・編者	書名	出版社
Y. Asahi, M. Usami & F. Inoue (Eds.)	Handbook of Japanese Sociolinguistics (HJLL)	Mouton
A. Bugaeva (Ed.)	Handbook of the Ainu Language (HJLL)	Mouton
H. Hoji, D. Plesniak & Y. Takubo (Eds.)	The Theory and Practice of Language Faculty Science (MNLL)	Mouton
M. Yamazaki et al. (Eds.)	Quantitative Approaches to Universality and Individuality in Language	Mouton
H. Kubozono, J. Ito & A. Mester (Eds.)	Prosody and Prosodic Interfaces	Oxford Univ. Press

- ・令和4年度は10件の国際シンポジウム・ワークショップ等（参加者延べ563人）を開催して研究成果を広く発信した（「機関拠点型R4_別添資料.xlsx」シート「シンポジウム等」参照）。このうち3件は、学术交流協定を締結しているハワイ大学マノア校、デカン・カレッジ・ポスト・グラデュエイト・アンド・リサーチ・インスティテュート、及びインド工科大学マドラス校と共催で開催したものである。
- ・日本語学的・言語学的にパイオニア的価値を持ち、その評価がほぼ確立した日本語論文を英訳し、Pioneering Linguistic Works in Japanとして3点を追加公開した。

令和4年度機関拠点型基幹研究プロジェクト評価結果

プロジェクト名：「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」

令和4年度の評価

《達成状況の評価結果》

計画通り達成した

(判断理由等)

国立国語研究所は機関拠点型基幹研究プロジェクトに関する第4期中期計画に、日本語・日本語教育分野における大規模言語資源開発・言語調査の実施、実証的データに基づく理論的・応用的日本語研究の推進、異分野融合による共同研究実施、新たな研究領域の創出、国際的学術研究拠点機能強化を挙げ、研究推進の評価指標として、言語資源の利用、言語資源を活用した論文、学術書籍出版に関する定量的指標を設定している。

この計画の下で「語彙・辞書」「理論・実験」「フィールド・社会調査」「教育・発達」の4研究領域を設け、6研究班を構成して研究推進に当たり、多世代会話コーパスをはじめとする各種コーパスの収集、辞書ツール・コーパスアノテーションの整備、危機言語データベース拡充、日本語学習者作文データの収集を着実に進め、国内外の大学・研究機関との連携、若手研究者の育成を通じて言語資源を活用した日本語の実証的・応用的研究を積極的に推進している。その成果として各種言語資源の構築と国内外でのアクセスの増加、学術書の国際出版5冊をはじめとする優れた学術的成果を創出した。また、26回にのぼる多くの国際・国内シンポジウムを開催して研究成果発信を行っている。

これらの活動は大学・大学院教育への参画による教育・人材育成、日本語教師セミナー開催による日本語教師の学び直し・スキルアップ、IT系企業との産学連携による自然言語処理モデル開発、地方自治体との連携による地域言語記録・継承を担う市民科学者育成など多岐にわたる有意義な貢献へとつながっている。

プロジェクト活動の順調な継続によって第4期中の各種評価指標は達成の見通しである。令和4年度の研究プロジェクトは計画通り達成したと判断する。

【プロジェクト全体の連携活動に関する評価】

(1) 研究体制について

機関拠点型プロジェクト実施のために「語彙・辞書」「理論・実験」「フィールド・社会調査」「教育・発達」の4研究領域を設け、語彙資源班、理論対照班、危機言語班、言語問題班、多世代会話コーパス班、非母語話者日本語運用班、通時コーパス班の6研究班を構成し、言語資源開発センターとの協力の下で研究推進にあたっている。共同研究プロジェクト推進会議、プロジェクト横断コーパス会議を定期的に開催して各班の研究進捗管理を行っている。研究班には異分野融合型共同研究、共同利用型共同研究、人間文化研究機構における連携プロジェクトが含まれ外部研究者との連携、研究者ネットワーク構築にも配慮されている。これらのことから「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」の推進に必要な体制が適切に組織されていると判断される。

大学との連携に関しては、国内8大学、国外13大学と協定を締結して大学の教育・研究・地域貢献活動の強化に貢献している。さらに120にのぼる大学の講義において学生向けに言語資源検索用の

中納言アカウントを継続して発行して言語資源の教育・研究の発展を支援していることは特筆に値する。

(2) 共同利用・共同研究について

形態素解析用辞書 UniDic など辞書ツールの作成・公開，日常会話コーパス係受けアノテーション作成・公開，社会調査，フィールド調査に基づく危機言語データベースの拡充，多世代会話コーパスの整備，日本語学習者の作文談話データの収集，通時コーパスの整備・公開，それらに合わせた学術書籍の出版が順調に進展しており，コーパス 3 件，データベース 6 件，アノテーション 1 件，辞書 2 件，映像画像データ 25 件，ツール等 1 件の新規公開，コーパス 8 件の追加公開，コーパス 2 件，辞書 2 件，ツール等 2 件の更新，データベース 1 件の機能拡張が行われた。言語資源検索システム中納言の利用者数・検索数は順調に増加しており，利用者数 5 万人，検索数 1,200 万件という第 4 期中期計画の評価指標は達成可能との見通しを得ている。書籍についても，国際出版 5 冊，国内出版 6 冊，報告書 2 冊を公開している。研究業績の量的側面については順調，一部予定を上回る成果を挙げていると判断される。

De Gruyter Mouton 社，Oxford University Press から学術書 5 冊を出版していることを高く評価できる。また，ひつじ書房から「コーパスによる日本語史研究」の学術書を出版，国立国語研究所論集 23, 24 号を刊行など学術的意義の高い成果をあげている。計 22 回にのぼる共同研究発表会の開催，国内外の大学との学術交流協定に基づく共催シンポジウム・ワークショップを含む 26 件のシンポジウム・ワークショップの開催を通じて研究成果発信と研究者交流の社会的意義の高い活動を積極的に実施している。

国内 16 機関，国外 16 機関と学術交流協定を締結し，日本語研究・日本語教育に関する共同研究を組織的に進めている。その一環として神戸大学との共催による Evidence-based Linguistics Workshop など学術交流協定大学との共催でシンポジウム・ワークショップを開催した。国内外の大学・研究機関との組織的で有意義な連携を実現している。

共同利用推進センターが中心となって進められている，言語資源を含む研究成果のオープンアクセス化加速の活動，国立国語研究所学術情報リポジトリ，日本語研究・日本語教育文献データベース，国立国語研究所研究資料室収蔵資料データベースなどの拡充も，国内外の大学・研究機関との連携拡大につながる着実な活動として評価できる。

複数の大学共同利用機関が関わる機構間連携プロジェクト，異分野融合・新分野創出プログラムに参画して，情動の脳活動解析や素粒子実験データ解析技術のテキスト研究への応用など，異分野研究者との共同による挑戦的研究テーマに積極的に取り組んでいる。

これらの研究成果から，計画通り研究業績が積み重ねられていると判断される。

(3) 教育・人材育成について

一橋大学大学院言語社会研究科，東京外国語大学国際日本学研究者との協定あるいはクロスアポイントメント制度を利用して授業担当・大学院生指導に携わった。また，総合研究大学院大学での日本語言語科学コース開設に向けた設置準備を進めている。国立国語研究所の研究成果を大学教育に展開する活動として高く評価される。

国立国語研究所で開発した言語資源にアクセスするツールとして整備されている中納言システムの大学における利用促進のためにアカウント発行を継続的に進めており，120 にのぼる大学その他の教育機関で利用されている。研究成果を活用した言語資源に基づく日本語・日本語教育研究を発展のための教育的普及活動として高く評価できる。

若手研究者を特任助教、プロジェクト非常勤研究員として雇用して若手研究人材の育成に取り組んでいる。その成果の著書・論文が出版賞や日本言語学会論文賞受賞に結びついている。若手研究者育成のためのチュートリアル・講習会を定期的に開催して若手研究者の研究レベル向上に取り組んでいる。日本語教師セミナーを国内外で開催して日本語教師の学び直し・スキルアップに貢献する活動も実施している。若手研究者育成・社会人学び直しに関して着実に取り組んでいると評価できる。若手研究者の育成も活発に行った。特任助教を7人雇用し、特任助教の研究書『コーパスと近代日本語書き言葉の一人称代名詞の研究』が令和3年度 田島毓堂賞（学術賞）を受賞した。若手研究者の育成のために、若手研究者向けのチュートリアル・講習会を14回開催し、合計で809人（学生365人以上）が参加した。また、大学生・大学院生向けに「言語学レクチャーシリーズ」パイロット版を新たに8本作成してYouTube 国語研チャンネルにて公開し、「言語資源活用ワークショップ 2021」において若手研究者向けの賞を設置し、優秀発表賞を1人に授与するなど、若手研究者の研究支援に務めた。

社会人の学び直しへの貢献では、日本語教師等を対象とする「NINJAL 日本語教師セミナー」を国内外で1回ずつ、その他2件を開催した。

（4）社会連携・社会貢献について

民間企業5社と産学連携共同研究体制を組織して、自然言語処理モデルの研究結果公開につなげていることは評価される。

地方自治体との連携により危機言語・方言の保存・継承活動への参画、研修実施による地域言語記録・継承を支える市民科学者育成活動を進めている。これは地域の言語・文化の振興支援への貢献として評価される。

今後は言語資源開発の専門組織として社会的に注目を集めている大規模言語モデル開発に対しても積極的な貢献を期待する。

研究成果の分かりやすい一般向け発信を目的としたフォーラム・イベントをオンラインで3回実施している。オンラインの特長を活かして動画コンテンツ公開を行い、1万件近いアクセスを得ている。一般向けの新書書籍の重版、国語研ポータルサイト「ことば研究館」を通じた発信など国語研の研究成果を分かりやすい形で発信する活動が着実に実施されている。今後もオンラインと紙媒体を効果的に活用して広範な研究成果の社会普及に取り組むことを期待する。

（5）国際連携・国際発信について

Oxford 大学との学術交流協定に基づく「オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス」開発、海外大学での日本語学習者の辞書ツール使用実態調査は、国語研における言語資源に基づく日本語・日本語教育研究を国際的に広げる上で重要な取り組みである。また国外の18大学との連携による日本語学習者の作文データ収集などの調査は日本語教育の実践的国際連携として評価できる。

研究成果の国際的発信のために De Gruyter Mouton 社および Oxford University Press 社から学術書籍5冊を出版していることは高く評価される。学術交流協定締結大学との共催3件を含む10件の国際研究会合を開催した。日本語研究のパイオニア的日本語論文を英訳して出版する活動も継続して実施している。研究成果の国際的発信に今後も継続して積極的に取り組むことを期待する。

（6）その他特記事項

特になし。

令和4年度 基幹型プロジェクトの評価

機関拠点型基幹研究プロジェクトを構成する基幹型プロジェクトの一覧

プロジェクト名 (略称)	サブプロジェクト名	代表者 (プロジェクトリーダー)	サブプロジェクトリーダー
多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創	学習者の辞書資源使用の実態調査	小木曾智信	石黒圭
	言語資源の空間接続		大西拓一郎
	学習者用辞書資源の構築		柏野和佳子
	語彙資源ポータル拡張		高田智和
	学習者用「日本語機能語バンク」の構築		ブラシャント・バルデシ
実証的な理論・対照言語学の推進	アノテーションデータを用いた実証的計算心理言語学	浅原正幸	浅原正幸
	日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究		五十嵐陽介
	計算言語学的手法による理論言語学の実証的な方法論の開拓		窪田悠介
	体言化の実証的な言語類型論—理論・フィールドワーク・歴史・方言の観点から—		ブラシャント・バルデシ
	述語の意味と文法に関する実証的類型論		松本曜
消滅危機言語の保存研究		山田真寛	
多言語・多文化社会における言語問題に関する研究		朝日祥之	
多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究		小磯花絵	
多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究	日本語学習者の作文の縦断コーパス研究	石黒圭	石黒圭
	日本語学習者の談話の縦断コーパス研究		石黒圭
	日本語学習者の作文教育支援研究		山口昌也
	定住外国人の談話の縦断研究		野山広
	定住外国人のよみかき研究		福永由佳
開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張		小木曾智信	

「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」自己点検評価報告

プロジェクト名：多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創

プロジェクトリーダー：小木曾 智信

令和4年度プロジェクト全体自己評価

全項目の総合	A
1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	A

I. 計画期間内の概要

1. プロジェクト全体の6年間の計画

日本語の語彙データを扱う下記のサブプロジェクト群を統括し、その全体を結びつけるキーとなる語彙資源の整備を行うとともに、合同でシンポジウムやチュートリアルを開催し、共同研究を行う。

- ・学習者の辞書資源使用の実態調査
- ・言語資源の空間接続
- ・学習者用辞書資源の構築
- ・語彙資源ポータル拡張
- ・学習者用「日本語機能語バンク」の構築

各サブプロジェクトではさまざまな日本語語彙に関わるデータを構築する予定であるが、これらがばらばらで互換性のないものにならないように、相互接続性を持つ統一的な枠組みの中で扱えるようにするため、これまで国語研のコーパス構築に利用されてきた UniDic の見出し語データベースを軸に、分類語彙表などの国語研作成のリソースや、日本語最大の国語辞典である『日本国語大辞典』の見出し語を統合し、語彙資源統合キーとなるデータを開発する。その上で、共同研究を通して、各サブプロジェクトが整備する語彙資源統合 ID を共通に用いて相互に連携・統合できるようにする。このキーを介して既存のコーパスの用例・統計情報とリンクすることで、全体の利用価値と相互運用性を高める。

プロジェクト全体で、年1回以上、語彙資源の活用に関するシンポジウムを開催（サブプロジェクト持ち回り）、また年1回以上、サブプロジェクトとともに語彙資源活用チュートリアルを開催する。最終年度までに「言語資源学シリーズ」の1冊として語彙資源を活用した研究論文集をサブプロジェクトと合同で1冊以上刊行する。

II. 令和4年度の活動

令和4年度予算総額 36,567千円

- ・プロジェクト全体で計画していた語彙資源に関するシンポジウムは、一般向けイベント第17回 NINJAL フォーラム「語彙資源の構築と活用」として言語資源開発センターと共催で開催し、プロジェクトで構築する語彙資源について発信した。【地域・社会との連携】

- ・プロジェクト全体で1回以上行うこととしていた講習会は、第44回 NINJAL チュートリアル『分類語彙表』による日本語研究』として開催し、語彙資源に関するチュートリアルを実施した。【大学院教育・若手研究者育成】
- ・サブプロジェクトでは、計画にそって語彙資源の整備を順調に進め、その成果をプロジェクト全体として、書籍1冊、論文12本、発表・講演56件、言語資源16件として公表した。各サブプロジェクトの成果の概要は次の通り（※詳細は各サブプロジェクトの報告書を参照）。

●語彙資源統括

- ・UniDicによる形態素解析用ツール「Web茶まめ」を更新し新しい現代語用UniDicに対応して一般公開した。「Web茶まめ」の2023年度のページビューは138,199、ユーザー数は22,828、セッション数54,288となった（Google Analytics）。【共同利用・共同研究】
- ・ウェブ版UniDicExplorer（試験版）を限定公開した。【共同利用・共同研究】

●学習者の辞書資源使用の実態調査

- ・韓国・中国・台湾・ベトナム・イギリス・ドイツの大学に通う日本語学習者の辞書ツール使用の実態調査を、各国の大学と連携して行った。計97名を対象に1週間の辞書検索行動を記録した。【共同利用・共同研究】【グローバル化】
- ・3つの国際シンポジウムでプロジェクトに関する発表を3件行った。【グローバル化】

●言語資源の空間接続

- ・国内言語地図14冊のスキャン画像データを作成し、うち10冊を公開した。【共同利用・共同研究】
- ・国内言語地図10冊のジオタグ付き画像データを作成し公開した。【共同利用・共同研究】

●学習者用辞書資源の構築

- ・可読性を高め活用しやすい形に『計算機用日本語基本辞書IPAL』を変換した『IPAL PowerBI レポート』と『IPAL html版』を一般公開した。【共同利用・共同研究】
- ・プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」と共催でアノテーション・述語の意味文法・学習者辞書3プロジェクト合同研究会を開催した。【共同利用・共同研究】
- ・共同研究発表会「学習者辞書用語彙資源の構築」を開催した。【共同利用・共同研究】

●語彙資源ポータル拡張

- ・研究集会「古辞書・漢字音研究とデータベース2022」を開催した。【共同利用・共同研究】
- ・サーバリプレイスを行い、語誌情報ポータル（語彙資源ポータル）のインターネット公開を継続するための情報基盤強化を行った。【共同利用・共同研究】

●学習者用「日本語機能語バンク」の構築

- ・国外3大学（UFLS-UD, Manipur University, Tashkent State University of Oriental Studies）で、4回にわたり日本語教師向けに研究成果の一部を報告した。【地域・社会との連携】
- ・第29回ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウム（トリア大学、オンライン開催）で日本語教師向けに研究成果の一部を基調講演として報告した（2023年3月4日）。【地域・社会との連携】

各サブプロジェクトの語彙資源の構築は計画通り順調に進んでいるが、初年度であるため公開できる成果は現時点では多くない。しかし「学習者の辞書資源使用の実態調査」が特に海外でのデータ調査、グローバル化に関する計画で予定を大きく上回る成果を上げているほか、「言語資源の空間接続」でも予定を上回って計画を実施している。このことから、プロジェクト全体の総合評価としてはAと自己評価した。

プロジェクト名：多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創

サブプロジェクト名：語彙資源統括

サブプロジェクトリーダー：小木曾 智信

令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合		B
	1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
	2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
	3. 地域・社会との連携に関する計画	B
	4. グローバル化に関する計画	B

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

語彙資源プロジェクトが合同で行うシンポジウムやチュートリアル、書籍の出版を企画する。また、各サブプロジェクトで構築するさまざまな語彙資源がばらばらで互換性のないものにならないように、相互接続性を持つ統一的な枠組みの中で扱えるようにする。具体的には、国語研のコーパス構築に利用されてきたUniDicの見出し語データベースを軸に、分類語彙表などの国語研作成のリソースや、日本語最大の国語辞典である『日本国語大辞典』の見出し語を統合し、語彙資源統合キーとなるデータを開発する。その上で、共同研究を通して、各サブプロジェクトが整備する語彙資源統合IDを共通に用いて相互に連携・統合できるようにする。このキーを介して既存のコーパスの用例・統計情報とリンクすることで、全体の利用価値と相互運用性を高める。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

年次計画（6年間のロードマップ）

	目標	実施計画
2022(R4) 年度	UniDic-日国見出し語対応表の整備 分類語彙表を中心とした成果発表	<ul style="list-style-type: none"> ● 語彙資源統合 ID の設計 ● 辞書見出し語データの入手 ● UniDic-日国見出し語対応表の整備 ● UniDic 見出し語の追加 ● 合同シンポジウム（分類語彙表関連）開催 ● 分類語彙表番号データの整備・公開 ● 語彙資源活用チュートリアルの実施（分類語彙表番号） ● 形態素解析用辞書 UniDic 更新版の公開 ● UniDicExplorer の開発

2023(R5) 年度	サブプロジェクトの語彙資源との連携	<ul style="list-style-type: none"> ● UniDic 見出し語の追加 (方言語彙の整備) ● UniDic 付加情報の整備 ● 以前の国語研語彙資源の整備 ● サブプロジェクトでの語彙資源統合 ID の活用 ● 合同シンポジウム開催 ● 語彙資源活用チュートリアルの実施 ● UniDicExplorer の公開
2024(R6) 年度	サブプロジェクトの語彙資源との連携強化	<ul style="list-style-type: none"> ● UniDic 見出し語の追加 ● UniDic 付加情報の整備 ● 以前の国語研語彙資源の整備 ● サブプロジェクトでの語彙資源統合 ID 活用 ● 合同シンポジウム開催 ● 語彙資源活用チュートリアルの実施 ● 形態素解析用辞書 UniDic 更新版の公開 ● 書籍刊行の準備
2025(R7) 年度	語彙資源統合 ID の運用	<ul style="list-style-type: none"> ● UniDic 見出し語の追加 ● UniDic 付加情報の整備 ● サブプロジェクトでの語彙資源統合 ID 活用 ● 合同シンポジウム開催 ● UniDicExplorer の改修 ● 語彙資源活用チュートリアルの実施 ● 語彙資源活用に関する書籍の刊行
	● 暫定評価	
2026(R8) 年度	語彙資源統合 ID の利用促進	<ul style="list-style-type: none"> ● UniDic 見出し語の追加 ● UniDic 付加情報の整備 ● サブプロジェクト語彙資源での語彙資源統合 ID 活用 ● 合同シンポジウム開催 ● 語彙資源活用チュートリアルの実施 ● 形態素解析用辞書 UniDic 更新版の公開
2027(R9) 年度	とりまとめ	<ul style="list-style-type: none"> ● UniDic 見出し語の追加 ● UniDic 付加情報の整備 ● 残る成果物の公開

II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 11,399 千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

データベース等の構築 (アクティビティ)

- (1) 『日本国語大辞典』等から UniDic データベースに見出し語を追加・整備する。
- (2) 単位長が一致しないものを含めた UniDic と「分類語彙表」の対応表 (短単位分類語彙表) を整備する。
- (3) 語彙資源統合 ID の仕様を策定する。

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 「通時コーパス」プロジェクトと合同で行った『日本語歴史コーパス』の増補作業で新規に確認した未登録語を UniDic データベースに追加・整備した。
- (2) 言語資源開発センター・「通時コーパス」プロジェクトと合同で上代から近現代までの古文用 UniDic10 種（今回新たに和歌用 UniDic を追加）を整備した（公開は来年度予定）。
- (3) 言語資源開発センター・「多世代会話コーパス」プロジェクトと合同で現代書き言葉、現代話し言葉用の UniDic を整備し、公開した（3月24日）。

異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ）

- (1) 自然言語処理の研究者を共同研究員・プロジェクト非常勤研究員にむかえて語彙資源整備に関する共同研究を実施した。

調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) ウェブ版 UniDicExplorer（試験版 <https://udex.ninjal.ac.jp>）を限定公開した（3月24日）。
- (2) オンライン形態素解析ツール「Web 茶まめ」を更新し、新しい現代語用 UniDic に対応したものを一般公開した（3月29日）。
- (3) 言語資源開発センター・「多世代会話コーパス」プロジェクトと合同で現代書き言葉、現代話し言葉用の UniDic を整備し、公開した（3月24日）。【重出】※「他のプロジェクトとの合同の活動等」参照

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) NINJAL シンポジウム「言語資源学の創成：開かれた言語資源による日本語研究」を開催してプロジェクトで構築する語彙資源について発信した（12月13日）。

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 共同研究員による語彙資源を活用した研究発表（研究論文4本、研究発表46本）を行った。

データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 第44回 NINJAL チュートリアル『「分類語彙表」による日本語研究』で語彙資源に関するチュートリアルを実施した。

データベース等を使った研究成果・利用実績（アウトカム）

- (1) 「Web 茶まめ」の2023年度のページビューは138,199、ユーザー数は22,828、セッション数54,288となった（Google Analytics による）。

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 2023年度開講の総研大「言語資源学」「言語資源学演習」の授業で UniDic 等の語彙資源を活用するためのシラバス作成・授業準備を行った

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) プロジェクト非常勤研究員を4名雇用して UniDic 等の語彙資源に関する知識、活用方法を習得させた。【若手支援】

大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 大学院生1名を共同研究プロジェクトに参加させ UniDic 等の語彙資源に関する研究活動を指導した。【若手支援】

若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 第44回 NINJAL チュートリアル『「分類語彙表」による日本語研究』で語彙資源に関するチュートリアルを実施した。【若手支援】【重出】※「データベース等に関する講習会・講演会」参照

3. 地域・社会との連携に関する計画

一般向け講義・講演会・フォーラム等

- (1) 国語研オープンハウスで語彙資源 (UniDic) に関連する一般向け発表を1件行った (9月9日)。

産業界との連携

- (1) 小学館出版局との連携協定に基づいて提供を受けた『日本国語大辞典』見出し語データをもとに UniDic を拡充した。

研究成果の社会への還元

- (1) 「Web 茶まめ」を更新し、新しい現代語用 UniDic に対応したものを一般公開した (3月29日)。

【重出】※「調査データ・データベース等公開」参照

4. グローバル化に関する計画

英語による研究成果の発信等

- (1) Digital Humanities 2023 (オーストリア・グラーツ) に「Web 茶まめ」について投稿し査読を経て採択された (2023年7月発表予定)。

プロジェクト名：多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創

サブプロジェクト名：学習者の辞書資源使用の実態調査

サブプロジェクトリーダー：石黒 圭

令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	S
1. 共同利用・共同研究に関する計画	S
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	—
4. グローバル化に関する計画	S

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

【目的】

近年、国内外ともに日本語学習者の数は増え続け、母語や学習環境などの点で多様性を増している。とくに辞書ツールの使用において、学習者の間で紙の辞書や電子辞書の使用は減り、辞書アプリやWEB上の辞書の使用が広まっている。

しかし、辞書ツールのコンテンツには課題が多く残されているのも事実である。たとえば、自分の調べたい意味や、適切な例文にたどり着けなかったり、コロケーションや文体情報など、学習者が必要としている情報が説明されていなかったりする。このため、学習者による辞書ツールの使用実態を把握し、それに沿って辞書ツールのコンテンツを充実させる必要がある。

そこで、本プロジェクトでは、次の二つの調査・研究を実施する。

- ・第一段階：学習者による辞書ツール使用の調査を行い、使用実態とその困難点を明らかにする
- ・第二段階：困難点解決につながる学習者用辞書ツールに必要な基礎語オープンソースを試作し公開する

基礎語オープンソースに収録する語は、日本語初級および中級前半レベルの基礎語を想定している。また、サブプロジェクト「学習者用辞書資源の構築」と連携しながら、学習者用の辞書ツール開発につながる基礎語オープンソースの構築を試みたい。

【特色】

本プロジェクトの特色は、以下の3点である。

■特色1：学習者によるオンラインでの辞書ツールの使用実態の解明

学習者の辞書ツール使用に関する従来の研究は、学習者にたいするアンケートによる意識調査や、調査者から示された課題をこなす辞書ツール使用の実験調査が主であり、そもそも学習者がどのような場面・目的で辞書ツールを使用しているのかという実態は明らかにされてこなかった。本プロジェクトは、スマートフォンの画面収録機能を用いてオンラインでの語彙検索行動を観察することで、場面・目的と紐づけた辞書ツールの使用実態と困難点を明らかにできる点に特色がある。

■特色2：学習者用辞書ツールに必要な情報の解明

現行の学習者用辞書ツールは、学習者目線で見ると、例文や文体情報などの記載が不足している場合や、記載されていても当該の情報にたどり着けない場合があるなど、多くの課題を抱えている。本プロジェクトは、辞書ツール使用の実態調査の結果から、学習者がどのような場面でどのような情報を必要としているのか、また、情報をどのように掲載すれば必要な情報に確実にたどり着けるのかを明らかにする点に特色がある。

■特色3：学習者用辞書ツールに必要な基礎語オープンソースの試作・公開

本プロジェクトは、辞書ツール使用の実態調査から明らかにした学習者用辞書ツールに必要な情報項目や掲載方法をもとに基礎語オープンソースを試作し、それをCCBYで公開する点に特色がある。意味記述や記述項目において質の高いコンテンツが開発され、それが制限なく利用できるようになれば、世界各地の学習者の細かいニーズに合わせてカスタマイズされた辞書ツールが開発され、多様な学習者に使用されることが期待される。なお、辞書ツールに掲載が必要な語数についても、本プロジェクトの実態調査の結果から分析し導き出すことを目指したい。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

	2022	2023	2024	2025	2026	2027
実態調査	韓国語話者	中国語話者 越国語話者	DB 公開			
オープンソース				検討	試作	公開
論文集		準備	刊行			
シンポジウム			開催			開催
ワークショップ						開催

【2022 (R4) 年度】

- ・韓国語話者の辞書ツール使用の実態調査を行う。韓国国内の大学の JFL 環境で学ぶ初中級学習者 6 名、中上級学習者 6 名、計 12 名を対象に 1 週間の辞書検索行動を記録する。

【2023 (R5) 年度】

- ・中国語・ベトナム語話者の辞書ツール使用の実態調査を行う。中国・ベトナム国内の大学の JFL 環境で学ぶ初中級学習者各 6 名、中上級学習者各 6 名、計 24 名を対象に 1 週間の辞書検索行動を記録する。
- ・韓国語・中国語・ベトナム語話者の実態調査をもとに、研究成果を論文集として刊行する準備に着手する。

【2024 (R6) 年度】

- ・韓国語・中国語・ベトナム語話者の実態調査のデータベースをインターネット上に公開する。
- ・国際シンポジウムを開催し、韓国語・中国語・ベトナム語話者の実態調査に基づく研究成果を発表する。
- ・韓国語・中国語・ベトナム語話者の実態調査に基づく研究成果をまとめ、論文集として刊行する。

【2025 (R7) 年度】

- ・第四期前半における辞書ツール使用の実態調査から明らかにした、学習者用辞書ツールに必要な情報項目や掲載方法を検討する。

【2026 (R8) 年度】

- ・2025 年度に検討した、学習者用辞書ツールに必要な情報項目や掲載方法をもとに、基礎語オープンソースを試作する。

【2027(R9)年度】

- ・2026年度に試作した基礎語オープンソースを改良し、インターネット上に公開する。
- ・基礎語オープンソースの内容を紹介する国際シンポジウムを開催し、研究成果を社会へ発信する。
- ・基礎語オープンソース活用のためのワークショップを開催し、学習者用辞書ツールの開発に役立つ。

II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 6,324千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

フィールド調査・実験等（アクティビティ）

- (1) 韓国・中国・台湾・ベトナム・イギリス、ドイツの大学に通う日本語学習者の辞書ツール使用の実態調査を行った。ソウル大学（韓国）の学習者11名、高麗大学（韓国）の学習者11名、天津外国語大学（中国）の学習者29名、マカオ大学（中国）の学習者21名、国立政治大学（台湾）の学習者9名、ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学（ベトナム）の学習者10名、ダラム大学（イギリス）の学習者1名、カーディフ大学（イギリス）の学習者2名、トリーア大学（ドイツ）の学習者3名、計97名を対象に1週間の辞書検索行動を記録した。

国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 海外と国内、すべての共同研究員を含む全体会を本年度4回（5、6、8、3月）、韓国・中国・台湾・ベトナム・ドイツといった海外の大学の共同研究員が参加する海外大学分科会を4回（4、11、12、2月）、海外の各大学との調査準備のための会議を5回（4月に2回、7、10、11月に各1回）開催し、各大学と連携しながらデータの収集を行った。（注：「グローバル化に関する計画」との重複有）

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) サブプロジェクトとの連携を行った。統括プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」（リーダー：小木曾智信）のもと、サブプロジェクト「学習者用辞書資源の構築」（リーダー：柏野和佳子）のメンバーとの会議を設け（5月に1回、6月に1回、8月に1回、3月に1回）、緊密に連携をとりながら活動した。

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 2022年9月11日、第四回東アジア日本学研究国際シンポジウムにおいて「学習者はどのように日本語を学ぶのか—ポストコロナ時代における日本語運用データの収集・分析法—」というタイトルで招待講演を行った。（オンライン、URLなし）（注：「グローバル化に関する計画」との重複有）
- (2) 2023年3月17日、第47回社会言語科学会研究大会において、「文化によってここまで違う！世界の日本語学習者の辞書ツール使用事情—スマホによる語彙検索行動の適切な支援のために—」というタイトルで招待講演・ワークショップを行った。（東京国際大学）

<https://www.jass.ne.jp/meeting/meeting-list/meeting47/>

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 2023年3月、寄稿論文「学習者はどのように日本語を学ぶのか—ポストコロナ時代における日本語運用データの収集法—」が『東アジア日本学研究』第9号に掲載された。

<https://www.east-asia.info/studies/009.pdf>

【Sと自己評価した理由】

- (1) 計画では、韓国・中国・ベトナム国内の学習者各12名を対象にしていたが、実際には、韓国22名、中国50名、台湾9名、ベトナム10名、イギリス3名、ドイツ3名の計97名を対象にして調査を行ったこと。
- (2) 計画では、調査は2023年度中に終える予定であったが、2022年度中にすべての調査が終わったこと。

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 連携大学院（一橋大学：石黒担当）の演習において、本サブプロジェクトで収集中のデータを活用したゼミ発表を行った。【若手支援】

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 本プロジェクトの研究推進のために、2名のプロジェクト非常勤研究員を雇用した。2名のプロジェクト非常勤研究員は日本語学会2022年度秋季大会で共同で本プロジェクトの内容の口頭発表を行った。【若手支援】

大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 連携大学院（一橋大学：石黒担当）の演習等の機会を利用して、本プロジェクトに参画する大学院生を募り、研究への参画を促した。【若手支援】

3. 地域・社会との連携に関する計画

一般向け講義・講演会・フォーラム等

- (1) 2022年9月9日、オープンハウス2022において「日本語学習者の辞書使用の実態調査」というタイトルでポスター発表を行った。（オンライン）

<https://www2.ninjal.ac.jp/openhouse/2022/announcement-c.html>

- (2) 2023年2月11日、英国日本語教育学会・国際交流基金ロンドン日本文化センター共催日本語教育シンポジウム「スマホはどこまで日本語学習の役に立つのかーイギリス国内における日本語学習者の辞書ツールの使用実態ー」というタイトルでオンライン招待講演・ワークショップを行った。（参加者60名）（注：「グローバル化に関する計画」との重複有）

<https://www.batj.org.uk/ja/seminars/330-february-2023-batj-japan-foundation-seminar-on-how-useful-are-smartphones-for-learning-japanese-the-reality-of-the-use-of-dictionary-tools-among-learners-of-japanese-in-the-united-kingdom.html>

- (3) 2023年3月5日、ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウムにおいて「ドイツ国内における日本語学習者の辞書ツールの使用実態ースマホによる語彙検索行動の適切な支援のためにー」というタイトルでオンライン招待講演・ワークショップを行った。（参加者50名）（注：「グローバル化に関する計画」との重複有）

<https://www.japanisch-an-hochschulen.de/j-sympo-aktuell.php>

- (4) 2023年3月9日、令和4年度NINJAL日本語教師セミナー（国内）において、「スマホを使った日本語学習者の辞書検索を支援するー世界の日本語学習者の辞書ツールの使用実態からー」というタイトルでオンライン講演・ワークショップを行った。（参加者117名、うち学生26名）

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230309a/

4. グローバル化に関する計画

海外の研究者の受入

- (1) 韓国2名、中国4名、台湾1名、ベトナム1名、ドイツ1名、海外の大学に所属する研究者を共同研究員に加え、現地調査の準備を進めた。

海外の大学との連携等

- (1) 海外と国内、すべての共同研究員を含む全体会を本年度4回（5，6，8，3月）、韓国・中国・台湾・ベトナム・ドイツといった海外の大学の共同研究員が参加する海外大学分科会を4回（4，11，12，2月）、海外の各大学との調査準備のための会議を5回（4月に2回，7，10，11月に各1回）開催し、各大学と連携しながらデータの収集を行った。（注：「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有）

国際シンポジウムの開催

- (1) 2022年9月11日、第四回東アジア日本学研究国際シンポジウムにおいて「学習者はどのように日本語を学ぶのか—ポストコロナ時代における日本語運用データの収集・分析法—」というタイトルでオンライン招待講演を行った。（注：「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有）
- (2) 2023年2月11日、英国日本語教育学会・国際交流基金ロンドン日本文化センター共催日本語教育シンポジウム「スマホはどこまで日本語学習の役に立つのか—イギリス国内における日本語学習者の辞書ツールの使用実態—」というタイトルでオンライン招待講演・ワークショップを行った。（参加者60名）（注：「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有）

<https://www.batj.org.uk/ja/seminars/330-february-2023-batj-japan-foundation-seminar-on-how-useful-are-smartphones-for-learning-japanese-the-reality-of-the-use-of-dictionary-tools-among-learners-of-japanese-in-the-united-kingdom.html>

- (3) 2023年3月5日、ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウムにおいて「ドイツ国内における日本語学習者の辞書ツールの使用実態—スマホによる語彙検索行動の適切な支援のために—」というタイトルでオンライン招待講演・ワークショップを行った。（参加者50名）（注：「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有）

<https://www.japanisch-an-hochschulen.de/j-sympo-aktuell.php>

【Sと自己評価した理由】

- (1) 計画で入っていなかったヨーロッパ圏（イギリス、ドイツ）の大学で調査を行い、現地の関係者を共同研究員に加えたこと。
- (2) その調査の結果に基づき、イギリスとドイツ、二つの現地教師会で講演・ワークショップを行い、親交を深めたこと。

プロジェクト名：多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創

サブプロジェクト名：言語資源の空間接続

サブプロジェクトリーダー：大西 拓一郎

令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	A
1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	A
3. 地域・社会との連携に関する計画	—
4. グローバル化に関する計画	—

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

言語地図・古典籍・方言古辞書に対し空間情報を付与することで、言語情報と地理空間の接続を目的とする。

言語地図は言語情報の空間上の位置を視覚的に表示するが、それ自体は画像であり、空間データを持つものではない。古典籍には多くの地名が含まれるが、コーパス化されてもそこに空間データは含まれない。江戸時代の全国方言辞典『物類称呼』が提示する個々の方言形が使われる地名も同様である。本研究課題は、これらに空間情報を付与して、広く提供し、特に言語地理学の発展に寄与することをねらうものである。

1. 言語地図データベース

国立国語研究所研究図書室は、国内で作成された言語地図のほとんどすべてを所収している。そこには劣化の進む資料も少なからず含まれ、電子化が急務である。加えて、国外の言語地図集も多く収蔵している。これらを言語地図データベースとして整理し、公開する。

a. 国内言語地図

以下をデータベース化し、公開する。

- (1) 書誌目録・地図項目・語形目録のデータベース化・公開
- (2) スキャン地図画像：全画像データ化・許諾データの公開
- (3) ジオタグ付き地図画像：許諾データの公開
- (4) ポイント情報（地点-語形対応）：公開許諾データのうち対応可能なデータに付与し公開

b. 国外言語地図

- ・書誌目録・地図項目等をデータベース化・公開

2. 古典籍地名データベース

- ・空間情報付き地名語彙素データ・万葉集東歌出身地データの作成

NIHU（人間文化研究機構）による歴史地名データ（吉田東伍『大日本地名辞書』を中心にして、地名に経度緯度を付与）と古典籍CHJ（通時コーパス）の地名語彙素・万葉集東歌防人歌出身地を結びつけることができるようにする。

3. 方言古辞書（物類称呼）データベース

- ・物類称呼が提示する語形使用地域（地名）への空間情報付与

江戸時代の方言集『物類称呼』に提示された各地方言の語形と場所の対応表を作成し、場所を表す地名は歴史地名データと接続できるようにする。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

	目標	実施計画
2022(R4) 年度 2022. 4 ～2023. 3	データベース設計 データ作成開始	データベースの設計を行う。 データ作成に着手する。 研究会を開催し、意見交換を行う。
2023(R5) 年度 2023. 4 ～2024. 3	国内言語地図 DB の公開開始	データ構築を継続し、国内言語地図データ公開を開始する。 データベースについて学会で発表する。 研究会を開催し、活用方法を発表する。
2024(R6) 年度 2024. 4 ～2025. 3	国内言語地図 DB の公開継続	データ構築・国内言語地図データ公開を継続する。 データベースについて、国際学会で発表する。 研究会を開催し、活用成果を発表する。
2025(R7) 年度 (前半) 2025. 4 ～2026. 3	国内言語地図 DB の公開継続 国外言語地図 DB β 版公開 古典籍地名 DB β 版公開 古辞書方言 DB β 版公開	データ構築を継続し、国内言語地図データの公開継続、国外言語地図 DB・古典籍地名 DB・古辞書方言 DB の β 版公開を行う。 データベースについてのワークショップを開催する。 研究会を開催し、研究成果を発表する。
	暫定評価	
2026(R8) 年度 2026. 4 ～2027. 3	国内言語地図 DB の公開継続 国外言語地図 DB 修正公開 古典籍地名 DB 修正公開 古辞書方言 DB 修正公開	データ構築を継続し、国内言語地図データの公開継続、国外言語地図 DB・古典籍地名 DB・古辞書方言 DB の修正を行う。 研究会を開催し、研究成果を発表する。
2027(R9) 年度 (前半) 2027. 4 ～2027. 9	国内言語地図 DB 完成・公開 国外言語地図 DB 完成・公開 古典籍地名 DB 完成・公開 古辞書方言 DB 完成・公開	データ修正を継続し、国内言語地図 DB・国外言語地図 DB・古典籍地名 DB・古辞書方言 DB を完成させ、公開する。 研究会を開催し、研究成果をとりまとめる。

II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 2,782千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 国内言語地図14冊（山梨県言語地図集、信遠三州接境域言語地図集、関門海峡周辺方言地図、北九州市小倉北区方言地図、北九州市小倉南区方言地図ⅠⅡⅢⅣ、新潟県言語地図、大阪府言語地図、出雲飯石郡中央部言語地図、三刀屋町の方言、吉田村の方言、佐田町の方言）のスキヤン画像データを作成し、うち10冊を後述の通り公開した。
- (2) 国内言語地図10冊（山梨県言語地図集、信遠三州接境域言語地図集、関門海峡周辺方言地図、北九州市小倉北区方言地図、北九州市小倉南区方言地図ⅠⅡⅢⅣ、新潟県言語地図、大阪府言語地図）のジオタグ付き画像データを作成し、後述の通り公開した。
- (3) 国内言語地図2冊（越中飛騨国境言語地図、上伊那の方言）のポイントデータを作成した。
- (4) 古典籍地名データ200件を作成した（2023年1月）。
- (5) 物類称呼データ100件を作成した。

国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 2022年9月17日（土）に東京外国語大学国際日本研究センター対照日本語部門との共同開催によるワークショップ「日本語・中国語・フランス語における渡来作物の方言」をオンラインで実施し、プロジェクトメンバーの大西・鈴木・川口が発表した。

対照日本語部門 第36回『外国語と日本語との対照言語学的研究』・国立国語研究所「空間接続」プロジェクト 共同開催ワークショップ - 東京外国語大学 国際日本研究センター (tufs.ac.jp)

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 語彙資源ポータル（語誌情報ポータル）への言語地図データベースのデータを提供した。
語誌情報ポータル (ninjal.ac.jp)

調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 国内言語地図10冊（山梨県言語地図集、信遠三州接境域言語地図集、関門海峡周辺方言地図、北九州市小倉北区方言地図、北九州市小倉南区方言地図ⅠⅡⅢⅣ、新潟県言語地図、大阪府言語地図）のスキヤン画像データを公開した。言語地図データベース (ninjal.ac.jp)
- (2) 国内言語地図10冊（山梨県言語地図集、信遠三州接境域言語地図集、関門海峡周辺方言地図、北九州市小倉北区方言地図、北九州市小倉南区方言地図ⅠⅡⅢⅣ、新潟県言語地図、大阪府言語地図）のジオタグ付き画像データを公開した。言語地図データベース (ninjal.ac.jp)
- (3) 国内言語地図2冊（越中飛騨国境言語地図、上伊那の方言）のポイントデータを公開した。言語地図データベース (ninjal.ac.jp)

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 2023年2月24日（金）に空間接続公開研究発表会（対面・オンライン併用、対面会場：国立国語研究所）を開催した。参加者は、対面9名、オンライン13名であった。

データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 2022年12月19日（月）にプロジェクト内でGISソフトQGISを用いたオンラインによる言語地図作成講習会を実施し、13名が参加した。

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

若手研究者への発表の機会の提供、研究費・発表旅費の支援

- (1) 2023年2月24日（金）に空間接続公開研究発表会（対面・オンライン併用、対面会場：国立国語研究所）において若手研究者2名が発表し、対面参加のための旅費を支援した。

若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 2022年12月19日(月)にプロジェクト内でGISソフトQGISを用いたオンラインによる言語地図作成講習会を開催し(既出)、共同研究員11名のほか、東京外国語大学大学院生2名が参加した。

3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

4. グローバル化に関する計画

特になし

プロジェクト名：多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創

サブプロジェクト名：学習者辞書用語彙資源の構築

サブプロジェクトリーダー：柏野 和佳子

令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	—
4. グローバル化に関する計画	B

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

本プロジェクトは、統括プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」（小木曾）のもと、サブプロジェクト「学習者の辞書資源使用の実態調査」（石黒）と緊密に連携し、活動する。また、基幹型プロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」（小磯）とは、話し言葉のレジスター分析において連携する。さらに、基幹型プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」（浅原）とは、分類語彙表データの活用において連携する。

【目的】

学習者用辞書構築に必要な語彙データベースを構築し公開することを目的とする。国語教育、日本語教育において、日本国内はもちろん、海外の学習者にも利用してもらえるものを目指す。

国立国語研究所には『分類語彙表』というデータベースがあるが、これを学習者用の辞書資源として活用するためには情報を付加し再構築する必要がある。①学習目的に応じた学習レベル別の情報の付与、②話し言葉的な語であるか、書き言葉的な語であるかといった位相情報の付与に順次取り組む計画である。

さらに、語釈や用例の付与も必要である。ただちに利用できる語釈や用例の資源として、オープンソースである『計算機用日本語基本辞書 IPAL』（和語動詞 861 語、和語形容詞 136 語、名詞 1,081 語）がある。その情報を活用するために『IPAL』を整備したのち、初級レベルの語の語釈・用例付与に取り組む。

本プロジェクトでは、主に次の3つの作成・公開を目標にする。

- (1) 学習目的に応じた学習レベル別の語彙リスト
- (2) 『分類語彙表』の語に、学習レベル別・目的別の情報や位相情報・語釈・用例を付与したデータベース
- (3) 『計算機用日本語基本辞書 IPAL』をもとにした辞書情報のデータベース

具体的には、次のとおり計画する。

- (1) 学習目的に応じた学習レベル別の語彙リストの設計と作成

必要な学習のレベル別・目的別の語彙リストを設計する。

学習レベルと語数は、初級(1,000～2,000 語)・中級(5,000～10,000 語)・中上級(10,000～30,000 語)・上級(50,000～100,000 語)の4段階を想定するが、必要があれば変更する。

目的別として、国語教育、日本語教育、それぞれにおける、読解、作文を目的にする場合や、学校生活、日常生活、国内、国外、といった状況別などを検討する。

「国語教育・日本語教育における読解・作文のための初級語彙リスト」優先的に作成する予定。

そのほか、優先度の高い目的のものからレベル別の語彙リストを作成する。

『日本語教育のための基本語彙調査』[国立国語研究所 1984]の「基本六千語」「基本二千語」などの語彙調査結果や、コーパスの頻度表を参考に、学習レベル別・目的別の語彙を選定する。

- (2) 『分類語彙表』に、学習に必要な語の増補および、学習レベルや位相情報・語釈・用例の付与
- 『分類語彙表』にない、学習に必要な語（多義語の場合はブランチ）を増補する。
 - (1)で優先して作成した語彙リストに基づく学習レベル別情報は、今期中に全語（多義語の場合は全ブランチ）に付与予定。
 - 今期中に初級(1,000～2,000語)への位相情報・語釈・用例の付与を目指す。
- (3) 『計算機用日本語基本辞書 IPAL』の情報のデータベース化
- 2022年度の1年間に実施する。

【特色】

■特色1：学習目的に応じた学習レベル別語彙リストへの高いニーズにこたえる

国語教育、日本語教育において、多義語の意味（ブランチ）レベルまで考慮した、学習レベル別・目的別の語彙リストが所望されている。これらを本研究の背景と考え、順次こたえていくよう、研究を進めていく。

■特色2：研究利用・公開に支障がないDBを語彙資源として再構築し公開する

・国語研所有の『分類語彙表』及び、オープンソースの『IPAL』をベースに作成することにより、研究利用・公開に支障がない。再構築したDBはCCBY-NC（表示-非営利）にて公開を予定。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

2022年度

<ul style="list-style-type: none"> ・語彙リスト設計 ・語彙リスト作成 ・『分類語彙表』アノテーション ・データ公開 ・若手育成・海外 	<ul style="list-style-type: none"> ・必要な学習のレベル別・目的別語彙リストを設計開始 ・学習レベル：初級語選定開始 ・学習レベル：初級情報付与開始 ・位相：付与すべき情報の検討開始 ・『計算機用日本語基本辞書 IPAL』DB公開 ・講習会：1回開催
---	--

2023年度

<ul style="list-style-type: none"> ・語彙リスト設計 ・語彙リスト作成 ・『分類語彙表』アノテーション ・データ公開 ・若手育成・海外 	<ul style="list-style-type: none"> ・必要な学習のレベル別・目的別語彙リストを設計継続 ・学習レベル：初級語選定継続，中級語選定開始 ・学習レベル：初級語に情報付与継続，中級語に情報付与開始 ・位相：付与すべき情報の検討継続 ・初級語彙リスト公開 ・講習会：1回開催
---	--

2024 年度

<ul style="list-style-type: none">・語彙リスト作成・『分類語彙表』アノテーション・データ公開・報告書刊行・成果発表・若手育成・海外	<ul style="list-style-type: none">・学習レベル：中級語選定継続・学習レベル：中級語に情報付与継続・位相：付与すべき情報の検討継続・語積・用例：初級語に付与開始・中級語彙リスト公開・語彙リスト設計の報告書：1冊・国際シンポジウム：1回開催・講習会：1回開催
---	---

2025 年度

<ul style="list-style-type: none">・語彙リスト作成・『分類語彙表』アノテーション・データ公開・若手育成・海外	<ul style="list-style-type: none">・学習レベル：中上級以上語選定開始・学習レベル：中上級以上語に情報付与開始・位相：初級語に付与開始・語積・用例：初級語に付与開始・別分類の中級語彙リスト公開・初級語位相情報公開・講習会：1回開催
--	---

2026 年度

<ul style="list-style-type: none">・語彙リスト作成・『分類語彙表』アノテーション・データ公開・若手育成・海外	<ul style="list-style-type: none">・学習レベル：中上級以上語選定継続・学習レベル：中上級以上語に情報付与継続・位相：中級語に付与開始・語積・用例：初級語に付与継続・中上級以上語彙リスト公開・講習会：1回開催
--	---

2027 年度

<ul style="list-style-type: none">・『分類語彙表』アノテーション・データ公開・論文集刊行・成果発表・若手育成・海外	<ul style="list-style-type: none">・位相：中級語に付与継続・語積・用例：初級語に付与継続・中級語の位相情報公開・初級語の語積・用例公開・研究論文集：1冊・国際シンポジウム：1回開催・講習会：1回開催
--	--

II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 5,178千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 『計算機用日本語基本辞書 IPAL』（和語動詞 861 語，和語形容詞 136 語，名詞 1,081 語）の CSV データを，活用しやすい PDF ファイルや html データに変換し，整備した。
- (2) 必要な学習のレベル別・目的別語彙リストを，過去の語彙調査の結果や『日常会話コーパス』の頻度情報等を用いて検討した。

- (3) 学習レベル初級語の選定を開始した。
- (4) 『分類語彙表』に多義語の基本的な意味が欠けているものの調査を開始した。
- (5) 日本語教育、国語教育での利用を想定し、付与すべき位相情報の検討を開始した。

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 統括プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」（小木曾）やサブプロジェクト「日本語学習者の辞書資源使用の実態調査」（石黒）の会議に参加し、連携を図った。
- (2) 基幹型プロジェクト「多世代の話し言葉会話コーパスに基づく話し言葉の実証的・応用総合的研究」（小磯）と共催で講習会を開催した（詳細は「データベース等に関する講習会・講演会」参照）。
- (3) 基幹型プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」（浅原）と共催で研究発表会を開催した。
 アノテーション・述語の意味文法・学習者辞書 3プロジェクト合同研究会 | 国立国語研究所
 (ninjal.ac.jp)

異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 日本語教育・国語教育の研究者を共同研究員として受け入れた。

調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 可読性を高め活用しやすい形に『計算機用日本語基本辞書 IPAL』を変換した、『IPAL PowerBI レポート』と『IPAL html 版』を2023年3月に一般公開した。【オープンデータ】【オープンアクセス】
 URL: 研究成果 | 学習者辞書用語彙資源の構築 (ninjal.ac.jp)

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 「学習者辞書用語彙資源の構築」共同研究発表会を1月8日に開催した。登録215名（うち、国外79名、学生68名）。
 「学習者辞書用語彙資源の構築」共同研究発表会 | 国立国語研究所 (ninjal.ac.jp)

データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 基幹型プロジェクト「多世代の話し言葉会話コーパスに基づく話し言葉の実証的・応用総合的研究」（小磯）と共催で「中納言」講習会【初中級編】を11月5日に開催した。登録140名（うち、国外18名、学生60名）。
 第6回コーパス利用講習会 | 大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究 (ninjal.ac.jp)

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 大学院生である若手研究者3名に対して発表の機会を提供した。【若手支援】
 「学習者辞書用語彙資源の構築」共同研究発表会 | 国立国語研究所 (ninjal.ac.jp)

3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

4. グローバル化に関する計画

海外の研究者の受入

- (1) 海外の研究者を共同研究員として加え、海外の動向も踏まえながら研究を実施した。

プロジェクト名：多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創

サブプロジェクト名：語彙資源ポータル拡張

サブプロジェクトリーダー：高田 智和

令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	C
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	A

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

コーパス、辞書類（主に古辞書）、言語地図、言語記事は、それぞれ個別の目的で研究利用され、データベース等の言語資源がそれぞれ構築されている。単語や語彙の歴史を解明する上で、これらは有益な資料であるが、横断的に扱う環境は未だ整っていない。そこで、本プロジェクトでは、「日本語歴史コーパス」等から得られる語彙素統計情報、辞書類のデータベース、言語地図データベース、言語記事データベース、語彙研究文献情報を集積し、日本語語彙の歴史を一望できるような「語彙資源ポータル」を整備拡張する。これによって、単語使用の変遷、語形バリエーションの消長、意味拡張を記述し、その変容の原理を探究する語彙研究基盤が整う。また、研究の入口となる情報が整備され、言葉に関心を持つ多くの人々を日本語史研究に引き込み、研究の活性化につなげることも期待できる。

本プロジェクトでは、計画期間内において、以下の4点についてデータ整備を行い、「語彙資源ポータル」を拡張する。

- (1) コーパス統計情報： 第3期中期計画期間中に増補された「日本語歴史コーパス」の室町時代編Ⅱキリシタン資料、江戸時代編Ⅲ近松浄瑠璃などの語彙素（短単位）統計情報を「語彙資源ポータル」に収録する。
- (2) 辞書類見出し情報： 近代以前の辞書類から代表的なものを10点程度選定し、見出し情報（見出し語、所在、UniDic 語彙素 ID など）をデータベース化する。見出しデータは「語誌情報ポータル」に収録するだけでなく、オープンデータ（テキスト形式）としての公開も検討する。なお、辞書類見出し情報の整備は、国文学研究資料館が主導する人間文化研究機構広領域連携機関型研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の拡張的研究」との連携により実施する。
- (3) 言語地図目録情報： 「言語地図データベース」（「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」のサブプロジェクト「言語資源の空間接続」において作成）の収録地図名に対してUniDic 語彙素 ID 付与を行い、「語誌情報ポータル」に収録する。
- (4) 言語関連記事情報： 1949～2009年を対象とする「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」の記事名のうち、単語を取り上げた記事に対してUniDic 語彙素 ID 付与を行い、「語誌情報ポータル」に収録する。また、大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事のデータ整備を行う。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

2022 年度

- ・第3期中期計画期間中に増補された「日本語歴史コーパス」語彙素統計情報を「語誌情報ポータル」に収録する。
- ・「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」から単語を取り上げた記事の抽出を行う。
- ・見出し情報を整備する近代以前の辞書類の選定を行い、データ作成に着手する。
- ・大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事のデータ作成に着手する。

2023 年度

- ・「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」中の単語を取り上げた記事についての情報を「語誌情報ポータル」に収録する。
- ・「言語地図データベース」による言語地図目録情報の整備を行う。
- ・近代以前の辞書類の見出し情報データ作成を継続する。
- ・大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事のデータ作成を継続する。

2024 年度

- ・言語地図目録情報を「語誌情報ポータル」に収録する。
- ・近代以前の辞書類の見出し情報データ作成を継続する。
- ・大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事のデータ作成を継続する。

2025 年度

- ・近代以前の辞書類の見出し情報データ作成を継続するとともに、2024年度までに整備したデータを「語誌情報ポータル」に収録する。
- ・大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事のデータ作成を継続する。

2026 年度

- ・大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事情報を「語誌情報ポータル」に収録する。
- ・近代以前の辞書類の見出し情報データ作成を継続する。

2027 年度

- ・近代以前の辞書類の見出し情報データ作成を継続するとともに、2027年度までに整備したデータを「語誌情報ポータル」に収録する。
- ・シンポジウムを開催し、研究成果を取りまとめる。

II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 4,171 千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 第3期中期計画期間中に増補された「日本語歴史コーパス」語彙素統計情報を「語誌情報ポータル」に収録するという計画については実施できなかった。
- (2) 「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」から単語を取り上げた記事の抽出に釋種した。
- (3) 見出し情報を整備する近代以前の辞書類の選定を行い、データ作成に着手した。
- (4) 大正期～昭和期の総合雑誌の言語関連記事のデータ作成に着手した。

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 人間文化研究機構広領域連携機関型研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の拡張的研究」との連携により、古辞書類の見出し語データ作成に着手した。

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 研究集会「古辞書・漢字音研究とデータベース 2022」を3月4日に開催した（口頭発表11件，参加者：140名）https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230304c/

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

大学院生，学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 大学院生や若手研究者を共同研究に参加させ，学会等で共同発表を行うという計画については，実施できなかった。

3. 地域・社会との連携に関する計画

研究成果の社会への還元

- (1) サーバリプレイスを行い，語誌情報ポータル（語彙資源ポータル）のインターネット公開を継続するための情報基盤強化を行った。

4. グローバル化に関する計画

英語による研究成果の発信等

- (1) 古辞書等のテキストデータを収録・公開するWebサイト「日本語史研究用テキストデータ集」の英語版を作成した。https://www2.ninjal.ac.jp/textdb_dataset/en/index.html

プロジェクト名：多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創
 サブプロジェクト名：学習者用「日本語機能語バンク」の構築
 サブプロジェクトリーダー：プラシャント・パルデシ

令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	A
4. グローバル化に関する計画	—

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

日本語は、英語や中国語などとは異なった語彙的特徴をもつ言語である。例えば、日本語には豊富な自動詞と他動詞の対があり、また、他動詞（二項述語）において、多様な格の枠組み（「が～を」「が～が」「が～に」「に～が」など）が存在する。また、時間、場所、道具などを表す付加詞は格助詞を伴い、その多くは多義的であることも日本語の語彙項目の大きな特徴となっている。このような日本語の語彙的な特徴を海外で自由に利用できる辞書が存在せず、日本語教育や日本語の学習における大きな課題となっている。

語彙の学習と並ぶ日本語学習における重要項目として、いわゆる文型（機能表現）の学習が挙げられる（例：「～なければならない」「～なくてはならない」「～する時・～した時」「～する前に」「～した後」「～だけあって～」「～だけに～」など）。文型（機能表現）は実質的な意味の希薄な語からなる表現がほとんどで、それぞれの表現を構成する個々の単語の意味を辞書で調べ、組み合わせせてみても、その表現全体がどのような意味や機能を持ち、どのような文脈で使用されるかを理解することはできない。日本国内で日本語を学ぶ者であれば、文型の意味や使い方を調べるための辞書や参考書が手に入りやすいが、残念ながら、これらの参考資料は海外で入手しにくく、世界の多くの日本語学習者の手に届いていないのが現状である。また、多くが紙媒体であるため、様々な文型を含む豊富な用例を耳で聞いて、アクセントやイントネーションを学習するのには使えない。国外のみならず国内の学習者にとってもウェブ上で手軽に使える、音声を確認できる辞書の開発は待たれるところである。

日本語学習教材が手に入りやすく、日本語母語話者の教師が少ない海外の教育現場では、以上のような事情から日本語の自他動詞、格助詞や文型の教育・学習は大きな困難を抱えている。この課題を解決すべく、本研究は、日本語の自他動詞、格助詞や文型の教育・学習に役立つオンライン辞書「日本語機能語バンク」を開発し、研究所のホームページを通じて無償公開し、国内外の日本語教育と日本語教育に資する日本語研究に貢献することを目標とする。

上記の最終目標を達成するために、本プロジェクトでは、「日本語機能語バンク」の傘下で、以下の二つのオンライン版リソースを開発・拡充し、研究所のホームページを通じて無償で公開する。

(1)「日本語格助詞データベース」：和語動詞約 1200 語の必須項および付加詞を含む用例（音声付作例のみ）、用例に含む格成分に意味役割を格納したデータを構築し、静的コンテンツとして公開する。

(2)「日本語文型バンク」(<https://bunkeibank.ninjal.ac.jp/>)：第3期において文型バンクのプロトタイプとして約 200 件の文型を意味、接続情報、音声付用例とともに公開している。この 200 件を再検討・改良を行い、第4期で新たに約 1000 件を追加し、最終的には計約 1200 件規模の文型バンクを公開する。

本研究で提案されているような大規模の電子版のリソースを開発するためには、多くの日本語教師・研究者の力を結集する必要がある。また、基礎データを作成するためには、大量コーパスを使用できる高度なスキルが必要となる。日本語学、コーパス言語学、日本語教育の知識や電子データの構築に必要な多様なスキルを持つ多くの国内外の研究者の協力を得て初めてこの規模のリソースの開発・公開が可能となる。このようなリソースの開発・公開はオープンサイエンスの方針に沿うものであり、また、大学共同利用機関でしかできないものである。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

6年間のロードマップは以下の通りである。

1年目（2022年度）：見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式の決定

- 1 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の構築・公開に向けて、見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式などを検討し、決定する。
- 2 和語動詞（約200語）の見出し作成・校閲
- 3 文型（約200件）の見出し作成・校閲
- 4 プロジェクト主催の研究集会、学会などで研究成果の発表
- 5 構築されたデータを静的コンテンツとしてレポジトリで公開

2年目（2023年度）：見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式再検討、必要に応じて修正、それに伴うデータの修正

- 6 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の構築・公開に向けて、見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式などを検討し、決定する。
- 7 和語動詞（約200語）の見出し作成・校閲
- 8 文型（約200件）の見出し作成・校閲
- 9 プロジェクト主催の研究集会、学会などで研究成果の発表
- 10 構築されたデータを静的コンテンツとしてレポジトリで公開

3年目（2024年度）：見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式再検討、必要に応じて修正、それに伴うデータの修正

- 11 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の構築・公開に向けて、見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式などを検討し、決定する。
- 12 和語動詞（約200語）の見出し作成・校閲
- 13 文型（約200件）の見出し作成・校閲
- 14 プロジェクト主催の研究集会、学会などで研究成果の発表、学術誌への論文の投稿を行う。
- 15 構築されたデータを静的コンテンツとしてレポジトリで公開
- 16 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の使い方を紹介する講習会の開催。

4年目（2025年度）：見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式再検討、必要に応じて修正、それに伴うデータの修正

- 17 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の構築・公開に向けて、見出しの執筆・校閲方法、用例のアノテーション方式などを検討し、決定する。
- 18 和語動詞（約200語）の見出し作成・校閲
- 19 文型（約200件）の見出し作成・校閲
- 20 プロジェクト主催の研究集会、学会などで研究成果の発表、学術誌への論文の投稿を行う。
- 21 構築されたデータを静的コンテンツとしてレポジトリで公開
- 22 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の使い方を紹介する講習会の開催。

5年目（2026年度）：見出しの執筆・校閲方法，用例のアノテーション方式再検討，必要に応じて修正，それに伴うデータの修正

23 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の構築・公開に向けて，見出しの執筆・校閲方法，用例のアノテーション方式などを検討し，決定する。

24 和語動詞（約200語）の見出し作成・校閲

25 文型（約200件）の見出し作成・校閲

26 プロジェクト主催の研究集会，学会などで研究成果の発表，学術誌への論文の投稿を行う。

27 構築されたデータを静的コンテンツとしてレポジトリで公開

28 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の使い方を紹介する講習会の開催。

6年目（2027年度）：

29 見出しの執筆・校閲方法，用例のアノテーション方式再検討，必要に応じて修正，それに伴うデータの修正

30 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の構築・公開に向けて，見出しの執筆・校閲方法，用例のアノテーション方式などを検討し，決定する。

31 和語動詞（約200語）の見出し作成・校閲

32 文型（約200件）の見出し作成・校閲

33 プロジェクト主催の研究集会，学会などで研究成果の発表，学術誌への論文の投稿を行う。

34 構築されたデータを静的コンテンツとしてレポジトリで公開

35 「日本語格助詞データベース」および「日本語文型バンク」の使い方を紹介する講習会の開催。

II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 6,324千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

データベース等の構築（アクティビティ）

(1) 「日本語格助詞データベース」

2022年度は基礎データとなる和語動詞の見出しを執筆および校閲作業を行うために見出し執筆班および見出し校閲班を組織した。使用頻度の高い多義的な和語動詞180語を選定し，語義の分類，語釈と例文の執筆を進めた。語義の分類については日本語教育のニーズを最優先した。編集ツールを利用して作業を進め，2023年3月末現在176見出しの執筆・校閲作業が完了した。見出し執筆・校閲作業と並行して，用例に含まれる格成分に意味役割を付与するためのアノテーションの枠組みの検討作業を進めた。第1回プロジェクト会議（於：神戸大学，2022年7月10日）でアノテーションの枠組みを検討したたき台を作成し，共同研究者と共有して改良点について検討してもらった。MLリストを通じて意見交換を行い，加筆・修正などを行って第2回のプロジェクト会議（神戸大学，2022年12月3日）でアノテーションの枠組みを決定した。また，アノテーションを行うツールの設計・実装の検討も行った。次年度の始めにツールの運用とアノテーションの作業を開始する。アノテーション付きのデータは，完成し次第順次レポジトリを通じて公開する予定。

(2) 「日本語文型バンク」

第3期において文型バンクのプロトタイプとして約293の文型を意味，接続情報，音声付用例とともに公開している。2022年度では，まずこれらの文型を再検討して必要な修正を行った。2023年3月末で，284の文型の修正が完了した。また，これとは別に中上級の文型を58見出し追加した。これらの文型のデータは校閲・修正を経て，今後レポジトリを通じて公開する予定。

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 「日本語格助詞データベース」構築班では、見出し執筆グループは3回（ウェブ開催）、アノテーション検討グループは2回（対面形式）研究打合せを行い、研究・作業を進めた。

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 今年度は和文論文の刊行には致らなかった。令和4年度の研究をまとめて来年度以降に投稿する予定である。

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) プロジェクト非常勤研究員（大学院生）を1名雇用し、アノテーションの枠組み策定、データの整理などの作業を進めた。

大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 大学院生を1名プロジェクト共同研究としてプロジェクトへ参加させ、てにをはバンクのアノテーション方式の検討、アノテーションの実施に必要なツールなどの選定作業を行った。

若手研究者への発表の機会の提供

- (1) プロジェクト非常勤研究員（大学院生）にプロジェクトの打合せ会で格助詞の意味役割アノテーションの一案についての発表する機会を提供した。

若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) プロジェクト非常勤研究員（大学院生）に上記のプロジェクト打合せ会で発表する際の旅費を支援した。

3. 地域・社会との連携に関する計画

研究成果の社会への還元

- (1) University of Foreign Language Studies-The University of DA Nang (UFLS-UD), Da Nang で日本語教師向けに研究成果の一部（「日本語教育・学習・研究用のオンライン言語資源 (Online resources for teaching, learning & analyzing Japanese)」）を報告した（2023年1月3日）。
- (2) The Department of Foreign Languages, Manipur University, Imphal, India で日本語学習者・日本語教師向けに研究成果の一部（Comparative study of classifiers in Japanese and some Indian languages）を報告した（2023年2月13日）。
- (3) The Faculty of Japanese Studies, Tashkent State University of Oriental Studies 日本語教師向けに研究成果の一部（「日本語の多義語の教育と学習：多義的な基本動詞を通じて」）を報告した（2023年3月2日）。
- (4) The Faculty of Japanese Studies, Tashkent State University of Oriental Studies 日本語教師向けに研究成果の一部（「日本語教育・学習・研究用のオンライン言語資源」）を報告した（2023年3月3日）。
- (5) 第29回ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウム（トリア大学、オンライン開催）テーマ：「日本語教育における語彙学習と指導について」で日本語教師向けに研究成果の一部（「基本動詞ハンドブック」, および「基本動詞ハンドブック：日本語教室における活用の一試案」）を基調講演として報告した（2023年3月4日）。

4. グローバル化に関する計画

特になし

5. その他

- (1-1) University of Foreign Language Studies-The University of DA Nang (UFLS-UD), Da Nang で日本語教師向けに研究成果の一部を報告した (2023 年 1 月 3 日)。【既出「研究成果の社会への還元」】
- (1-2) The Department of Foreign Languages, Manipur University, Imphal, India で日本語学習者・日本語教師向けに研究成果の一部を報告した (2023 年 2 月 13 日)。【既出「研究成果の社会への還元」】
- (1-3) The Faculty of Japanese Studies, Tashkent State University of Oriental Studies 日本語教師向けに研究成果の一部を報告した (2023 年 3 月 2 日)。【既出「研究成果の社会への還元」】
- (1-4) The Faculty of Japanese Studies, Tashkent State University of Oriental Studies 日本語教師向けに研究成果の一部を報告した (2023 年 3 月 3 日)。【既出「研究成果の社会への還元」】
- (1-5) 第 29 回ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウム (トリア大学, オンライン開催) テーマ: 「日本語教育における語彙学習と指導について」で日本語教師向けに研究成果の一部を 基調講演として報告した (2023 年 3 月 4 日)。【既出「研究成果の社会への還元」】
- (2) 協定に基づき, 国際交流基金ニューデリー事務所と連携し, インドにおける日本語教育史に関する論文の編集作業を進めた。

「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」評価報告

令和4年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施している

昨今、研究の終着点としてデータベースの構築を挙げることが多いが、既存の、あるいは制作中のものをいかに横断的・総合的に利用できるのかが課題となると常々思っている。そのような意味では当プロジェクトが計画している語彙資源の整備、つまり日本語の語彙データを扱う5つのサブプロジェクトを統括的に構築していくことは重要である。また、下記の各サブプロジェクトが整備する語彙資源を連携・統合できることが理想的である。

- ・ 学習者の辞書資源使用の実態調査
- ・ 言語資源の空間接続
- ・ 学習者用辞書資源の構築
- ・ 語彙資源ポータル拡張
- ・ 学習者用「日本語機能語バンク」の構築

《評価項目》

1. 共同利用・共同研究について

UniDicによる形態素解析用ツール「Web茶まめ」を更新し新しい現代語用UniDicに対応して一般公開したことにより、利用者が大幅に増えたことは喜ばしい。共同利用と共同研究を進めるにはさらに制度的に担保する必要があるか考える。

2. 教育・人材育成について

第44回NINJALチュートリアル『分類語彙表』による日本語研究を開催し、語彙資源に関するチュートリアルを実施した。今後、大学院レベルでの教育時の活用が可能となるであろう。また、これらのことは研究プロジェクトの継続に役立つことに繋がることを期待したい。もう一方で、いままで行われてきたセミナーなどを定期的で開催し、大学院生レベルの学生に集中的にスキルを身につけさせる機会としたい。

3. 社会連携・社会貢献について

第17回NINJALフォーラム「語彙資源の構築と活用」として言語資源開発センターと共催で開催し、一般向けにプロジェクトで構築する語彙資源について発信した。そもそも専門性の高い各サブプロジェクトは、いかに社会連携・社会貢献できるのかが課題である。話題のChatGPTが既存の情報を集める能力を備えるように、日本の民間の研究およびデータ、他の言語資源情報（たとえば国会図書館デジタルコレクション）を吸収可能な装置（プラットフォーム）の構築も、統合という意味で検討する必要がある。

4. 国際連携・国際発信について

学会とともに英語圏への積極的な連携や発信に取り組んでいるようで評価に値する。とくに、日本語学習者・研究者のもっとも多い東アジアへの発信や研究者との連携は非常に重要であることから、今後も継続した取り組みを期待する。

5. その他特記事項

既存のデータベースをより簡便に学生たちがすぐに使えるようにもう少し改善してほしい。

「実証的な理論・対照言語学の推進」自己点検評価報告

プロジェクト名：実証的な理論・対照言語学の推進

プロジェクトリーダー：浅原 正幸

令和4年度プロジェクト全体自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

I. 計画期間内の概要

1. プロジェクト全体の6年間の計画

認知言語学や生成文法などの理論的研究や類型論的研究においては、伝統的に話者の内省や直観に基づく個別研究が方法的に主流だったが、近年その方法論の見直しが各理論、各分野で急速に進んでいる。具体的には、理論的考察にコーパス資料、実験データ、フィールド調査などを多角的に組み合わせる言語研究の中心的課題に取り組む、新たな実証的方法論を模索する動きが世界的に加速化している。本プロジェクトでは、音韻、意味、形態・統語という言語研究の中心的三分野における理論的・類型論的な研究の核心的課題に取り組む、このような世界的潮流における最先端の研究を参照しつつ、それを先導する研究を進める。具体的には、言語学と隣接分野、あるいは言語学の複数の下位分野の知見を融合する形で研究を進めるサブプロジェクト4件と、自然言語処理の知見を活かしてそのような研究に資する言語資源を開発するプロジェクト1件を、それぞれの独自性を保ちつつも相互に連携させて展開することで、国内外の言語研究の最前線に貢献することを目指す。

個別の課題に取り組む4つのプロジェクトは、イントネーションの構造の言語間・方言間変異（イントネーションP）、体言化・名詞修飾構造の形態・統語・意味的類型（体言化P）、状態変化述語の意味構造（述語の意味論P）、統語変換操作の理論言語学における位置づけ（計算言語学P）という、音韻、意味、形態・統語のそれぞれの分野における鍵となる概念の定義そのものを再考察することを目的としている。この目的のために、個々のプロジェクトは、解明の対象である概念に迫るために最適な分野横断的手法を複数組み合わせた多角的なアプローチを採用することで研究を進める。具体的には、イントネーションPでは、コーパス構築とフィールド調査、体言化Pではフィールド調査と文献資料調査、述語の意味文法Pではビデオ実験とコーパス調査、計算言語学Pではコーパス構築と計算論的モデリングを中心的な手法として採用する。これらの具体的な課題に取り組むサブプロジェクトと連動し、それを後方支援するアノテーションPでは、既存のコーパスで手薄だが、言語資源に基づく言語の科学的研究をより一層進めるために必要となるタイプの言語資源の構築に注力する。プロジェクト全体で開催する合同の研究会やサブプロジェクト間での共同研究や言語資源活用のノウハウの共有を通して、サブプロジェクト間の連携を強めて研究推進の相乗効果を得ることを模索する。

II. 令和4年度の活動

令和4年度予算総額 31,909 千円

理論対照統括

- ・5つのサブプロジェクト共同で、Evidence-based Linguistics Workshop 2022 を 9月5・6日に開催し、各プロジェクトの成果を報告するとともに、発表の公募も行い、関連分野の研究者との交流の場を提供した（神戸大学と共催）【共同利用・共同研究】
- ・下記に記載する5つのサブプロジェクトと連携して研究を進めた成果を、書籍2冊、ブックチャプター2本、論文20本、発表・講演93件として公表した【共同利用・共同研究】。

アノテーション

- ・以下のアノテーション・データベース整備・公開を行った。【共同利用・共同研究】
『日本語日常会話コーパス』係り受けアノテーションを完成させて、公開した。
分類語彙表に基づく形容詞結合価データベース（西尾データの電子化）を公開した。
分類語彙表に基づく動詞結合価データベース（宮島データの電子化）を公開した。
『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に基づく直喩データベースを公開した。
- ・企業との共同研究を5件進めた。【地域・社会との連携】

イントネーション

- ・琉球語方言のオンラインイントネーション調査を4回行い、そこで得た知見を踏まえて、方言共通の調査票を作成した。【共同利用・共同研究】
- ・『広島大学日本語電話会話コーパス』構築作業（分節音ラベリング）を約5時間20分完了した。【共同利用・共同研究】
- ・「消滅危機言語の保存研究」（リーダー：山田）と共同で大学院生向けのフィールドワークチュートリアル「方言語彙データ作成講習会」を、「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」（リーダー：小磯）と連携して若手研究者・大学院生を主対象とする韻律ラベリング講習会を開催した。【大学院教育・若手研究者育成】
- ・「消滅危機言語の保存研究」（リーダー：山田）と連携して、文化庁および地方自治体と共同で一般向けの「危機言語サミット」を開催した。【地域・社会との連携】

計算言語学

- ・データのアノテーションを進めた。パイロット的なモデリングの結果をまとめ、言語処理学会に投稿した。【共同利用・共同研究】
- ・「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」プロジェクト（リーダー：小木曾）と共催で、言語処理学会年次大会2023において「深層学習時代の計算言語学」というテーマでワークショップを3月17日に開催した。【共同利用・共同研究】
- ・名古屋大と共催で国際学会 HPSG 2022 を開催した（7月29日、オンライン）。【共同利用・共同研究】
【グローバル化】
- ・プロジェクトの理論的基盤に関連する研究の成果をとりまとめ、英語での共著論文を海外のジャーナルに出版した（国際共著論文）《グローバル化》
- ・プロジェクトの進捗状況を国際学会の招待公演（JK30, 3月13日）で発表した。【グローバル化】
- ・非常勤研究員1名を雇用してプロジェクトの理論的・記述的基盤に関する分野融合的な共同研究を主体的に進める方法について指導した結果、2022年度日本言語学会論文賞の受賞につながった。【大学院教育・若手研究者育成】

(https://www.ls-japan.org/modules/documents/index.php?cat_id=167)

体言化

- ・海外（インド、ベトナム）で国際ワークショップを7件開催した。そのうち、2件は交流協定を締結しているデカン・カレッジ・ポスト・グラデュエイト・アンド・リサーチ・インスティテュート（Deccan College Post Graduate and Research Institute）およびインド工科大学マドラス校（Indian Institute of Technology Madras）と共同で開催した。【共同利用・共同研究】【グローバル化】
- ・大学院生（2名）をプロジェクト研究員として参画させ、プロジェクト主催の研究会で発表の機会を提供した。【大学院教育・若手研究者育成】
- ・英語による研究発信の一貫として、海外の著名な出版社（Mouton, Springer Nature）から刊行される論文集に研究成果を2件投稿した。【共同利用・共同研究】【グローバル化】
- ・フィールドワークを日本国内2回（1回目：愛知県，2022年9月6日～8日；2回目：福岡県・山口県・広島県，2022年9月11日～16日），国外3回（1回目：台湾・台北市，2023年1月15日～22日；2回目：インド・アッサム州，2023年2月8日～22日；3回目：ウズベキスタン，2023年3月8日～25日）を実施した。【共同利用・共同研究】

なお、調査において予算の執行については問題があると考えている。昨年度は新型コロナウイルス感染症対応のために海外旅費を所長裁量経費に集約し、執行するという運用が行われた。予算 12,480 千円のうち 5,989 千円が海外旅費として所長裁量経費として計上されたが、実際の旅費の執行額は当初予算を大幅に超えた 9,995,382 円（内航空券代 6,452,380 円）であり、ほとんどがサブプロジェクトリーダーを含む2名の外国旅費であった。

述語の意味と文法

- ・日本語，英語，その他の言語における動詞類についてデータ収集を行い，日本語については分類リストを作成した。また，リヨン大学，INALCO，ニューヨーク州立大学の指導的研究者と対面で研究打合せを行い，連携を深めた。【共同利用・共同研究】【グローバル化】
- ・成果発表については，英文論文集の編集を進めた。また，国際学会 NAMED 2022 を京都大学と共同で開催し（2022年11月3日～4日），共同研究者が5件の研究発表を行った。また，代表者は John Benjamins 社から出版された書籍に1編の論文を掲載し，国際学会において5回の研究発表と2回の招待講演を行った。国内学会のシンポジウムにおいても研究の成果を発表した。【共同利用・共同研究】【グローバル化】
- ・学生支援については，大学院生6名を共同研究者とした。また，国際学会で研究発表を行う2名の国内学生及び5名の海外学生に旅費の支援を行った。【大学院教育・若手研究者育成】

プロジェクト名：実証的な理論・対照言語学の推進

サブプロジェクト名：アノテーションデータを用いた実証的計算心理言語学

サブプロジェクトリーダー：浅原 正幸

令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

第2期：国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「コーパスアノテーションの基礎研究」(H21(2009)年10月～H27(2015)年9月)と第3期：国立国語研究所コーパス基礎研究プロジェクト「コーパスアノテーションの拡張・包括・自動化に関する基礎研究」(H28(2016)年4月～R4(2022)年3月)(1500千円/年)を継承し、アノテーションデータの共有化・共同開発およびアノテーションデータに基づく、理論・対照研究を進める。具体的には統語班・意味班・認知班の3つに分かれて以下のことを進める。

国語研で過去に構築した形容詞・動詞「記述的研究」データに基づく、実証的な統語・意味研究の展開
統語研究において、体系的な語彙意味論に基づく大規模言語資源が求められている。他言語においては WordNet に基づき、FrameNet と呼ばれる体系的な語彙フレームが構築されている。日本語でも日本語フレームネットの研究が進められているが、英語の翻訳に基づく日本語ワードネットの利用は、日本語の語彙フレームを構成するにあたって語義の粒度が適切でないという問題点があった。一方、国立国語研究所においては、1964年に「分類語彙表」(国立国語研究所 1964)を刊行して以来、形容詞の結合価(西尾 1972)・動詞の結合価(宮島 1972)・比喩表現の結合の分析(中村 1977)などの大規模な日本語記述的研究が進められてきた。これらの研究は紙のカードに基づくものであり、現在は出版物として残されているのみである。これらを電子化し、現在のコーパスなどと対照させることで、日本語の統語研究の発展が見込まれる。

Universal Dependencies による多言語言語処理・言語類型論研究と Enhanced Dependencies

世界規模のオープンプロジェクトとして Universal Dependencies が進められている。延べ300人以上の研究者が参画し、90言語以上150のツリーバンクが整備され、多言語言語処理・言語類型論研究における基礎的な言語資源として世界的に評価されている(<https://universaldependencies.org/>)。この研究プロジェクトの特色として、言語横断的な形態・統語論的アノテーション基準を策定するための議論が、オープンソースソフトウェア開発のプラットフォームである GitHub 上(<https://github.com/universaldependencies/docs/issues>)でやり取りされ、issues にあげられている1つ1つの議論が言語類型論的に重要な公開研究資源となっている。

国立国語研究所は2014年から同プロジェクトに参画し、日本語の Universal Dependencies 関連言語資源の整備を統括するとともに、国内の研究者の取りまとめを進めてきた(浅原ほか 2019)。

同プロジェクトにおいて、Enhanced Dependencies として、意味的な結合価のアノテーションの議論が行われ、近年言語横断的な proposition bank の整備が求められており、議論が活発化している。

言語認識過程の言語資源化

言語資源整備において、電子化した言語資源に対してアノテーションを行うことで言語の生成過程の研究が進めてきた。一方、近年、言語を刺激として呈示した際の言語解釈のアンケート・読み時間・事象関連電位・脳活動データなど、被験者の反応をデータ化する言語認識過程を言語資源化する試みが進められている。一方、日本語において、言語認識過程を言語資源化した事例は依然として少ない。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

- 2022年 意味班によるアノテーションデータの公開
- 2023年 統語班によるアノテーションデータの公開
- 2024年 意味班によるアノテーションデータの公開
- 2025年 統語班によるアノテーションデータの公開
- 2026年 認知班による実験環境の整備
- 2027年 認知班による実験環境の整備

II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 4,500千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

データベース等の構築（アクティビティ）

(1) 統語班

- 『日本語日常会話コーパス』係り受けアノテーション CEJC-DEP を公開した
(中納言ダウンロードサイト)
- 『日本語日常会話コーパス』に基づく Universal Dependencies
に関する発表を NLP2023 で行った
「UD Japanese-CEJC とその評価」,

○大村舞, 若狭絢 (国語研), 松田寛 (Megagon Labs), 浅原正幸 (国語研)

https://www.anlp.jp/proceedings/annual_meeting/2023/pdf_dir/P3-9.pdf

- 分類語彙表に基づく形容詞結合価データベース (西尾データの電子化) を公開した
<http://doi.org/10.15084/00003665>
- 分類語彙表に基づく動詞結合価データベース (宮島データの電子化) を公開した
<http://doi.org/10.15084/00003668>
- 『現代語の助詞・助動詞』分類語彙表番号付与版 を公開した
<http://doi.org/10.15084/00003667>

(2) 意味班

- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に基づく直喩データベースを公開した
(中納言ダウンロードサイト)
- 『日本語歴史コーパス』に対する分類語彙表番号アノテーションに関する国際会議発表を行った
Asahara et al. (2022) “CHJ-WLSP: Annotation of ‘Word List by Semantic Principles’
Labels for the Corpus of Historical Japanese”, Proceedings of the Second Workshop on
Language Technologies for Historical and Ancient Languages
<https://aclanthology.org/2022.lt4hala-1.5/>

(3) 認知班

- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』印象評定情報アノテーションを進めた
- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』読み時間情報付与に関する研究を LREC-2022 で発表した Masayuki Asahara (2022) “Reading Time and Vocabulary Rating in the Japanese Language: Large-Scale Japanese Reading Time Data Collection Using Crowdsourcing”, Proceedings of the Thirteenth Language Resources and Evaluation Conference
<https://aclanthology.org/2022.lrec-1.555>

フィールド調査・実験等 (アクティビティ)

- (1) オンライン実験サーバ psyling.ninjal.ac.jp の整備を進めた (セキュリティ審査済み)

国内外の大学や研究機関との組織的な連携等 (アクティビティ・アウトプット)

- (1) 今年はインターンシップの要望がなかったために受入はなかった。

他のプロジェクトとの合同の活動等 (アクティビティ・アウトプット)

- (1) 言語資源開発センターと連携して NINJAL チュートリアル 『分類語彙表』による日本語研究 (海外: 韓国) を 8/6 に実施した (参加者: 62 名)。

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20220806b/

- (2) 語彙資源プロジェクト・言語資源開発センターと連携して第 17 回 NINJAL フォーラム 「語彙資源の構築と活用」を 2023/2/18 に実施した (参加者: 214 名)。

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230218a/

異分野の研究者との共同研究・協業等 (アクティビティ・アウトプット)

- (1) 新学術領域研究『時間生成学』計画班 (-2022) に参画

<https://www.chronogenesis.org/ja/sections/index.html#se-1>

- (2) I-URIC 機構間連携プロジェクト (高エネ研・情シスなど複数の大学共同利用機関法人が関わるプロジェクト) に参画し NLP2023 で研究成果を 2 件発表した:

「人間の脳と人工知能における短歌の鑑賞に関する神経活動の比較」,

- 船井正太郎, 近添淳一 (アラヤ), 持橋大地 (統数研), 浅原正幸 (国語研), 松井鉄平 (岡山大), 鹿野豊 (群馬大), 川島寛乃 (慶應大), 磯暁 (KEK)

https://www.anlp.jp/proceedings/annual_meeting/2023/pdf_dir/B5-2.pdf

「短歌を読む際の情動に関する脳活動の解析」,

- 佐藤奈奈 (お茶大), 近添淳一, 船井正太郎 (アラヤ), 持橋大地 (統数研), 鹿野豊 (群馬大), 浅原正幸 (国語研), 磯暁 (KEK), 小林一郎 (お茶大)

https://www.anlp.jp/proceedings/annual_meeting/2023/pdf_dir/H10-4.pdf

- IU-REAL 異分野融合・新分野創出プログラム 2023 年度スタートアップ「素粒子実験のデータ解析技術を応用した日本語テキストの数理的解明」が採択された。同研究内容が、2023 年 6 月 28-30 日にスイス・ローザンヌで開催される国際会議(QUALICO 2023)に採択された。

調査データ・データベース等公開 (アウトプット)

- (1) 統語班

- 『日本語日常会話コーパス』係り受けアノテーション CEJC-DEP を公開した

- 『日本語日常会話コーパス』に基づく Universal Dependencies に関する発表を NLP2023 で行った【再掲】

- (2) 意味班

- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に基づく直喩データベースを公開した (中納言ダウンロードサイト)

- 『日本語歴史コーパス』に対する分類語彙表番号アノテーションに関する国際会議発表を行った。
【再掲】

(3) 認知班

- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』印象評定情報アノテーションを進めた【再掲】
- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』読み時間情報付与に関する研究を LREC-2022 で発表した。
【再掲】

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 意味班：アノテーション・述語の意味文法・学習者辞書 3プロジェクト合同研究会（2022年5月28日）参加者28人（国外6人・学生1人）

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 国内会議発表のみ掲載（国際会議発表は別項目「英語による研究成果の発信等」に記載）
- 言語処理学会論文誌『自然言語処理』 1件
 - 日本語学会 2022年度春季大会 2件
 - 人工知能学会 2022年度人工知能学会全国大会（第36回） 1件
 - 言語処理学会年次大会 NLP2023 9件

データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 言語資源開発センターと連携して NINJAL チュートリアル（海外：韓国）を 8/6 に実施【再掲】。

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

特別共同利用研究員の受け入れ

- (1) 今年はインターンシップの要望がなかったために受入はなかった【再掲】

総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 東京外国語大学 授業担当「コーパス言語学入門」「心理言語学入門」

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 科研費でプロジェクト非常勤研究員4人を雇用了。1人が2023年4月に就職、1人が2023年7月に就職、1人が2023年4月より学術振興会特別研究員 RPD に採用となった。

大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 共同研究員に大学院生1名参画

若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 言語資源開発センターと連携して NINJAL チュートリアル（海外：韓国）を 8/6 に実施【再掲】。

3. 地域・社会との連携に関する計画

産業界との連携

- (1) 企業との共同研究5件を実施した。

地域・社会との連携

- (1) 言語処理学会論文誌副編集長
(2) 日本言語学会大会運営委員
(3) LREC 2022: Corpora and Annotation - Area Chair
(4) ACL-IJCNLP 2022: Resources and Evaluation - Senior Area Chair

一般向け講義・講演会・フォーラム等

- (1) 語彙資源プロジェクト・言語資源開発センターと連携して第17回 NINJAL フォーラム「語彙資源の構築と活用」2023/02/18 を実施【再掲】

研究成果の社会への還元

- (1) 企業との共同研究プロジェクトによる成果物を以下のとおり発信した。
 - 日本経済新聞記事オープンコーパス (2023/03/13 公開)
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000502.000011115.html>
 - リクルート社より係り受け解析の新しいモデルを公開
UD Japanese CEJC+GSD transformers-based spaCy model (2023/03/24 公開)
https://github.com/megagonlabs/UD_Japanese-GSD/releases/tag/nlp2023
 - LegalOn 社より形態素解析モデルを公開
<https://github.com/daac-tools/vibrato> (2023/03 公開)
 - ホンダリサーチインスティテュート社との共同研究成果を NLP2023 で発表
「Double cross model による位置情報フレームアノテーション」,
川端良子, 大村舞, 浅原正幸 (国語研), 竹内誉羽 (HRI)
https://www.anlp.jp/proceedings/annual_meeting/2023/pdf_dir/B11-3.pdf

4. グローバル化に関する計画

海外の大学との連携等

- (1) Universal Dependencies プロジェクトに参画

国際シンポジウムの開催

- (1) LREC 2022: Corpora and Annotation - Area Chair 【再掲】
- (2) ACL-IJCNLP 2022: Resources and Evaluation - Senior Area Chair 【再掲】

英語による研究成果の発信等

- (1) LREC-2022 2件 (自身の担当 Area 以外)
- (2) LREC-2022 併設ワークショップ 1件
- (3) RaAM 15 1件
- (4) PACLIC-36 1件

5. その他

- (1) プロジェクトのウェブページを作成: <https://masayu-a.github.io/anno/>

プロジェクト名：実証的な理論・対照言語学の推進

サブプロジェクト名：日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究

サブプロジェクトリーダー：五十嵐 陽介

令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

日本語共通語のイントネーション研究は世界的に見ても高い水準にある。それに対して日本語・琉球語諸方言のイントネーション研究はまだ始まったばかりであり、ほぼ未開拓の分野と言える。諸方言のアクセントを扱う研究は数多く、それによって日本語・琉球語のアクセントは多様性に富むものであることが明らかにされている。語レベルの韻律現象の多様性を勘案すれば、諸方言における文レベルの韻律現象すなわちイントネーションにも多様性が観察されることが期待される。それを解明し、一般言語学・言語類型論の視点から検討することは、韻律現象の理論的研究に大きく貢献することが予想される。

共時的研究の最終目標として、日本語・琉球語諸方言のイントネーション体系の多様性を明らかにし、それを一般言語学・言語類型論の視点から検討し、日本語・琉球語諸方言の研究から、世界諸言語を対象とした理論的研究に貢献することを設定する。通時的研究の最終目標として、祖語の韻律体系を再建し、祖語の体系が現代諸方言の韻律体系へと多様化する過程を明らかにすることを設定する。

第4期の目標は、イントネーション体系、特に句末音調と韻律句形成の多様性を、フィールドワークを通じて収集したデータおよび方言コーパスの分析に基づいて実証的に解明し、その結果を一般言語学・言語類型論の視点から検討することで、世界の諸言語を対象とした理論的研究に貢献することにある。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

	目標	実施計画
2022(R4) 年度	・共通の調査票を作成する。 ・調査票に基づいた方言データ収集を開始する。	4月～9月 共通の調査票の作成 4月～3月 方言データ収集 9月 シンポジウム「プロソディを通して見る社会とコミュニケーション」共催
2022.4 ～2023.3	・調査結果の初期報告を国内学会で行う。 ・コーパス講習会を開催する ・『広島大学日本語電話会話コーパス』(COTCO-H) 構築作業を2時間分完了する。	3月 『広島大学日本語電話会話コーパス』(COTCO-H) 構築作業2時間分完了 時期未定 コーパス講習会 時期未定 フィールドワークチュートリアル 時期未定 共同研究員発表会（×2回）

2023 (R5) 年度 2023. 4 ～2024. 3	<ul style="list-style-type: none"> 共通の調査票を改良する。 調査票に基づいた方言データ収集を継続する。 調査結果の初期報告を国内・国際学会で行う。 COTCO-H 構築作業を 4 時間分完了する。 	<p>4 月～3 月 調査票改良</p> <p>4 月～3 月 方言データ収集</p> <p>9 月 国内学会研究発表</p> <p>8 月 (予定) 国際学会 (ICPhS) で成果発表</p> <p>3 月 COTCO-H 構築作業計 4 時間分完了</p> <p>時期未定 フィールドワークチュートリアル</p> <p>時期未定 共同研究員発表会 (× 2 回)</p>
2024 (R6) 年度 2024. 4 ～2025. 3	<ul style="list-style-type: none"> 調査票に基づいた方言データ収集を継続する。 調査結果の初期報告を国内・国際学会で行う。 COTCO-H 構築作業を 6 時間分完了する。 	<p>4 月～3 月 方言データ収集</p> <p>5 月 (予定) 国際学会 (Speech Prosody) で成果発表</p> <p>9 月 国内学会で成果発表</p> <p>3 月 COTCO-H 構築作業計 6 時間分完了</p> <p>時期未定 フィールドワークチュートリアル</p> <p>時期未定 共同研究員発表会 (× 2 回)</p>
2025 (R7) 年度 (前半) 2025. 4 ～2026. 3	<ul style="list-style-type: none"> 調査票に基づいた方言データ収集を継続する。 国内学会でワークショップを開催する。 音声データ公開する。 COTCO-H 構築作業を 8 時間分完了し公開する。 コーパスに関する書籍を出版する 	<p>4 月～3 月 方言データ収集</p> <p>9 月 国内学会でワークショップ開催</p> <p>3 月 共通の調査票を用いて収集された発話の音声データ公開</p> <p>3 月 COTCO-H 構築作業計 8 時間分完了</p> <p>同コーパス 8 時間分公開</p> <p>時期未定 コーパスに関するシリーズ書籍のうち 1 冊(「設計・構築編」) 出版</p> <p>時期未定 フィールドワークチュートリアル</p> <p>時期未定 共同研究員発表会 (× 2 回)</p>
2026 (R8) 年度 2026. 4 ～2027. 3	<ul style="list-style-type: none"> 国内・国際学会で成果発表する。 COTCO-H 構築作業を 10 時間分完了し公開する。 	<p>5 月 (予定) 国際学会 (Speech Prosody) で成果発表</p> <p>9 月 国内学会研究発表</p> <p>3 月 『広大電話会話コーパス』構築作業計 10 時間分完了</p> <p>時期未定 フィールドワークチュートリアル</p> <p>時期未定 共同研究員発表会 (× 2 回)</p>
2027 (R9) 年度 (前半) 2027. 4 ～2027. 9	<ul style="list-style-type: none"> 論文集 (書籍) を出版する。 COTCO-H 構築作業を 11 時間分完了し、公開する。 	<p>9 月 国内学会研究発表</p> <p>3 月 『広大電話会話コーパス』構築作業計 11 時間分完了</p> <p>同コーパス 11 時間分公開</p> <p>時期未定 フィールドワークチュートリアル</p> <p>時期未定 共同研究員発表会 (× 2 回)</p>

II. 令和 4 年度の活動

令和 4 年度予算額 2,336 千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

フィールド調査・実験等（アクティビティ）

- (1) 南琉球宮古語池間方言のイントネーションのオンライン調査を4回行った。

データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 2023年1月までに『広島大学日本語電話会話コーパス』構築作業（分節音ラベリング）約5時間20分を完了させた。

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 12月3日（土）に「消滅危機言語の保存研究」（リーダー：山田）と共同で大学院生向けのフィールドワークチュートリアル「方言語彙データ作成講習会」を開催した。【若手支援】

https://kikigengo.ninjal.ac.jp/event/doc/7_Celik_221204.pdf

- (2) 5月28日と12月4日に、「消滅危機言語の保存研究」（リーダー：山田）と共同で、「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会を開催した（5/28：発表9件・参加者98名，12/4：発表7件・参加者70名）。

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20220528a/

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20221204a/

- (3) 1月28日-29日に、「消滅危機言語の保存研究」（リーダー：山田）と連携して、文化庁および地方自治体と共催で「令和4年度 危機的な状況にある言語・方言サミット（奄美大会）・沖永良部」を開催し、プロジェクトメンバーが危機方言の現状と取組の状況に関する講演を行い、また「消滅危機言語の保存研究」プロジェクトリーダーの山田真寛が、自身が代表をつとめる消滅危機言語の継承・保存活動「言語復興の港」に関する発表を行った。

https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/summit/93803901.html

- (4) 8月31日に「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」（リーダー：小磯）と連携して、社会言語科学会「プロソディを通して見る社会とコミュニケーション」を共催するとともに研究成果を発表した。

http://www.jass.ne.jp/?page_id=1103

- (5) 9月16日に「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」（リーダー：小磯）と連携してコーパス言語学分野の人材を育成するために、若手研究者や大学院生を主対象とする、コーパスへの韻律ラベリングの講習会を行った。【若手支援】

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) シンポジウム「プロソディを通して見る社会とコミュニケーション」については「他のプロジェクトとの合同の活動等」に記載の通り開催した。

- (2) 若手研究者や大学院生を主対象とするコーパス講習会については「他のプロジェクトとの合同の活動等」に記載の通り開催した。

- (3) 6月19日に日本言語学会第164回大会 ワークショップ「日琉祖語再建に向けての新たな展望：琉球諸語の視点から」を開催した。

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20220619a/

- (4) 日琉祖語の再建を扱う研究会「プロトジャポニック」を11月24日，12月17日，1月21日，2月23日，3月13日に合計5回開催した。

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20221124a/

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20221217a/

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230121b/

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230223a/

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230313a/

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 国際ジャーナル論文に論文（単著）1件（2022年6月27日）、国内ジャーナルに論文（単著）1件（2023年1月31日）を発表した。

データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 若手研究者や大学院生を主対象とするコーパス講習会については「他のプロジェクトとの合同の活動等」に記載の通り開催した。

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) クロスアポイントメントに基づく東京外国語大学大学院博士前期課程授業 Japan Studies（前期・後期）を担当した。

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 10月から3月に週2回で1名雇用，加えて12月のみ週2で1名雇用し，日本語・琉球諸語研究を推進できる人材の育成につとめた。前者は2023年4月に大東文化大学外国語学部日本語学科助教に，後者は2023年4月に有明工業高等専門学校一般教育科助教に採用され，常勤の研究者として次世代の言語研究を担う人材となった。

大学院生，学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 40歳未満26人，35歳以下24人をプロジェクト研究員としてプロジェクトに参加してもらい，「消滅危機言語の保存研究」（リーダー：山田）と共同で開催した「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会等への参加，発表を促すことで，若手研究者の学術的交流の場を提供し，日本語・琉球語研究を推進できる若手研究者の育成につとめた。

若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 2回の「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会については「他のプロジェクトとの合同の活動等」に記載の通り開催した。

若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) 「若手研究者に調査旅費の申請を募り，申請があった場合は旅費の支援を行う。」という計画をしていたが，調査旅費の申請はなかった。

若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 大学院生向けのフィールドワークチュートリアル「方言語彙データ作成講習会」については「他のプロジェクトとの合同の活動等」に記載の通り開催した。
- (2) 若手研究者や大学院生を主対象とするコーパス講習会については「他のプロジェクトとの合同の活動等」に記載の通り開催した。

3. 地域・社会との連携に関する計画

研究成果の社会への還元

- (1) 1月28日-29日に，「消滅危機言語の保存研究」（リーダー：山田）と連携して，文化庁および地方自治体と共催で「令和4年度 危機的な状況にある言語・方言サミット（奄美大会）・沖永良部」を開催し，プロジェクトメンバーが危機方言の現状と取組の状況に関する講演を行い，また「消滅危機言語の保存研究」プロジェクトリーダーの山田真寛が，自身が代表をつとめる消滅危機言語の継承・保存活動「言語復興の港」に関する発表を行った（再掲）。

https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/summit/93803901.html

4. グローバル化に関する計画

海外の研究者の受入

- (1) 令和4年度日本学術振興会外国人研究者招へい事業外国人特別研究員（欧米短期・推薦）を1名受け入れた。

英語による研究成果の発信等

- (1) 国際ジャーナル論文に論文（単著）1件（2022年6月27日）発表した。

プロジェクト名：実証的な理論・対照言語学の推進

サブプロジェクト名：計算言語学的手法による理論言語学の実証的な方法論の開拓

サブプロジェクトリーダー：窪田 悠介

令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	A
3. 地域・社会との連携に関する計画	—
4. グローバル化に関する計画	B

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

自然言語処理のリソースや計算言語学的手法を援用した理論言語学研究的学際化が進展しているが、人間の言語能力の解明という、理論言語学における核心的問題に直接取り組む研究はまだ生まれていない。言語習得や（計算機でなく人間による）意味解釈や統語構造の解釈のプロセスの解明に計算言語学的手法を援用する研究も出始めてはいるが、これらはまだ端緒についたばかりであり、本格的な研究となっていない。本研究では、理論言語学研究に対して新たな経験科学としての基盤を与えるために、計算言語学的手法を援用した方法論を模索し提案することを目的とする。

計算言語学的手法を援用した理論言語学研究が国内外の研究でここ 10 年ほどで急速に進展した。特に、本研究の研究代表者によるカテゴリ文法を用いた統語論・意味論の理論構築の研究によって、計算言語学的手法を用いて理論言語学研究に形式的基盤を与える研究が進み、生成文法理論の統語論・意味論の数学的基礎づけに関する見通しがほぼ立った。また、別の研究の流れとして、自然言語処理の手法を応用的な技術として用いて、計算論的モデリングの手法で人間による言語処理や言語獲得の性質などの解明を試みる研究が国内外で進んでいる。国語研においても、コーパス開発センターでの日本語 web コーパスや、web コーパスを用いた大規模な単語分散表現の開発、また、理論・対照研究領域における第3期の2件の基幹プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」と「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」との関連で、いくつかの学際的な言語研究の試みが進められた。

このように、一見したところ理論言語学研究的学際化が進展したが、分野融合的な研究の真の発展のためには、乗り越えるべきいくつかの課題がある。本研究では、その中の一つに焦点を絞って突破口を探る。上述のように、理論言語学と計算言語学の接点には、大きく分けて、分野融合的な研究としての理論的基盤に関する「基礎研究」と、この「基礎研究」の成果を応用して、より直接的に言語学の側の理論研究の問題に取り組む「応用研究」の二つの流れがある。現状では、言語学と自然言語処理という二つの分野における、前者の自然科学的指向性と後者の工学的指向性との間の齟齬により、この二つのタイプの研究がうまく連携していない。（いまだ存在しないが、現在の自然言語処理技術に基づけば十分に実現可能な）生成文法理論の成果をより直接的に反映する言語資源を開発できれば、両者を統合し、理論言語学研究的の中心的課題の解明に正面から迫る研究が遂行可能になると考えられる。また、理論言語学の中核的問題に自然言語処理技術を活用する方法を示すことで、自然言語処理研究の分野に対しても、現在十分に注目されていないが取り組むべき重要な課題を示すことが可能になる。

具体的な課題として、主に以下の研究に取り組む。

1. 「変換文法のパーザ」の開発と、その理論研究への応用
2. 意味解釈をアノテーションしたコーパスの構築とその理論研究への応用

人間の言語能力の解明ということを目指したとき、現在までの理論研究、計算言語学研究の双方で見落とされがちであった観点として、自然言語の言語表現は単に統語的な分布の特徴を持つ体系であるだけでなく、意味を表す記号システムであるという点がある。理論装置としての「統語変換」の概念の核心には、表面的に観察される単語列と、その単語列が表す意味との対応関係を簡潔に捉える、というところに眼目がある。

このため、構成的に意味表示を構築できる変換文法のパーザを開発すれば、それをを用いて言語の意味解釈の側面にまで踏み込んだ言語能力の計算論的モデリングが可能となる。本研究では、変換文法のパーザを開発し、それをを用いて言語資源を援用した言語習得や言語処理の計算機でのシミュレーションを行うことで、統語変換という理論装置の性質の解明を構成論的に行うことを目標にする。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

研究期間を前半3年と後半3年に分け、それぞれの期間でリソースの構築とリソースを利用した研究に重点的に取り組む。後者は前者に依存するので、リソース構築の段階から、応用研究のための先行研究の調査やパイロット的な実験を開始し、段階を踏んで本格的なモデリング研究に取り組んでいく。後半3年に行うモデリングの研究においては、前半3年で開発する変換文法のパーザを用いた研究に中心的に取り組む。

2022

- 英文啓蒙書執筆（最終段階）
- 和文啓蒙書編集
- 言語資源構築（開始）
- モデリング研究（予備調査）

2023

- 言語資源構築（2022 から継続）
- 英文啓蒙書出版
- 和文啓蒙書出版
- 国際学会発表（言語資源）

2024

- 言語資源の構築を完了する
- モデリング研究のパイロットを行う
- 前年度に出版した教科書を用いて ESSLII で講義（海外出張が可能な場合）

2025

- モデリング研究を進める
- 国内学会で関連研究に関するワークショップを開催する（言語学会または言語処理学会）

2026

- モデリング研究の予備的成果を、国内学会、国際学会で発表する
- 最終的な成果をまとめた論文を執筆、学術誌に投稿

II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 6,324 千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 日本語文 3500 文（BCCWJ から抽出）に対して比較構文の意味情報を付与したコーパスを作成した（下記（論文2）で報告）

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 29th International Conference on Head-Driven Phrase Structure Grammar（オンライン；名古屋大学と共催）を7月29日に開催した（口頭発表19件，参加者97名，うち国外機関所属者58名，学生33名）。<https://hpsg2022.github.io/>
- (2) 「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」プロジェクト（リーダー：小木曾）と共催で，言語処理学会年次大会2023において「深層学習時代の計算言語学」というテーマでワークショップを3月17日に沖縄コンベンションセンターで開催した（口頭発表：13件，招待講演：1件，パネルセッション：2件）。

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1)（論文1）国際学会研究発表2件（理論的基盤に関する研究）
- (2)（論文2）モデリングのパイロット研究を言語処理学会2023で発表

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 非常勤研究員1名を雇用し，プロジェクトの理論的・記述的基盤に関する分野融合的な共同研究を主体的に進めることができる人材の育成につとめた。その結果，2022年度日本言語学会論文賞の受賞につながった。

https://www.ls-japan.org/modules/documents/index.php?cat_id=167

大学院生，学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 大学院生1名と若手研究者1名を共同研究に参加させ，共著論文を執筆した（上記（論文2））

3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

4. グローバル化に関する計画

英語による研究成果の発信等

- (1-1) プロジェクトの成果（理論的基盤に関する部分）をとりまとめ，英語での共著論文（short response article）を海外のジャーナルで出版した（国際共著論文）
<https://www.degruyter.com/document/doi/10.1515/tlr-2022-2103/html>
- (1-2) プロジェクトの成果（理論的基盤に関する部分）をとりまとめ，英語での共著論文（full article）を海外のジャーナルに投稿した（査読中）
- (2) Japanese/Korean Linguistics 30で，比較構文の意味解析に関する内容の招待講演を行った（3月13日）。<https://www.sfu.ca/xsyn/jk30/program.html>

プロジェクト名：実証的な理論・対照言語学の推進

サブプロジェクト名：体言化の実証的な言語類型論—理論・フィールドワーク・歴史・方言の観点から—

サブプロジェクトリーダー：プラシヤント・パルデシ

令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	—
4. グローバル化に関する計画	A

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

現行の類型論的研究では、性標示は主名詞による一致現象とし (Corbett), 類別詞も同様に主名詞の分類が本務と考えられていて (Aikhenvald), これら二つの現象と体言化現象との共通性がすくい取られていない。これに対して、Shibatani の研究によって、多くの言語における類別詞の体言化機能が指摘され、また性標示による名詞派生などを考慮に入れると、数詞、指示詞、属格、形容詞、動詞連体・分詞形にみられる類別詞・性標示も体言化の観点から見直し得る可能性が浮かび上がってくる。

このプロジェクトでは、従来個別に取り扱われてきた、体言化 (nominalization), 類別詞 (classifier), 性標示 (gender) の現象を体言化の類型という全く新しい視点から追究し、この三領域を統一的に取り扱える理論的枠組みを開発する。アジアに広く拡散する類別詞ならびに印欧語その他に見られる性標示という旧来の研究課題に体言化現象の類型という立場から新しい息吹を吹き込むと同時に、高次元の統一的理論化を目指す。

研究体制としてはコアメンバー数名と国外研究員が中心となってチームを結成し、フィールドワークを通しての一次的なデータ収集に当たり、また、理論と言語資料の研究・分析に従事する。体言化、類別詞、性標示現象が顕著な言語を専攻する若手研究者、大学院生を特定し、定期的に研究発表者 (準メンバー) として招き、コアメンバー専門以外の言語の資料を収集するとともに、若手研究者の育成に尽力する。研究成果を国際シンポジウムならびに英文刊行物 (論文、論文集) をとおして広く発信し、日本語研究・言語類型論研究両方面における国際的な貢献を目指す。

日本語研究の国際化とならんで、本プロジェクトは国語研の目標の一つである若手研究者の育成にも尽力する。具体的には、次の4つの事業により若手研究者の育成を図る。

(a) 大学院生や若手研究者を共同研究員または非常勤研究員として迎え、研究指導を行う。特に、類別詞や性標示が重要な文法機能を果たす言語を専攻する大学院生や若手研究者を随時研究会に招き、理論や分析方法の討議を通して、それぞれの研究の進展に資するようにする。

(b) 国内外から学振の特別研究員や国語研の特別共同利用研究員を積極的に受け入れる。

(c) 大学院生向けのチュートリアルを企画する。

(d) 国際シンポジウム等において若手研究者に研究発表の場を提供する (あわせて旅費支援などの経済的支援も行う)。

本プロジェクトでは文献によるデータ収集に加えて、必要なデータを国内外でフィールドワークを通じて

収集する。オープンサイエンスの方針に沿って、収集したデータを共同研究者間で共有する。また、データに基づく体言化の実証的な言語類型論的な研究を行い、研究成果を国内外に発信する。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

6年間のロードマップは以下の通りである。

1年目（2022年度）：諸言語の体言化・類別詞・性標示に関するデータを収集し、類型論的な研究をすすめる。具体的には

- ①文献によるデータ収集と整理
- ②フィールドワークの準備：収集されるべきデータタイプの整理
- ③フィールドワークの実施（海外2回，国内1回）
- ④研究集会の開催（2回）（フィールドワークの成果報告，問題のあるデータの討議・検討）
- ⑤類別詞と性標示を取り込んだ体言化理論の展開，研究成果の発表

2年目（2023年度）：前年度に引き続き，諸言語の体言化・類別詞・性標示に関するデータを収集し，類型論的な研究をすすめる。具体的には

- ①前年度のフィールドワークによるデータの分析
- ②フィールドワークの実施（海外2回，国内1回）
- ③研究集会の開催（2回）（フィールドワークの成果報告，問題のあるデータの討議・検討）
- ④類別詞と性標示を取り込んだ体言化理論の展開，研究成果の発表

3年目（2024年度）：前年度に引き続き，諸言語の体言化・類別詞・性標示に関するデータを収集し，類型論的な研究をすすめる。具体的には

- ①前年度のフィールドワークによるデータの分析
- ②フィールドワークの実施（海外2回，国内1回）
- ③研究集会の開催（2回）（フィールドワークの成果報告，問題のあるデータの討議・検討）
- ④類別詞と性標示を取り込んだ体言化理論の展開，研究成果の発表
- ⑤コアメンバーによる担当言語（群）における研究成果のまとめと論文の作成
- ⑥研究成果を踏まえた，国際シンポジウムの準備

4年目（2025年度）：

- ①国内外から発表者を招聘し，国際シンポジウムの開催
- ②国際シンポジウムでの報告に基づいて論文の作成
- ③論文の内部・外部査読および改訂作業
- ④主要出版社からの論文集の出版の準備（出版社との交渉，出版契約の締結，編集作業の開始など）。

5年目（2026年度）：

- ①フィールドワークの実施（海外2回，国内1回）
- ②体言化類型論の枠組みの構築完了
- ③新理論の実質データによる最終検証
- ④研究成果の発表
- ⑤主要出版社からの論文集の出版

6年目（2027年度）：

- ①内外の個別言語専門誌への投稿論文の作成
- ②内外の類型論関係専門誌への理論的研究論文の作成
- ③国内外で公開シンポジウム・ワークショップの実施
- ④研究成果の発表

II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 12,544千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

フィールド調査・実験等（アクティビティ）

- (1) フィールドワークを日本国内2回（1回目：愛媛県[2022年9月6日～8日]；2回目：福岡県・山口県・広島県[2022年9月11日～16日]）、国外3回（1回目：台湾・台北市[2023年1月15日～22日]；2回目：インド・アッサム州[2023年2月8日～22日]；3回目：ウズベキスタン[2023年3月8日～25日]）を実施し、それぞれに言語・方言における体言化現象に関するデータを収集した。

国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 交流協定を締結しているデカン・カレッジ・ポスト・グラデュエイト・アンド・リサーチ・インスティテュート（Deccan College Post Graduate and Research Institute）と共同で2022年8月4日に、同じく、交流協定を締結しているインド工科大学マドラス校（Indian Institute of Technology Madras）と共同で2022年8月1日に国際ワークショップを開催した。

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 今年度は「消滅危機言語の保存研究」プロジェクトとの合同発表会等の共同開催は見送ったが、来年度以降の実施に向けて連携を深める。

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) R4年度ではプロジェクト研究会を2回開催した（2022年5月21日[参加者：19名・共同研究員限定の非公開]、2022年9月23日[参加者：37名・一般公開]、いずれも東京大学本郷キャンパス）。

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) R4年度では以下2件の研究成果を英語で論文を執筆し、投稿した。
- ・Masayoshi Shibatani and Tetsuo Nitta (To appear). Japonic nominalizations in cross-dialectal perspective. In Kibe, Nobuko, Tetsuo Nitta and Kan Sasaki (eds.) The Handbook of Japanese Dialects. Berlin: Mouton De Gruyter
 - ・Prashant Pardeshi and Masayoshi Shibatani (To appear) Marathi Relative and Complement Clauses in Nominalization Perspective. In Rajesh Kumar and Om Prakash (eds.) Language Studies in India. Singapore: Springer Nature.

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) プロジェクト非常勤研究員として大学院生を1名雇用し、プロジェクト主催の研究会の企画、実施、フィールドワークで収集したデータの整理・分析・保存などに参画させることにより、類型論的な研究を推進する人材の育成につとめた。また、プロジェクト研究会で発表した自身の研究のまとめなどに関して助言をした。

大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 2名の大学院生を共同研究員として参画させ、研究発表を行う機会を与えた。

若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 2名の大学院生にプロジェクト主催の研究会で発表の機会を提供した。

若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) 大学院生を2名共同研究員として迎え、2人にプロジェクトの会議で研究発表を行う機会を提供し、会議参加に必要な旅費を支援した。

若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 交流協定を締結している交流協定を締結しているデカン・カレッジ・ポスト・グラデュエイト・アンド・リサーチ・インスティテュート (Deccan College Post Graduate and Research Institute) と共同で2022年8月4日に、同じく、交流協定を締結しているインド工科大学マドラス校 (Indian Institute of Technology Madras) と共同で2022年8月1日に国際ワークショップを開催し、両機関の大学院生に機能主義言語類型論的な研究の事例を紹介した。(重出:「国内外の大学や研究機関との組織的な連携等」)

3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

4. グローバル化に関する計画

海外の研究者の受入

- (1) 今年度は学振の特別研究員や国語研の特別共同利用研究員の希望はなかった。

海外の大学との連携等

- (1) デカン・カレッジ・ポスト・グラデュエイト・アンド・リサーチ・インスティテュート (Deccan College Post Graduate and Research Institute), インドとマラーティー語の方言における体言化について共同研究を進めた。
- (2) 上記の研究成果の一部を交流協定締結しているインド工科大学マドラス校 (Indian Institute of Technology Madras) のRajesh Kumar教授が編集している論文集に投稿した。この論文は現在印刷中であり, Springer Nature (Singapore) から刊行される予定。

国際シンポジウムの開催

- (1) 今年度は海外の以下の7か所で国際ワークショップを企画し, 実施した。
 - ①交流協定を締結しているインド工科大学マドラス校 (Indian Institute of Technology Madras) と共同で2022年8月1日に国際ワークショップを開催した (参加者数: 57名)。
 - ②交流協定を締結しているデカン・カレッジ・ポスト・グラデュエイト・アンド・リサーチ・インスティテュート (Deccan College Post Graduate and Research Institute) と共同で2022年8月4日に国際ワークショップを開催した (口頭発表3件, 参加者数: 23名)。
 - ③セントラル・インスティテュート・オブ・インディアン・ランゲージズ (Central Institute of Indian Languages) と共同で2022年8月6日に国際ワークショップを開催した (参加者数: 51名)。
 - ④University of Languages and International Studies - Vietnam National University, Hanoi, Vietnam (ULIS) と共同で2022年12月29日に国際ワークショップを開催した (参加者数: 72名)。
 - ⑤University of Foreign Language Studies-The University of Da Nang (ULFS-UD), Da Nang, Vietnam と共同で2023年1月2日に国際ワークショップ(英語)を開催した (参加者数: 22名)。
 - ⑥University of Foreign Language Studies-The University of Da Nang (ULFS-UD), Da Nang, Vietnam と共同で2023年1月3日に国際ワークショップ(日本語)を開催した (参加者数: 30名)。
 - ⑦University of Social Sciences and Humanities - Vietnam National University, Ho Chi Minh City, Vietnam (USSH) と共同で2023年1月9日に国際ワークショップを開催した (参加者数: 67名)。

英語による研究成果の発信等

- (1) 以下の研究成果を英語で論文を執筆し, 投稿した。

- ①Masayoshi Shibatani and Tetsuo Nitta (To appear). Japonic nominalizations in cross-dialectal perspective. In Kibe, Nobuko, Tetsuo Nitta and Kan Sasaki (eds.) The Handbook of Japanese Dialects. Berlin: Mouton De Gruyter
- ②Prashant Pardeshi and Masayoshi Shibatani (To appear) Marathi relative and complement clauses in nominalization perspective. In Rajesh Kumar and Om Prakash (eds.) Language Studies in India. Singapore: Springer Nature.

5. その他

- (1) University of Foreign Language Studies–The University of Da Nang (UFLS-UD), Da Nang, Vietnam で日本語教師向けに研究成果の一部を「日本語教育・学習・研究用のオンライン言語資源 (Online resources for teaching, learning & analyzing Japanese)」を報告した (2023年1月3日, 参加者数: 30名)。
- (2) 協定に基づき, 国際交流基金ニューデリー事務所と連携し, インドにおける日本語教育史に関する論文の編集作業を進めた。

プロジェクト名：実証的な理論・対照言語学の推進
 サブプロジェクト名：述語の意味と文法に関する実証的類型論
 サブプロジェクトリーダー：松本 曜

令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	A
3. 地域・社会との連携に関する計画	—
4. グローバル化に関する計画	B

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

このプロジェクトでは、認知言語学的な立場から述語の意味と文法に関する類型的研究を行う。特に注目するのは、移動、状態変化、人間行為に関する動詞などの述語表現の意味と文法である。それを考察することにより、1)言語においてどのような現象を動詞で表現し、どのような現象をそれ以外で表現するのか、2)動詞で表現する際、どのような要素をその意味に組み込むのか、3)動詞と関わる文法現象はどのような性質を持っているのか、の3つの課題に取り組む。

1)と2)は、国際的に注目されている研究課題であり、今まで主に移動事象を表す動詞に関して研究が行われ、言語間で組織的な変異が見られることが指摘されてきた (Talmy, Levin など)。このプロジェクトでは、移動事象のみならず、他の事象を表す動詞にも広げて、幅広い言語で意味の研究を行う。語彙調査、実験調査、コーパス調査などを用いて、〈入る〉〈走る〉などの移動動詞、及び〈壊す〉〈叩く〉などの使役状態変化や人間行為の表現に関して統一的で実証的な調査を行い、諸言語がどのようにそれらを言語化するのかについて比較研究を進める。特に日本語については、第3期の研究成果をベースにして、詳細な研究を行う。それにより、諸言語に見られる変異について今までに提案されてきた仮説の検証を行い、包括的に諸事象をカバーできる新たな提案を目指す。

3)については、動詞にマークされる文法的現象の1つとして動詞の敬語化を取り上げる。動詞における敬語マーキングは一部の言語にしか見られない現象であり、それがどのような形でその言語の性質と関わるかは興味深い課題である。このプロジェクトでは、連携プロジェクトの中で明らかにされてきた韓国語における動詞の敬語化に関する神経言語学的研究の成果を出発点として、研究を行う。

本プロジェクトはコーパスと実験を用いる実証的な手法で類型論研究を行う点に特色がある。動詞の意味に関する研究は、多くの言語を統一的に比較する点に特徴がある。またオープンサイエンスの方針に沿って、データの公開を進めながら研究成果を公表する点も大きな特徴である。具体的には主張の根拠となる諸言語の動詞のリストなどを公表する。

最終的な目的は、実証性の高い研究手法を用いて、動詞という品詞の性質を明らかにすることである。さらに、言語間の組織的な変異のパターンを見出し、その中で日本語の特色を明らかにする。

3年目での終了は、代表者の退職予定日のためである。

2. 年次計画（3年間のロードマップ）

2022年度

諸言語の動詞に関するデータを収集し、類型論的研究をすすめる。

A cross-linguistic perspectives on motion event descriptions（仮題），Vol. 1の編集を終え、原稿を提出する。また、Vol. 2の編集を行う。

移動動詞に関する国際学会(NAMED 2022)を京都大学で開催し、海外のプロジェクトとの交流を図る。

2023年度

移動動詞と状態変化動詞についての類型論的研究をすすめる。

日本語の敬語に関する研究を行う。

A cross-linguistic perspectives on motion event descriptions, Vol. 1を出版する。また、Vol. 2の編集を終え、原稿を提出する。

国際学会発表を行う。

2024年（最終年度）

研究成果を論文などにまとめる。

A cross-linguistic perspectives on motion event descriptions, Vol. 2を出版する。

移動動詞と状態変化動詞についての日本語論文集を刊行する。

日本語の動詞に関するデータベースを完成させる。また、諸言語の動詞に関するデータベースを完成させる。

II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 6,471千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

フィールド調査・実験等（アクティビティ）

- (1) 日本語、英語、スワヒリ語において動詞の意味に関する調査を行った。特に日本語においては1388の動詞についての基礎的分析と、当初の予定を上回る15の種類の状態変化を表す表現について詳細なコーパス調査を終了することができた。英語とスワヒリ語については限られた種類の状態変化のみ終了した。

データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 計画通り、日本語の状態変化の表現に関する分類リストを作成した。それにもとづいて1388の和語動詞の分類を行った。

国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 国際シンポジウム NAMED 2022 (Neglected aspects of motion-event description 2022) を11月3・4日に京都大学人間環境学研究科と共催でハイブリッド方式で開催した。共同研究員が5件の研究発表を行った。シンポジウムの詳細は「グローバル化に関する計画(国際シンポジウムの開催)」を参照。
- (2) NAMED 2022では、来日したフランスの連携プロジェクト(SALTA)のメンバーと、また、8月の渡米時にはアメリカの連携プロジェクト(CAL)のメンバーと交流を行った。詳細は「グローバル化に関する計画(海外の大学との連携等)」を参照。

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 公開の研究発表会を3回開催した（4/23, 5/28, 7/2）

(2) 国際シンポジウム(NAMED 2022)を開催した(再掲)

書籍・論文等による研究成果の公表(アウトプット)

- (1) 英語での発信については、「グローバル化に関する計画(英語による研究成果の発信等)」に詳細を示すように、1)英文論文1点の出版、2)英文論文1点の投稿、3)国際会議での研究発表5件の実施、4)英文論文集の編集、5) NAMED 2022 にもとづく論文集の企画を進めた。3)については計画以上の回数であるが、4)については、原稿提出には至っていない。
- ・日本語による発表については、国際学会において2回の招待講演(日本語の誤用及び第二言語習得研究国際シンポジウム(8/1, オンライン);台湾日本語文学会国際学術シンポジウム(12/10, 台湾東呉大学))を行った。また国内学会のシンポジウムにおいて研究の成果を発表した(日本認知言語学会(9/5, オンライン))

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) プロジェクト非常勤研究員として2名の学生の雇用を行ない、移動動詞と状態変化動詞の分析に参加させることにより、実証的な意味論研究を推進できる人材の育成につとめた。そのうち1名は、それを通して学んだ分析手法に基づく研究により、博士号を取得した。【若手支援】

大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 6名の大学院生を共同研究員としてプロジェクトに参加させ、実証的な意味論研究を推進できる人材の育成につとめた。そのうち4名については、後述の通り移動動詞と状態変化動詞に関する研究を通して得られた成果を、国際会議で発表する機会を提供した。【若手支援】

若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 共同研究員としてプロジェクトに参加している2名の国内の学生に旅費の部分的支援を行って、移動動詞に関する研究を通して得られた成果を、後述の国際会議 NAMED2022 で発表する機会を提供した。また、共同研究員である別の1名の国内の学生に旅費の支援を行ない、状態変化動詞に関する研究を通して得られた成果を、国際ワークショップ Workshop on resultatives で発表する機会を提供した。共同研究員である別の1名の若手研究者には旅費の支援を行ない、移動動詞に関する研究を通して得られた成果を、国際会議 ALT 2022 で発表する機会を提供した。また、共同研究員である1名の海外学生に旅費の部分的支援を行って、移動動詞に関する研究を通して得られた成果を、国際会議 ALT 2022 で発表する機会を提供した。さらに、海外の連携プロジェクト所属の2名の学生を含む4名の海外の学生に旅費の部分的支援を行なって、国際会議 NAMED2022 で研究発表を行う機会を提供した。【若手支援】

3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

4. グローバル化に関する計画

海外の大学との連携等

- (1) 下記 NAMED 2022 で、INALCO の研究者1名に招待講演を行ってもらい、研究上の交流を行った。また、その学会期間中と前後にリヨン大学の5名の研究者と、また、8月7-9日の米国バッファロー訪問時にはニューヨーク州立大学の2名の研究者と研究打合せを行い、意見交換を行った。

国際シンポジウムの開催

- (1) NAMED 2022 (Neglected aspects of motion-event description 2022) を、11月3・4日に京都大学人間環境学研究科と共催でハイブリッド方式で開催した。参加者96名。うち、海外からの参加者52名、

学生 19 名。口頭発表 22 件，ポスター発表 7 件。共同研究員の発表が 5 件。

<https://sites.google.com/view/named2022/home> 参照のこと。

英語による研究成果の発信等

(1) 次の通り成果を発信した。

- ①英文論文一点の出版 (Linguistic representations of visual motion: A crosslinguistic experimental study. In Neglected Aspects of motion-event description. John Benjamins)
- ②英文論文一点の投稿 (A corpus-based study of the externality of emotions in Swahili and Japanese)
- ③国際学会における英語による研究発表 5 回 (LACUS (8/4), Slavic Linguistics Society (9/19), ALT (12/15, 2 回), Workshop on Resultatives (3/22))。
また次の通り英語論文集の編集・企画を進めた。
- ④A cross-linguistic perspectives on motion event descriptions (仮題 ; Mouton 社) , Vol. 1, 2 の編集
- ⑤国際会議 NAMED 2022 にもとづく論文集の企画 (John Benjamins 社)

「実証的な理論・対照言語学の推進」 評価報告

令和4年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

本プロジェクトには、5つのサブプロジェクトがある。サブプロジェクト名だけでは必ずしもその違いが明白ではないが、それぞれのサブプロジェクトのアプローチと記述対象は、次のように述べ直すことができる。

コーパスに基づく統語研究と意味研究

方言調査に基づくプロソディ研究

構文解析モデルに基づく統語研究と意味研究

類型論的手法に基づく「体言化」の類型研究

認知言語学的手法に基づく述語の類型研究

この5つとも、実証的でありつつ、それぞれ異なったアプローチを用いて、言語学の分野全般に渡る記述対象が取り上げられており、そのバランスが大変すぐれている。5つのサブプロジェクト共同のワークショップも開かれており、その成果を発表するだけでなく、発表の公募も行い、チーム外の研究者との交流の場が設けられていることも望ましいことであると考えられる。自己評価は「B」であったが、研究成果も十分にあるため、全体的には「A」に相当すると評価した。

《評価項目》

1. 共同利用・共同研究について

それぞれのサブプロジェクトで精力的に活動が展開されている。

「アノテーションデータを用いた実証的計算心理言語学」では、計画通り、各種のアノテーションデータを公開し、加えて、論文1本・国内学会発表12件・国際学会発表5件の成果発表がなされた。

「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」では、計画通り、現地調査等を進め、シンポジウムや研究会における発表に加えて、国際ジャーナル論文1本と国内ジャーナル論文1本を発表した。

「計算言語学的手法による理論言語学の実証的な方法論の開拓」では、29th International Conference on Head-Driven Phrase Structure Grammarを開催し、言語処理学会内でのワークショップも企画した。また、それとは別に、国際学会で2件の研究発表を行なっている。

「体言化の実証的な言語類型論：理論・フィールドワーク・歴史・方言の観点から」では、国内2回・国外3回のフィールドワークを行ない、国際ワークショップやプロジェクト研究会を開催した。また、論文集に2本の英文論文を発表した。

「述語の意味と文法に関する実証的類型論」ではコーパス調査に基づいて動詞の分類リストが作成された。成果の発表としては、国際シンポジウム NAMED 2022 の開催、英文論文1点の出版、国際学会における2回の招待講演、国際会議での5件の研究発表、国内学会において1件の研究発表と充実している。

2. 教育・人材育成について

特に、「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」では、チュートリアルやワークショップを開催し、広く若手研究者の育成に努めた。

他のサブプロジェクトにおいても、若手研究者を雇用し、プロジェクトへの参画および発表の機会を提供した。2022年度日本言語学会論文賞の受賞も特筆すべき成果の1つである。

3. 社会連携・社会貢献について

企業との共同研究を5件行っており、また、文化庁および地方自治体と共同で一般向けの「危機言語サミット」を開催した。さらに、アノテーション・データベースも、整備・公開を行っており、研究成果が一般社会に還元されている。

4. 国際連携・国際発信について

「共同利用・共同研究」についての項目にも書いたように、国際シンポジウムや国際ワークショップが多数開催されており、国際学会での発表や英語論文もきわめて多い。十分に国際的な発信が行われていると評価される。

5. その他特記事項

特になし。

「消滅危機言語の保存研究」自己点検評価報告

プロジェクト名：消滅危機言語の保存研究

プロジェクトリーダー：山田 真寛

令和4年度プロジェクト全体自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	A
4. グローバル化に関する計画	B

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

以下4つのサブプロジェクト・主担当者で研究を実施する。

(1) いま話されている日琉語諸方言データの収集

山田, 五十嵐, 共同研究員それぞれ | 担当地域でフィールド調査

国内40地点で調査を行っている3期から継続して、共同研究員が各担当地点で〔語彙、文法記述、談話資料の蓄積〕を進める。第3期プロジェクトを以下3つの観点で発展させる。

増やす 3点セットを拡充し、「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性の解明」プロジェクト（代表 | 五十嵐）や日琉祖語再建・系統関係解明、対照言語学的研究に資するデータなど、特定トピックに関するデータを増やす。

深める 3期までに個別文法現象の記述がある地点は文法スケッチを、文法スケッチがある地点は参照文法を執筆する。

広げる 琉球諸語に比べて不足している本土諸方言に調査対象を広げる。また消滅危機言語の再活性化など、言語の継承保存に資する基礎資料としてのデータ収集も行う。

(2) 過去の諸方言データの電子化

井上, 山田 | 諸方言談話資料の文字化・電子化と公開準備

1977年度から1985年度にかけて行われた「各地方言収集緊急調査」（文化庁）のうち「全国方言談話データベース 日本ふるさとことば集成」（2001～2008, 全20巻）で未公開部分の文字化・電子化し公開準備を進める。

(3) オープンサイエンスの促進

山田, 中川（言語資源開発センターと協働） | アーカイブ

上記1, 2で蓄積されるデータを「危機言語データベース」（<https://kikigengo.ninjal.ac.jp/>）などで随時公開し、利用可能な段階から共同利用推進センターも利用する。また言語資源開発センターと協働して、それぞれのデータ保持者自身がフィールドデータを平易かつ適切にアーカイブするしくみをつくり、データのアーカイブと共同利用の準備を進める。

(4) 消滅危機言語・方言の認知向上や記録保存・継承保存の推進

山田, 五十嵐, 井上, 中川 | イベント

- ・危機言語サミット（危機言語コミュニティや社会一般向け；文化庁，地方自治体と共催）
- ・フィールドワークチュートリアル（大学院生向け）
- ・データデポジットワークショップ（共同研究員向け）
- ・共同研究員のフィールド調査成果発表会（国内発表会，ハワイ大学と共同開催するワークショップ）
- ・その他，言語コミュニティや社会一般に向けて，危機言語の認知向上や公開データへのアクセス・利用促進を目的としたイベントや発信を行う。日本語の語彙データを扱う下記のサブプロジェクト群を統括し，その全体を結びつけるキーとなる語彙資源の整備を行うとともに，合同でシンポジウムやチュートリアルを開催し，共同研究を行う。

2. プロジェクト全体の6年間の計画

上述の4つを以下の方法で毎年度継続して行う。

(1) いま話されている日琉語諸方言データの収集

各共同研究員が担当地域で主に対面調査によるフィールド調査を行い〔文法記述，語彙，談話資料〕データの収集および，特定トピックに関する調査を行う。

(2) 過去の諸方言データの電子化

第4期3年目までに，選定した地点約90時間分の方言談話資料を電子化して共通語訳を付したテキスト入力を行う。さらに文字化方言と対応する共通語訳・対応部分の音声データ切り出しを行い，談話情報と話者情報のデータベースを作成して「日本語諸方言コーパス（COJADS）」に提供可能なデータとして成型する。作業は『ふるさとことば集成』から継続して行っている外部協力者に依頼する。

(3) オープンサイエンスの促進

1の毎調査後に調査データを収集し，「危機言語データベース」で公開する。またコーパス共同開発センター（仮）と協働してメタデータのテンプレートやデータデポジット・公開フロー，アーカイブ機構そのものを整備し，利用可能な段階から1のデータを格納していく。

(4) 消滅危機言語・方言の認知向上や記録保存・継承保存の推進

各共同研究員の調査に応じて毎年度2回研究発表会を行う。また3と関連して，データデポジットに関するワークショップを開催するほか，危機言語・方言サミットを文化庁および開催地の地方自治体と共同で開催する。消滅危機言語研究の裾野を広げるため，若手研究者向けのフィールドワークチュートリアルも行う。

II. 令和4年度の活動

令和4年度予算総額 25,065千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

フィールド調査・実験等（アクティビティ）

- (1) 共同研究員 11 名が 13 地点（秋田、山梨奈良田、鹿児島、奄美大島、与論島、沖縄島、石垣島宮良、小浜島、竹富島、西表島、波照間島、大神島、宮古島）で計 23 回のフィールド調査を行い、各地点の地域言語データを収集した。
- (2) 共同研究員 14 名がフィールドワークの成果をプロジェクト研究会で報告し、4 名が研究会プロシーディングス原稿として投稿した（プロシーディングスは 2023 年度に出版）。外部の学会等での発表は業績リストを参照。

データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 日本の消滅危機言語・方言の音声データを紹介・公開するサイト「危機言語データベース (<https://kikigengo.ninjal.ac.jp/>)」について、データのデポジットと公開の効率化をはかるため、語彙データベースに典拠情報と同源語 ID を追加するなどのリニューアルを実施した。

国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 琉球大学島嶼地域科学研究所との連携協定に基づく北琉球語諸方言を中心とした調査については、新型コロナウイルス感染拡大防止のため実施できなかった。状況をみて令和 5 年度以降に実施する予定。
- (2) 東京外国語大学 AA 研との連携協定にもとづく若手研究者の育成を目的としたプロジェクトについては、AA 研の担当者との調整がつかず今年度は検討を進めることはできなかった。

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) イントネーションプロジェクト（代表：五十嵐）と共催で研究発表会 2 回と危機言語サミットを実施した（詳細は「公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム」参照）。フィールドワークチュートリアルは希望者がいなかったため実施せず、代わりにデータデポジットワークショップを実施した（詳細は「データベース等に関する講習会・講演会」参照）。

異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 言語の継承保存を促進するため、マルチリンガリズムや言語の継承保存を専門とする共同研究員を新たに 5 名加えて連携体制を強化した。このうち 3 名がプロジェクト研究発表会で発表し、うち 2 名が研究会プロシーディングス原稿を共著で執筆した。
- (2) 危機言語サミットにおいて「ブース発表」を新設し、各地で継承保存を行っている 9 組が取り組みを発表し、来場者と合わせて情報交換を行う機会をつくった。

調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 「データベース等の構築」に記載した通り、「危機言語データベース」のリニューアルは計画通り実施した。並行して調査データの整備も進めたが、サイトリニューアルに時間がかかったため、データ公開には致らなかった。整備が完了次第、令和 5 年度中に公開する。
- (2) 文化庁資料（各地方言緊急収集調査）の電子化を進め、岡山県新見市の自然談話データ・場面設定データ・語りデータを公開した。国語研リポジトリがシステム変更期間だったためこれ以外は公開できず、他のデータは次年度公開予定（神奈川県小田原市、岐阜県高山市、愛知県西春日井郡師勝町、滋賀県神崎郡能登川町、岡山県岡山市、福岡県八女市、大分県日田郡前津江村、鹿児島県大島郡龍郷町・笠利町）。

<http://doi.org/10.15084/00003712>

<http://doi.org/10.15084/00003713>

<http://doi.org/10.15084/00003714>

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 5 月 28 日と 12 月 4 日に、「日本語・琉球語諸方言におけるイントネーション」（リーダー：五十嵐）と共同で、「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会を開催した（5/28：発表 9 件・参加者 98 名、12/4：発表 7 件・参加者 70 名）。
https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20220528a/

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20221204a/

(2) 1月28・29日に、「日本語・琉球語諸方言におけるイントネーション」(リーダー：五十嵐)と連携し、文化庁および地方自治体と共同で一般向けの「令和4年度 危機的な状況にある言語・方言サミット(奄美大会)・沖永良部」を鹿児島県大島郡知名町(沖永良部島)で開催した。(発表16件、参加者約350名)

https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/summit/93803901.html

書籍・論文等による研究成果の公表(アウトプット)

(1) プロジェクトの活動の成果を、書籍1冊、論文11本、総説・解説・プレプリント2本、コーパス・データベース1件、発表・講演52件、講習・チュートリアル7件、一般向け講演・セミナー4件、執筆記事11件、取材を受けた記事7件、として公表した。

データベース等に関する講習会・講演会(アウトプット)

(1) 12月3日に共同利用研究員を対象としてデータデポジットワークショップ「方言語彙データ作成講習会」を実施し、語彙データやアクセント資料の調査方法から危機言語データベース登録の際の手続きまでのチュートリアルを行った(参加者11名、うち若手3名、うち学生1名)。

(2) 7月16日に「文化庁「各地方言収集緊急調査」方言談話整備 共同プロジェクト 説明会&講習会(「みんなで談話整備プロジェクト」説明会&講習会)」を開催し、文化庁データの電子化作業協力者を募集・育成した(参加者131名、うち学生26名)。

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

特別共同利用研究員の受け入れ

(1) 「日本学術振興会特別研究員(RPD)1名の受け入れを申請する。」という計画については、応募資格が変更になったため申請できなかった。

プロジェクト非常勤研究員の雇用

(1) プロジェクト非常勤研究員4名を雇用し、言語の記録保存と継承保存に関する研究を行うことで、消滅危機言語研究を推進する人材を育成した。

大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

(1) 大学院生7名を含む若手研究者(35歳以下24名、40歳未満4名)を共同研究員として参画させ、調査旅費の支援、研究会・プロシーディングスでの発表、チュートリアルなどにより、消滅危機言語研究を推進する人材を育成した。

若手研究者への発表の機会の提供

(1) 若手研究者を含むプロジェクトメンバーの情報交換と議論を深めるために、プロジェクト主催の研究発表会(5月28日・12月4日)を開催し、若手研究者9名に発表の機会を提供した。

若手研究者への研究費・発表旅費の支援

(1) 若手研究者の危機言語調査への参加や研究発表を促すために、若手研究者に対し調査・研究発表にかかる費用を支援した(調査旅費5名10回、サミット参加旅費6名、研究会参加3名)。

若手研究者向けのチュートリアル等

(1) データデポジットワークショップ「方言語彙データ作成講習会」を実施した(詳細は「データベース等に関する講習会・講演会」参照)。フィールドワークチュートリアルは希望者がいなかったため実施しなかった。

(2) 7月16日に「文化庁「各地方言収集緊急調査」方言談話整備 共同プロジェクト 説明会&講習会(「みんなで談話整備プロジェクト」説明会&講習会)」を開催し、文化庁データの電子化作業協力者を募集・育成した(参加者131名、うち学生26名)。

3. 地域・社会との連携に関する計画

地域・社会との連携

- (1) 鹿児島県大島郡和泊町・知名町（沖永良部島）との協定を更新し、中央公民館講座町職員研修会、町広報誌での連載などをおして地域言語の記録と継承に関して連携した。
- (2) 「公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム」に記載の通り、文化庁、知名町と共同で一般向けの「令和4年度 危機的な状況にある言語・方言サミット（奄美大会）・沖永良部」を開催した。「異分野の研究者との共同研究・協業等」に記載の通り、今回のサミットでは新たに「ブース発表」を設け、各地で継承保存を行っている9組が取り組みを発表し、研究成果を地域に還元するだけでなく、発表者と来場者が情報交換を行う機会をつくった。

一般向け講義・講演会・フォーラム等

- (1) 和泊町職員方言研修会（6月8日）、沖永良部高校出前授業（3月23日）、知名町中央公民館講座（毎月1回2時間）を実施し、地域言語コミュニティ内で地域言語の記録と継承を行うことができる市民科学者の育成を行った。講座受講生が実践演習として収集した語彙データを危機言語データベースで公開したほか、研修会・講座受講生のうち4名が小学校の特別講師として方言指導を行い受講内容を実践した。

<https://museum.ninjal.ac.jp/area/okinoerabujima/ashikyora/post-1006.html>

<https://museum.ninjal.ac.jp/area/okinoerabujima/category-45/post-1054.html>

研究成果の社会への還元

- (1) 知名町生涯学習フェスティバルで中央公民館講座の発表を行った（11月3日）。
- (2) ジュンク堂書店那覇店で「4つの島のことばの絵本展」（7月11日～8月10日）を開催し、会期中（7月30日～8月4日）に読み聞かせ会、トークショー、民謡ライブ、ワークショップを実施した（https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20220711a/）。
<https://museum.ninjal.ac.jp/area/okinoerabujima/kunigami/post-973.html>
<https://museum.ninjal.ac.jp/area/taketomijima/post-989.html>
- (3) 知名町広報誌（4月から毎月）と和泊町広報誌（1月から隔月）での連載コラムを執筆した。
<http://www.town.china.lg.jp/kikakushinkou/kurasu/chosejoho/koho-kocho/kohochina/2021/kouhou2022.html>
<https://www.town.wadomari.lg.jp/kikaku/wadomaricho/koho/wadomari.html>
- (4) 和泊町職員方言研修会（6月8日）、沖永良部高校出前授業（3月23日）、知名町中央公民館講座（毎月1回2時間）を実施した。
- (5) 地域言語絵本『ディラブディ』（与那国語）と『塩一升の運』（沖永良部語）を出版した。

4. グローバル化に関する計画

海外の研究者の受入

- (1) アイヌ語と沖縄語の継承保存を研究テーマとする博報財団招聘研究者を1名受け入れた。
- (2) 海外機関に所属する共同研究員を1名増やし5名とし、今後の継承保存研究の展開について協議した。

海外の大学との連携等

- (1) 2月12-17日にプロジェクトリーダーと共同研究員2名が米国ハワイ大学マノア校を訪問して協定調印式に出席し、協定の更新を行った。同校の教員との研究打ち合わせ3件、学生指導4件、琉球語を専門とする図書館司書との打ち合わせ1件を実施した。このときに同校と共催した研究会は「国際シンポジウムの開催」を参照。

国際シンポジウムの開催

- (1) 2月16-17日に米国ハワイ大学マノア校においてNINJAL-UHM Linguistics Workshopを同校と共催し、琉語諸方言を含む国内外の記述の少ない言語についての研究交流を行った（総発表件数8件（うち国外機関所属4件，学生2件），参加者48名（うち国外機関所属者32名，学生参加者15名））。

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230216a/

英語による研究成果の発信等

- (1) プロジェクト成果を広く世界に発信するため、「危機言語データベース」の英語サイトを拡充した。

5. その他

- (1) 消滅危機言語の記録保存・継承保存を研究者が地域言語コミュニティのメンバーと協働して進める「言語復興の港プロジェクト」（プロジェクトリーダーが代表を務め共同研究員3名が参加）が、ダイキン工業株式会社・琉球放送株式会社から、沖縄県の芸術・文化・スポーツ・教育・環境等の振興支援を目的としたオーキッドバウンティを授与された。

<https://www.daikin.co.jp/press/2023/20230228>

「消滅危機言語の保存研究」評価報告

令和4年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

共同利用・共同研究と教育・人材育成については計画どおりに、社会連携・社会貢献、国際連携・国際発信については計画を上回って実施できている。

プロジェクトの活動成果は、書籍1冊、論文11本、総説・解説・プレプリント2本、コーパス・データベース1件、発表・講演52件、講習・チュートリアル7件、一般向け講演・セミナー4件、執筆記事11件、取材を受けた記事7件、公表されている。この成果からもわかるように、本プロジェクトは、アウトプットを着実に実施している。書籍・論文等の発表に限らず、特に、地域・社会へのアウトプットは積極的である。アウトプットに関して全体的に計画以上のことが実施されていることは高く評価できる。

データ収集についても、第3期プロジェクトの成果を「増やす・深める・広げる」という形で発展させるといふ本共同研究の計画は、2022年度も計画どおりに進めることができたと思われる。

アウトプットや国際発信については計画を上回っており、全体としては「計画を上回って実施している」と評価できる。

《評価項目》

1. 共同利用・共同研究について

11名で13地点での計23回のフィールド調査を行った他、危機言語データベースのリニューアル、各地方言緊急収集調査の電子化とデータ公開（岡山県新見市の自然談話データ・場面設定データ・語りデータ）、2回の研究発表会、および「令和4年度 危機的な状況にある言語・方言サミット（奄美大会）・沖永良部」の開催、さらに書籍1冊、論文11本、学会発表64件など、アウトプットもしっかり行っている。特に研究成果の発表は、着実かつ積極的に行っているように見受けられる。

言語の継承保存を促進するために、新たに5名の専門家を共同研究員として加えるなど、研究体制について必要な見直し・強化を行っていることも評価できる。

2. 教育・人材育成について

データデポジットワークショップの実施に加えて、「みんなで談話整備プロジェクト」説明会&講習会を開催して文化庁データの電子化作業協力者を募集・育成するなど、消滅危機言語研究を推進する人材の教育・育成については、概ね計画どおりに実施できていると言って良いだろう。特に、本共同研究には若手研究者が多く参画しているが、彼らに発表の機会や情報交換・議論の機会を数多く提供し、またその場に参加できるようにサポートをするなど、若手研究者の育成に努めていることは評価できる。

3. 社会連携・社会貢献について

自己評価でも「地域・社会との連携に関する計画」にはAが付けられているが、報告書からも、本共同研究が地域・社会連携の重要性を十分に理解し、積極的に社会連携・社会貢献を行ってきたことが読み取れる。

2022年度は、「鹿児島県大島郡和泊町・知名町（沖永良部島）との協定の更新」、「文化庁・知名町

との危機言語サミットの共催」という計画が立てられていたようであるが、いずれも計画どおりに実施されている。前者については、単発の研修会や特別授業だけでなく、月一の講座や和泊町と知名町の広報誌に連載を持つなど、地域との具体的、かつ継続的な連携ができてきているようである。後者については、研究成果を地域に還元するという一方だけでなく、来場者を交えた情報交換の機会を作るなど、双方向になる工夫が成されている。地域との関係を築き、具体的で、地域に伝わりやすい社会連携を行うことができているように思われる。さらに、地域言語絵本の出版をするなど、2022年は計画以上の社会連携・社会貢献が実施できていると判断して良いだろう。

4. 国際連携・国際発信について

博報財団招聘研究者1名の受け入れ、国外機関に所属する共同研究員4名、米国ハワイ大学マノア校との連携協定、「危機言語データベース」英語サイトの拡充、という計画を立てていたようであるが、これらはいずれも計画どおりに実施されている。

また、ハワイ大学マノア校においてNINJAL-UHM Linguistics Workshopを共催し、琉語諸方言を含む国内外の記述の少ない言語についての研究交流を行うことは、計画にはなかったことであり、計画以上のことも実施できている。

5. その他特記事項

消滅危機言語の記録保存・継承保存を研究者が地域言語コミュニティのメンバーと協働して進める「言語復興の港プロジェクト」（プロジェクトリーダーが代表を務め、共同研究員3名が参加）が、ダイキン工業株式会社・琉球放送株式会社から、沖縄県の芸術・文化・スポーツ・教育・環境等の振興支援を目的とした「オーキッドバウンティ」を授与されたとのこと。これは、本プロジェクトの社会貢献が社会から認められたということであり、本プロジェクトがアウトプット、社会連携を積極的に実施してきたことの成果であると言えるだろう。極めて喜ばしいことである。

「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」自己点検評価報告

プロジェクト名：多言語・多文化社会における言語問題に関する研究

プロジェクトリーダー：朝日 祥之

令和4年度プロジェクト全体自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

本プロジェクトは、多言語化が進んだ日本社会で発生している言語問題の中でも、日々の言語生活に欠かせない分野である行政、医療福祉分野を中心とした言語問題の所在を明らかにするための社会調査、ならびにそれを支える基礎調査を実施する。

多言語化・多文化による社会変容により、特に行政・医療福祉分野における言語問題が生じている。国立国語研究所においても、「外来語言い換え提案」「病院の言葉」に関するプロジェクト、大規模自然災害をきっかけとして提唱された「やさしい日本語」など、その成果は少なくない。ただし、これらはそれぞれ「国語問題・国語施策」、「日本語問題・日本語施策」のための研究であり、多言語化・多文化した日本社会の言語問題を包括的に捉えることにはならない。本プロジェクトでは、国立国語研究所で実施された「国語・国字・日本人の視点」による言語生活研究の再定義を行い、行政・医療福祉分野における言語問題を把握する。本研究の最終的な目的は、言語生活の現在を的確に捉えた上で行政、医療福祉を中心とした分野に内在する言語問題をリアルタイムに捉えることにある。

本プロジェクトでは、多言語化・多文化による社会変容によって生じた日本社会において、行政と医療福祉の専門家に生じている言語問題の所在を把握する社会調査を実施する。社会調査のデータを公開するとともに、言語問題を的確に把握するための基礎調査の実施、そこで得られたデータを活用した分析を実施する。

なお、実施にあたっては、人間文化研究機構共創先導プロジェクト「コミュニケーション共生科学の創成」、並びに同機構共創先導プロジェクト「ハワイにおける日系社会資料に関する資料調査と社会調査の融合的研究」と連携する。

【研究組織】

本プロジェクトは次のような研究班を組織する。

【総括班】研究全体の運営、研究組織化、研究班間の連携、共同研究発表会・シンポジウム等を企画・運営する。

【自治体研究班】自治体を対象とした社会調査を企画・実施する。

【外来語研究班】外来語に関する社会調査を企画・実施する。

【言語変異研究班】言語変異（音韻・アクセント・形態等）に関する調査研究を企画・実施する。

【言語景観研究班】言語景観に関する調査研究を企画・実施する。

【手話研究班】手話（日本手話・日本語対应手話・外国手話等）に関する調査研究を企画・実施する。

【言語使用研究班】日本に居住する外国人の言語生活，ならびに日本人リタラシーに関する調査研究を企画・実施する。

【研究成果】

- ・各調査班では，実施した社会調査を集計をしたデータ集を刊行し，調査結果をリアルタイムに発信していくとともに，調査データの公開を行う。
- ・各調査班では，専門家調査班による社会調査の動向を踏まえた調査研究を実施し，その成果を学会，国際会議での口頭発表，シンポジウムの開催，研究論文集の刊行などを通じて発信する。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

	目標	実施計画
2022(R4) 年度 2022.4 ～2023.3	社会調査の企画と実施 資料調査の実施 調査データ・調査報告書 の納品と公開	専門家調査（自治体調査）の設計・実査 文献調査・資料調査（言語問題・リテラシー・多言語使用等） 調査データの公開に向けた準備と公開 年2回，研究発表会の開催
2023(R5) 年度 2023.4 ～2024.3	社会調査の企画と実施 資料調査の実施 調査データ・調査報告書 の納品と公開	専門家調査（医療福祉調査）の設計・実査 文献調査・資料調査（言語問題・リテラシー・多言語使用等） 調査データの公開に向けた準備と公開 年2回，研究発表会の開催 若手育成のためのチュートリアル開催 シンポジウムの開催 調査報告書の刊行
2024(R6) 年度 2024.4 ～2025.3	社会調査の企画と実施 資料調査の実施 調査データ・調査報告書 の納品と公開	言語生活調査（外来語調査・言語使用調査）の設計・実査 文献調査・資料調査（言語問題・リテラシー・多言語使用等） 調査データの公開に向けた準備と公開 年2回，研究発表会の開催 シンポジウムの開催 調査報告書の刊行 社会調査データを活用した研究書の刊行
2025(R7) 年度 （前半） 2025.4 ～2026.3	社会調査の企画と実施 社会調査に基づく研究成 果の公開 研究成果の公表	言語生活調査（言語使用調査）の設計・実査 シンポジウムの開催 年2回，研究発表会の開催 一般講演会（NINJAL フォーラム）の開催 調査報告書の刊行
	暫定評価	

2026 (R8) 年度 2026. 4 ～2027. 3	研究成果のまとめ	研究成果をまとめた研究書の刊行 年 2 回, 研究発表会の開催 若手育成のためのチュートリアル開催
2027 (R9) 年度 (前半) 2027. 4 ～2027. 9	最終まとめ	啓蒙書・普及書の刊行 年 1 回, 研究発表会の開催

II. 令和 4 年度の活動

令和 4 年度予算額 26,980 千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

フィールド調査・実験等 (アクティビティ)

7つの研究班のうち5つの班が次の通り社会調査を実施した。

- (1) 【自治体研究班】自治体職員に言語問題の所在を明らかにするための調査（『行政情報を分かりやすく伝える工夫に関する意識調査 II』）を実施した。具体的には国立国語研究所により 2003 年に実施された『行政情報を分かりやすく伝える工夫に関する意識調査（自治体調査）』の経年調査と位置付け、当時の調査票をもとにした調査票を作成し全国 580 自治体に勤務する一般行政職員（1 自治体 33 名、計 19,140 人）を対象とした郵送法による社会調査を 2023 年 2 月に実施した。
- (2) 【外来語研究班】行政・医療福祉を中心とした分野における外来語の使用実態を明らかにするための調査（『現代日本語における外来語使用実態調査』）を実施した。国立国語研究所の『外来語定着度調査』、文化庁の『国語に関する世論調査』で使用された調査項目をもとにした調査票を用い、全国住民 3,600 サンプルを対象とした郵送法による調査を 2023 年 2 月に実施した。
- (3) 【言語変異研究班】現在の言語生活を的確に把握するための基礎研究としての調査を文字表記・音韻・アクセントについて実施した。具体的には、文字表記については漢字の略字・俗字調査を 2022 年 10 月に web 調査により実施し 600 名から回答を得た。音韻については、東京都における母音の無声化に関する経年調査をフィールド調査により実施するとともに、調査会社による調査（東京都における母音の無声化を含む音韻調査、ならびに群馬県前橋市と静岡県静岡市におけるアクセント調査）を 2023 年 2 月、3 月に実施した。
- (4) 【言語景観研究班】言語景観の実態を捉えるためのフィールド調査を東京都江戸川区、群馬県大泉町、神奈川県愛川町、埼玉県八潮市、埼玉県三郷市、千葉県佐倉市、静岡県袋井市、愛知県豊田市、名古屋市、碧南市で 2022 年 5 年から 2023 年 1 月にかけて実施した。これ以外にも Google street view を用いたデータ収集を埼玉県川口市で実施した。
- (5) 【手話研究班】手話研究班では、日々の言語生活でのろう者同士、または聴者とのコミュニケーションに見られる言語問題を手がかりに両者にとってよりよいコミュニケーションの形を考えるクロストークを企画した。そのクロストークで使用する映像資料を作成するために、ろう者 3 名に対する聞き取りを 2023 年 2 月に行い、その様子を収録した。その収録映像を用いたクロストークを 2023 年度に実施する予定である。

データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 【自治体研究班】【外来語研究班】【言語変異研究班】いずれの研究班において実施した調査（「フィールド調査・実験等」1, 2, 3参照）で得られたデータは、いずれも調査委託業者によって整備が進められた。納品後の調査データを分析するとともに公開に向けたデータの整備に着手した。
- (2) 【言語景観研究班】2022年度中に実施した調査（「フィールド調査・実験等」1, 2, 4参照）で撮影した写真データをもとに調査データ整備を進めた。
- (3) 【手話研究班】2023年2月に収録した映像（「フィールド調査・実験等」5参照）をもとに書き起こしを行い、画面に字幕を挿入し、クロストークに用いる映像資料として使用するための準備を進めた。
- (4) 【言語使用研究班】本プロジェクトの準備研究として2022年度に日本に居住する外国人（ネパール人、フィリピン人、中国人、韓国人）並びに日本人を対象としたweb調査のデータから集計表を作成し、報告書作成の準備を進めた。

国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) オーストリア科学アカデミー・消滅言語文化継承委員会と音声認識・画像認識をめぐる調査の設計について打ち合わせを行った。なお、オーストリア科学アカデミーの担当者が配置換えにより所属する部署に変更が生じた。

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 人間文化研究機構共創先導プロジェクト「コミュニケーション共生科学の創成」については、「手話研究班」での活動、同共創先導プロジェクト「ハワイにおける日系社会資料に関する資料調査と社会調査の融合的研究」についてはオーストリア科学アカデミーとの活動において連携した。科学研究費補助金（基盤研究（C））「難解な感染症関連用語の言い換えや説明の案出と理解促進効果の検証」（課題番号：21K00551）に関しては、「外来語研究班」での調査項目の検討において、情報共有をしてもらうことで連携を図った。
- (2) 国立国語研究所「定住外国人のよみかき研究」と連携し、地域に在住する外国人の言語問題（よみかきを含む）の最先端にいる自治体の外国人相談員との懇談会を開催するとともに、シンポジウム「「識字」から「社会的実践としてのよみかき」へー中国・サハリン帰国者の事例からー」（詳細はhttps://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230312a/を参照）を共催した。また、科学研究費補助金（基盤研究（C））「言語レパトリーの構造と形成に関する研究」（課題番号：20K00623）に関しては、昨年度実施した事前研究からの連携を今年度も継続的に行った。その成果の一部については、ベルリン日独センター主催のシンポジウム（2022年6月）、第243回NINJALサロン（2022年10月11日）で研究発表を行った。

異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 社会学を専門とする研究者には言語使用研究班で計画している調査地点の選定をめぐって知見を提供してもらった。データサイエンスの研究者には社会調査の調査票設計、サンプリング方法について知見を提供してもらった。

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 共同研究発表会「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」を2023年3月11日・12日に開催した（講演2件、口頭発表4件、参加者107名）。
根拠資料：https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230311a/
- (2) NINJALコロキウムに本プロジェクトに関連する研究者（東照二氏、Florian Coulmas氏、中村桃子氏）を招待し日本における社会言語学的研究の重要性を示す講演をもらった。
根拠資料：https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20220614a/
https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20221220a/
https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230110a/

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 今年度は、本プロジェクトの準備研究や本プロジェクトに関連する科研費などのプロジェクトを活用した研究を進めた。その成果を、書籍（1冊、De Gruyter Mouton社）、査読付き研究論文（「計量国語学」1本）、発表・講演15件、辞書項目2件として公表した（「研究成果一覧」参照）。

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) プロジェクト非常勤研究員を3名雇用した。

総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 一橋大学大学院での講義で本プロジェクトの成果を話題にした。
- (2) 2023年度から開始する総研大に向けてシラバスや教材の準備を進めた。

大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 大学院生（2名）をプロジェクト非常勤研究員として参画させた。言語景観調査（1フィールド調査・実験等の「言語景観調査班」を参照）のデータ収集並びに国際会議 Sociolinguistics Symposium 24「研究成果一覧」での研究発表で共同で行うことにより、社会言語学的研究を推進できる人材の育成につとめた。これとは別に大学院生（1名）をプロジェクトに共同研究員として参画させることにより、自身で社会言語学的研究を推進できる人材の育成につとめた。
- (2) 学振PD（1名）をプロジェクトに参画させ、研究成果についての発表を行うなど、言語問題に関する研究を進める人材を育成した。なお、学振PDは大学に就職した。

若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 2023年3月11日、12日に開催した共同研究発表会「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」で研究発表の機会を提供した。
- (2) Sociolinguistics symposium(2022年7月開催)での研究発表を共同で行った。

3. 地域・社会との連携に関する計画

地域・社会との連携

- (1) ろう者の研究者（1名）に本プロジェクトに参加してもらった。
- (2) ろう者と聴者の相互のやり取りに関する聞き取りをろう者3名に対し行った【手話研究班】。
- (3) 日本に居住する外国人調査の設計において、調査地点や話者の紹介などの連携を現地にすむ日系ブラジル人（2名）と連携して行った【言語使用研究班】。

研究成果の社会への還元

- (1) 本プロジェクトに関連する内容を含んだオンライン講義を「国語研レクチャーシリーズ20 社会言語学入門：ことばのバリエーションを見つめる」としてオンラインで配信した。

4. グローバル化に関する計画

海外の研究者の受入

- (1) 海外の研究者（8名）をプロジェクト共同研究者として受け入れた。そのうち、共同研究者（2名）を2023年3月に日本に招待し、NINJAL コロキウム・研究発表会での講演を行うとともに、2023年度より言語使用研究班により実施する調査設計を行った。

根拠資料：https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20221220a/

英語による研究成果の発信等

- (1) Handbook of Japanese Sociolinguistics (De Gruyter Mouton)を2022年4月に刊行した。また、Sociolinguistics symposium 24 (SS24)での発表を通して海外に研究成果を発信した。

「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」評価報告

令和4年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施している

本プロジェクトは、人間文化研究機構の2つの共創先導プロジェクトと連携しつつ、多言語化・多文化による社会変容によって生じている日本社会における言語問題のうち、行政、医療福祉分野を中心に社会調査・基礎調査、分析を行い、その所在を包括的に把握することを目的としている。総括、自治体研究、外来語、言語変異、言語景観、手話、言語使用の7つの班から組織され、調査結果のリアルタイムでの発信、調査データの公開を行う。

6年間の初年度にあたる令和4年度の計画は、概ね予定どおりに実施されたと判断するものの、以下に記すように、いくつかの看過できない問題もある。今後、本プロジェクトを進めていくにあたり、参考にされたい。

《評価項目》

1. 共同利用・共同研究について

自治体研究班、外来語研究班、言語変異研究班、言語景観研究班、手話研究班が調査を行った。実施時期が年度末（2023年2、3月）に集中しており（5つの調査のうち4つ）、着手したと記載されている調査データの分析、および公開に向けたデータ整備は、当該年度内にはそれほど進まなかったのではないかと推察されるもの、2年目以降は年度初めからの計画的な実施が期待される。

人間文化研究機構の2共創先導プロジェクトとは、オーストラリア科学アカデミーとの活動を通じて連携を図っている。

研究発表会・講演会は計画どおり年2回開催され、研究成果も、書籍一冊の刊行を含め、徐々に始めている。

2. 教育・人材育成について

計画どおり非常勤研究員を3名雇用し、共同で言語景観調査班のデータ収集及び国際会議での研究発表を行った。また非常勤研究員としてプロジェクトに参画したPD1名は大学に就職している。年度末に開催された本共同研究発表会では、当該分野の第一線で活躍する海外研究者とともに若手研究者が研究発表（5件）を行っており、適切な育成の機会を提供していると認められる。

一方、一橋大学大学院の講義では、計画のとおり「本プロジェクトの成果を話題にした」と記されているが、例えば5つの社会調査のどれをどのように取り上げたのか等、その内容の詳細が分かるような記述が求められるのではないかと推察される。同様に、2023年度から始まる総研大の授業シラバスや教材準備についても、より具体的な記載が望ましい。

3. 社会連携・社会貢献について

手話研究班には研究者を含むろう者4名が参加し、言語使用研究班では日本に居住する日系ブラジル人2名と連携しつつ調査の設計が行われた。加えて、自治体の外国人相談員との懇談会を開催している。次年度以降も、このように当事者とともに研究を進めていくことが期待される。

高校生向けの講義は、よい取り組みである。当該年度は見学のために来訪した生徒が対象だったが、

オンライン講義など、さまざまな可能性を検討してほしい。

4. 国際連携・国際発信について

プロジェクト研究員として受け入れる8名の海外研究者のうち、2名を招いてコロキウム・研究発表会を行った。招聘研究者は、調査設計にも参画している。2.にも記したように、2名が出席する研究発表会で若手が成果を発表する機会を得たのは、有意義と認められる。

5. その他特記事項

全般に、具体性が乏しい。判断できる範囲で評価を行ったが、次年度以降は計画・報告ともより詳細な記載を求めたい。

「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」自己点検評価報告

プロジェクト名：多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究

プロジェクトリーダー：小磯 花絵

令和4年度プロジェクト全体自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

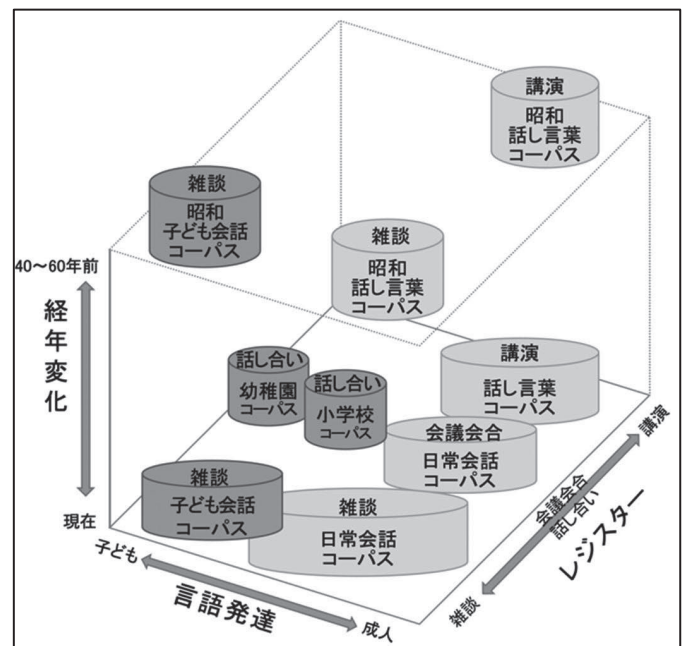
I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

本プロジェクトは、子どもを中心とする多様な場面・相手との会話を含む映像付きコーパスを新たに開発し、成人中心の既存のコーパスと接続させることで、コミュニケーションを含む言語の発達・変化の過程を、子どもから高齢者まで多世代に渡り実証的に研究できる基盤を構築することにより、日本における言語発達研究を幅広い分野の研究者との連携体制のもとで展開させることを目的とする。また、各種会話コーパスを活用した技術開発を見据えた基礎研究を推進する。

これまで乳幼児を含む子どもの言語発達に関する研究が数多く行われてきたが、発達研究は乳幼児に限られるものではなく、学童期、青年期、成人初期、壮年期、老年期など、多世代に渡り見ていく視点も不可欠である。特に、高齢者や子育て世代の孤立など家族の問題が複数世代化し、多世代交流が国の重要施策の一つとして掲げられるなか、乳幼児から高齢者までの多世代を対象に、日常生活の中で交わされるリアルな会話を映像まで含めて記録したコーパスを構築・公開し、各世代の言語使用・コミュニケーション行動の実態やその発達・変化を実証的・多角的に研究することは、学術のみならず社会的にも重要な課題である。

そこで本プロジェクトでは、『子ども日常会話コーパス』『幼稚園話し合いコーパス』『小学校話し合いコーパス』『昭和子ども会話コーパス』（いずれも仮称）を整備した上で、第3期までに構築してきたコーパスと合わせて活用することにより、話し言葉の特性を、①言語発達、②言語教育、③時代による言語の変化、④話し言葉のレジス

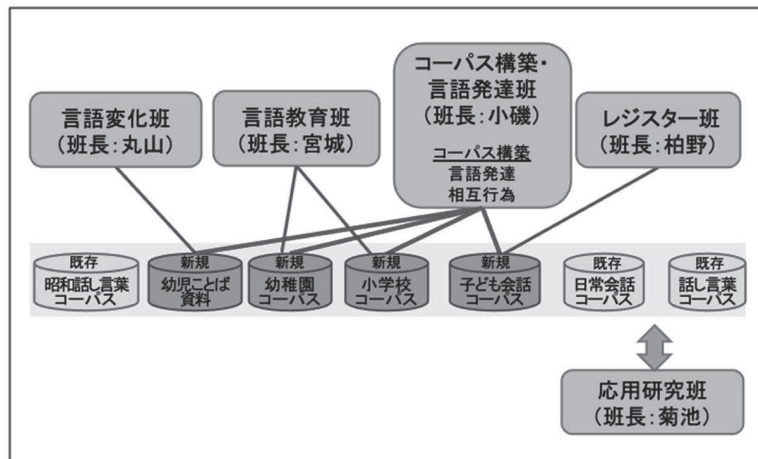


ターの多様性の観点から明らかにすると同時に、⑤各種話し言葉コーパスを活用した情報工学的応用可能性について探る。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

◆ 全体計画・研究組織 ◆

本プロジェクトの実施にあたって、図に示す5つの班を組織して研究を推進する。



コーパス構築・言語発達班：子どもを中心とする会話を収録した映像付きコーパスを新たに構築した上で、成人中心の『日本語日常会話コーパス』（CEJC）も活用することにより、コミュニケーションを含むことばの発達の過程を子どもから成人まで多世代に渡り実証的に研究する。言語発達研究において層の薄い学童期の児童やバイリンガル環境の子どものデータも拡充することで、日本語教育も含めて発達研究を幅広く推進する。

言語教育班：コーパス構築・言語発達班と共同で幼稚園および小学校での話し合い活動を中心としたデータを収録し映像付きコーパスを構築した上で、幼児期から学童期にかけての言語使用やコミュニケーション行動の実態とその発達を言語教育の観点から研究する。

言語変化班：成人を中心とする50年前の話し言葉と、現代の話し言葉を納めたコーパスを活用し、成人の話し言葉の経年的な変化を実証的に研究する。また50年前の子ども（1名）の会話を対象とする小規模コーパスを新たに構築し、子どもや子どもと接する母親の話し言葉の経年的な変化も研究する。

レジスター班：雑談や話し合いなど多様な場面の会話を含む成人中心のCEJCと、子どもの雑談中心の『子ども日常会話コーパス』や話し合いを中心とする『幼稚園話し合いコーパス』『幼稚園話し合いコーパス』を主対象に、国語研所有の多様なレジスターのコーパスも合わせて活用することにより、子どもから成人までの年齢層ごとに言葉のレジスター的多様性を実証的に研究する。

応用研究班：第3期で拡充した話し言葉コーパスを活用した情報工学的応用可能性について、基本周波数推定、音源分離、音声認識などの音響処理技術や、会話音声から盛り上がりや話者の感情・態度推定やターン認識などのコミュニケーション評価技術などの観点から検討する。高齢者や子育て世代の孤立という問題は技術的な支援も重要となる。こうした技術開発を見据えた基礎研究をコーパス開発と同時に進め、コーパスを評価する。

◆ 年次計画 ◆

2022 年度

<ul style="list-style-type: none"> ・データ収集・整備 ・データ公開 ・成果発表 ・若手育成 	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども会話コーパス：収録・転記・情報付与開始 ・幼稚園会話コーパス：収録・転記開始 ・小学校会話コーパス：収録・転記開始 ・昭和子どもコーパス：データ整備・転記開始 ・日本語日常会話コーパス：RDB 一般公開 ・シンポジウム：2回 ・コーパス講習会：2回 ・チュートリアル：1回
---	---

2023 年度

<ul style="list-style-type: none"> ・データ収集・整備 ・データ公開 ・成果発表 ・書籍刊行 ・若手育成 	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども会話コーパス：データ収録・転記・情報付与継続 ・幼稚園会話コーパス：収録・転記・情報付与継続 ・小学校会話コーパス：収録・転記・情報付与継続 ・昭和子どもコーパス：転記継続 ・名大会話コーパス：形態論情報更新・中納言版再公開 ・子ども会話コーパス：50 時間プロジェクト内部公開 ・日本語日常会話コーパス関連の論文集：1冊 ・シンポジウム：1回 ・コーパス講習会：2回
--	--

2024 年度

<ul style="list-style-type: none"> ・データ収集・整備 ・データ公開 ・報告書刊行 ・成果発表 ・若手育成 	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども会話コーパス：転記・情報付与継続 ・幼稚園会話コーパス：転記・情報付与継続 ・小学校会話コーパス：収録・転記・情報付与継続 ・昭和子どもコーパス：転記継続 ・子ども会話コーパス：50 時間モニター公開 ・昭和子どもコーパス：本公開 ・子ども会話コーパスモニター版の設計の報告書：1冊 ・シンポジウム：1回 ・コーパス講習会：2回
---	--

2025 年度

<ul style="list-style-type: none"> ・データ収集・整備 ・データ公開 ・成果発表 ・書籍刊行 ・若手育成 	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども会話コーパス：転記・情報付与継続 ・幼稚園会話コーパス：転記・情報付与継続 ・小学校会話コーパス：転記・情報付与継続 ・子ども会話コーパス：100 時間プロジェクト内部公開 ・幼稚園会話コーパス：プロジェクト内部公開 ・シンポジウム：1回 ・研究シリーズ「言語資源学」 話し言葉コーパスの設計・構築関連の書籍：1冊 ・コーパス講習会：2回
--	--

2026 年度

<ul style="list-style-type: none"> ・データ収集・整備 	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども会話コーパス：転記・情報付与継続 ・幼稚園会話コーパス：転記・情報付与継続 ・小学校会話コーパス：転記・情報付与継続
<ul style="list-style-type: none"> ・データ公開 	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども会話コーパス：100 時間モニター公開 ・小学校コーパス：プロジェクト内部公開
<ul style="list-style-type: none"> ・成果発表 ・書籍刊行 	<ul style="list-style-type: none"> ・シンポジウム：1 回開催 ・研究シリーズ「言語資源学」 話し言葉コーパスの活用法関連の書籍：1 冊
<ul style="list-style-type: none"> ・若手育成 	<ul style="list-style-type: none"> ・コーパス講習会 2 回

2027 年度

<ul style="list-style-type: none"> ・データ収集・整備 	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども会話コーパス：情報付与継続 ・幼稚園会話コーパス：情報付与継続 ・小学校会話コーパス：情報付与継続
<ul style="list-style-type: none"> ・データ公開 	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども会話コーパス：本公開 ・幼稚園コーパス：本公開 ・小学校コーパス：本公開
<ul style="list-style-type: none"> ・成果発表 ・書籍刊行 	<ul style="list-style-type: none"> ・シンポジウム：1 回開催 ・子ども会話コーパス関連の論文集：1 冊
<ul style="list-style-type: none"> ・若手育成 	<ul style="list-style-type: none"> ・コーパス講習会 1 回開催

II. 令和 4 年度の活動

令和 4 年度予算額 26,952 千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 『子ども日常会話コーパス』（目標 100 時間）について、8 世帯 14 名の子どもの収録を進め、うち 6 世帯 11 名について予定通り収録調査を終えた。約 20 時間のデータについては文字化と形態論情報付与を進めた。第 3 期に構築した『日本語日常会話コーパス』と同様、映像・音声も含めて公開することから、映像のボカシ処理や音声のマスク処理を進め、公開準備が整った 17 時間のデータについて、「調査データ・データベース等公開」3 に示す通りプロジェクトの共同研究員に限定公開した。
- (2) 『昭和子ども会話コーパス(仮)』について、1975 年から 3 年間かけて国語研で収録した男児 1 名（と女兒 1 名）の 1 歳から 4 歳までの話し言葉の記録 100 時間について、これまで文字化資料が『幼児のこたば資料(1)～(6)』（冊子）と CHILDES（電子版）で公開され広く研究に活用されてきたが、音源が公開されていない。そこで、研究資料室に保管されている音源を共同利用推進センターと共同で整理し、100 時間分の音声データを全て聞き直した上で文字化（1 次作業）を実施した。
- (3) 『幼稚園会話コーパス(仮)』について、幼稚園での話し合い活動の収録について、コロナの影響で活動が制限されたため今年度は収録できなかったが、収録調査・データ公開に関する同意取得の手続きは進め、状況が整い次第、速やかに収録が再開できるよう準備を進めた。
- (4) 小学校での話し合いを伴う授業を対象とする『小学校会話コーパス(仮)』について、富山大学・宮城准教授と連携して 20 回分の授業の収録を進めた。

- (5) 『名大会話コーパス』について、2016年度に公開した短単位データは解析精度が悪かったため、『日本語日常会話コーパス』を学習データに利用した解析辞書を用いて再解析し、人手修正を加えた上で「調査データ・データベース等公開」2に示す通り再公開した。

根拠資料：<https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/nuc.html>

国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 富山大学教育学部（宮城准教授）と連携し、附属の幼稚園での収録準備、および小学校での収録を進めた（「データベース等の構築」(3)、(4)参照）。

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 人間文化研究機構共創先導プロジェクト「コミュニケーション共生科学の創成」と連携し、高齢者を対象とする話し合い活動の収録データに対して、修辞機能アノテーションを付与するためにマニュアルを整備した。また試験的に付与したデータに基づき研究を進め、アノテーションの妥当性を検討した。
- (2) プロソディに関するシンポジウムを「イントネーション」プロジェクトと合同開催した（「公開の研究発表会等」1①参照）。
- (3) コーパス講習会を「学習者辞書」プロジェクトと、韻律ラベリング講習会を「イントネーション」プロジェクトと合同開催した（「講習会・講演会」(1)参照）。
- (4) 「言語運用」プロジェクトと連携し、海外大学等と連携して進める学習者談話縦断研究のうち縦断調査データの収集・整備を行った。
- (5) 「通時コーパス」プロジェクトの『日本語歴史コーパス 明治・大正編VI落語 SP 盤』の音声データ整備を支援した。

異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 国立障害者リハビリテーションセンター研究所と連携して『日本語日常会話コーパス』に付与した自閉症スペクトラム傾向指数)調査に基づく研究を進めた。またや昭和大学発達障害医療研究所と連携し、自閉症者との会話を対象とするコーパス構築に向けて準備を進めた。昭和大の倫理審査が終了し現在国語研の倫理審査中。2023年度から収録を開始する。

調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 『日本語日常会話コーパス』について、各種アノテーション（短単位・長単位・係り受け・談話行為・韻律）を統合したリレーショナルデータベース（CEJC-RDB）を新たに構築し、有償版利用者に対して新規に公開した。

根拠資料：CEJC-RDB <https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc/rdb.html>

- (2) 2016年度に公開した『名大会話コーパス』について、「データベース等の構築」5に記した通り形態論情報の人手修正作業を実施し、2023年3月24日にオンライン検索システム「中納言」で再公開した。また全文検索システム「ひまわり」のパッケージも再構築し同日に再公開した。

根拠資料：『名大会話コーパス』 <https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/nuc.html>

- (3) 言語資源開発センター・「語彙資源」プロジェクトと合同で現代話し言葉用のUniDicを整備し、3月24日に公開した。
- (4) 構築中の『子ども日常会話コーパス』のうち、映像のボカシ処理など含め公開準備の整った17時間のデータをプロジェクトの共同研究員に限定公開した。令和5年度からは成人中心の『日本語日常会話コーパス』と合わせて研究を進める。

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

次の通り4件のシンポジウムを開催した。

- (1) シンポジウム「プロソディを通して見る社会とコミュニケーション」を、社会言語学会および「イントネーション」プロジェクトと共催で9月3日にオンラインで開催した（口頭発表5件、参加者：207名）。

根拠資料：http://www.jass.ne.jp/?page_id=1103

(2) 人工知能学会 SLUD 研究会と共催で「対話システムシンポジウム」を2022年12月13・14日に国語研にてハイブリッドで開催した（発表：53件，参加者数：239名）。

根拠資料：<https://jsai-slud.github.io/sig-slud/96th-sig.html>

(3) 各班の成果を発信するために、「日常会話コーパス」シンポジウム VIII を2023年3月3日にオンラインで開催した（口頭：5件，ポスター：23件，参加者数：32名）。

根拠資料：<https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/event/sympo8.html>

(4) 関連する科研費プロジェクトと合同でシンポジウム「ことば・認知インタラクション 11」を2023年3月4日に国立情報学研究所で開催した（口頭：5件，パネル1件，参加者数：32名）。

根拠資料：<https://www.jdri.org/archives/1155>

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

(1) 『日本語日常会話コーパス』を活用した研究をまとめた論文集の編集を進め，1本を除き入稿を終えた。来年度刊行する。

(2) 今年度は，『日本語日常会話コーパス』など既存のコーパスを活用して研究を進めた。こうした研究の成果を，書籍2冊，ブックチャプター7本，論文18本，発表・講演98件として公表した。

データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

(1) コーパス言語学分野の人材を育成するために，若手研究者や大学院生を主対象とする「中納言」講習会を「学習者辞書」プロジェクト（リーダー：柏野）と共催で2022年11月5日に，また「韻律ラベリング講習会」を「イントネーション」プロジェクト（リーダー：五十嵐）と共催で2022年9月16日に開催した（参加者：140名，12名）。

根拠資料：<https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/event/lecture2022b.html>

根拠資料：<https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/event/lecture2022a.html>

データベース等を使った研究成果・利用実績（アウトカム）

(1) 『日本語日常会話コーパス』（CEJC）活用のための講習会を2回開催するなどした結果，CEJCの「中納言」の登録ユーザ数は，新規登録3280名計22733名（2021年度19453名），年間検索数は151959件（2021年度102167件，前年度比149%）となった。

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

(1) 一橋大学連携大学院にて『日本語日常会話コーパス』を活用した演習をおこなった。

(2) 2023年度から開始する総研大に向けてシラバスや教材の準備を進めた。

プロジェクト非常勤研究員の雇用

(1) プロジェクト非常勤研究員を4人雇用し，コーパス構築とそれに基づく研究を行うことにより，コーパスを活用した高度な言語学的研究を推進できる人材を育成した。うち1名が，コーパス活用研究を含む博士論文にて2022年9月に博士号（東京大学）を取得，また2名は大学に就職した

大学院生，学振PD等のプロジェクトへの参加

(1) 大学院生12名を含む若手研究者30名を共同研究員としてプロジェクトに参加させ，『日本語日常会話コーパス』などのコーパスを無償提供するとともに，講習会などを通して利用方法を具体的に学ぶ機会を提供した

若手研究者への発表の機会の提供

(1) 若手研究者を含むプロジェクトメンバーの情報交換と議論を深めるために，非公開のショートトークの会を6回（2022年7月12・28日，8月24日，9月1日，11月19日，1月17日）開催した。また，各班合同シンポジウム「日常会話コーパス」VIIIにおいて若手9名に発表の機会を提供した。

若手研究者向けのチュートリアル等

(1) コーパス言語学分野の人材を育成するために、若手研究者や大学院生を主対象とするコーパス講習会を予定通り2回開催した（「データベース等に関する講習会・講演会」（1）参照）。

(2) 日本語学・言語学・日本語教育研究の諸分野における最新の研究成果や研究方法を若手研究者等に教授することにより、次代の研究者育成を支援することを目的としたNINJALチュートリアル『日本語日常会話コーパス』活用入門』を2023年3月29日に開催した（参加者53名）。

根拠資料：https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230329a/

(3) 話し言葉コーパスの設計と構築に関わる言語学レクチャーシリーズ「コーパス言語学—話し言葉コーパスの世界—」をYouTubeで一般公開した。

根拠資料：

<https://www.youtube.com/watch?v=Vib3Ccvsdgw&list=PLZfZgVvFbh1a3z0K9Z20Jk6mA0o1mcw3u&index=4>

3. 地域・社会との連携に関する計画

産業界との連携

(1) 『日本語日常会話コーパス』の情報工学的応用可能性について検討する「応用研究班」を設け、民間企業の研究者も共同研究員等に加えて研究を推進した。「公開の研究発表会」1②に示すように、人工知能学会 SLUD 研究会と共催で「対話システムシンポジウム」を国語研で開催し連携を深めた。

(2) 民間企業1社と共同研究協定に基づく研究を推進した。

研究成果の社会への発信・還元

(1) プロジェクトのホームページを立ち上げ、第3期プロジェクト「日常会話コーパス」の情報とあわせて、プロジェクトの活動・研究成果を広く発信した。

(2) プロジェクトで継続して整備・公開を続ける『日本語日常会話コーパス』『名大会話コーパス』『職場談話コーパス』を、インターネットを通して一般に発信した。今年度、それぞれ6789件、5256件、5380件の新規利用申請があった。

4. グローバル化に関する計画

海外の研究者の受入

(1) 海外の研究者3名を共同研究員として加え、海外での映像付きコーパスの公開・利用状況や、個人情報の扱いなどについての情報交換も行いながら、研究を推進した。

(2) 海外機関に所属する研究者1名を外来研究員として迎え、『日本語日常会話コーパス』を活用した研究を進めた。

海外の大学との連携等

(1) 「言語運用」プロジェクトが海外大学等と連携して進める学習者談話縦断研究のうち縦断調査データの収集・整備を支援した（「他のプロジェクトとの合同の活動等」参照）。

英語による研究成果の発信等

(1) 『日本語日常会話コーパス』『名大会話コーパス』『職場談話コーパス』を、インターネットを通し海外も含めて発信した。また『日本語日常会話コーパス』の成果については、国際会議LREC2022での発表を通して発信した。

「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」評価報告

令和4年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施している

子どもの言語活動に焦点を当てた多様な場面での映像付き会話コーパスを新たに開発し、既存の成人中心のコーパスと接続させることで、子どもから高齢者までの多世代に渡る言語の発達・変化の過程を実証的に研究できる基盤を構築するという研究目的に沿って、順調に研究活動が開始され、いくつかの成果もすでに出てきている。

《評価項目》

1. 共同利用・共同研究について

『幼稚園会話コーパス(仮)』はコロナの影響で活動が制限されたが、『子ども日常会話コーパス』、『昭和子ども会話コーパス(仮)』、『小学校会話コーパス(仮)』については、コーパス構築は順調に進展した。既存のコーパスも各種アノテーションの統合や精度を高める手直しなどによりより充実したものになった。研究成果発信も計画を上回る4回のシンポジウムを開催し、また、書籍2冊を始めとして、論文、発表など活発で充実した活動を行った。

2. 教育・人材育成について

一橋大学連携大学院にて『日本語日常会話コーパス』を活用した演習を行い、2023年度から開始する総研大に向けてシラバスや教材の準備を進めた。コーパス言語学分野の人材育成のため、若手研究者や大学院生向けの2回の講習会やチュートリアルを開き、また若手研究者を含むプロジェクトメンバー間の情報交換を密にするため6回のショートトークの会を開催するなど、この分野に関しても積極的な活動が行われた。

3. 社会連携・社会貢献について

民間企業の研究者を加えて「応用研究班」を設け情報工学的応用可能性について検討し、人工知能学会 SLUD 研究会と共催で「対話システムシンポジウム」を国語研で開催した。また、『日本語日常会話コーパス』『名大会話コーパス』『職場談話コーパス』を、インターネットを通して一般に発信し、多くの新規利用申請があった。

4. 国際連携・国際発信について

海外の研究者3名を共同研究員として加え、また海外機関に所属する研究者1名を外来研究員として迎えるなど、国際連携を推進した。『日本語日常会話コーパス』『名大会話コーパス』『職場談話コーパス』を、インターネットを通し海外も含めて発信した。『日本語日常会話コーパス』の成果は、SciValの調べで言語学分野でTop 8%の被引用数であり、国内外で広くコーパスが活用されていることが確認された。

5. その他特記事項

特になし。

「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」自己点検評価報告

プロジェクト名：多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究

プロジェクトリーダー：石黒 圭

令和4年度プロジェクト全体自己評価

全項目の総合	A
1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	A
4. グローバル化に関する計画	A

I. 計画期間内の概要

1. プロジェクト全体の6年間の計画

【計画概要】

本プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」は、日本語非母語話者（日本語学習者および定住外国人）の言語運用の縦断的調査によって多様な言語資源を構築して研究し、その研究成果を教育支援に生かすことを目的とする。その目的を達成するため、以下の六つのサブプロジェクトを設置する。

(1) 多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究統括（担当：石黒）

下記の(2)～(6)の五つのサブプロジェクトの研究成果を収集・整理し、インターネット上においてその公開・発信を支援する。

(2) 日本語学習者の作文の縦断コーパス研究（担当：石黒）

中国、台湾、韓国、ベトナムの複数の大学と日本語学習者の作文の縦断コーパス調査のネットワークを形成し、学習者600名（開始時）を対象に、1年間に3回、4年間にわたる計12回の作文調査を行うプロジェクトです。収集したデータに基づき、学習者の作文執筆能力の縦断的な発達過程を明らかにすることを目指す。

(3) 日本語学習者の談話の縦断コーパス研究（担当：石黒）

中国の2大学の日本語学習者を対象に、大学入学から卒業までの4年、1年間に2回、計8回のI-JAS準拠のインタビュー調査と、それに関連する作文調査を行い、縦断談話データベースを構築する。収集したデータを用いて、談話能力の縦断的な発達過程を作文能力との関係で総合的に明らかにすることを目指す。

(4) 日本語学習者の作文教育支援研究（担当：山口）

協同型の作文教育向けの作文・添削支援システムを開発し、授業への導入手法を検討する。また、システムを用いた授業実践の結果から作文・添削データベースを構築し、作文技能の習得過程とシステムの教授効果を明らかにすることを目指す。

(5) 定住外国人の談話の縦断研究（担当：野山）

2007年から継続してきた東北地方における外国人定住者の縦断インタビュー調査について、第4期も調査を継続する。それとともに、過去の収集データの整備を行い、それらのデータを公開、分析することで、長期間にわたる生活者の言語習得の実態を明らかにすることを旨とする。

(6) 定住外国人のよみかき研究（担当：福永）

生活者としての日本語学習者を対象に、日常生活における文字を介したコミュニケーション（よみかき実践）の種類、方略の使用、新しいメディアの活用等についてデータ収集を行い、よみかき実践研究の発展とよみかきに関わる外国人支援の充実を目指す。

【年次計画】

年次計画は下記の通りである。(1)～(6)、上記の(1)～(6)と対応する。

[2022(R4)年度]

- (1) 本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) の作成・公開開始
- (1) 五つのサブプロジェクトの研究成果の公開、イベント情報等の発信
- (1) 第三期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続
- (2) 作文データの収集開始（1年目、年3回、600名分×3回=1,800本）
- (2) 作文データのデータベース設計の検討
- (3) 談話データの収集開始（1年目、年2回、西安外国語大学18名分）
- (3) 談話先行データのデータベース公開準備（北京師範大学17名分、データ収集済）
- (4) 作文・添削支援システムの設計、プロトタイプの実現
- (4) 作文・添削実践プログラムの設計
- (5) 生活者縦断調査（14年目）のデータ収集の継続
- (5) 第一次（当初5年）生活者談話データの文字化・整備作業の継続
- (6) よみかき研究に関連する先行研究の動向把握と資料整備
- (6) よみかきの社会的実践の予備調査の試行と本調査の設計
- (6) よみかきの社会的実践（本調査）実施先との交渉
- (6) よみかきの社会的実践をめぐるシンポジウムの開催

[2023(R5)年度]

- (1) 本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) のサイトの公開継続
- (1) 五つのサブプロジェクトの研究成果の公開、イベント情報等の発信
- (1) 第三期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続
- (2) 作文データの収集継続（2年目、年3回、480名分×3回=1,440本）
- (2) 作文データのデータベース構築開始
- (2) 作文の自動評価システム設計の検討
- (3) 談話データの収集継続（2年目、年2回、西安外国語大学18名分）
- (3) 談話先行データのデータベース公開（北京師範大学17名分、データ収集済）
- (3) 談話研究の成果論文集の準備
- (4) 作文・添削支援システム（プロトタイプ）を使用した予備実践開始
- (4) 作文・添削支援システム（プロトタイプ）の機能の追加

- (4) 作文教育支援実践プログラムの一般向け解説書（実践マニュアル）の作成開始
- (5) 生活者縦断調査（15年目）のデータ収集の継続
- (5) 第一次（当初5年）生活者談話データの文字化・整備作業の完成・公開
- (5) 公開した生活者談話データ活用のための講演会または研修（ワークショップ）の開催
- (6) よみかきの社会的実践調査（本調査）・データ収集の実施
- (6) 収集した本調査よみかきデータの文字化作業

[2024(R6)年度]

- (1) 本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) のサイトの公開継続
- (1) 五つのサブプロジェクトの研究成果の公開，イベント情報等の発信
- (1) 第三期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続
- (2) 作文データの収集継続（3年目，年3回，360名分×3回=1,080本）
- (2) 作文データのデータベース構築継続
- (2) 作文の自動評価システム開発開始
- (2) 作文研究の国際シンポジウムの開催
- (2) 作文研究の国際シンポジウムの報告書刊行
- (3) 談話データの収集継続（3年目，年2回，西安外国語大学18名分）
- (3) 談話後続データのデータベース構築開始（西安外国語大学18名分）
- (3) 談話研究の国際シンポジウムの開催
- (3) 談話研究の研究成果論文集の刊行
- (4) 作文・添削支援システム（プロトタイプ）を使用した予備実践継続
- (4) 作文・添削データベース構築準備開始
- (4) 作文教育支援実践マニュアルの作成開始
- (5) 生活者縦断調査（16年目）のデータ収集の継続
- (5) 第二次（次期8年）生活者談話データの文字化・整備作業開始
- (5) 生活者縦断調査・研究の成果を踏まえた論文集の刊行
- (6) 補完的よみかきデータの収集の実施
- (6) 文字化した本調査よみかきデータの分析開始

[2025(R7)年度]

- (1) 本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) のサイトの公開継続
- (1) 五つのサブプロジェクトの研究成果の公開，イベント情報等の発信
- (1) 第三期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続
- (2) 作文データの収集継続（4年目，年3回，240名分×3回=720本）
- (2) 作文データのデータベース構築継続
- (2) 作文の自動評価システム開発継続
- (3) 談話データの収集継続（4年目，年2回，西安外国語大学18名分）
- (3) 談話後続データのデータベース構築継続（西安外国語大学18名分）
- (4) 作文・添削支援システムを用いた本実践開始，効果の検証
- (4) 作文・添削支援システムの試験公開，実践マニュアルの公開
- (4) 作文・添削データベースの構築開始
- (5) 生活者縦断調査（17年目）のデータ収集の継続

- (5) 第二次（次期 8 年）生活者談話データの文字化・整備作業の継続
- (6) 文字化した本調査よみかきデータの分析継続
- (6) 個人情報の保護を含めたよみかきデータの公開方式検討

[2026 (R8) 年度]

- (1) 本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) のサイトの公開継続
- (1) 五つのサブプロジェクトの研究成果の公開，イベント情報等の発信
- (1) 第 3 期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続
- (2) 作文データのデータベース公開準備
- (2) 作文の自動評価システム開発公開
- (2) 作文研究の国際シンポジウムの開催
- (2) 作文研究の研究成果論文集の準備
- (3) 学習者縦断談話データベースの公開準備
- (3) 談話研究支援のワークショップの開催
- (4) 作文・添削支援システムの本公開，一般向けの講習の実施
- (4) 作文・添削データベース（合計 3 回分の実践結果）の構築継続
- (4) 作文・添削データベースを用いた分析実施
- (5) 生活者縦断調査（18 年目）のデータ収集の継続
- (5) 第二次（次期 8 年）生活者談話データの文字化・整備作業の完成・公開
- (5) 生活者談話データベース公開記念のシンポジウムの開催
- (6) 限定された範囲でよみかきデータの公開実施
- (6) 限定公開から得たフィードバックに基づく公開よみかきデータの改善

[2027 (R9) 年度]

- (1) 本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) のサイトの公開終了
- (1) 五つのサブプロジェクトの研究成果の公開，イベント情報等の発信
- (1) 第 3 期のプロジェクトの研究成果の公開・更新の継続
- (1) 本プロジェクトの 6 年間の研究成果の共同利用推進センターへの移管
- (2) 作文データのデータベース公開
- (2) 作文の自動評価システム運用開始
- (2) 作文研究支援のためのワークショップ開催
- (2) 作文研究の研究成果論文集の刊行
- (3) 学習者縦断談話データベースの公開準備
- (3) 談話研究の国際シンポジウムの開催
- (4) 作文・添削支援システムの本公開後のメンテナンス，システムの改善
- (4) 2026 年度に構築した作文・添削データベースの公開
- (4) 作文・添削データを活用するための講習会の開催
- (5) 第二次（次期 8 年）生活者談話データベースのメンテナンス
- (5) 生活者談話データベースを活用した研修（ワークショップ）の開催
- (6) よみかきデータの本格公開とメンテナンス
- (6) よみかきの社会的実践をめぐるデータ公開記念シンポジウムの開催

II. 令和4年度の活動

令和4年度予算総額 27,998 千円

(1) 非母語話者日本語運用統括

- ①下記に記載する五つのサブプロジェクトと連携して研究を進めた成果を、編著書1冊、学術誌論文3本、発表・講演15件、講習会・チュートリアル開催2件、シンポジウム開催1件として公表した（「研究成果一覧」参照）。【共同利用・共同研究】
- ②プロジェクトのサイトの運用を開始した【共同利用・共同研究】
 - ・本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) の運用を2022年4月1日より開始した。
- ③プロジェクトの情報を発信した【共同利用・共同研究】
 - ・五つのサブプロジェクトの研究紹介とイベント情報等を、本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>)、およびTwitter (https://twitter.com/js1_ninjal) より発信した。
- ④プロジェクトのサイトで第3期の成果公開を継続した【共同利用・共同研究】
 - ・本プロジェクトのサイト (<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>) において、第3期のプロジェクトの研究成果の公開・更新を継続した。

(2) 日本語学習者の作文の縦断コーパス研究

- ①海外の18大学と共同調査を実施した【共同利用・共同研究】
 - ・中国7大学（北京語言大学、天津外国語大学、東華大学、重慶三峡学院、福建師範大学、華中科技大学、長春師範大学）、台湾2大学（国立政治大学、東呉大学）、韓国2大学（韓国外国語大学校、仁川大学校）、ベトナム3大学（フエ大学外国語大学、ドンア大学、ハノイ工業大学）、タイ1大学（タマサート大学）、フランス1大学（フランス東洋言語文化学院）、スロヴェニア1大学（リュブリャナ大学）、イギリス1大学（オックスフォード大学）の計18大学との共同調査体制を構築し、学習者936名（開始時）を対象に、本年度に3回（今年度に調査を開始した3大学は1回のみ）、計1,754本の作文データを収集した。なお、途中で調査を辞退した学生もいるため、開始時よりも人数はやや減少したが、調査は全体として順調に進行している。
- ②作文データのデータベースの設計の検討に着手した【共同利用・共同研究】
 - ・収集した作文データのデータベース構築の方法を検討し、<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>に、作文データを公開するためのページを作成した。
- ③国内外の共同研究体制を整備し、次のような会議を開催した【共同利用・共同研究】
 - ・共同研究国内および海外の大学の共同研究員との一層の連携を図るため、全体会議を本年度3回（8月、10月、3月）開催した。
 - ・計算機によるテキスト処理の効率化のため、工学系研究者である共同研究員の会議を本年度2回（5月、6月）開催し、今後のデータ処理について検討を行った。
- ④研究成果として、次のような発信を行った【共同利用・共同研究】
 - ・講演・発表：所内イベントにおける発表を2件（オープンハウス2022、NINJALシンポジウム）、国内学会における発表を1件（日本語教育学会秋季大会）、国際学会における招待講演・招待発表を2件（第四回東アジア日本学国際シンポジウム、台湾日本語文学会国際学術シンポジウム）、海外の講演会における招待講演を1回（北京外国語大学日本語学院・北京日本学研究センター主催「日本語学・日本語教育シリーズ講座」日本語教育部門第1回講演会）、それぞれ行った。

- ・論文：学術雑誌に2件，論文を掲載した（『国際学報』，『東アジア日本学研究』）。
- ⑤若手支援として，次のような活動を行った【大学院教育・若手研究者育成】
 - ・一橋大学との連携大学院の演習において，本サブプロジェクトで収集中のデータを活用した授業を行った。
 - ・4名のプロジェクト非常勤研究員を雇用した。
 - ・9名（一橋大学4名，お茶の水女子大学2名，明治大学1名，筑波大学1名，東京工業大学1名）の大学院生が共同研究に参画した。
- ⑥産業界との連携として，次のような活用を行った【地域・社会との連携】
 - ・（株）富士通の富士通研究所と協力し，AIによる作文の自動評価システム開発のための会議の場を設け（10月に1回，11月に1回，12月に1回，1月に2回，2月に1回，3月に1回，計7回），検討を行った。
- ⑦グローバル化のため，次のような活用を行った【グローバル化】
 - ・共同研究を行っている海外の大学に所属する研究者，中国16名，台湾4名，韓国6名，ベトナム4名，タイ2名，スロヴェニア1名，フランス1名，計34名を共同研究員に加え，現地調査を推進した。
 - ・連携して調査を進める海外の大学の教員2名（天津外国語大学，福建師範大学）を外来研究員として招聘した。

(3) 日本語学習者の談話の縦断コーパス研究

- ①海外の15大学と共同調査を実施した【共同利用・共同研究】
 - ・中国の西安外国語大学（中国）の学習者28名，ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学（ベトナム）の学習者22名，チュラーロンコーン大学（タイ）の学習者20名，合計70名を対象に，年に2回のI-JAS準拠の談話・作文調査を行い，約105時間分の談話データ，および140本の作文データを収集した。
- ②談話データベースを公開した【共同利用・共同研究】
 - ・収集がすでに終わっている中国の北京師範大学の学習者17名分，約136時間の談話データベースの構築を行い，<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>に公開した。
- ③他のサブプロジェクトとの連携を強化した【共同利用・共同研究】
 - ・「日本語学習者の談話の縦断コーパス研究」と連携し，共同で開発した文字入力ツール（EssayLoggerTS）およびシステム（Moodle）を用いて作文のデータ収集を進めた。
- ④研究成果として，次のような発信を行った【共同利用・共同研究】
 - ・講演・発表：所内イベントにおける発表を2件（オープンハウス2022，NINJALシンポジウム），国際学会における招待講演・招待発表を2件（第四回東アジア日本学国際シンポジウム，台湾日本語学会国際学術シンポジウム），それぞれ行った。
 - ・講習会：NINJALチュートリアルを主催し，大学院生等を対象にした学習者コーパスの講習会を行った（2023年3月14日，オンライン，参加者31名）。
 - ・論文：学術雑誌に1件，論文を掲載した（『東アジア日本学研究』）。
- ⑤若手支援として，次のような活動を行った【大学院教育・若手研究者育成】
 - ・一橋大学との連携大学院の演習において，本サブプロジェクトで収集中のデータを活用した授業を行った。
 - ・4名のプロジェクト非常勤研究員を雇用した。
 - ・2名（一橋大学1名，東京外国語大学1名）の大学院生が共同研究に参画した。

⑥グローバル化のため、次のような活用を行った【グローバル化】

- ・現地調査を行う西安外国語大学（中国）2名，ハノイ国家大学外国語大学（ベトナム）2名，チュラーロンコーン大学（タイ）2名，および現地調査を共同で行った北京師範大学2名（中国），北京外国語大学4名（中国）の教員，計12名を共同研究員に加え，共同研究を推進した。

(4) 日本語学習者の作文教育支援研究

①プロジェクト関連の情報収集を行った【共同利用・共同研究】

- ・システム開発，システムを用いた実践論文，既存の作文コーパスについて文献調査を行った。
- ・グループ活動を取り入れた教育実践を中心に文献調査を行った。また，大学などで関連する実践を行っている9名の共同研究員にインタビューを行った。

②システムの設計・構築・共有を行った【共同利用・共同研究】

- ・システム全体，作文・添削（アノテーション）支援部分，利用者管理部分（アカウント，グループ管理など）の設計を行った。
- ・作文・添削部分，利用者管理部分を含むプロトタイプシステムをWebアプリケーションとして実装した。また，Webアプリケーション配布・作文データベース用のサーバを用意した。

③他のサブプロジェクトとの連携を強化した【共同利用・共同研究】

- ・「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」との連携において，文献調査に関連して収集した作文コーパス（2種類）を教育・研究利用するための試行として，全文検索システム『ひまわり』に取り込み，講習会の教材として配布した。また，取り込む方法はWeb上に公開した。

④研究成果として，次のような発信を行った【共同利用・共同研究】

- ・発表：オープンハウス2022，およびNINJALシンポジウムで本プロジェクトの紹介を行った。また，支援システムの設計について，口頭発表を1件（日本教育工学会）行った。
- ・講習会：既存の作文データ（2種類）を利用するための講習会を1回開催した（2023年2月27日，国語研で開催，参加者11名）。

⑤若手支援として，次のような活動を行った【大学院教育・若手研究者育成】

- ・1名のプロジェクト非常勤研究員を雇用した。

⑥研究成果の社会への還元に向けて，次のようなシステム公開に着手した。

- ・共同研究員向けにプロトタイプシステムをWeb上に限定公開した。

⑦グローバル化のため，次のような活用を行った【グローバル化】

- ・プロトタイプのユーザインターフェイスを，多言語表示できるよう実装した。

(5) 定住外国人の談話の縦断研究

①縦断調査を実施した【共同利用・共同研究】

- ・生活者として地域に定住した外国人の日本語会話に関して，OPIを活用した縦断調査を実施した。
- ・フォローアップ調査を行うと共に，次年度の研究協力者との交渉・確認を行った。
- ・生活者としての地域に定住した学習者に対して，リテラシーに関するパイロット調査を，1948年の識字調査を活用して岡山県岡山市と香川県三豊市で実施した。

②公開に向けたデータの更新，整備を行った【共同利用・共同研究】

③国内外の共同研究体制を整備した【共同利用・共同研究】

- ・共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」との連携・協力を実施・展開した。

- ・社会言語学, 会話分析, 教育人類学等を専門とする研究者との共同研究を進めた。
- ④研究成果として, 次のような発信を行った【共同利用・共同研究】
 - ・発表: オープンハウス 2022, およびNINJAL シンポジウムで本プロジェクトの紹介を行った。
 - ・論文: 学術雑誌に1件, 論文を掲載した(『基礎教育保障学研究』)。
 - ・共編著: 野山広・福島育子・帆足哲也・山田泉・横山文夫編(2022)『地域での日本語活動を考えるー多文化社会 葛飾からの発信』ココ出版を刊行した。
- ⑤若手支援として, 次のような活動を行った【大学院教育・若手研究者育成】
 - ・1名のプロジェクト非常勤研究員を雇用した。
- ⑥地域・社会との連携として, 次のような活用を行った【地域・社会との連携】
 - ・縦断調査やリテラシーに関するパイロット調査を通して, 地域・社会との連携強化に貢献した。
 - ・自主夜間中学全国大会にて, リテラシーに関するパイロット調査結果の暫定版報告・発表を行った。

(6) 定住外国人のよみかき研究

- ①本調査の準備を行った【共同利用・共同研究】
 - ・8名の方を対象に, 生活者としての定住外国人による字をよみかきする社会的実践についての予備的な調査を実施した。
 - ・国際交流協会3団体, 自治体1地域, 研究協力者3名に対し, 次年度の本調査を実施するフィールドおよび研究協力者と交渉を行った。
- ②国内外の共同研究体制を整備し, 本調査の検討に着手した【共同利用・共同研究】
 - ・公開するデータの様式と規模等について研究会議を9回(オンライン7回, 対面2回)開き, 検討した。調査協力者の個人情報の取り扱いや配布文書の言語(英語版, ローマ字版, ひらがな版)について検討を進めた。
 - ・他プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」と連携し, 地域に在住する外国人の言語問題の最先端にいる自治体の外国人相談員との懇談会を実施した。
 - ・社会学や移民研究を専門とする研究者との協業を進め, 本プロジェクトを多角的に推進するために共同研究員2名が参加した。
- ③研究成果として, 次のような発信を行った【共同利用・共同研究】
 - ・共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」の共催で, 生活者としての定住外国人による字をよみかきする社会的実践をめぐるシンポジウムを早稲田大学で開催した。
 - ・オープンハウス 2022, NINJAL サロンおよびNINJAL シンポジウムで本プロジェクトに関連する発表を行った。
- ④若手支援として, 次のような活動を行った【大学院教育・若手研究者育成】
 - ・一橋大学連携大学院の講義において, 本プロジェクトの問題意識や方法論等について話題にした。
 - ・1名のプロジェクト非常勤研究員を雇用した。
 - ・若手研究者3名(博士課程後期在籍者)および1名(修士号取得者)がプロジェクトに参加した。
 - ・本プロジェクトのサイト <https://www2.ninjal.ac.jp/jll/> において, 若手研究者による英語論文の文献レビュー論文3本を公開した。
 - ・若手研究者(博士課程後期在籍者)2名の研究費・旅費を支援した。

⑤地域・社会との連携として，次のような活用を行った【地域・社会との連携】

- ・ 3 地域の国際交流協会を訪問し，連携の依頼を行った。そのうち，1 地域の国際交流協会の職員 1 名は共同研究員としてプロジェクトに参加した。

プロジェクト名：多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究
 サブプロジェクト名：日本語学習者の作文の縦断コーパス研究
 サブプロジェクトリーダー：石黒 圭

令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

【目的】

本サブプロジェクトでは、中国6、台湾2、韓国2、ベトナム2の計12大学との共同研究体制を構築し、学習者600名（開始時）を対象に、1年間に3回、4年間にわたる縦断調査を行い、計5,000本の作文データベースを構築する。そのデータを用い、学習者の作文執筆能力の縦断的な発達過程を明らかにする。

【特色】

■特色1：日本語をゼロから学ぶ学習者の「多様な習得過程」が見える

従来の作文研究の多くが横断的なものであり、同一の学習者の習得過程を追跡する縦断従来の作文研究の多くが横断的なものであり、同一の学習者の習得過程を追跡する縦断コーパスがきわめて少ない。横断研究では習得過程の予測にすぎず、厳密な意味での学習者一人ひとりの習得過程を知ることはできない。そこで、本研究では、日本に関連する進学や就職が多く、書き言葉のニーズが高い「中国・台湾・韓国・ベトナム」の日本語教育先進地域を対象に4年間にわたるデータ収集を行い、横断コーパスとの比較も視野に入れ、習得上の困難点や習得過程の違いを明らかにする。

調査開始時の対象となる学習者は当初600名（2年目は480名、3年目は360名、4年目は240名を想定）であり、内訳は、中国330名（天津外国語大学180名、北京語言大学20名、重慶三峡学院20名、福建師範大学50名、東華大学20名、長春師範大学40名）、台湾120名（東呉大学100名、政治大学20名）、韓国70名（韓国外国語大学50名、仁川大学20名）、ベトナム80名（フエ外国語大学30名、ドンア大学50名）を予定している。

■特色2：執筆プロセスの可視化により、「文章執筆上の困難点」が見える

作文研究の分析対象はこれまで「執筆のプロダクト（書かれた作文）」であった。しかし、作文を修正する箇所こそが学習者のメタ意識が働く困難点であり、「執筆のプロセス（作文を書く過程）」を分析しなければ学習者の困難点はわからないことが多い。そこで、本研究では、所長裁量経費を用いて開発した作文の執筆プロセス記録システム「EssayLoggerTS」を用いて、学習者の執筆プロセスにおける困難点を明らかにする。

■特色3：執筆者による作文の母語訳との対照により、「学習者の誤用」が見える

従来の誤用分析の多くは日本語作文のみを対象に、研究者の判断で分析されてきたが、誤用は本来、何をなぜ間違えたのか、執筆者本人でないと判断することは難しい。そこで作文執筆の際、同じ内容の作文を日本語と母語の両方で入力してもらう方法を採用し、学習者の執筆意図を適切に把握する。

■特色4：AIの活用により、「人間の評価に近い自動評価」が見える

本研究では、5,000本の作文データを、六つの印象観点から日本語教師と一般の母語話者に評価してもらい、そうした評価を(株)富士通の判断過程を可視化できるAIに組み込むことで、従来の機械的な評価では叶わなかった、人間の評価に近い、安定した自動評価を可能にするシステムの構築を目指す。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

縦断研究	2022	2023	2024	2025	2026	2027
学習者作文データ収集	収集1年目 1,800本 (600名分)	収集2年目 1,440本 (480名分)	収集3年目 1,080本 (360名分)	収集4年目 720本 (240名分)		
学習者作文データベース	構築準備	構築開始	構築継続	構築継続	公開準備	公開
AI自動評価システム		開発準備	開発開始	開発継続	試験公開	運用開始
シンポジウム・講習会			シンポ1回		シンポ1回	WS1回
刊行・出版			報告書刊行		論文集準備	論文集刊行

【2022(R4)年度】

- ・作文データの収集開始（1年目、年3回、600名分×3回=1,800本）
- ・作文データのデータベース設計の検討

【2023(R5)年度】

- ・作文データの収集継続（2年目、年3回、480名分×3回=1,440本）
- ・作文データのデータベース構築開始
- ・作文の自動評価システム設計の検討

【2024(R6)年度】

- ・作文データの収集継続（3年目、年3回、360名分×3回=1,080本）
- ・作文データのデータベース構築継続
- ・作文の自動評価システム開発開始
- ・国際シンポジウムの開催
- ・国際シンポジウムの報告書刊行

【2025(R7)年度】

- ・作文データの収集継続（4年目、年3回、240名分×3回=720本）
- ・作文データのデータベース構築継続
- ・作文の自動評価システム開発継続

【2026(R8)年度】

- ・作文データのデータベース公開準備
- ・作文の自動評価システム開発公開
- ・国際シンポジウムの開催
- ・研究成果論文集の準備

【2027 (R9) 年度】

- ・ 作文データのデータベース公開
- ・ 作文の自動評価システム運用開始
- ・ 作文研究支援のためのワークショップ開催
- ・ 研究成果論文集の刊行

II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 12,765千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

フィールド調査・実験等（アクティビティ）

(1) 中国7大学（北京語言大学、天津外国語大学、東華大学、重慶三峡学院、福建師範大学、華中科技大学、長春師範大学）、台湾2大学（国立政治大学、東呉大学）、韓国2大学（韓国外国語大学校、仁川大学校）、ベトナム3大学（フエ大学外国語大学、ドンア大学、ハノイ工業大学）、タイ1大学（タマサート大学）、フランス1大学（フランス東洋言語文化学院）、スロヴェニア1大学（リュブリャナ大学）、イギリス1大学（オックスフォード大学）の計18大学との共同調査体制を構築し、学習者936名（開始時）を対象に、本年度に3回（今年度に調査を開始した3大学は1回のみ）、計1,754本の作文データを収集した。なお、途中で調査を辞退した学生もいるため、開始時よりも人数はやや減少したが、調査は全体として順調に進行している。

データベース等の構築（アクティビティ）

(1) 収集した作文データのデータベース構築の方法を検討し、<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>に、作文データを公開するためのページを作成した。【オープンデータ】

国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 国際的な研究拠点形成のために、中国は天津外国語大学、台湾は東呉大学、韓国は韓国外国語大学校とそれぞれ学術交流協定を締結している。ベトナムとはドンア大学と学術交流協定締結の方向で現在準備中である。（注：「グローバル化に関する計画」との重複有）
- (2) 国内および海外の大学の共同研究員との一層の連携を図るため、全体会議を本年度3回（8月、10月、3月）開催した。（注：「グローバル化に関する計画」との重複有）

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

(1) 教育現場における日本語学習者の作文執筆支援のために、サブプロジェクト「日本語学習者の作文教育支援研究」のリーダー（山口昌也）との会議を2回（8月、1月）開催し、収集した作文データの活用方法を検討した。

異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）

(1) 計算機によるテキスト処理の効率化のため、工学系研究者である横野准教授（明星大学）、永田亮准教授（甲南大学）、古山翔太院生（東京工業大学）との会議を本年度2回（5月、6月）開催し、今後のデータ処理について検討を行った。

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

(1) 2022年5月27日、北京外国語大学日本語学院・北京日本学研究中心主催「日本語学・日本語教育シリーズ講座」日本語教育部門第1回講演会において「中国人日本語学習者に見られる作文執筆の産出過程」というタイトルで招待講演を行った。

<https://bjryzx.bfsu.edu.cn/info/1113/1749.htm>

(2) 2022年9月11日、第四回東アジア日本学研究国際シンポジウムにおいて「学習者はどのように日本語を学ぶのか—ポストコロナ時代における日本語運用データの収集・分析法—」というタイトルで招待

講演を行った。(オンライン, URLなし)(注:サブプロジェクト「日本語学習者の談話の縦断コーパス研究」との共同成果。「グローバル化に関する計画」との重複有)

- (3) 2022年12月10日,台湾日本語学会 国際学術シンポジウムにおいて「台湾における日本語学習者の習得過程—日本語学習者縦断コーパス「CoLeJa」の設計と特徴—」というタイトルで招待発表を行った。(オンライン)(注:サブプロジェクト「日本語学習者の談話の縦断コーパス研究」との共同成果。「グローバル化に関する計画」との重複有)

<https://sites.google.com/view/taiwan-nichigo2022/> 首頁

- (4) 2022年12月10日, NINJAL シンポジウム「言語資源学の創成:開かれた言語資源による日本語研究」において「学習者の習得過程を可視化する—日本語学習者縦断コーパス「CoLeJa」—」というタイトルで口頭発表を行った。(オンライン)(注:サブプロジェクト「日本語学習者の談話の縦断コーパス研究」との共同成果)

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20221210a/

書籍・論文等による研究成果の公表(アウトプット)

- (1) 2023年3月,論文「日本語教育研究のための「かんたん日本語テスト」の開発—テスト開発経緯と項目分析結果を中心に」が『国際学報』創刊号(東京都立大学)に掲載された。
- (2) 2023年3月,寄稿論文「学習者はどのように日本語を学ぶのか—ポストコロナ時代における日本語運用データの収集法—」が『東アジア日本学研究』第9号に掲載された。(注:サブプロジェクト「日本語学習者の談話の縦断コーパス研究」との共同成果)

<https://www.east-asia.info/studies/009.pdf>

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 連携大学院(一橋大学:石黒担当)の演習において,本サブプロジェクトで収集中のデータを活用した授業を行った。【若手支援】

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 本プロジェクトの研究推進のために,4名のプロジェクト非常勤研究員を雇用し,データの収集・整理に携わったほか,プロジェクトのミーティングに参加し,データの分析やアノテーションの付与などの検討を共同で行った。【若手支援】

大学院生,学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 連携大学院(一橋大学:石黒担当)の演習等の機会を利用して,本プロジェクトに参画する大学院生を募り,9名(一橋大学4名,お茶の水女子大学2名,明治大学1名,筑波大学1名,東京工業大学1名)がプロジェクトのミーティングに参加し,それぞれの研究観点に基づき,収集中の作文データの分析法の発表を行った。【若手支援】

3. 地域・社会との連携に関する計画

産業界との連携

- (1) 作文の自動評価システム開発のため,(株)富士通の富士通研究所を中心としたAIの専門家との会議の場を設け(10月に1回,11月に1回,12月に1回,1月に2回,2月に1回,3月に1回),検討を行った。

4. グローバル化に関する計画

海外の研究者の受入

- (1) 共同研究を行っている海外の大学に所属する研究者，中国 16 名，台湾 4 名，韓国 6 名，ベトナム 4 名，タイ 2 名，スロヴェニア 1 名，フランス 1 名，計 34 名を共同研究員に加え，現地調査を推進した。
- (2) 連携して調査を進める海外の大学の教員 2 名（天津外国語大学，福建師範大学）を外来研究員として招聘した。

海外の大学との連携等

- (1) 国際的な研究拠点形成のために，中国は天津外国語大学，台湾は東呉大学，韓国は韓国外国語大学校とそれぞれ学術交流協定を締結している。ベトナムとはドンア大学と学術交流協定締結の方向で現在準備中である。（注：「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有）
- (2) 国内および海外の大学の共同研究員との一層の連携を図るため，全体会議を本年度 3 回（8 月，10 月，3 月）開催した。（注：「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有）

国際シンポジウムの開催

- (1) 2022 年 9 月 11 日，第四回東アジア日本学研究国際シンポジウムにおいて「学習者はどのように日本語を学ぶのかーポストコロナ時代における日本語運用データの収集・分析法ー」というタイトルで招待講演を行った。（オンライン，URL なし）（注：「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有）
- (2) 2022 年 12 月 10 日，台湾日本語文学会 国際学術シンポジウムにおいて「台湾における日本語学習者の習得過程ー日本語学習者縦断コーパス「CoLeJa」の設計と特徴ー」というタイトルで招待発表を行った。（オンライン）（注：「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有）

<https://sites.google.com/view/taiwan-nichigo2022/> 首 頁

プロジェクト名：多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究
 サブプロジェクト名：日本語学習者の談話の縦断コーパス研究
 サブプロジェクトリーダー：石黒 圭

令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	S
1. 共同利用・共同研究に関する計画	S
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	A
3. 地域・社会との連携に関する計画	-
4. グローバル化に関する計画	A

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

【目的】

本サブプロジェクトでは、中国国内の2大学の学習者35名（北京師範大学17名、西安外国語大学18名）を対象に、大学入学から卒業までの4年、年に2回、計8回のI-JAS準拠のインタビュー調査を行い、420時間分の縦断談話データベースを構築する。同時に、収集する談話の内容に関連する作文データを収集し、縦断作文データベースをあわせて構築する。その二つのデータに第3期で構築したI-JASの横断的データも関連付けながら、談話・作文能力の発達過程を総合的に明らかにすることを目指す。

【特色】

学習者コーパスを構築するさいの調査は継続的でないものが多く、第二言語習得研究における習得の過程を分析するのに不十分である。とくに、話し言葉と書き言葉の発達の連関や総合的な技能の発達の研究は立ち後れている現状がある。本サブプロジェクトでは、学習者談話の研究と学習者作文の研究とを連動しながら行ことによって、発話産出と文章産出との関係について明らかにする。

本サブプロジェクトの特色は以下の4点にまとめられる。

■特色1：縦糸と横糸を組み合わせた習得過程の分析

「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」であるI-JASに準拠する形で学習者の日本語運用の縦断データを経年的に収集し、縦横双方の観点を比較しながら第二言語習得研究が可能な学習者産出データを整備する。

■特色2：話し言葉と書き言葉の連動による習得過程の分析

談話データと作文データを並行して収集することにより、その両データを有機的に関連付け、話し言葉と書き言葉の連動も含めた学習者の総合的な習得過程を明らかにできるデータを整備する。

■特色3：各種アノテーションによる習得過程の分析

談話データには話し言葉特有の分析に必要なフィラーを識別するタグを付与したり、作文データには母語による対訳作文から得た誤用タグを付与したりするなど、それぞれのデータの分析に有効な各種アノテーションを付与し、習得過程の多角的分析を容易にするデータを整備する。

■特色4：背景情報による習得過程の分析

学習者・担当教師へのアンケート調査やインタビュー調査、使用教材や授業のシラバスなど、日本語の学習を背後で支える背景情報を収集し、分析に役立てる。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

縦断研究	2022	2023	2024	2025	2026	2027
学習者談話データ収集	収集1年目 (18名分)	収集2年目 (18名分)	収集3年目 (18名分)	収集4年目 (18名分)		
学習者談話データベース	先行データ 公開準備	先行データ 公開	後続データ 構築開始	後続データ 構築継続	後続データ 公開準備	後続データ 公開
シンポジウム・講習会			シンポ1回		WS 1回	シンポ1回
刊行・出版		論文集準備	論文集刊行			

【2022(R4)年度】

- ・談話データの収集開始（1年目，年2回，西安外国語大学18名分）
- ・先行データのデータベース公開準備（北京師範大学17名分，データ収集済）

【2023(R5)年度】

- ・談話データの収集継続（2年目，年2回，西安外国語大学18名分）
- ・先行データのデータベース公開（北京師範大学17名分，データ収集済）
- ・研究成果論文集の準備

【2024(R6)年度】

- ・談話データの収集継続（3年目，年2回，西安外国語大学18名分）
- ・後続データのデータベース構築開始（西安外国語大学18名分）
- ・国際シンポジウムの開催
- ・研究成果論文集の刊行

【2025(R7)年度】

- ・談話データの収集継続（4年目，年2回，西安外国語大学18名分）
- ・後続データのデータベース構築継続（西安外国語大学18名分）

【2026(R8)年度】

- ・学習者縦断談話データベースの公開準備
- ・談話研究支援のワークショップの開催

【2027(R9)年度】

- ・学習者縦断談話データベースの公開準備
- ・国際シンポジウムの開催

II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 5,783千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

フィールド調査・実験等（アクティビティ）

- (1) 西安外国語大学（中国），ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学（ベトナム），チュラーロンコーン大学（タイ）の学生を対象に，I-JASに準拠した内容の談話・作文のオンライン縦断調査を実施した。初年度となるR4年度は3回分のデータを収集し，合計168時間分の談話データ，および446本分の作文データを収集した（今後は年2回の予定）。内訳は次のとおりである。

西安外国語大学：談話（約 66 時間分 平均 45 分×88 名 [第 1 回 31 名・第 2 回 30 名・第 3 回 27 名]）
作文（176 本 2 課題×88 名）

ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学：談話（約 49 時間分 平均 45 分×65 名 [第 1 回 22 名・第 2 回
22 名・第 3 回 21 名]）作文（130 本 2 課題×65 名）

チュラーロンコーン大学：談話（約 53 時間分 平均 45 分×70 名 [第 1 回 27 名・第 2 回 23 名・第 3 回
20 名]）作文（140 本 2 課題×70 名）

データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 収集がすでに終わっている中国の北京師範大学の学習者 17 名分、約 136 時間（17 名×平均 1 時間×
8 回）の談話データベースの構築を行い、<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>に公開した（公開日：2023
年 3 月 14 日）。

国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 連携して調査に当たる西安外国語大学（中国）と、学術交流協定の提携の準備を進めた。（注：「グ
ローバル化に関する計画」との重複有）

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) サブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」と連携し、共同で開発した文字入力
ツール（EssayLoggerTS）およびシステム（Moodle）を用いて作文のデータ収集を進めた。

調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 収集がすでに終わっている中国の北京師範大学の学習者 17 名分、約 136 時間（17 名×平均 1 時間×
8 回）のデータベースの構築を行い、<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>に公開した（公開日：2023 年 3
月 14 日）。（注：「データベース等の構築」との重複有）。

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 2022 年 9 月 11 日、第四回東アジア日本学国際シンポジウムにおいて「学習者はどのように日本
語を学ぶのか—ポストコロナ時代における日本語運用データの収集・分析法—」というタイトルで招待
講演を行った。（オンライン、URL なし）（注：サブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス
研究」との共同成果。「グローバル化に関する計画」との重複有）

- (2) 2022 年 12 月 10 日、台湾日本語学会 国際学術シンポジウムにおいて「台湾における日本語学習者
の習得過程—日本語学習者縦断コーパス「CoLeJa」の設計と特徴—」というタイトルで招待発表を行っ
た。（オンライン）（注：サブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」との共同成果。
「グローバル化に関する計画」との重複有）

<https://sites.google.com/view/taiwan-nichigo2022/> 首頁

- (3) 2022 年 12 月 10 日、NINJAL シンポジウム「言語資源学の創成：開かれた言語資源による日本語研
究」において「学習者の習得過程を可視化する—日本語学習者縦断コーパス「CoLeJa」—というタイト
ルで口頭発表を行った。（オンライン）（注：サブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研
究」との共同成果）

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20221210a/

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 2023 年 3 月、寄稿論文「学習者はどのように日本語を学ぶのか—ポストコロナ時代における日本語
運用データの収集法—」が『東アジア日本学研究』第 9 号に掲載された。

<https://www.east-asia.info/studies/009.pdf>

データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 2023 年 3 月 14 日、第 45 回 NINJAL チュートリアルにおいて「日本語学習者の話し言葉の分析—北京
日本語学習者縦断コーパス（B-JAS）を用いて—」というタイトルで大学院生等を対象としたオンライ

ン講習会を行った。(参加者 31 名, うち学生 20 名) (注:「大学院教育・若手研究者育成に関する計画」との重複有)【若手支援】

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230314a/

【Sと自己評価した理由】

(1) Sという評価を行ったのは、調査の計画では、漢字・漢語圏の西安外国語大学(中国)の学生のみの予定であったが、調査の実施では、非漢字・漢語圏のベトナム国家大学ハノイ校外国語大学(ベトナム)、非漢字・非漢語圏のチュラーロンコーン大学(タイ)の学生たいしても調査を行い、調査対象者の多様性が格段に増したため。

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

(1) 連携大学院(一橋大学:石黒担当)の演習において、北京師範大学で収集したデータを活用した授業を行った。

プロジェクト非常勤研究員の雇用

(1) 本プロジェクトの研究推進のために、4名のプロジェクト非常勤研究員を雇用し、データの収集・整理に携わったほか、プロジェクトのミーティングに参加し、文字起こしの効率的な方法などの検討を共同で行った。

大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

(1) 連携大学院(一橋大学:石黒担当)の演習等の機会を利用して、本プロジェクトに参画する大学院生を募り、2名(一橋大学1名、東京外国語大学1名)の大学院生が共同研究に参画し、談話分析の方法をめぐる情報交換を行った。

若手研究者向けのチュートリアル等

(1) 2023年3月14日、第45回NINJALチュートリアルにおいて「日本語学習者の話し言葉の分析—北京日本語学習者縦断コーパス(B-JAS)を用いて—」というタイトルで大学院生等を対象としたオンライン講習会を行った。(参加者31名,うち学生20名)(注:「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有)

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20230314a/

3. 地域・社会との連携に関する計画

特になし

4. グローバル化に関する計画

海外の研究者の受入

(1) 現地調査を行う西安外国語大学(中国)2名、ハノイ国家大学外国語大学(ベトナム)4名、チュラーロンコーン大学(タイ)2名、および現地調査を共同で行った北京師範大学2名(中国)、北京外国語大学4名(中国)、計14名の教員を共同研究員に加え、共同研究を推進した。

海外の大学との連携等

(1) 連携して調査に当たる西安外国語大学(中国)と、学術交流協定の提携の準備を進めた。(注:「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有)

国際シンポジウムの開催

- (1) 2022年9月11日, 第四回東アジア日本学研究国際シンポジウムにおいて「学習者はどのように日本語を学ぶのかーポストコロナ時代における日本語運用データの収集・分析法ー」というタイトルで招待講演を行った。(オンライン, URLなし)(注:「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有)
- (2) 2022年12月10日, 台湾日本語文学会 国際学術シンポジウムにおいて「台湾における日本語学習者の習得過程ー日本語学習者縦断コース「CoLeJa」の設計と特徴ー」というタイトルで招待発表を行った。(オンライン)(注:「共同利用・共同研究に関する計画」との重複有)
<https://sites.google.com/view/taiwan-nichigo2022/> 首頁

プロジェクト名：多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究
 サブプロジェクト名：日本語学習者の作文教育支援研究
 サブプロジェクトリーダー：山口 昌也

令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	C
4. グローバル化に関する計画	B

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

■プロジェクトの目的

本プロジェクトの目的は、協同型の作文教育向けの作文・添削支援システムを開発し、授業への導入手法を検討することである。さらに、システムを用いた授業実践の結果から作文・添削データベースを構築し、作文技能の習得過程とシステムの教授効果を明らかにする。

■プロジェクトの特徴

作文教育では、教師の指導のみに依拠しない、協同型の授業活動が広く行われている。そこには作文・添削活動自体を評価するプロセスが含まれているが、評価に欠かせない、作文・添削活動の記録や、記録データ活用のための環境が十分整っていないのが現状である。また、現状の作文支援システムは、グループ利用ではなく個別利用向けであるとともに、システムが作文を評価する点に焦点が置かれており、協同型の作文教育には適していない。そこで、次の二つの機能を併せ持つ、作文・添削支援システムを構築する。

①教師・学習者がインターネット上で作文・添削活動を行うための機能

教室や家庭での利用、海外居住者との協同を考慮するとともに、インストール不要で利用できるよう、Webブラウザ上で動作するWebアプリケーションとして実現する。

②実施された作文、添削をデータベース化し、ふりかえり活動や教師の分析を支援する機能

例えば、(1)作文や添削結果の検索、作文・添削過程の閲覧など、教師の分析や学習者のふりかえりを支援する機能、(2)学習者の気づきをグループで共有しやすくするなど、グループでのふりかえり活動を支援する機能を実現する。

この二つの機能を踏まえて、作文・添削支援システムを授業に導入する方法を確立する。アカデミックライティング（日本人大学生、日本語学習者）、作文（日本語学習者）の3種類の実践プログラムを作成し、授業で実践する。そして、実践結果から得られたデータを用いて作成する作文・添削データベースを用いて、効果的な作文添削の方法、作文技能の習得過程などを明らかにする。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

◆年次計画

【2022年度】

既存の実践手法、支援システムを調査し、作文・添削支援システムの設計を行う。システムのうち、まず、作文・添削部分について、プロトタイプシステムを実現する。また、本システムの利用を想定した実践プログラムを設計する。【2023年度】

2022年度に実現したプロトタイプシステムを使用して、予備実践を実施する。また、支援システムのふりかえり部分の設計し、プロトタイプシステムへ機能を追加する。さらに、実践プログラムの一般向け解説書（実践マニュアル）の作成に着手する。

【2024年度】

作文・添削支援のプロトタイプシステムを使用して、（作文・添削・ふりかえりを含む）予備実践を実施する。作文・添削データベース構築の準備を開始する。実践マニュアルの作成を進める。

【2025年度】

作文・添削支援システムを用いた本実践を行い、効果を検証する。また、作文・添削支援システムをインターネット上に試験公開し、合わせて実践マニュアルも公開する。さらに、これまでに実施した実践結果から共有可能なデータを選別し、作文・添削データベースを構築する。

【2026年度】

作文・添削支援システムの本公開を行い、一般向けの講習会を実施する。また、作文・添削データベースの構築を進める（合計3回分の実践結果）。さらに、データベースを用いた分析を行う。

【2027年度】

作文・添削支援システムの公開後のメンテナンスを行い、システムを改善する。2026年度に構築した作文・添削データベースをインターネット上に公開する。実践の結果得られた作文・添削データを活用するための講習会を開催する。

II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 3,200千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

フィールド調査・実験等（アクティビティ）

- (1) 作文支援、添削支援、協同学習支援など、本プロジェクトで構築する作文・添削システム開発に関する論文のほか、システムを用いた実践論文を収集・調査した。また、既存の作文コーパスについても、構築の背景、利用方法、アノテーション、データ構造などについて調査した。
- (2) 学習者のピアでのグループ活動を取り入れた教育実践を中心に国内外の文献調査を行った。また、大学などで関連する実践を行っている9名の共同研究員にインタビューし、実践方法、必要とされる機能、システム完成時の導入方法などを調査した。

データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) プロジェクトの設計方針、「フィールド調査・実験等」の結果をもとに、システム全体、および、作文・添削（アノテーション）支援部分の設計を行った。さらに、「フィールド調査・実験等」(2)でのインタビューにより、授業へ容易に導入できることの重要性が明らかだったため、利用者の管理部分（アカウント、グループ管理など）の設計を行った。
- (2) (1)に基づき、作文・添削部分・利用者管理部分を含むプロトタイプシステムをWebアプリケーションとして実装した。また、Webアプリケーション配布・作文データベース用のサーバを用意した。

- (3) プロトタイプシステムの完成をもとに実践プログラムの設計を行うことを計画していたが、システムの作成に時間がかかったため、実践プログラムの作成までにはならず、「フィールド調査・実験等」(2)で行ったインタビューに基づく計画段階のものにとどまった。

他のプロジェクトとの合同の活動等 (アクティビティ・アウトプット)

- (1) 教育現場における日本語学習者の作文執筆支援のために、「日本語学習者の作文縦断研究」(プロジェクトリーダー:石黒圭教授)との会議を2回(8月, 1月)開催し, 収集した作文データの活用方法を検討した。

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム (アウトプット)

- (1) NINJAL シンポジウム「言語資源学の創成: 開かれた言語資源による日本語研究」(2023-12-10, オンライン)で本プロジェクトの紹介を行った。

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20221210a/

書籍・論文等による研究成果の公表 (アウトプット)

- (1) 「データベース等の構築」1に基づき, 支援システムの設計について, 日本教育工学会 2023 年春季全国大会で口頭発表を1件行った。(2023-03-25, 東京学芸大)

<https://www.jset.gr.jp/taikai42/index.html>

データベース等に関する講習会・講演会 (アウトプット)

- (1) 既存の作文データ(2種類)を利用するための講習会を1回開催した。(2023-02-27, 国語研で開催, 参加者11名)

『ひまわり』講習会 <https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?lesson2203>

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 7月から2名のプロジェクト非常勤研究員を雇用し, ICTおよび言語データを活用した作文教育を推進できる人材を育成した。うち, 1名が大学常勤職へ就職した。

3. 地域・社会との連携に関する計画

研究成果の社会への還元

- (1) 共同研究員向けにプロトタイプシステムをWeb上に限定公開した。

4. グローバル化に関する計画

英語による研究成果の発信等

- (1) プロトタイプの作文・添削支援システムに関して, ユーザーインターフェイスは, 多言語表示できるよう実装した。現在は, 日本語・英語について表示用テキストを用意している。

5. その他

- (1) 「フィールド調査・実験等」2で調査した作文コーパス(2種類)を教育・研究利用するための試行として, 全文検索システム『ひまわり』に取り込んだ。取り込んだ結果は, 著作権者の許可を取った上で, 「データベース等に関する講習会・講演会」(1)の講習会の受講者に教材として配布した。また, 取り込む方法はWeb上(『ひまわり』HP, GitHub, ともに【オープンアクセス】)に公開した。

JASWIC: <https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?JASWIC>

日本語学習者作文コーパス <https://csd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?JLCC>

- (2) 「データベース等に関する講習会・講演会」(1)の講習会の補助資料として, チュートリアルビデオ5本(うち3本は既存ビデオの改訂版)をYouTubeで公開した。【オープンアクセス】

https://esd.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?vt_himawari

(「インストール(Windows)」 『名大会話コーパス』の例 『青空文庫』パッケージの例 「JASWRIC の利用」 「日本語学習者作文コーパスの利用」)

プロジェクト名：多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究
 サブプロジェクト名：定住外国人の談話の縦断研究
 サブプロジェクトリーダー：野山 広

令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	A
4. グローバル化に関する計画	—

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

本研究の目的と特色（研究課題）は以下の通りである。

【本研究の目的】

2007年から継続してきた東北地方における外国人定住者に対する OPI の枠組みを活用した日本語会話の縦断的インタビュー調査について、第四期も継続するとともに、過去の収集データ（約13年分：一次データ＝当初の5年分、二次データ＝次期の8年分）の更新、整備を行い、それらのデータを公開、分析する。そのことを通して、長期間にわたる生活者の言語習得の実態を明らかにする。最終的に、こうした調査・研究の成果を踏まえて、定住外国人の日本語習得過程の実証的研究に資することを旨とする。

【本研究の特色】

本プロジェクトでは、生活者の中で特に日本語学習を必要とする人々のニーズに応えるため、主に外国人の散在地域（秋田県A市）に定住する外国人住民（国際結婚の配偶者）に対して縦断調査を行い、生活者談話の縦断的なデータベースを構築する。本研究の特色＝課題は次の四つにまとめられる。

- ①生活者の日本語会話力の長期的習得過程の解明把握：OPI の枠組みを活用したインタビューを毎年1度ずつ行い、日本語会話力と言語生活・環境の実態を縦断的に探る。
- ②生活者支援に結びつく形成的フィードバック：学習者や現場の関係者に対する形成的なフィードバックを行うこと等を通して、現場のニーズに応じた、変革・改善に貢献できるような支援活動を行う。
- ③会話の傾向や特徴の分析：構築してきたデータベース及びOPI の調査結果を踏まえつつ、音声・文字化データやレイティング結果等からみえてくる会話の傾向や特徴を明確化する。
- ④生活者の日本語会話力の摩滅・喪失過程の解明：地域日本語教育の効果や課題、日本語会話力の習得過程及び高齢の定住外国人の日本語会話力の摩滅・喪失過程に関して明らかにするとともに、国内外の関連領域・分野の人々とネットワークを構築、拡充する。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

縦断研究	2022	2023	2024	2025	2026	2027 前半
生活者談話データ収集	収集1年目 (3~5名)	収集2年目 (3~5名)	収集3年目 (3~5名)	収集4年目 (3~5名)	収集5年目 (3~5名)	
生活者談話データベース	一次データ 公開準備	一次データ 公開	二次データ 構築開始	二次データ 構築継続	二次データ 公開	二次データ メンテナンス
シンポジウム・講習会		講演会が研修			シンポ1回	研修・講習会
刊行・出版			論文集刊行			

2022(R4)年度：縦断調査（14年目）のデータ収集を継続する。すでに収集した生活者の第一次（当初5年）談話データの文字化更新、整備作業を継続する。

2023(R5)年度：縦断調査（15年目）のデータ収集を継続する。生活者の第一次（当初5年）談話データの文字化更新、整備作業を終え、公開する。公開したデータ活用のための講演会あるいは研修（ワークショップ）を開催する。

2024(R6)年度：縦断調査（16年目）のデータ収集を継続する。すでに収集した生活者の第二次（次期8年）談話データの文字化、整備作業に着手する。縦断調査・研究の成果を踏まえた論文集を刊行する。

2025(R7)年度：縦断調査（17年目）のデータ収集を継続する。すでに収集した生活者の第二次（次期8年）談話データの文字化、整備作業を継続する。

2026(R8)年度：縦断調査（18年目）のデータ収集を継続する。すでに収集した生活者の第二次（次期8年）談話データの文字化データベースを公開し、公開記念のシンポジウムを開催する。

2027(R9)年度：公開した第二次（次期8年）談話データベースのメンテナンスを行い、成果を活用した研修・講習会を開催する。

II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 3,200千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

フィールド調査・実験等（アクティビティ）

- (1) 生活者として地域に定住した外国人（主に国際結婚の配偶者）の日本語会話（談話）に関して、OPIを活用した縦断調査を実施する予定であったが、コロナの影響で2023年4月に延期となった。
- (2) フォローアップ調査を行うと共に、次年度の研究協力者との交渉・確認を行った（2023年3月）。
- (3) 生活者としての地域に定住した学習者に対して、リテラシーに関するパイロット調査を、1948年の識字調査を活用して実施した（7月30日：岡山県岡山市、12月21日：香川県三豊市）

データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 公開に向けたデータの更新、整備を行った。
- (2) 個人情報の取り扱いについては、最新の著作権法等の動向を踏まえて、改めて配慮を行った。

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」との連携・協力を実施・展開した。

異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 社会言語学、会話分析、教育人類学等を専門とする研究者との共同研究を進めた。

調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 総括班と連携して本プロジェクトのサイトを作成し、<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>に2022年4月に公開した。

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) イベントの開催に際し、本プロジェクトのサイト <https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>、及び Twitter https://twitter.com/js1_ninjal で、オープンハウス2022（「定住外国人の日本語使用と談話に関する縦断的研究」、8月）、NINJAL シンポジウム（「生活者の談話等に関する縦断的研究」、12月）等の情報を発信した。
- (2) 第7回学習者コーパス・ワークショップ&シンポジウムを9月17日に開催した（参加者90名）。
- (3) 学習者コーパス（I-JAS）研究会を7回開催した（4月23日、6月25日、8月21日、9月17日、10月8日、12月11日、2月19日）。

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 野山広（2022）「基礎教育を保障する社会の基盤となる日本語リテラシー調査の意義と留意点—「特定課題研究」シンポジウムより—」（【特集】「リテラシー調査の意義と課題」について）『基礎教育保障学研究』第6号、3-10、基礎教育保障学会
- ・野山広（2022）「基礎教育の保障と第一言語／第二言語としての日本語教育の重要性」『地域での日本語活動を考える—多文化社会 葛飾からの発信』、211-229、ココ出版
- ・野山広・福島育子・帆足哲也・山田泉・横山文夫編（2022）『地域での日本語活動を考える—多文化社会 葛飾からの発信』、ココ出版

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) プロジェクト非常勤研究員を2名雇用した。

3. 地域・社会との連携に関する計画

地域・社会との連携

- (1) 縦断調査やリテラシーに関するパイロット調査を通して、地域・社会との連携強化に貢献した。

一般向け講義・講演会・フォーラム等

- (1) リテラシーに関するパイロット調査結果の暫定版報告・発表を行った（自主夜間中学全国大会、岡山、2022年8月27日）。

4. グローバル化に関する計画

特になし。

プロジェクト名：多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究

サブプロジェクト名：定住外国人のよみかき研究

サブプロジェクトリーダー：福永 由佳

令和4年度サブプロジェクト自己評価

全項目の総合	A
1. 共同利用・共同研究に関する計画	A
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	A
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

生活者としての定住外国人は、留学生と異なり、教育機関における日本語学習を経験していない人が多いにもかかわらず、日常生活のさまざまな場面で日本語のよみかきが求められる。彼らの「字をよみかきする社会的実践」(=Literacy)は、これまで日本語教育の研究対象としては注目されることは少なく、支援の取り組みも諸外国に比べ立ち遅れていることが指摘されている。

本サブプロジェクトでは、生活者としての定住外国人の日常生活におけるよみかき社会的実践について調査を実施し、よみかき社会実践の類型化とともに、その特徴(新しいメディアや社会的ネットワークの活用等)を明らかにすることを試みる。

それらの基礎的なデータを収集し分析することにより、自治体等が提供する翻訳サービスや「やさしい日本語」をはじめとする既存の言語サービス等の有効性等を検討することやこれまで議論が及んでいなかった言語権やよみかきをめぐるイデオロギーや政治性の問題を考察することが可能となる。

本研究の最終的な目的は、生活者のよみかきを文字の学習ではなく、文字を介したコミュニケーション(字をよみかきする社会的実践)と捉えなおし、その実態を明らかにすることを通して、よみかきに関する諸課題を議論し外国人支援の充実に資することを目指す。

2. 年次計画(6年間のロードマップ)

2022(R4)年度：よみかきやリテラシー等、本研究に関連する先行研究の動向を把握し、資料として整備する(500件程度)。生活者が行う字をよみかきする社会的実践を探索する予備的な調査を限定的な範囲で試行し、その結果にもとづき本調査の設計を行う。また、共同研究者を窓口として、字をよみかきする社会的実践調査(本調査)を実施予定のフィールドや研究協力者と交渉を行う。生活者としての定住外国人による字をよみかきする社会的実践をめぐりシンポジウムを開催する。

2023(R5)年度：字をよみかきする社会的実践調査(本調査)を開始し、データ収集を行う。収集したデータは順次公開に向けた文字化等の作業を行う。

2024(R6)年度：補完的データの収集と、データの分析(よみかき社会的実践の類型化とよみかき社会的実践の特徴)に着手する。

2025(R7)年度：昨年度に引き続き、データ分析を継続し、個人情報保護を含めたデータ公開の方式等を検討する。

2026 (R8) 年度：限定された範囲でデータの公開を行い、フィードバックを得て、公開に関する問題点の改善を行う。

2027 (R9) 年度：公開データのメンテナンスを行い、本格的にデータ公開を行う。データ公開にともない、生活者としての定住外国人による字をよみかきする社会的実践をめぐるシンポジウムを開催する。

II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 2,400 千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

フィールド調査・実験等 (アクティビティ)

- (1) 生活者としての定住外国人による字をよみかきする社会的実践についての予備的な調査を実施した (8名, インタビュー303分)。
- (2) 次年度の本調査を実施するフィールドおよび研究協力者と交渉を行った (国際交流協会3団体, 自治体1地域, 研究協力者候補3名)。

データベース等の構築 (アクティビティ)

- (1) 公開するデータの様式と規模等について, 研究会議で検討を行った (オンライン7回, 対面2回)。
- (2) 個人情報の取り扱いについて検討し, 個人情報が含まれたデータと個人情報の消去・匿名化を施した研究用データの2種類のデータを作成することを取り決め, 2022年11月の研究倫理審査に申請し承認を得た。
- (3) 調査協力者に配布する調査協力依頼書及び協力への同意書書類は, 協力者の要望に応じられるよう, 英語版, ローマ字版, ひらがな版を作成した。

他のプロジェクトとの合同の活動等 (アクティビティ・アウトプット)

- (1) 共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」と連携し, 地域に在住する外国人の言語問題 (よみかきを含む) の最先端にいる自治体の外国人相談員との懇談会を実施した (2023年2月13日)。
- (2) 共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」の共催で, 生活者としての定住外国人による字をよみかきする社会的実践をめぐるシンポジウムを開催した (詳細は「公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム」参照)。

異分野の研究者との共同研究・協業等 (アクティビティ・アウトプット)

- (1) 社会学や移民研究を専門とする研究者との協業を進め, 本プロジェクトを多角的に推進するために共同研究員として参加した (2名)。

調査データ・データベース等公開 (アウトプット)

- (1) 調査データ等の研究成果を公開するために, 総括班主導のもと他のサブプロジェクトと連携して, 本プロジェクトのサイト <https://www2.ninjal.ac.jp/j11/> を開設した。

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム (アウトプット)

- (1) 生活者としての定住外国人による字をよみかきする社会的実践をめぐるシンポジウム (国立国語研究所共同研究プロジェクト「定住外国人のよみかき研究」シンポジウム「「識字」から「社会的実践としてのよみかき」へー中国・サハリン帰国者の事例からー」) を開催した (2023年3月12日, 早稲田大学, 参加者31名)

<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/ali/result.html>

- (2) 国立国語研究所オープンハウス2022において, ポスター発表「文字社会日本の「よみかき」再考」を行い, 本プロジェクトの問題意識等について発表した (2022年9月9日～現在 オンライン公開中)。

<https://www2.ninjal.ac.jp/openhouse/2022/announcement-c.html>

- (3) NINJAL シンポジウム「言語資源学の創成：開かれた言語資源による日本語研究」において、ポスター発表「定住外国人のよみかき研究：識字から字をよみかきする社会的実践へ」を行い、本プロジェクトの趣旨・計画について発表した（2022年12月10日 オンライン）。

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20221210a/

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 共同研究員・福村真紀子氏が、識字についての文献研究に関する口頭発表「よみかきに内在するイデオロギー —日本語学習支援を再考するための文献研究」を行った（2022年11月29日 第245回 NINJAL サロン）。
- (2) 文献レビュー論文（日本語文献の文献レビュー論文5本、英語文献の文献レビュー論文3本）を本プロジェクトのサイトにおいて公開した。

<https://www2.ninjal.ac.jp/jll/ali/result.html>

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 一橋連携大学院の講義「日本語学講義A」で本プロジェクトの問題意識や方法論等について話題にした（言語社会研究科，2022年度秋冬学期）。

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 若手研究者（博士後期課程在籍者）1名をプロジェクト非常勤研究員として9月から雇用し、プロジェクトに参加させ、先行研究の収集、調査票の整備、調査データの分析などを通して質的研究法を学ぶ機会を提供した【若手支援】

大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) 若手研究者3名（博士課程後期在籍者）および1名（修士号取得者）をプロジェクトに参加させ、文献レビュー論文の執筆、北海道ニセコ観光圏における予備調査、シンポジウムなどに参加の機会を持った。【若手支援】

若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 若手研究者による文献レビュー論文（英語文献の文献レビュー論文3本）を本プロジェクトのサイトにおいて公開した。 <https://www2.ninjal.ac.jp/jll/ali/result.html> 【若手支援】【オープンアクセス】（既出：「共同利用・共同研究」）

若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) 若手研究者（博士課程後期在籍者）2名の研究費・旅費（予備調査参加・シンポジウム参加）を支援した。【若手支援】

3. 地域・社会との連携に関する計画

地域・社会との連携

- (1) 地域・社会との連携を深めるために、3地域（関東，関西，北海道）の国際交流協会を訪問し、日本語学習支援の情報収集および連携の交渉を行った。そのうち、関東地域の国際交流協会の職員1名は共同研究員としてプロジェクトに参加した。
- (2) 茨城県に暮らす外国人の状況、地域日本語教育の状況について、国際交流協会担当者が研究会議において発表を行った（2022年8月31日オンライン）

一般向け講義・講演会・フォーラム等

- (1) 生活者としての定住外国人による字をよみかきする社会的実践をめぐるシンポジウム（国立国語研究所共同研究プロジェクト「定住外国人のよみかき研究」シンポジウム「「識字」から「社会的実践と

してのよみかき」へ「中国・サハリン帰国者の事例から」を開催した（詳細は「公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム」参照）。

研究成果の社会への還元

- (1) 文献レビュー論文（日本語文献の文献レビュー論文5本，英語文献の文献レビュー論文3本）を本プロジェクトのサイトにおいて公開した（<https://www2.ninjal.ac.jp/j11/>）。【オープンアクセス】（既出：「共同利用・共同研究」）

4. グローバル化に関する計画

海外の研究者の受入

- (1) 多様な視点や幅広いネットワークを本プロジェクトに取り入れるために，海外出身者の研究者を共同研究に参加するように積極的に働きかけ，2名が共同研究員として参画した（ロシア出身の研究者1名，韓国出身の研究者1名）。

「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」評価報告

令和4年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

本プロジェクトは、日本語非母語話者の言語運用の縦断的調査によって多様な言語資源を構築して研究し、その成果を教育支援に生かすことを目的としている。実質5つの研究サブプロジェクトと1つの統括サブプロジェクトによって構成され、本年度（2022(R4)）は6年計画の初年度にあたる。

共同研究プロジェクト全体の自己点検報告書と各サブプロジェクトの自己点検報告書それぞれを検討してみると、自己評価が多少自己抑制的かと思えるところが散見された。以下の各項目別コメント欄に記載したとおり、評価者の立場から、記載されている計画と実施された事柄や成果を比較・再検討して評価を一部見直した。まず、各サブプロジェクトの項目評価を一部見直し、その結果上方修正が妥当と考えたものを含む全てのサブプロジェクトの総合評価を踏まえて、統括サブプロジェクト「非母語話者日本語運用統括」の総合評価の自己評価「B」を「A」に修正した。さらに、上記の各サブプロジェクトの項目評価の一部修正を反映して、共同研究プロジェクト全体自己評価の項目の「2 大学院教育・若手研究者育成に関する計画」の自己評価「B」を「A」に修正した。

日本語非母語話者の言語運用の実態に関して、観察・調査・研究・教育・制度構築など多様な視点からの吟味検討の機運が拡大しているといえるが、本プロジェクトは包括的な観点からの研究体制を稼働させており、初年度から計画を上回っていくつかの貴重な成果を生み出していると評価できる。以下の各項目別コメント欄に記載した評価の多少の上方修正を踏まえた上で、改めて全項目の総合評価は、自己評価どおり「A」が妥当であると考えられる。

《評価項目》

1. 共同利用・共同研究について

サブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」の当該項目の自己評価は「A」であるが、フィールド調査体制への参加大学の数・対象学習者数が計画を大きく上回っており、また計画にはなかった講演会等が4件、論文等によるアウトプットが2件追加されており、より高い評価（Sに近いA）が考えられる。

サブプロジェクト「定住外国人の談話の縦断研究」の自己評価は「B」であるが、共同研究の成果として計画にはなかった論文2編、共著書1冊が追加されており、評価者としては「A」評価とした。

以上の点を踏まえて、また、その他さまざまな共同研究・連携研究が遂行されていることを踏まえて、当該項目の総合評価「A」は妥当だと判断した。

2. 教育・人材育成について

サブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」の当該項目の自己評価は「B」であるが、大学院生を募り「参加を促す」計画に対して、9名の院生が参加し発表を行っており、教育・人材育成面でのより高い評価（Aに近いB）が考えられる。

サブプロジェクト「日本語学習者の作文教育支援研究」の自己評価は「B」であるが、非常勤研究員の「雇用を検討する」計画のもとで2名の雇用とそのうち1名の大学常勤職への就職を実現している。大学などの常勤研究職への就職が非常に厳しくなっているおり人材育成の観点から十分評価に値すると言える。「A」評価が妥当ではないか。

以上の点を踏まえて、当該項目の総合評価を「B」から「A」に変更することが妥当だと考える。

3. 社会連携・社会貢献について

サブプロジェクト「日本語学習者の作文教育支援研究」の当該項目の自己評価は「C」であるが、2名の非常勤研究員を雇用してそのうち1名の大学常勤職への就職を実現している。上記2の後半部での指摘と同様に、人材育成の観点から十分評価に値すると言える。「B」評価が妥当ではないか。

サブプロジェクト「定住外国人のよみかき研究」の自己評価は「B」であるが、計画になかった連携活動として、関東、関西、北海道の3地域の国際交流協会との連携交渉を行い、1名の協会職員を共同研究員として採用しており、別の協会担当者がオンラインで発表も行なっている。また、計画にはなかった文献レビュー論文計8本を公開しており、総じて計画を上回る成果を上げていると考えられる。「A」評価が妥当ではないか。

以上の点を踏まえて、当該項目の総合評価「A」は妥当だと判断した。

4. 国際連携・国際発信について

サブプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」の当該項目の自己評価は「B」であるが、以下の理由から「A」評価が妥当ではないかと考える。計画では中国、台湾、韓国、ベトナムの12大学から共同研究員を募ることになっていたが、タイ、スロヴェニア、フランスの3カ国を加えて7カ国から合計34名の共同研究員（計画時の人数は不明）を動員しており、計画を上回っていること、また外来研究員として1名招聘する計画に対して2名の招聘を実現していること、さらに計画にはなかった国際シンポジウムを2回開催していること、以上の3点が上記サブプロジェクトの当該項目「B」評価を「A」評価に変更する理由である。

以上の点を踏まえて、当該項目の総合評価「A」は妥当だと考える。

5. その他特記事項

複数のサブプロジェクトを組み込んだ共同研究プロジェクトであるため、評価すべき項目や内容が入り組んでいるが、評価手順としては、各サブプロジェクトの成果実績を評価し直すことで項目ごとの自己評価を見直し、その結果サブプロジェクトそれぞれの総合評価を見直して、3つの「B」評価を「A」評価に変更し、また、統括サブプロジェクトの総合評価の「B」を「A」に修正した。

さらに、上記項目別コメント欄の2に記載したとおり、共同研究プロジェクト全体自己評価の項目の「2 大学院教育・若手研究者育成に関する計画」の自己評価「B」を「A」に修正した結果、項目別の評価の全てが「A」評価となった（自己評価は「A」が3つ、「B」が1つ）が、全項目の総合評価「A」はそのまま妥当すると判断し、外部委員評価を「A」とした。

「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」自己点検評価報告

プロジェクト名：開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張

プロジェクトリーダー：小木曾 智信

令和4年度プロジェクト自己評価

全項目の総合	A
1. 共同利用・共同研究に関する計画	S
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

I. 計画期間内の概要

1. 目的及び特色

第3期までの構築分では不足する日本語史研究資料の増補を、本プロジェクト主体による整備だけでなく、開かれた共同構築環境のもとで全国の（世界中の）研究者と連携して行う。そのために、国語研の『日本語歴史コーパス』と親和性の高い標準データ形式を共同で策定し、この形式でデータを作成するための補助ツールを開発、チュートリアルを開催して普及を図る。そのうえで、標準データ形式のデータを国語研で受け入れてコーパス検索アプリケーション「中納言」を通して公開、共同利用に供する。さらに、「昭和・平成書き言葉コーパス」科研（代表者：小木曾）と連携することで上代語から現代語まで接続した真の通時コーパスとして成立させる。

なお、『日本語歴史コーパス』の増補に際しては、フィージビリティスタディを継続して機械翻訳による現代語訳付与を模索する。

2. 年次計画（6年間のロードマップ）

	目標	実施計画
2022(R4)年度	「通時コーパス」プロジェクトの引き継ぎ OpenCHJの環境整備 日本語歴史コーパスの増補	『日本語歴史コーパス』増補作業の引き継ぎ 「OpenCHJ 中納言」サーバーの準備 標準データフォーマットの準備・調査 拡張Web茶まめ（OpenCHJ構築支援ツール）の試作 『日本語歴史コーパス』の増補（一部公開） 機械翻訳による現代語訳試行 （必要に応じONCOJの更新，以下同じ）

2023 (R5) 年度	OpenCHJ の公開開始 日本語歴史コーパスの増補	「OpenCHJ 中納言」によるデータ公開 標準データフォーマットの策定 拡張 Web 茶まめ (OpenCHJ 構築支援ツール) の公開 OpenCHJ チュートリアルを開催 『日本語歴史コーパス』増補データの公開 機械翻訳による現代語訳試行 (この頃までに方針決定し、 実用可能なら『日本語歴史コーパス』増補に現代語訳付与を 含める。短期的な実用化が難しい場合は基礎研究を継続)
2024 (R6) 年度	OpenCHJ の公開 日本語歴史コーパスの増補	「OpenCHJ 中納言」による追加データ公開 OpenCHJ チュートリアルを開催 OpenCHJ に関する書籍刊行の準備 『日本語歴史コーパス』増補データの公開
2025 (R7) 年度 (前半)	OpenCHJ の普及 日本語歴史コーパスの増補	「OpenCHJ 中納言」による追加データ公開 OpenCHJ チュートリアルを開催 OpenCHJ に関する書籍の刊行 『日本語歴史コーパス』増補データの公開
暫定評価		
2026 (R8) 年度	OpenCHJ の定着 日本語歴史コーパスの増補	「OpenCHJ 中納言」による追加データ公開 OpenCHJ チュートリアルを開催 『日本語歴史コーパス』増補データの公開
2027 (R9) 年度	OpenCHJ の総括	「OpenCHJ 中納言」による追加データ公開 OpenCHJ チュートリアルを開催

II. 令和4年度の活動

令和4年度予算額 11,495千円

1. 共同利用・共同研究に関する計画

データベース等の構築 (アクティビティ)

- (1) 『昭和・平成書き言葉コーパス』のデータ整備を科研プロジェクトと共同で行い、雑誌・ベストセラー書籍・新聞のデータ約3340万語の整備を行った。
- (2) 『日本語歴史コーパス』江戸時代編IV随筆・紀行への作品追加のほか、近代語のサブコーパスを中心にデータの修正・整備を行った。※調査データ・データベース等公開参照
- (3) OpenCHJのXML形式について検討し、「Web茶まめ」の機能拡張について設計を行った(試作は2023年度予定)。

- ・「オープンサイエンス」科研（20K20411）で構築したコーパスアノテーション環境を活用したコーパスの形態論情報修正システム「みんなごん」を実装してコーパスユーザーから修正情報を取得可能にした。
- ・『日本語歴史コーパス』簡易検索ツール「ことねり」に意味分類による検索機能を追加して公開した（12月9日）。

国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス（ONCOJ）の検索インターフェイスに辞書機能を追加し、ウェブページの更新を行なった（2023年3月）。【オープンデータ】
- (2) 法政大学能楽研究所と連携協定を結び（2022年9月）、謡曲データベース構築の共同研究の準備を行った。
- (3) 国立国会図書館（NDL ラボ）との連携協定について話し合いと準備を行った（2023年3月）。

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 語彙資源プロジェクト・言語資源開発センターと合同で見出し語を追加し語彙素 ID に対応した古文用 UniDic10 種の開発を行った（公開は「Web 茶まめ」の更新に合わせて 2023 年度に予定）。【オープンデータ】
- (2) 言語資源開発センターと合同で『昭和・平成書き言葉コーパス』（試験公開版）、『日本語歴史コーパス』増補データを中納言上で公開した。【重複】※調査データ・データベース等公開参照

異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 自然言語処理の分野の研究者を 5 名共同研究者に迎え、自然言語処理技術を活用した言語変化研究（持橋班）、古文の現代語訳研究（古宮班）を行った（論文 5、解説論文 1）。

調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 『昭和・平成書き言葉コーパス』（試験公開版）を「中納言」上で公開した（3月24日）。
- (2) 『日本語歴史コーパス』の増補データとして、「中納言」上で以下 9 件の公開を行った。
 - 『日本語歴史コーパス』平安時代編 I 仮名文学 ver. 1.2（10月31日）
 - 『日本語歴史コーパス』和歌集編 ver. 1.1（10月31日）
 - 『日本語歴史コーパス』明治・大正編 VI 落語 SP 盤 ver. 1.0（10月31日）
 - 『日本語歴史コーパス』平安時代編 I 仮名文学 ver. 1.3（3月29日）
 - 『日本語歴史コーパス』江戸時代編 IV 随筆・紀行 ver. 0.8（3月29日）
 - 『日本語歴史コーパス』明治・大正編 II 教科書 ver. 1.1（3月29日）
 - 『日本語歴史コーパス』明治・大正編 V 新聞 ver. 0.8（3月29日）

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 「通時コーパス」シンポジウム 2023 をオンライン開催し、11 件の研究発表を行ってプロジェクトの成果を発信した。参加登録 120 名、録画配信あり（3月10日）。

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 第 3 期の成果を引き継いで『コーパスによる日本語史研究 中古・中世編』（青木博史、岡崎友子、小木曾智信編、ひつじ書房）を 2022 年 10 月に刊行した。
- (2) 共同研究員による研究成果として、論文 10 本、ブックチャプター 16 本（コーパスによる日本語史研究『中古・中世編』所載分を含む）、解説論文 2 本を公表した。また、学会等において 19 本の口頭発表を行った。

データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 『日本語歴史コーパス』「中納言」オンライン講習会を「初級編」（8月23日）、「Excel 中級編」（8月26日）の 2 回行った。

- (2) NINJAL サロン（言語資源開発センターのコーパスの紹介）で『日本語歴史コーパス』の照会を行った（5月24日）。
- (3) 日本語学会においてワークショップ「みんなで直す『日本語歴史コーパス』－中納言+みんなごん－」を開催した（10月29日）。

データベース等を使った研究成果・利用実績（アウトカム）

- (1) 『日本語歴史コーパス』の中納言について、2023年度全体で、504878件の検索があった（2022年度は456147件）。
- (2) CHJを利用した研究論文数（全国学会の予稿集を含む）について、2023年3月時点での調査で、70件が確認できた（2022年度は88件確認）。

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 2023年度に開講する総研大の「言語資源学」「言語資源学演習」で『日本語歴史コーパス』を活用するためのシラバス作成・授業準備を行った。

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) プロジェクト非常勤研究員を2名（3月は3名）雇用して『日本語歴史コーパス』に関する知識、活用方法を習得させた。【若手支援】

大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加

- (1) プロジェクトに共同研究員として大学院生2名、学術振興会特別研究員（PD）1名を参加させ『日本語歴史コーパス』を活用した研究の指導を行った。【若手支援】

若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 「通時コーパス」シンポジウム2023で大学院生等の若手研究者の研究発表を6件実施した（大学院生3件、プロジェクト非常勤研究員3件）。【若手支援】

若手研究者への研究費・発表旅費の支援

- (1) EMNLP2022（ドバイ）における口頭発表（<https://aclanthology.org/2022.emnlp-main.104/>）のため、大学院生（共同研究員の指導学生）に対する旅費の支援を行った（12月）。その他、プロジェクト非常勤研究員に対してオンライン参加のための学会参加費の支援を行った。【若手支援】

若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 『日本語歴史コーパス』「中納言」オンライン講習会を「初級編」（8月23日）、「Excel 中級編」（8月26日）の2回行った。【重出】※データベース等に関する講習会・講演会参照

3. 地域・社会との連携に関する計画

産業界との連携

- (1) 小学館出版局との連携協定の下で「新編日本古典文学全集」を活用して『日本語歴史コーパス』の更新を行い、JapanKnowledge 本文へのリンクを継続した。

一般向け講義・講演会・フォーラム等

- (1) 国語研オープンハウスで「通時コーパス」に関連する一般向け発表を2件行った（9月9日）。
- (2) 言語学レクチャーシリーズ「Vol.19 コーパスを使って日本語の歴史を探る」をYouTubeで一般公開した（12月）。

研究成果の社会への還元

- (1) 日本語の歴史に関する解説・監修をNHKのテレビ番組3件で行った（4月28日、9月6日、11月4日）。

4. グローバル化に関する計画

海外の大学との連携等

- (1) オックスフォード大学と連携して ONCOJ のアップデートを行った。【重出】※「国内外の大学や研究機関との組織的な連携等」参照

英語による研究成果の発信等

- (1) 『日本語歴史コーパス』を活用して、共同研究員による国際会議2件（PACLIC, EMNLP）、英語論文1本の発表を行った。
- (2) 『日本語歴史コーパス』の増補分について英語版ページを作成・更新した。

「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」評価報告

令和4年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

本プロジェクトは、第3期の「通時コーパス」プロジェクトを引き継ぎ、新たに開かれた共同構築環境を整備して通時コーパスを活用しようとするもので、本年度は、その初年度に当たる。

本プロジェクトの軸となる『日本語歴史コーパス』は、既に、日本語研究の諸分野において、必須の研究資源となっており、そのことは、同コーパスの1年間の検索クエリ数が50万件を超え、同コーパスを活用した研究論文が今年度だけで70件に及ぶことから窺える。

本年度には、自己点検報告書に列挙される通り、複数のサブコーパスを追加公開・更新し、同コーパスの増補がなされたことに加え、本プロジェクトのリーダーと共同研究員が中心に編まれた書籍『コーパスによる日本語史研究 中古・中世編』の刊行、ユーザーからの修正情報を集積してのコーパス内容の更新等、幾つかの優れた成果が見られている。

《評価項目》

1. 共同利用・共同研究について

総括にも示した通り、本プロジェクトの軸となる『日本語歴史コーパス』について、複数のサブコーパスを追加公開・更新しているが、中でも、歴史的録音資料の音声データともリンクさせた『日本語歴史コーパス』明治・大正編VI落語SP盤 ver. 1.0の構築・公開は、歴史コーパスの拡張の試みとして、大いに注目・評価されるべきであろう。

通時コーパスを活用した日本語史研究の推進としては、本プロジェクトのリーダー・共同研究員たちによって編まれた、青木博史・岡崎友子・小木曾智信編『コーパスによる日本語史研究 中古・中世編』ひつじ書房（2022年10月）の刊行が、特筆すべき共同研究成果といえよう。

また、本プロジェクトに関連する科研費（20K20411）で開発したコーパスの形態論情報修正システム「みんなごん」を活用して、コーパスユーザーから修正情報を集積し、『日本語歴史コーパス』の修正に活用したことも、新たな共同利用・共同研究の可能性を示したものとなっている。

2. 教育・人材育成について

『日本語歴史コーパス』「中納言」オンライン講習会を複数回実施したこと、大学院生2名学術振興会特別研究員（PD）1名をプロジェクト共同研究員として参加させたこと等、教育・人材育成にも精力的に取り組んでいる。

（『日本語歴史コーパス』は、大学等、国内外の諸機関において、教育研究指導に活用されていると思われるが、それらの成果の収集、本プロジェクト推進への反映も、有益な試みとなるかと思われる。）

3. 社会連携・社会貢献について

出版社・小学館との協定の下で、『日本語歴史コーパス』を更新し、同社が展開しているオンライン辞書・事典検索サイト Japan Knowledge 本文へのリンクを継続する等の活動を行っている。

なお、本プロジェクトのリーダー等は、NHKのテレビ番組等で、日本語の歴史に関する解説・監修を行なっているが、その際、『日本語歴史コーパス』の活用へのアピール等を織り込むことも、社会貢

献の一環として、考えられるかも知れない。

4. 国際連携・国際発信について

英国オックスフォード大学と連携しての「オックスフォード NINJAL 上代日本語コーパス」のアップデート、『日本語歴史コーパス』の増補分について英語版ページを作成・更新等を実施し、国際連携・国際発信についても、一定の成果を示しつつある。

5. その他特記事項

「共同利用・共同研究」項目でも言及したが、『日本語歴史コーパス』中に、文献資料群に加え、歴史的録音による音声データを織り込んだことは、言語史資源の活用・拡張の観点から、大いに注目すべき試みであり、今後、それを活かした研究の蓄積が期待されよう。

また、これも同項目で取り上げた「みんなごん」を活用した『日本語歴史コーパス』の修正も、新たな試みとして注目されるものであろう。

令和4年度 センターに関する評価

- 言語資源開発センター
- 共同利用推進センター

「言語資源開発センター」自己点検評価報告

センター名：言語資源開発センター

センター長：山崎 誠

令和4年度自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	C

I. 令和4年度活動概要

令和4年度予算額 48,131 千円

令和4年度 成果の概要

令和4年度は主に第4期の目標であるオープンデータ、オープンサイエンスを推進するための活動を行った。具体的には、以下のとおり。

1. 共同利用・共同研究に関する計画

- (1) 複数のプロジェクトと共同で形態素解析用辞書 UniDic を更新した。
- (2) コーパス検索ツール「中納言」を安定的に運用し、年度末には、データの修正（名大会話コーパス）、追加（日本語歴史コーパス・日本語諸方言コーパス）、及び機能拡張を行った。利用者数は年間で4万人ほど増加した。
- (3) 外部公募の共同利用型共同研究（C）（言語資源型）を8件実施し、所外研究者との交流を図った。
- (4) 言語資源に関する知識・技術の普及を図るため、言語資源チュートリアル、「中納言」講習会を複数のプロジェクトと連携して開催した。
- (5) 言語資源開発センター専任職員・研究員による研究発表11件、データ公開1件を行った。目標をやや下回った。

2. 大学院教育・若手育成に関する計画

連携大学院で言語資源に関する知見・技術の普及を図った。また若手研究者への発表の機会の確保や研究交流の場として「言語資源ワークショップ2022」を開催した。発表の実績を残すために、論文とポスターの両方を『言語資源ワークショップ2022 発表論文集・ポスター集』としてまとめ国語研の学術情報リポジトリに登録した。

3. 地域・社会との連携に関する計画

コーパス検索ツール「中納言」の大学等での活用を促進するために、授業用アカウントを発行した（126件、対象者（受講者）は4133名）。

4. グローバル化に関する計画

英文 HP の充実を図ったが利用成果のページを作成するにとどまった。

5. その他

「中納言」のユーザグループのメーリングリストを作成し運用を開始した。

II. 令和4年度の項目ごとの状況

1. 共同利用・共同研究に関する計画

データベース等の構築（アクティビティ）

- (1) 形態素解析用電子化辞書 UniDic として以下3つの整備を行った。
 - ①古文用の UniDic 10 種 (ver. 2022-03) を更新・新規公開した。(2022 年 4 月 18 日)
「通時コーパス」プロジェクトと連携
 - ②現代語用 UniDic v3.1.1 (書き言葉用, 話し言葉用) を公開 (3.1.0 の修正版)
(2022 年 9 月 6 日)
 - ③現代語用の UniDic v2023.3 (書き言葉用, 話し言葉用) を公開 (2023 年 3 月 24 日)
<https://clrd.ninjal.ac.jp/unidic/>
- (2) 言語資源に対するメタ情報やアノテーションの標準化のための規格については、検討を行ったが実施には致らなかった。
- (3) 「分類語彙表データベース」に収録されている多義語に対して、代表的な意味を特定したデータを作成した (公開は令和5年度)。また、BCCWJ 短単位語彙表の上位語 1000 語に対して分類語彙表番号を付与した (公開は令和5年度)。

国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 外部公募の共同利用型共同研究 (C) を 8 件実施した。これは研究所が保有する言語資源を利用して研究を行うものである。使用コーパスは、BCCWJ 7 件、CSJ 2 件、CEJC 3 件。いずれもセンターの併任教員がコーディネータを務めている。

<https://www.ninjal.ac.jp/research/cr-project/project-4/>

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 「中納言」講習会の開催 (重出「データベース等に関する講習会・講演会」参照)
- (2) 言語資源ワークショップの開催 (8 月 30~31 日) (重出「公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム」参照)
- (3) コーパス構築に関わるプロジェクトと連携して各種コーパスのデータ修正等を実施した (重出「調査データ・データベース等公開」参照)

調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) コーパス検索ツール「中納言」について次の通りデータ更新等を実施した
 - ①名大会話コーパス「中納言」データ修正 (3 月) ※多世代会話コーパス P と連携
 - ②日常会話コーパス「中納言」メタ情報修正 (3 月) ※多世代会話コーパス P と連携
 - ③日本語歴史コーパス「中納言」データ追加 (3 月) ※通時コーパス P と連携
 - ④日本語諸方言コーパス「中納言」データ追加 (3 月) ※危機言語 P と連携
 - ⑤「中納言」インターフェース機能拡張 (3 月)
 - ⑥「まとめて検索」機能拡張 (2023 年 3 月)

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 若手研究者への発表の機会の確保や研究交流の場として「言語資源ワークショップ 2022」をオンラインで開催した(8月30～31日)。参加者総数198名(うち、国外機関からの参加11名、学生50名)。発表55件(口頭14件、ポスター39件、招待講演2件)。発表の実績を残すために、発表論文及びポスターを『言語資源ワークショップ 2022 発表論文集・ポスター集』としてまとめ国語研の学術情報リポジトリに登録した(2023年3月)。
- (2) 一般の人を対象とするNINJAL フォーラム「語彙資源の構築と活用」をオンラインで開催した(2023年2月18日、参加者214名)。
- (3) 若手研究者を主対象とするNINJAL チュートリアル「『分類語彙表』による日本語研究」をオンラインで開催した(8月6日、参加者62名)。

書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）

- (1) 発表12件(筆頭2件)、論文0件、データ公開1件。投稿中、投稿予定、掲載予定のものを入れると発表15件(筆頭5件)、論文1件(筆頭1件)、データ公開1件。いずれも年度内に発表・掲載のもの。

データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) コーパスオンライン検索システム「中納言」の利用講習会を、コーパス構築に関わるプロジェクトと共催で次の通り5回開催した。
 - 「中納言」講習会(BCCWJ)(7月28日、参加者61名)
 - 「中納言」講習会(CHJ)(8月23日・26日、参加者45名・65名)
 - 「中納言」講習会(I-JAS)(9月17日、参加者45名)
 - 「中納言」講習会(COJADS)(10月15日、参加者33名)
 - 「中納言」講習会(CEJC)(11月5日、参加者61名、参加者140名)
- (2) 言語資源チュートリアル(第1回・書き言葉編)をセンター主催で8月4日に開催した(参加者47名)。

データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 講習会などを通して「中納言」の利用を促進したことにより、利用者が昨年度より60,708名増加し247,223名となった。
<https://clrd.ninjal.ac.jp/data.html>

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等

- (1) 教員1名が連携大学院(一橋大学言語社会研究科)において指導(併任教員による)。

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 非常勤研究員3名を雇用した。それぞれ、「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」「消滅危機言語の保存研究」のデータ整備に貢献した。

若手研究者への発表の機会の提供

- (1) 言語資源ワークショップ 2022 を開催した(8月30～31日)(重出「公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム」参照)

若手研究者向けのチュートリアル等

- (1) 若手を主対象とする「中納言」講習会を5回開催した。(重出「データベース等に関する講習会・講演会」参照)

3. 地域・社会との連携に関する計画

地域・社会との連携

- (1) コーパス検索ツール「中納言」の大学等での活用を促進するために、授業用アカウントを発行した(126件、対象者(受講者)は4216名)。

一般向け講義・講演会・フォーラム等

- (1) 6月25日、26日に放送大学「コーパス日本語学概論」を実施した(受講者12名)。

4. グローバル化に関する計画

英語による研究成果の発信等

- (1) コーパスの利用成果のページを追加した(2023年2月)
<https://clrd.ninjal.ac.jp/data.html>

5. その他

- (1) コーパス検索ツール「中納言」のユーザグループのメーリングリストを作成し2023年1月に運用を開始した。

「言語資源開発センター」評価結果

令和4年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施している

プロジェクトは全体的にはほぼ計画通りに進捗している。一部の目標については達成されていない点が課題となっているが、多くの分野で所期の成果が上がっている。

共同利用・共同研究はほぼ計画通り進捗しているが、メタ情報やアノテーションの標準化の規格策定が未達で、論文の発表も予定数に達していないのは課題である。

教育・人材育成については、計画通りに進捗し、言語資源の知見・技術の普及、データ整備への貢献、若手研究者への支援などを行なった。

社会連携・社会貢献は計画通り進捗し、「中納言」の授業用アカウントの発行や放送大学でのコース実施などを行なった。

国際連携・国際発信は遅延が発生し、英文 HP の利用成果のページ作成にとどまっている。

その他は計画通りに進捗し、「中納言」のユーザグループのメーリングリストの運用を始めた。

若干の未達はあるものの、全体としてはほぼ計画どおりに実施されていると認め、B 評価とする。

《評価項目》

1. 共同利用・共同研究について

ほぼ計画通り進捗している。古文用および現代語用の UniDic の更新・公開、8 件の共同利用型共同研究の実施、言語資源ワークショップと NINJAL フォーラムの開催、15 件の研究発表、5 回の「中納言」利用講習会の開催に加えて、「中納言」の利用者が 60,708 名増加するなど、多くの活動に関して成果が上がっている。また、分類語彙表データベースのデータ作成と分類語彙表番号の付与は行われ、公開が予定されている。「中納言」のデータ更新と機能拡張も行われ、言語資源チュートリアルも開催された。このように、計画されたアクティビティとアウトプットの多くは達成され、プロジェクトの目標達成に向けてほぼ順調に進捗していると認められる。ただし、メタ情報やアノテーションの標準化の規格策定は未達であり、予定の論文 2 件に対して 1 件しか達成できなかった点も課題である。

2. 教育・人材育成について

計画通りに進捗している。教員 1 名が連携大学院（一橋大学言語社会研究科）で指導し、言語資源に関する知見・技術の普及を図った。非常勤研究員 3 名を雇用し、「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」「消滅危機言語の保存研究」のデータ整備に貢献した。また若手研究者への発表の機会の確保や研究交流の場として「言語資源ワークショップ 2022」を開催した。発表の実績を残すために、論文とポスターの両方を『言語資源ワークショップ 2022 発表論文集・ポスター集』としてまとめ国語研の学術情報リポジトリに登録した。計画通り進捗している。若手を主対象とする「中納言」講習会を 5 回開催した。

3. 社会連携・社会貢献について

計画通りに進捗している。コーパス検索ツール「中納言」の大学等での活用を促進するために、授業用アカウントを 126 件(受講者は 4133 名)発行した。また、放送大学「コーパス日本語学概論」を

実施した（受講者 12 名）。

4. 国際連携・国際発信について

計画の実施が遅延している。英文 HP の充実を図ったが利用成果のページを作成するにとどまった。

5. その他特記事項

計画通りに進捗している。「中納言」のユーザグループのメーリングリストを作成し運用を開始した。

「共同利用推進センター」自己点検評価報告

センター名：共同利用推進センター

センター長：石黒 圭

令和4年度自己評価

全項目の総合	B
1. 共同利用・共同研究に関する計画	B
2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画	B
3. 地域・社会との連携に関する計画	B
4. グローバル化に関する計画	B

I. 令和4年度活動概要

令和4年度予算額 34,100 千円

令和4年度 成果の概要

1. 共同利用・共同研究に関する計画

- (1) オープンアクセス方針に沿って「国立国語研究所学術情報リポジトリ」での研究成果の登録・公開を推進した。今年度追加219件、総数3,020件となった。
- (2) 日本語研究・日本語教育研究分野の図書・雑誌論文等の書誌情報を整備した。「日本語研究・日本語教育文献データベース」に5,742件を追加登録し、総データ件数は280,504件となった。
- (3) 研究図書室収蔵図書資料の整備を進め、「国立国語研究所蔵書目録データベース」を増補拡充した。今年度の図書の受入数は冊子のみで1,542件、電子ブックを含めると1,641件となった。
- (4) 貴重図書等のデジタル化を進め、「日本語史研究資料 [国立国語研究所蔵]」に13件追加公開した。
- (5) 研究資料室収蔵資料目録の整備を進め、「国立国語研究所研究資料室収蔵資料」データベースを増補拡充した。資料群の新規公開は18件、収蔵資料目録試行版の追加登録は1,809件となった。
- (6) 研究資料室収蔵資料の保全と再利用のため、調査票等の紙媒体資料のデジタル撮影(67,382枚)と音声・映像資料の媒体変換(724点)を行った。また、所内専用試視聴システム「所蔵音声・映像データベース」を増補拡充し(音声173点、映像46点)、共同利用環境を整備した。
- (7) 国文学研究資料館の「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」に協力し、国立国語研究所が所蔵する歴史的典籍の画像データ化の準備を行った。
- (8) 併任教員4名を配置し、言語資源開発センターとの連携のもと、構築済みのコーパスの管理・公開体制を整えた。
- (9) 日本語教育映像教材シリーズの映像データ(mp4形式)の申込制による配布を開始し、国内外から27件の利用申込があった。
- (10) 国立国語研究所が実施した社会調査の回答データを公開した。また、語彙表データを公開した。
 - ・外来語に関する意識調査(全国調査)データベース ver.1.0(2023年3月30日公開)
 - ・『日独仏西基本語彙対照表』データ(2023年3月1日公開)
- (11) 第3期中期目標期間中に実施した研究課題を中心に研究資料12件を受け入れ、研究資料室に来室利用ができるよう資料整備を進めた。

(12) 情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設社会データ構造化センターとの共催で、2022年9月12日に2022年度共同利用セミナーをWeb開催で行い、研究資料室の資料3点の紹介を行った。参加者は108名であった。

(13) 所外で研究資料室の資料の紹介を3件行った（日本語教育学会春季大会、世論調査協会研究大会、図書館総合展）。

(14) データベース等に多くのアクセスを得た。

- ・国立国語研究所学術情報リポジトリ ダウンロード回数 26.3万
- ・日本語研究・日本語教育文献データベース セッション数 19万
- ・日本語史研究資料〔国立国語研究所蔵〕 セッション数 2.2万
- ・国立国語研究所研究資料室収蔵資料データベース セッション数 5,700
- ・共同利用推進センター配布コンテンツ セッション数 3.1万
- ・雑誌「国語学」全文データベース セッション数 3.5万
- ・研究資料室の閲覧利用者 57名

2. 大学院教育・若手育成に関する計画

(1) 「日本語研究・日本語教育文献データベース」の開発、研究資料室収蔵資料の整備と利活用促進、社会調査の回答データの整備・公開のため、プロジェクト非常勤研究員を6名雇用した。

3. 地域・社会との連携に関する計画

(1) 『国立国語研究所論集』（オンラインジャーナル）を2回発行した。

4. グローバル化に関する計画

(1) 韓国日本語教育学会、韓国日本語學會と連携し、韓国国内で刊行されている日本語学関連文献の情報の収集を継続した。

(2) 日本語学的・言語学的にパイオニア的価値を持ち、その評価がほぼ確立した日本語論文を英訳し、Pioneering Linguistic Works in Japanとして3点追加公開した。

5. その他

(1) 研究資料（研究データを含む）及び研究情報の共同利用体制を整備し、2022年度共同利用型共同研究の採択課題11件に対して、研究資料及び研究情報を提供した。

(2) 言語系学会連合との覚書に基づき、言語系学会連合関連の二つの学術誌に対して研究文献データの先行提供を行った。

II. 令和4年度の項目ごとの状況

1. 共同利用・共同研究に関する計画

データベース等の構築（アクティビティ）

(1) 国立国語研究所の研究成果のオープンアクセスを加速するため、オープンアクセス方針に沿って研究成果の公開を推奨し、「国立国語研究所学術情報リポジトリ」での登録・公開を推進した。今年度追加219件、総数3,020件となった。【オープンアクセス】

<https://repository.ninjal.ac.jp/>

(2) 日本語研究・日本語教育研究の共同利用に供するため、当該分野の図書・雑誌論文等の書誌情報を整備し、「日本語研究・日本語教育文献データベース」に5,742件を追加登録し、総データ件数は280,504件となった。また、大学学術機関リポジトリ及び学協会誌公開プラットフォームに掲載された論文本文PDFへのリンク件数は37,603件である。【オープンアクセス】

<https://bibdb.ninjal.ac.jp/bunken/ja/>

- (3) 研究図書室収蔵図書資料の利活用のため、図書資料の整備を進め、「国立国語研究所蔵書目録データベース」を増補拡充した。今年度の図書の入受数は冊子のみで1,542件、電子ブックを含めると1,641件となった。

<https://libgw.ninjal.ac.jp/drupal/>

- (4) 国立国語研究所が所蔵する貴重図書等のデジタル化を進め、「日本語史研究資料〔国立国語研究所蔵〕」に13件追加公開した。なお、2022年度に公開した「国民之友」画像は、情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設人文学オープンデータ共同利用センターとの連携事業として作成・公開したものである。【オープンデータ】

<https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjalddl/>

- (5) 研究資料室収蔵資料の利活用のため、収蔵資料目録の整備を進め、「国立国語研究所研究資料室収蔵資料」データベースを増補拡充した。資料群の新規公開は18件、収蔵資料目録試行版の追加登録は1,809件となった。

<https://rnr.ninjal.ac.jp/>

- (6) 研究資料室収蔵資料の保全と再利用のため、調査票等の紙媒体資料のデジタル撮影（67,382枚）と音声・映像資料の媒体変換（724点）を行った。また、所内専用試視聴システム「所蔵音声・映像データベース」を増補拡充し（音声173点、映像46点）、共同利用環境を整備した。

<http://mereco/>

国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 国文学研究資料館の「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」に協力し、国立国語研究所が所蔵する歴史的典籍の画像データ化の準備を行った。

他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）

- (1) 併任教員4名を配置し、言語資源開発センターとの連携のもと、構築済みのコーパスの管理・公開体制を整えた。

調査データ・データベース等公開（アウトプット）

- (1) 日本語教育映像教材シリーズの映像データ（mp4形式）の申込制による配布を2022年5月26日に開始し、国内外から27件の利用申込があった。

<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/evmids/>

- (2) 国立国語研究所が実施した社会調査の回答データを公開した。また、語彙表データを公開した。

・外来語に関する意識調査（全国調査）データベース ver.1.0（2023年3月30日公開）【オープンデータ】

https://mmsrv.ninjal.ac.jp/gairaigo_zenkoku/

・『日独仏西基本語彙対照表』データ（2023年3月1日公開）【オープンデータ】

<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/fvjgfs/>

- (3) 第3期中期目標期間中に実施した研究課題を中心に研究資料12件を受け入れ、研究資料室に入室利用ができるよう資料整備を進めた。

公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）

- (1) 情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設社会データ構造化センターとの共催で、2022年9月12日に2022年度共同利用セミナーをWeb開催で行った。参加者は108名（うち海外機関所属者数4名、学生数10名）であった。

https://www.ninjal.ac.jp/events_jp/20220912a/

データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) 2022年9月12日，2022年度共同利用セミナー（Web開催，情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設社会データ構造化センターとの共催）において，「日本語教育映像教材シリーズ」 「社会調査回答データ」「1948年読み書き能力調査資料」の紹介を行った。
- (2) 2022年5月22日，国立国語研究所日本語教育映像教材シリーズ公開についての説明会，2022年度日本語教育学会春季大会
https://www.nkg.or.jp/event/taikai/20220521_2161929.html
- (3) 2022年11月11日，社会調査型言語調査資料の保存と活用，2022年度世論調査協会研究大会
<http://japor.or.jp/c20221111/>
- (4) 2022年11月1ヶ月間，オンライン上で開催された「図書館総合展2022」に，国立国語研究所研究資料室が出展し，研究資料室の活動内容と各種データセットの概要の紹介を行った。
<https://www.libraryfair.jp/poster/2022/77>

データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）

- (1) アクセス数等
国立国語研究所学術情報リポジトリ ダウンロード回数 26.3万
日本語研究・日本語教育文献データベース セッション数 19万
日本語史研究資料 [国立国語研究所蔵] セッション数 2.2万
国立国語研究所研究資料室収蔵資料データベース セッション数 5,700
共同利用推進センター配布コンテンツ セッション数 3.1万
雑誌「国語学」全文データベース セッション数 3.5万
- (2) 研究資料室の閲覧利用者 57名

2. 大学院教育・若手研究者育成に関する計画

プロジェクト非常勤研究員の雇用

- (1) 「日本語研究・日本語教育文献データベース」の開発，研究資料室収蔵資料の整備と利活用促進，社会調査の回答データの整備・公開のため，プロジェクト非常勤研究員を6名雇用した。

3. 地域・社会との連携に関する計画

研究成果の社会への還元

- (1) 『国立国語研究所論集』（オンラインジャーナル）を2回発行した（23号は2022年7月，24号は2023年1月）。論文の関連データは毎号あるとは限らないが，23号に該当1件あり，ライセンスを明示して公開した。【オープンアクセス】
<https://www.ninjal.ac.jp/info/publication/papers/23/>
<https://www.ninjal.ac.jp/info/publication/papers/24/>

4. グローバル化に関する計画

海外の大学との連携等

- (1) 韓国日語教育学会，韓国日本語學會と連携し，韓国国内で刊行されている日本語学関連文献の情報の収集を継続した

英語による研究成果の発信等

- (1) 日本語学的・言語学的にパイオニア的価値を持ち，その評価がほぼ確立した日本語論文を英訳し，Pioneering Linguistic Works in Japanとして3点追加公開した。【オープンアクセス】
<https://www2.ninjal.ac.jp/plwj/>

5. その他

- (1) 研究資料（研究データを含む）及び研究情報の共同利用体制を整備し、2022年度共同利用型共同研究の採択課題11件に対して、研究資料及び研究情報を提供した。
- (2) 言語系学会連合との「日本語研究・日本語教育文献データベース」掲載データのWeb公開前の先行提供に関する覚書に基づき、『日本語の研究』（展望記事執筆のため）、及び『日本語文法史研究』（日本語文法史研究文献目録作成のため）に、研究文献データの先行提供を行った。

「共同利用推進センター」評価結果

令和4年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施している

全体として計画どおりに実施していると認められる。

主な活動である共同利用・共同研究において数々の取り組みを進め、公開したデータベースやコンテンツが広く活用されている。これらは、日本語研究・日本語教育の発展に寄与し、日本の言語文化資産の保存・活用・普及にも貢献していると考えられる。また、教育・人材育成、社会連携・社会貢献、国際連携・国際発信等についてもプロジェクトが予定通り進行している。

《評価項目》

1. 共同利用・共同研究について

計画通りに進捗している。オープンアクセス方針に沿った研究成果の登録・公開、書誌情報や貴重図書デジタル化、収蔵資料の整備・公開・保全、社会調査のデータ公開、共同研究の推進、コーパスの管理・公開、映像教材の配布、研究資料の受け入れと整備、共同利用セミナーの開催、資料の外部での紹介などの取り組みにより、総データ件数、受入図書数、デジタル化資料数、公開データ数、セミナー参加者数、データベースのアクセス数など、各分野での成果が顕著に向上した。特に、学術情報リポジトリのダウンロード回数が26.3万、日本語研究・日本語教育文献データベースのセッション数が19万に達するなど、国内外からの関心が高まっていることは特筆に値する。また、国文学研究資料館の「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」への協力や、情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設社会データ構造化センターとの共催セミナーなど、他機関との連携も進んでいる。

2. 教育・人材育成について

計画通りに進捗している。「日本語研究・日本語教育文献データベース」の開発、研究資料室収蔵資料の整備と利活用促進、社会調査の回答データの整備・公開のため、予定通り、プロジェクト非常勤研究員を6名雇用した。

3. 社会連携・社会貢献について

計画通りに進捗している。『国立国語研究所論集』（オンラインジャーナル）を予定通り2回発行した。いずれも国語研のサイトで一般公開している。その際に論文の関連データがある場合は、ライセンスを明示している。

4. 国際連携・国際発信について

計画通りに進捗している。韓国日語教育学会、韓国日本語學會と連携し、韓国国内で刊行されている日本語学関連文献の情報の収集を継続した。日本語学的・言語学的にパイオニア的価値を持ち、その評価がほぼ確立した日本語論文を英訳し、Pioneering Linguistic Works in Japanとしてオープンアクセスで3点追加公開した。

5. その他特記事項

計画通りに進捗している。研究資料（研究データを含む）及び研究情報の共同利用体制を整備し、2022 年度共同利用型共同研究の採択課題 11 件に対して、研究資料及び研究情報を提供した。また、言語系学会連合との「日本語研究・日本語教育文献データベース」掲載データの Web 公開前の先行提供に関する覚書に基づき、『日本語の研究』（展望記事執筆のため）、及び『日本語文法史研究』（「日本語文法史研究文献目録」作成のため）に、研究文献データの先行提供を行った。

令和4年度管理業務に関する評価

業務運営の改善及び効率化に関する取組

1. 組織運営の改善に関する取組

- ・研究所の管理運営に関する重要事項について審議する運営会議については、毎回（年3回開催）議事要旨を国語研ウェブサイトに掲載した。
- ・新型コロナウイルス感染症への対策のため業務運営の改善を実施すべく、特例として在宅勤務を基本としていたが、今後、コロナ禍が続いても円滑な業務が運営できるよう、週あたりの在宅勤務日数制限がある在宅勤務規程による運用に移行する準備を開始し、在宅勤務の運用に関する申し合わせについて検討を行った。

2. 教育研究組織の見直し（強化）に関する取組

- ・総合研究大学院大学「日本語言語科学コース」博士後期課程（3年）の令和5年4月の開設に向け、「日本語言語科学コース準備委員会」、「入学者選抜委員会」を立ち上げ、制度設計、広報の方法等について検討を行った。また、研究所で行う大学院教育の紹介ページを8月にウェブサイトに新たに公開するとともに、関連学会において「総合研究大学院大学日本語言語科学コース」のブースを出展した。また、9月には大学院説明会をオンライン及び対面で合計3回開催し40名の参加を得るなど、積極的に広報活動に取り組んだ結果、募集人員を上回る4名が入学した。
- ・機関拠点型基幹研究プロジェクトについては、各班の進捗状況を管理するために「共同研究プロジェクト推進会議」を毎月開催し、各班の活動報告、データベース構築計画・公開状況、合同シンポジウムの企画などを行い、相互に連携して研究活動を進めるとともに、自己点検・評価委員会を設置し、プロジェクト全体の自己点検・評価を行った。
- ・機関拠点型プロジェクトの6年間の計画と初年度実績を紹介するために、全ての班が連携してNINJALシンポジウム「言語資源学の創成：開かれた言語資源による日本語研究」を令和4年12月10日にオンラインで開催した。
- ・言語資源開発センターを中核とする体制のもと、コーパス構築を担当する各班のメンバーが参加する「プロジェクト横断コーパス会議」を毎月開催し、コーパス構築法の共有化や問題の検討、コーパス講習会の企画など、計画的・体系的に言語資源開発を進めた。
- ・国際発信力を高めるために、国際連携室が支援して、韓国日本語學會及び韓国日語教育学会と共催で海外におけるチュートリアル授業（韓国）をオンラインにて令和4年8月6日に実施した。
- ・謡曲データベース構築に関する共同研究を進めるために法政大学能楽研究所と令和4年9月に学術交流協定を、また、第4期の体言化プロジェクトにおいて、インド諸語の体言化研究のハブとして位置づけるため、これまでも研究交流のあったデカン・カレッジ・ポスト・グラデュエイト・アンド・リサーチ・インスティテュートと令和4年7月に学術交流協定を締結するなど、大学との連携体制を強化した。
- ・IR推進室では、研究力向上に資するために研究成果に関するデータの収集・管理・分析を行うとともに、自己点検・評価委員会等に情報を提供した。また収集したデータに基づき国立国語研究所年報を編集・刊行した。

3. 事務等の効率化・合理化に関する取組

- (1) 研究所における事務組織の見直し、事務等の効率化・合理化について

- ・新たに総研大業務が研究推進課の業務に加わったことから、同課の業務について見直しを行い、研究支援グループで実施していた、出張手続き等の業務について新たに新設した研究支援室の業務とすることとし、教員への対応の迅速化・効率化を図った。
- ・研究所内で実施している会議については、コロナ禍の状況を踏まえ、引き続きオンライン開催を原則としたが、令和5年度に予定されている新型コロナウイルス感染症の法的位置付けの「5類」以移行に向けて、オンラインと対面を合わせたハイブリッドでの開催を試行するなど、円滑な運営に努めた。
- ・施設管理業務及びネットワーク管理業務について、引き続き外部委託を行い、業務の効率化を図った。

(2) 機構内機関及び機構外機関との業務の共同実施について

- ・コピー用紙の調達について、機構内3機関（本部・国文研・国語研）と2機構6機関の計9機関で共同調達を実施した。
- ・立川地区（人間文化研究機構国文研、国語研及び情報システム研究機構極地研、統数研の2機構4機関）で、自販機設置運営業務を実施し、116千円の手数料収入を得た。（5年契約3年目）

財務内容の改善に関する取組

1. 外部研究資金、寄付金その他の自己収入の増加に関する取組

- ・令和4年度に配分された科研費（新規及び継続課題）に研究代表者又は研究分担者として、常勤研究者27名のうち24名が参加した（参加率88.9%、新規課題採択率55.6%）。
- ・4機関合同（国文研、国語研、極地研、統数研）科研費説明会（R4.6.15）に教職員16名を、人間文化研究機構科学研究費助成事業（科研費）説明会（R4.7.22）に9名が参加した。
- ・外部資金についての公募情報を所内グループウェアに掲載するとともに、全研究者宛てに電子メールで周知した。特に、科研費については、科学研究費助成事業の採択率向上のために、申請者が他の研究分野を含む研究者と研究計画・方法について意見交換を行う「科研費申請準備会議」（R4.8.3, 9.7-8）を実施し、若手研究者の育成にも配慮しつつ科研費申請を奨励・支援した（令和5年度分申請20件）。（令和4年12月末現在）
- ・研究成果を一般に向けて伝えるために2021年11月に刊行した書籍『日本語の大疑問-眠れなくなるほど面白いことばの世界』（幻冬舎新書）が重版（8刷、9刷、計8,000部。累計発行部数71,000部）され、令和4年度は電子書籍含めて約131万円の収入があった。これは国語研に関わる所内外の研究者が執筆し、ポータルサイト「ことば研究館」に掲載した記事を再編集したもので、電子書籍、オーディオブックでも継続して配信されている。
- ・「日本語話し言葉コーパス」、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」、「日本語日常会話コーパス」及び「日本語諸方言コーパス」の有償頒布を行い、総額2,713万円の収入を得た。

2. 経費の抑制に関する取組

経費の抑制については、契約方法の見直しや、外部委託等の促進を以下のとおり実施した。

- ・所内各室廊下やエレベータ前、トイレに電力節減、夏期には軽装励行のポスターを掲示し、教職員に対してコスト削減・省エネ推進の啓発を図った。また、例年どおり4階テラスに遮光及びグリーンカーテンを設置し省エネを図った。
- ・警備業務、空調設備保守点検業務、消防用設備等点検業務、施設常駐管理業務の期間満了に伴い、前回同様複数年契約による入札を実施し、経費の抑制及び業務の効率化を図った。
- ・会議のペーパーレス化については、コロナ禍を機とした所内会議のオンライン化と、ハイブリッド開催時のタブレット端末の活用により、印刷等消耗品の削減と労務の軽減を図った。

教育及び研究並びに組織及び運営の状況について自ら行う点検及び評価並びに当該状況に係る情報の提供に関する取組

1. 評価の充実に関する取組

- ・所内に自己点検・評価の実施，評価結果の公表及び活用に関することを目的とした自己点検・評価委員会（委員9人）と研究所が実施する共同研究プロジェクトの推進及び連携・調整を図ることを目的とした共同研究プロジェクト推進会議を連携して開催し，PDCA サイクルを管理している。
- ・自己点検及び評価の検証を行うための所外の専門家9名で構成される外部評価委員会による機関拠点型基幹研究プロジェクトの自己点検評価・外部評価を実施した。
- ・IR 推進室では，研究力向上に資するために研究成果に関するデータの収集・管理・分析を行うとともに，自己点検・評価委員会等に情報を提供した。【再掲】

2. 情報公開や情報発信等の推進に関する取組

- ・国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書に加えて，外部評価委員会による研究系・センターの令和3年度及び第3期中期目標期間における実績及び組織運営の評価をまとめた外部評価報告書を，ウェブサイト及び『国立国語研究所年報』を通じて公開した。
- ・研究所の広報戦略に基づき，国語研ポータルサイト「ことば研究館」，ソーシャルメディアによる情報発信，一般に向けて発信するフォーラム・イベント（表1）など，多様な機会・メディアを通じて研究所における研究成果や活動を発信した。昨年度に引き続き一般向けのイベントであるオープンハウスやニホンゴ探検をオンライン開催し，13件の動画コンテンツを公開したところ，9,648件の参加（アクセス）があった。

表1 一般向けフォーラム・イベント等一覧

公開日	イベント名	開催場所
R4/8/1	ニホンゴ探検 2022	オンライン
R4/9/1	国立国語研究所 オープンハウス 2022	オンライン
R5/2/18	第17回 NINJAL フォーラム「語彙資源の構築と活用」	オンライン

- ・研究所ウェブサイト（メインサイト）を4月にリニューアル公開した。閲覧者の利便性の向上のため，デザインやメニューの見直し，研究所コンテンツ（データベース・コーパス類や催し物情報）の検索機能の強化等を実施した。
- ・国語研ポータルサイト「ことば研究館」において，ことばに関する一問一答式の記事「ことばの疑問」26本および各種催し物，メディア掲載情報など，ことばに関する一般向けコンテンツを発信した。また研究所の研究活動や研究者などを紹介する一般向け広報誌『ことばの波止場』をリニューアルし，Vol.12を3月に刊行した。
- ・研究成果を一般に向けて伝えるために2021年11月に刊行した書籍『日本語の大疑問-眠れなくなるほど面白いことばの世界』（幻冬舎新書）が重版（8刷，9刷，計8,000部。累計発行部数71,000部）された。これは国語研に関わる所内外の研究者が執筆し，ポータルサイト「ことば研究館」に掲載した記事を再編集したものであり，電子書籍，オーディオブックでも継続して配信されている。【再掲】

その他業務運営に関する取組

1. 施設設備の整備・活用等に関する取組

- ・定期的な施設・設備の点検結果及び日常的な研究所内外の施設点検等（木の剪定や伐採，通路の補修等）により，計画的な維持管理を行い，職員及び利用者の適切な予防安全に努めた。

- ・研究所内の事務室内，廊下やエレベータ前，トイレに電力節減，夏期の軽装励行のポスターを掲示し，職員に対するコスト意識・省エネ意識の啓発を図った他，4階テラスに遮光及びグリーンカーテンを設置し，昨年度に引き続き省エネを図った。【再掲】

2. 安全管理に関する取組

危機管理に関するマニュアルに基づく訓練や研修等の実施

- ・危機管理委員会（研究所の業務継続に影響しうる危機を全所的に検討する委員会として令和4年度に新設）を開催した。委員会では，「事業継続計画（BCP）（案）」に事業継続マネジメント(BCM)の概念を盛り込むのに加え，対象を地震以外の災害やネットワーク障害・ハラスメントといったインシデント等，研究所の業務継続に支障を及ぼしうる諸事態に拡充し，それらの事態に対するリスク評価を追加する改正を行った。
- ・東京消防庁立川都民防災教育センターにおいて，令和5年1月16日，18日の両日に，VR防災体験や応急救護訓練等4種類の防災体験及び救護訓練を実施し18名が参加した。

3. 法令遵守等に関する取組

公的研究費の適正な使用に関する研修会等及び研究倫理教育等の実施，受講者の理解度チェック及び受講状況の管理監督，情報セキュリティに関する研修の実施。

- ・令和3年度の監事監査において，危機管理体制の強化を求める指摘があったため，令和4年度に「国立国語研究所危機管理規程」「国立国語研究所危機管理委員会規程」を制定した。「危機管理規程」では，危機管理委員会・危機対策本部の設置，非常時参集要員の設定といった危機管理体制について明示し，また，自然災害，事件・事故，情報漏洩，ハラスメント，研究不正といった，事業の中断を引き起こしかねない事象を分類・定義するとともに，危機レベルに応じた対応フロー図を定めた。「危機管理委員会規程」では，危機管理委員会において，全所的・統括的に，想定される危機に関する情報収集・分析，BCM・BCPの検討及び定期的見直し等を行うことを明記し，平時から危機に備える体制を定めた。
- ・ハラスメント防止策として，啓発用のリーフレットを作成し教職員へ配布し周知するとともにハラスメント防止研修をオンラインで実施し，ハラスメント防止のための制度及びハラスメント被害を受けた場合の対応，ハラスメントを起こさないための注意点等について啓発を行い，112名が本研修に参加した。なお，当日受講できない職員については，録画視聴を可能とし，年度末までに国語研全教職員の受講が確認できた。
- ・日本学術振興会が提供している研究倫理eラーニングコース[eL CoRE]を新規採用の研究者に受講させていたが，令和4年度より研修受講済みの研究者についても3年毎に再受講することとした。また，eラーニングシステムを利用したコンプライアンス研修及び研究倫理研修（機構主催）を合同で実施し，134名が参加した。
- ・研究不正行為の告発に関する事案の調査結果による再発防止策の一つとして，研究公正研修「ケーススタディ」を研究所において企画し，令和5年3月9日にオンラインで実施した。なお，受講対象は全職員とし，当日受講できない職員については，後日録画視聴で受講することとした。
- ・人間文化研究機構本部主催の各情報セキュリティ研修・訓練を対象者に受講させた。
- ・令和5年度以降も公開継続予定のほぼ全てのウェブサーバ（19件）及び動的コンテンツ（26件）を対象として，専門業者による脆弱性診断を実施した。
- ・業務のデジタル化を推進するため，必要な業務運営体制を整備した。
 - ・adobe株式会社のAcrobatの機能を利用した電子決裁の活用を順次広げている。

- ・オンライン会議ツールZoomの有料アカウントを追加一括契約し、アカウント割当範囲を4月から専任・特任教員全員に拡大した。
- ・新型コロナウイルス感染防止のため、特例により実施日数の制限なく在宅勤務を実施していたが、新型コロナウイルスの感染状況が落ち着いてきたことを踏まえ、週あたりの在宅勤務日数制限がある在宅勤務規程による運用に移行する準備を開始した。また、職員の在宅勤務に係る運用について現状を踏まえ再検討を行い、在宅勤務規程の改正及び在宅勤務の運用に関する詳細事項に係る申し合わせの制定について検討を行った。【再掲】

《管理業務に関する取組の評価結果》

管理業務はきわめて良好に行われており、すべての項目で高い評価に値し、以降も良好な状態が維持されることが期待できる。

組織運営の改善及び効率化に関しては、運営会議の議事要旨をウェブサイトに掲載し、感染症継続に備えて在宅勤務運用に関する申し合わせの検討を行った。教育研究組織の見直し・強化に関しては、「日本語言語科学コース」博士後期課程に4名の入学者を迎え入れ、また機関拠点型基幹研究プロジェクトは、自己点検・評価の体制を強化し、プロジェクト6年間の計画と初年度実績をオンライン・シンポジウムで紹介した。事務などの効率化・合理化に関しても、研究推進課研究支援グループの業務を同課研究推進グループと研究支援室に再編し研究支援業務の改善・充実を図ったり、オンライン会議の推進など様々な工夫が行われた。

財務内容の改善に関しては、科研費を中心に外部研究資金の獲得に努め、また『日本語の大疑問-眠れなくなるほど面白いことばの世界』の重版が約131万円、4つのコーパスの有償頒布が総額2,713万円の収入を上げるなど、顕著な結果を残した。経費の抑制に関しても、電力節減、警備業務などの数年契約による入札、会議のペーパーレス化など高い評価に値する努力がなされた。

教育・研究などの点検・評価および情報提供に関しては、自己評価の充実に努め、所外の外部評価委員会により自己評価の検証を行った。IR推進室は自己点検・評価委員会等に情報を提供した。情報公開や情報発信等に関しては、国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書、外部評価委員会による外部評価報告書を、ウェブサイト及び『国立国語研究所年報』を通じて公開した。さらに国語研ポータルサイト「ことば研究館」、多数の一般向けフォーラム・イベント、広報誌『ことばの波止場』などにより積極的に広報活動を行った。

その他の業務運営に関しては、適切な施設・設備の維持管理による職員及び利用者の予防安全に努め、また様々な工夫により省エネを図り、安全管理、法令遵守等に関しても、適切な努力がなされた。

資料

国立国語研究所外部評価委員名簿（敬称略）

- ◎ 片桐 恭弘 産業技術総合研究所人工知能研究センター長
専門： 情報科学, 社会言語学
- 坂原 茂 東京大学名誉教授
専門： フランス語学, 認知言語史
- 上山 あゆみ 九州大学人文科学研究院長/教授
専門： 生成文法・日本語統語論
- 清水 康行 日本女子大学名誉教授
専門： 日本語史, 国語学
- 砂川 裕一 群馬大学名誉教授
専門： 哲学, 比較文化基礎論, 言語文化教育論, 日本語日本事情教育論
- 陳 力衛 成城大学経済学部教授
専門： 日本語史, 日中言語交渉史
- 橋田 浩一 東京大学大学院情報理工学系研究科教授
専門： 自然言語処理
- 日比谷 潤子 聖心女子学院常務理事
専門： 社会言語学
- 米田 信子 大阪大学大学院人文学研究科教授
専門： 言語学, フィールド言語学, 対照言語学, バントゥ諸語

任期：令和5年4月1日～令和7年3月31日（2年）

◎委員長 ○副委員長

国立国語研究所令和4年度業務の実績に関する評価の実施について

1. 評価の実施の趣旨

国立国語研究所では、基幹型共同研究プロジェクト及び機関拠点型基幹研究プロジェクトにおける研究計画の実施状況について、プロジェクトリーダー・センター長が行った自己点検評価及び実績報告書の妥当性を検証するため外部評価委員会による評価を実施している。

2. 評価の実施方法

評価は、各プロジェクトリーダー・センター長が作成した自己点検評価報告書・実績報告書を踏まえて、書面審査を行った。「プロジェクトの研究活動に関する評価」の点検項目は次のとおりである。

点検項目	下位項目
共同利用・共同研究	フィールド調査・実験等（アクティビティ）
	データベース等の構築（アクティビティ）
	国内外の大学や研究機関との組織的な連携等（アクティビティ・アウトプット）
	他のプロジェクトとの合同の活動等（アクティビティ・アウトプット）
	異分野の研究者との共同研究・協業等（アクティビティ・アウトプット）
	調査データ・データベース等公開（アウトプット）
	公開の研究発表会・講演会・国際シンポジウム（アウトプット）
	書籍・論文等による研究成果の公表（アウトプット）
	データベース等に関する講習会・講演会（アウトプット）
	データベース等を使った研究成果・利用実績（アウトカム）
大学院教育・若手研究者育成	特別共同利用研究員の受け入れ
	総研大や連携大学院等の協定に基づく授業担当等
	プロジェクト非常勤研究員の雇用
	大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加
	若手研究者への発表の機会の提供
	若手研究者への研究費・発表旅費の支援
	若手研究者向けのチュートリアル等

地域・社会との連携	産業界との連携
	地域・社会との連携
	一般向け講義・講演会・フォーラム等
	社会人を対象とするスキルアップの計画等
	研究成果の社会への還元
グローバル化	海外の研究者の受入
	海外の大学との連携等
	国際シンポジウムの開催
	英語による研究成果の発信等
その他特記事項	

国立国語研究所外部評価委員会規程

平成 21 年 10 月 1 日
国語研規程第 7 号
改正 平成 28 年 4 月 1 日
改正 平成 31 年 4 月 1 日

(趣旨)

第 1 条 この規程は、国立国語研究所組織規程（国語研規程第 1 号）第 16 条の規定に基づき、国立国語研究所（以下「研究所」という。）外部評価委員会（以下「委員会」という。）の組織及び運営について定めるものとする。

(任務)

第 2 条 委員会は、次の各号に掲げる事項について審議する。

- (1) 自己点検・評価の結果に基づく評価に関する事。
- (2) 研究所の中期計画及び年度計画の評価に関する事。
- (3) 共同研究プロジェクト等の評価に関する事。
- (4) その他評価に関する事。

(組織)

第 3 条 委員会は、10 名以内の委員をもって組織する。

2 委員は、研究所の設置目的について理解のある学外の学識経験者等の中から所長が委嘱する。

(任期)

第 4 条 委員の任期は 2 年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第 5 条 委員会に委員長を置き、委員の互選により決定する。

- 2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。
- 3 委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代行する。

(議事)

第 6 条 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

2 委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(意見の聴取)

第 7 条 委員会は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

(外部評価の実施等)

第8条 外部評価の実施は、研究所の中期計画及び年度計画の実施に関する評価の時に行うものとする。

2 委員会は、評価の結果を所長に報告するものとする。

(庶務)

第9条 委員会の庶務は、管理部総務課において処理する。

(その他)

第10条 この規程に定めるもののほか、外部評価の実施に関し必要な事項は、委員会が別に定める。

附 則

この規程は、平成21年10月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成28年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成31年4月1日から施行する。

国立国語研究所外部評価委員会【令和4年度実績評価】（第1回）

日 時： 令和5年10月26日（木） 14：30～17：00

場 所： オンライン会議（ZOOM）

議 事：

1. 前回議事概要（案）確認
2. 令和4年度機関拠点型基幹研究プロジェクト評価について
3. 令和4年度共同研究プロジェクト評価について
4. 令和4年度「言語資源開発センター」及び「共同利用推進センター」の評価について
5. 令和4年度「管理業務」の評価について
6. その他
 - ・人間文化研究機構 第4期中期目標期間にかかる評価について

資 料：

- | | |
|-----------|---|
| 資料1 | 国立国語研究所外部評価委員名簿（令和5年4月1日現在） |
| 資料2 | 国立国語研究所外部評価委員会規程 |
| 資料3 | 前回議事概要（案）（令和4年7月15日） |
| 資料4 | 国立国語研究所令和4年度実績に係る外部評価 担当一覧 |
| 資料5-1 | 機関拠点型基幹研究プロジェクト実績報告書 |
| 資料5-2 | 機関拠点型基幹研究プロジェクト評価報告書 |
| 資料6-1 | 「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」
評価シート |
| 資料6-2-1～ | 「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」 |
| 6-2-6 | 自己点検報告書 |
| 資料7-1 | 「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」評価シート |
| 資料7-2 | 「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」自己点検報告書 |
| 資料8-1 | 「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」評価シート |
| 資料8-2-1～ | 「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」自己点検報告書 |
| 8-2-7 | |
| 資料9-1 | 「消滅危機言語の保存研究」評価シート |
| 資料9-2 | 「消滅危機言語の保存研究」自己点検報告書 |
| 資料10-1 | 「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」評価シート |
| 資料10-2 | 「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」自己点検報告書 |
| 資料11-1 | 「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」評価シート |
| 資料11-2 | 「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」自己点検報告書 |
| 資料12-1 | 「実証的な理論・対照言語学の推進」評価シート |
| 資料12-2-1～ | 「実証的な理論・対照言語学の推進」自己点検報告書 |
| 12-2-6 | |
| 資料13-1 | 言語資源開発センター 評価シート |

- 資料 13-2 言語資源開発センター 自己点検報告書
- 資料 14-1 共同利用推進センター 評価シート
- 資料 14-2 共同利用推進センター 自己点検報告書
- 資料 15 「管理業務」に関する自己点検シート
- 資料 16-1 令和4年度の実績に関する外部評価報告書の構成について
- 資料 16-2 国立国語研究所 令和4年度実績に係る外部評価スケジュール
- 資料 17-1 人間文化研究機構の第4期中期目標期間の評価に係る実施要領
- 資料 17-2 中期計画の管理主体まとめ（別紙1）
- 資料 17-3 各年度の報告書様式（別紙2）
- 資料 17-4 人間文化研究機構 第4期自己点検・評価スケジュール（別紙3）
- 資料 17-5 第4期中期計画 自己点検報告書【計画（3）】

国立国語研究所 年報 2022 年度

2024 年 3 月 28 日 発行

編集・発行

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

〒190-8561 東京都立川市緑町 10-2

TEL: 0570-08-8595 FAX: 042-540-4333

<https://www.ninjal.ac.jp/>

